

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A descriptive study of the meaning and uses of Japanese adjectives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001246

形容詞の^{意味・}用法の_{記述的}研究

国立国語研究所

西尾 寅 弥

秀英出版

刊行のことば

本書は、当研究所の書きことば研究室が昭和39年度から行なってきた「語の意味・用法の記述的研究——動詞・形容詞等——」の結果のうち形容詞の部分をもとめたものである。

担当者は、書きことば研究室の西尾寅弥である。全期間を通じて研究補助員高木翠、昭和39年度には同田原圭子および谷内レイ子がこれを助けた。

大量の用例カードの作成については「現代語誌記述のための基礎的研究」（代表者林大——当時の第一研究部長）の題で昭和39・40年度の文部省科学研究費（総合研究）の交付を受けた。また、小規模な意識調査の実施については武蔵大学人文学部教授平井卓郎氏、お茶の水女子大学教授市川孝氏、茨城県立大宮高等学校長杉山澄氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

昭和47年3月

国立国語研究所長 岩淵悦太郎

目 次

はじめに

- | | |
|----------------|----|
| 1. 資 料 | 1 |
| 2. 目的・方法と経過・反省 | 6 |
| 3. 凡 例 | 19 |

第 1 部 形容詞の意味の諸側面

- | | |
|--------------------|----|
| 1. 感情形容詞と属性形容詞 | 21 |
| 1.0 はじめに | 21 |
| 1.1 感情形容詞の諸特徴 | 23 |
| 1.1.1 接尾語「～がる」 | 23 |
| 1.1.2 主語の制限 | 25 |
| 1.1.3 対象語 | 30 |
| 1.2 感情形容詞と属性形容詞の交渉 | 33 |
| 1.2.1 属性形容詞の感情的用法 | 33 |
| 1.2.2 感情形容詞の属性的用法 | 34 |
| 1.2.3 感情と属性の両面をもつ語 | 35 |
| 1.3 感情形容詞の下位区分 | 36 |
| 1.3.1 感情と感覚 | 36 |
| 1.3.2 感覚を表わす語の下位区分 | 39 |
| 2. 属性の主体と内容 | 42 |
| 2.0 はじめに | 42 |
| 2.1 広汎なものごとの属性 | 43 |
| 2.1.0 はじめに | 43 |
| 2.1.1 存 在 | 44 |
| 2.1.2 異同・関係など | 45 |
| 2.1.3 普通でないこと | 52 |

4 目 次

2.1.4 危険・害の有無	59
2.1.5 その他	63
2.2 ものに関する属性	64
2.2.0 はじめに	64
2.2.1 空間的な量	69
2.2.2 色	80
2.2.3 音	90
2.2.4 味	98
2.2.5 におい	105
2.2.6 その他	108
2.3 ひとに関する属性	109
2.3.0 はじめに	109
2.3.1 主体の範囲・制限	111
2.3.2 持続的な性質と一時的な態度・ようす	124
2.3.3 その他	132
2.4 ことの属性	139
2.4.0 はじめに	139
2.4.1 必然的な事態	140
2.4.2 程 度	143
2.4.3 その他	155
3. 程 度	155
3.0 はじめに	155
3.1 形容詞における程度性	155
3.1.1 程度副詞との関係	155
3.1.2 形容詞における反対語	158
3.1.3 比較表現と形容詞	161
3.1.4 基 準	165
3.2 程度によって区別される形容詞	168
3.2.1 程度の大小	168
3.2.2 程度の著しき・わずかさ	173
4. 形容詞の意味における主観的な側面	176
4.0 はじめに	176

4.1 形容詞の意味の主観的な性格	176
4.2 客観面と主観面，両側面の交渉	178
4.2.1 感情形容詞における，前提的な客観面	178
4.2.2 属性形容詞における，主観的な要素	179
4.2.3 両側面の交渉	182
4.3 主観的な要素の2，3のタイプ	182
4.3.1 基準の主観性	182
4.3.2 実感性	183
4.3.3 予期・期待	184
4.4 評価	185
4.4.1 概観・方法	185
4.4.2 評価の2，3のタイプ	189
4.4.2.1 度外れ	190
4.4.2.2 快・不快	192
4.4.2.3 ほめ・けなし	195
4.4.2.4 その他	199

分析例

(1) 感情 いやなくきらいな	199
(2) 属性／感情 こっけいな／おかしい・な	204
(3) 属性／感情 かわいらしい，あいらしい，かれんな／かわいい	208
(4) 主体（数が2以上） まれなくめずらしい	212
(5) 量的／質的 まれな／めずらしい	213
(6) 抽象的／具体的 けがらわしい／きたない，きたならしい，不潔な	215
(7) 主体（液体など） ぬるい／なまあたたかい	216
(8) 主体（土地） 平坦なくたいらな	218
(9) 主体（飲食物） しんせんなくあたらしい	219
(10) 主体（刃物） 鋭利なくずるどい	221
(11) 主体（もの／人など） あたらしい／わかい	221
(12) 主体（もの／人など） ふるい／としとった，おいた，としおいた	223
(13) 主体（人・動物／もの） たくましい／がんじょうな	226
(14) 次元（1・2次元） ふとい，ほそい	227
(15) 次元（2・3次元） あらい，こまかい・な	230
(16) 次元（1・2・3次元） おおきい・な，ちいさい・な	230
(17) 次元（1・2・3次元） ひろい，せまい	233

6 目 次

(16) 性質／位置	ながい、みじかい、うずたかい／(とおい、ちかい、はるかな) < たかい、ひくい、ふかい、あさい、こだかい	235
(19) 基準面に対する角度(地面などに垂直)	たかい、ひくい、ふかい、あさい、<ながい、みじかい、とおい、ちかい、はるかな	238
(20) 基準面に対する向き(上向き／下向き)	たかい、ひくい、こだかい、うずたかい／ふかい、あさい	244
(21) 主体(数の多いもの)	こまかい・な<ちいさい・な	247
(22) 主体(土地)	こだかい<たかい	249
(23) 主体(人体)	おおがらなくおおきい、こがらなくちいさい	250
(24) 主体(人・動物／もの)	ふとった／ふとい	252
(25) 主体(人・動物／もの)	やせた<ほそい	254
(26) 程度	巨大な<大きい	256
(27) 程度(高さ)	こだかい、うずたかい<たかい	258
(28) 変化の結果	うずたかい<たかい	259
(29) 変化の結果	こなごなに、こなみじんに、こっぱみじんに<こまかく、 微細に、微小に	261
(30) 程度	うすあかい／まっかな<あかい うすあおい／まっさおな・い<あおい うすぐろい／まっくろな・い<くろい うすじろい／まっしろな・い<しろい	263
(31) 主体(ひふ)	あさぐろい<うすぐろい	265
(32) 主体(ひふ)	そうはくな<あおじろい	267
(33) 主体(ひふ)	いろいろな・の、白皙の<しろい	268
(34) 主体(声)	きいろい、かんばした、かんだかい・な<きいきした	269
(35) 評価	あまったるい<あまい	272
(36) 評価	かぐわしい、こうばしい／くさい	274
(37) 主体・運動(大／小)	ごろごろ／ころころ	276
(38) 主体・運動(大／小)	ぐるぐる／くるくる	277
(39) 主体(液体)	なみなみと<いっぱい	278
(40) 形(点／線)	とがった<するどい	279
(41) 度数(2回以上)	まがりくねった<まがった	280
(42) 基準	はすに、はすかいに<ななめに	281
(43) 主体(年少者)	あどけない<むじゃきな	283

(44) 主体 (老人) かくしゃくたる・とくげんきな, じょうぶな, たっしやな, 壮健な……………	285
(45) (女性) しとやかなくものしづかな, 上品な……………	286
(46) 主体 (女性) あでやかなくうつくしい……………	286
(47) 主体 (女性) なまめかしい, いろっばい, あだな, 濃艶な, 妖艶な, 凄艶な……………	289
(48) 主体 (男) めめしいくよわよわしい, いくじ (が) ない……………	291
(49) 主体 (話す活動) りゅうちょうなくなめらかな, スムース (ズ) な, よどみない, (すらすらと)……………	292
(50) 手段 (ことば) ぶっきらぼうなくぶあいそうな, すげない, そっけない……………	294
(51) 主体 (人などの動作) すばやく, びんしょうに, てばやく, さっさとく はやく, さっと……………	296
(52) 主体 (手を使ってする動作) てばやくくすばやく, さっさと……………	298
(53) 主体 (ごく短かい継続時間内の動き) すばやく, さっとくはやく, てばやく……………	300
(54) 速度/時点 てばやく, さっと, (さっさと, すばやく) くはやく, すみやかに……………	301
(55) 継続的/瞬間的 じっと, じろじろ, きよろきよろ, しげしげ/ちらっと (ちらりと), じろっと (じろりと)……………	302
(56) 視線 (動的/不動的) きよろきよろ, じろじろ/じっと, はったと……………	303
(57) 気持 (相手に対する無遠慮さ) じろじろくしげしげ, まじまじ……………	305
(58) 気持 (相手に対する怒り) はったと (はたと)……………	306
(59) 気持 (不安定な気持) きよろきよろ……………	307
(60) 無意図性 むちゅうなくいっしょうけんめいな, けんめいな, ねっしんな……………	308
(61) 生得的な性質 きようなくじょうずな, うまい……………	311
(62) 主体 (走る・歩く動作) いっさんに, いちもくさんにくわきめもふらず……………	312
(63) こと/もの ろこつなくあらわな, むきだしな. の……………	314
(64) 程度 おさない/わかい/ととった……………	315
(65) 程度 あらい—こまかい・な……………	320
(66) 程度 (傾斜の角度) 急な, けわしい/ゆるい, ゆるやかな, なだらかな……………	322
(67) 程度 (曲がりかた) 急な/ゆるい, ゆるやかな, なだらかな……………	326
(68) 程度 あまい—からい……………	327
(69) 程度 おびたしいくおおい, たくさんの……………	329

8 目 次

(70) 程度	すかんぴんなくまずしい, 貧乏な	332
(74) 程度	ひっしなくいっしょうけんめいな, けんめいな	333
(72) 程度	こちこちの, かちかちの<かたい	335
(73) 程度	なみなみとくいっばいに	336
(74) 程度	きまりわるい, てれくさい, きはずかしい, まがわるい, ぼつが わるい<はずかしい	337
(75) 評価	ながたらしい<ながい, ながながしい	340
(76) 評価	けばけばしい<はでな, 華美な	342
(77) 評価	ぬるい<なまあたたかい	344
(78) 評価	せまくるしい, きゅうくつな<せまい	345
(79) 評価	なれなれしい	347
(80) 評価	とぼしい<すくない	348
(81) 評価	旧式な<古風な, 昔風な	350
(82) 評価	ふるくさい<ふるい, ふるめかしい	352
(83) 評価	いびつな	353
(84) 評価	ぶこつな	353

第 2 部 個 別 的 記 述

1. あつ (厚) い	355
2. うすい	359
3. たかい	367
4. ふかい	390
5. かたい	413
6. あかるい	433

主要参考文献

索 引

はじめに

1. 資料

この調査の資料である用例カードの種類・内容・テキストなどは以下のとおりである。

1. 文学作品

明治・大正・昭和にわたる52の文学作品から採集した資料である。その作品と、用いたテキストは次の表のとおりである。用例の出典のあとにつけた数字は、そのテキストにおけるページを示している。

なお、原作は歴史的かなづかいで書かれていて、使用したテキストでは現代表記に改められているもの、あるいははじめから現代かなづかいで書かれているものには*印をつけた。

	年代	作家名	作品名	出典	ページ数
1	1898	国木田独歩	武蔵野	岩波文庫	27
2	1900	泉鏡花	高野聖	〃	72
3	1901	徳富健次郎	思出の記(上)	〃	229
4	1906	伊藤左千夫	野菊の墓	〃	54
5	1906	島崎藤村	破戒	〃	336
6	1907	田山花袋	蒲団	〃	81
7	1907	二葉亭四迷	平凡	〃	135
8	1910	長塚節	土(上)	〃	208
9	1913	森鷗外	阿部一族	〃	55
10	1913	有島武郎	或る女(前)	〃	233
11	1913	鈴木三重吉	桑の実	〃	159
12	1914	夏目漱石	こゝろ	〃	285
13	1915	徳田秋声	あらくれ	〃	249
14	1915	芥川竜之介	*羅生門	〃	12
15	1916	倉田百三	*出家とその弟子	〃	213
16	1917	佐藤春夫	田園の憂鬱	〃	115
17	1917	久保田万太郎	末枯	新潮文庫	56
18	1919	菊池寛	恩讐の彼方に	岩波文庫	34
19	1919	武者小路実篤	友情	〃	125

20	1921	志賀直哉	*暗夜行路(前)	岩波文庫	261
21	1922	長与善郎	青銅の基督	〃	114
22	1923	正宗白鳥	生まざりしならば	新潮文庫	45
23	1923	里見諄	多情仏心(前)	岩波文庫	359
24	1926	宮沢賢治	銀河鉄道の夜	〃	79
25	1926	宮本百合子	伸子(上)	〃	199
26	1928	山本有三	波	〃	394
27	1929	小林多喜二	蟹工船	〃	113
28	1930	林芙美子	*放浪記	新潮文庫	303
29	1930	横光利一	機械	〃	29
30	1930	野上弥生子	真知子(前)	岩波文庫	205
31	1931	永井荷風	つゆのあとさき	〃	114
32	1933	谷崎潤一郎	春琴抄	〃	76
33	1934	室生犀星	あにいうと	新潮文庫	25
34	1936	佐多稲子	*くれない	〃	144
35	1936	阿部知二	冬の宿	岩波文庫	195
36	1937	川端康成	雪国	〃	170
37	1938	中山義秀	厚物咲	新潮文庫	37
38	1938	堀辰雄	風立ちぬ	岩波文庫	92
39	1939	岡本かの子	河明り	新潮文庫	99
40	1939	太宰治	富岳百景	岩波文庫	23
41	1943	中島敦	李陵	新潮文庫	52
42	1947	丹羽文雄	*厭がらせの年齢	〃	42
43	1948	大仏次郎	帰郷	〃	349
44	1949	田宮虎彦	*落城	〃	44
45	1949	井上靖	闘牛	〃	80
46	1950	獅子文六	*自由学校	〃	377
47	1950	井伏鱒二	本日休診	〃	82
48	1951	大岡昇平	野火	〃	176
49	1952	野間宏	*真空地帯(上)	岩波文庫	232
50	1954	三島由紀夫	潮騒	新潮文庫	159
51	1954	中野重治	*むらぎも	〃	352
52	1959	石川達三	*人間の壁(上)	〃	350

(合計 8047ページ)

これらの作品は、1作家1作品の方針で、次のような順に選択した。

- (1) 岩波文庫「百冊の本」におさめられている作品。
- (2) 岩波・新潮・角川の3文庫に共通しておさめられている作品。
- (3) 岩波・新潮・角川のうちの2文庫に共通しておさめられており、かつ吉田精一篇

『日本文学鑑賞辞典(近代編)』に項目として取りあげられている作品の1部。

なお、この資料の作成・整理には横山正枝・豊泉美奈子ほか数名のアルバイトの助力をも得た。

2. 科学説明文・論説文など

文学作品とは性質のちがった資料として、あとから補充的に追加したものであるが、下記の資料からとった、約6万枚の用例カードがある。作品名につけた*は文学のばあいと同様である。

作品年代	執筆者	作 品 名	出 典	ページ数
1916	河上 肇	*貧乏物語	岩波文庫	163
1929	出 隆	*哲学以前	新潮文庫	260
1920~1941	三木 清	人生論ノート	〃	141
1934~1951	小林 秀雄	*私の人生観	角川文庫	139
1919~1922	阿部 次郎	人格主義	〃	170
1950	笠 信太郎	*ものの見方について	〃	185
1937	石原 純	*社会事情と科学的精神	現代日本思想 大系25・科学 の思想 I	11
1946	武谷 三男	*革命期における思惟の基準	〃	14
1948	湯川 秀樹	*物質世界の客観性について	〃	34
1947	坂田 昌一	*原子物理学の発展とその方法	〃	16
1936	長岡半太郎	*総長就業と廃業	〃	30
1948	渡辺 懸	*原子党宣言	〃	6
1961	梅棹 忠夫	*高崎山	現代の教養6・ 学問の前線	53
1965	小尾 信弥	*宇宙の謎はどこまで解けたか	〃	11
1964	藤田 信勝	*物質の根源と宇宙を結ぶ	〃	33
1965	高瀬 良夫	*生命の暗号を解く	〃	29
1965	柴谷 篤弘	*生命の謎はどこまで解けたか	〃	12
1964~1965	朝日新聞 学芸部	*学問の動き	〃	36
1965	石田英一郎	*抵抗の科学	〃	7
1965	藤森 栄一	*旧石器の狩人	〃	14
1966	関 つとむ	*未知の星を求めて	〃	15

4 はじめに

1966	渥美 和彦	*人工心臓を体内に	現代の教養・ 学問の前線	12
1966	桜田 一郎	*新しい繊維	〃	9
1966	坂井 利之	*文字を読む機械	〃	9

(合計 1409ページ)

以上、「文学作品」「科学説明文・論説文など」の用例カードの具体的な作成方法・経過などについては、国立国語研究所年報16～18および20を参照。

3. 「現代雑誌九十種」の用例

先年、書きことば研究室が行なった「現代雑誌九十種の用語用字」の調査のために作られたカードが、そのまま用例カードとして利用でき、これも資料の一環をなしている。この調査のサンプル内における、自立語全体の延べ語数は約44万であるが、そのうち形容詞（形容動詞は含まない）は1万余りと推定される。

この雑誌資料はすべて、昭和31（1956）年の1月号から12月号までのものである。90種の雑誌の名まえは、国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊の2ページにゆずることにする。ここには雑誌の類別と各類の例だけをあげよう。

評論・芸文（12誌）	群像・世界……………
庶民（14誌）	家の光・週刊朝日……………
実用・通俗科学（15誌）	エコノミスト・自然……………
生活・婦人（14誌）	暮しの手帖・婦人公論……………
娯楽・趣味（35誌）	アサヒカメラ・小説の泉……………

引用した例については、出典として雑誌名・発行年月・ページが示してある。文章の題名・筆署名はほとんど示さなかったが、何らかの参考になりそうなもので示したばあいもわずかにある。

4. 「総合雑誌」の用例

「現代雑誌九十種」の前に、書きことば研究室が行なった「総合雑誌の用語」の調査のために作られたカードも、同じく資料の一部分をなしている。この調査のサンプル内における、自立語全体の延べ語数約23万のうち、形容詞は5千余りと推定される。

この雑誌資料は昭和28（1953）年7月号から昭和29（1954）年6月号までのものである。雑誌は次の13種である。

改造 解放 学園評論 国民 心 人生手帖 世界 世潮 中央公論 日本及日本人 ニューエイジ 文芸春秋 平和

以上の資料のうちで、3、4の雑誌の用例は統計のために採集されたものなので、イ

型の形容詞の数は、全標本の3分の1あるいは2分の1についてくわしく数えられている。2種の調査を合わせると、I型の形容詞の延べ語数は1万5千をすこし越える程度と推定される。(ナ型の形容詞の数は名詞の中に含まれているのでわからない。) また、文学・論説文などの資料は、数は多くのばあい問題にしない、この意味記述のために作ったもので、くわしく数える労力はかけていない。したがって、動詞・形容詞合わせて約40万(文学が約33万、論説文が約6万)であるが、動詞と形容詞の内訳のくわしいことはわからず、形容詞(I型・ナ型を合せて)が5~10万の間であることまでしか言えない。なお、文学の資料については、不完全なものであるが動詞・形容詞のカードと別に、次のようなカードも副次的に作った。情態副詞は全作品から、その他の副詞や名詞などについては約半数の作品から採集したものである。この副次的なカードも、わずかながら利用したばあいがある。

以上のように、現代語における形容詞の用例の収集としては、今までのところでは大きいものであろうが、見たい語の用例が皆無であったり、わずかな枚数しかなくて、不足を感じるばあいも非常に多い。(そのことは「分析例」の中などであちこちで個々の事例に関して言わざるを得なかった。)

問題にしている語の例をたまたま何かで読み、あるいは耳で聞いたばあいに、資料外の例として引用したばあいがわずかにある。現代語の資料としては、資料内の例と比べて、価値において格別の遜色はないと思われるので、わずかでも資料の不足を補おうとして使ったわけである。そのばあい、書きことばについては出所をなるべく明示するようにした。耳で聞いた例は、聞いた直後に書きとめたものが多いが、日常の会話などの出所を一々記すことはしなかった。

5. 意識調査

以上のような、言語作品のなかの実際の用例とは、いちじるしく性質の違う資料として、わずかながら意識調査を行なった結果を補助的に利用したばあいがある。形容詞の用例は、上記のように、動詞と同じ範囲から採集したにもかかわらず、得られる数は動詞よりずっと少なくなるので、1つには用例の絶対量の不足を補う意味で、補助的な調査を試みたわけである。もう1つの理由は、用例にもとづくやりかたでは、用例が無限に近いほど、膨大に存在しないかぎりは、ある言いかたなどが「ない」「ないだろう」ということは言えない。そういう情報については、対象が母国語であるばあい、内省にたよるのが手とりばやく、ここでもその方法をとったばあいが多い。しかし、もちろん内省による仮設が多くの人に支持されるものであるかどうかをたしかめることが望ましい。そういう意図から、わずかではあるが調査を試みた項目もある。

上のような目的から、下に記すような2種類の小調査を行なった。特に小調査1の②)

6 はじめに

のほうは偶然の機会を利用して試み的に行なったので、調査1の被験者が女子だけになり、地域上もかたよったものになったが、参考的な資料として利用することにした。(1)(3)(4)の被験者の出身地は、いずれも東京は半数以下で、あとは東北から九州まで全国にわたっているが、東日本のほうが多い傾向がある。

小調査 1

- (1) お茶の水女子大学国文学科学生 23人(1969年11月)
- (2) 茨城県立大宮高等学校2年G組(女子) 51人(1970年2月)
個々の結果を記したところでは、(1)を「女子大生」、(2)を「女子高校生」と呼んだばあいが多い。

小調査 2

- (3) お茶の水女子大学国文学科学生 21人(1970年6月)
- (4) 武蔵大学学生(日文科・経済経営科) 女子31人, 男子56人(1970年9月)
便宜的であるが、(3)と、(4)の女子を合わせて52人を(女)とし、(4)の男子56人を(男)として集計した。

調査のインストラクションは次のとおりである。

次のいろいろな文や単語の連続の中で、

日本語として普通だと感じるものに ○

やや普通でないと感じるものに △

あきらかにおかしいと感じるものに ×

をつけてください。

比喩的な表現、皮肉な言い方などは除いて、ごく当り前な言い方のばあいとしてみてください。

一つ一つの言い方を、他とは比べないで、それぞれ独立に判定してください。

以上の教示のあとにみじかい例文を並べた用紙をくぼって調査を実施した。例文の並べかたは、同類のものは近くに並ばないで散らばるようにしたばあいが多い。例文と、それに対する反応の結果は、それぞれ関係の箇所に引用する形で示した。

2. 目的・方法と経過・反省

この研究の目的は「現代語の動詞・形容詞の意味・用法を、言語作品のなかで実際につかわれた用例によって記述すること」であり、その形容詞の部分を受けもつものであった。

かなり大量の用例を資料として集め、それにもとづいて意味の記述を行なおうとした狙いは、次のようなところにあった。これまで、現代語の意味・用法の記述（たとえば辞書における）は、主として主観的に、思いつくものを記述するという態度でされている。このため、重要な用法でぬけているもの、あやまって一面的に規定されたものなどが少なくない。これをさけるために、大量の用例によって、客観的な事実にもとづいた記述とその方法を作ることに資したいという目的で出発した。

「現代語」の範囲については、ここでは言文一致以後の言語作品のことは、というかなり広い考えかたによっている。（あきらかな方言・特殊語などは除く。）「資料」にあげたリストでわかるように約70年にわたっている。その間にもこまかい変遷はあったに相違ないが、基本的な用法では大きく動いてはいないし、明治期の作品が今日も新しい作品と同じようにさかんに読まれているという事実をも重視した。

<注> 以上については、『国立国語研究所年報16』の9ページを参照。

用例カードの作成の作業に続いて、前半の時期には、個々の語についての意味・用法の記述を行なった。（第2部 個別的記述）採集された用例数の相当に多い語で、意味・用法がゆたかに発展・分岐したような語を選んで取り上げた。形容詞のばあい、そういう語は基本的な意味においてはものの性質を表わし、派生的な意味においては人の性質や、その他のより抽象的な属性を表わすものが多いようである。

多義的な語は、もっとも基本的な意味から他のいろいろな意味が派生し、それらが種々の関係でつながり合って、「内的な体系」^{<注1>}をなしていると考えられる。それを記述するには、まず同じ意味か異なる意味かを見分けるという難題が先行するわけであるが、この問題の研究はまだ未開拓であったために、用例に直面しながら試行的に多義語の意味の下位区分を行なうほかはなかった。意味そのものの記述としては必要以上のスペースをとっているばあいも多いが、用例を活用して、できるだけ語のこまかい用法まで記述しようとしたわけである。諸意味間の関係についてもできるだけ考えようとした。形容詞のばあい、たとえば「あまい砂糖—あまい匂い」「きいろい花—きいろい声」のような一種の感覺的・印象的な類似にもとづく、意味の派生関係が多いようである。たとえば「うで」から派生して「電柱のうで」「うでがにぶる」というときの「うで」の意味は、腕の形・機能との類似から生じ、その類似において基本的意味と結びついていることは、具体的に説明しやすい。しかし、上の「あまい」「きいろい」の派生義は、感じが似ているという以上に具体的な説明は、（対象についての深い知識がないと、あるいはあっても）なかなかむずかしい。このような事情もあって、多義間のつながりについて、あまり触れられなかったばあいもある。しかし、多義語におけるいろいろの意味を統一し、凝集させているもの、ばらばらの同音別語に空中分解させないでいるものを、より具体的に明らかにすることは大切な課題であろう。（意味の下位区分の示しかたは、基本的な意味と考えられるものを〔0〕とし、以下〔1〕〔2〕……と番号をつけ

た。2けた目以下でも、上にある程度準じて〔20〕〔21〕……のようにしたばあいと、〔21〕〔22〕のように単に並列したばあいとがあるが、それほどはっきりした区別があるとはかぎらない。)

<注1> 宮島達夫「意味の体系性」(『教育国語』No.4, 1966-3)による。以下で問題にしようとしているような、単語がほかの単語と関係してつくっている体系性は、同論文では「外的な体系」と呼ばれている。

<注2> 湯川恭敏『言語学の基本問題』(大修館, 1971-2)がのちに刊行された。その第2部第8章「和歌山方言の若干の形容詞の同一性」はこの問題に関係しているが、時間的制約から活用することができなかった。

<注3> G. Stern: Meaning and Change of Meaning (Bloomington, Indiana University Press, 1931)には、synaesthesia (共感覚)は adjectives には特に一般的だと述べられている。(11.613. 323ページ)それは、ここで参考になりうる指摘である。

後半の時期には、個々の形容詞を単独に取り上げるのではなくて、形容詞全体の意味・用法にわたる体系的な記述を理想目標とする仕事にかかった。その具体的方法として、動詞のほうに同じく、形容詞の意味を区別する特徴にどのようなものがあるかをさがしてぬきだし、これを用例によってたしかめようとする仕事にとりかかった。

これは、音韻論における弁別の特徴に相当するようなものをみつけだすことが、単語の意味を体系的に記述するための有力な方法であることがだんだん認識され、実行にも移されはじめているという、近來の動向にもとづくものであったともいえよう。

いま動詞を例にしてみよう。「落ちる」は広く一般の物体について言うのに対して、「ふる」は雨・雪・あられなどにしか基本的には使えないという、主体の面での特徴がある。「ちぢめる」の対象になりうるものは広いのに対して、「すくめる」の対象は自分のからだの全体や、首・肩などの部分に限られる。

「おちる」と「ふる」、「ちぢめる」と「すくめる」は上の意味において上位語と下位語の関係にあるとみられ、それは次のように不等号によって表示できる。

(主体) ふる < おちる

(対象) すくめる < ちぢめる

また、「はいる」は広汎なものが主体になるが、「つきささる」は矢・魚の骨など先のとがった固体に、「しみこむ」はインク・汗などの液体に使われる点で対立している側面がある。このばあい、「はいる」が上位語、「つきささる」「しみこむ」が下位語になるが、「つきささる」と「しみこむ」とは同位における対立である。このような同位における対立を / で表わすと、次のようになる。

(主体) つきささる / しみこむ < はいる

次に、「はいる」と「でる」とは同位における対立であるが、「内へ」と「外へ」とい

う正反対の方向への移動を表わす関係にあり、いわゆる反対語をなしている。こういう関係は——^{<注1>}によって表示する。

(方向) はいる——でる

このような方法によって、種々の観点から動詞の意味を相互に関係づけ、体系の中に位置づけていく研究は実り多きものであらうと期待される。このような方法を、形容詞の意味記述にも適用しよう^{<注2>}と考えた。

<注1> < / —— による意味関係の表示について、『国立国語研究所年報19』の15～16ページを参照。

<注2> ここでは当然、個別的な記述のばあいのように、ある語の意味の全体を取り上げるわけではなくなる。多義語の中のある1つの意味、語の意味のある側面だけが取り上げられるわけである。

ただし、この方法は動詞のばあいにそうであるのと同様に、どんな形容詞にもかたんに適用できるというわけにはいかないだろうことは、はじめから当然予想された。したがって、何とか手をつけられそうな例をさがして、そういう所からだんだんやってみよう、という行きかたにならざるを得なかった。系統的にある順序を追って進めていくという方法はとりにくかった。

まず、基本的な形容詞どうしの中で、意味を区別する特徴として目につきやすく、数多くとりだしやすいものは、たとえば、

ながい——みじかい ひろい——せまい
おもい——かるい あかるい——くらい

のような、いわゆる反対語の関係にあるもの間にみられるものであった。これらは、1次元の量、2次元の量、目方、光線に関係のある4対の形容詞である。そして、各対の2語は、それぞれの量・程度が大きいか小さいかという特徴によって対立している。こういう事実は、形容詞のかなり広い範囲にわたってみられる体系性として重要である。しかし、個別的に1つ1つとりあげて記述することは、あまり興味のないことと考えられる(第1部の3.2.1「程度の大小」参照)ので、「分析例」ではいくつかを例としてとりあげたにすぎない。しかし、上述のような対立を中心として、「程度」ということは形容詞の意味の1側面として重要なので、第1部の3「程度」において一般的に考察した。

上のような反対語の類に次いで、わりあいに特徴がとりだしやすく思われたのは、

こたかい < たかい まっかな < あかい
ながたらしい < ながい あまったるい < あまい

のような2語の間におけるものであった。すなわち、広い適用範囲をもつ基本的な形容詞と、それに接辞的な要素が加わることによって、程度・評価などに関して限定の加わった派生形容詞との対立である。「分析例」の中にこういう類のものがわりあい多くな

っている。) もっとも、たとえば

おびただしい < おおい とほしい < すくない

のような、語構成的に関係のない語どうしの間にも、程度・評価などに関する特徴の見出されたものもある。しかし、1次的な語と、同根の派生的な語の間に見出すことのほうが数多く、容易であった。ところで、上のような、同根の語の間に見出される特徴は、接辞的な要素の意味に帰着させられる可能性が考えられる。とすれば、たとえ比較的特徴をとりだしやすいとしても、網羅的に一つ一つを記述することの価値は疑問に感じられた。そして、主としては、第1部の3.「程度」、4.「形容詞の意味における主観的な側面」の中で、ある程度パターン的に扱う形になった。

以上のような2類を除くと、形容詞の意味を区別する特徴をとりだすことがうまく進まず、「分析例」を数多く積み上げる結果が得られなかった。ある特徴を予想して、用例に当たってみても、はっきりした結果をつかむことができずに途中で放棄せざるを得なくなったケースも多かった。(用例の数が不十分なために判断しにくいばあいもあった。) 次第に、この方法は形容詞のばあい、必ずしも得策な方法ではなかったかもしれないと感じられてきて、焦燥した。残された期間も少なくなってきた段階で、とうとうある程度の方向転換を考えなければならなくなった。語と語を区別する特徴を明らかにする作業は、語の意味に具体的に接近するための有力な途であろう。しかし、それがはかばかしく進まないの、意味上の大きいグループを、構文的な性質などを手がかりにして見つけようとすることも行なった。このような方法は、成果が得られたばあいには、語の意味の記述にもやや遠くから一般的な形で寄与しうるのであろう。第1部の1.「感情形容詞と属性形容詞」は、日本語の形容詞において特徴的なグループである「感情形容詞」の性質とその下位区分などについて、「属性形容詞」と対比しながら、構文的性質などを手がかりにして考察を試みたものである。また、第1部の2.「属性の主体と内容」では、形容詞の意味分析にとって主要なものと考えられる「主体」の観点から、もの・人・ことなどのグループを考え、それを手がかりにして属性の内容そのものに接近しようとした。しかし、残された期間が少なくなっていたためもあって、形容詞の意味的なグループのいくつかを取り上げて、グループ内での意味の系列をさぐったり、語の用法的な特性をしらべたりする程度の結果に止まってしまった。(2.2.1「空間的な量」については先行の研究にもとづいて意味特徴を記した。)

以上のように2、3の方法が混在して、全体が1つの方法でつらぬかれているとはいえない結果になった。最初のおもな狙いであった「分析例」は百にみたくず、散発的なもので、それを分類・体系化しても意味が薄いと考えられた。したがって、第1部「形容詞の意味の諸側面」の中に関係するところに散在的に位置づけ、そこから参照する形をとることにした。

どうしてこのように特徴をぬきだす作業はうまくいかなかったのだろうか。筆者の非

力による所も大きかったであろう。また形容詞は、動詞と同じようにして特徴をとりだすのがむずかしいという指摘もある^{<注>}。ここでは対象である形容詞と、適用しようとした方法との関係において、気付かれた諸点のうちのいくつかを以下にあげて、筆者なりの「形容詞の意味記述における問題点」として、今後への参考にしたいと思う。

<注> 宮島達夫『単語指導ノート』（麦書房、1968）237ページ

以下の諸項目は、おもに動詞のばあいと比較・対照してみることとおして述べ進めたい。それは、形容詞がものごとの属性（広義の）を表わすという点では基本的な意味の性格が動詞と共通した面があるので、比べることに必然性があり、違う面を浮きぼりにするのも好都合だろうと考えられるからである。特に、日本語の形容詞は、単独で述語になることができ、敘述の力をそなえている点で文法的性格が動詞に近く、動詞と一括して用言と呼ばれているぐらいだからである。

1. まず、形容詞の量的な側面からの原因と考えられるものがある。形容詞の異なり語の数は動詞のそれに比べてずっと少ない。語と語をつき合わせて、相互の意味を区別する特徴をとりだすことができ、かつそのことの有効性が大きいものは、動詞どうし、形容詞どうしのあらゆる組合せからみれば、ごく一部分にすぎないだろう。したがって、形容詞どうしのあらゆる組合せの中で、こういう方法を有効に適用できる組合せの絶対数は動詞のばあいよりもはるかに少ないと考えられる。また、この方法の適用が原理的に不可能ではないとしても、實際上困難の大きいもの、もっと記述の進んだ段階ではじめて取り上げられると予想されるもの、そのほうが無理がないと思われるもの、などの部分も大きいと思われる。もちろん動詞のばあいでも、そういう部分が大きいであろうが、形容詞よりは絶対数がずっと多いために、組み合わせの理論的な数もはるかに多く、その中には今の段階でもさほどの無理なしに弁別の特徴をとりだせる組み合わせの数も、形容詞のばあいよりはかなり多いということはいえるのではないかと思われる。したがって、動詞においてこの方法が相当な成果を収めうるとしても、ただちに形容詞のばあいにも同じ程度までやれるだろう、と類推的に考えるわけには、量的な側面からみても、いかないのではないかと、とあとから考えるようになった。

ここで、動詞と形容詞について数量的に一瞥しておきたい。形容詞についてだけ、2種の国語辞典の見出し語における数をざっと数えてみた。例解国語辞典（4万余語を収録）では約600語、岩波国語辞典（5万7千余語）では700語弱であった。（動詞については数えてないが、見出し語数5、6万程度の国語辞典で、複合サ変動詞を除いて4、5千語を下ることはないと思われる。）

われわれの資料の一部として活用した「現代雑誌九十種」調査については、品詞別の異なり語数が算出されているので、直接関係のある数字だけを抜き出してみよう。^{<注>}

<注> 『現代雑誌九十種の用語用字』 第3分冊・分析（国立国語研究所報告 25, 1964）63ページの表 2.9 による。なお、同書62ページに述べられているように、調査単位の切りかたからくる制約があるので、およその傾向をみる程度の数字としてあげた。

動詞 3460

形容詞 409

形容詞は動詞の語数の8分の1にも及んでいない。なお、関係のふかい数字として、

複合サ変を作る語 3546

形容動詞 1163

がある。この2つは、複合サ変・形容動詞としての用法が標本にあったというわけでは必ずしもなくて、現代語でそのような用法も可能であると判定した語の数が算出されたものである。したがって、複合サ変を加えた動詞の数、形容動詞を形容詞に合わせた語数は、上の2種類の数字を単に加えても出てはこないわけである。前者は 3460~6906 の間、後者は 409~1572 の間であるということまでしか、わからないわけである。

やはりわれわれの資料の一部になっている「総合雑誌」調査の、標本全体の2分の1（延べ11万6千余語、異なり1万6千語）について調査された結果も見よう。形容動詞についてはわからないので、やはり狭義の形容詞だけの数字である。^{<注>}

<注> 『総合雑誌の用語』後篇（国立国語研究所報告13, 1958）81ページの表に、80ページの注にある表を加えた。

動詞 1931

形容詞 232

やはり形容詞は動詞の8分の1弱である。

ついでに、上の2つの調査における延べ語数についても見ておこう。「現代雑誌九十種」のほうは全標本の3分の1についての調査である。^{<注>}

<注> 上記の国研報告25の67ページの表 2.14 による。

動詞 30701

形容詞 3635

したがって標本全体では、動詞の延べ語数が9万余り、形容詞のそれが1万強であろうと推測され、延べ語数でも大きい開きのあることがわかる。総合雑誌の調査は、上に異なり語数について引用したと同じく、全標本の2分の1について調べたものであるが、

動詞 27143

形容詞 2750

である。^{<注>}したがって標本全体での延べ語数は、動詞が5万余り、形容詞が5千余りと推測される。

<注> 上記の国研報告13の、異なり語数を示したのと同じ表による。

2. 動詞は動作そのものを構成する特徴のほか、その動作がかかわるもの、その動作が成り立つために必要なものなど、意味分析の手段としても有効に生かし得る項目が、いろいろそなわっている。動作の主体のほか、働きかけを受ける対象や、関係する相手や、動作の手段などが必要なことが多い。また、動詞の表わす過程は時間の上に展開されるものであるから、動詞が過程のどの部分・段階を表わすか、またその過程の行なわれたあと、どういう結果が生じるか、という観点もあろう。有意的な動作であれば、その動作の意図・目的も問題になりうるであろう。以上のような項目・観点から、その意味が区別される動詞がかなり存在しているだろう。

形容詞においては、動詞について上に例示したような諸項目としては、その表わす性質・状態の主体だけが、はっきりした主要なものとしてあるにすぎない。性質や状態は独立してあり得るものではなく、なにもものかの属性として存在するのだから、形容詞においても当然、主体はつねに存在するはずである。しかし、動詞についてあげたような他の諸項目は、形容詞の性質上あり得ないものが多い。また、存在はしても、間接的な、微弱なものであるために、とりだしにくいばあいもある。

3. 上に例示したような各種の意味成分の中には、動詞に多くみられる格支配の現象とも深くかかわり合っているものがある。たとえば、「はこぶ」「みとめる」には、「誰が、何ヲ、どこカラ、どこへ、はこぶ」「誰が、誰(何)ヲ、何ト、みとめる」のような諸項目があるはずで、それに伴って種々の格助詞を伴った要素をとることができる。そして、それが意味分析のための手がかりともなり得るであろう。一般に動詞においては格支配の現象が非常にゆたかで、それ全体の整理は大変な仕事になるだろう。類義的な動詞の意味の区別が、格支配上の区別と対応づけられるばあいもあるだろう。

形容詞においても格支配の現象はみられるが、動詞におけるよりもはるかに少ない。したがって、網羅的にあげつくすことは動詞よりはずっと容易であろう。ここでは、それには程遠いが、形容詞における格支配の例を分類して次にあげてみよう。

<注> 鈴木重幸「日本語文法・形態論1」(『教育国語12』No.12, 1968—3)が主として動詞の格支配について分類したものを参考にして、分類してみた。形容詞はほとんどすべての語が「～が」の形を、多くの語が「～より」の形をとりうるが、それらはここには示さなかった。

格支配の例

<相互的な属性の一方の項>

- (と) むつまじい, 親密な, 仲よしな, したしい, ちかしい, ねんごろな, 懇意な, 心安い, 疎遠な, うとうとしい, 気まづい, 対等な, 互角な
- (と, に) 無関係な, 無縁な

<位置・方向関係の一方の項>

14 はじめに

(と, に) 平行な, 垂直な

(と, に, から) とおい, ちかい

<比較の基準>

(と, に) 同じ, ひとしい, そっくりな, まぎらわしい

(と) 同一な, 同類な, べつな, 異質な, あべこべな, 逆な, うらはらな, 反対な,
正反対な

<適・不適のよりどころ>

(に) ふさわしい, 適当な, 適切な, 似合わしい, ぴつかわしい, ぴったりな, かつ
こうな, 不向きな, 不似合いな, 不適當な

<対人的な態度>

(に) やさしい, 親切な, あまい, ていねいな, 孝行な, 忠義な, 失礼な, きびし
い, いじわるな, つめたい, 冷酷な, 苛酷な, 残酷な

<ものごとに対する態度>

(に) いっしょうけんめいな, ねっしんな, 忠実な, 夢中な, 積極的な, 消極的な, 不
熱心な, 冷淡な, 不満な, 反対な, 批判的な, やかましい, 口やかましい, うるさ
い, むずかしい, 神経質な, へいきな, 無関心な, 無神経な, むとんじやくな

<対人的な感情>

(に) はずかしい, やましい, すまない, もうしわけない, わるい

<能力の発揮される対象>

(に) つよい, よわい, するどい, にぶい, あかるい, くらい, くわしい, うとい

<材料>

(で) いっぱいな

<心がむかっていく対象>

(が, を) ほしい, 好きな, 大好きな, きらいな, 大きらいな, いやな

<その他>

(に, が) 乏しい, 篤い

これらのような格支配は、形容詞の意味的なグループをみつける目じるしとして役立つものである。

4. 形容詞どうしの間で、上位語・下位語の関係にあることがはっきりしたものは、比較的見出しにくいように思われる。さきにもふれたように、

ばかたかい<たかい　あまったるい<あまい

のように派生関係にある同根の語の間では別であるが、異根の語どうしの間にも上位・下位の関係を無理なしにつけられるものが乏しいように思われる。

単語どうしが意味に関して上位・下位の関係にあることがはっきりすれば、単語の意

味を相互的に規定する有力な道が開かれる。ものや人を表わす具体名詞については、数層にわたるピラミッド的な階層関係を考え得ることが多い。そして類概念と種差の関係によって各語を体系的に位置づけることができる。多くの具体名詞の表わすものは、対象的にとらえやすい、外界の客観的な存在であるから、このような関係づけが比較的やりやすいのであろう。

動詞については、そのような多層的な階層関係は、具体名詞のように考えやすくないだろうと思われる。しかし、

なく	{	ほえる さえする いなく	うごく	{	はしる あるく とぶ	etc.
----	---	--------------------	-----	---	------------------	------

のような上位・下位の関係は、かなりはっきりしたものとして指摘でき、このような類は相当数に上るであろう。また、和語動詞と漢語動詞とが、次の例のような上位・下位の関係にあることも非常に多い。

なおす	{	修理する 訂正する 治療する	etc.	やすむ	{	欠席する 欠勤する 欠場する 休息する 休憩する	etc.
-----	---	----------------------	------	-----	---	--------------------------------------	------

はじめる	{	開始する	{	開校する 開所する 開園する 開台する	etc.
		創始する		etc.	

形容詞についてはこのような上位・下位の関係に立つことを明確にしやすいものが少なく、しいて関係づけようとするときじつげつになってしまえばあいもある。その原因としては次のようなことが考えられる。第1に、異なり語の数が名詞に比べればもちろん、1にみたように動詞よりもはるかに少ない。そしてその表現すべき、事物の性質・状態の領域はまことに広汎多岐にわたる。したがって量的な面からも、形容詞においては上位・下位の関係にある語が名詞や動詞のばあいよりも乏しい可能性が考えられる。第2に、次の5に述べるところと関係が深いのが、形容詞は特に客観的・主観的の両面をそなえた語類だと考えられる。外界の事物の客観的な属性にかかわる点で動詞と共通的である。と同時に形容詞は主観を通してとらえられる属性という性格が著しい。したがって、外界の事物との対応づけが一義的につけにくく、外延的な範囲を明確にしにくいので、上位・下位の関係づけもむずかしくなる点があるのではなからうか。

5. 第1部の4「形容詞の意味における主観的な側面」において、わずかにその一端

にふれようとしたのであるが、形容詞には意味の性格において主観的な側面がつよい傾向があるようだ。

森田良行は^{<注>}「形容詞と動詞の相違点」にふれて、「形容詞は、対象に対する話し手の主観的な認知・判断による言表である」のに対して、「動詞に表わされた動きは、対象自体の中における変化・作用ゆえ、これは話し手の外側のことであり、客観的はあくしかできない」という意味で、比喩的に「動詞に表わされた意味は計器類ではかることができるが、形容詞のばあいは計器でははかれない。これは個人の主観であり、相対的であって絶対的ではない。」と述べている。

<注> 「動作・状態を表わすいい方」(『講座日本語教育』第4分冊, 早稲田大学語学教育研究所, 1968)

たとえば、ある品物が「たかい」か「やすい」か、ある料理が「うまい」か「まずい」か、ということは人々の間で意見が一致するばあいも多いが、意見が分れるばあいも少なくはない。「うる」「かう」、「たべる」「のむ」のような動詞で表わされる事象よりも不一致が起こりやすいであろう。「やすい」「うまい」などの形容詞の語義が、人によって違っているわけではない。しかし、だからといって、上のような不一致性は言語の観点からはどうでもよい無関係なことだとは考えられない。同一の料理をある人は「うまい」と言い、他の人は「まずい」と感じることは珍しくないが、料理の客観的な性質だけが「うまい」「まずい」の使用条件を規制するのではなく、個人的な味覚上の好悪、その時のその人の生理・心理の状態などが重要な条件になっているためであろう。「うまい」「まずい」は料理の特質を表わすとともに、言う人の個人・主観をも物語る語だといえようか。

形容詞には、ある基準にてらしての相対的な判断・評価を表わすという性格がつよい語が多い。その基準に、社会的・客観的な性格のものがあると同時に、個人的・主観的なものがあることが、上のような不一致性の原因であるばあいもある。たとえば、ある品物が「たかい」か「やすい」かの判断の基準になるものは、同じ種類の品物の一般のねだんというような客観的なものもある。しかし、売る立場と買う立場、その人の恒常的な、またその時の経済的条件、など不一致を引き起す原因になりやすい条件も多い。

動詞にも中心的な意味に評価的な要素がかぶさっている語もあろう。形容詞においては中心的な意味そのものが主観的・感情的な要素を抜きにして考えられないものが多い。その面を閑却して、客観的・公共的なことがらの面に意味特徴をさがそうとしていた傾向があって、そこからも困難が生じていたかもしれない。

6. 形容詞の意味は具体名詞や動詞の意味よりも抽象的である傾向があって、そのために特徴を具体的にとりだすことがむずかしい点があるのではないか。具体名詞の表わすものは、多面的な特徴を豊富にそなえていることはいうまでもない。動詞の表わす動作

にも、かなり具体性のゆたかなものも多いようである。形容詞も、動詞述語文と同じように形容詞述語文を作りうる点では、動詞と同じような具体性のレベルにあるといえよう。しかし、形容詞は述語としてよりも名詞や動詞に対する修飾語としてよく使われ、そこにいちばん特徴的な領域があるようだ。非常に簡略化した図式にしてみれば、文の根幹は名詞と動詞であり、枝葉的なものの中の一類として形容詞がある。形容詞をよりくわしく限定しうる語としては程度副詞ぐらいしかないことは、形容詞の表わす内容が多面的な具体性には欠けているからであろう。

Nida は機能による語の分類として、次の4つの主要なクラスがあるとしている。^{<注>}

object words

event words

abstracts

relationals

あげている語例からみると、objects は concrete nouns で、events は verbs で、abstracts of objects は adjectives で、abstracts of events は adjectives や adverbs で表わされるのが原則だとみていることがわかる。adjectives は abstracts の字義どおり、nouns や verbs の一面を抽象した性質のものという考えであろう。

<注> Eugene A. Nida : Toward a Science of Translating (Leiden, E. J. Brill, 1964) 62~63ページ

Nida は同じ所で、これと似た分類として Sapir ^{<注>} をあげている。

existents (house)

occurents (run)

qualities of existents (red)

qualities of occurents (gracefully)

Sapir のあげている、カッコの中の語例からみても Nida の分類と似ていることがわかる。adjectives と日本語の形容詞とを同一視するわけにはいかないが、Sapir はこれを諸言語にわたる普遍的な性質とみているようである。

<注> Edward Sapir : Grading, a study in semantics "Selected Writings of Edward Sapir in Languages, Culture and Personality" (Berkeley and Los-Angeles, 1951)

以上、語の意味を区別する特徴をぬきだす作業を、形容詞に試みて感じられた困難の原因と考えられるもののいくつかを列挙してきた。それらの中に多少なり、形容詞の意味その他に関する性質・傾向を物語るものも含まれているのではないかと思う。以上のつたない経過と反省の記録が、今後の形容詞の意味研究にいくらかでも参考になれば幸である。

おわりに、本書で「形容詞」およびその周辺にあるものとして扱った語の範囲に関して、一言したい。日本語の形容詞は歴史的に途中で発達がとまってしまった観があり、これをカバーするものとしていわゆる形容動詞が発達してきている。狭義の形容詞といゆる形容動詞とは、その表わす意味の性格や文法的なはたらきがほとんど同じであるから、以下では両者を合わせて形容詞と呼び、特に区別したいときはI型の形容詞、ナ型の形容詞とした。

ナ型の形容詞は典型的な語については問題はないが、周辺の語になると名詞との境界がはっきりしなくなる。連体形として「～な」の形があると思われるものは一応ナ型の形容詞である可能性のあるものみる、という比較的ゆるい基準によった。

形容詞の表わすのと同じような性質や状態を表わす語は、かなり広く他の品詞にもわたっている。たとえば「わかい」「まっすぐな」「ただしい」に対する反対的な表現は「とじとった」「まがっている」「まちがった」のような、動詞の「～た」「～ている」の形がうけもっている。「ぬれた(しめた、かわいた)きれ」「とがった鉛筆」「まがった心」などのように、性質や状態の表現にもさかんに活動する動詞は相当に多いようである。「しゃれた(アクセサリー)」「くすんだ(色)」「ひねた(子ども)」「まがりくねった(道)」「思い切った(政策)」などのように(おもに)「～た」「～ている」の形でしか使われず、静的な属性を表わす動詞もある。また、情態副詞のあるものは、形容詞の連用修飾語と、意味の上でも似たはたらきをする。情態副詞として使われることの多い擬態語・擬声語が日本語には非常に多いといわれる。こういうグループは日本語における情態表現の語として大きい役割をになっており、意味の上で形容詞と交渉が深いといえよう。日本語で形容詞があまり発達しないことと、擬態語などのような描写的な語が非常に豊かであることは、なにがしかの関係があるだろうか。また、名詞の中にもたとえば、「なまの」「みどりの」「はだかの」「ななめの」のように実体ではなく情態を表わす語がある。

〈注〉たとえば、緊張するという意味で、「かたくなる」と「こちこちになる」とはかなり似ており、無関係ではあり得ない。

上に一瞥したように、性質・状態を表わす語はいろいろな品詞にまたがっており、形容詞はその(中核的な)一部分を占めているにすぎない。したがって、対象を形容詞だけに限定して意味の体系を考えようとするにはかなり無理が伴うと考えられる。日本語における性質・状態を表わす語の全体をおさえるためには、どうしても形容詞以外の種々の品詞にわたらなければならない。ここでは語と語をつき合わせて、意味を区別する特徴をさがすという細かい作業がおもな課題であったが、やはり形容詞の範囲からはみ出して、動詞・副詞・擬態語などを取り上げたことが間々あって「分析例」においてその類が比較的多くなっている。それは、やれる所からやってみるという方針ではじ

めたところ、本来の形容詞の領域で、上に述べたように作業が難航し、周廻的な他の品詞を試みる、という傾向が生じた結果でもあった。はじめから、形容詞という範囲にとられず、「性質・状態表現の語」という観点で作業をすれば、もっと多数の「分析例」を作ることはできただろう。しかし一方、形容詞という語類には意味に関しても独自の基本的な性格があって、他の語類とつき合わせて特徴をぬきだそうとすることには問題がある、とする立場もあり得るだろう。そういう立場に立てば、困難ではあっても純粹に形容詞の中で特徴をぬきだす方向に努力すべきだということになるだろう。

3. 凡 例

1. 語形の示しかた

「分析例」その他において、形容詞（など）を見出しとして示すばあいなどには、次のようなやりかたをした。形容詞は語幹を代表の形とし、「ながい」「しずかな」のように連体形語尾を小文字で添えた。イ型とナ型の活用をあわせもつものについては「おかしい・な」のように両方を示したばあいもある。形容詞の連用修飾語としての面を取り上げたばあいは「すばやく」のように示した。形容詞以外（にも関係する語）については、「かくしゃくたる・と」「いろいろな・の」「みどりの」「としとった」「さっさと」「いっさんに」「くるくる」というような示しかたをした。（たとえば「くるくる」には「くるくると」の形もあるのにそれは示してないというように、煩をさけて、きわめて便宜的にした点がある。）

普通の文中では、上のように語尾を小文字にすることはせず、「ながい」「しずかな」「みどりの」のようになるべく連体形（に相当する形）で示した。それは他の活用形をも含めて代表しているばあいが多し。また、見出しでは「いろいろな・の」と示したもので、文中では「いろいろな」で代表させたようなばあいが多し。

2. 記号的なもの

* 普通にはあり得ないとか、ありにくいと考えられる文例などにつけて、普通の文例との区別が一目でわかりやすいようにした。

◎○ いくつかの表の中で使った。◎は資料内に実例があったことを示す。○は資料内には実例がなかったけれども、筆者の内省によればあり得ると判定されることを示す。◎および（または）○のついていない空欄の意味するところは表によってちがっている。

《 》 たとえば

《人》のきれいな《対象》

20 はじめに

は、「わたしのきれいな食べ物」「山田君のきれいな学課」のような語句を代表する。

() たとえば

(形容詞)+赤ちゃん

(主語)は(対象語)が ~い(だ)。

のように、品詞や文の成分を表わす。

3. 引用文献

引用した著書・論文については、発行所・雑誌名や刊行年・号数などを明記するように努めた。ただし、何度も引用したもので、巻末の参考文献にあるものは簡略化して示したばあいもある。

第1部 形容詞の意味の諸側面

1. 感情形容詞と属性形容詞

1.0 はじめに

形容詞には、客観的な性質・状態の表現をなすもの（以下属性形容詞と呼ぶ）と、主観的な感覚・感情の表現をなすもの（以下、感情形容詞と呼ぶ）との区別があることが、認められている。^{<注>}

<注> たとえば『国語学辞典』の「形容詞」の項を参照。

この区別は、単語の意味による形容詞の分類の一種である。

おおきい、しろい、かたい、はやい、わかい、しんせつな、……

などは、ものや人の性質や状態、動きのようすなどを表わし、客観的な性質・状態の表現をなすものに属する。

まぶしい、いたい、うれしい、なつかしい、いやな、……

などは、人間の主観的な感覚・感情を表わすものである。（属性形容詞と感情形容詞との、中間的な位置をしめるものもある。それについては1.2.3を参照。）

この属性と感情による区別は、日本語の形容詞においてきわめて基本的な分類基準である。^{<注>}この1では感情形容詞を、属性形容詞との対比において調べようとしている。

<注> 国語史上でも、形容詞のこの2分法は重要な意味をもっている。古代語では、ク活用の形容詞はたいてい状態的な属性概念を表わし、シク活用の形容詞は、心的な、情意的な意味を表わしていたことが明らかにされた。この区分は平安文学の用語ではすでにかなり崩れたようである。（山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」<『国語学』No. 23, 1955-12>）

上の区分は単に意味上のものであるに止まらず、語としてのふるまいの上にもいろいろな特徴のちがいで表われている。それらを明らかにすることによって、意味に関してもよりくわしい情報が得られよう。以下、何項目かに分けて、しらべてみよう。

なお、この章で取り上げた種々の環境において、形容詞が生起しうるかどうかをしらべてみた表を次にかかげた。○をつけたものは筆者個人の自省においては生起しうると感じられるものであり、空欄のものは生起しえない（のではないか）と感じられるものである。いろいろ問題の点もあると思われるが、この章で述べようとしていることのあらましを簡便に視覚的に示したいと思ってかかげることにした。形容詞の(1)～(18)が感情形容詞で、(19)(20)だけが属性形容詞と考えたものの例である。感情形容詞のうち、

(11)と(12)の間あたりを境として、上が感情を表わすもの、下が感覚を表わすものの例としてある。環境Ⅰ～Ⅸは、この1で使用し、環境Ⅹは4.4.2.2で利用している。

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
	環境 形容詞	く が る	(わたしは) 話し手の感情・感覚 くい(だ)。	あなた は 第二(三)人称者の感情(覚) くい(だ)。	あなた は 感情(覚)の表れた様子 くそうだ。	対象 モノ が くい(だ)	対象 人 が くい(だ)	対象 コト が くい(だ)	くい(な) こと^内容^	体の部分 が くい(だ)	くくて(で) たまらない
1	うれしい	○	○		○			○	○		○
2	かなしい	○	○		○			○	○		○
3	いやな	○	○		○	○	○	○	○		○
4	にくい	○	○		○		○	○	○		○
5	いとしい	○	○		○		○	○	○		○
6	なつかしい	○	○		○	○	○	○	○		○
7	おしい	○	○		○	○	○	○	○		○
8	すきな		○	○	○	○	○	○	○		○
9	ほしい	○	○		○	○	○				○
10	つらい	○	○		○			○	○		○
11	くるしい	○	○		○			○	○	○	○

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
12	いたい	○	○		○	○				○	○
13	かゆい	○	○		○	○				○	○
14	だるい	○	○		○					○	○
15	けむたい	○	○		○	○					○
16	まぶしい	○	○		○	○					○
17	ねむい		○		○						○
18	ねむたい	○	○		○						○
19	重宝な	○				/	/	/	/	/	/
20	きたない	○				/	/	/	/	/	/

1.1 感情形容詞の諸特徴

1.1.1 接尾語「～がる」

まず、形容詞から動詞をつくる接尾語「～がる」がつくかつかないかというメルクマールをとりあげてみよう。(環境 I) 1.0に感情形容詞の例としてとりあげた語は、

まぶしがる、いたがる、うれしがる、なつかしがる、いやがる

と、みな「～がる」がつく。属性形容詞の例としてあげたほうは、

*おおきがる、*しろがる、*かたがる、*はやがる、*わかがる、*しんせつがる
と、「～がる」がつかないか、またはつきにくい。(特殊な条件下でないとならない。)

<注> 次の論文の中では「～がる」がつくかつかないかが、感情形容詞と属性形容詞を区分する主要な手がかりとして扱われている。

1. 小山敦子『『の』『が』『は』の使いわけについて——展成文法論の日本語への適用——』（『国語学』No. 66, 1966-9）
2. 森岡健二「日本文法体系論(11)」（『文法』1-13, 1969-10）

接尾語「～がる」は、人間が、形容詞の表わしている内的な気持や状態にあることを

外的な態度・言動などに示すことを意味するものといえよう。したがって、「～がる」は、人間の内的な気持や状態を表わす形容詞にはつき、そうでない形容詞にはつかない(つきにくい)のであろう。

意味上の区別と、「～がる」がつかつかないかという区別とは、かなりよく対応しているようであるが、問題なく対応しているとはいえない部分もある。それを、いくつかの項目にあげてみよう。

(1) 「つよがる」「あたらしがる」「いきがる」など

「つよい」「あたらしい」は感情を表わす語ではないのに「～がる」がつか。

○「外国を歩いてゐる間によく考へたことだつた。日本の女ぐらゐ不幸に対して強い女はない。弱いやうでゐて強いのだ。日本の男が強がつてゐて実は一様に意気地なかつたのとは逆なのだね。」(帰郷 280)

○君たちの方こそ古いんだ。古いよ、じっさい。……でもネ、君たちの方で新しがっていたいんなら、勝手に新しがってれやいいサ。(むらぎも 237)

資料内に用例はないが、「えらい」も同様に「えらがる」を派生させている。

ナ型の形容詞にも、感情を表わさない語で「～がる」のついた例がある。

○どんなに寒くても下着は一枚ぶるぶるふるえながら^{いき}粋がった人達がいたものですが、(婦人生活 1956年2月 469)

○クラフトエービングやフォレールの著書中に散見するやうな色情狂に想像で成済まして、而して^{まう}独り高尚がつてゐた。(平凡 96)

○感謝の誠意などは二の次として、

(やつ、いやに初心がつて見せやアがるな)

と云ふやうな邪推で、心が穢されずにすんだのを、ひたすら自分自身のために喜んだ。(多情仏心・前 272)

これらの「～がる」は形容詞が表わしているようすを自分が所有しているふりをする、そのことを誇示する、のような意味であって、「うれしがる」「痛がる」などの「～がる」とは区別して考えうるものである。(「～ぶる」にやや意味が近い。)

(2) 「きたない」「重宝な」「おめでたい」「厄介な」など

これらの形容詞にも「～がる」がつか。資料内に次のような例がある。

○てめえの子供を腹の中に持つて帰つたときは、おれはもんをいちめ、もんに悪態のあるだけを尽し、しまひに犬畜生のやうに汚ながつてやつたものだ。(あにいもうと 146)

○重に^お気のはらない、急ぎの仕事にお島は重宝がられた。(あらくれ 140)

○客は息子の凱旋を二重にお目出度がつて早速輿の宴席へ息子を招じこもうとしたが息子は困憊裡端に腰をおろしたなり頑固に動かうとしなかつた。(厚物咲 30~31)

○片野は妻の病氣を厄介がつて瀬谷の家を訪れる度に愚痴をこぼして行つたが、病氣

そのものは重病であるにも拘らず、それほど心にかけてるない風だつた。(厚物咲 24)

これらの語は、人間の感情ではなく、対象の属性を表わす形容詞だと考えられる。

わたしはきたない(重宝だ、おめでたい、厄介だ)。

という文は、

わたしはうれしい。

という文のように、「わたし」の感情を表現する文としては成り立たない。しかし、これらの形容詞は「大きい」「白い」「遠い」のような語にくらべると主観的な色あいのつよい意味をもっているとはいえるであろう。そして、「～がる」がつくことを基準として重視するならば、感情形容詞的な側面をもっているともいえるであろう。

(3)「すきな」「きらいな」

この2語は感情を表わすものと思われるけれども、「～がる」はつかない。その理由を臆測すると、一つは語構成上、これらは「すく」「きらう」という動詞の連用形に由来するものであり、これらの動詞も現に使われているために、「～がる」をつけて動詞化する必要があまりないのではないかと、ということである。

もう一つ、「すきな」「きらいな」などは好悪の感情を表わすものであるが、ふつう持続的な感情である点で、他の多くの感情形容詞と違う特色がある。(これに対応する、その時、その場での好悪の感情を表わす語は「いい」「いやな」である。)「がる」がつかないのは、あるいはこのことと関係があるのかもしれない。(分析例1)

以上の3項目のうち、(1)は「～がる」が多義的であると考えることによって説明がつけられる。(3)はごく少数の語に関する例外的な現象である。そして、(2)にあげたような類がいちばん問題であろう。もし、「～がる」がつくことを理由に、これら「きたない」「重宝な」などの類も感情形容詞だとしてしまうと、感情形容詞の範囲が広くなりすぎるのではないかと。それらは、たかだか、属性形容詞ではあるが、やや感情形容詞的にも用いられることのあるもの、と考えておきたい。

以上のような問題点はあるけれども、接尾語「～がる」がつくか否かということは、主観的な感情・感覚を表わす形容詞であるかどうかを外的な手がかりによって見分けるのに、簡便で、ある程度有効な方法であるとはいえよう。

1.1.2 主語の制限

感情や感覚を表わす形容詞が述語になる場合、その感情・感覚の主体を表わす主語になるのは、感情や感覚をもちうる有情のもの、主として人であることはいうまでもない。

したがって、感情形容詞としての、第1の必要条件は、それが感情の主体としての、人を主語にとりうるか否かという点である。

○私は自分の心に予期した感動が起らないのが悲しかった。(野火 62)

○てる女が佐助自身の口から聞いた話に春琴の方は大分気が折れて来たのであつたが佐助はさう云ふ春琴を見るのが悲しかつた。(春琴抄 205)

において、「私」「佐助」は「悲しい」という感情の主体を表わしている。

○よそへ行つて外のカフェーでも探してみようかと思う日もある。まるでアヘンでも吸っているように、ずるずるとこの仕事に溺れて行く事が悲しい。(放浪記 86)

○いつか私は眠つてゐた。長い苦しい眠であつた。眼をさますと、海に向いた窓があかあかと夕日に照らされてゐた。その衰へた赤が悲しかつた。(野火 83)

のように、感情の主体がその文の中には表わされていないばあいも多いが、感情をもよおす主体としての人が文脈や場面から想定される。

しかし、日本語の「かなしい」「うれしい」「ほしい」「いたい」などの感情形容詞においては、主語に立ちうるものが、有情の人間に限られるだけでなく、もっと狭く制限される傾向がみられる。それは、たとえば、

*あなたは かなしい。 *あの人は うれしい。

のような文は成り立たないという点である。すなわち、これらの形容詞が、そのままの形で平叙文の言い切りの述語になるばあいには、ふつうは、話し手自身の感情・感覚しか表わさない、という制約である。^{<注>}(環境Ⅱ、Ⅲ)

<注> この事実は、23ページの<注>の小山氏の論文のほか、次にあげる近年の論文の中にすでに言及されている。

南不二男「文の意味について二三のおぼえがき」(『国語研究』No. 24, 1967—12)

国広哲弥『構造的意味論』(ELEC 言語叢書, 1967) 20~21ページ

なお、この原則にあてはまらない、例外的なばあいも若干あるだろう。その1類として、書き手(話し手)が第三者の気持にはいり込んで、自分のことのように表現するばあいが考えられる。

○時雄は常に苛々して居た。書かなければならぬ原稿が幾種もある。書肆からも催促される。金も欲しい。けれども何うしても筆を執つて文を綴るやうな沈着いた心の状態にはなれなかつた。(蒲団 54)

このようなばあい、どこまでが作中人物を第三者としてえがく立場で、どこからが作中人物自身の立場に立った叙述であるか、一線をひきにくい。

したがって、上のような環境における感情形容詞は、主語が表現されていないばあい、想定される主語は第一人称の人である。

○あたしは毎朝、お客さんの書き散らした原稿用紙、番号順にそろへるのが、とつても、たのしい。たくさんお書きになって居れば、うれしい。(富岳百景 68)

○友人等は盛に「遊」ぶ、乱暴に無分別に「遊」ぶ。其を觀てゐると、羨ましい。(平凡 94)

○離れていると、余計なことばかり想像して辛い。(くれない 125)

○島村は伸びをしたついでに、女の膝の上の手をつかんで小さい指の撥拵^{はふたこ}を弄びながら、

「眠いよ。夜があげたばかりぢやないか」(雪国 108~109)

上の例のように、話し手は感情の主体として言い表わされないことが多いけれども、次のように主語として明示されることもあるのはいうまでもない。

○私はうれしゅうございます。一生に一度はお目にかかりたいと祈っていました。

(出家とその弟子 79)

○ですから、あんな時にはA一の従妹が私いつでも羨やましくなるの。(真知子・前 17)

○でも、娘は素直に鮎を手を受取ると、一口端を嚙んだが、またしばらく手首に涙の雫を垂し、深い息を吐いたのち、

「あたくし、辛い！」と云つた。(河明り 273)

○「さあさ、早く、寝んね寝んね。おばあちゃんも眠いよ」

如何にも顔をしかめて、苛ら立っているらしい声であった。(くれない 21)

おわりの「くれない」の例の、「おばあちゃん」というのは話し手が自分をそう呼んだものである。

これらの形容詞は、基本的には、話し手自身の主観的な感情・感覚を直接的に表わすという性格が濃く、「第一人称的形容詞」とでも呼ぶほうが性格がはっきりするかもしれない。^{<注>}しかし、ここでは慣用に従って「感情形容詞」と呼ぶことにした。(「いたい」「まぶしい」のように感覚を表わすものを含んでいるわけであるが、感情を表わすものの方が数はずっと多いので、感情のほうに代表させた呼びかたは便宜上許されるであろう。)

<注> 国広哲弥『構造的意味論』では、このような形容詞に共通の意義特徴として「第一人称者の状態」が仮定されている。(20~21ページ)

同じ論文によると、このような形容詞(「歩きたい」「食べたい」など「(動詞連用形)+たい」の形も含めて)に対応する英語の形式にはこのような意義特徴がなく、次の例のように三人称の主語も付き得るという。

ワタシワ アルキタイ I want to walk.

*カレワ アルキタイ He wants to walk.

ワタシワ ウレシイ I am happy.

*カレワ ウレシイ He is happy.

日本語を習い始めた英語国民に「あの人はかなしいです。」「あなたは行きたいです。」のような誤りが多いのは、2言語間のこの相違点にも起因するのだろう。

人間が直接に経験できるのは、自分自身の喜怒哀楽や眠さ・痛さ・かゆみ等だけである。自分以外の人の気持や感覚は、その人の報知によって知ったり、外的な表われを通して推測することができるにすぎない。日本語の感情形容詞が、その瞬間における感情・感覚に関しては話し手自身についてしか断定的に用いることができないのは、この基本的な事実と相応じているように思われる。

このような形容詞の表わす内容は、人間の主観的な直接経験であるから、その真偽が人と人の中で言い争われるような性質をもっていない。たとえば「しあわせな」「悲観的な」「内気な」などは客観的な性質であるから、ある人がその性質をもっているかどうか論争の種になり得る。しかし、「うれしい」「かなしい」「はずかしい」などの主観的な感情は、そういうことが普通には存在しないと思われる。

話し手以外の人がある感情・感覚をもよおしていることが、外的な観察できる行動や徴候に表われていることに関する表現の形としては、1.1.1 でしらべた「～がる」という動詞形があった。そのほかに、「～そうな(だ、に)」というナ型の形容詞に相当する形がある。

○相変わらず、快活で、ひとりで楽しさうであつた。(帰郷 236)

○雄吉は、うれしさうな笑顔を見せた。(帰郷 206)

○「何て気楽な書生さんでせう。男はいゝね。」

お鳥は可羨^{うらやま}しさうにその後姿を見送りながら、主婦^{かみさん}に言つた。(あらくれ 125)

○こめかみを両の手でおさへて、看護婦の滝さんに支へられ、歩くのがつらさうに見えた。(本日休診 112~113)

○「何をするの、まつ子ちゃん」と小母さんが叱つたが、少女は固い声でなおも漫画をよみ、すこし知能の低い二年生の弟は、ねむそ^{ねむ}うに食卓に伏さっているのだった。(人間の壁・上 36)

上のような例を一般化して、

あなた(あの人)は <語幹>そうだ。

の形の文が成り立つことも、感情形容詞の1つの条件としてもよいだろう。(環境Ⅳ)

(ただし「<語幹>そうだ」の形は感情形容詞以外にも「しあわせそうだ」「かしこそうだ」など、広く成り立つから、他と区別するための積極的な条件にはなりえない。)

「うれしい」に対する「よろこぶ」、「かなしい」に対する「かなしむ」など、形容詞と対応する動詞のほうには、上に述べたような人称的な制限はない。第一人称には「うれしい」が使われることが多いが、「よろこぶ」も使われる。

○今日は非常に良い協議会ができたことを、心から喜んでおります。(人間の壁・上 180)

主体になりうるものについての、上のような制限は、「うれしい」「かなしい」などの形容詞のグループにおける著しい特徴である。

感情形容詞は、上にみたように、もっとも基本的とみられる環境においては、その主語になりうるものが制限されている。しかし、その他の環境においては、この制限から解放されているばあいが^{<注>}多い。

<注> この現象は、26ページの<注>の南氏の論文において、構文論上の問題として取り上げられている。

まず、断定の過去の形は、小説の地の文章では、作中人物についてよく使われている。少し例をあげてみよう。

○トランプは二時間程つづいた。野島は時間もその他のことも忘れて幸福になつてゐた。そして杉子のよろこぶ時は心からうれしかった。(友情 67)

○彼女は心から、助けがほしかった。彼女のために弁明してくれる第三者がほしかった。(人間の壁・上 139)

○行介はすぐには返事が出来なかつたほど痛かつた。(波 277)

感情形容詞は主観的な感情などを直接的に表わす性質が濃いけれども、その過去形は現在形よりも、やや客観的なできごととして表わす性質が多くなるのであろうか。特に小説では、作者が作中人物の心にはいり込んで、その人になったような書きかたがなされることが多いということも、やはりここで考慮に入れる必要がありそうだ。日常の会話などでは、

* きみは うれしかったね。 * あの人 は くるしかった。

のような文は、相当に不自然であろう。断定の過去の形については、話しことばと書きことば、文章の種類などによって、主語の制約されかたに相違があるのではないか。

しかし、次にあげるような各種のタイプの文になると、問題なしに自然な文である。

○「これがいたい」相手はその手をとびかかるようにしてつかんで前へ引いた。
(真空地帯・上 116)

○「大宮さんがいらつしてはあなたお淋しいでせう」(友情 88)

○そうして一日に一度は、必ずこの子のからだに手をふれてやることにしていた。浅井はそれがうれしいのだ。(人間の壁・上 203~204)

○うちの親爺は、貴郎の親爺が余程憎いだわ。(宝石 1956年10月 114)

などのように、述語が質問・推量・解説などの形をとっている時には、一人称以外の人を感情の主体とする文が、まったくノーマルなものとして成り立つ。形容詞が質問文の述語であるときは、その感情の主体は聞き手である第二人称の人に限定される。これも一種の制約だといえよう。また、

あの人 は うれしいのに、つまらなそうにしている。

まだ苦しければ、医者 に いらっしやい。

ほしい人には、あげますよ。

犬のこわい子も多い。

のように、「～のに」「～ば」などの条件句の中や、連体修飾語においても、人称的な制限がない。

この項で調べた、主語の制限を伴う形容詞の範囲は、意味上からみた感情・感覚を直接に表わす形容詞の範囲とかなり一致するとみてよさそうである。形の上の手がかりから、感情形容詞であるかどうかを認定する方法をもし1つだけ選ぶとすれば、この基準がいちばん適切なものであろう。この基準によれば「しあわせな」「いそがしい」などは話し手以外の人についても「君はしあわせだね」「あの人はいつもいそがしい」などと言えるので感情形容詞から除かれることになり、それは妥当な線であると思われる。

しかし、例外的とみられる事例もないわけではない。「すきな」「きれいな」は感情のうちの基本的な1類である好悪を表わすものであるが、

○一たい安吉は、女のからだの線に好き好きがあった。彼は高い胸が好きだ。高い腰が好きだ。高い尻が好きだ。(むらさきも 37)

○彼れ自身も、明るく豪華な庭の方が好きである。(帰郷 249)

○砂原宗四郎はモノにこだわるのがきれいだ。(中央公論 1953年9月 234)

のように、上にみてきた主語の制限を受けていないようである。これは小説の文章などだけではない。

かれはかの女がすきだ。

あの人はたばこがきれいです。

などとあたりまえに言える。この問題については、分析例1の中で考えてみたが、一言でいえば、「すきな」「きれいな」は感情形容詞の性格をもってはいるが、一般の感情形容詞とは違う独特の性質をもっているために、例外的な事例をなしているのであろう。

1.1.3 対象語

感情や感覚には、対象の存在するのが原則である。感覚の対象は現前する外的な刺激であるのが普通であろう。しかし、感情は現前する対象だけでなく、遠い所のできごとの想像や、過去のことの記憶や、未来の予想など、その対象になるものは広汎である。

感情形容詞を述語とする文の中に、それら有形・無形の対象が必要に応じて言い表わされる。そういうばあい、それらは条件句やガ格の対象語の形をとることが多い。たとえば「うれしい」を例にすると、

○「僕、大磯で、オバサマにお目にかかれて、ほんとに、うれしかった……」(自由学校 62)

○が、市九郎は自分の掘り穿った穴を見ると涙の出るほど嬉しかった。(恩讐の彼方に 76)

○太湖船の東洋的なオーケストラも雨の降る日だったので嬉しかった。(放浪記 63)

○それで民さんがりんだうを好きになつてくれれば猶嬉しい。(野菊の窟 30)
は条件句のばあいであるが、次の例は対象語のばあいである。

○駒子は、そういう叔父の態度が、うれしかった。(自由学校 40)

○私は彼等に見られてゐるのがうれしかった。(野火 136)

上の例のように、感情形容詞が感情の主体を主語としてとりうるほかに、感情の対象を表わす語をとりうることは、感情形容詞の基本的な特徴の一つであるといえよう。そして、感情の主体を表わす主語は「～は」の形で、感情の対象を表わす対象語は「～が」の形で示されるのが基本的である。上に引いた対象語の2例は、そのように「～は」の形をとっていた。ただし、「～は」も「～が」も主体や対象の取り上げ方によって「～が」や「～は」や「～も」などになることがある。

○朝の十一時頃で、日は可なり強く照りつけ、あたりは日光を反射したが、彼は久しぶりに東京の土をふむのは嬉しかった。(友情 95)

○彼も、金は欲しいのである。(自由学校 196)

○久しぶりに自家の人に逢ふのも自家に帰るのも嬉しかった。(友情 95)

<注> 感情形容詞を述語とする「～ハ～ガ」構文は、いわゆる「総主」をもつ「～ハ～ガ」構文とは性質がちがっている。たとえば「ぼくはかねがほしい」では、「ぼく…ほしい」が主述関係を構成している。しかし、「象は鼻が長い」では「象…長い」は直接の関係をもっていない。

感情・感覚を表わす形容詞が、その意味が成り立つために対象を必要とする度合は語によってさまざまである。「すきな」「きらいな」「ほしい」「うらやましい」「にくい」「なつかしい」などは対象なしには成立しない。(それらが対象語として表現されるとは限らないが。)他方、「たのしい」「さびしい」「ゆううつな」「たいくつな」などは対象を伴うこともあるが、明確な対象のない、漠然たる気分などとして成り立つこともある。以下に問題点の(1)としてあげる「ねむい」「だるい」「ひもじい」などは、対象を必要とする性質、対象語をとる性質がもっとも低い、ゼロに近いものといえよう。

以上にみたように、感情・感覚を表わす形容詞が、ガ格の対象語をとりうる性質は、基本的なものではあるが、感情形容詞の必須の条件ではないし、他にも問題になる点がある。それを次にしらべてみよう。

(1)「ねむい」「ねむたい」「だるい」「ひもじい」「ひだるい」

これらの形容詞が表わす眠気・無力感・空腹感などは、体の中からの原因によって成り立つのであり、外からの刺戟などを対象としないものである。従って外界の事物が対象になることはなく、そういう事物を表わす対象語をとることもないと考えられる。

上のよう^に考えようとするのに対して、例外的に見える、ごく少数の用例を検討してみよう。

「ねむい」「ねむたい」が対象語をとった例はないが、次の例がある。

○私には、あまりに現実に乗出し過ぎた物のすべてが、却つて感覚の度に引つかゝらないやうに、これ等の風物が何となく単調に感じられて眠気を誘はれた。

「半音の入つてゐない自然といふものは、眠いものね」（河明り 293~294）

○夕暮、眠い霧がその上をこめると、沼地で、シュワア、シュワア、シュワア、馬の毛で胡弓をこするやうな、小動物の合奏が起つた。（伸子・上 126）

○^{よなべりた}弦に触れて^{つぶや}囁くやうに^{とちら}動揺する波の音、是方で思つたやうに聞える眠たい櫓のひびき——あゝ静かな水の上だ。（敬戒 171）

これらの「ねむい」「ねむたい」は「もの」「もや」「櫓のひびき」の連体修飾語として、眠気をさそうやうな、それらの属性を表わすものになっている。「あの先生の講義はねむい」というばあいも同様で、つまらなく退屈で眠気をさそわれる、講義の性質を表わすものになっている。

「だるい」も対象語をとった例はないが、次の例は外界の対象と結びつけて使われている。

○秋雨のやうな雨がまだじとじと降つてゐた。水分の多い冷い風が、遠く山国に来てゐることを思はせた。ごんごんと云ふ^{だる}儻い水車の音が、どこからか、物悲しげに聞えてゐた。（あらくれ 107）

繰り返される単調な水車の音を聞いているとだるくなってくるような感じを表現したものであろうか。珍しい例である。こういうばあいは、次のような「ものうい」にかなり近い意味で「だるい」が使われているのではなからうか。

○北の窓の方を見ても、南の窓の方を見ても、その物憂いリズムの無限の度数を繰り返し、繰り返して降る……。 （田園の憂鬱 62）

(2) 「ほこらしい」

「ほこらしい」に次の例がある。

○新治の母親は自分の乳房がまだ瑞々しいのが誇らしかつた。（潮騒 124）

「ほこらしい」は母親の感情であり、「自分の乳房がまだ瑞々しいの」はその感情の対象を表わす対象語であろう。

しかし、「ほこらしい」は、

*わたしは ほこらしい。

という文は成り立たせないとみられる。

わたしは ほこらしい気持だ。

は成り立つけれども。したがって、いままで考えてきたやうな、第一人称的な形容詞とは言えまい。典型的な感情形容詞が、直接的に話し手の感情を表わすのと違って、気持の内容をやや客観的に描き出す性質があるのではないか。

このような性格の形容詞はほかにもあると思われる。「ほこらしい」のばあいは、感

情の主体と対象をはっきり言い表わしている文例がたまたまあった。この類の形容詞は第一次的な、もっとも基本的な語ではなく、派生的な、使用度もあまり高くない語に限られるようである。そして資料内の用例数もみな少ないので、主語と対象語をあわせて持っている用例は「ほこらしい」のほかに見つけることができなかった。しかし、

いらだたい、ほらだたい、よろこばしい、にがにがしい

などは「ほこらしい」と同じ類ではないかと思われる。これらの形容詞は、「環境Ⅱ」と呼んだ、

わたしは ～い (だ)。

には現われず (現われにくく)、

わたしは ～い (な) 気持だ。

の形は可能である。また「<語幹>そうに」(これと意味のよく似た「<語幹>げに」を含めて)の形が、話し手以外の人の感情が外に表われたようすを述べた例がある。

○みんなは声高に笑ひながら、胸を張つて誇らしげに自分の乳房を見せあつてゐた。
(潮騒 122)

○彼女は既に、舌で云へば厭な味のやうに何かそぐはないものを佝から感じたのではあるまいか。——さもなければ、なぜああ時々綺麗な白足袋の爪先を、焦立たしさうに動かす必要があらう。(伸子・上 164)

○お島は乱れた髪を搔きあげながら、腹立しさうに言つた。(あらくれ 61)

○この村に帰省してゐた女学生、それはY市の師範学校の生徒で、この村で唯一の女学生は、夏の終りに、彼の妻と友達になつたが、間もなく喜ばしさうにその学校のある都会へ彼の妻をとり残して帰つて行つた。(田園の憂鬱 35)

○改札はこの二人の乗客を苦々しげに見やりながら、左手を延して待つてゐた。(或る女・前 5)

第一人称的な感情形容詞は一般に、話し手以外の人について「<語幹>そうに(な、だ)」の形がよく使われることを、1.1.2「主語の制限」に述べた。

このような語を、やや客観的な性質をおびた感情形容詞のグループとして考えることができるかもしれない。

1.2 感情形容詞と属性形容詞の交渉

1.2.1 属性形容詞の感情形容詞的用法

上に感情形容詞の諸条件をいくつか考えてみたが、典型的なばあいを主にして考えてきたのであって、実情はもっと入り組んでいる。感情形容詞と属性形容詞とは、いろいろな面で密接に関係しあっている。

感情形容詞は、感情・感覚の主体(基本的には第一人称の人)を主語にとりうることを基本的な条件としてあげた。ところで、たとえば色というものは人間の感覚的経験で

あって、外界に存在するのは色々な波長の光線にすぎないという。しかし、ことばの世界では「あかい」「あおい」などはもちろん外界の物に属する性質であって、それらは属性形容詞に属している。ではあるが、たとえばあるじゅうたんの色が何色であるかを論じあっているようなときに、「ぼくはあかい」などという文がとびだす可能性が絶対にはないとはいえない。しかし、そういうばあい、一般には「ぼくはあかいと感じる」などと表現するのが普通だという事実にもとづいて考えてきたわけである。

1.2.2 感情形容詞の属性的用法

上にあげたのは、かなり極端なばあいで考えると生じてくる問題であるが、ごく普通のばあいでも問題とすべき点がある。

属性形容詞でも感情形容詞的に使われる可能性がないとはいえないのより以上に、感情形容詞が属性表現的に使われることは多くみられる現象である。

肉親との 別離は かなしい。

インフルエンザの 予防注射は いたい。

のような文が、「かなしい」「いたい」が特定の感情・感覚の主体と関係なしに、むしろ「別離」「予防注射」というものの一般的な性質を表現した文のように用いられることはそう珍しいことではあるまい。次にあげるような「たのしい」も感情の主体が特定の個人ではなくなっていると同時に、本来感情の対象であるはずのものの属性を表わす方向にかたむいているのではなからうか。

○明るいプリント地のクッションを作って組合せれば、室内も楽しくなりましょう。

(婦人倶楽部 1956年 6月 465)

○姉妹お揃いで作りたい水色ドットの楽しいホームドレス。(平凡 1956年 9月 84)

○楽しい音楽でも何回も聴いているうちにあきてくるものもありますし、(音楽の友 1956年 2月 56)

上にみたように、感情形容詞が述語になっているばあいでも、属性表現的に用いられることはある。しかし、述語と名詞の位置が入れかわって、感情形容詞が連体修飾語の位置を占めるばあいは、もっと属性表現的になりやすいようである。たとえば「いやな」は述語的な位置にあるときは、特定の個人の感情の表現であることが多い。

○「これは君が飲むんだよ」こう言って緒方がまたそれを置きかえようとする、
女は、

「こんな強い^{きつ}のいやよ」とその手をおさえた。(暗夜行路・前 86)

○「あのような人はいやです」と言うと、「あなたは好きです」ということを、ひそかに、けれどいつそうつよく表現することになるのでな。(出家とその弟子 188)

○教室を荒されるのはどの先生もおいやだろうから、音楽教室に電灯をひいてもらって、あそこでやってみたらいいじゃないですか。(人間の壁・上 286)

「いやな」が連体修飾語として、本来感情の対象であるはずの事物を表わす名詞にかかっているばあい、感情の主体がぼやけて、「いやな」が名詞のあらゆる事物の属性表現のようにになっているのではないかとみられる例がしばしばみられる。

○野菜の味が浸み込み、肉特有のいやな匂いもぬける。(週刊東京 1956年9月22日 61)

○耳をかたむける者はいやしないが、何しろ、イヤなやつであることも事実ですよ。

家庭の方だって、二十年も離婚もしないで別居しているんですからね。(文芸 1956年10月 168)

もっとも、すべての感情形容詞が属性表現の性質を帯びることがあるともいえない。たとえば「すきな」「きらいな」「ほしい」などは、いつでも感情の主体になる特定の人が存在していることが必要であろう。それが表現されていないなくても、背後に存在する感情の主体がはっきり想定されうる。

○さう云う裏も表も承知のうへで、信之はこの青年を愛してゐた。殊にいま目の前に好きな女とつれだつて、埃風のなかでキリキリ舞をしてゐるのを、自動車の窓からちらと見ては、微笑しずにははられなかつた。(多情仏心・前 348)

○學術の粋をあつめて飛躍すべき時代は来れり、一日も躊躇すべきにあらず、嫌いな學問にも、深く利益が埋蔵してあるぞ。(総長就業と廃業 351)

○おくみは自分のお錢かねで坊ちやんに欲しいものを買つて上げた。(桑の実 50)

これらの感情形容詞は、属性表現化することの起こりにくいものであろう。

1.2.3 感情と属性の両面をもつ語

さらに、ある一つの形容詞がごく普通の用法の範囲内でも属性と感情の両面をあわせてもって、両グループの中間に位置づけるのが妥当だと思われるようなものもある。さきに、1.0 で日本語の形容詞が属性形容詞と感情形容詞に2分されることを述べたとき、両方の性質をあわせもった、中間的な語もあることを問題点として残したが、それをここで取り上げてみよう。

この問題は時枝誠記によって指摘され、論じられている。実際の語例としては、次のようなものが示されている。^{<注>}

<注> 『古典解釈のための日本文法』(至文堂、1950) 53ページ

- (イ) 主観的表現の語——ほしい、のぞましい、恋しい、はずかしい、うらめしい、なつかしい
- (ロ) 主観客観の総合的表現の語——こわい、にくらしい、さびしい、暑い、すどい、面白い
- (ハ) 客観的表現の語——高い、赤い、はげしい、早い、堅い、細い

(イ)の「主観的表現の語」がここでいう感情形容詞に相当し、(ハ)の「客観的表現の語」

が属性形容詞にあたる。(ロ)の「主観客観の総合的表現の語」がここで問題としている、両方の性格をあわせもった、中間的なものの例である。1.1 にあげた諸基準からみると、(ハ)の語のうちで「のぞましい」は感情の主体をなす人が主語になることはなさそうなこと、「～がる」の形がないこと、によって感情形容詞に属さないことになる。また、(ロ)の語のうちで、「すごい」は同様の理由によって感情形容詞の面を認める必要がなく、(イ)に入れてよい語のように思われる。その他の語については筆者の立場もこの3分類に一致する。

上の語例にははいていないが、別の論文では「おかしい」も、(ロ)にあたるグループの例としてあげられて^{<注>}いる。1.1 の諸基準からみても、「おかしい」は感情形容詞の面をもっているが、それと同時に属性形容詞の面ももっている。「おかしい」と対比される「こっけいな」は属性しか表わさないところに、両語が区別されるたいせつな対立点の1つがあると考えられる。(分析例2)

<注> 時枝誠記「語の意味の体系的組織は可能であるか」(京城帝大文学会論纂第2輯日本文学研究の中, 1936)

また、「かわいい」も感情と属性を表わす形容詞のグループに属するが、「かわいらしい」「あいらしい」「かれんな」は属性だけを表わす点で、上と同様な対立をしている。(分析例3)

「かわいそうな」「きのどくな」「あわれな」「ふびんな」などの、あわれみ・同情の感情を表わす語も、一方ではあわれむべき対象の属性を表わすことがあると思われる。「みじめな」「ひさんな」などは、あわれみ・同情をさそいやすいような対象の属性であるとは言えようが、感情そのものを表わすことはないようである。

1.3 感情形容詞の下位区分

1.3.1 感情と感覚

感情形容詞のなかを、言語的な手がかりによって、さらに下位区分することはできないであろうか。

ここでかりに「感情」と「感覚」と呼ぶことにする区別が、対象語になり得るものの範囲を考えることによって成り立つと考えられる。

「感覚」を表わすとみられる形容詞のとり得る対象語は、具体名詞に限られ、しかもほとんどのものを表わす具体名詞に限られる。ことを表わす抽象名詞や名詞句を対象語にとることができない。(環境Ⅴ～Ⅶ)ものを表わす具体名詞が感覚の対象を表わしている例として、次のようなものがある。

○背負つた鉄帽の細紐が痛かつた。(野火 103)

○身体の下に展べた、ごわごわの布がいたい。(婦人生活 1956年11月 214)

○家に帰ることが、むしろに厭になってしまった。人間の生活とは、かくまでも他

しいものなのか？ ベンチに下駄をぶらさげたまま横になっていると、星があんまりまぶしい。(放浪記 277)

○その夕方、彼女が帰り支度をしていると、隣席の一条先生がくわえ煙草のけむたその顔を向けて、小さな声で言った。(人間の壁・上 205)

資料内には例数が少なく、適当な例はないが、「毛がくすぐったい」「たき火がけむたい」のような表現もありうるだろう。

○其処には又此れも春のやうな日に騙されて、疾から鳴かなく成つて居た蛙がふわりと浮いてはこそつばい稲の穂に捉りながらげらげらと鳴いた。(土・上 135)

では被連体修飾語になっている「稲の穂」というものは、「こそつばい」という感覚の対象である。

「感情」を表わすとみられる形容詞も、ものを表わす具体名詞が対象語になることは少なからずある。(環境Ⅴ)

○東京で吸う赤い味噌汁はなつかしい。(放浪記 122)

○海が見えた。海が見える。五年振りに見る尾道の海はなつかしい。(放浪記 220)

○大一郎は小麦団子が好きであつたと今は十八の青年をまだ十一二の子供の様に思ふて(思出の記・上 123)

○民さんは野菊が大変好きであつたに野菊を掘つてきて植えればよかつた。(野菊の墓 54)

○「俺も煙草ほしいおもたところけど、煙草買うてくるか」(真空地帯・上 50)

しかし、感情のほうは感覚とはちがって、人を表わす具体名詞が対象語になる語も多い。(環境Ⅵ)

○先輩が可懐しければ其細君までも可懐しい。(破戒 153)

○嘉門と私といふ露悪者の組では、この咲子が女神であつたといへよう。私もまた咲子が好きであつた。(冬の宿 55)

○お礼の方は今いらっしゃるお勤めの倍は差上げるつもりです。私の着るものの相談役なり、秘書としてのお礼は別なのよ。私、どうしてもあなたが欲しいのね。(帰郷 178)

○あなたはあのお子がいとしくはないのですか。(出家とその弟子 117)

○「駒子が憎いつて、どういふわけだ。」(雪国 136)

また、ことを表わす抽象名詞や名詞句も対象語になる形容詞が多い。(環境Ⅶ)

○しかしさう思つて見れば見る程、杉子の桃のつぼみが今にも咲きかけてゐるやうな感じが、実になつかしかつた。(友情 61)

○旧街道が昔ながらの松並木に縁どられて村まで白く続いて見えるのはなつかしく、(厚物咲 41)

○娘は何も知らずに、木下がやさしい性情が好きなのだと思ひ取つては、そのやうに

ならうと試み、木下がさつぱりした性格を好むと思ひ取つては、男のやうになつて働きもした。(河明り 335)

○お島はさうした男達と一緒に働いたり、ふざけたりして燥ぐことが好きであつたが誰もまだ彼女の頬や手に触れたといふ者はなかつた。(あらくれ 5)

○このごろ、朝の寒さはなかなか厳しい。伸子は氣疲れが出た故か、毎朝床離れが辛かつた。(伸子・上 61)

○わしは仏像と面を見合わせてすわるのがつらいのだよ。(出家とその弟子 27)

感覚を表わすとみられる形容詞は、人やことを表わす対象語をとらないとききに述べた。「美人がまぶしい」「おやじがけむたい」「あの人に会社をやめられたのがいたい」などとは言うことがあろうが、こういう場合、形容詞は本来の感覚を表わす意味からは転化している。

以上、対象語になりうるものについて、感覚を表わす語と感情を表わす語の間に相違のあることを述べた。このことと関係の深い、表裏をなす事実であるが、ほかに両者の相違を考えるための手がかりがある。

その1つは、これらの形容詞の「(連体形) + こと」の形がもつ意味の相違である。

○日曜に妻子を親類へ無沙汰見舞に遣つた跡で、長火鉢の側で徒然としてゐると、半生の悔しかつた事、悲しかつた事、乃至嬉しかつた事が、玩具のカレードスコープを見るやうに、粉々と目まぐるしく心の上面を過ぎて行く。(平凡 7)

において、「くやしかったこと」「かなしかつたこと」「うれしかつたこと」は、自分の生活上におこつた内容、展開をもつた出来事をさしている。次の例でも「こと」は内容をもっている。(環境Ⅷ)

○葉子は嬉しい事でも云つて聞かせるやうにかう云つた。(或る女・前 108)

○併し世はそれぞれに荆棘も花もつと云つたやうなもので、零落の今の身の上にも満更嬉しい事の無いではなかつた。(思出の記・上 30)

○あなたも悲しいことを考えないで、心を強く保っててください。(出家とその弟子 130)

○先生は毎日一度ずつこの箱を開いて、みんなのお手紙を読みます。だから、面白いことを一杯書いてちょうだい。悲しいことでもいい。(人間の壁・上 91)

感覚を表わす形容詞のばあいは、このような意味の「(連体形) + こと」の形を作ることはない。たとえば、

いたいことも 忘れて 呼んだ。

ねむいのを がまんして 仕事をする。

かゆいのを こらえる。

における「……こと(の)」の形は、感覚が生起した事実そのものを表わすもので、「いたさ」「ねむさ」「かゆさ」におきかえることができる。さきの「うれしいこと」

かなしいこと」などは「うれしさ」「かなしさ」にはおきかえられないものであった。

1.3.2 感覚を表わす語の下位区分

感覚を表わす形容詞の数は少ないが、次にのべる言語的な手がかりによって、さらに下位分類を試みることができる。

感覚を表わす形容詞は1.3.1でみたように、感覚をよびおこす外界の物を対象語として表わすことがあるほかに、

わたしは 歯が 痛い。

足が だるい。

のように、その感覚を感じる体の部分が、「～が」の形で言い表わされることもしばしば見られる。(環境Ⅷ)

感情を表わす形容詞は、「《体の部分》が～い(だ)」という環境には生起しないという点でも、感覚を表わす形容詞と相違が見られる。(感情は感覚と違って、ふつう体のある一部分で感じられるという性質のものではないからであろう。)[「さびしい」は感情を表わす語だと思われるのに、「《体の部分》がさびしい」の例がある。

○間食はあまりやらないが、口がさびしいので、ウメ干し飴をしゃぶり、くだものをほしがる。(家の光 1956年1月 131) <長寿のおばあさんの話>

○しかし最初は、口もとがなんとなく寂しくなりますから、その場合はハッカパイプをくわえたり、仁丹や飴をなめて気をまぎらわしてください。(主婦と生活 1956年7月 462) <禁煙の話>

○杖を持たないと、手が寂しいやうな気もするが、何だかひどく伸々として自由だった。(波 343~344)

これらの「さびしい」は、感情を表わすいちばん普通の用法と違って、感覚的な刺戟が欠けていて物足りないことを表わすものとして、別に考えてよいものであろう。

感覚を表わす形容詞が、体の部分を表わす語をとっている例として、次のようなものがある。

○私は頭が痛いので、途中からかえしてもらおう。(放浪記 180)

○葉子は呕気をもう感じてはるなかつたが、胸元が妙にしめつけられるやうに苦しいので、(或る女・前 121)

○高貴の姫君はいくら頬べたが痒くても人前では決して指をふれず、(暮しの手帖 1956年 33号 192)

○乳房はくすむつたかつた。(或る女・前 62)

○ブラブラ歩いてみるうちに、土産物の重みで手がだるくなつた。(生まざりしならば 184)

これらは体のある部分に感じられる(全身的に感じられることもあるが)感覚であっ

て、局所的に位置づけられうる感覚を表わす語だといえよう。^{<注>}

<注> こまかくみれば、示される感覚部位のこまかさ・くわしさも、語によって段階の相違があるようである。「いたい」と「くるしい」とは肉体的または（および）精神的な苦痛に関係する点で共通するところが考えられようが、「いたい」は感じる体の部分は表面・内部をとわずさまざまな所にわたり、またこまかい部分でもよい。少し例をあげてみよう。

○尚も、腫を見据ゑると——さうすると眉と眉との間が少し痛かったが——（田園の憂鬱 67）

○懐中電灯の光りもガスの渦巻で異様な感じを与える。眼がいたい。のどが痛い。（文芸春秋 1953年10月 178~179）

○坊ちゃん、さつきはまた少し歯が痛くてむつがつて入らつたのが、やつとおまざれになつて、（桑の実 128）

○転んだ時、逆についた左の手類が少し痛いだけで、他はなんともない身体を、（真知子 205）

○はアはア息が切れ、足はもげて了ひさうだつた。跳び乗つて腰かけると、尻の肉がジンと痛かつた……（多情仏心・前 166）

○行介は自分の足の痛いのも忘れて立上り、いきなり駿を引張り起した。（波 332）
以上のほかにも、頭・額・眼・胸・心臓・腕・下腹部・腰部・膝・足首などが「いたい」と感じる体の部分として示された例がある。

これに対して「くるしい」は、肉体的な苦痛に関して使われるばあいにも、「いたい」のように体の部分が示されることはほとんどない。しいて求めれば次のような例がある程度である。

○「どうした、お婆さん？」ここが苦しいのだと、うめ女は申訳のように喉をさすってみせる。（厭がらせの年齢 299~300）

○「おお、苦し。あんまり笑うて、ここんところが苦しなつた」

と少女は胸を押へた。仕事着の色褪せたセルの縞が、胸のところだけ巨きく動いてゐる。

「ここんところが痛うなつた」（潮騒 39）

ふつうには「胸がくるしい」「腹がくるしい」ぐらいで、あまりこまかい部分については言えないだろう。以上の相違は「いたい」と「くるしい」の意味を考えるのに参考になるだろう。

これらの形容詞は、

（体の）どこが〔いた、かゆ〕いのですか？

からだじゅう〔いた、だる〕い……………〔かゆ、くるし〕いところ

などの環境にも現れうるものである。具体例でこのことを示唆するものを次にあげよう。

○「痛い、何処。何処が痛いんだ。脚が痛んで来たのか。」(波 337)

○その晩は早く帰つて、ぐつすり寝たけれども、翌日も翌々日も全身がだるくつて堪らなかつた。(波 238)

上にみたのは、からだの色々な部分はその感覚をもよおす可能性のある、そういう種類の感覚を表わす形容詞のグループであった。だからこそ、感覚部位が「～が」の形で表現される積極的な理由があるわけであった。

感覚を表わす形容詞であって、「《体の部分》が～い」の環境に生起しない語として、「まぶしい」「まばゆい」「うるさい」「けむたい」(Aグループ)や「ねむい」「ねむたい」「あつ(暑)い」「さむい」(Bグループ)がある。

Aグループは、感覚を受ける体の部分が、感覚の性質上、特定のところにきまっている性質のものだといえよう。「眼がまぶしい」「耳がうるさい」などと体の部分を限定して表わす必要があまりないのであろう。ただし、「眼にまぶしい」「耳にうるさい」のように「～に」の形で感覚部位が示されることがある。

○細君が、台所へ引き下ったので、羽根田は、茶の間の縁側に、座布団を持ち出してだいぶ南へ回った太陽が、眼にまぶしいのを我慢しながら、柱に背を寄せた。(自由学校 284)

この形は「いたい」などにもある。

○速力計の針が六十五哩と七十哩の間をちらちらすると、車全体が陰る生きものになつて、(中略)椰子林の中の足高の小屋も、樹を切り倒してゐる馬來人の一群も、総て緑の奔流に取り込められ、その飛沫のやうに風が皮膚に痛い。(河明り 304)

Bグループの「ねむい」「あつい」などは、体の特定の部分に感じられる性質のものではないために、「《体の部分》が～い」の形をとることはあまりないのであろう。

<注> 「さむい」については、用例全体からみて数はごく少ないが、次のように感覚を生じる体の部分の表現された例がある。

○藁の上に横ろむで居ると、背は寒いが、面や腹は焚火に暖まつて、(思出の記・上 63)

○「おい、帽子帽子」

成程、頭が寒かつたが、振り向も答へもせずに、一生懸命走つた。(多情仏心・前 165)

○この年齢になりながら、足は炬篋の外に出していた。のぼせ性である。手だけが寒いのだ。(厭がらせの年齢 299)

「さむい」は全身的に感じられることが多いが、上のような例をみると体のある一部分に感じられることもあり得ると言えそうに思われる。

渡辺実「語彙教育の体系と方法」(『講座正しい日本語』第四巻語彙編, 明治書院, 1970)には,

さむい——直接の接触感覚を伴わずに感じる低温

つめたい——直接の接触感覚を伴って感じる低温

という規定が示されている。「さむい」は接触感覚を伴わないから、多くのばあい
に全身的に感じられるが、上に例をあげたようなやや例外的なばあいもあるのだと
考えると説明がつけられるようである。

2. 属性の主体と内容

2.0 はじめに

形容詞の表わす性質・状態などには、その性質・状態などの主体がある。その主体に
なりうるものの種類・範囲は、語によってさまざまである。その違いは形容詞の意味内
容と密接な関係にあるはずであるから、形容詞の意味をしらべるには、まずそれがどう
いう主体の属性であるか、ということが、大切な観点になりうるはずである。

ここで「主体」というのは、ある属性の所有者、ある属性の帰属するものごとという
意味である。動詞の表わす動作には、動作主という意味での主体のほかに、動作をうけ
る相手や動作の客体なども重要な要素になっているばあいが多い。しかし、形容詞の表
わす属性は、多く静的なものであり、他に積極的に働きかけるとい性質のものではな
い。したがって、形容詞のばあい、属性の主体という観点は、意味分析のための主要な
手がかりであるときえ言えるであろう。

実際の用例を資料として属性の主体を調べるには、具体的には次のような形をとるこ
とになる。

- 1 問題の形容詞と主述関係で結びついている名詞であって、主体——属性の関係にあ
るものを調べる。また、形容詞が主語なしに述語的に使われているばあい、形容詞の
表わす属性の主体を文脈などから推定する。
- 2 問題の形容詞と連体修飾関係で結びついている名詞のうち、主体——属性の関係に
もとづくものを調べる。
- 3 問題の形容詞の連用形が、連用修飾関係で結びついている動詞のうち、主体——属
性の関係にあるものを調べる。ここで「主体——属性」という用語は一般の用法から
は、ずれていると思われる。動作のようすを表わす形容詞のばあい、どういう種類の
動作のようすであるかを調べたいので、動詞の表わす動作に対しても「主体」という
用語をあてはめようとするわけである。

属性の主体をおもな手がかりにしなが、ら、形容詞の意味内容をしらべていこうとするのにあたって、まず非常に大まかな意味分野を考えてみよう。まず、有形の物体・物質のもつ種々の感性的な属性を表わす形容詞のグループが考えられる。また、精神的、社会的な存在である人間に特有の性質・態度・行動のようすなどを表わす大きいグループがある。(人間の主観的な感情や感覚を直接に表わすグループは構文論的にも大きい特徴をもつので、「感情形容詞」として他の「属性形容詞」に対立させた。) そのほかに、抽象的なことの属性を表わすグループ、もの・人・ことにわたって抽象的な性質・関係を表わすグループも考えられる。以上の大きいグループのそれぞれから、いくつかの小さい意味分野(の一部分)をえらび、2.1 以下でしらべてみた。(2.3 「人に関する属性」については、2.3.0 に述べるように、やや違うやりかたになっている。) 理想目標である体系的記述には遠く、各意味分野の中で意味の系列を考えて意味を体系的にとらえる糸口をさぐる、という程度に止まってしまった。

この部分の作業は実は研究期間の終りの段階に近くなって始めたために、具体的に取り上げえた意味分野がわずかに止まった。「はじめに」の「目的・方法と経過・反省」の中に記したように、最初の計画であった、意味分野を限定せずに広く語と語を区別する特徴をみつけて記述する作業が難航したために、方向をかえていくつかの意味分野をともかく具体的にしらべようとしたものである。上記の、語の意味を区別する特徴の記述は80項目ぐらいしかできなかつたので、それ自体を分類・体系化しても意味が薄いため、「分析例」の名で一括し、第1部「形容詞の意味の諸側面」の中のどこかに関係づけて、その場所から参照するような形にした。

属性の内容のうちで、「程度」と「評価」などの側面については、多くは3と4に取り出して扱う形になったが、それは便宜的にとった形であって、本質的にはそれらも内容の一部をなしていると考えられる。

2.1 広汎なものごとの属性

2.1.0 はじめに

まず、形容詞の中で、もっとも広汎なものごとになつて使われる類から考えてみよう。物体についても、人間や動物についても使えるし、無形のことについても広く使われるような形容詞である。

この類の形容詞は、その意味がものごとを外から規定するものであって、ものごとの具体的・実質的な性質に直接関与するものでない、という傾向をもっている。「青い」「すっぱい」「くさい」のような、特定の感覚器官に対応するような性質や状態ではないこともいうまでもない。それだからこそ、広く有形・無形のものごとを主体とすることができるわけである。

この類の形容詞は、名詞がものをあらわしても、人をあらわしても、ことをあらわし

でも、自由に結びつのが原則である。言いかえれば、この類の形容詞に対しては、名詞は下位区分される必要がないわけである。

2.1.1 存在

ない

ものごとの存在に関して、その否定をあらわす「ない」は、形容詞のうちで使用度が最高位にある語である。

「ない」の主体になるものごとは、きわめて広汎にわたる。空間に位置をしめて存在する具体物から、単に思考の対象としてのみ存在する抽象的なものにわたって、広く使われる。

○「おや、手榴弾はどうした」

「ない」(野火 160)

○こちら側にはまだ雪がなかつた。(雪国 83)

○たゞ、水道がないのが一寸困るわね。(桑の実 27)

○風は無かつたが、甲板で仕事をしてると、手と足の先きが播粉木のやうに感覚が無くなつた。(蟹工船 34)

○鉢甲の山と、鬼場の杣道にはその日、夜にいても敵の動きがなかつた。(落城 28)

○だがそれは、貴様の靈魂とはなんの関はりもない、ほんのくだらないお茶番さ…。(多情仏心・前 344)

○こんな風^にに人の言^いなり放^題になる人間、自由の考えというもの^の全^くな^い、個性のな^い、信念のな^い人間。(人間の壁・上 192)

○帰つてきた嘉門は、人の世話で勤めに出るやうになつたが、僅かな給料はほとんど妻の手に渡^ること^がな^かつた。(冬の宿 20)

ただし、人や動物など、自分でうごくものが、ある場所に存在しないことは「ない」ではなくて、「いる」の否定の「いない」で表わされるのがふつうである。

○しかし、それでも、二人を振り返るような者は、誰もいなかつた。(自由学校 61)

○私が村の入口からこの屋根を見た時、たしかこの鳥はありなかつた。(野火 75)

もっとも人間について「ない」が使われている、次のような例もある。

○原に人間はなかつたが、草は私が生きてゐた時見たと同じ永遠の姿で、私の周囲に靡^いてゐた。(野火 179)

○仲田に味方する者は誰もなかつた、(友情 76)

○母親がないからですよ。一ツ林さんマザーになって下さい。(放浪記 204)

こういうばあいは、非存在(あるいは非所有)という面が強く浮き上り、その主体が人間であることがとりたてて表現されていないものといえよう。これらの「ない」は「いない」に一応おきかえることができる。

また、生きている人がある場所に存在しないのではなくて、在世しないという意味では、「ない」が使われる。ただし文章語的なニュアンスがつきまとう。(連体形は文語形の「なき」が使われることが多い。)

○前に述べた任立政等が胡地に李陵を訪ねて再び漢に戻つて来た頃は、司馬遷は、既にこの世に亡かつた。(李陵 202)

○だれからもほんとうに愛されているという信念を持ってない謙作は、わずかな記憶をたどって、やはりなき母を慕っていた。(暗夜行路・前 63)

なお、植物は、一般の物体と同じように「ない」が使われる。

○野が展けた。正面は一軒で林に限られたが、右は木のない湿原が尻ひろがりに遠く退いた先に、(野火 11)

○今時分、月見草なんかかないことよ。(波 76)

2.1.2 異同・関係など

異同・関係などを表わす形容詞のうちで、次の語について、以下に述べるような面からしらべてみたい。

(a) ひとしい、おなじ、そっくりな

(b) 反対な・の、ぎゃくな・の、あべこべな・の、さかさまな・の

(a)(b)にあげた形容詞(など)の表わす属性が成り立つためには、かならず2つ(以上)のものごとが存在しなければならぬ。そして、それらのものごとがいずれも主体の形であらわされることも、一方が主体として、他方が主体とくらべられるものとしてあらわされることも、いずれも可能である点が特徴的である。

たとえば「ひとしい」を取り上げてみよう。きのうもきょうもある時刻の気温が20度だったばあい、

きのうの温度と きょうの温度は ひとしい。(きのうときょうの温度はひとしい。)のように、双方を主体として「と」で並列させた形の文が成り立つ。また、

きょうの温度は きのうの温度と(に) ひとしい。

のように、一方を主語とし、他方を「～と」「～に」の形の対象語としてあらわした文も成り立つ。さらに主語と対象語とを入れかえた、

きのうの温度は きょうの温度と(に) ひとしい。

という文も成り立つ。すなわち、

$$F(x, y) \supset F(y, x)$$

という、対称の関係(symmetrical relation)が成り立つ。それは、「ひとしい」が、基本的には二者のどちらからみてもかわりない相互的な性質をもった関係を表わす語

であるからにはかならない。
^{<注2>}

<注1> こういう「と」の性質については奥津敬一郎「対称関係構造とその転形」(『日本語研究』国際基督教大学語学科日本語研究室刊, 1967)に、転形文法による分析がある。なお、この論文では広く諸品詞にわたって、このような性質をもった語を「対称関係語」と呼んでいる。

<注2> 鈴木重幸「日本語文法・形態論1」(『教育国語』No.12, 1968—3)

「ひとしい」についてみたことは、この類の他の語についても原則的には同様にいえることである。すなわち、

AとBが へい(だ)。

AがBと へい(だ)。

BがAと へい(だ)。

の3つのタイプの文が、同じ事実関係をあらわすのが原則である。それは、これらの語が対称関係の性質をもった意味を表わすことにともづく。

ただし、主語と対象語を入れかえた文が実際にも自然な文として成り立つことは、あまり多くはない。それは、くらべられる二者が同類のものでないなど、性質がちがっているためであろう。

なお、「おなじ」「ひとしい」については、移行的関係(transitive relation)も成り立つのが原則であって、これらの語義の特別な性格を示している。たとえば、

Aさんは Bさんと 年が同じだ。

Bさんは Cさんと 年が同じだ。

から、

Aさんは Cさんと 年が同じだ。

ということも言える。つまり、

$$F(x, y) \cdot F(y, z) \supset F(x, z)$$

が成り立つ。「ひとしい」についても同様である。(3.1.3 「比較表現と形容詞」も参照)

ひとしい

○左のポンプと、右のポンプの流量は等しくなければならないのか、それとも、すこしぐらいい食いで違ってもいいのか——などという問題がそれである。(人工心臓を体内に 368)

は、「AとBがひとしい」というタイプの、くらべられる双方をあわせて主体にしているものである。「AがBと(に)ひとしい」というタイプの、一方を主体とした用例とみられるものを次にあげよう。

○またこの電波のエネルギーは、実に数十億個もの太陽が持っている融合反応の全エ

エネルギーに等しい。(宇宙の謎はどこまで解けたか 97)

○今の例で見ても、非ユークリッド幾何学の立場をとれば三角形の内角の和は必ずしも二直角に等しくない。(哲学以前 191)

○入口の柱にかゝつた寒暖計は夏と等しい温度にのぼつてゐた。(真知子・前 123)

○これが、ひどく、上等な、洋式便器である。彼も、赤坂に住んでいた頃は、これと等しいものを用いていたが、(自由学校 361)

○バッホーヘンがヘーゲルと等しくロマン主義の流れに属しながら、(日本及日本人 1954年4月30)

これらの例では、主体をとりかえた「BがAと(に)ひとしい」というタイプの言いかたも、むりに作れないことはなさそうである。たとえば、「真知子」の例であれば、夏の温度もその時の温度とひとしかつた。

のように。しかし、

○野坂参三は、独立の国家として、自衛のための戦力をもたない点是不合理であるとして、自衛権放棄に均しい第九条の規定に反対した。(世潮 1954年2月61)

のような例になると、主体を入れかえることはほとんど不可能になる。

第9条の規定は 自衛権放棄に ひとしい。

という文は成り立つが、

* 自衛権放棄は 第9条の規定に ひとしい。

という文は成り立たない。それはくらべられる2つのものが、性質のちがうものだからであろう。さらに、

○すると、その隙間からはすぐ、日の光が投げつけるやうに、押し寄せるやうに、沁み渡るやうに、あの枯木に等しい薔薇の枝に降り濺いだ。(田園の憂鬱 32)

○それだのに騎士が野盗に等しい振舞ひをすることは……(波 106)

のような例になると、「～にひとしい」は、比喩を表わす形式に近いものになる。

ばらの枝が 枯木に ひとしい。

騎士のふるまいが 野盗のふるまいに ひとしい。

の主語と対象語を入れかえて、

* 枯木が ばらの枝に ひとしい。

* 野盗のふるまいが 騎士のふるまいに ひとしい。

のような文をつくることができなくなるのは、このような「～にひとしい」は「～のようだ」「～みたいだ」に類する意味になっているからであろう。

「ひとしい」はそのほかにも、

○親類や朋輩達の事あれがしな眼が等しく葉子に注がれてゐるのを葉子は痛い程身にかけてゐた。(或る女・前 84)

のように「ひとしく」の形で「いっせいに、そろって」のような意味をあらわすものや、

○社会党の反対意見は、少数の故に何の力にもならなかった。この場合、少数党というものは無きに等しかつた。(人間の壁・上 315)
のように「なきにひとしい」の形で慣用句化している用法もある。

おなじ

「おなじ」が「同一であること」を意味するばあい、たとえば、

○僕は驚いた。同じモデルを使って描いたという二つの画があまりにも別だからだ。
(芸術新潮 1956年8月 209)

○十一年間同じ監督でやっているなんというのは、アメリカにだって滅多にありゃしない。(野球界 1956年1月55)

のようなばあいには、他の何かと比べるのではなく、それ自身と同一なのであって、対象語はとらない。

「おなじ」が、2つ以上あるものが、あらゆる点で、またはなにかの点で差がないことをあらわすばあいは、原則的には対称的關係をあらわす語だといえよう。「AとBがおなじだ」というタイプの例としては、

○西洋と日本とにては気候風土も同じからず、(貧乏物語 14)

○しかも、左右両方のポンプから毎分送り出される血液量は、同じでなければならぬ、などという条件も明らかにされた。(人工心臓を体内に 369)

のようなものがある。また「AがBと(に)おなじだ」というタイプの例としては、

○それだと、年間千八百億円で、丁度、ワトキンス報告と同じです。(ダイヤモンド 1956年9月18日 17)

○このとき、でき上った二つのDNAは、もとの塩基の並び方とまったく同じはずである。(生命の暗号を解く 160)

○と説く芹沢氏も、チャード教授と同じ立場をとっている。(学問の動き 253)

○この官庁利用型は、メン類外食券食堂型と同じくあまりロマンチックではない。
(小説の泉 1956年1月 145)

○だが、小者は三十年以前に仰せつけをうけたまま、今日も昨日に同じように城内をはききよめている。(落城 14)

のようなものがある。AとBを入れかえた文を、おわりの「落城」の例について作ってみると、

昨日も今日と同じように城内をはききよめていた。

ようになる。

そっくりな

「そっくりな」の主体であるものとよく似た、くらべられるものは「〜と」「〜に」

の形であらわされる。

○夫婦なんて、いい加減なものだよ。個人と社会との関係と、ソックリだ。(自由学校 371)

○その側で、半分裸の火夫達が、煙草をくはへながら、膝を抱へて話してゐた。薄暗い中で、それはゴリラがうづくまつてゐるのと、そつくりに見えた。(蟹工船 108)

○あそこにお父様の横顔にそつくりな影が、いま時分になると、いつも出来るのよ。(風立ちぬ 142)

○茂木は、上着なしで、蝶型のネクタイを結び、顔も、体つきも、松井翠声という漫談家にソックリだった。(自由学校 93~94)

○が、二重瞼の愛くるしい眼は、どう見てもきぬ子にそつくりだった。昂子と違ってこれがこゝの主婦だった。(波 146)

主体を入れかえた言いかたは、多くのばあいに不自然になり、成り立ちにくい。しかし、たとえば最後の「波」の例から、

きぬ子の眼は 昂子の眼に そっくりだ。

という文を無理に作れないこともあるまい。対象語における「と」や「に」の格表示が消えて、「そっくり」が接尾語的に使われることがある。

○出来上った機械は、まるで大砲そっくりである。(未知の星を求めて 325)

なお、「～を」の形の対象語をとった珍しい例がある。

○「そら、あすこに、あの雲はあなたの顔をそつくりよ」

「あはゝゝゝ。武子さんに逢つては敵ひませんね」(友情 53)

反対な(の)

「大きい」と「小さい」は 反対だ。

Aさんと Bさんは 立場が反対だ。

のような文における「反対な」は、対称的な関係をあらわしていると考えることができる。第2の文から、

Aさんは Bさんと 立場が反対だ。

Bさんは Aさんと 立場が反対だ。

という文も導くことができる。

実際の用例では、上のようなタイプにちょうどあてはまるようなものはなかなかみつかからない。

○そうすると学校PTAは、P(父母)とT(教師)とがまるで反対の立場をとることになる。(人間の壁 324)

○いまだに二つの反対な気持ちだが、自身の中でぶつかり合うのを腹立たしくも情けなくも感じた。(暗夜行路・前 186)

などは「AとBが反対だ」のタイプに準ずるものと考えることができよう。また、「AがBと反対だ」のタイプにあてはめて考えうる例として次のようなものがある。

- 駒子は、あのいやな時代を思い出し、顔をしかめたが、平さんまでいやにならなかつた。五百助とは**反対**に、コチコチと、瘦せて見える体格だが、(自由学校 125)
- 造士学校といふのは、我育英学舎とは正に**反対**の主義を執る保守党の学校だ。

(思出の記・上 129)

- だが、諸岡は全然それと**反対**な、極端に意地の悪い見方をしていた。(小説倶楽部 1956年4月 123)
- 数馬は幼い頃からの親友で、藤次郎のおっとりした性質とは**反対**に鋭い才気を持ち、挙措動作も際立っていたし、五人組の中では群を抜いた美男であった。(傑作倶楽部 1956年5月 118)

主体と対象を入れかえることを「自由学校」の例について試みれば、
五百助は平さんとは**反対**に(ふとっている)。

のようになろう。

なお、不賛成の意味での「**反対**な」は、次の例のように「～に」の形の対象語をとる点でも、上にみた「**反対**な」と区別される。

- 教師だけが新教委法に**反対だ反対だ**と言って騒いでも、PTAの父母が賛成したらどうしますか。(人間の壁・上 324)
- お父さまは、その中にゐて、はつきりと戦争に**反対**で御立派だつたんです。(帰郷 254)

ぎゃくな(の)

- 私は立ち上り、昨日この橋を**逆**に渡つた時のやうに、銃を斜めに構へた。(野火 87)
 - 私は**又逆**に頁をはぐり返した。さうして一枚に一句位づゝの割で**倒**に読んで行つた。(こゝろ 146)
 - それに水流が**逆**だし、清水を下方から入れ、汚水を浮かして上から流すから効果があり、溢流(オーバーフロー)といわれるのである。(婦人公論 1956年6月 320)
- のような例では、ある動きの方向が、ある基準の方向と**反対**であることをあらわしている。これらは「さかさ(ま)な」「あべこべな」におきかえられないし、「**反対**な」におきかえてもしっくりしない。「10から1までぎゃくにかぞえる」の「ぎゃくに」も「**反対**に」「さかさ(ま)に」「あべこべに」におきかえにくい。

○安川は非常に外国崇拜であつた。それで、時々かへつて気持が**逆**に動く伸子は、その時も、

「どこまでもリパブリックね」
と笑つた。(伸子・上 84)

- しかしそれほどに会いたいといわれて、指定の場所へ出てきていいとまでいったそうだが、心が弾んでこないで逆に沈んで行く。(むらぎも 301)
- 自由とか民権とかいう考えにもとづいて、議会を作ったり、自治制度を作り出すことをしなければならなかった。西洋とは、その発展の仕方がいわば逆である。(もの見方について 138)

のような例では、物理的な動きはないが、心理的な方向などが反対的なことをあらわしているといえよう。

- しかし、「ぎゃくな」がいつも方向的な要素を含んでいるとはいえないようである。
- 従って逆ないい方をすれば、さつき賞に出走出来なかったようなウマはダービーでは用がないともいえる。(娯楽よみうり 1956年6月8日 32)
- 日本の女ぐるむ不幸に対して強い女はない。弱いやうでみて強いのだ。日本の男が強がつてゐては、実は一様に意気地なかつたのとは逆なのだね。(帰郷 280)
- 彼がもし逆に吉田班長よりも上の位置にいて、そのような行動が許されていたならば、きっと実行したにちがいない。(真空地帯・上 110)

などでは、抽象的にもせよ方向性のニュアンスがあるとは必ずしもいえないであろう。

あべこべな(の)

「反対な」「逆な」にくらべて、やや俗語的な語だといえよう。

- 急いで別れて行く高柳を見送つて、^{あべこべ}反対な方角へ一町ばかりも歩いて行つた頃、斯の噂好きな町会議員は一人の青年に遭遇つた。(破戒 258)
- 彼等が帰つた時は^{あべこべ}反対に威勢がよかつた。(土・上 151)

のように「あべこべな」が「反対な」の熟字訓として使われている例もある。(上の例のほかにも、同様な少数例があるが、それらはいずれも上と同じ「破戒」「土」の作品の用例である。)

- 「そんな、あべこべの話はありませんわ。先生のお宅なんですもの。先生が家にお入りになって、皆さんに帰って頂けばいいのです。」(週刊新潮 1956年5月8日 70)
- 事実とアベコベの見えすいたウソを陳述しているのは、少少どうかと思われる。(映画の友 1956年10月 103)

のような例をみると、「あべこべな」は、ものごとの正しいあり方と反対であるという否定的な評価を伴っているようにも思われる。

右と左をあべこべにたびをはく。

ごはんとみそしるの位置があべこべだ。

のように、対称的でない、pair をなすものが正しい位置と反対になっているばあいも、「あべこべな」がふさわしい文脈である。しかし、はじめにあげた2例や、

- 先生はおまへに弔辞の読方をいろいろ教へたが、あべこべに先生は、今日のはじめて

本当の弔辞の読方といふものをおまへから教はつたよ。(波 48)

○陳恵順が「強盗奴にだまされてなるものか」と小さい胸の中でくりかえしているとき、あべこべに、かたわらのお母さんの顔からはだんだん緊張の色がうすらいで行くように見えた。(改造 1954年2月 201)

のように、よくない評価を伴っているとはいえない例もある。

さかさ(ま)な(の)

具体的なものについていうばあいは、次の例のように、上と下とが正常の位置とは反対になった状態をいう。

○逆さまに映る三層の楼阁を囲んで、陽を受けた枝の影が水に描き出されている。(帰郷 263)

○透明なガラス瓶をさかさまに土の上に立て、(それいゆ 1956年 41号 66)

○バケツに水を入れてふり廻すと、バケツが逆さの位置のところでも、水が落ちて来ないのと同じことである。(文芸春秋 1953年8月 182)

次に、

○「僕は学校へ来る道で生徒に会うと、こちらから先に、(吉田君、お早う)といつてやります。すると生徒もうれしそうに、先生お早うと答えます」

「あら、だって、さかさまだわ。親の方から先に子供にお早うと言うのは逆じゃないですか」(人間の壁・上 186)

では、人間の上下関係からみて、普通と反対だという意味で、ものの空間的な位置の上下が逆だという用法の延長線上にあるともいえよう。

○私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与へて呉れない此長い手紙を自烈たさうに畳んだ。(こゝろ 147)

は運動の方向に関して使われているが、手紙のおわりからはじめへの方向を下から上への方向になぞらえたものとするのはこじつけになる恐れがあろう。こういうばあい、現在いちばんふつうの言いかたは「逆に」であろう。

2.1.3 普通でないこと

かわった、へんな、みょうな、奇妙な、珍妙な、異様な、おかしい、めずらしい

これらの語の意味に共通する要素として、「普通と違っている、ありふれていない」ことを仮定しよう。

かわった

動詞「かわる」の「～た」「～ている」の形が、「普通と違っている」という意味で

形容詞的に使われる、1つの意味・用法をもっている。

そして、「普通と違っている」という、この語群に共通な要素に、特につけ加わったものがない、いちばん中立的な語としての役割を担っていると考えられる。したがって形容詞ではないが、ここに加えて他と比べるのが便宜であろう。

○聞いて見れば留守中、別に是ぞと**変つた**事も無かつた様子。(破戒 177)

○別れる時の先生は、又**変つて**ゐた。常よりは晴やかな調子で、(こゝろ 84)
などは「いつもと違っている」とパラフレーズすることもできる例である。

○「隆文さんの服、**変つた**生地ね」(自由学校 58)

○角帯前掛と云ふ**変つた**こしらへのボオイたちも、まづ一服といふところで、カアテンの蔭に姿をかくして了つた。(多情仏心・前 25)

○来る客も**変つた**いろいろな種類の人間が来た。(暗夜行路・前 13)

○ところが信州といふところは**変つた**国柄で、僕のやうなものには是非談話をして呉れなんて——(破戒 158)

などの例にみられるように、「かわった」は「普通と違っている」ということだけが必須的な要素であって、いいとかわるいという評価などは伴っていない。「へんな人だ」というとよくない評価を伴った表現になるのを避けて、「かわった人だ」とえん曲に言うことがあると思われるが、それは「かわった」が評価的に特徴づけられていない点を利用するものであろう。

へんな

「普通と違っている」ということが意味の中心であるといえようが、多少ともよくない評価を伴っていることが多いようである。

○急に彼女の帽子のわる口を云い出した。「型が**変**だし、色もよくないよ。」(真知子・前 158)

○定まつた人もないのに、子供なんか生んだりして、ずるぶん**変**な女だと思ひになつたでせう。(波 223)

○お袋は手術に立ちあつたので、**変**な臭ひが思ひ出されて、米の飯なんか見るだけでも胸が悶へさうだと云つた。(本日休診 115)

○「だって、あの小母さん、**変**なことするんだぜ」

「何を？」

「僕の口ん中にキャラメルなんか入れるんだもの……」(波 351)

○だから、今の先生たちは子供に**変**なことばかり教えるとか、親孝行を教えてくれな
いとか、先生の威厳が足りないとか、いろいろな文句を言う。(人間の壁・上 122)
のような例は「へんな」のありふれた用例だといえようが、いずれもその「普通と違っている」性質に対する非難など、よくない評価をなにがしか含んでいると思われる。

かわった味がして おいしい。

という文はまったく自然であるが、

*へんな味がして おいしい。

という文は成り立たない。「へんな」と「かわった」とはこの点で区別される。

ただし、「へんな」に伴うよくない評価は強いものではなく、存在するかどうかも疑わしいようなばあいもある。たとえば、

○東京へ着いたのは其日の午後^{たは}の三時頃だつたが、便^{たは}つて行くのは例の金時計をぶら
垂^{たは}げてゐたといふ、私の家とは遠縁の、変な苗字だが、小狐^{こぎつね}三平といふ人の家だ。

(平凡 57)

○良寛、ちょっと私の笈を見てくれ。最前杖があつた時に変な音がしたののだが、も
しかすると……(出家とその弟子 55)

のような例では、よくない評価が伴っているとはかならずしも言えまい。このように「普通とは違っている」という特徴だけでも説明に矛盾を来たさない例も、少しは存在する。

以上に述べたのは「へんな」の、主として述語的用法または連体的用法についてであった。「へんに」の形で連用的に使われるばあいも意味の中心にかわりはないが、よくない評価を伴わない使い方は少いとはいえないようである。

○変に利口で……学生らしくなくて、何て云ふのでせう？(帰郷 100)

○本心の明かでない、その癖変に相手の感謝を強ひるやうな佻の返答は、伸子の心を暗くした。(伸子・上 198)

などは非難的な場面の中で「へんに」が使われている。しかし、

○静岡で東京の新聞を買ったが、出てからまるで見ない東京新聞が変になつた。 (暗夜行路・前 215) <改造社『志賀直哉全集』でも「東京新聞が」とあり、「東京の新聞が」とはなっていない>

○器量は、君は不服だらうが、十人並よりは美しい方ださうだが、性質は無邪気で、快活で、一緒にゐるとへんに人を愉快にさせる性質をもつてゐて、身体の随分いい人ださうだ。(友情 25)

○併し帰りの汽車の中にはひと、あんなに荷厄介にした乳呑児ではあるが、何か忘れものをして来たやうな気がして、変に腕のまほりがさむしかつた。(波 148)

などでは「理由がよくわからないぐあいに」のような意味に解しうる。そして、よくない評価とは関係がない。

なお、「へんな」の強調的な形として「へんでこな」「へんでこりんな」などがある。これらは文体上は俗語的である。用例はいずれもごく少ない。「へんな」のよくない評価の面が強まるとは限らず、むしろ、ややこっけい味が増えられることもあるよう

である。

- 「意地が悪いつて、ま、およそあなたくらの意地の悪い方もめつたにないね。何もさうへんてこにおやぢやばらないたつて……」(多情仏心・前 215)
- 要するに見れば見るほど変てこなところが、馴たんなまぜの傑作とでも言うのであろうか。(私の人生観 70)
- ファンレター・日に十通位。なるべくお返事する様にしていますが、兄への手紙と一緒にみたいな変てこりんなものが多くて困ります。(映画ファン 1956年5月 91)

みょうな

- 一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場処を描写することが、頗る自分の詩興を喚び起すも妙ではないか。(武蔵野 30)
 - 帰りも矢張凡その方角をきめて、別な路を当てもなく歩くが妙。(武蔵野 21)
- のように、ひじょうにすぐれている、すばらしい、の意味に使われることは、現代語としては少なくなっており、かなり文章語的な文体に限られた意味として残存しているに止まっている。そして現代語では「へんな」にかなり近い意味に使われるのが普通である。すなわち、やはり「普通と違っている」という特徴が意味の中心だといえよう。
- 事件は如此かくのごとくにして一見妙な然も普通な方法を踏んで終局が告げられた。(土・上 152)
 - でも、妙なものだなア。へんだなア、代理の家庭教師なんてもの(むらぎも 5)
 - 伸子は、漠然、あたりに妙な雰囲気きもちの醸されてゆくのを感じ、居心地よくなかつた。(伸子・上 115)
 - 第一妙なものばかり食べさせられてこりごりした。(桑の実 121)
 - 所が帰つて見ると叔父の態度が違つてゐます。元のやうに好い顔をして私を自分の懐に抱かうとしません。それでも応揚に育つた私は、帰つて四五日の間は気が付かずにゐました。たゞ何かの機会に不図變に思ひ出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。(こゝろ 164)
- 上にあげた例の中には、よくない評価を伴っているともみられるものがいくつかある。しかし、
- 人間といふものは妙なもので、若い時に貰つた奴がどうしても一番好いやうな気がするね。(破戒 65)
 - 「なんだか、留守中に、フイと、南村が帰ってきそうな気がするんですよ。妙ですわね」(自由学校 304)
 - 人間どうなつても、煙草なしぢや、生きて行けねえ。情況が悪くなればなるほど、煙草をほしがるから妙だ。(野火 100)
- のような例には、よくない意味は認めがたい。むしろ、普通と違っていて、その理由を解しにくいという意味合いが感じられ、「ふしぎな」や「おもしろい」にやや通ずるば

あいもあるとみられる。「へんな」には、弱いながら、よくない評価を伴うと一応認めたいけれども「みょうな」は評価とは無関係だと考えておきたい。

「みょうな」の連用修飾の形「みょうに」は、「へんに」と同様に、「普通と違ったぐあいに」「理由のよくわからないぐあいに」のような意味で、よく使われる。

○先生が最後に付け加へた「妻君の為に」といふ言葉は妙に其時の私の心を暖かにした。(こゝろ 28)

○フォクスルで起重機の音がかすかすに響いて来るだけで、葉子の部屋は妙に静かだった。(或る女・上 191)

○帰る時玄関の白い花が、また妙に彼の心を射た。(波 68)

○「一寸失礼」

木村の辭で、こんな時まで妙によそよそしく断つて、古藤の手紙の封を切つた。

(或る女・前 202)

文体的にみて、「みょうな」は「へんな」に比べてやや文章語的ではないかと思われる。しかし、小説の会話文の中でもかなりよく使われている。日常会話の中でも、たしかに使われているとは思われるが、くわしく調べれば使う人がやや知識的な層に傾くというようなことはあるかもしれないと想像される。

なお、「みょうな」の強調的な形として、「みょうちきりんな」という俗語がある。例は次のひとつしかない。

○妙ちきりんな組み合わせだった。三十五歳くらいの背の高い男と、このやせた小さな縞の着物の少年とは、貝塚を探検して、古代の世界を掘りだそうということになった。(旧石器の狩人 308)

きみょうな

ひじょうにかわっていて、その異常さはややこっけい味を帯びた種類のものであることが多いようである。

○彼は机の向う側で外出証の整理をしている曾田を笑わせようとして、奇妙な声を出したが曾田は笑わなかった。彼は笑いをこらえた。(真空地帯・上 200)

○煙草道楽の彼には毎日交代で刻みと巻煙草を吸ふ奇妙な癖があつた。今日は巻煙草の番である。(潮騒 102)

○しかし、サルとキリシタンというのは、なんとも奇妙な組みあわせである。(高崎山 18)

○三十四年の伝統をもつエコノミストには、時に奇妙な慣習がある。その一つは、部員の敬称を「君」とか「さん」とかいわずに「老」と呼ぶことだ。(エコノミスト 1956年4月14日 82)

ちんみょうな

おかしき・こっけいさの要素がはっきりと含まれているといえよう。用例は次にあげる2つしかない。

- 今度の国会では“乱闘ならざる乱闘”が行われ，“暴力ならざる暴力”がふるわれるという、**珍妙な**ことがしばしば起りました。腕を肩より上にあげてはいけな。ナグるのも、ケルのももちろんご法度。しかし「コブシでなで、ヒザですすれ」というのです。(サンデー毎日 1956年6月10日 16)
- いまの津上にとつたらそんな事より、田代の提案である二十余頭の牛の大名行列の方がずつと興味があつた。記事にもなるし、写真にもなる。少くとも街の大きな話題にはなる。その**珍妙な**情景を、酒とウイスキーのちやんぽんで少し痛くなつた頭の芯で、津上は大切に描いたり消したりしてゐた。(闘牛 88)

いような(異様)

字義からみると、「様子が普通でないさま」(岩波国語辞典)のように、「ようす」ということが強調されている語であるようにみえる。しかし、現に使われている意味としては、かならずしもそうであるとはかぎるまい。やはり「普通と違っている」ことを意味の中核とするグループの一員として考えられることはいうまでもない。

- 二本の指先が盲腸をさぐる。と……その指先に**異様な**ものが触れた。取り出してみると——縫針なのである。驚いた博士は、傷口をひろげて、(週刊新潮 1956年7月10日 24)
- 隅の椅子に凭れて、股火鉢をしながら何かを噛んで口を鳴らしてゐた女が二人立ち上つて、愛嬌声を立ててきたが、この**異様な**容をみると、そのうち、のびほほけた断髪をした円顔の若い方の女は、また元の席にかへつてしまつた。(冬の宿 111)
- 実際此の巨大な異国人の感じは一種**異様な**驚くべきものであつた。(青銅の基督 66)
- 伸子は、**異様な**音響を聞いた。何処か遠いところで一声、急に、鋭く、長い尾を引つぱつて汽車が鳴つたと思ふと、一時にあつちでもこつちでも、太い、唸る、顫へる無数の汽笛が鳴り出した。音の林立といふ感じであつた。(伸子・上 36)
- 土方たちは彼をじっさい『親分』と呼んでいた。百姓のあいだでこれが声にされると、それは無気味で**異様な**なびきで私の耳に聞かれた。(むらぎも 186)

これらの例からうかがわれるように、「いような」は驚きや気味わるさ。恐れを感じさせるような異常さをさしていることが多いようである。「きみょうな」が、こっけいさを感じさせるような異常さをさすことが多いのと対比しうるだろう。次のような対比の中にも、その差が感じられる。

異様な風体の男／奇妙な風体の男
異様な声を出す／奇妙な声を出す

異様な建ても／奇妙な建てもの

おかしい

意味の主観的な側面が中心になると、感情形容詞として使われる（分析例2）が、ここでは客観的な側面が中心になった「おかしい」が問題になるわけである。

分析例2でも引用した例であるが、

- 女達が私の顔を見てクスクス笑って通って行く。頬紅が沢山ついているのか知ら、それとも髪がおかしいのかしら、私は女達を睨み返してやった。女ほど同情のないものはない。（放浪記 29）

の「おかしい」を、「髪」を主体とする属性の表現とみることができよう。このような「おかしい」は、「ふつうでない」という要素のほかに「人を笑いたくさせるような、こっけいなようす」という要素が加わっているとみることができよう。（似たような例を若干、分析例2に引用してある。）

次に、

- 「私何かか体の様子が可笑しいんですよ。きつと然うだらうと思ふの。」（あらくれ 75）

- 同僚たちのたたくキーの音がはげしい騒音となって気持をいらだたせる。手首の腱もおかしくなってくる。（文字を読む機械 386）

のような「おかしい」は体の調子などが普通でなく変調であることをさし、こっけいさとは関係がなくなっている。

- 学校も家庭もあらゆることを子供に教へるのに、このことに限つて教へないといふのは、実にかかしな話である。（波 319）

- こういう次第で、若し制度の運用に少しでもおかしいと思うことがあつたら、あなたはいつでも文句を言わなければいけない。（もの見方について 199～200）

のような「おかしい」は、あることがらが、理に合っていない点で普通でない、という意味合いであろう。

次に、

- 一たい、この二階がをかしい。私がこゝへ来てから、もう一月半以上にもなるのに、階段を伝つて、二室ある筈のそこへ出入りする人を見たことがない。（河明り 279）

- 「それにしては、そんな金が、学生ばかりで即座に自由になるのは可笑しいぢやないか。」（帰郷 225）

- 二三十円くらゐのもんなら、はしただけ払ひ残しになつてゐるつてこともあるだろうが、七百何十円なんて……、どうも少し可^お訝しいなア……（多情仏心・前 351）

のような「おかしい」は、不可解さやいぶかしみ・疑いの要素が含まれている。

めずらしい

次の3つの特徴を含んでいると仮定しよう。

- (1) 普通と違っている、ありふれていない
- (2) 人の関心をひく
- (3) 価値が高い

まず、

○金はいくらでも出すから思い切って一つ珍しい料理をしてみてください。(貧乏物語 80)

○「あちらのお珍しいもの、随分おありなのですつて。」

「整理がいたら、そのうちお目にかけませう。」(真知子・前 25)

のような「めずらしい」は、上の3つの特徴をかねそなえているとみられる。「お珍しい品をいただいて、ありがとう」のようなばあいも、この意味である。

○堂々たる丸裸となって、洗い場へ降りると、今度は、浴客のすべてが一様に、眼を上げた。なんしろ、珍らしい巨体である上に、ポチャポチャと、白桃の皮を剝いたような、掻き傷一つない、美しい肌が、目立つのである。(自由学校 216~217)

○先に行つた山瀬が、何か珍らしい茶話のつもりで続けてゐるであらう余計な饒舌に就いて、真知子は漠然とした不安を感じた。(真知子・前 138)

などでは、(3)の特徴は消えて(1)(2)から成り立っていると解しうる。また、

○二人は赤く灯のついた、ガス・ストーブの陳列場を、向ふの洋家具部の方へ抜けようとしてゐた。そこはめづらしく人があまりゐなかつた。(真知子・前 156)

○深夜の二時、三時ごろに歩いて帰宅するというのも、別に珍しいことではない。

(生命の暗号を解く 164)

などになると、(2)も弱まって(1)が主になっているといえようか。

なお、「まれな」との対比において、次のような分析も試みた。

数(2以上)

まれな／めずらしい (分析例4)

量的／質的

まれな／めずらしい (分析例5)

2.1.4 危険・害の有無

- (a) 危険な、あぶない、あやうい、安全な
- (b) 有害な、無害な

(a)(b)にあげた語について、その主体になるものの面からしらべてみたい。

危険な

この語のあらゆる属性の主体には2種類があると考えられる。ひとつは、のぞましくないことを身に受けそうな存在が主体になるばあい、この意味の主体は人間であることが多い。

○自動車の衝突した場合、正面にまっすぐかけてゐる客は危険だ、となにかに書いてあつたのを思ひ出したからであつた。(真知子・前 205)

○彼奴をどうしてもやつつけなくては、この身が危険だ。(近代映画 1956年7月 140)
もう1種類の主体は、のぞましくないことを人に及ぼしそうなものであって、こういう主体には広汎なものになり得る。

(もの)

○患者、保菌者の唾や痰から呼吸器によって感染します。また食器やおもちゃ、手ぬぐい、ハンカチーフなども危険です。(主婦と生活 1956年8月付録 診断と治療全集 164)

○長吉は危険な剪刀は妻の手から取つて、後の方へやつて、(生まざりしならば 191)

(人)

○御自分はとにかくとして、真知子さんまでそんな危険な人物に紹介するなんて。

(真知子・前 142)

○かうして私は国家に有用であると同じ程度に、敵にとっては危険な人物になつたが、(野火 88)

○シャベルの跡と鶏鳴——この結合から私に來た觀念は「比島人」であつた。つまり我々侵入者を懲らしめようと、常に用意してゐる危険な存在であつた。(野火 51)

(こと)

○打つのも殴るのもよいが眼の見えぬお人のすることは危険だ(春琴抄 191)

○なにしろ女遊びは火をもてあそぶよりも危険ですよ。(出家とその弟子 165)

○もしその危険な出来事が、車内で二度ぶつ突かるとか、転がるとか以上に結果したならば。(真知子・前 205)

○結核菌より物凄い伝染力、子供に危険な新病発見で、親たちをギョッとさせたミトキノプラスモーゼ。(文芸春秋 1953年8月 111)

○だから知性と結びつかない道徳は危険です。(人生手帖 1954年5月 8)

○国民的文化の特質によつて世界を征服せんとするのは、他のすべての帝国主義と等しく甚だしく危険な妄想である。(人格主義 151)

あぶない

「危険な」と同様の、2種類の主体をとる。

○謙作が代数の試験であぶなかつた時などは石本は自身の試験勉強をあとにして、徹夜で彼にそれを教えたりした。(暗夜行路・前 42)

○「俺が自動車で送つてやるからもうちよつと待たないか」

「おい、ちよつと、君、女中さん、藤代を気をつけてやつて……」

「あなた、あぶなうございます……」(多情仏心・前 162~163)

などではのぞましくない事態にあいそうな人が主体になっている。

のぞましくない事態をひきおこしそうなものも主体になる。広汎なものが、この意味での「あぶない」の主体になり得ると見られる。(人の例は資料内にはみあたらなかったが、あり得ると思われる。)

(もの)

○「段々があぶなくてよ。時任さん。」とお加代がついて来た。(暗夜行路・前 107)

○だつて海は危ないぢやないの。この辺の海は荒いから船がひつくり返つたら助かりやしないよ。(生まざりしならば 188)

(こと)

○「(前略)少年の一人旅はあぶない、胡麻の蠅がついてね」(思出の記・上 166)

○だからおれは家から女を放すことは危ないと云つたのだと、りきを暇さへあればいぢめた。(あにいもうと 139)

あやうい

「あぶない」「危険な」とは、文体に関して文語的である点でまず区別される。

○しかしてこの強者をおさえかの弱者をたすくがためには、彼はほとんどおのれが身命の危うきを顧みざる人である。(貧乏物語 165)

のような文語調の中では「あやうい」がよく調和する。

「あやうい」の主体になるものは、次にあげる例のように、存立をおびやかされる側のものであるのが普通なようである。

○彼の心は冷えきっていたが、それがそのまま相手につたわるならば彼の存在はあやういのだ。(真空地帯・上 71)

○いま考えてみれば彼もまた木谷が軍法会議におくられることは、自分の身をあやうくすることだったので、不安におそわれていたにちがいないのだ。(真空地帯・上 194~195)

○何、遠慮をしねえで浴びるほどやんなせえ、生命が危くなりや、薬を遣らあ、(高野聖 13)

○懐中から例の新聞を取出して展げてみると——蓮太郎の容体は余程危いように書いてあつた。(破戒 74)

ただし、「君子はあやうきに近寄らず」という文語的な慣用句は別に考えた。次の例の初めの方にはこの慣用句が使われており、終りの方の「危うさ」は危害を与える側のものをあらわしているが、これは上の慣用句を受けて使われているので除外して考えた。

○だから君子は初めよりその危うきに近づきません。知者は、自身の身の安全の失わ

れない範囲で女の色香をたのしみます。あなたのは身をもって、その危うさの中に飛び込もうとするのです。(出家とその弟子 165)

現代語では「あぶない」と「あやうい」とは文体的な違いを別として、かなり同義的になっているように思われる。しかし、「あぶない」は危害や危難がどういふものであるかがわかっているようなときによく使われ、「あやうい」は存在がおびやかされてこれからどうなるかわからないようなときによく使われる、というような傾向のちがいがあられるかもしれない。「あやうい」が、「あぶない」とちがって、危害を及ぼしそうな側のものが主体とならない(なりにくい)のは、上のような意味上の微差がもし認められるものならば、それと関係のあることがらであろうと考えられる。なお、

○恭介は焼火箸でも刺しまれるような痛みを肩の傷口に覚えたが、洩れそうになる呻き声を、危うく喉で抑えた。(読切小説集 1956年3月 88)

のような、連用形「あやうく」の用法は、「かろうじて」のような意味で副詞化しているとみられる。

(漢字表記のばあい、「あぶない」「あやうい」両様に読める例も少なくない。ここでは、かながきや、ルビ・送りがななどから読みのわかる例だけについて考えた。)

安全な

危険がない、あぶなくない、という風に否定を使って規定することができ、その主体に関しても「危険な」「あぶない」と同様である。

○駒子も、自由は欲しても、可能性をはあくするだけで、満足する点がないでもない。そこが、中年女の安全なところであるが、(自由学校 270)

○タイヤは膨れて丸かったから、上から見ては陰になっていても、タイヤの曲線と路面の直線とでできた角のあいだで足そのものは全く安全なだった。(むらぎも 215) は危険を受けない主体(人や人体の部分)が表現された例である。

危険を与えない主体が表現された例は、もの、人、ことにわたってみられる。

(もの)

○安全なニスとエーテルの混合液のザボンがいつの間にか危険な重クロムサンの酸液と入れ換へられてるたりしてゐるのが、(機械 11)

○必ずしも、この谷間が安全でなくなってきたからです。(自由学校 325)

(人)

○いや、常習強盗の方が、無用な殺傷をしないだけでも、安全かもしれない。(自由学校 276)

○だからサルとしても、長い間には「この人種はわれわれには危害を加えない安全な人種である」と安心して、(科学読売 1956年4月 54)

(こと)

- 彼は防衛庁長官にこっそりと膝づめ談判して自分の子や孫は安全な勤務にまわさせるに決っています。(人生手帖 1956年2月 31)
- 飲みたくなったら時は宿直室で一杯やるのが、一番安あがりでもあり安全でもあった。(人間の壁・上 114)
- その出発があと三日になつた十月十五日に、木村は、船医の興録から、葉子は如何しても一先づ帰国させる方が安全だといふ最後の宣告を下されてしまった。(或る女・前 222)

有害な、無害な

害を与える(与えない)ものが主体としてあらわされる。主体になるものは、もの・人・ことにわたって広いと思われる。

(もの)

- 「しかし物質については大に制限の問題が必要である。人格の発展に有害なる無用の物質の堆積もしくは所有欲を制限すること——この精神を教へるところに、人格主義が現代社会に対して働きかけなければならぬ一つの重大な使命がある。(人格主義 58)

(人)

- もし彼が無害な人間であるとしたなら、それは一般に感傷的な人間は深くはないが、無害であるといふことに依るのである。(人生論ノート 117)

(こと)

- しかも無理解な同情は迫害より以上に有害である。(哲学以前 39)
- 木谷のいんでいる考えが、まことに軍隊の神聖なる秩序を維持する上に於てこの上なく有害であると認められるのであります。(真空地帯・上 225)
- 多分に唯心的な作品と唯物的な作品とが背中合せにならんでいる総花性が有害であると信ずるため脱会するという。(中央公論 1956年6月 114)
- 毎日習慣的に飲むのが有害なので、時たまどつきりは差支へないといふ学説があるとかで、(群像 1956年10月 73)
- 酒が脳卒中とあまり関係が少ないと云ふ事は酒は飲み飲み茶釜でわかすのではなく、紳士の晩酌は無害といふ事である。(文芸春秋 1954年5月 270) ㊦

「有害な」ものは、食品であるばあい、人物であるばあい、思想であるばあい、害の内容や害の与えかたなどは大いに違ふであろう。しかし、人間にはなんらかの悪い作用を及ぼすという点は共通で、それがこの語のあらわしている内容だと考えられる。

2.1.5 その他

抽象的／具体的

けがらわしい<きたない, きたならしい, 不潔な(分析例6)

「けがらわしい」は有形のものや人をも, 無形のこともを主体とするが, その意味内容においては, 抽象的・精神的な不潔さしか表わさない。

2.2 ものに関する属性

2.2.0 はじめに

形容詞には, ものに関する属性を表わす語として位置づけるものが数多く存在する。ことに, 基本的だと考えられる形容詞の中に, この類が大きい位置を占めているようである。ここで, ものというのは, 空間に位置をしめ, 感覚によってとらえられる事物という意味である。この意味では, 人間もものに属するが, そのばあい, 人間のもっている, 精神的な面などは特に問題にされていないわけである。

上のことを, より具体的に言えば, 形容詞には次のような性質のものが, 基本的なものとして数多く存在しているということになる。ものには, 大きさ・色・形・目方・温度等々の多面的な属性があるが, それらのうちのある側面をぬき出して, その側面に関する性質を表わす形容詞が多く存在しているということである。上に例示したような属性は, 抽象的なことは持ち得ないもので, このグループの形容詞はものの実質的・内容的な性質を規定するものだといえよう。

ここで「ものに関する属性」と呼ぶものは, 感覚のはたらきでとらえられるという点で, 具体的な性質だということができる。人間の内面的な性格などのように, たんに五官を働かすだけではとらえられない抽象的な属性にくらべて具象的・感性的である。そして, このような形容詞の意味分野は抽象的な分野よりも, その体系をとらえることも, 可能性は大きいであろう。もの世界は, 自然科学が明らかにしてきたように秩序・法則のある世界であって, 言語の世界もそれを何らかの形で反映して独自の体系をそなえているだろうと予想される。

ものに関する属性(以下, ものの属性と略称する)は, 人間の感覚をはなれてはあり得ないものである。たとえば人間の視覚・聴覚のとらえる光の波長・音の振動数は一定の範囲に限られていることからわかるように, 人間の視覚・聴覚をはなれては色や音の世界はなく, ただいろいろな波長の光や, さまざまな音波が存在するにすぎないのであろう。

しかし, われわれは色や音を, われわれの外部にある状態としてとらえており, それが言語にも反映して, 色や音を表わす形容詞も, 多くは客観的な属性を表わす形容詞として発達しているのであろう。しかし, ものの性質を表わす形容詞の中には, 同時に感覚を表わすとみられる語もある。たとえば温度に関係のある形容詞のうちの「あつい」「さむい」は, 次のような例では, しいて求めれば大気がその主体として想定され, その温度が高い・低いということが表わされているとみられる。

○夏の暑い盛りになつてから、鶴さんは或日急に思立つたやうに北海道の方へ旅立つことになつた。(あらくれ 75)

○「わたし、今日起きたせいだから、暑いくせに何だか風が寒いやうな気がするのよ。」
(つゆのあとさき 113)

○桜が咲いてから寒い日が続き、日は照つてゐて外気は冷えてゐた。(帰郷 144)

○この岡さんがこの寒いに手欄から体を乗り出してほかんと海を見とるんです。(或る女・前 127)

ところが、次のような例では人間の個人的・主観的な感覚を表わしているとみるべきであろう。

○^{くら}慥に太つて居りますから、最うお可憐しいほど暑いのでございます。今時は毎日二度も三度も来ては^{あせ}るやつて汗を流します。(高野聖 43)

○自分の這入る蚊帳を覗くと、坊ちゃんはお暑いのだと見えて、枕をはづして横の方へおあばれになつて、お腎をすつかり出してお出でになる。(桑の実 135)

○私は濡れてゐたし、寒くて仕方がなかつたのでまた炬燵に入つて暖まつた。(冬の宿 76)

○あなたお寒くはありませんか。夜分はたいそう冷えるようになりましたね。(出家とその弟子 109)

人間の感覚器官は、環境の状態を認知して、それに適応した適切な行動をとっていくための手がかりとしての意味をもっている。^{<注>}したがって、感覚は外界の物の状態と密接な関係にあり、この両面が同一の形容詞で表わされることがあるのであろう。1.3.1「感情と感覚」でみたように、感情を表わす形容詞は対象語としてさまざまなものを取りうるのに対して、感覚を表わす形容詞はものを表わす名詞しか対象語にとり得ないことも、ここで思い合わされる。

<注> 相良守次『心理学概論』(岩波書店、1968)19 「行動の手がかり—感覚—」

このグループの形容詞の表わす属性の主体であるものは、いうまでもなく、主語の形で表わされることができる。また、ものと、その形容詞の表わす側面とを、「——ハ——ガ」構文の形式で両方言い表わすこともできる。たとえば「りんご」を例にすると、次のような色々な文を作ることができる。

このりんごは	{	色 が	あかい (あおい, きいろい)	
		形 が	まるい (いびつだ)	
		大きさが	ちいさい (おおきい)	
		目方が	おもい (かるい)	
		手ざわりが	なめらかだ	
		味 が	すっぱい (あまい)	etc.

上のような文例をいろいろなものを主語にして作り、「～が」の形で表われている、

もののさまざまな側面を一般的に表わす名詞を目じるしにして、その側面に関する性質・状態を表わす形容詞を集めることは、ある程度まで可能であろう。そして、ものの属性を表わす形容詞を意味分野によって集める結果になり、一種の体系づけを行なったことになると言えよう。

以上のような意味分野のうちのいくつかについて、2.2.1 以下に記述を試みた。全体からみて一部分を取り上げたにすぎないので、ここではなお、ものの属性を表わす形容詞の一般的な特性と思われる点の1、2についてかんたんに述べておきたい。

a. 主体の範囲・制限

ものの性質を表わす形容詞の基本的なものは、もの一般を主体として広く使われる傾向がある。

ただし、固体・液体・気体のような物質の様態に関連して、おのずから主体になるものにある程度の制限がみうけられる語もある。たとえば「氷」について、「おおきい」「ちいさい」「あつい」「うすい」など、空間的な量を表わす形容詞は用いられ得る。ところが「氷」がとけて液体すなわち「水」になってしまうと、もはやこれらの形容詞は使うことができなくなる。他方「つめたい」「透明な」のように「氷」にも「水」にも等しく使える形容詞もある。

「かたい」「やわらかい」も主体は固体ないし、粘性の非常に大きい液状のものにまでしか使われない。したがって、飲食物を例にすれば、

かたい	}	ごはん	*おもゆ
		うどん	*スープ
やわらかい	}	とうふ	*ココア
		プリン	*カルピス

(Aグループ) (Bグループ)

のように、固形的な「たべる」物を表わすAグループの名詞とは結びつくが、液状の「む」物を表わすBグループの名詞とは結びつかない(結びつきにくい)。逆に、「こい」「うすい」は、

こい	}	おもゆ	*ごはん
		スープ	*うどん
うすい	}	ココア	*とうふ
		カルピス	*プリン

(Bグループ) (Aグループ)

のように、Bグループとは結びつくが、Aグループとは結びつかない。「かゆ」については、

○窓にも得にも起きてゐれなかつたので、薄い粥くらゐを嚙つてごろごろしてゐた。

(多情仏心・前 249)

という例があるが、「かたい（やわらかい）かゆ」ということもあるように思われる。「かゆ」や「くずゆ」などはA・Bグループの中間にあるといえようか。なお「うすい」は「うすいスープ」「うすいみそしる」など、上記のBグループのような液状の食品を表わす名詞と結びつくときは、液体の濃度が小さいこと（あるいは味があっさりしていること）の意味になる。また、「うすいとうふ」や「うすいハム」「うすいようかん」のように、固形的な食品を表わす名詞と結びつくときは、上と同じ意味での結びつきは成り立たないので、「うすい」の別義である、空間的な厚みが小さいことを表わす意味に、自動的にきまる。

温度に関係のある形容詞の中で、「ぬるい」は主に液体について使われる語だと思われる。（分析例7）また、「さむい」「すずしい」は大気の温度や風について使われた例が大部分で、固体や液体には使われないのが原則である。次の例では「雨」「しぶき」に「さむい」「すずしい」が使われており、液体的なものに使われたとみるべき可能性はあるかもしれないが、このような例は用例全体からみるときわめて少ない。

○寒い雨に濡れながら仕事をさせられたために、その雑夫は風邪をひき、それから肋膜炎を悪くしてゐた。（蟹工船 34）

○乳色の涼しいしぶきを蹴って、この古びた酒荷船は、颯々と風を切って走っている。（放浪記 188）

<注>国広哲弥「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」（『構造的意味論』14ページ）にも、このことが指摘されている。

以上の例示からわかるように、ものの属性を表わす形容詞は、物質の様態に関連して、次のようなさまざまなグループに分かれるであろう。

様態について無制限——あかい、あおい、つめたい、あまい、くさい、透明な……
 固体的なもの——おおきい、ふとい、かたい、やわらかい……
 液体——こい、うすい、ぬるい……
 気体——さむい、すずしい……

以上のような、物質の様態に伴う、主体上の制限は、それぞれの形容詞の表わす物理的な性質に伴っておのずと生じるものが多いといえよう。このような制限を別にすれば、ものの属性をあらわす形容詞で、主体の点で狭く限定され、特定のものとのみ結びついて使われるものは、基本的な語の中には見出しにくい。

しかし、接頭語・接尾語のついてきた派生的な形容詞や、漢語を語幹とするナ型の形容詞などには、主体に関して狭く制限されている語が見出される。そういう語のうちで、空間的な量に関する語については2.2.1「空間的な量」の末尾のほうの<主体>（79ページ）に、色に関する語については2.2.2「色」の⑨（89ページ）に記した。それ以外の分野について、ごく少数ながら取り上げてみた語は次のようなものである。

(土地) 平坦なくたいらな (分析例8)

(飲食物) 新鮮なくあたらしい (分析例9)

(刃物) 鋭利なくすどい (分析例10)

また、ものの中での主体の制限ではなくて、生命のないもの対生命のあるものという対立と考えられるものとして、次の諸語を取り上げてみた。

(もの／人など) あたらしい／わかい (分析例11)

() ふるい／としとった、おいた、としおいた (分析例12)

(人・動物／もの) たくましい／がんじょうな (分析例13)

b. 連用修飾法に関して

ものの属性を表わす形容詞は、連用修飾用法では、次にあげる例のように、動作の結果の状態を表わすことが多い。

○白地に紺一色で葉げいとうを大きく染め上げた、すがすがしい柄。(婦人倶楽部1956年5月76)

○大皿の中央に酢魚を小さく盛りつけ、上に煎り玉子をかけます。(婦人生活 1956年8月付録 日本料理 87)

○「討衰」の二字を太く墨で書いた白旗が何十本となく風に動いているが、(人物往来 1956年9月 135)

○鯨に酢味がしみたなら、斜に細く切ります。(婦人倶楽部 1956年8月付録 お惣菜料理 159)

○さめてから薄く切って、バターを塗ったパンに、レタスと一緒にはさみます。(主婦と生活 1956年5月付録 家庭料理全集 198)

○入口の簾の前に五人の海女が、さつきの勢ひをどこかへ置き忘れて、四角く坐つて、簡単服の展覧会を催してゐる。(潮騒 154)

○パンは厚さ一糎弱に切り、ドーナツ型位の缶の蓋で丸く抜いたものと、縦七糎、横五糎位の長方形のものとの二種に切ります。(婦人倶楽部 1956年2月付録 お惣菜料理全集 180)

○眠さうな^{かほ}面をしてふらふらと部屋を出て来て、指の先で無理に眼を押開け、眶の裏を赤く反して見せて、「斯うして居ないと、附着いて了つてよ、」といつて皆を笑はせる。(平凡 73)

○私は青く蘇生らうとする大きな自然の中に、先生を誘ひ出さうとした。(こゝろ71) そのほかに、次にあげる例のように、感覚の内容を表わすこともある。

○その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、(銀河鉄道の夜 258)

また、次の例では「赤く」は「酔う」という動作ではなく、「酔っている」という状態を限定している。

○家庭訪問のとき、赤く酔っている母親の姿を見て、志野田先生は危うく涙がこぼれ

そうな気がした。(人間の壁・上 33)

以上のように、これらの形容詞は、ものの静的な属性を表わすものが多く、それらは動的な動作そのものようすを表わすことはできないのが原則なのであろう。ものの味に関する形容詞も、たとえば「豆をあまくにる」と言えば、「豆をにてあまくする」のであって、「豆をゆっくりにる」などとは違って、「あまく」は「にる」という動作じしんのようなようすを表わすものではない。(ただし、「あまくささやく」のような転義になれば別。)

しかし、次にあげる例においては、「まっすぐに」「まるく」が動作のようすを表わしていると考えられる。

○おとうさんは、自分のほうへ、まっすぐにあるいてくる美しい少女を見て、(婦人生活 1956年4月 298)

○その時、側に横よこさなつてゐた缶詰の空瓶がひどく音をたて、学生の倒れた上に崩れ落ちた。それが船の傾斜に沿つて、機械の下や荷物の中に、光りながら円く転んで行つた。(蟹工船 66~67)

また、「グラウンドをおおきくひとまわりする」「ボールがちいさくカーヴする」などの「おおきく」「ちいさく」も同様である。これらは、運動の軌跡がえがく形や大きさを表現している言いかたであろう。

2.2.1 空間的な量

ものは「延長」をもつ。すなわち、空間の中に位置して、そのある部分を占めている。その占めている量の大小に関係する形容詞として、

(a) おおきい——ちいさい、ひろい——せまい、ながい——みじかい、たかい——ひくい、ふかい——あさい、あらい——こまかい、ふとい——ほそい、あつい——うすい、とおい——ちかい

という、対義関係をなす、一群の基本的な形容詞がある。(「とおい—ちかい」だけは、ものの占めている空間的な量とはいえないが、空間的な量に関するグループにははいる。)

(b) こたかい、うずたかい、ちっほけな、あつほったい、かほそい、巨大な、広大な、微細な、はるかな、……

のような、派生的な語や、(a)にあげた語ほど基本的でない語で同じ意味のグループにはいるものを含めれば、その数はもっと多くなる。

このグループは、はっきりした特徴をわりあい容易に取り出すことができ、それらの特徴によって、(a)にあげた基本的な語だけでも20近い語の意味を区別することができる。以下の記述はすでに行なわれた研究にもとづくところが多い。一部分の特徴につい

ては、用例に基いてややくわしく、「分析例」の形でしらべてみた。

<注> 以下にあげるものがあるが、本文の記述は特に宮島氏のものに基づく所が多い。なお、国広氏の論文に接したのは本文を書き終えた以後であったので、それに啓発された点などを、分析例の終りに2, 3付記した。

宮島達夫「空間的な量をあらわす形容詞」(『言語研究』No. 41, 1962-3, 第45回大会発表報告要旨)

鈴木孝夫「天狗の鼻はなぜ高い」(『言語生活』No. 191, 1967-8)

服部四郎『英語基礎語彙の研究』(ELEC言語叢書, 1968-11)の「大キイ, 小サイと large, big, small, little」以下の諸節

国広哲弥「日本語次元形容詞の体系」(『言語の科学』No. 2, 1970-11)

<量の大小>

まず、程度の観点から、上の(a)にあげた基本的な18語を、それぞれの対義語から区別することができる。これらの18語は、対義語の形ではりあって存在している。そのはりあいの関係は、長さ、あるいは面積、あるいは体積という、空間的な量が、ある基準にてらして大きいか、小さいか、という対立によるものとしてとらえることができる。このような量の大小も、程度の大小に還元させて、3.2.1「程度の大小」で考察した。

<次元>

次に、何次元の量を表わすかによって、これらの語はグループに分けられる。

(1次元) ながい—みじかい, とおい—ちかい, たかい—ひくい, ふかい—あさい, あつい—うすい

上の10語が1次元の量, すなわち長さにもっぱら関係し, 面積や体積を表わすものではないことはいうまでもない。他の諸語は2つ(以上)の次元量にまたがるもので, 次のように分けられよう。

(1・2次元) ふとい—ほそい (分析例14)

(2・3次元) あらい—こまかい (分析例15)

(1・2・3次元) おおきい—ちいさい (分析例16)

ひろい—せまい (分析例17)

上にあげた<量の大小>と<次元>によっては, たとえば「たかい」と「ながい」, 「ちいさい」と「せまい」などの区別はまだできない。そのような区別を可能にする諸特徴を簡略な説明とともに列挙してみよう。

<性質/位置>

これは1次元の量を表わす語に関して, 問題になるものである。

「たかい—ひくい」「ふかい—あさい」は, もの自身のもっている量的な性質を表わすこともあり, また, 他のものとの関係的な位置を表わすこともある。「ながい—みじ

かい」はもっぱら、もの自身の性質を表わす。「とおい—ちかい」は位置を表わすことが多いが、性質を表わすこともある。(分析例18)

「あつい—うすい」「ふとい—ほそい」や、1次元の量をあらわすときの「ひろい—せまい」(間口がひろい、せまい門)「おおきい—ちいさい」(時計のおおきい針、せいがちいさい)も、もの自身の性質を表わし、他のものとの距離によってそのものの位置を表わすようなことはない。

<基準面に対する角度>

「たかい—ひくい」「ふかい—あさい」は基本的には、水平面に対して垂直な線の上における性質である。「ながい—みじかい」「とおい—ちかい」などは、そのような方向性と直接的には無関係である。「ふかい—あさい」の基準面は水平面以外に広げられるばあいも多い。「たかい—ひくい」についても同様なことがある。(分析例19)

「あつい—うすい」は「たかい—ひくい」におけるような、物から離れた普遍的な基準面とは関係がない。しかし、たとえば、「あつい本」「うすい胸」において本の表紙と裏表紙、胸の前面と背面を一種の基準面と考えることができよう。「あつい—うすい」はこのような2つの平行的な基準面の間を、直角の方向にみたへだたりであって、ななめの方向にみたへだたりではあり得ない。

<基準面に対する向き>

「たかい—ひくい」は基準面から上向きの方向に存在する長さであるのに対して、「ふかい—あさい」は基準面から下向きの方向に存在する長さである点で対立している。基準面になるものは地面・水面や室内のゆか・たたみなどである場合が多いが、もっと抽象的な水平面を考えなければならないこともある。(分析例20) また、「ふかい横穴」「あさいざる」のように基準面が水平面でなくなっているばあいは、基準面から垂直方向に、そのものの奥・中に向かって存在する長さが「ふかい—あさい」で表わされる。「たかい—ひくい」は、「たかい(ひくい)鼻」のように水平面以外(このばあいは顔面)が基準になると、基準面から外に向って直角方向に突き出した長さが表わされる。

<測りかた>

「ながい—みじかい」は、測られるものの形にそって測られることが多い。したがって、

○茶小屋を過ぎて少し行くと、往還は平地を離れて、七曲阪といふ螺旋状の長い坂にかかる。(思出の記・上 39)

○図(7)客の動線が短かく店員の動線が長すぎるゝ待たせるゝ型の配置 (商店界 1956年 3月50)

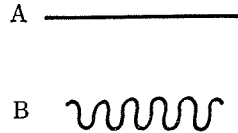
のような「ながい」「みじかい」が表わしているのは直線的な延長の量についてではなくて、曲りくねった量についての表現である。こんがらかって小さいかたまりのように

なった毛糸や、とぐろを巻いたへびも「ながい毛糸」「みじかいへび」と言われ得る。

○その時には四谷の外堀公園から日比谷公園まで、数キロの長さの教師たちの帯ができる。(人間の壁・上 335)

にみえる名詞形「ながさ」は、量の大小に関して中和されていて、単に1次元の延長の量を表わしているが、この例では直線的でない延長を表わしている。「たかさ」「ふかさ」「あつき」「ふとさ」については、このようなことがなく、いつも直線的な延長の量を表わす。

ただし、たとえば右の図のような2本の棒について、棒の形にそって見た延長を問題にして、「Bのほうがながい」ということもあると同時に、その時の関心のもちかたによっては、直線的な延長を問題にして「Aのほうがながい」という



こともあり得ると思われる。「たかいーひくい」「ふかいーあさい」は曲りくねったものについて言うときも、その物の形にそって見られることはなく、つねに事物からはなれた客観的なものさしによって測られる点で「ながいーみじかい」と対立する。

「あついーうすい」「ふといーほそい」は、「たかいーひくい」「ふかいーあさい」とはちがって、重力の方向におけるものさしとは関係がないが、直線的にはかる点ではこれらの8語は共通性がある。

「とおいーちかい」は、

○かれらは羅針盤で方角を知り、遠い岬の山々を見比べて、その較差で舟の位置を知った。(潮騒 14)

○急に丑松の声がした。あをむいて見ると、銀杏に近い二階の窓の障子を開けて、顔を差出して呼ぶのであつた。(破戒 36)

のように直線的なへだたりを問題にしていることが明らかな場合もあるが、

○お住いは、下沢つてえと、あれは、たしか、武蔵間で降りるんですな。あたしは西荻ですから、そう遠かッない。一度遊びに行ってもいいですか。(自由学校 144)

○をばさんから電話がかゝつた時、君江は折よく電話室に近いテーブルのお客と飲んでゐたので、呼ばれるが否や、すぐに立つて電話を聞いたが、(つゆのあとさき 76)のように、通って行く道にそった長さか、直線距離かがかならずしもはっきりしない例も多い。直線距離と道のりが平行的に増減することが実際にかなり多いと思われるが、「東京から京都まで行くのに、東海道より中仙道のほうがとおい」というような場合は、あきらかに道のりを問題にしている。

○爺おやじは須崎へ行くには、陸路は本街道と近道とがあるが、本街道はやゝ楽なかほりに倍も遠く、山越へすれば近いもかほりに大分山がひどく、殊に最早雪があるかもしれぬといふ事を教へた。(思出の記・上 177)

はまさにそういう実例である。けっきょく、「とおいーちかい」は測り方の点で積極的な特徴をもっていないといえよう。

2次元の量を表わす「ひろいーせまい」「おおきいーちいさい」についても、たとえば高低起伏の多い山間地のように、平面でないところの面積を言う場合に、その面にそった測りかたか、水平面に投射された面積への言及かが問題になり得るかもしれない。しかし、「ひろいーせまい」も「おおきいーちいさい」も、どちらの測りかたを表わすというはっきりした特徴がなく、両方のばあいがあり得るのではないかと想像される。

<人の位置との関係>

「ながいーみじかい」は物じしんの形によって、どの一辺の延長についての言及であるかが決まるのが原則であるけれども、人の位置との関係によって規制される側面もあり、この面では「ひろいーせまい」とはりあい関係にある。それは、人間の面し、あるいは進む方向と一致した方向が「ながいーみじかい」で表わされ、それと直角的な方向、すなわち人に対して左右にひろがる方向が「ひろいーせまい」で表わされる傾向である。道や川の幅について使われる「ひろいーせまい」は、道や川自体がいちじるしく細長いものときまっており、その方向に直角な短い辺の長さを表わすものとみても説明がつく。ところが人体の肩・腰などに使われる「ひろいーせまい」は、言及されている辺のほうが体の前後の辺より長いので、別な説明が必要になる。

○葉子は、どしんどしんと狭い階子段を踏みしめながら降りて行くその男の太い頸から広い肩のあたりをちっと見やりながらその後続いた。(或る女・前 91)

その人じしん、あるいは向き合った人にとっての左右の方向へのひろがりか「ひろいーせまい」で表わされるのであろう。門について「ひろいーせまい」が使われるのも、通る人の方向に対する関係によるのであろう。橋もふつう、人の進行する方向の長さのほうかはばより長いのが多いだろうが、逆のものもある。そのときもはばについて「ひろい」と言われるのは、人の進行方向に対する関係によるのであろう。

○この川に木の橋が架かっている。橋は幅の方が長さよりも倍以上ひろい。その橋をわたったところに石の門があり、門の奥に村役場がある。(改造 1954年1月 249)

<物の形と、表現される次元>

(1次元の量)

「ながいーみじかい」は、1次元の量を表わす形容詞の中で、いちばん代表的なものだといえよう。「たかいーひくい」「ふかいーあさい」も「あついーうすい」「ふといーほせい」も「とおいーちかい」も、それぞれの条件のもとにおける「ながいーみじかい」だと言いかえることもできよう。具体的な諸条件を捨象すれば、1次元の延長について、みな「ながいーみじかい」を適用することができる。

もっとも、「ながいーみじかい」についても、ものの形全体について言う場合、正方形・立方体や円・球には言えないことでわかるように、2つの次元の延長が同じものに

は使われないという制限がある。(ただし、1辺の長さのちがう2つの正方形どうしを比べて、「この正方形の1辺はあの正方形の1辺よりながい」とは言える。このように、もの全体の形ではなく、そのある部分だけに注目したばあいはいは別である。)「ながいーみじかい」は、

道・トンネル・ろうか・竹・草・えんぴつ・うどん・ひも・足・指・髪・まつげなど、ふつうはある1辺が他よりずっと大きい延長を持っている物体に使われることが多い。しかし、「ながい顔」のように、たて・よこの比が客観的にはそれほど大きくなくとも使われる場合もある。

「あついーうすい」は3次元の延長をもつものの、最小の長さをもつ次元について、1次元の量を表わす。(第2部の個別的記述「あつい」の〔0〕,「うすい」の〔0〕を参照)板・布・紙や本・雑誌のように助数詞「～枚」「～冊」で数えられるようなものには、よく「あついーうすい」が適用される。

「ふといーほそい」は、断面が円形や四角い形をした、細長い物体の、断面のさしわたし(ないし面積)が大きいか小さいかを表わす。

煙突・樹木・材木・鉄棒・なわ・針金・糸

など、助数詞「～本」で数えられるようなものについては特によく使われる。

○「お豊さん、これ」そう言って登喜子は竜岡が持って来た千代紙の太い紙包みを渡してやった。(暗夜行路・前37)

の「紙包み」は「太い」に修飾されていることから、くるくると巻いた筒のような形のものだろうと推定される。

「ふとい(ほそい)物」の横断面は、上にあげた例にもみられるように、円形・四角形やそれに近いものが多い。(六角形・八角形などの多角形やそれに近い形でももちろんよい。)四角い形などの横断面の、たて・よこの長さの比が著しく違ってくると、「ふといーほそい」が使いにくくなり、「あついーうすい」に取って代られる。たて・よこのバランスが著しく崩れると、長いほうの次元と、もう一つの長さの次元との2次元に大きい延長をもつ形態の範疇にはいるために、そういう形態をもつ物の第3の最小の次元の延長を問題にする「あついーうすい」が適用されやすい条件が生じるわけである。

体のいろいろな部分に関して、「あついーうすい」「ふといーほそい」のいずれが使われるのが普通かをみると、次のようになる。

	首	胸	腕	ての ひら	指	胴	腰	足	足の 甲	毛 筋	ひ ふ	血 管
あつい／うすい		○		○					○		○	
ふとい／ほそい	○		○		○	○	○	○		○		○

上のように、断面が円形的な部分、ないし断面のたて・よこの長さが著しく違わない

部分は「ふといーほそい」、断面のたて・よこの長さが著しく違う部分は「あついーうすい」が使われ、「ふといーほそい」と「あついーうすい」とは補い合うような関係にあるといえよう。

(2次元の量)

「ふといーほそい」は、長い形をした3次元の物体(たとえば柱・足)の長さに直角な面についてだけ、2次元の量を表わすことがありうる。(分析例14)2次元のもの、たとえば描かれた円について、「ふとい(ほそい)円」ということはなく、「おおきい(ちいさい円)」といわれる。

「ひろいーせまい」は野原・運動場・庭・土俵・水面など、2次元のもの、2次元の量を表わす。(これらは第3の次元の厚みなどは問題にならないものなので、2次元のものと考えられる。)だいたい水平的な面について使われることが実際上は多いかと思われるが、次のように相当な傾斜面について使われた例もある。

○妙なところへ、小屋を建てたもので、橋の下から、樹木の茂った地帯までは、どうやら、小径もついているが、大きな柳の垂れ下った先きは、絶壁に近い傾斜で、そこに、猫の額のような、狭い平面を求めて、ムリに、居住を定めたらしい。(自由学校 197)

また、部屋・家などの3次元的なものの、面積すなわち2次元の量を表わすこともある。

「おおきいーちいさい」は、紙・板・黒板・ふとんなど、3次元のもの、面積の大きい2次元の量を表わす。また、庭・影・字など、2次元のもの、2次元の大きさを表わすこともある。(分析例16)

「あらいーこまかい」は、「あらい(こまかい)格子模様」のように、2次元のもの、2次元の大きさを表わすことがある。3次元のものについて、2次元の大きさを表わすことができるかどうかは、よくわからない。(分析例15)

(3次元の量)

3次元の量を表わす「おおきいーちいさい」「ひろいーせまい」「あらいーこまかい」は、3次元のもの、3次元の量についての表現であることはいうまでもない。

「おおきいーちいさい」は、空間的な量を表わす形容詞のうちで、どんな形のものについても、いちばん広く自由に適用される。書物・トランク・テーブル・おけ・建て物などのように、四角い形やまるい形などから構成されている規則的な形のものでも、ごつごつした木の根のような不規則な形のものでも、まったく無制約に「おおきいーちいさい」ということはできる。

<もの数>

「あらいーこまかい」は、主体である物体の数が多数であることが必要条件であるのに対して、「おおきいーちいさい」は1つでも多数でもよく、数に関して自由である。

「あらいチェック」「こまかい花模様」のように、2次元の量をあらわすばあいも同様である。(分析例21)

<絶対的な大きさ>

「あらい—こまかい」は、3次元の量をあらわす場合であれば、「あらい砂」「こまかい塩」などのように、1片1片のかさは非常に小さなものにしか言えない。「おおきい—ちいさい」は「おおきい砂粒」「ちいさいピラミッド」という風に、絶対的な大きさについてまったく制約がない。

「あらい—こまかい」が、たとえば「あらい碁盤目」「こまかい文字」のように、2次元の量を表わす場合についても同様である。

「ひろい—せまい」が2次元の量、すなわち面積を表わすばあい、絶対的な大きさがある程度以上でないと使われない傾向がみられる。たとえば、皿・かがみ・紙・ふろしきなどには「ひろい—せまい」は使われにくく「おおきい—ちいさい」が使われる。次にあげる「収容性」の点からは、皿は料理を盛りつける、かがみは物を映す、紙は字などを書く、ふろしきは物をつつむという機能を具えているので、「ひろい—せまい」が使ってもよさそうに思われる。スクリーン・壁・テーブル・むしろなどには「ひろい—せまい」も使われるのは、絶対的な大きさが前者のグループよりもかなり上であるためではないかと推測される。

○一方のひろい壁全部が書棚になって、上の段のため鉤のついた梯子が具えてあった。(むらさも 42)

○天井の高い会議室の、広い卓の端に、二人は肩をおとした姿で掛けていた。(くれない 140)

○勘次は与吉の求める儘に西瓜の一片を与へて自分は商人の狭い筵の端へ腰を卸した。(土・上 190)

<収容性>

「ひろい—せまい」は、単に容観的な量の大小を表わすだけではなくて、「中に多くものを容れうる(容れえない)」「活動のための十分なゆとりがある(ない)」「らくに通過できる(できない)」などというような意味合いを含んでいることが多い。こういう要素をかりに「収容性」と呼ぶことにしよう。

せまい部屋をひろく使うアイデア。

ふとんをたたむと部屋がひろくなる。

飛行場がせまくなったので拡張する。

のような言いかたには、それがよく表われている。

「ひろい—せまい」が空間的な意味を失って抽象化した表現の中に、「視野のひろい(せまい)人」「心がひろい(せまい)」「量見がせまい」などがあるが、これらにも「中に多くを容れうる(容れえない)」「包容性が大きい(小さい)」のような要素が引

きつがれているといえよう。

以上のことは「おおきいーちいさい」と比べてみるとはっきりする場合がある。これらの形容詞が、鏡・村・田畠について使われた例を対比させてみよう。

○正面の板羽目は、洗面所の側と鈍角に交はる斜線^{はすかひ}で、そこへ大きな姿見がかかつてゐた。(多情仏心・前 310)

○この小さな村は昔から子供の教育に大きな関心をよせていたことが解る。
(科学朝日 1956年2月7)

○草臥れ切つた身体で彼は其夜も二人を連れて、自分の所有^{もの}ではない其茂つた小さな桑畑を越えて南の風呂へ行った。(土・上 93)

○これは鏡面を広くして集光効率をよくし重油を流してやるとボイラーを加熱することもでき(ポピュラーサイエンス 1956年9月 85)

○あんたたち、知つてるの、お互に。ふうん、窄い村だからねえ。(潮騒 46)

○やつと人の行き違ふだけの狭い田圃をお品はそろそろと運んで行く。(土・上 15~16)

「ひろいーせまいに」に比べると、「おおきいーちいさい」のほうは、その中にどれだけのものが収容され得るかというような関心とは関係がなく、ただ客観的に量について述べているおもむきがある。対比される例はないが、公園・ふとんについて使われた次の例も、「ひろいーせまい」の収容性をよく示している。

○それだけの人数が集まると、ひろい外掘公園もほとんど一杯であった。(人間の壁・上 333)

○フッと眼を覚ますと、せまい蒲団なので、私はたい子さんと抱きあってねむっていた。(放浪記 267)

「おおきいーちいさい」の次にあげるような例からは、客観的な冷静な表現という感じを受けるが、「ひろいーせまい」のように収容力があるか、好都合かどうかというような要素がないためであろうか。

○^{おんどろ}温突をそのまま壁のように立てたのがペチカです。放熱面積が大きいこと、室内空気を汚染しないこと等、好ましい特長をもっていますが、(婦人生活 1956年12月 99)

○経営面積の大きな農家も、小さな農家も(農業世界 1956年6月 156)

○この住宅は①人間が如何に小さなスペースの中で生活出来るか、②(省略)という二つのテーマを追求したものです。(婦人画報 1956年1月 134)

「ふといーほそい」との対比からも、「ひろいーせまい」に含まれる「収容性」を指摘することができる。たとえば道について「せまい」も「ほそい」も使われることがあるが、「せまい」は次の例のように幅が小さいためにそこを通るのにゆとりがないという意味を含んでいる。

○人夫が大勢土を盛つた^{もっこ}畚を担いでゐた。そのために彼は田の^{くろ}畔のやうな狭い仮道を

通らなくつてはならなかつた。(波 313)

○そのときこのせまい路地をタクシーが入って来たのだった。(別冊文芸春秋 1956年 53号 117)

それに反して「ほそい」のばあいには、通るのにゆとりがないというような要素はなく、ただ長く、幅が小さいことを客観的に表わしている。

○彼はその薄野につづく細い径をどこまでもどこまでも歩いていた。(小説倶楽部 1956年 4月 81)

○二人は寺へ廻らず、植木屋から細い坂道の方へ出た。(真知子・前 56)

したがって、道のようなすべを、単に自然の風景として、人間臭をはなれて表わすようなばあいは、「せまい」ではなく「ほそい」が適切な語になる。たとえば「からまつの木に入りて、また細く道はつづけり。」(北原白秋「落葉松」)は「せまく」ではあり得ないといえよう。

以上は「ひろい—せまい」が2次元(あるいは1次元)の量を表わすばあいであったが、3次元の量を表わすばあいについても、「収容性」が重要な要素になっている。その点は「おおきい—ちいさい」と比べることによってはっきりする。たとえば、「おおきい(ちいさい)箱」といった場合は、箱の中に物がつまっても、からっぽでもいい。そして、箱の外側からみた体積を問題にしているのが普通であろう。他方、箱について「ひろい—せまい」が使われる場合、箱の中はからであるのが普通で、その中に物をどの程度入れられるかが問題になっている。そして、箱の外側の大きさではなく、内側の大きさが表わされている。したがって、厚い板で作られた箱は「おおきい箱」でしかも「せまい箱」だということがあり得よう。

以上に問題にしてきた、基本的な諸単語を、意味の大まかな性格によって分けると、まず「たかい—ひくい」「ふかい—あさい」は基本的な用法にかんしては、重力のはたらく線上に存在する性質である点で、個々の人や物を超えた、客観的な基準をもった性質である。次に、「ながい—みじかい」「あつい—うすい」「ふとい—ほそい」「おおきい—ちいさい」「あらい—こまかい」は、言及される物に即した、量的な性質である。「ひろい—せまい」は人間の目的・関心からみた、空間的な量の大小である。

しかし、「ながい—みじかい」も、「たかい—ひくい」を介して重力の方向に条件づけられているばあいがあるとか、「ながい—みじかい」と「ひろい—せまい」とが人間の位置・方向と関係して使われるばあいがあるというように、副次的な条件もいろいろ存在している。

「とおい—ちかい」はもの自体の空間的な量を表わすのではなく、空間的な量によって他のものとの関係を表わす語である点で、他とは性質がちがっている。

以上には、はじめに(a)としてあげた、基本的とみられる18語の意味を区別する特徴を列挙した。(b)としてあげた「こどかい」「巨大な」のような、同じ意味のグループに属する語まで含めると、それらの意味を区別する他の特徴が導入される必要が生じる。それらの2, 3を次にあげよう。

<主体>

基本的な18語については、上にあげたような諸条件がみたされれば、広くさまざまなものを主体にすることができる傾向がある。それほど基本的でない語の中には、特定の種類のものにしか使われないものがある。それらは、主体がせまく限定されることによって、主体に限定のない基本的な語と対立している。そのような例として、

(土 地) こどかい <たかい (分析例22)

(人) おおがらなくおおきい, こがらなくちいさい (分析例23)

について調べてみた。ほかにも、「花」についての「大輪な」(cf. 「おおきい」), 「文字」についての「肉太な」(cf. 「ふとい」)などの例がある。(この2語の用例は資料内にはない。)

なお、形容詞ではないが、人や動物を主体とする「ふとった」「やせた」には「ふとい」「ほそい」と対比させ得る面があるとみて、調べてみた。(分析例24, 25)

<程度の著しさ>

3.2.2 の(a)に述べる、この特徴によって、次のような語の対立が区別される。

はるかなくとおい

巨大な <おおきい (分析例26)

広大な <ひろい

<程度のわずかさ>

3.2.2 の(b)に述べる、この特徴によって、

こどかい <たかい (分析例27)

の対立の一部分が成り立っている。

<度外れ>

4.4.2.1 に述べる、この特徴によって、次のような語の対立が区別される。

ばかたかい <たかい

ひよろながい <ながい

だだっびろい <ひろい

<変化の結果>

大部分の形容詞においては、以前の状態がどうであったかということは、問題外である。しかし、「うずたかい」を「たかい」と比べると、ものが積もったりするという変化の結果として高いという条件が必要であることを特徴としている。

うずたかい <たかい (分析例28)

「こなごなに」「こなみじんに」「こっぱみじんに」を「こまかく」「微細に」「微小に」などと比べると、豎いものがくだけて細分されるような、以前の状態の変化の結果であることを必要とする点で区別される。「こなごなに」などの3語はほとんど副詞的に使われ、形容詞的な活用はしないと思われるが、取り上げてみた。(分析例29)

2.2.2 色

色に関する形容詞のばあい、「あおい」「まっさおな」のような形容詞だけを取り上げて、「みどりの」「むらさきの」のような名詞を除外することは、意味の面からは不自然なことだと考えられるので、「(色をあらわす名詞)＋の」の形まで含めて見わたすことにしたい。そうすると、次のような語のグループがうかびあがってくる。

- (a) しろい、くろい、あかい、あおい。
- (b) きいろい・な、みどり(いろ)の、ちゃいろい・な・の、もいろの、みずいろの、こげちゃの、どすぐろい、……
- (c) まっかな、まっさおな、……うすあかい、うすあおい、……くろっぽい、きいろっぽい、……
- (d) あかぐろい、あおじろい、あかぎいろい、あおぎいろい……
- (e) ピンクの、ブルーの、グリーンの、オレンジ(色)の、ベージュ(色)の、……
- (f) こいーうすい、ふかいーあさい、あわい、あかるいーくらい、あざやかな、…

(1) (a)～(e)のグループと、(f)のグループとは、まず基本的に対立した性質をもっている。前者はものを表わす具体名詞と直接に結びついて使われることが多い。すなわち、ものの属性を表わす語である。

○窓の青いカーテンをめくって、いつものように窓へ凭れて静栄さんと話をした。

(放浪記 61)

○竹藪に、椿の花が紅いのも目に留つた。(帰郷 206)

○丁度其女房が箕を振る度に、空鼓の塵が舞揚つて、人々は黄色い烟を浴びるやうに見えた。(破戒 53)

上の例において「あおい」「あかい」「きいろい」は、ものを表わす「カーテン」「椿の花」「烟」と直接に結びついている。ただし「色があおい」「あかい色」「きいろく染まる」などのように、具体名詞と直接に結びつかないで使われることもある。

それに対して、(f)の諸語は、ものを表わす具体名詞とは直接に結びつかないのが原則である。

○前の翅と後の翅との重なつてゐる部分だけは、緑が濃い。(雪国 86)

○「どうぞ。」

と、硝子の飾り棚の上に盆ごと出して、すすめた。茶は薄い色をしてゐた。(帰郷 152)

○野には麦が青々と萌え、松の樹々もまだ芽吹かぬまでも、どことなく明るい緑の色調を持つて若やいでゐた。(冬の宿 155)

○ただ海だけが、もう夜の海のやうに暗く沈んだ色をしてゐるが、(冬の宿 156)

○若向きの賞品は、空色の箱型で新造船のやうなその鮮やかなコバルト色は、金鍍金の留金のきらめきと、えもいはれぬ対照をなしてゐた。(潮騒 128)

次の例では「くらい」がものを表わす「ファウンデーション」と直接に結びついているが、直前の「明るい色」「三色」などの文脈に依存した、省略的な表現なのであろう。

○修正化粧のために地色のファウンデーションのほか、三色ぐらい明るい色と、三色ぐらい暗いファウンデーションを用意する。(主婦と生活 1956年1月付録 スピード美容読本 17)

(f)の諸語は、ものの属性ではなく、ものの一属性である色についての属性を表わすものだといえよう。これらの形容詞の表わす属性の主体はものではなくて、ものの色である。

(2) (a)~(e)のうちで、もっとも基本的なのは(a)の4語である。^{<注>}

<注> 柴田武「言語における意味の体系と構造」(『科学基礎論研究』No. 26, 1965—8)では、日本語の伝統的な基本的色名の対立は、

aka—awo

siro—kuro

という体系だとされている。これは、名詞の形で考えられた体系であるが、形容詞の形においても、これに準じて考えることができよう。なお、佐竹昭広「古代日本語に於ける色名の性格」(『国語国文』19-10, 1950—10)によると、古代において純粹に色を表わす語は、赤・黒・白・青ぐらいしかなく、それらも、

明(アカ)——暗(クロ)

顕(シロ)——漠(アヲ)

という、光の感覚の二系列に由来するものといわれる。

4語のうちで、「しろい」「くろい」は、白—灰色—黒という無彩色の系列に属する性質である。

有彩色を表わす形容詞としては、「あかい」と「あおい」の2語が、現代語においても、もっとも基本的なものに属し、それぞれのさす色の範囲も相当に広いものであり得ることが注目される。しかし、「きいろい」や「みどりの」なども現代語では相当に根

深く定着した語となり、それに伴って「あかい」や「あおい」のさす範囲も影響を受けているだろうことは、色の形容詞の体系に関する問題点のひとつである。

このような問題について、用例から考えることは、かならずしも有利な方法ではないように思われる。たとえば、

○その日は大へん気分もよささうで、いつも殆ど着たきりの寝間着を、めづらしく青いブラウスに着換へてゐた。(風立ちぬ 82)

という用例の「青いブラウス」が、どんな色合いであるかは、文脈からは「あおい」のさしうる広い範囲の中にはいることしかわからない。もっとも、おなじ「あおい」でも、

○見るとそれは一疋の馬追ひである。その青い、すつきりとした虫は、(田園の憂鬱 40)

のように、どんな色を示しているかがある程度まで具体的に推定できる例もある。(馬追いだから、淡緑色であろう。)用例による以外の方法としては、たとえば、実際にさまざまな色を示して、インフォーマントにその色を問うような方法も考えられる。したがって、ここでは問題に立ち入ることはできないが、ただ、「あかい」や「あおい」は現代語でも依然としてかなり広い範囲の色をさし得る事実を用例から一べつしておきたい。

まず、「あかい」のほうから見よう。

○丁度其中には、例の種牛も恍惚顔に交つて居た。見れば角は紅く血に染つた。(破戒 107)

○私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。(こゝろ 113)

○午後一時になると、小中学校の女教師ばかりが、みんな一本ずつの赤いカーネーションの花を持って、通用門の中に集った。(人間の壁・上 348)

のような「あかい」は、文句なしに「あかい」のであって、「あかい」のうちの典型的な例だといえよう。このような「あかい」を狭い意味での「あかい」だとすると、広い意味での「あかい」はどんな色合いまで含み、どんな語に対して上位語になりうるかが、問題になる。

「あかい」の派生語であるが、「まっかな」「うすあかい」は、(5)で述べるように、色の程度に関して制限のある「あかい」であって、「あかい」の下位語として考えることができる。

「あかい」と語形の上では関係がないが、意味の上では「あかい」に包含される語として、まず「緋の」「朱色の」「くれないの」などがある。

○その罪は緋の如く赤くとも雪の如く白くなり、(ニューエイジ 1953年7月 71)
は適切な例ではないが、たとえば「緋のもうせん」は「あかいもうせん」でもある。

○機関室から上って来たたくましい船員が朱色の肌を拓げて、海の涼風を呼んでゐる。(放浪記 188)

の「朱色の」や、

○然るに駒井先生の如きは、眉目清秀、白きは其面、紅なるは其唇、風姿楚楚として宛ながら好女の如しで、(思出の記・上 110)

○僕の脈管には、まだ紅の熱血が漲つて居る。(思出の記・上 194)

の「くれないの」も、広義の「あかい」に含まれるものと考えることができる。次に、

○時は秋の末であつたらしく、近在の貧しい町の休み茶屋や、飲食店などには赤い柿の実が、枝ごと吊されてあつたりした。(あらくれ 6)

のように、熟した柿について「あかい」が用いられることは慣用として相当固定したものであろうと思われる。熟した柿の色にもさまざまあるであろうが、一般にスペクトルの上で「あかい」と「きいろい」の中間に位置する「だいたいいろの」も、広義の「あかい」で呼ばれうるばあいがあるといえよう。次に、

○松林の間に麦畑が青く、菜種が黄色く、桃が紅く咲いてゐた。(冬の宿 172)

では、桃の花が「あかい」で形容されている。桃の花は「ももいろの」と言える色であるから、「ももいろの」も広義の「あかい」に包含されるばあいがあるといえよう。

「あかい」が「ちやいろい」の範囲、あるいは「ちやいろっばい」の範囲に及んでゐる例もある。

○これは辰野隆先生から戴いたのである。紺い短靴で、先生ができるだけ頑丈に造らせたものだが、(私の人生観 25)

○いつの間に誰が来たのか、玄関の横の庭には、赤い男の靴が一脚ぬいであった。

(放浪記 198~199)

は婦人靴にあるような狭い意味での「あかい」靴ではなくて、いわゆる「あかぐつ」の茶色がかった色であろう。(「私の人生観」の例は、「赭」の用字からもそのように推定される。)

○赤い牛が勝つたら津上と別れてしまはうと。(闘牛 153)

○樺の梢は、どうでも此れまでだといふやうに慌しく其の縮く成つた枯葉を地上に投げつけた。(土・上 62)

○まるでどこか場末の下宿屋にでもありそうな、一間の腰高窓のついた殺風景な部屋で、赤くやけた畳はかなりすり切れている。(人間の壁・上 150)

○月が変れば六月といふに、捨六さんは赤くなつた黒い冬の背広、ひびのいつた短靴穿いて、(新潮 1956年8月 120)

○東京で吸う赤い味噌汁はなつかしい。(放浪記 122)

なども、「ちやいろい」(あるいは「ちやいろっばい」と言われる可能性のあるような、黒みがかった赤系統に色に属するであろう。

けっけよく、「あかい」と、その下位語として関係づけられる可能性のある語を例示すると、次のようになる。(カッコに入れた語は、あるばあいには下位語であり得るといふにすぎないであろう。)

あかい (広義)	{	あかい (狭義), まっかな, うすあかい	
		緋の, 朱色の, くれないの	
		(だいだいいろの)	
		(ももいろの)	
		(ちゃいろい) etc.	

次に「あおい」のほうをしらべてみよう。まず、程度に限定のある「まっさおな」「うすあおい」は、やはり「あおい」の下位語として考えられる。

「あおい」については、「みどりの」との関係が、よく問題になる。木の葉や草や果実の緑色を「あおい」と言う例は、現代の小説にも多く見られる。

○ある時——それは青いバナナが果物屋や八百屋の店の前に沢山積まれはじめた頃だった。(波 190)

○芝生がもう大ぶ青くなつて、あちらにもこちらにも陽炎らしいもの立つてゐるのを、(風立ちぬ 82)

○やがて自動車はエナメル塗の背を光らせながら、ゆるやかに坂を降りて行き、青い樹立の陰に姿を隠した。(帰郷 10)

○こんなに樹木が多く、草が青く、水が近く、人を瞑想に誘う閑寂の気が溢れてるとは、思いも寄らなかつた。(自由学校 177)

これらはいずれも、「みどり (いろ) の」と言える色であるから、広義の「あおい」は「みどり (いろ) の」に対する上位語だといえる。

青の系統に属する「空色の」「水色の」などは広義の「あおい」に含まれる。

○空色の切符を、革手袋をはめた指先で改札掛に渡して出ると、(多情仏心・前 139) における「空色の切符」というのは、以前の二等切符のことで、

○青年は粗末な麦稈帽子を一寸脱いで、黙つたまゝ青い切符を渡した。(或る女・前 5)

における「青い切符」と同じ種類のものではないかと思われる。

○ジョウの淡い空色の眼は派手な身なりの若い女たちを見つけるとサッと活気を帯び、それがサリでないとわかると急に光りを失って灰色の愁いにかげった。(小説倶楽部 1956年7月 125)

における「淡い空色の眼」は広く言えば「青い眼」に属するものである。「水色の」については説明に都合のいい例はないが、

○行介が帰らうと思つて、踵を返すと、向うから雨の中を水色の^{かうもり}編蝠傘をさして、歩いて来る女があつた。(波 255)

○水色の不透明ガラスの引き戸を、ガラリと開けると、二、三人の客しかいない、流し場が見える。(自由学校 216)

などの「水色の」は広義の「あおい」に含まれるといえよう。

「あい(いろ)の」も少数例しかない中に、説明に好適な例はみあたらない。

○大抵は頭に護膜製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしてゐた。

(こゝろ 8)

○赤い色だの藍の色だの、普通市場に上らないやうな色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでゐるのが鮮やかに指さゝれました。(こゝろ 217)

のような例があるが、色を大まかに言うときには「あい(いろ)の」も「あおい」に含まれるだろう。

「紺(色)の」は、少くとも濃い紺色になると黒っぽい感じになり、「あおい」に含ませることは無理になるかと思われる。

以上の結果を「あかい」のばあいと同じように表示してみよう。

あおい(広義)	{	あおい(狭義), まっさおな, うすあおい
		みどり(いろ)の
		空色の, 水色の, 藍(色)の
		(紺の, 紺色の) etc.

(付)

国広哲弥『意味の諸相』(30~33ページ)によると、ここで問題にした「あかい」や「あおい」のさす範囲の広さは、次のように考えるべきことになろう。

色名の系列を、色彩区別の精度に応じて、次のような幾通りかを考える。

原 始 系 列 アカ/アオ

第 1 次 系 列 アカ/キ/アオ

第 2 次 系 列 アカ/ダイダイ/キ/ミドリ/アオ/アイ/ムラサキ

第 3 次 系 列 以 上 茶イロ, モモイロ, 朱イロ, 緋イロ, キンイロ, ソライロ, コゲ茶イロ, 梅幸茶, ……

このような体系を仮定するならば、「あかい」や「あおい」の広義と狭義の違いは、系列の次元の違いとして説明される。

(3) (2)では、有彩色の系統の色を表わす形容詞のうちで、もっとも基本的な語と考えられる「あかい」と「あおい」が、その広い用法では、どんな範囲の色に及びうるかについて一べつした。現代語においては、「あかい」と「あおい」の中間に、「きいろい」「みどりの」も相当に基本的な語としての位置をしめ、定着してきていると思われる。「きいろい」や「みどりの」が割り込むことによって、「あかい」や「あおい」の本来の領域はせばめられる傾向が生じたことと推測される。いま、これらの4語の関係を示

そうとすれば、

あかい／きいろい／みどりの／あおい

という、1次元的な構造として表わされる。隣接する語のさす領域は重なり合う部分があっても、それぞれの相対的な位置は一定している。たとえば「きいろい」は、「あかい」と「みどりの」の間に位置を占める性質であって、「みどりの」と「あおい」の間などを占める性質ではないということは、「きいろい」の意味にとって本質的なことである。

(4) 以上のような、プリズムのスペクトルに現れる色については、色合いを表わす1次元の構造として考えることができるけれども、スペクトルに現れない「ちやいろい」のような色まで含めると、もはや1次元の構造ではとらえることができない。「ちやいろい」は赤黄色に黒色の加わった色であるから、色合いの次元のほかに少なくとも明度の次元を加えなければ位置づけられない。

また「ももいろの」を色の体系の中に位置づけようとするれば、色合いでは「あかい」のあたり、明度ではかなりあかるいほう、彩度ではかなり低いところに置かれることになる。つまり、3次元の構造の中に表わされなければならない。

このように、色を表わす形容詞(など)の体系を考えるためには、色の主なる属性とされる色あい・明度・彩度の3つの次元が、少なくとも必要になるはずである。

(5) 語の構成からみて、色の程度に関して区別される語として考えられそうな例を(c)にあげた。ここでは、

まっかな／うすあかい<あかい(分析例30)

で代表させようようなパターンが考えられる。言うまでもなく「あかい」は程度に関して自由であるのに対し、「まっかな」は程度の著しいこと、「うすあかい」は程度のわずかであることを特徴とする語である。

なお、「くろっばい」「しろっばい」「きいろっばい」など、接尾語「ばい」がついてできる派生形容詞がある。これらは、ある程度その色を含んでいることを表わすものと考えられる。たとえば、

○洗い好みのセビロに、黒っばいネクタイ。(自由学校 38)

のネクタイは黒以外の色がはいっていても全体として黒が優勢であればよいのだろう。

○あの黒っばい煉瓦塀に鶯が這つた教会の中からひびいてくる鐘の音や、(冬の宿 44)の煉瓦塀は古くなって黒ずんでいても、同じものを「くろい煉瓦塀」と呼ぶことは必ずしもできないだろう。「くろっばい」は「くろい」の下位語だとは言えないだろう。

(6) (d)は2つの色の名が複合した形の形容詞の例である。語構成上の原則からいへ

ば、下の要素が主であって全体を代表するはずであるから、たとえば「あかぐろい」は「赤みを帯びた黒い色をしている」のような意味になって、「くろい」の下位語の位置をしめそうに思われる。ところが、例解国語辞典は逆に「黒みをおびた赤い色をしている」という語釈を与えている。実例をながめると、たとえば、

○午後の光は急に射入つて、暗い南窓の小障子も明るく、幾年張替へずにあるかと思はれる程の紙の色は赤黒く煤けて見える。(破戒 243)

のばあい、「すすける」はふつう黒くよごれることを言うので、この「赤黒く」は「赤く」よりも「黒く」が主要素なのではないかと思われる。「すすける」の実例をみわたすと、たしかに、

○家の中が、黒く煤けるのも、このランプのせいしかなかった。(自由学校 183)

○ただ、なにぶんにも、窓が小さく、開閉がきかず、採光と通風に難点がある上に、戦後の新築とも思えず、板がまっ黒に煤け、床に敷いてあるゴザさえも、ひどく時代がついてるのが、不審だった。(自由学校 179)

のように黒くなる変化に多く使われている。しかし、中には、

○壁は壁紙で張りつめて、それが煤けて茶色になつて居た。(破戒 5)

○漁夫はあてのない視線を白ペンキが黄色に煤けた天井にやつたり、(蟹工船 22) のような例もあるので、さきの「赤黒く煤けて見える」の例もかたんに判断するわけにはいかない。上の「破戒」の例の「あかぐろい」は「あかい」とも「くろい」とも別の、第3の色として考えておくのが無難なように思われる。

次に「あおじろい」を取り上げてみよう。

○折しも五月の下旬、唯でさへ逆上^{のぼせ}あがるやうな時候を、芝居小屋にゐて、白襟紋附のうようよしてゐる廊下で脳貧血をおこして青白くなる。(多情仏心・前 113~114)

○丑松は又、一向顔色が変わらない。飲めば飲む程、反つて頬は蒼白く成る。(破戒 235)

のように、顔色に血の気がうせて青ざめているばあいの表現は、ふつう「あおい」であって「しろい」ではない。したがって、上の例のような「あおじろい」は「しろい」よりむしろ「あおい」の下位語である可能性のほうが大きいのではないか。

以上、色の名が複合した形の形容詞について、1、2の例をあげつらってみたが、下位成分の色の名が主であるとかたんに言えないと思われる。1語1語について、また同じ語でも文脈によって考えなければならないだろう。

(7) (e)に例示したような外来語の色名がさかんに流入しつつあることも、色の形容詞の体系に影響を与えているだろうことはいうまでもない。用例を少しあげてみよう。

○グレーのバックの前に、ピンクの薄物をゆるやかに着た若い女が、(芸術新潮 1956年8月 209)

○陶器で、三、四歳まで使えるポット式便器。蓋はピンク又はブルーのプラスチック。(婦人之友 1956年10月 91)

○もう一人はブルーのスーツを着て、ちょっとオツにすました^{レディ}淑女である。(傑作倶楽部 1956年3月 249)

○目も覚めるようなグリーンのスーツで、すらりと立った千恵子が、洋平を顧みてはっとした。(婦人生活 1956年3月 197)

○グレイのフラノ服を着た男(トルーストリー 1956年9月 113)

○ヘレン・ヒギンスさんなるモデル嬢が、オレンジ色のナイロン・レースで作ったイヴニングを召して登場です。(婦人倶楽部 1956年12月 227)

「ピンクの」と「ももいろの」、「ブルーの」と「あおい」などとは、さしている色の内容も同じではない。また、外来語としての魅力も要因になって、服飾方面などからさかんにはいり、一般化するものもあるのだろう。

(8) (f)にあげた、色の属性を表わす語のうちで、「あかるい—くらい」は色の明度、「こい—うすい」は彩度と関係が深いと考えられる。「ふかい—あさい」は「こい—うすい」に近いと思われるが、「こい—うすい」ほど日常語的ではないだろう。

上記の諸語のうち、次の3語については、第2部「個別的記述」において、色の属性に関する意味を、次の番号の所で記述してある。

あかるい [01]

うすい [23]

ふかい [13]

「あざやかな」については、例解国語辞典には「色や形が明るくはっきりして美しいこと。鮮明。」とされている。「あざやかな」が色に用いられた用例をみると、

○谷間の青葉を透かして落ちてくる日光が女の手許の水に揺らぎ、清水にひたつた女の足形を、青いばかりにくつきりと描きだした。眼も魂も吸はれるほど美しくあざやかな皮膚の色だつた。(厚物咲 21)

○舶来種の草花の、濃く鮮やかで示威的な色彩をしてゐるのとは違つてゐた。(帰郷 126)

○しかし、こんなに鮮やかに濃くて、なごやかな色の霞が、地上の寺々の大屋根や新しいビルディングを影の塊のやうに見せて、空にたなびいてゐる優婉な風景は、確かに日本でなければ見られない。(帰郷 244)

のように「うつくしい」「こい」といっしょに使われたものがある。一般に、

*くらい あざやかな色

*きたない あざやかな色

*うすい あざやかな色

のような結びつきは存立しにくいのではなからうか。もし、そうだとすれば、色についての「あざやかな」は色の「あかるい」「うつくしい」「こい」性質を要素として含んでいることになる。

(9) 以上にみてきたような、色に関係する形容詞などは、色をもちうるものである限り広く用いられる語が多い。特に基本的な形容詞はみな一般的・抽象的に色彩を表わす語になっていて、特定の対象に結びついているようなものはない。対象物は固体であれ、液体であれ、気体であれ、どんな物でも赤い色をおびてさえいれば「あかい」と言われうる。

ただし、あまり基本的ではない形容詞などの中には、特定の主体にのみ制限されているものが少しは見出される。たとえば、

あさぐろい < うすぐろい (分析例31)

蒼白な < あおじろい (分析例32)

いろいろな、白皙の < しろい (分析例33)

の左辺の諸語のようなものであって、これらはいずれも人間のひふにのみ用いられる。したがって、色合いの上でも、対応させた右辺の語と等しいわけではなく、ひふの色の帯びうる特定の色合いを表わす語である。

(10) 色を表わす形容詞は、評価や感情とは関係のないものが大部分である。「あかい」は興奮的で「あおい」は鎮静的な色だとか、「しろい」は純潔を、「くろい」は不吉を象徴するとかいうのは、心理的・連想的な意味などとしてはあり得るとしても、語彙的な意味だとは考えられない。しかし、「どすぐろい」には、「にごったように黒い」というような、単なる色の種類だけでなく、その色あるいはその色を帯びたものに対する、きたないとか気味悪いというような、マイナス的な評価を、語自身に含んでいると考えられる。この語の用例はごく少ないが、

○壁は元来何色だつたか分らんが、今の処では濁黒い変な色で一ヶ所^{くづ}壊れを取繕つた痕が目立つて黄ろい球を描いて、人魂のやうに尾を曳いてゐる。(平凡 63)

○男はむせる事も、咳する事も出来ず、苦悶したまゝ顔は見る見る真黄色になり、どす黒い土色になり、そして皮膚がばさばさと剝げ落ちて行くのである。(青銅の基督 55)

○鶴見は右の耳朶を流弾にそがれ、そこから流れ出た血が結いつけた晒布をどすぐろくそめていた。(落城 39)

など、いずれも好ましい感じでない色として使われているといえよう。

○それに反して黒い翼の流行には、みじんも明るい希望や期待はない。そこにはまがまがしい脅迫と、どすぐろい呪咀以外のなにものもなかった。(小説春秋 1956年2)

月 273)

は比喩的な使われ方であるが、明らかにマイナスの評価を含んでいる。

*どすぐろい いい色だ

のような結びつきは、普通にはあり得ないであろう。

2.2.3 音

本来、音の性質や印象を表わす形容詞はほとんどなく、他の感覚領域からの転用が多い。音（声を含む）に関係する属性を表わす形容詞として、次の諸語を取り上げてみよう。（形容詞以外の1、2の語も含む。）配列は、以下の述べ進めに便利のように並べたにすぎない。

(a) おおきい→ちいさい

たかい→ひくい

(b) ふとい→ほそい

するどい→にぶい

かたい→やわらかい

おもい→かるい

(c) かんだかい・な、きいろい、かんばしかった、きいきいした

(d) けたたましい

(e) うるさい、やかましい、そうぞうしい、さわがしい、かしましい、かまびすしい

(f) しずかな、静寂な、閑静な、静粛な

(1) 上にあげた形容詞の大部分は、ものを表わす具体名詞と直接に結びつくことがない。

音、ひびき、こだま、うなり、ざわめき、いびき、足音、くつ音、羽音、波音……
声、叫び、泣き声……

など、音を表わす名詞と結びついたり、連用形が、

鳴る、打つ、すする、鳴く、ほえる、話す、きこえる、……

など、音に関係する動詞と結びついて使われることが多い。それらの形容詞の表わすのは、ものの属性ではなく、ものの出す音の属性である。「けたたましい」の例をあげよう。

○戸外では百舌のけたたましい鳴き声^{そと}がしていた。（暗夜行路・前 91）

○忽ち船首の方からけたましい銅鑼の音が響き始めた。（或る女・前 82）

○やがて夕顔の花のようなカンテラの灯が薄い光で地を這って行くと、けたたましい警笛^{サイレン}の音だ。（放浪記 11）

○けたましい汽笛が突然鳴りはためいた。（或る女・前 85）

○二階の階梯をけたましく踏鳴らして上つて、芳子の打伏して居る机の傍に厳然として坐つた。(蒲団 75)

たとえば「もずがけたたましい」のような言い方は「もずの鳴き声がけたたましい」などの省略的な表現としてしか成り立たないであろう。4番目の「或る女」の例の「汽笛」はものを表わす名詞であると同時に、音を表わす名詞だと考えてよいだろう。ただし、(e)(f)のグループは別であって、音を表わす名詞や動詞と結びついただけでなくて、ものを表わす名詞とも直接に結びつことができる点で、他とは性質がちがっている。つまり、それらは音の性質でもあり、また音に関する、もの(場所を含む)の性質でもある。たとえば「やかましい」を例にすると、次の4例のうちのはじめの2例は音を主体としているが、あとの2例はもの(あるいは場所)を主体としている。

○籠の音がやかましいから白痴のようにこれに聞き入るほかになす術を知らない。

(私の人生観 47)

○他の鶏も一しきり共に喧しく鳴いた。(土・上 41)

○全く、彼等の今の生活には、時計は何の用もないただやかましいだけのものにしか過ぎなかつた。(田園の憂鬱 84)

○「どうも彼処の家は喧しくつて——」(破戒 37)

(2) (a)の「おおきい—ちいさい」と「たかい—ひくい」とは、(b)のグループよりも使用度数がずっと多く、音の性質を表わす形容詞のうちでの基本的な語だといえよう。「おおきい—ちいさい」は感覚的な音の量に関する対立で、距離・音の高さその他の条件が同じであれば、音波の振幅の大少と対応する音の属性である。

○階下の人達は皆風呂に出ていたので私はきがねもなく、大きい音をたてて米をサクサク洗ってみたのです。(放浪記 58)

○奥さんは私の耳に私語くやうな小さな声で、「実は変死したんです」と云つた。

(こゝろ 53)

「たかい—ひくい」は、ピッチの高低を表わすこともある。音階について「たかい」「ひくい」というようなばあいである。

○検校は己れの名の一字を取つて彼女に春琴といふ名を与へ晴れの演奏の時しばしば彼女と合奏したり高い所を唄はせたりして(春琴抄 169~170)

○「ちりい……ん」という、非常に高い、澄んだ鈴の音が彼に聞えたからだった。

(むらぎも 205)

○その晩、宏が寝てしまつてから、母親は新治の耳もとに口を寄せ、低い力強い声でかう言つた。(潮騒 93)

○今もち上つたばかりの紫色の土はオルガンの最も低い音色のやうな声をして、何か一斉に叫び出しさうに見える。(田園の憂鬱 68)

のような例も、この意味に属するものであろう。この意味における、音の「たかいーひくい」は、他の条件が同一であれば、音の周波数の大小に対応し、「おおきいーちいさい」とは相互に独立の次元を表わすものだといえよう。

ところが、音に関する「たかいーひくい」には、別の使いかたもある。たとえば、
○好きな酒のあとで禿げた円い臙頂部を、赤々と上機嫌に輝やかしてゐた主人は、人一倍はしやいで、誰よりも高くばちばちとやつた。(真知子・前 27)

○「音を小さくしてくれない」ある夜、彼女に頼みこむようにしてたしなめると、
彼女は、チラと流し目を送って、音を低くするのだった。(トルーストーリー 1956年 9月 171)

のようなばあいでは、これは「おおきいーちいさい」に近い。「たかい」「ひくい」のいちいちの例について、どちらであるかを推定することはむずかしい。文脈から想像される事実の上で、ピッチの高低ととつても、音量の大小ととつても、また両方が平行的に並存しているとしても矛盾の起らない例がかなり多く、どの面を「たかい」「ひくい」が表現しているか、容易にきめられないからである。たとえば、

○駒子は、そう叫ぶと、濡れタオルのように、五百助の足許に崩折れ、彼の脚を抱き、誰はばからない、高い泣き声を、立て始めた。(自由学校 377)

○明子は自分の方が家出先から連れ帰られた娘のように身のおき場のない気がし、広介は宮崎とまだ興奮の残っている高い声で話をした。(くれない 137)

○汽車の音が遠くからきこえて来て、だんだん高くなりまた低くなつて行きました。(銀河鉄道の夜 264)

○先生たちはうたうことが好きだった。会合のあとではきつと合唱する習慣になっていた。やがて、低い声ではあったが、ひとりひとりの心をこめた合唱がはじまった。(人間の壁・上 180)

(3) (b)にあげたような形容詞は、音の大小・高低のほか、音色とも関係の深いものであろう。(a)にしてもそうであったが、(b)はみな音以外の感覚領域の語が音にも転用されるものである。(c)の「きいろい」もその著しい例である。いわゆる共感覚 (synaesthesia) に基礎をもつ転用であろう。しかしここにあげた諸語は、臨時的、個人的に音にも転用されることがあるというよりも、むしろある程度社会習慣的な一定した用法になっているといえよう。そしてこれらの1語1語は、それぞれ独自の音の印象を表わすものではあるが、相互にまったく独立の次元に属するのではなく、いろいろに関係しあっていると思われる。しかしそれを考えるには、まず前提として音の物理・生理・心理について相当の知識が必要だし、用例も多くなければならぬ。ここでは少ない用例の中から1、2ずつを例示し、弱い推測をわずかにつけ加えることに止める他はない。

ふとい——ほそい

ふとい 声が高く大きい。 ほそい 声が高く小さい。

という語釈を与えている辞典がある。(大日本図書国語辞典)この規定は「ふとい—ほそい」の主体を「声」に限定している。資料内の用例も声に使われたものが多いが、「ふとい」が声以外の音に使われた例もある。

○この男猫の首にも鈴がつけてあって音はやゝ太い。私はそれを聞きわけて、(オール読物 1956年2月 103)

また、上の規定によれば、「ふとい—ほそい」の対立は、「たかい—ひくい」の次元と「おおきい—ちいさい」の次元に関係していることになる。

「ほそい」の次の例は音量の「ちいさい」と関係が深いと思われる。

○(声細くなりときれる。侍医置をひそめる)わしはもうこの世を去る……(細けれどしっかりと)お前は仏様を信じるか。(出家とその弟子 218)

また、次の例は「ふとい—ほそい」が音のピッチの「たかい—ひくい」と関係の深いことをよく示している。

○初は地声の少し大きい位の処から、段々に甲高に競上げて行つて、糸のやうに細くなつて、何かを突脱けて、遠い遠い何処かへ消えて行きさうになつて、又段々競下つて来て、果はパツと拵げたやうな太い声になつて、余念がない。雪江さんが肉声の練習をしてゐるのだ。(平凡 79)

するどい——にぶい

○爆音は遠ざかり、空で鋭い旋回音を聞かせると、また空気を破る音を立てて丘に現はれ、射つて舞ひ上つた。(野火 119)

○が、漸つとそれに近づいて見たら、その縦の中からギヤツと鋭い鳥の啼き声が出た。(風立ちぬ 150)

○おくれて味方の臼砲がにぶい筒のひびきをこだましはじめた。(落城 22)

○廊を流して行く焼栗屋のにぶい声を聞いていると、妙に淋しくなってしまう、暗い部屋の中に私は一人でじつと窓を見ている。(放浪記 98)

「するどい」の次の例は、声の性質であると同時に、声の主の相手人物に対する攻撃的な強い感情が声に表われているようすを表わしているのであろう。

○「矢^やさん。あなた。あんまりだわよ。」と鋭い声で叱りつけた。(つゆのあとさき 84)

かたい——やわらかい

○宿の主人が特に出してくれた京出来の古い鉄瓶で、やはらかい松風の音がしてゐた。(雪国 153)

○准尉の眼はすわっていて、体はしっかりひきしまっているのに、声だけが柔かだと

木谷は感じていた。(真空地帯・上 44)

「かたい」音の例は資料内になかったが、金属的な、余韻に乏しいような音の形容に使われることがあると思われる。

おもい——かるい

○七八度も呼ばれると、重い鎖の音がして、犬どもは、二疋とも同時に、いかにものつそりと現はれた。(田園の憂鬱 107)

○音楽の間にドドドウと^{ふなべり}舷を打つ^{なみおと}重い濤音とともに、ギギギと船全体を軋ませ、ぐうつと右にロールした。(伸子・上 133)

○元込銃が軽い火薬の音をたてた。(落城 35~36)

○このとき上方で、木と石のぶつかるやうな軽い音がした。(潮騒 27)

なお、上にあげたのは音を形容する形容詞のうちの一部にすぎない。「つよい—よわい」「あかるい—くらい」も音の形容に使われるし、形容詞以外では「すんだ—にこった」などもある。また、次の例のような、個人的な創造と思われる使いかたまで含めれば、さらに語の範囲は広がるだろう。

○石の多い川の音が円い甘さで聞えて来るばかりだつた。(雪国 30)

(4) (c)にあげた数語は、ピッチが高いか低いかという対立からみると、高い系統に属するといえよう。「きいろい」「かんばした」「(「かんだかい)」は、主体の点で、声だけに限定されている。また、「かんばした」は声の主のたかぶった感情の表われとしての声の性質である。(分析例34)

(5) (d)「けたたましい」は、音が大きいか小さいかという対立からみると、大きく強いほうに属する。

○この時突然けたたましい笑ひ声が、何か熱心に話し合つてゐた二人の中年の紳士の口から起つた。(或る女・前 18)

○それから急にけたたましい短い声で吠え出した。(田園の憂鬱 74)のように「突然」「急に」とともに使われている例がいくつかあるが、音の起りかたが急である感じ、聞く人の感情が驚かされるような音であることを含んでいる。例解国語辞典に「非常に驚いたように、いかにもあわただしく騒がしい。そうぞうしい。」という語釈が与えられているが、音を出す側の驚きは含まれていないと思われる。

○朝、七時過、電話室のベルがけたましく鳴つた。真知子は廊下一つ隔てた茶の間から急いで出て行つた。(真知子・前 74)

において、電話自身がおどろいたように鳴ると擬人化されているわけではなく、ベルを

聞いた人がはっとするような、突然の、音の大きい鳴り方を「けたたましく」が表わしているであろう。

(6) (e)の諸語は、音が主として大きいために、不快であるような状態に関係しているグループである。音が大きいために聴覚器官に不快さを与えられたり、聞こうとする音が別の雑音に妨げられて聞きとりにくくて不快なばあいなどに使われる。単なる音の感覚に止まらず、それが感情に影響を及ぼしている状態である。

「うるさい」「やかましい」はそれがはっきりしている。特に「うるさい」には感情形容詞の側面がある。接尾語「〜がる」がついて「うるさがる」を派生させているし、

○あの時々どつと雷のやうな音のするのは何?……私うるさい (或る女・前 213)
のように、一人称の「私」が主語になって感情形容詞として使われた例がある。(1. 1. 2を参照)

「やかましい」は音が大きいために不快な状態である。(「おおい」や、音量の大きい意味の「たかい」は不快さを語義に含まない点で「やかましい」と区別される。)

○いつもやかましい建築場のリヴェティングが、まったく聞こえなかった。(むらぎも 36)

○もう寝たと思つて布団の上に寝かしつけようとする、眼をつぶつてゐながら、やかましく泣立てた。(波 142)

○彼は眠ることが出来なくなった。最初には、時計の音がやかましく耳についた。彼は枕時計も柱時計も、二つともめてしまつた。全く、彼等の今の生活には、時計は何の用もないただやかましいだけのものにしか過ぎなかつた。(田園の憂鬱 84)

「田園の憂鬱」の例は、時計の音だから客観的に大きい音ではないが、寝つかれない状態のときには大きい音に感じられ、「やかましい」という語がふさわしくなるだろう。(特にこの作品の、病的にときすまされた神経の世界の表現としてふさわしい用語だと言えようか。)
「うるさい」にも音が大きくて不快なのだといえそうな用例もある。

○また、当分、テンテンヤ、テンテンヤで、うるさいことだよ……。でもね、最初から、バカ・バヤシなんかやる会じゃ、なかつたんだよ。(自由学校 33)

しかし、「うるさい」は蚊の鳴く音のような、小さい音が主体であってもよい。

*大きくないが、やかましい音

は成り立たないが、

大きくないが、うるさい音

は成り立つ。

○狗は門前を去つたのか、啼声が稍遠くなるに随れて、父の躰が又蒼蠅く耳に附く。

(平凡 27)

の例にみられるような、耳について離れないという要素をもっている。「うるさい」

は、音がしつこくまといつくような感じで不快なことを意味するのであろう。

以上のようにみると、「うるさい」に対する「音が大きい。また大きいのでやりきれない。」(例解国語辞典)「大きい音がして、不快だ。やかましい。」(岩波国語辞典)のような語釈は、やや改める余地があると思われる。

「そうぞうしい」「さわがしい」は人間の立てる音や声について使われることが多いが、次の例のようにそれ以外の音についても使われる。

- あの騒騒しい夜毎の水の音は、成程この為めであつた。(田園の憂鬱 86)
- ミシンがまた歯の浮くやうな騒々しさを運転しはじめた。(あらくれ 151)
- 鳥で送る永い一生のあひだに、今も都会の路上にさわがしく行き交うてゐるであらう電車のことなどは、思つてもみなくなるのであつた。(潮騒 51)
- 何の喧嘩か、風波の音の騒がしい上に、彼等の言葉が本来分からねぬので、僕は五里霧中に迷つて居たが、何でも船頭の妻は頻りにそふかそふかと云ふ事を言つて居た。(思出の記・上 176)

「うるさい」「やかましい」は音についてのみ、具体的に言及する用法があるのに対して、「そうぞうしい」「さわがしい」は音が中心ではあるが、それに伴って、せわしい活動とかざわざわとした落ち着かない状態とかも含まれていることが多いようである。次のような例から、そう推測される。

- 階下の廊下では、そうぞうしく小学生の修学旅行の群がさわいでいた。(放浪記 256)
- 彼等はそれから茶碗も箸もべたりと筵の上へ置いて、単純に水へ醤油を注した液汁したぢに浸して騒々敷饅頭を吸つた。(土・上 179)
- 米国への上陸が禁ぜられてゐる支那の苦力がこゝから上陸するのと、相当の荷役とで、船の内外は急に騒々しくなつた。(或る女・上 181~182)
- まだ発車には余程間があるのに、もう場内は一杯の人で、雑然と騒がしいので、父が又狼狽て出す。(平凡 54)
- 先生が昨日の様に騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急に其後が追ひ掛けたくなつた。(こゝろ 9)
- まあ、生徒の附纏ふのは可愛らしいもので、飛んだり跳ねたりする騒がしさも名残と思へば寧ろいぢらしかつた。(破戒 301)
- 「かまびすしい」「かしましい」は文語的で、用例はごく少ない。
- 潜抜ける隙もあらず旅人を取囲んで、手ん手に噓しく己が家号を呼立てる(高野聖 9)
- 邸内は森閑として、蟬の声だけが噓しかつた。(波 383~384)
- 風呂から帰って来たのか、階下で女達の轟しい声がする。(放浪記 137)
- 鐘が鳴り出した。カラン、カラン、カラン、カラン——叫ぶやうに中空にあがる轟

ましい音であつた。(野火 64)

(7) (f)にあげた教語が表わすのは、(e)と反対に不快な騒音がない状態である。「しずかな」は物の動揺が少ないこと(例 しずかな海、しずかな木)や、心理的な平静さ、おだやかさ(例 しずかな気持、しずかな人)なども表わすが、音に関係して使われるのが中心的な用法だといえよう。

○一座は水を打つたやうに静かになつた。(蒲団 69)

のような例では、ほとんど音が感じられない状態をさしていると思われる。しかし、次にあげる例のように、音はあきらかにしているが、大きいはげしい音ではなく、おちついた感じの音がしている状態も「しずかな」で表わされる。

○其時静な下駄の音と共に襦を取つた芸者の姿が現れた。(つゆのあとさき 29)

○樹々の梢から漏れ落日の光が厚い苔の上にきらきらと揺れ動くにつれて、静な風の声は近いところに水の流でもあるやうな響を伝へ、(つゆのあとさき 49~50)

○そばの紫檀の卓に飾つた、青銅のドームを型どつた古めかしい時計が、意匠に相応した弥撒の鐘の調子で、しづかに三時を報じた。(真知子・前 203)

「静寂な」「静肅な」「閑静な」は文体的特徴に関して文章語的である点で「しずかな」と区別される。いずれも用例がわずかしかないが、「静寂な」はしずけさの程度が、いちじるしいほうに傾いているといえようか。

○たださえ静寂な真夜中に、声を張りあげて極めつけたので、家中のものが目をさましてしまったのは仕方がない。(厭がらせの年齢 265)

○静かに耳を澄ませば、遠い海鳴りの音が、夜明け前の静寂な大気を震わしていた。(未知の星を求めて 319)

「閑静な」は、住む場所としてしずかであることを表わすことが多い。(月面の世界などについて「閑静な」を使つたら不自然になるだろう。)

○家が狭いばかりでなく、近所がくつついてゐるので、前のやうに広い、閑静な邸内に住んでゐたあとでは、ひどく辺りが騒々しかつた。(波 359)

○伴子が道を教へられたとほりに入つて来たのは高輪南町の焼け残つた屋敷町で、木の色も古びた家ばかりが、閑静な一郷をなしてゐた。(帰郷 175)

「静肅な」は、人間が(おおぜいいるが)話したり音を立てたりしないでしずかである状態である。

○其日に限つては、妙に生徒一同が静肅で、参観人の居ない最初の時間から悪戯なぞを為るものは無かつた。(破戒 305)

○だが、それほど打ち込み方だから、場内が、水を打つたやうな静肅さであることが、五百助にも、領けてきた。(自由学校 143)

2.2.4 味

- (a) あまい, すっぱい, すい, しおからい, しょっぱい, にかい
 (b) からい, しぶい, えぐい, えがらっぱい
 (c) あまざっぱい, ほろにかい, うすあまい, あまったるい
 (d) くだい, しつこい, 濃厚な, 淡泊な, あぶらっこい
 (e) うまい, おいしい, 美味な, まずい

(1) 味の種類・性質を表わす形容詞として, (a)(b)(c)にあげたような語がある。これらの語の意味は, たとえば「あまい」は砂糖をなめたときに生じる味覚というように, その味のする具体的な物によって示すのが手っとりばやい方法である。味の感覚内容そのものをことばによって述べることは非常にむずかしい。

味覚の基本的な種類として, 甘・酸・苦・鹹の4種類があり, これら4種の味は相互に独立した基本的性質であることが認められている。これらの四味を頂点とする「味の四面体」を考え, 中間の味はその四面体の表面の上に定位できるとする説もある。

<注> 宮城音弥編『岩波小辞典 心理学』(1956)「味覚」の項

(a)にあげた語は, 基本的な4種の味におよそ対応しているものと考えてよいだろう。味覚の全領域の中で, 一般語としての「あまい」「すっぱい」などがどういう範囲まで分担し, 表わすかということは, ことばの意味として問題になり得るであろう。そういう問題に対しては, 生理学・心理学などの基礎の上に, 実験的な研究をする必要があると思われる。

これらの語が味覚そのものに使われている例は資料内ではあんがい少ないものが多い。ここでは, それぞれの語が味覚に関して使われている本来的な用例をあげ, 気づいたことを言いそえるに止まる。

(2) まず, (a)にあげた, 基本的な4種の味を表わす語から見ていくことにしよう。

「あまい」の味覚に関する用例は, 多く次のように糖分の味に使われている。

○ですから夜食として, 単に甘いモチ菓子にばかりならず, 牛乳や牛乳にお砂糖と卵黄をいれたのみ物, (サンデー毎日 1956年10月14日 54)

○果肉の緻密な事は林檎中一番で, 全然酸味のないのが特徴です。甘い一方の林檎の好きな方にはもってこいの品種でしょう。(それいゆ 1956年41号 87)

次の例の「種米」の主な成分は澱粉でも, かんでいるうちに糖分に変わってきて「あまい」味になるのであろう。

○苗時には甘い種米を噛んだ。(むらきも 123)

しかし糖分以外にも, たとえばサッカリン・ズルチンのようにひじょうに「あまい」ものはある。

次の例では、「甘味」は「あまみ」あるいは「かんみ」であろうが、久しぶりにとることのできた塩分の味について使われている。

○私は膝まで海に入り、水筒で海水を汲んで心行くまで飲んだ。十数日ぶりで味ふ塩の味は、よく知った鹹い味に、かすかな甘味を交へてゐた。(野火 75)

たとえば、煎茶の味の中にもわずかな「あまい」要素があるように思われる。

「あまい」は語史的には、美味を意味する「うまい」と関係が深いといわれる。現在でも使われる慣用句「あまい汁を吸う」「うまい汁を吸う」(もあるが)においては、「あまい」は美味な味の代表的なものとして扱われているといえよう。しかし、現代語の「あまい」の語義としては糖分の味やそれと同じような味がするというにすぎず、美味だというような要素が含まれていないことはいまでもない。(分析例35)

「あまい」は上記のような味を表わすのが味覚に関してのおもな用法であるが、ほかに、塩味のうすいことを表わすこともある。(分析例68)

「すっぱい」は酢や梅ぼしの味などが代表的なものであろうが、未熟な果物や、古くなって変質した食品などに使われた例がある。

○「うんう、赤いのを食べたら酢っぱかった。」(桑の実 78) <桑の実が主体>

○味は、少し酸っぱくなくなっていたが、結構、食べられた。(自由学校 162) <オランダ・チーズが主体>

○七日も八日も経つてやつと二人で持つて行つたが、最早其時は雉子は酸っぱくなくて居たそうな。(思出の記・上 83)

次にあげる例は、「すっぱい」が味覚ではなくて、すっぱいような感じのにおいを表わしているであろう。

○酸っぱい酒の匂いが臭くて焦々する。(放浪記 104)

○寝具どころか、一番、困ってるのは、下着類である。これは、駒子の想像どおりで、合シャツでは暑いのを、我慢して働くから、酸っぱいほど、汗臭くなってしまう。(自由学校 188)

「すっぱい」「すい」を含んだ慣用的な語句の用いられた例がある。

○幸子が口を酸っぱくして教えるのだったが、(厭がらせの年齢 284)

○口をすっぱく言ったところで、先方じゃ馬の耳に念仏だよ。(厭がらせの年齢 278)

○仮令口の酸くなるほど他の事を話したところで、自分の真情が先輩の胸に徹(こた)る時は無いのである。(破戒 103)

のような例にみられる「口をすっぱくして言う」「口のすくなるほど言う」などの言いかたは、同じことをくりかえしてしゃべるようすを表わすのによく使われるが、多くの国語辞典には取り上げられていない。

○およそありとあらゆる社会の酸いと甘いとを嘗め尽して、(破戒 101)

の例にみられる類として「すいも甘いも知っている」「すいも甘いもかみ分けた人」な

どの言いかたがある。人生のさまざまな経験を味覚にたとえたこの句の中で、「すい」と「あまい」とがさまざまな味の中の対比的な例として使われているわけである。

次の例は慣用句ではないと思われるが、注目されるものである。

○未亡人は酸っぱく、口をつぼめて笑った。(真知子・前 186)

○伸子はエプロンの紐を解きながら、酸いやうな笑ひで口元を歪めた。(伸子・上 175)
いずれも笑いかたの特徴を表わしているようであるが、非常にすっぱいものを食べたときにする口のあたりの動きと似ていることを表わしているのであろうか。

「しおからい」「しょっぱい」は塩の味がつよいことを意味するが、塩分を含んだ食品や、汗について使われた例がある。

○米の成分が含水炭素でありその上、他の副食物に恵まれぬ為か農村では塩辛い、美味の漬物を名産にしてゐる。(文芸春秋 1954年5月 270)

○宏の母親は、卵を二つ奮発して、ひどく塩からい玉子焼の弁当を作った。(潮騒 51)

○お品は俯伏したなりで煙臭くなつた鰯を喰べた。「どうして塩辛^{しよっぱ}かあ有んめえ」
(土・上 33)

○膝小僧をすりむいた私は涙のシオからいのをのみこんだ。(特集文芸春秋 1956年 赤紙一枚で 27)

○塩っぱい涙をくくみながら、声を挙げて泣き笑っていると、凸坊が驚いて玩具をほうり出し一緒に泣き出してしまった。(放浪記 275)

「しょっぱい」は言語地理学的には、おもに東日本に分布する語である。^{<注>}

<注> 国立国語研究所報告30—1『日本言語地図1』(1966)第39図「しおからい」
「にがしい」はキニーネやカフェインの味であるが、薬や野草の味に使われた例がある。

○「お薬はにがくつて？」と、上田が訊ねると、

「いゝえ、にがくない」(生まざりしならば 220)

○こないだ食べたのは、ほんとは食べられないんですけど、だけど毒にはならないんですけど、などといって、野辺の香りどころの話ではないが、こっちは何を食わされてもみんなビールの肴にしてしまうから、イヤにツンツン匂うやつでも苦いやつでも別に気にかからない。(私の人生観 43)

「にがしい」に対して、「舌にいやな味を感じる」(例解国語辞典)のような語釈を与えている辞典が多い。たしかに「にがしい」味は不快であるばあいが多いかもしれない。上の例においても、「にがしい」は歓迎されない味として現われている。

「良薬は口に苦し」ということわざや、「苦虫をかみつぶしたよう」という慣用句においても、「にがしい」味は不快な味(の代表的なもの)として扱われている。

○時雄はわびしい薄暮を苦い顔をして酒を飲んで居た。(蒲団 74)

のような、不愉快そうな表情のようすを表わす「にがしい」も、それが「にがしい」味を経

験したときの表情と似ているために生じたものであろう。

しかし、いうまでもなく、いやな味は「にがい」味のほかにもあるので、「舌にいやな味を感じる」という規定は広すぎる。また、「にがい」が必ずしも「いやな味」であるとも限らない。

○鶴来が、「よう、よう……」と甘ったれたような声を出して、「おれには渋いのをくれよ。うんと渋いの。うんと濃くして、苦いやつ……」としつこく茶をせびる。

(むらぎも 157)

○而して苦い清涼剤でも飲んだやうに胸のつかへを透かしてゐた。(或る女・前 215) などはむしろ積極的に求められる味としての例である。また、ふきのとうなどは、その「にがい」味が賞味される。

(3) 以上、便宜上まず四つの基本的な味を表わす形容詞をあげたが、(b)にあげた「からい」「しぶい」などの他の形容詞も言語的にみてそれらと特に区別される理由はないと思われる。

「からい」は舌をつよく刺激するきびしい感じの味だといえよう。代表的には、とうがらし・からし・カレー粉・大根おろしなどを食べたときの、舌がひりひりするような味である。

○「名物のライスカレーはいかゞでしたか。とても辛くて内地の方には食べられないでせう」(河明り 295)

塩味が強いことも「からい」であらわされることがある。

○辛いあり合ふ茶碗でそつと舐外の水を掬つて、一口。あつ——咽返つた、鹹^{むせかへ}いの、鹹^{から}くないので、今思ふても——咽が痛い。(思出の記・上 69)

上の双方の味が「からい」であらわされることは、日本語が感覚を区別する上で大まかであることの例にあげられる。塩味に関する「からい」だけを分化させた「しおからい」「しょっぱい」については(2)の中でふれた。

「からい」がさす味の種類は、上の2種のほかにも「からい酒」(からくちの酒)のよなばあいもある。次の例は酒類に関するものである。

○彼聶男が何か言ふと、チヨン髻の男はやがて温かいどろどろした辛いものを咽せるに構はず僕の口に注ぎ込むで呉れた。此は濁酒であつた。(思出の記・上 184)

○「僕はこんな時は何か辛いものを飲みたいんだけれどな。」(波 301)

酒の味について使われる「からい」について広辞苑は「こくがあって甘味の少ない酒の味にいう。」と説明している。からくちの酒でも深いゆたかな味をもっているとはかぎらないから、「こくがある」という性質は「からい」という性質とは別であらう。

「しぶい」は渋柿や茶の葉などのタンニン質の味である。

○白墨の粉にむせながら小使室の片隅で渋い茶をすすって一日を歩み去るのです(人

生手帖 1954年4月90)

○あらゆる草を、どんなに渋く固からうと、虫の喰つた跡によつて毒草でないと思はれる限り、採つて喰べた。(野火 125)

「えぐい」「えごい」「えがらっばい」「いがらっばい」は、あくのつよい食物などを食べたときの、舌よりものをいろいろと刺激するような感じがすることを表わす。たとえば「いもがら」の味である。資料内に用例はない。

(4) (c)には複合的、派生的な味の形容詞を並べた。

基本的な味の形容詞が二つくみあわさった形の複合形容詞としては「あまずっばい」「あまずい」もある。「甘味があつてすっぱい」(広辞苑)のように「すっぱい」の下位に属する語としてみるか、「甘みとすっぱみとまじった味の形容」(例解国語辞典)のように第三の味とみるか、問題がある。

○糸昆布を用いる場合は甘酸く煮たもので結びます。(婦人生活 1956年2月付録 家庭料理 369)

○柿の型をした紫の殻を裂くと、綿の花のやうな房が甘酸く唇に触れる。マンゴスチンも珍しかつた。(河明り 315)

「あまい」と「にがみ」がくみあわさった形の「あまにがみ」の例が1つあるが、具体的な味に関するものではない。

○私にも何となく甘苦い哀愁が抽き出されて、ふとそれがいつか知らぬ間に海の上を渡つてゐる若い店員にふらふら寄つて行きさうなのに気がつくと、(河明り 312~313)

味に関して「あまにがみ」という語があり得るかどうかはわからない。事実上の味としては、にがみの勝ったチョコレートや、ある種の水薬のように、あまさとにがさを含んだ味は存在するけれども。

「にがみ」に対する「ほろにがみ」, 「あまい」に対する「うすあまい」は、味の強さ・程度が小さいことを表わす系列に属するといえよう。「ほろにがみ」はビールの味についてよく使われる。

○あちらでは“レイシ”の未熟なものを小口切にして、ホロにがみ味を楽しむのだそうです。(婦人朝日 1956年4月31)

という例もある。「うすあまい」は味覚とはかけはなれた次の1例しかない。

○舞台暗黒。暴風雨の音。やがてその音次第に静まり、舞台ほの白くなり、うす甘き青空遠くに見ゆ。(出家とその弟子 15)

「あまい」に対する「あまつたらい」は、「あまい」の意味に不快さの要素の加わった派生語だと見られる。(分析例35)

(5) (d)にあげた形容詞は(a)(b)(c)にあげた味覚の種類を表わす語とは別の系列に属している。「あぶらっこい」以外は飲食物の領域を中心とする語ではなかろうが、味に関して使われることがある。そして、「くどい」「しつこい」「濃厚な」はこってりした、どぎつい、胃にもたれるような傾向をもつ側の味であり、「淡泊な」は反対にあっさりした、軽い傾向をもつ側の味である。これらの四語についてはいずれも味覚に関する用例がひとつもない。「あぶらっこい」は食物の脂肪の気が多いことを言う。

○臓物、焼鳥、焼豚、など、すべて脂っこく動物的なものを、店の者が驚くほど多量に、すばらしい速度で食ふのであつた。(冬の宿 97)

○爺さんにいわれて、一サジ含んでみると、ネットリと甘く、油濃く、動物性のシルコのように、なんともいえぬ、腹の張る味だった。(自由学校 175)

(6) 以上みてきた、味の性質をあらわす形容詞の系列のほかに、味のよさとわるさをあらわす系列として(e)にあげた「うまい」「おいしい」と「まずい」とがある。われわれが飲食物をとるときの感覚は、味覚だけでなく、嗅覚や、触覚・視覚などの複合したものだといわれる。それを、単に味覚の問題のように感じやすいのはことばによる影響もあるだろう。「おいしい味」とは言うが、「*おいしいにおい」「*おいしい舌ざわり」などとは言わないで、味覚の面だけに注目する傾向がつよい。

「うまい」と「おいしい」を区別するものは、現代共通語としては文体的なものだといえよう。「うまい」「おいしい」に対する「まずい」においては、「うまい」と「おいしい」との文体的な対立が中和している。

○泊まつたお客がみんなこのパンはうまいと云ひ、一人もまづいと云つた人がゐないさうだ。(週刊サンケイ 1956年3月11日 17)

の「まづい」は「うまい」とともに使われ、

○「ね、見並さん、果物でも何でも、おいしいのは上^{うは}つ皮のところね。心^{しん}を嚙ると、きつとまづいものよ。」(波 182)

の「まづい」は「おいしい」とともに使われている。

以上のほかに「美味な」もあるが、これはずっと文章語的である。

○野獣は獲物を捕えると先ず内ぞうから食う。それは野の獣にとって一番美味な個所だからだ。(世潮 1954年3月 199)

○水は山の水を引いたものらしかつたが、山の泉の水のやうに泥の臭ひがなく、美味であつた。(野火 75)

(7) 以上にみてきた、味に関する形容詞は、飲食物や、飲食物でなくても食用になるものについて、使われている例が多い。味覚は視覚や聴覚などとちがって、物を口に入れて味わうという、人間の積極的な働きかけなしには成立しない。そして、人間がふつ

う口に入れるものは主として飲食物であるために、上のような結果になるのであろう。

しかし、飲食物以外のものも、口に入れて味覚を生じるものであるかぎり、これらの形容詞の主体になることはできる。たとえば、薬については、「にがい」の使われた例を(2)の中であげたが、ほかに「あまい」の使われた例もある。

○それから、葡萄糖の注射液の残りを飲ましてあげませう。とても甘い。(本日休診 120)

また、涙について「しおからい」「しょっぱい」の使われた例を(2)の中にあげた。ほかに、

○母親の乳よりも甘い涙が、止めどもなく、あとからあとからと流れて来た。(多情 仏心・前 15)

という例もあるが、これは味覚そのものではなくて、心情的な「あまい」の要素が強いように思われる。

以上に見てきた飲食物やそれ以外のものは固体的ないし液体的なものであった。「たばこ」は嗜好品である点では飲食物の一面と共通点があるが、気体状のものを味わう点で性質が非常にちがっている。しかし、

○「おれもそれを買う。」といって買って、一と口吸って、「これはうまい。」という。(むらぎも 174)

○ドイツのタバコが、大戦の後まだまずいのだろうという気がして、(むらぎも 174)のように「うまい」「まずい」や、資料内の例はないが「にがい」「からい」なども使われることがある。空気についても「おいしい空気が吸いたい」などと言うことがあるが、このあたりになるとまだ比喩的なニュアンスが残っているかと思われる。

なお、これらの形容詞はいずれも、味を感じる人間が主体になることは、あまりないとみられる。たとえば、

○母親はそのまま膳棚のコップを取って、流しの水道のところへ行き、蛇口をひねって水を受けて飲んだ。その手が慄へてゐるのだつた。

「おいしい。」(帰郷 233)

○彼等は争ふやうに私の雑糞へ手を入れると、一つまみづつ頬張つた。

「うめえ」

と口むもりながら、めいめいにいつた。(野火 93)

○あゝ、うまかつた！ 満腹したね。(帰郷 202)

のような例をみると、話し手の感覚的な快感そのものをあらわしているようにも考えられる。しかし、

○「や、うまいよ、このフライ……」(自由学校 95)

○「こりゃァ、うまいよ。」

○「もっと、どうぞ。」(面白倶楽部 1956年7月 116)

ミルクというものは、久し振りだった。(自由学校 199)

のような例と比べ合せてみると、「おいしい!」のような例もやはり食べ物を主体だと考える方が無理がないように思われる。もっとも、たとえば何人かで会食していて一人が「おいしい。」と言い、他の人が「ぼくもおいしい。」と自然に言えるとすれば、「おいしい」には感情形容詞的な面もあるということになる。(「うまい」「おいしい」「まずい」には接尾語「～がる」もつくことができる。たとえば「まずがって少しも食べない」などのように。1.1.1 を参照。)

(a)(b)(c)にあげたような味覚の性質を表わす語、たとえば「あまい」「すっぱい」などは「ぼくもあまい(すっぱい)。」のような言い方は普通には成り立つまい。また、「すっぱい」には「～がる」がついて「すっぱがる」が成立するが(資料内の用例はない)、それ以外の語には「～がる」はつきにくいであろう。「あまがる」という1例があるが、この「あまい」は味覚と直接には関係のなくなった別義だと考えることができる。

〇考へてみるまでもなく馬鹿らしくつてならないばかりか、度ごとにおいそれと云ふ目を出してやつてみたひには、いよいよもつて甘がられ、増長されるは知れきつた話だつたけれども、それがどう云ふものか、いつもきつぱりと断りかねた。(多情 仏心・前 242)

したがって「あまい」「すっぱい」などには感情形容詞的な面はあまりなく、だいたい、飲食物を中心とした、ものを主体とする属性表現の形容詞だといえよう。

2.2.5 におい

においに関する形容詞の数はまことに少ない。次にあげるぐらいしかみあたらない。ただし、非常に文章語的なものとしては、ほかにも「芳烈な」「芳醇な」のような、においに関係のある語がある。

- (a) くさい, こうばしい, かぐわしい
- (b) あおくさい, なまぐさい, ちなまぐさい, きなくさい, こげくさい, どころくさい, つちくさい, 小便可くさい, 便所くさい, ゴムくさい, ……

(1) (a)のうちの「くさい」はにおいに関する形容詞のうちで、よく使われる代表的な語である。「くさい」はにおいの種類・性質を具体的に規定する語ではなく、どんなにおいであれ、不快に感じられるようなにおいがすることを言う語であるから、味覚における「まずい」とやや似た位置を占めているといえよう。「まずい」に対しては「うまい」「おいしい」があるが、「くさい」に対しては、快く感じられるにおい一般を表わす形容詞が欠けている。「においがいい」「いいにおいだ」のような連語がその役割りを分担している。ただし、詩語的なレベルでは「かぐわしい」がその位置を占めるもの

として存在する。ある狭い範囲に限られた、よいにおいを表わすものとして、「こうばしい」がある。(分析例36)

「くさい」の主体になるものは何であろうか。

○その室に入つてみると、食ひちらした米がこぼれ、まだ男の臭い匂が漂つてゐた。

(冬の宿 141)

○どこかでハタハタでも焼いているのか、とても臭いにおいが流れて来る。(放浪記 24)

のようなばあいは、「におい」が主体であり、その「におい」はそれを発するものから離れて空中に漂つたり流れたりしている現象的なものである。しかし、

○その夜始めて、明子は肌をさす臭い毛布の下で、堪え難い哀憐の情に泣いた。(くれない 39)

○臭い山の芋を煮て何にするかは不明であるが、どうやら彼は専らこの作業のため、こゝへ来てゐるらしい。(野火 19)

のようなばあいには、においを出すものを表わす具体名詞と直接にむすびついていて、ものが主体だと考えられる。

なお、くささを感じる人間が主体として表わされた用例はみあたらない。

○薄暗い中で、漁夫は豚のやうにゴロゴロしてゐた。それに豚小屋そつくりの、胸がすぐゲエと来さうな臭ひがしてゐた。「臭せえ。臭せえ。」(蟹工船 10)

のように、主体があらわされていない例はすこしあるが、話し手を取りまく空気など、あるいはにおいを発するものが主体だと考えても矛盾がなさそうである。

(2) (b)にあげた「〜くさい」という形の複合形容詞は、固定したものもあり、臨時的に作られるものもある。後者は、たとえば次のようなものである。

○機械油くさい松さんの菜っぱ服をみていると、私はおかしくもない笑いがこみ上げて来て仕方がない。(放浪記 83)

○便所臭い三等車の隅っこに、銀杏返しの鬘をくつつけるようにして、私はぼんやりと、山へはいつて行く汽車にゆられていた。(放浪記 253)

これらは、においを発する物の名に「くさい」をつけて、そのにおいを表わしているわけで、特定の物とそのにおいとが分離していない、具体的なあらわしかただといえよう。しかし、

○便所臭い、漬物樽の積まさらる物置きを、コックが開けると、薄暗い、ムツとする中から、いきなり横ツ面でもなぐられるやうに、怒鳴られた。(蟹工船 50)

○私は二升の米を背負って歩くので、はつか鼠くさい体臭がムンムンして厭な気持ちだった。(放浪記 182)

のような例では、文字どおり便所におい、はつかねずみにおいを表わしているので

はなく、それに類するにおいという意味だから、やや一般化された表わし方になっている。さらに、「あおくさい」「なまぐさい」などは物の名とは関係がなく、一般的にある種のおいを表わす語になっている。

○そよそよと流れて来る夜深の風には 青くさい稚の花と野草の匂が含まれ、(つゆのあとさき 25)

○石炭酸の臭ひが枕からも、ベッドからも、壁からも、床からも、至るところから襲つて来た。その青くさい臭ひをかいただけで、彼はもう気が遠くなつたやうな心持がした。(波 239)

○ここまできると海の匂いはなまぐさい魚のにおいになる。(人間の壁・上 110)

○お澄のもとで一夜をあかした翌日の午ごろ、もう一度、ごく少量のチョコレート色をした腥いものを、ソツと便所で吐いて来たが、いゝ按配にそれきりでをさまつて了つた信之は、この最初の吐血について、誰にも一言も洩らさなかつた。(多情仏心・前 249)

○清美学園の焼跡には、遊動円木が半こげになって、キナ臭い匂いの中にゆれている。(実話雑誌 1956年5月 134)

なお、ここにあげた「～くさい」の形の形容詞には、においの領域から、より抽象的な他の領域にも転じて使われているものが多い。

○同時に同じ女を失つた男が二人よつて、愚痴の云ひ合ひをするなどは、洒脱どころか、歯がうきさうに生々しく、青臭く、そして厭味ったらしい話ではないか! (多情仏心・前 345)

○この生ぐさきニヒリストは腹がなおると、じき腹がへるし、いい風景を見ると果然としてしまうし、良い人間に出くわすと涙を感じるし、困った奴なり。(放浪記 218)

(3) においの質を一般的に表わす、においの領域特有の一次的な形容詞は見当らない。(2)でみたように、わるいにおいの系統で、「なまぐさい」「きなくさい」などのような複合形容詞がわずかに見られるにすぎない。においの種類は多種多様なものがあるのに、これは色や味の領域と比べて、注目すべきことである。

もっとも、他の感覚領域から移行してきて、ある種のおいを一般的に表わす語として「あまい」がある。

○その白いインドジャスミンの花から、日本のくちなしに似た甘い匂いがかすかに杉の鼻さきをかすめた。(新潮 1956年5月 194)

○後に立つてある栗の木の青葉の間には、甘い匂ひのする栗の花がうす黄色に咲いてゐる。(桑の実 37)

上例にみるような、くちなしの花などの、花のにおいのほかに、香水のにおいのある種のものなどについても「あまい」が使われるだろう。

(4) においの質よりもむしろ、強さ、程度を主に表現する形容詞の例として、たとえば次のようなものがみられる。はじめの「くれない」の例は沈丁花の花についての会話である。

濃い

○「濃い匂い、ねえ。」

二人はその甘い濃い匂いの中に身をひたしながら、二人の話題に頭を垂れて歩いた。(くれない 30)

高い

○一鉢の匂の高い蘭で飾られた茶卓の向側から、(真知子・前 121)

強い

○印度人の下男が廊下の隅でカレエの木の実を、石の組板で丸石で潰して粉末に磨つてゐた。辛さうな乾いた強い匂ひがあたりに漂つてゐた。(帰郷 79)

激しい

○玄関に近い北向きの三畳の彼の部屋は、土瓶で煎じてゐるその持薬の鼻持ちならぬ臭気がいつも充満してゐて下女さへも彼の所には近づかなかつた。彼だけがその激しい臭ひの中に無感覚に毎日毎日必死に法典を誦誦しつづけてゐたのである。(厚物咲 18)

強烈な

○隣の古着屋さんの部屋では、秋刀魚を焼く強烈な匂ひがしている。(放浪記 157~158)

ほのかな

○時々、ポケットから、真っ白なハンカチを出して、汗を拭くが、その度に、オー・ド・コロンのほのかな匂ひが、駒子の鼻さきへ、流れてきた。(自由学校 78~79)

上の諸語はにおい特有の語とはいえないものが大部分である。ただし、「真知子」の例にみられるような「においがたかい」や、「かおりがたかい」はにおいに特有の、慣用句的な連語である。すなわち、「*味がたかい」「*色がたかい」などとはいことができない。

おわりにあげた「ほのかな」がにおいの強さが小さい側に、その他の語がみな強さの大きい側に属することはいうまでもない。

2.2.6 その他

以上にみた諸分野以外には、まったく断片的な分析になってしまったが、ものに関する属性を表わす語について、次のような記述も試みた。ただし、形容詞に属する語は少なく、各種の情態語が多い。

(1) 主体・運動(大/小)

- ごろごろ／ころころ (分析例37)
- (2) 主体・運動 (大／小)
ぐるぐる／くるくる (分析例38)
- (3) 主体 (液体)
なみなみとくいっぱい (分析例39)
- (4) 点／線
とがったくするどい (分析例40)
- (5) 度数 (2回以上)
まがりくねったくまがった (分析例41)
- (6) 基準
はすに、はすかいにくななめに (分析例42)

2.3 ひとに関する属性

2.3.0 はじめに

形容詞の中で、たとえば、

かしこい、やさしい、がんこな、いじわるな。い

のような語は、物体のもちうる属性ではなく、人を中心とする有情物の属性を表わすものであることははっきりしている。

○官庁街の素気なく白々しい建物の数々。支那街の異臭、雑沓、商業街の股賑、私たちはそれ等を車の窓から見た。(河明り 302)

○連日の雨にしめつて燃えなくなつて居る薪の煙が、風の具合で、意地わるく毎日座敷の方へばかり這入り込んで来て天井一面に重くのさばつた。(田園の憂鬱 51)

では、「建物」について「素気なく」「白々しい」、「薪の煙」が室内にはいつてくる様子について「意地わるく」が使われている。このような、人に関する属性を表わす形容詞が、非情のものやその動きに使われた例は、意味上の制限を破った、いわゆる擬人法である可能性をもっている。

人はものと違って、有情の存在の代表であり、また集まって社会を構成している。一般に、ものよりはるかに複雑な、多面的な属性をもっている存在だといえよう。人には、内面の感情・気分や資質・性格という目に見えない方面と、外面の表情・態度・言語・動作などの方面とがあって、それらの両面が密接に関係しあっていることは、形容詞の意味を考える上にも大切なことであろう。

上に例をあげたような、人に関する属性を表わす形容詞のグループを考えることは、さほどの困難もなくできると思われるが、意味によってその下位区分を行なうことは、ものの属性を表わす形容詞よりもずっと複雑でむずかしい。ここではそのような下位区分を試みることはせず、2.3.1 以下に述べるような 2, 3 の観点を設けて、それによ

て相互に区別されるような側面をもつ語の例をあげる試みに止まった。

人は静的な存在ではなく、活動性のゆたかな存在であることの反映であろうが、人に関する属性を表わす形容詞の主体になるものは、多面的であることが多いようである。たとえば、人の性情や心的態度そのものは目に見えないものであるが、それが表情や動作などに表われると有形的なものとしてとらえられる。性情の持ち主である人間を主体にするだけでなく、そういう性情の表われた表情的な体の部分や動作なども主体にすることが多いようである。

次のページの表は人間の性情などに関係する形容詞を10語、例としてとり、それと表情的な性質をもつ名詞や動詞との結びつきを調べてみたものである。

◎の印をつけたのが資料内にその結びつきの実例があったものである。1例として「やさしい」についてだけ、その実例をあげてみよう。「あかるい」「かたい」については第2部「あかるい」の〔12〕〔13〕、「かたい」の〔32〕にあげた用例を参照)

○歯のないお婆さんはきんちやくをしぼったような口をして、優しい表情をする。

(放浪記 135)

○ひとりきりでコーヒーを飲んでいる初老の婦人がいた。髪には白髪が多く、頬には年令のしわをたたんでいたが、やさしい眼と艶のいい皮膚をしていた。(人間の壁・上 234)

○その男の方では、五百助の優しい声に似合わぬ巨体と、整った服装に、一方ならず、ビックリした様子だった。(自由学校 156)

○「謙作。——謙作」と下で母の呼んでいるのに気がついた。それは気味の悪いほど優しい調子だった。(暗夜行路・前 10)

○安田の顔は歪んだ。しかし言葉は意外に優しくかつた。(野火 148)

○何処迄も相手になつて、其意味を説明して呉れて、もう晚いから黙つてお寝と優しく言つて、又彼方向あちらいて了つた。(平凡 26)

○恋でもない、恋でなくも無いといふやうなやさしい態度、時雄は絶えず思ひ惑つた。(蒲団 15~16)

○親の気分を察して、始終優しい様子で親に接しなければならないという。(厭がらせの年齢 294)

○なんてお優しいおところでございましょう。(出家とその弟子 201)

○彼女は平凡な、やさしい女だった。(人間の壁・上 281)

表を全体としてみると、かなり多くのマスが◎で埋められている。すなわち、性情などを表わす形容詞と、表の縦の欄に並べたような名詞や動詞との結びつきは相当に実例が多い。また、空欄になっている結びつきも、可能性としてはあり得ると感じられるものが多い。人間の性情などを表わす形容詞が、人間の表情や動作などにその性質が表われていることを表わすのにも使われることは、かなり普遍的な現象だといえよう。

	あ か る い	お だ や か な	柔 和 な	や さ し い	き び し い	ま じ め な	か た い	冷 淡 な	熱 心 な	む じ ゃ き な
表 情	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
か お	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎		◎
か お つ き ・ か お い ろ め		◎	◎	◎	◎		◎		◎	◎
め つ き					◎	◎	◎			
ま な ざ し ・ 視 線	◎				◎			◎	◎	
み る ・ な が め る			◎		◎				◎	
こ え	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎		◎
調 子 ・ 口 調 ・ 語 調 ・ 口 ぶ り	◎	◎	◎	◎	◎	◎			◎	◎
こ と ば		◎		◎	◎					
は な す ・ い う	◎	◎		◎	◎				◎	
態 度	◎			◎	◎	◎	◎			◎
よ う す		◎		◎						◎
性 質 ・ 性 格	◎	◎			◎	◎				◎
感 情 ・ 気 持 ・ 心 持 ・ 心	◎			◎						◎
(人 を 表 わ す 名 詞)	◎	◎	◎	◎	◎	◎			◎	◎

人の属性に関する形容詞が、人間からもっと独立的な外的なものに移行して使われることもある。

○漢学者らしい風格の、上手な字で唐紙牋に書かれた文句には、(或る女・前 50)

○題名の示唆するようなイヤらしいものではなく、まじめな作品。(週刊新潮 1956年 6月26日 14)

○けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰つては、流石の時雄も注意をせずには居られなかつた。(蒲団 9)

2.3.1 主体の範囲・制限

人間の性質などを表わす形容詞の主体になりうるものは、一言で言えば人間であることはいうまでもないが、こまかく見れば主体になりうるものの範囲は語によって広狭さまざまである。その範囲の違いは、その語の意味内容と関係しあっているところが大き

いと予想される。

まず、主として人間に使われる形容詞が、次の例のように動物を主体として使われることがある。こういうばあい、それが語本来の用法なのか、比喩・擬人化なのか、判別のむずかしいことも多い。

○池のコイでも、手をたたいてエサを与えれば集ってくる。サルのようにかしこい動物に、それができないはずがない。(高崎山 16)

○「大丈夫だよ。形は怖いが、おとなしい犬だから」(田園の憂鬱 57)

○高崎山のサルのあいだでは、キャラメルをたべることが流行した。かれらは、器用に紙をむいて、キャラメルをたべた。(高崎山 37)

○快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身軽く滑走し、時時その尾を水にひたして卵を其処に産みつけて居た。(田園の憂鬱 9)

○岸の草の中に居た蛙は剽軽に其花へ飛び付いて、それからぐつと後の足で水を掻いて向の岸へ着いてふわりと浮いた儘大きな目を睨つてこちらを見る。(土・上 86)

動物にも使われうる語のばあいには、どういう範囲の動物に使われるかということが、属性の主体の問題として問題になり得よう。たとえば「おとなしい」は、上に引用した犬のほかに、山羊・牛に使われた次の例がある。

○青木さんは小さい台へ腰をかけて、両手で腹の下の乳房を揉み下すやうにして、下へ置いたバケツへ乳をお搾りになる。次にはもう一つの方へ行かれる。山羊は大人しくちつとしてゐる。(桑の実 39)

○尤も、多くの牝牛の群の中へ、一頭の牝牛を放つのであるから、普通の温順おとなしい種牛ですら荒くなる。(破戒 106)

ほかに、ねこ・うさぎ・くまなどの、人に飼われるような哺乳類にはかなり広く使われることがありそうに思われる。しかし、一般に資料の性質からいっても、動物のことが話題になっている部分はごく少ないので、用例からこの問題に接近することはほとんど不可能である。(動物に関する例が数個もあった「おとなしい」などは例外的に多かったほうである。)

さて、人間プロパーの範囲内に目を転ずると、人間の性質を表わす形容詞が必ずしも老若男女すべての範囲にわたって使われるものではないことがわかる。

けんこうな、おとなしい、おこりっぽい、あきっぽい

などは、老若男女を問わず、ひと一般について広く使われるであろう。しかし、たとえば、

しんせつな、まじめな、けいはくな

のような語は幼児にはふつう使われないのではないか。上にあげた語例の中で、「おとなしい」はたまたま資料内に幼児に使われた例がある。

○あれでは、どんな温順おとなしい赤ん坊だつて寝つきはしないだらう。(真知子・前 135)

他方、「しんせつな」「まじめな」などが幼児に使われた例は見つからないが、幼児には使われないという否定の裏付けは、かりに資料の規模をさらに大きくしたところでできない性質のものだと考えられる。ここでは、上のような筆者の推測が人々によってどの程度支持されるかを知りたいと考えて、小調査1の中で次のような項目を設けた。それはいくつかの「(形容詞連体形)+赤ちゃん」という結びつきに対する反応を求めるものであったが、その結果は以下のものであった。(各項目に対する2段の数字のうち、上段は女子大生23人、下段は女子高校生51人の結果。「親切な」「涙もろい」などについては、へだたった項目で「子ども」との結びつきをも調べた。対比の便宜上、「赤ちゃん」のばあいと並べて、その結果をかかげた。)

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(イ) おとなしい赤ちゃん	{ 23 49	— 2	— —	— —
(ロ) 親切な赤ちゃん	{ — 1	3 3	20 47	— —
(ハ) 親切な子ども	{ 22 42	1 7	— 2	— —
(ニ) まじめな赤ちゃん	{ — —	2 6	21 45	— —
(ホ) けいはいな赤ちゃん	{ — 2	2 10	21 39	— —
(ヘ) けいはいな子ども	{ 6 15	13 26	4 10	— —
(ト) おこりっぽい赤ちゃん	{ 21 29	1 8	1 13	— 1
(ケ) 涙もろい赤ちゃん	{ — —	2 13	21 38	— —
(コ) 涙もろい子ども	{ 10 21	11 16	2 14	— —
(ク) しとやかな赤ちゃん	{ 1 3	4 10	18 38	— —
(カ) しとやかな女の子	{ 22 42	1 7	— 2	— —
(セ) 正直な赤ちゃん	{ — 3	6 13	17 35	— —
(ソ) 強情な赤ちゃん	{ 16 12	6 18	1 21	— —

以上は、ごく小さい、しかも女子学生だけの調査にすぎないが、

しんせつな、まじめな、けいはいな、涙もろい、しとやかな、しょうじきな
は「赤ちゃん」については使われにくいと意識され、

おとなしい、おこりっばい（女子大生のみ）、ごうじょうな（女子大生のみ）は「赤ちゃん」についても使われると意識される傾向が出た。この結果は人々の一般的な傾向を表わすものかどうかはわからないが、小調査にさきだつての推測にはおよそ合致するものであった。「おとなしい」や「おこりっばい」などは精神生活の未発達な幼児でも持っていて周囲の人に示される、先天的・気質的な特徴を表わす語であるといえよう。他方、「しんせつな」「まじめな」「けいはくな」「涙もろい」などは精神が発達し、対人関係や社会生活がある段階に達してからはじめて問題になりうる性質であるために、「赤ちゃん」とは結びつきにくいのであろう。

幼児はいうまでもなく、「子ども」の段階でもまだ、大なり小なり使いにくい形容詞もあるだろう。上に小調査1から引用した中では、「親切な赤ちゃん」は大部分の人に「あきらかにおかしい」とされたが、「親切な子ども」は逆に大部分の人が「普通だと感じる」と支持した。「けいはくな子ども」「涙もろい子ども」は、「赤ちゃん」のほかに比べると、支持される傾向がややふえたにすぎない。「しとやかな女の子」はだいたい普通の言いかたとして支持される傾向を示した。もし、この結果が一般の傾向と背反したものでないとするれば、「しんせつな」「しとやかな(女の子)」は子どもにはもう使えるが、「けいはくな」「涙もろい」は子どもの段階でもまだ多少なり使いにくい語だといえよう。

同じく小調査1の中で、「気さくな」「昔かたぎな」と「子ども」の結びつきについても調べてみた。

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(カ) 気さくな子供	{ 9 25	10 18	4 7	— 1
(ク) 昔かたぎな子供	{ 3 25	9 18	11 7	— 1

上のように、はっきりした傾向が出なかった。やはり抵抗感を伴う結びつきのように思われる。また、小調査の項目には入れなかったが、

じょさいない、らいらくな、いろっばい
などの表わす性質も、人間がある成長段階に達してはじめてもちうる属性である。

上にみたように、幼児（や子ども）には使わない（使いにくい）という制限のある形容詞は少なからず存在するようである。しかし、こういう制限を別にすれば、人の性質を表わす形容詞は、老若男女を通じて、人一般にかなり広く使われるものが多い。しかし、数多くはないが、年齢段階や性に関して、せまく制限されている語もある。

<年少者>

人の性質・ようすなどを表わす形容詞の中で、人一般ではなく、年少者を主体とする

ものがある。たとえば、

あどけない、がんぜない、やんちゃな、わんぱくな
 のような語である。年少の程度は語によって様ではないが、いずれも成人には使わ
 ないのが原則だといえる。この、成長段階上の制限をぬきにしては、これらの語の意
 味を規定することができまい。

「あどけない」は年少者特有の、成人すると失せてしまうような、かわいらしい無邪
 気さともいうべき性質を表わす点で「むじゃきな」よりも狭く限定されていると考えら
 れる。(分析例43)

- 「がんぜない」は次にあげる4例がすべてであるが、いずれも年少者が主体である。
- あゝ、少年の空想を誘ふやうな飴屋の笛の調子は、どんなに頑是ないもの耳を染
 ませるであらう。(破戒 127)
 - まだ恋愛といふ自覚はなかつたであらうし、あつても相手は頑是ないこいさんであ
 る上に累代の主家のお嬢様である(春琴抄 147)
 - 頑是ない子供の間にも家族の力は非常な勢ひを示して居る。(土・上 116)
 - 平尾は汗だくになって童顔をゆがめている。頑是ない子供のもようであった。(講談
 倶楽部 1956年9月 118)

「やんちゃな」「わんぱくな」は、子どもらしい自己中心性、乱暴さ、活潑さなどに
 関係する語で、主体に制限のない「わがままな」「らんぼうな」「粗暴な」などと区別
 される。これらの語の資料内での用例はいずれもごく少ないが、小調査1の中に関係項
 目が2, 3あるので、それも引用しながら述べてみよう。

「やんちゃな」の用例は語幹が造語成分として使われているものまで含めても、次に
 あげる3つしかない。

- 教室でやんちゃな男の子が外で親切な少年になっている姿。(人間の壁・上 218)
 - 「ピチピチしてるな。面白さうな女だな。だが、やんちゃで、とてもふつくりした
 女の味なんかなくて……。」と嘉門は独り言のやうにいひながら、どんな女か詳し
 く話せとせがむので、私はしやべつた。(冬の宿 122)
 - いつか東映で『テキサスのヤンチャ娘』って映画とったとき、(平凡 1956年5月 103)
- 「冬の宿」の例はバイロンの情人の一人カロライン・ラムの肖像の写真を眺めながら
 の「嘉門」の言葉であるが、引用文の少し前に「襟の高いジャケットを着た少年のやうな
 女の姿が描かれてゐる。」とある。このばあい、文字どおり年少者とはいえない人物であ
 るろうが、子どもっぽく活潑で、女性らしく成熟していないような感じを「やんちゃな」
 で表わしているのであろうか。

小調査には次の2項目がある。

	普通	やや普通で ない	あきらかに おかしい	(無答)
(ウ) やんちゃな女の子	{ 21 40	2 9	— 2	— —
(ロ) やんちゃな青年	{ 1 1	6 8	16 42	— —

上の結果では、「やんちゃな」は「青年」にはもはや使いにくい語だと感じられている傾向が出た。また、「やんちゃな」は男の子に限らず「女の子」にも普通に使われると意識される傾向が出て、上にあげた用例にみられるところと一致した。

「わんぱくな」は、語幹が造語成分として使われているにすぎないものまで含めても、次の2例しかない。

○其娘の弟で即ち峠谷家の家督であらふ十歳位の遅ましい骨格の伶俐そうな腕白そうな男児と、(思出の記・上 221)

○棺の後は定津院の長老、つゞいて腕白顔な二人の子坊主、(波 111)

「わんぱくな」は女の子にも使えるかどうかを小調査1でためしてみたが、下のよう結果は人数が割れてははっきりした傾向を示さなかった。しかし「やんちゃな女の子」が大部分の人に「普通」とされたのに比べると支持が少ない。「わんぱくな」は男の子に多く使われる語だという傾向があって、それを反映しているのかもしれない。

	普通	やや普通で ない	あきらかに おかしい	(無答)
(ウ) わんぱくな女の子	{ 6 18	10 19	7 14	— —

なお、あるいは年少者を主体とするのではないかと思われるけれども、そうは言えない用例があったりして、疑問の残る語をいくつか、参考的に次にかけておきたい。

あいくるしい

「かわいい」「かわいらしい」「あいらしい」「かれんな」などととも一群をなす語であり、例解国語辞典は「子供などが、かわいらしい」と主体を子どもなどに限定している。用例は次にあげる2つだけである。

○が、二重險の愛くるしい眼は、どう見てもきぬ子にそつくりだつた。昂子たからこといつて、これがこゝの主婦だつた。(波 146)

○物言ふ時齒並ひまきの好い、齧かの種のやうな齒の間から、舌の先を動かすのが一際愛くるしく見られた。(つゆのあとさき 38)

「波」の例は引用の直前に「二十二三の」という年齢についての指定がある。2例とも、その主体が若い女性ではあるが、子どもではない。

いたいけな

うつくしく、かわいらしいようすを言う意味では子どもを主体とすることはいうまでもないが、用例はない。「いたいたい」に近い意味での用例は、次の1例だけであり、若い女性について使われている。

○娘のすることなすことを想像すると、いたいけな気がして、たゞほろりとする感じに浸れるだけに彼はなつて来た。(河明り 337)

りはつな

「かしこい」「りこうな」などが広く使われるのに対して、現代語では子供に使われる傾向があるかと思われる。次にあげる唯一の用例は、時代小説中の会話文なので、ここで反証的な参考例としなくてもいいかもしれない。

○当將軍吉宗公は紀州家より拔擢されて將軍になられた利発なお方、(小説の泉 1956年5月 330)

<老人>

「かくしゃくたる」は「げんきな」「じょうぶな」などが一般に広く使われるのに対して、老人についてだけ、年をとっても気力・体力の盛んな様子を表わす。(分析例44)

「形容詞」の範囲から外れるが、「よぼよぼの」は、老人特有の足元のおぼつかないようすなどを表わす点で、そういう制限のない「ふらふらの」などと区別される。

<女性>

次に、性に関して、女性にしか使われない形容詞がある。たとえば「はすっぱな」は、辞典でも「女の態度や行いが軽はずみで下品なこと。またその女。」(例解国語辞典)のように、主体が女性に限られていることを明記しているものが多い。資料内には次の3例しかなく、いずれも「あらくれ」の女主人公「お島」について使われたものである。

○独法師のお島は、草履や下駄にはねあがる砂埃のなかを、人なつかしいやうな可憐しい心持で、ぱつぱと蓮葉に足を運んでゐた。(あらくれ 19)

○お島のきびきびした調子と、蓮葉な取引とが、到るところで評判がよかつた。(あらくれ 30)

○「そんなに思ひをかけてる人であるなら、みんなくれてお仕舞ひなさいよ。その方がせいせいして、^{どんな}如何に好いか知れやしない。」お島は蓮葉に言つて笑つた。(あらくれ 69)

資料外の例であるが、「はすっぱな」が男に使われた文にたまたま気付いたので、参考としてあげておこう。

○が宇野さんの会らしく、皆がつましく集うた感じがあり、とりわけ、広津さんはス

ピーチがあたると、あぐらをかいたままで、はすっぱな物言いで、「もう、いうことはないよ。きみ」と幹事を手古ずらせた。(水上勉氏の文・朝日新聞 1969年9月20日夕刊)

○また、インタビューする男性アナが、「ひとことでどうぞ」式の、はすっ葉な聞き方をせず、相手にちょっとたちどまって考えさせる余裕を与えていたのもよかった。(放送評の欄。朝日新聞 1970年6月16日)

この2例は、別に女性になぞらえた文とも思われぬ。このような例もあるので、「はすっぱな」の主体が女性に限られるという制限は、絶対的なものだとはいえないにして<注>も、基本的には女性に限って使われる語だといってよいだろう。

<注> 前田勇『近世上方語辞典』(東京堂, 1964)の「はすは〔蓮葉)」の項には「①言動につつしみのないこと。言動の軽々しいこと。てんば。老若男女にいう。」とあり、その実例が示されている。この「はすは」が現代の「はすっぱな」につながる語であるとすれば、主体が女性に限られてきたのは、後からの変化なのであろうか。上に資料外から引用した、男に使われた例はむしろ本来の用法の流れをくむものなのであろうか。

「はすっぱな」と意味に共通性のある語、たとえば「けいはくな」は、男女にかかわりなく使われる。

○東京生れの信輔は軽薄に口をきいた。(帰郷 212)

○「来たね」

と云ふやうな野卑な言葉が、ボーイらしい軽薄な調子で声高に取り交はされるのを葉子は聞いた。(或る女・前 108)

○おしゃれで、酒好きで、都会的な軽薄さのある神倉喜久代先生であった。(人間の壁・上 288)

○隣の隣りぐらいの部屋で、大きな笑い声が起こる。軽薄なくらい花やかな声だ。

二人以上の、安吉と同年輩ぐらいの男女まじってのものだ。(むらぎも 167)

「はすっぱな」の主体が女性に制限されていることは、その意味内容の中核にも「けいはくな」「かるはずみな」などとは違った特色を与えているといえよう。

もう1つ、外来語にもとづく形容詞であるが、「チャーミングな」を例にしてみよう。資料内には次の2例だけであるが、いずれも女性が主体である。

○むしろ努めた感じで之丈けの事を云つたモニカの調子は、最早心に思ふ半分も云ひ現はし得ぬ、羞ぢらしい深い娘の口調ではなかつた。ましてそこにチャーミングな余情を含ませぬが為めの態とらしいあまい「舌足たらずさ」ではない。(青銅の基督 87)

○司葉子 チャーミングで女性的で若々しい。(ドレスメーカー 1956年11月 60)

この語は10年ほど前ごろの(女性)週刊誌にはさかんに使われていた。そして、ほとん

ど女性に関して使われ、「魅力」「魅力的な」が男にも女にも使われるのと対照的であった。^{<注>}「チャーミングな」の主体は女性に限られるとあってよいだろう。そしてその意味内容には、女性的なかわいらしさ、あいきょうの要素が含まれていると考えられる。

<注> 国立国語研究所報告28『類義語の研究』（1965）200ページ

上記の2例のような、主体が女性に制限されている形容詞として、用例にもとづいて分析を試みたものは、次のようなものである。それらの語の意味内容を規定するためには、主体が女性にかぎられることを前提的な1条件として欠かすことはできない。

しとやかなくものしずかな、上品な（分析例45）

あでやかなくうつくしい（分析例46）

なまめかしい、いろっぼい、あだな、濃艶な、妖艶な、凄艶な（分析例47）

以上のほかにも、主体が女性に限られる語が若干指摘され得よう。いずれも用例はごく少ないものばかりであるが、かんたんに列記してみよう。^{<注>}

貞淑な

○私はもう幾人愛する人に死なれたか知れない。慈悲深い法然様や貞淑な玉日や、か
いがかしいお兼さんや——（出家とその弟子 119）

○身を任せようとする瞬間にバイロンが流石にためらってしまった貞淑で端正なウェブスタ夫人の像（冬の宿 123）

貞節な（用例なし）

貞潔な

○さう思ふと、貞潔な心は俄かにおそろしくなつて、身じまひをしてから良人の位牌
を拝んだ。（潮騒 62）

不貞な

○自分が妊娠したと知った時、木津の子供を生むのだったら、どんなに嬉しいことであ
らうと、ひそかにそんな不貞なことを考えたので、そのために木津に似た子供が
生れたのではないかと思った。（週刊新潮 1956年12月10日 58）

あばずれな

ナ型の形容詞としての用例はないが、複合名詞の成分としての「あばずれ」と、動詞
「あばずれる」との全用例を参考までにあげる。

○珍しくアバズレ役を熱演する香川、（サンデー毎日 1956年10月21日 77）

○其の心持はあばずれた芸者が相撲を鼠麴にしたり、又女学生が野球選手を恋するの

と変りがない。(つゆのあとさき 82)

- 悪戯いたづら好きなその心は、嘉永頃の浦賀にでもあればありさうなこの旅籠屋に足を休めるのを恐ろしく面白く思つた。店にしゃがんで、番頭と何か話してゐるあばずれたやうな女中までが眼に留つた。(或る女・前 23)

おきゃんな

- 少女雑誌は、昔はセンチメンタルなものが主だったが、最近では、まずバレリーナかなんかの出世物語、あとはおきゃんな娘のユーモア、それが主で、(ニューエイジ 1954年5月 14)

おちゃっぴいな

- ちつとおちやつぴいなウルグワイ夫人とは齡のちがひばかりか、万事対蹠的なのはB博士夫人で、(世界 1954年4月 303)

おてんばな

- 「まあ、鈴さんが大きくなりましたこと。而して奇麗きれいにまあー」と母は後あと目送めくつて叫むだ。
「ははゝゝ、お転婆てんぱでな。(下略)」(思出の記・上 45)
- 顔と手が黒い木の部分にあるので浮き出し、着物と戸の関係もほどよく調和したので気持のよい画調となり、おてんばな若い舞妓の表現にふさわしい。(アサヒカメラ 1956年3月 39)
- 男みたいにお転婆てんぱな私なのにね。(帰郷 259)
- わたしなんかでも、山崎っていう文部次官がいたでしょう。あの人をつるしあげたり、藤沼都長官にねじ込んだり、おてんばてんぱだったわね。(人間の壁・上 239)

あられもない

普通にはあり得ないという意味から、せまく限定されて、女性の振舞などが女性にふさわしくないという非難をこめて使われることの多い語だといえよう。例解国語辞典は「女が女らしくなく、おてんばなこと。」という語釈を与えている。ただし、見出し得た唯一の例は、次のようなものであって、現代の普通の用法を示すものではなかった。

- また追手の心配が断へず気になつて、駄馬の蹄音にもぎよつとし、初めて泊まつた山駅の宿屋では、故らことごとに筆跡を違へてあられもない名前を書りたりしたが、(思出の記・上 164)

フラッパーフラッパーな(用例なし)

〈注〉 次の論文に報告されている調査の中で、ここにあげた語の中では「貞淑な」「貞節な」「不貞な」の3語が扱われている。

渡辺友左「語彙の構造と価値観の構造と——言語社会学的な研究の試み——」(『社会学論叢』No. 49, 1970—7)

その調査は、人間の、性に対する態度や振舞(またはそのような観点から眺めた人間の性格)を評価する形容詞・形容動詞として次の諸語を取り上げている。

好色な、みだらな、不品行な、不身持な、けがらわしい、すげべえな、エッチな、ふしだらな、卑猥な、わいせつな、淫猥な、淫乱な、淫蕩な、淫奔な、不貞な、はすっぱな、貞淑な、貞節な、いかがわしい

そして、国立国語研究所の職員55人を被調査者として、女性にしか使わぬ語、男性にしか使わぬ語をアンケートによって尋ねた結果、女性にしか使わないと答えた人が全体の10%をこえたのは次の語であった。

貞淑な(87.3%) 貞節な(72.7%) 不貞な(40%) はすっぱな(80%) 不身持な(20%) ふしだらな(20%) みだらな(12.7%) 淫乱な(12.7%)

さきに例としてあげた「はすっぱな」と、「貞淑な」「貞節な」あたりがきわだってパーセンテージが高いことが注目される。反対に、男にしか使わないと答えた人が10%をこえたのは次の4語だったという。

すげべえな(47.3%) エッチな(27.3%) 好色な(23.6%) 卑猥な(10.9%)

ほかに、主体が女性に限られるとはいえないが、傾向として女性に多く使われるとみられる語の中から、2, 3の例をあげよう。

「うらわかい」は6例のうち4例までは、

○男とばかり思った虚無僧の、天蓋をぬいだのがうら若い女性であることも女中には意外だったろう。(週刊新潮 1956年11月26日 42)

など、女性に使われたものである。残る2例は次のとおりである。

○「葉子さん、覚えてゐますか私を……あなたは私の命なんだ。命なんです」

といふ中にも、その眼からほろほろと煮えるやうな涙が流れて、まだうら若い滑かな頬を伝つた。(或る女・前 83)

○やさしや年もうら若く

まだ初恋のまじりなく

手に手をとりにて行く人よ

なにを隠るるその姿(放浪記 104)

「放浪記」の例は「若菜集」から引用された韻文なのでしばらくおく。「或る女」の例は青年に使われている。「うらわかい」とちがって「わかわかしい」は、男性にも女性にもひとしなみに使われる。

(男)

○私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。(こゝろ 5)

○まだ学生ではないかと思われる、キャシャで、若々しい青年だった。(自由学校 44)

「かよわい」も、

○かよわい女の身でただ一人、異郷の地におっぼりだされたら、どうなると思う。
(読切倶楽部 1956年4月 334)

○葉子は木部を後ろにかばひながら、^{りなげ}健気にもか弱い女の手一つで戦つた。(或る女・前 14)

○それがみんな小よしの^{かよわ}繊弱い肩にかかつて来る重荷だつた。(末枯 43)
のように女性に、または女性に関して使われることが多いとは言えよう。しかし、
○敵を打つなど云ふ心よりも、此の^{かよわ}羸弱い人間の双の腕に依つて成し遂げられた偉業に対する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。(恩讐の彼方に 92)

○おそでは自分と夫との外には、世界中で、あの^{かよわ}羸弱い一人子の手頼りになるものは一人も半人もないことを、今更のやうに思ひ詰めながら、(生まざりしならば 180)
のように女性以外にも用いられる。しかし、「かよわい男性」という言いかたが、おかしみの効果をもち得る背後には、「かよわい→女性」という結びつきへの期待が人々にあるからだと言えよう。「かよわい」と通じる面のある「よわよわしい」は男女に関して差別なく使われる語である。

(男)

○曾田は染の態度にくらべてみて、自分の方がはるかに弱々しくおとっているということを心に痛くかんじさせられた。(真空地帯・上 204~205)

「おしやまな」「おませな」も女の子に使うことが多いように思われる。「おしやまな」の形容詞の例はただ1つ、

○と、おしやまな女の子が「男の子と女の子といっしょにやるほうが楽しいです」と発言した。(婦人朝日 1956年9月 82)

があるが、次にあげる名詞の例が1つあり、これは青年に使われている。

○「先生、鞆をお持ちませう。」と春三は、おしやまを云つて先生の手から鞆を取りあげた。(本日休診 91)

「おませな」の用例はない。

(女)

○落着いて若々しく聡明な彼女の口から友達の片野のそんな事実を云ひだされると、(厚物咲 35)

○外の光に見て取つた春が、伴子の若々しい姿に匂つてゐた。(帰郷 154)

(女)

○けれど朝姫は責めるにはあまりに善良な温和な女だったよ。弱々しい感じを与えるほどだったよ。(出家とその弟子 118)

<男 性>

人の性質などを表わす形容詞で、女性には使わず、男性だけを主体とする語もある。たとえば、「男らしい」はほとんどすべての用例が、次のように男性について使われたものである。

○私はその時まだ十四で野鳥さまとも御話したことはありませんでしたが、あなたの男らしい立派な御容子をその後忘れることは出来ませんでした。(友情 110)

○新治は海のはうを見たまま、威厳をつくらつて、男らしい態度でさう宣言した。
(潮騒 39)

○ああ！彼は初めて、男らしく口を利いてくれた。(伸子・上 103)

女性に使われた次の1例があるけれども、これは「男であるにふさわしい」の意ではなく、「男のような」意に解される特異な例だと考えられる。

○何処か男らしい気性を具へた奥さんは、何時私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。(こゝろ 264)

ほかに、人間以外に使われた次の例もあるが、これは転用的な用法である。

○こんなに男らしい海を見ていると、裸になって飛びこんでみたいわね。(放浪記 109)

「男性的な」「おいしい」も男に使われることが多いように予想した。

○彼女の眼の前に、吉村医師のいつものように陽に灼けた、潑刺とした男性的な顔が笑っていた。(主婦と生活 1956年5月 328)

○男は飽くまで雄々しく、女は飽くまでも美しかった十五世紀のフランス。(読切俱樂部 1956年8月 50)

などは男に使われた例であるが、資料内のごく少数の用例の中にも、女に使われた例が次のようにあるので、男を主体とする語とはいえないようである。

○お政は背の高い男性的な強い顔をした女だった。(暗夜行路・前 247)

○「では、悠子さんはロマンチックで、男性的なんですね。」

「いや、女性的で、古典的なんだらう。」(本日休診 92)

○葉子の母が、どこか重々しくつて男々しい風采をしてゐたのに引きかへ、叔母は髪の毛の薄い、何処までも貧相に見える女だった。(或る女・上 45)

なお、この2語にも次のような人以外に転用された例もみられる。

○雨戸を繰ると白い蝶々が雪のように群れていて、男性的な季節の匂いが私を驚かす。(放浪記 59)

○碧く澄んだ空には、駒ヶ岳が、雄々しい姿をそゝり立っている。(小説俱樂部 1956年12月 380)

「めめしい」は、男でありながら女のようにいくじがなく、男らしくないという意味から考えても、主体は男に限られるのが本来であろう。

めめしい<よわよわしい, いくじ(が)ない(分析例48)

「いなせな」は若い男にしか使われない。用例は次の1つだけである。

○いなせな姿で三橋美智也さん(平凡 1956年8月 100)

意味に通じるところのある「いきな」は次のように男にも女にも使われる。

(男)

○船乗りは意気で勇ましくていいものだ。(放浪記 136)

(女)

○本所や浅草辺の場末から出て来たらしい男女のなかには、美しく装った令嬢や、意気な^{かみ}内儀^{なま}さんも^{なま}目には目についた。(あらくれ 18~19)

「いなせな」の意味に勇みはだ的な要素が含まれていることは、その主体が若い男に限られていることと表裏をなしているといえよう。

「ハンサム(な)」の用例は次にあげる2例だけであるが、原語の英語における主な用^{<注>}法をうけついで、男にしか使われない。

○スペイン型のハンサムな歌手。(週刊誌売 1956年4月15日 23)

○そして、それにもまして立派なハンサム・ボーイになったその姿。(小説春秋 1956年5月 224)

この主体上の制限は、その意味内容が、女性的な容姿の美しさとはちがって、きりとした端正な美しさでもいうか、男らしい風采のよさであることと相応じているといえよう。

<注> 井上義昌編『英語類語辞典』(開拓社, 1956) 110ページ

2.3.2. 持続的な性質と一時的な態度・ようす

人の属性を表わす形容詞は、まず、ある人のそなえている内在的・持続的な性質を表わすばあいがある。たとえば「おとなしい」を例にすると、次のようなばあいである。

○内気で^{おとなしい}美紀さんの性格が奔放不羈な楠見の心をながくつかんでいられなかったのが実情であろう。(婦人生活 1956年12月 182)

○青木さんはあゝいふ^{おとなしい}方だから、大抵のことは興さんの言はれる通りになつてゐられたけれど、たゞ、興さんが何かにつけてなきり方が派手なのをいつも不平を言つてゐられた。(桑の実 60)

○竹尾さんなら面倒な係累もなければ、人物も極^{おとなしい}方だし、(真知子・前 33)
これらの「おとなしい」の主体になっている人は、その一般的な性情として、さわがず静かであるとか、人にさからわず争わないとかいう傾向を持っていることが表わされている。対象じしんに具わった本質的な性質を表わす用法は、形容詞としてもっとも本来的なものだともいえよう。

しかし、人の属性を表わす形容詞は、ある場合における、ある人の態度や動作のよう

すを表わすのにもよく使われる。同じく「おとなしい」の例によって対比してみると、

○「御母さんに日を見て貰ひなさい」

「さう為ませう」

其時の私は父の前に存外大人しかつた。私はなるべく父の機嫌に逆はずに、田舎を出やうとした。(こゝろ 120~121)

○今は明子はおとなしくうなずくのであった。(くれない 52)

○画家の議論をおとなしく聞いてゐるだけだつた岡部雄吉が、笑ひながら、「(省略)」と、初めて口を開いた。(帰郷 203)

○監督がどんなに思ひつ切り怒鳴り散らしても、タ、キつけて歩いてても、口答へもせず「おとなしく」してゐる。(蟹工船 92)

「こゝろ」の例は「その時の私は」、「くれない」の例は「今は」という限定がある点からも、その場合におけるようすだとわかる。このような例では、その人は平生おとなしい性質の人でなくてもよい。その時に、さわがず、従順なようす・態度であればよい。

前者を持続的な属性を表わす用法、後者を一時的な属性を表わす用法と呼ぶことにしよう。形容詞の意味を大きく性質と状態とに分けるとすれば、前者は性質と、後者は状態と関係が深いといえよう。人の属性を表わす形容詞の大部分は、両方の用法を合わせもっている。しかし、一方の用法しかない語、一方の用法が支配的である語もある。この相違は人の属性を表わす形容詞の表わす意味内容を考えるための、1つの一般的な観点として取り上げることができよう。

まず、「おとなしい」と同様に、両方の用法をもっている語の例を、もう少しあげてみよう。

(持 続 的)

○「いいかたでしたよ。涙もろい、ほんとうに親切なかたでした」(暗夜行路・前 62)

○性質は無邪気で、快活で、一緒にゐるとへんに人を愉快にさせる性質をもつてゐて、身体の随分いゝ人ださうだ。

(友情 25)

○根が正直な、好い性質の人ですから、悪かつたと思ふと直に後悔する。(破戒 254)

○しかしあいつらは、自分のことしか考へない勝手なやつらだ、と若者の堅実

(一 時 的)

○恐ろしいほどやさしく親切に葉子をあしらふかと思へば、皮肉らしく馬鹿丁寧に物を云ひかけたり、(或る女・前 134)

○彼は遠ざかる舟から快活に手を振つた。(潮騒 105)

○僕は正直に、日ごろの不満をぶちまけたただけだ。気に障ったらごめんなさい。(人間の壁・上 245)

○外部から見たKと私は、何にも前と違つた所がないやうに親しくなつたので

な心は拒んだ。(潮騒 118)

す。けれども腹の中では、^{てんでん}各自に^{てんでん}各自の事を^{ちがひ}勝手に考へてゐるに違ありません。(こゝろ 245)

一般的に、持続的な性質を表わす用法では、「親切なかた」「勝手なやつら」のような、人を表わす名詞を連体的に修飾する形がよく現われる傾向があるようだ。もちろん、たとえば「あの人はかしこい」のような述語用法で持続的な性質を表わすこともできるが、「あの人はかしこい人だ」のように、「人」がくりかえされても連体用法をとることが珍しくないようである。また、一時的な態度・ようすを表わす用法では連用修飾の形が現われやすい。

次に、特定の場合一時的な態度・ようすを表わすことはなく(少なく)、人の持続的・内面的な性格・特徴を表わす語のグループについてみよう。

「むくちな」は、人があるばあいに口数が少ないことではなく、平生あまりしゃべらない性向をもっていることを表わすのがふつうである。

○性質からいふと、Kは私よりも無口な男でした。(こゝろ 215)

○彼は元来無口な男でした。(こゝろ 237)

○然し自分は入夫といふ関係もあるしそれに生来の^{むくち}寡言なので姻戚の間の協議にも彼は

「どうでもわしはようがすからええ塩梅に極めておくんなせえ」とのみいふのであつた。(土・上 68)

○帰港までの十一時間、新治はほとんど口をきかずに漁に精を出した。ふだん無口なので、口をきかずにゐてもさう目立たない。(潮騒 34~35)

上にあげた用例にみられる「元来」「生来の」のような修飾語を伴った例がわりあいに多いのは、その点を反映するものであろう。

したがって、「むくちな」人が何か特別なばあいに、雄弁にとうとうとしゃべることはあるわけである。

○どうした風の吹きまはしか、昨夜はあの^{むくち}寡黙な^{かしら}頭がそれはよく喋舌つた。(末枯 58)

○老酒の影響で、無口な平生とは別人の如くなつた老人は、この古い文明国が有してゐる、日本などでは想像もされない多様な生活様式と、その背景に就いてなほ語り、(真知子・前 83)

また、「むくちで」ない人が、ばあいによつて口数少なくなることもある。

○彼は決して無口な方ではなかつたが、彼の口はひとりでにしばられ彼の足は動かなかつた。(真空地帯・上 26)

なお、ここに「むくちな」を人の持続的な性質を表わすものと考えたのに対して、わずかながら例外的な文例もあるので、それをあげておこう。

○然し其所は年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。(こゝろ 76)

○大会が近づいて彼をめぐって殺到する雑多な用事が多くなるにつれ、津上は次第に無口に、次第に活動的になつて行つた。(闘牛 111)

ほかに、「かちきな」「うちきな」「はでずきな」「こり性な」なども同様に、持続的な性質を表わすグループに属すると考えられる。

○だから他人が私のことを「勝気な女のように思いこんでいるが、そんなことはない」という。(スタイル 1956年11月 113)

○妾腹の子に似合はず、武子是我儘な勝気な、そのくせ情にもろい所があつた。(友情 50)

○たゞ、勝気な性質を傷つけずに、どう断わつて返すかであつた。(帰郷 306)

○妹は勝気ですから、わたくしには何にもいひませんけれど……(波 381)

○「あの人は莫迦に内気な人なんです。田舎にもあんな人があるかと思ふくらゐ、温順いんですから、人に逢ふのを、大変に厭がるんです。」(あらくれ 217)

○それに民子はあの通りの内気な児でしたから、あなたの事は一言も口に出さない。(野菊の墓 55)

○内気で、飽くまでも慎^{つしま}しやかな、いかにも上方の娘らしい気性は、信之には、何か勿態ない気がするほどに好もしかつた。(多情仏心・前 296)

○ハデ好きで、今日も、キモノは小豆色に桜の小紋、化粧は厚く、髪もコツテリと、渦巻かせてある。(自由学校 38)

○臣願はくは少を以て衆を撃たんといつた陵の言葉を、派手好きな武帝は大いに欣んで、その願を容れた。(李陵 154)

○ほんの屋台のおでん屋ながら、商売熱心の上に凝り性な女房が、どこで誰に^{なら}教つたともなく覚えて来ては、(多情仏心・前 209)

これらの語は、たとえば「*むくちにだまりこむ」「*かちきに言いはる」「*うちきにふるまう」「*はでずきに着飾る」「*こり性に文を練る」のような連用修飾法を成り立たせることはできない(できにくい)。

第3に、一時的な態度・ようすしか表わさない形容詞の例として、まず「かいかいしい」をあげてみよう。

○お鳥は人に口を利くのも、顔を見られるのも厭になつたやうな自分の心の怯えを紛らせるために、一層精悍^{せいげん}しい様子をして立働いてゐた。(あらくれ 120)

○翌朝、彼女は、叔母が起き出すと同時に、床を離れ、甲斐々々しく、立ち働いた。(自由学校 301)

○女は甲斐々々しく首筋や手首の血糊を拭ってくれた。(読切小説集 1956年3月 88)

○鳥村が湯から帰つた時は、手拭を器用にかぶつて、かひがひしく部屋の掃除をしてゐた。(雪国 63)

「かいかいしい」は仕事などをいそいそと進んでするようすがきびきびとしているこ

とを表わすといえよう。「かいかいしく」の形で、立ち働く動作を表わす動詞を修飾することが多い。

○私はもう幾人愛する人に死なれたか知れない。慈悲深い法然様や貞淑な玉日や、か
いがかいしいお兼さんや——（出家とその弟子 119）

の一例だけは問題があるけれども、「かいかいしい」は「勤勉な」などとはちがって人間の持続的な性質ではなく、主として動作のようすを表わす語だといえよう。

もう1例「そっけない」についてみると、この語は对人的な冷淡さ、無関心さがそぶりなどに表われたようすを表わすが、「ふしんせつな」などとはちがって、人の一般的な性格を表わすことはない。

○そして解けかゝつた、胸の氷嚢をはづして、黙つて台所に立つてしまつた。その素振が何となくそっけなかつたので、行介は少しがっかりした。（波 221）

○火鉢の中へ首を突つ込んだまゝ、宇平はそっけなく答へた。（波 28）

「さりげない」「おおげさな」「えんきよくな」「ろこつな」などの、表現・伝達のしかたに関係のある語もこのグループにはいるものといえよう。

○蘇武がさり気なく語る其の数年間の生活は全く惨澹たるものであつたらしい。（李陵 193）

○そして杉子のうまいのを大げさに誇張してほめあつた。（友情 76）

○「さよですか、ちアお茶を差しあげませうか」

と、女房は、婉曲に、そろそろ帰るべき時を暗示して、女客の前にだけ湯呑の茶を勧めた。（多情仏心・前 230）

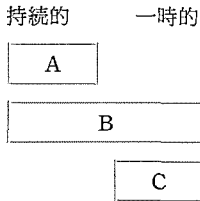
○高い、不愛想な看護婦は、狡猾な意図を露骨にあらはした顔をドアに覗けた。（真知子・前 207）

これらの形容詞は連用修飾語としてよく使われるほかに、それと密接な関係のある形式として、たとえば「さりげないおしゃれ」「おおげさな身ぶり」「えんきよくな非難」「ろこつな描写」のように、動作などを表わす抽象名詞に対する連体修飾語になることもできる。しかし、人を表わす具体名詞に対する連体修飾語にはならない（なりにくい）。また、たとえば「あの人はおおげさだ」のように、人を主語にした言い方もそれだけで充足した表現としては成り立たない。たとえば「あの人は身ぶりが大げさだ。」のような形をとってはじめて自足的な文になる。すなわち、これらの形容詞は人に関する属性を表わすが、人そのものを主体にすることはできず、人の動作・態度など、すなわちことを主体とする。

このグループの語は、人の外的な態度・ようすを表わすものであって、それはその時のその人のきもちなどが外にあらわれたものではありうるが、その人の内的・持続的な性格の外的な表われを表現するものではないといえよう。

以上、人に関する属性を表わす形容詞を、持続的な属性か、一時的な属性か、両方

か、という観点から3つのグループに分けることを試みた。それらの関係を要約して図示すれば次のようになる。



A むくちな、かちきな、うちきな、はずきな、こりしょうな、……

B おとなしい、しんせつな、かいかつな、しょうじきな、……

C かいがいしい、そっけない、おおげさな、えんきよくな、……

次に、ABCへの所属は異なっているが、表わしている属性には共通性のあるような形容詞どうしの対立の例もあるとみられる。言いかえれば、属性が持続的か一時的かという観点からの区別が、主要な差異になっているような形容詞どうしの対立である。

A/B (持続的/持続的・一時的)

(例1) いじっぱりな/がんこな、ごうじょうな

これらの3語は、自分の意見などを強く主張・固執して、相手にゆずらない傾向を表わす点で、共通性が認められる。「いじっぱりな」はその傾向が、その時その場での態度としてあるのではなく、固定的な性格・気質としてあることを表わす。「*いじっぱりに主張する」のようにふつう使われないだろう。

○律儀な少年の精神は七十歳の老人の意地つ張りな性根となつて頑固に存在しつづけてゐただ。 (厚物咲 42)

○母親はまた意地張いぢぢやうなお島うひまの幼い時分のことを言出して、まだ娘に愛着を持たうとしてゐる未練いれんげな父親を詛つた。 (あらくれ 59)

他方、「がんこな」「ごうじょうな」は内的・持続的な性格をも、その場での態度をも表わす。

(持 続 的)

○旧式な頑固な爺、若いものの心などの解らぬ爺、それでも此の父は優しい父であつた。 (蒲団 61)

○剛情なKの事ですから、容易に私のいふ事などは聞かまいと、かねて予期してゐたのですが、 (こゝろ 203)

(一 時 的)

○なぜか頑固に帰らなかつたが、そのために駒子は行男の死目にもあへなかつただらうか。 (雪国 84)

○いえいえ矢張佐助を呼んで下されと強情に手を振り払つて其の儘立ちすくんでゐる所へ佐助が駆け付け、顔色でそれと察した。 (春琴抄 190)

(例2) 口さがない／口やかましい

「口さがない」は、

○口さがない世の人々はどのようなうわさを立てるかわかりません。(出家とその弟子 106)

の1例しかない。形容詞としての諸用法がそろっておらず、この例にみられるような連体修飾用法しかないので連体詞的である。意味上は、人の性質を表わし、一時的なようすは表わさないといえよう。

他方、「くちやかましい」は、

○口やかましい批評家にも却つて口をつぐませるようなものがその作にはあつた。(むらぎも 190)

のように性質を表わすことも、

○毎日さうして歩いて居た女が知りたがり聞きたがる女房等の間に、各自に口喧しい陰占を運しくされると間もなく、(土・上 127)

のようにその時のようすを表わすこともある。

B/C (持続的・一時的／一時的)

(例1) まじめな／しんげんな、ほんきな

「まじめな」は次の例のようなばあいには、その人の性格や一般的な態度を表わしている。

○二十歳を越したばかりの粗野ではあるが勇気のある真面目な青年である。(李陵 184)

○どうかして真面目な、そして妹のことを本当に思ひ、愛してくれる人が妹の夫になつてくれればいゝがと思つた。(友情 16)

○真面目な教育者が、國を愛し子弟を思うがゆえに、政治的にも発言せざるを得ないゆえんである。(改造 1953年11月 5)

ところが、次の例のようなばあいは、その場での態度や動作のようすを表わしている。

○「奥さん、私は真面目ですよ。だから逃げちや不可ません。正直に答へなくつちや」(こゝろ 47)

○倉地はその様子を見ると今度は真面目になつた。(或る女・前 174)

○辺見は、ひどく、真面目な顔をした。(自由学校 102)

○その聴衆が突に真面目に好く聞いて呉れましたよ。(破戒 158)

他方、「しんげんな」「ほんきな」は、次の例のようにその時の態度やようすを表わすことしかない。

○都教組の動員はひっきりなしに続いた。動員される教師たちも真剣だった。(人間

の壁・上 349)

○ヴァリの扮した女性があの人なりに正直に真剣に生きていることはわかりますよ。

(スクリーン 1956年1月 79)

○それには雑夫達の「真剣な」拍手が起つた。(鍛工船 77)

○「先生、いまのはなし、わたし本気よ。お願いしますね」(人間の壁・上 64)

○もし、これが口説文句だとしたら、あんまり人を食ってるし、本気だとしたら、バカバカしくて相手にもなれないと、駒子は思うのだが、隆文の弁舌は、とにかく、熱心なものだった。(自由学校 63)

○葉子はだゞつ子らしく今更そんな事を本気に考へて見たりしてゐた。(或る女・前 143)

○前島が、はっとした真顔になったのが、本気で相談にのってくれる証しのようにみえ、(小説春秋 1956年4月 128)

(「ほんきな」の運用修飾的な形として、「ほんきに」のほか、最後の例のような「ほんきで」の形もある。)

(例2) きちょうめんな／ねんいりな、たんねんな

これらの語は、細かく気をくばり、すみずみまで神経を働かせるような仕事のやりかたに関係する点では共通点をもっている。

「きちょうめんな」はおもに人の性質を表わす語であろう。

○その人のハンドバックを見ると職業がわかるような気がします。家庭の婦人ならば、物を大切にする几帳面な人なのか、何でも押し込んでおくだらしのない人なのかかわかるように思います。(装苑 1956年11月 82)

○必ずしも高利を貪る訳では無いが、恐ろしいきちやうめんな男で、自分でも契約をきちんと守るかはりに、人が契約を履行せぬと、如何なる事情があつても容赦せず、(愚出の記・上 187)

しかし、次の例のように、そういう性質が動作に実現されたようすを表わすこともある。

○私は先生の手紙をたゞ無意味に頁丈^{はら}剝^は繰^りつて行つた。私の眼は几帳面に枠の中に嵌められた字画を見た。(こゝろ 146)

他方、「ねんいりな」「たんねんな」は仕事のやりかたがいいかげんでなく、仕事を注意深く行なうようすを表わし、人の性質を表わす語ではない。

○それから我々は安田の搜索にかゝつた。しかし半日念入りに探しても、安田の姿はどこにもなかつた。(野火 162~163)

○姉の顔と髪の手入は妹よりは念入であつた。(真知子・前 129)

○「いらっしゃい」と言つて、そのまま熔岩を組み合わせて作った庭石の間に散り込

んだ落ち葉を草箒で丹念に掃き出していた。(暗夜行路・前 119)

○夕方、水車の道に沿った例の小さな教会の前を私が通りかかると、その小使らしい男が雪泥の上に丹念に石炭殻を撒いてゐた。(風立ちぬ 152)

(例3) のんきな／きらくな

ものごとを気にしないで、のんびりしている点に共通性がある。

「のんきな」は、

○同じ自分の事を心配してくれるのも兄の信行のはそののんきな性質の内に神経の行き渡ったところがあるだけに彼にはそれほど気にならなかったが、(暗夜行路・前 42)

○その時の話で、崑ちゃんは、自分の経験では、一緒に旅していちばん世話の焼けたのは大仏次郎だと言った。あんな香気^{かき}でしかも周章^{しゅうしょう}でもない。(私の人生観 73)のように人の性質を表わすこともあり、また、

○そして妹が笑ひながら香気にその男と話すのを見ると、ある不安さへもつた。(友情 16)

○その点は初めから希望を持たないで、その代りヨーロッパぢやを香気に旅行して見ようと考えてゐるんです。(真知子・前 167)のように特定の情況におけるようすを表わすこともある。

他方、「きらくな」は「のんきな」の後者にあたる用法に限られていると思われる。

○でも、亭主の留守も、気楽^{きらく}で、いいもんじゃないの。(自由学校 311)

○さう考へる私は又此所の土を離れて、東京で気楽^{きらく}に暮らして行けるだらうか。(こゝろ 106)

○名の通ったこつとう屋は遠慮し、気楽^{きらく}に郊外や地下の古道具屋をのぞいて歩く。(エコノミスト 1956年5月5日 29)

2.3.3. その他

(1) 対人性

人に関する属性を表わす形容詞は、その属性が対人的なものであるかどうかということが、観点の1つとして考えられる。

たとえば「ねっしんな」は、

○押し掛け女房に、辟易^{へきえき}してるだけの話なのだが、こう熱心に説きつけられると、イヤといえなくなる五百助であって、(自由学校 319)

では「説きつける」という対人的な活動のようすを表わしているが、

○沢山の人々が、ガラスをローソクでいぶして熱心に太陽を見ている。(未知の星を求めて 328)

では対人的でない活動のようすを表わしている。これからもわかるように、対人性は「ねっしんな」にとって必要な条件ではない。

また、「ていねいな」は、

○板前は切つた肉を竹の皮の上に薄く伸ばして、丁寧に列べてみた。(波 7)

○コップを水でゆずぎ、裏に事務的にふきんで拭いてから、丁寧にもとに蔵つた。

(帰郷 233)

のような例では、仕事のやりかたが雑でなく念入りなようすを表わしており、対人的な属性ではない。しかし、

○その男は、耳にはさんだ煙草をとつて、先生に丁寧にお辞儀した。(本日休診 65)

○課長は出張中だから自分がお用件をうかがいますと、言葉はていねいだった。(婦人朝日 1956年4月 87)

のような例では、おじぎやことばが念入りであるようすではなく、相手に対する敬意を表わした礼儀正しいようすを表わしており、対人的な属性である。

○「あなたの家族にこれと同じ病気の人がありやしませんか。」

院長は丁寧に診察してから、考へ考へいつた。(波 109)

○劣等児のひとりぐらい、一条太郎は何とも思わない。その子を丁寧に教育してやる気などは持たないのだ。(人間の壁・上 207)

では、「診察する」「教育する」は対人的な活動ではあるが、「ていねいに」は念入りなようすを表わしている。

「ていねいな」には少くとも上のような2義が認められ、それらは対人性のありなしによって対立しているともいえよう。そして対人性を含むほうの意味は、

ねんどろな、こんせつな、ていちょうな、てあつい、いんぎんな、うやうやしい
などとグループをなし、対人性を含まないほうの意味は、

ねんいりな、たんねんな、細心な
などと同じグループに属するといえよう。

上のような意味で対人的な語というのは、

しんせつな、いじわるな、そっけない、人なつこい、寛大な
のようなものであり、対人的でない語というのは、

ねっしんな、かしてこい、かいかつな、おくびょうな
のようなものである。

対人性の下位の小区分の1つとして、異性に対しての対人性という特徴も考えることができそうである。たとえば「うわきな」は、

○君江の様子を窺ひに不意と出て来たので、この場合振切つて別れたなら、浮気な君江の事だから、今夜自分の行くまでは何をしだすか知れないと、つまらない事が妙に気になり出した。(つゆのあとさき 47)

のようなばあいには異性に対する愛情に関して移り気な性質を表わし、

- 彼等に共通な聞きたがり知りたがる性情に駆られつつも、寧ろ地味で移気な心が際限もなく一つを逐ふには年齢が余に彼等を冷静な方向に傾かしめて居る。(土・上 165)

のように、いろいろなものごとに関して使われる「うつりぎな」に対比させることができる。

「むちゅうな」は、

- 「パンパンに夢中なんですって……どうかしてますよ」(婦人公論 1956年9月 241)のように異性に対しても使われるが、
- たゞ襦を止めることに夢中だつた。(波 83)
- 広介は自分だけの生活に夢中のように見えた。(くれない 63)
- 母親の乳房をほとんど知らない駿は、すぐ乳首にかじりついて、夢中にしゃぶつた。(波 147)
- 中積船は漁夫や船員を「女」よりも夢中にした。(鑿工船 72)

など、いろいろなものごとに対しても使われる。ところが「くびったけ」は異性に対して夢中になるばあいにしか使われない。「くびったけ」の用例はないが「あの娘はかれにくびったけだ」のような使い方がされる。

対人性を含んでいる形容詞には、相手の人を表わす二格の対象語をとりうるものがある。たとえば、次のようなものがその例である。

- みなわしに親切なよい人であつたとおもひ、そのしあわせを折りつつ、さようならを告げたい。(出家とその弟子 207)
- あいつお前には馬鹿に優しいな(宝石 1956年12月 235)
- 大学の中においてさえも、フェミニストという言葉はむしろ“女に甘い”という興味的な意味でもって屢々使われる。(学園評論 1953年11月 15)
- なぜ善鷲様にばかりきびしいのですか。私はわかりません。(出家とその弟子 117)
- 太田も緒方には冷淡だつた。(むらぎも 328)
- あの金子班長にしても学校出だけあって要領よくてひとにはつめたいやつやけど、俺のことはほんとうにようやってくれよつたんや(真空地帯・上 197)
- 自分に苛酷であること、ただそんなことで充分に多忙であつたらしい。(私の人生観 68)

たとえば「しんせつな」が相手の人を表わす対象語をとらないのは、

- 師たる者が稽古をつけるには厳しくするこそ親切のちや(春琴抄 145)

のように、文脈などから相手の人がわかるばあいや、

- それに親切な人つてものは、誰でも幾らか押しつけがましいところはあるんだから、私は平気なの。(真知子・前 186)

のように、相手が特定の人でなく、しいていえば人一般が相手であるようなばあい、などであろう。

また、たとえば、

○やさしい夫であり子供たちのよいお父さんでございます。(週刊読売 1956年10月28日 61)

○旧式な頑固な爺、若いものの心などの解らぬ爺、それでも此の父は優しい父であつた。(蒲団 61)

○さつきお前の名を初めて口にした。さう呼んでいゝのか悪いのか判らないので、恐る恐る云つて見たやうな父親なのだ。こんな冷酷な親が、どこに在る? (帰郷 278) において、「やさしい夫」は「妻に」であり、「やさしい父」「冷酷な親」は「子に」であることがわかるのは、1つには「夫」や「父」「親」が、「妻」や「子」と一定の関係にある人を表わす名詞だからである。同様な理由から

甘い先生 (生徒に)

甘い親 (子に)

甘いおじいさん (孫に)

甘い夫 (妻に)

の「あまい」の相手はそれぞれ、かっこ内に示したものであるのがふつうである。

(2) ことばとの関係

人に関する形容詞の中には、人の言語活動との関係からも見ることのできるものがある。

おしゃべりな、多弁な、むくちな、寡黙な、筆まめな、筆ぶしようななどは、その人の話しことば・書きことばの量の多少に関係する性質であり、

話しずきな、能弁な、雄弁な

口べたな、訥弁な、舌たらずな

などは話しことばについての好悪・巧拙に関する性質である。

「りゅうちょうな」はことばの流れのなめらかなようすを表わし、いろいろなものごとの進行するようすについて使われる「なめらかな」「よどみない」「スムーズな」などと対比させることができる。(分析例49)

また、「てみじかな」はことばによる伝達が簡潔で手数のかからないやりかたであるようすを表わす。

○ふと、この老人には文字がよく読めないことを思ひ出したので、彼はさつそく、手短かに手紙の内容を話してきかせた。(波 113)

○其れから学校の諸友に宛てゝ、已み難き事情あつて竊かに上京する事、別紙を野田の宅に届けて貰ひたき事、を手短かに書き、(思出の記・上 161)

「てっとりばやい」「かんたんな」なども、

○とすれば、**手っとり早い**話が設備の転換による生産性の向上や、増産以外に方法はない。(東洋経済新報 1956年7月28日 35)

○それについて、ごく**簡単に**私どもとしての考え方を申し上げたいと思います。(ダイヤモンド 1956年7月7日 32)

のようにことばに関して「てみじかな」と同じように使われることもある。しかし、次の例のようにいろいろなことに使われる。

○何によらず炭坑街で、**てっとり早く**売れるものは、食物である。(放浪記 13)

○なに云つてるんだ、そんなに**簡単に**すむ手術なもんか。(本日休診 90)

○神田の学生を、顧客とするらしい、喫茶店で、二人は、**簡単な**食事をした。(自由学校 329)

「てっとりばやい」「かんたんな」などから「てみじかな」を区別する相違点は、ことばに関してのみ使われる、という点にもあるといえよう。

対人的な態度に関する語のうちで、

ぶあいそうな、すげない、そっけない

などは、相手に対する冷淡さ・愛想のなさを表わすが、言語を通じてそういう態度が表わされるとは限らない。それに対して、

ぶっきらぼうな

はおもに言語を通じての対人的な愛想のなさを表わすものであろう。(分析例50)

もっと非友好的・高圧的な対人態度を表わす語のうちで、たとえば「じゃけんな」は

○「貴様、探して見い、ありやせん。」

孫四郎は邪慳にかう云ひ捨てて (青銅の基督 10)

のようにことばによることもあるが、

○それでも泣き募つた時は口へ入れた砂糖を吐き出しては愈烈しく泣くのである。おつぎは焦れて邪険に与吉をゆさぶることもあつた。(土・上 71)

のように他の動作などによることも多い。それに対して、

つっけんどんな、たかびしやな、けんもほろろな、にべもない

などは、数少ない用例しかないけれども、多くのばあい、ことばによって表わされる態度ではないかと推測される。

○「そんなこと聞くことないぢやないか。」

行介は少し**突っけんどん**にいつた。(波 100)

○悔い改めた妻ならば、あのような、**ツッケンドン**なもの言いは、しないものではないか——(自由学校 373)

○「あなたは？」

葉子は**ぼん**と**高飛車**に出た。(或る女・前 31)

○切り口上の達三は、頭から威圧するやうな態度で、知らず識らず語気を烈しくして来た。専門の学問上の話題でも、いつも彼は相手に対して高飛車なのである。(帰郷 323)

○明晩(即ちその夜)のお招きにも出席しかねる、と剣もほろゝに書き連ねて、(或る女・前 50)

○「困るなあ。」と彼は相好を固くしたまゝにべもなく答えた。(主婦の友 1956年2月 322)

○花嫁照子さんの方は、むろん「訴訟技術」としてではあろうが、きわめてニべもなくこれに対応した。(週刊朝日 1956年7月1日 72)

(「にべもない」は上にあげた2例しかないが、「にべもない返事」のような連体修飾用法はあるだろう。しかし、述語用法は欠けているかと思われる。)

態度の表わしかたや表現・伝達のしかたが直截であるようすに関する形容詞のなかで、

ろこつな、おおっぴらな、あからさまな、あけすけな、公然たる
などは、ことばによる表現・伝達には限られていない。これに反して、
ざっくばらんな、単刀直入な

は、多くはことばによるばあいのようなすを表わす語であろう。(「単刀直入な」の用例はない。)

○「何うも形式的で、甚だ要領を得んです。もう少し打明けて、ざつくばらんに話して呉れると好いですけれど……」(蒲団 70)

○天下の二枚目池部良が語る、ザックバラんな最近の心境、(週刊東京 1956年6月16日 46)

内容の小さいことを、大きいことのように誇張して表現・伝達するようすを表わす「おおげさな」はことばによらなくてもよい。

○「よかったわ」と圭子もいって、大げさに胸を撫で下してみせた。(小説春秋 1956年8月 109)

○と、おとうさんが、軽くなったかしぶくろをさし出して、大げさにおじぎをしたので、おかあさんも、あき子さんも、ふきだしてしまいました。(文芸春秋 1956年6月 268)

「おおげさな」と意味に通じるところのある「針小棒大な」はことばによるばあいに限って使われると思われる。用例は次の2つだけであるが。

○然し、物事は兎角針小棒大に伝はる事が多く、テイト氏の場合もその例外では無かつた。(文芸春秋増刊 1954年6月 110)

○予が承諾すれば易しくこれらの峠を越し得るとは、針小棒大にして、予を誘い出す方便であろう。(総長就業と廃業 360)

(3) 速度の大きいようすに関する語をめぐって

速度の大きいようすに関係のある、次のような語について、2, 3の観点からしらべてみた。

はやく、すばやく、びんしょうに、てばやく、すみやかに、さっと、さっさと

「さつと」「さっさと」という副詞も加えたので、それとのつり合い上の必要もあるために、形容詞のほうも連用修飾の形を中心にして扱った。

まず、人や動物の動作について使われる「すばやく」「びんしょうに」「てばやく」「さっさと」と、もの一般の動きを主体とする「はやく」「さつと」との対立が考えられる。(分析例51)

人や動物の動作のようすを表わす語の中で、「てばやく」は手を使ってする動作にかぎって使われる。(分析例52)

「すばやく」「さつと」は瞬間的ともいえるほど、ごく短い継続時間内に速い速度で行なわれる一区切りの動作や動きのようすを表わすのに対して、「はやく」「てばやく」はそれほど短い継続時間内ではなくてもよい。(分析例53)

「はやく」「すみやかに」は速度が大きいようすを表わすほかに、(ものごとの終る)時点がより前であることも表わすのに対して、「てばやく」「さつと」は速度が大きいようすしか表わさない。「さっさと」「すばやく」もだいたい速度のほうだけを表わすようである。(分析例54)

(4) 見るようすに関する語をめぐって

人間がものを見るときのようすに関する、次の諸語について、2, 3の観点からしらべてみた。いずれも形容詞ではなく、擬態語的な副詞が多い。

ちらちら、じろじろ、きよろきよろ、ちらっと、じろりと、じっと、しげしげ、じろっと、まじまじ、はつたと

まず、「じっと」「じろじろ」「きよろきよろ」「しげしげ」のように継続的に見るようすを表わすものと、「ちらっと」「じろりと」のように瞬間的に見るようすを表わすものととの対立が考えられる。(分析例55)上の語例にみられるように、継続的なほうは量語的な形式のものが多く、意味上の対立が語構成と関係している。

次に、「きよろきよろ」「じろじろ」は視線が動的であるのに対して、「じっと」「はつたと」は不動的な見かたのようすを表わすといえよう。(分析例56)

見る動作の背後にある、その人の気持は、見るようすそのものにも微妙に表われ、それがこれらの語の意味の対立を作り出す1つの要素になっている。「じろじろ」は、「しげしげ」「まじまじ」などと違って、見る人の見られる人に対する無遠慮な非好意的な気持・態度が背景になっている。(分析例57)

「はつたと」は心に怒りを含んで眼光するどく見すえるようなようすである。(分析

例58)

「きょろきょろ」は不安定な気持ちでおちつきなくあたりを見まわすようすである。
(分析例59)

(5) 無意図性

むちゅうな<いっしょうけんめいな, けんめいな, ねっしんな (分析例60)

(6) 生得的な性質

きょうな<じょうずな, うまい (分析例61)

(7) 主体(走る・歩く動作)

いっさんに, いちもくさんに, <わきめもふらず (分析例62)

2.4. ことの属性

2.4.0. はじめに

形容詞の多くのものは, たとえば,

くだものが ない。

花が 赤い。

あの人は かしこい。

のように, 人やものを表わす具体名詞を主語にする述語になることができる。しかし, たとえば「いちじるしい」「むずかしい」のように, 具体名詞ではなく, 抽象名詞や, ことを表わす名詞句しか主語にとることのできない語もある。

進歩(違い・影響・寒さ…)がいちじるしい。

問題(選択・判断・解決…)がむずかしい。

バランスをとって立っているのがむずかしい。

これらの形容詞は

いちじるしい 進歩

むずかしい 問題

のように抽象名詞にかかる連体修飾語になったり,

いちじるしく 進歩する

のように連用修飾語になったりすることができることもある。しかし, ものや人を表わす具体名詞とは直接に結びつくことができない。

いちじるしい人

あの人はたべものの味にむずかしい。

のようなばあいには, 多義的な「いちじるしい」「むずかしい」の別の1義として考える

ことができよう。

このような形容詞は、ものや人の属性を表わす語ではなく、抽象名詞などによって表わされる動作・性質その他のことことの属性を表わす形容詞だといえよう。このようなグループを、ことことの属性を表わす形容詞と呼ぶことにしよう。

2.2「ものに関する属性」2.3「ひとに関する属性」の中で扱った語の中にも、実はことことの属性を表わす形容詞が存在した。たとえば、色についての「こい」「うすい」「あざやかな」など、音についての「かんだかい」「きいろい」「けたたましい」などは、もの自体を主体とすることはなく、ものものの1性質である色あるいは音についての属性を表わす語であって、ことことの属性を表わす語と呼ぶべきものであった。また2.3.2の中でCのグループと呼んだ、人に関する、一時的なようす・態度などを表わす「かいがいしい」「そっけない」「ぎこちない」「てあつい」「しどけない」のような語は、人そのものを主体とすることがなく、やはり、ことことの属性を表わす語と呼ぶべきものであった。これらは、ものや人ものや人に関する属性ではあるが、ものや人のある属性についての属性を表わす形容詞だといえよう。

2.2と2.3ですでに扱った以外の、ことことの属性を表わす形容詞の中から、次の2つの類についてだけ、用例によって調べてみた。

2.4.1 必然的な事態

ある成り行き・事態などを、必然性のあるものとしてうけとる態度に関係のある、次のような語のグループを仮定したい。これらの語はいずれも、ことを主体とする。

とうぜんな、あたりまえな、至当な、もっともな、むり(も・は)ない、やむをえない、しかた(が)ない

まず、「とうぜんな」「あたりまえな」「至当な」は、そのことが、十分な理由のあることで、そうあるべきであるという、積極的な肯定を含んでいる。

○筋道の通らないことを何がなんでもやれというのは、目上という特権を笠に着た横暴な要求だということになります。子供さんは反抗するのが当然です。(人間の壁・上 191)

○こうしたスターが作った時代劇ブームが行きづまるのは当然だ。(娯楽よみうり 1956年6月29日 66)

○自分が結婚すればお栄は自然自分と別れて行かねばならぬ。お栄がそれを思う時、喜びながらもさびしい気持ちになるのは、当然な事だと思直した。(暗夜行路・前 68)

○そして日本の国土を狙ふ夷狄の悪魔に憑かれた者、国賊が虐殺される事は当然な正

しい制裁だと考へるやうになつた。(青銅の基督 54)

○即ち文学上の作品にはどうしても遊戯分子を含む。現実の人生や自然に接したやうな切実な感じの得られんのは当たり前。(平凡 139)

○あの声とあの表情では大概の男がまるるのはあたりまへと思つたよ。(友情 71)

○一体、自分達の方から進んで生徒を許すのが至当だ。(破戒 339)

○此の東京を去るといふことに就いては、君が先づ去るのが至当だ。(蒲団 67)

○第一、今の場合、自分は穢多であると考へたく無い、是迄も普通の人間で通つて来た、是から将来とても無論普通の人間で通りたい、それが至当な道理であるから——(破戒 137)

「あたりまえな」は「とうぜんな」「至当な」よりも、そうあるべきだという要素は弱く、「ありふれた」「普通な」のような意味に近づくこともある。そういうばあいには、次の2番目の「くれない」の例のように、具体名詞とも結びつくことができる。

○こりや真面目な問題だよ——茶を飲むやうな尋常な事とは些少訳が違ふよ。(破戒 261)

○私はそういうあなたを尊んで来たし、二人の生活を誇りにもして来たんだけど、あなたは当り前の細君がやはり欲しくなったのね。(くれない 94)

○「恐いことはない。たゞそこを歩けばいゝんだ。あたり前に歩いてご覧。」(波 333)

○事務長と自分との間に何か当り前でない関係でもあるやうな疑ひを持つてゐるらしいと云ふ事を、他人事でも話すやうに冷静に述べて行つた。(或る女・前 207)

「もっともな」「むりもない」は、そのことが、理由のある、うなずけることだと、肯定的・同調的に受けいれるような態度に関係する。

○葉書では文面を第三者に読まれるおそれがありますから、彼氏がいやがるのももっともだと思います。(婦人生活 1956年6月 360)

○先生に御心配を懸けるのは、まことに済みません。監督上、御心配なさるのも御尤もです。(蒲団 56)

○そのわずらわしさは格別で、古い珍品考古学愛好家がついていけなかったのはもっともなことである。(旧石器の狩人 312)

○なるほどこれ等は一応もっともな非難である。(哲学以前 42)

○それゆゑに難解という訴えには幾分もっともな点がないではない。(哲学以前 44)

○西条は打てなかったが、下山投手の出来が良かったので無理もない。(野球界 1956年5月 132)

○然し、僕に新しい女が出て見れば、明子が平静でないのも無理はないんでね。(くれない 85)

○たしかに上を侮る傲慢な態度でしたよ。あれでは永蓮殿の御立腹は決して無理はないと思います。(出家とその弟子 178)

○「ひところのボクの生活たらなかったですよ。兄貴の描く太陽族がボクをモデルにしたなんて云われても無理ないですネ」(婦人倶楽部 1956年8月 203)

○病人は何よりも新鮮な野菜を喰べたがった。農家に生れ育つた女として無理ない望みだつたが、冬の季節で野菜に乏しかつた。(厚物咲 25)

「もっともな」「むりもない」においては、肯定的な態度は「とうぜんな」「至当な」などよりは弱いといえよう。上にあげた「もっともな」の例の中に、「幾分」「一応」に修飾されているものがあった。「*いくぶん当然だ」「*いちおう至当だ」のような結びつきは起りにくいであろう。

「やむをえない」「しかたがない」は、その事態は望ましくないが、必然性はあることゆえ、しぶしぶながら認めざるをえないというような、消極的に受け入れる態度に関係する。

○不犯は基督教の理想である。故に完全に実行の出来ぬは止むを得ぬ、唯基督教徒は之を理想として終生追求すべきである、と言つて、世間の夫婦には成るべく兄妹の如く暮せよと勧めてゐる。(平凡 92)

○「想起に整理と合理化が伴ふのは止むを得ません」(野火 172)

○「しようがないとは、なによ」

奇怪な言を吐く、無能亭主である。彼女の声が、キンキン響いても、やむを得ない。(自由学校 18)

○あゝ、不親切な男だと、君始め——まあ奈何な人でも、我輩のことを左様思ふだらう。思はれても仕方無い。全く我輩が不親切だつた。(破戒 296)

○康平にいわせれば、商売のつきあいもあるから芸者遊びをすることも仕方がないし、(娛樂よみうり 1956年1月20日 64)

○それ丈けの理由を以て君を処刑する事はまだ幾分一人決めの推量に依る処分であるとの非難をうけても仕方がないと云へる。(青銅の基督 114)

以上にみた3類の語を次のような同一の文脈で使ったばあいを想定してみよう。

(a) 機動隊を導入したのは当然だった。

(b) " むりもなかった。

(c) " やむをえなかった。

(a)(b)(c)いずれも機動隊導入の必然性は認めている。その点で、

機動隊を導入したのは不当だ(けしからん、とんでもない)。

のような文の内容と対立している。しかし、どの程度まで機動隊導入を肯定し、支持するか点では(a)(b)(c)の間に重大な対立がある。(a)は積極的な肯定、(c)は消極的な肯定であり、(b)は中間的だといえようか。

2.4.2 程 度

いろいろな形容詞が、実質的な属性の意味を失って、程度的な意味を派生させる傾向がみられる。たとえば、次にあげる3つの文例において、「たかい」「おおきい」「おもい」は、わずかなニュアンスの違いは別として、「比重」の程度が大きいことを表わす役割しか果たしていない。

○やはり融資関係と同程度に役員派遣の比重も高いことがわかる。(エコノミスト 1956年11月17日 39)

○トヨタ事業群のなかで見逃してならないものは、「販売部門」の強大化と、その比重の大きさであろう。(実業の日本 1956年5月1日 69)

○世間と家庭関係とのつながりの比重の点で家庭の方が遙かに重い。(婦人公論 1956年5月 88)

このように、いろいろな形容詞が主として程度を表わす意味を生じることがしばしばみられるのは、形容詞の意味に本来的にそなわっている「程度性」だけがあらわになる現象として理解される。

上に例をあげた「たかい」「おおきい」「おもい」は、「比重」という尺度の、ある基準をこえた領域全体をさすことができる。もう一段上位の、より細かい程度の限定は、「とても」「たいへん」「ひじょうに」「はなはだ」のような程度副詞によってなされることが多い。たとえば「比重がひじょうに高い」のように。しかし、こういう程度副詞に相当するような意味をもった形容詞も少数ながらある。「はなはだしい」「いちじるしい」などがそれである。また、形容詞の連用形「ひどく」「えらく」「すごい」などが程度副詞的に使われることも多い。これらはおもに連用修飾語として使われ、連体修飾語や述語としての用法は欠けていたり、微弱だったりするものが多い。したがって、もとの形容詞とは別の副詞とみられることの多い語もある。ここでは、副詞的なものまで含めて、形容詞としての本来的な意味・用法との関係を念頭におきつつ、用例によって検討してみたい。具体的には次の10語を例として取り上げよう。

はなはだしい、いちじるしい、おそろしい、ひどい、えらい、ばかな、すばらしい、すごい、ものすごい、こよい

なお、このような程度の大きいことを表わす語は、実体そのものの属性ではなく、属性の程度について言及するものであるから、当然ことを主体とするものである。

はなはだしい

「はなはだしい」の用例をながめると、大部分は何かよくないことの程度が大きいばあいに使われている。用法別に例を少しあげてみよう。まず述語的に使われた例をあげる。

○洗濯する前よぐれの甚だしくないうちらばキハツ油をガーゼか白布にうっすらと

つけ軽くふきとります。(週刊サンケイ 1956年2月26日 47)

○心身の絶対休息の科学を知らない人々はその体力と精神力を消耗することが甚だしい。(大法論 1956年5月 111)

○男女同権のこの世の中で、女を不浄扱いにするなんて時代おくれもはなはだしい!(週刊朝日 1956年7月15日 80)

○不慣れな事務に擱って、文部省の主と衝突し、槍玉に揚げられたらば、恥辱もまた甚しい。(総長就業と廃業 363)

3, 4番目の例にみられるような「……も(また)はなはだしい」は、慣用語的な表現形式になっている。次に、連体修飾語に用いられた例をあげよう。

○自分が死んだ後、この孤独な母を、たつた一人伽藍堂のわが家に取り残すのも亦甚しい不安であつた。(こゝろ 117~118)

○彼等は体の重みの甚しい苦痛の為に閉ぢた眼がつるし上り、顔は蒼い土色をし、そしてその引きつった髪の毛根からは血がしたゝつてる。(青鷲の基督 55)

○特に日本の勤労者は甚だしい生活水準の切り下げをしいられており、この貧困化に対しこのたたかいは高まらざるをえない。(中央公論 1954年1月 171)

○学者が時の政府なり、権力者に学問上の協力をする事は、学者として甚だしい墮落であり、(文芸春秋増刊 1954年6月 33)

上例のほかに、「(はなはだしい)不幸・浅慮・禍害・下劣・弱化・コジツケ」などの例もある。次に、連用修飾語の例をあげよう。

○何事も無いのに出て来るやうな、そんな軽率な男でないと思つて居ります丈に、一層甚しく気を揉みました。(蒲団 22)

○財貨に対する今日の観念は甚しく人心を陋劣にする。(人格主義 64)

○数学的な関係や専門的術語をできるだけ避けたので、表現がはなはだしく曖昧となつたが、(物質世界の客観性について 281)

○推定二十羽ばかりのトキの運命は甚だしく危殆に瀕してゐる如くであるのを、たまたま上野動物園に捕獲を許すのはどうであらうか。(世界 1953年7月 165)

「はなはだしい」の大部分の用例は、上にあげた諸例のように、なんらかの点で望ましくないことについて使われている。しかし、一部分の用例については、(かならずしも)そうは言えない。たとえば、次のようなものである。

○僕等二人の精神状態は二三日と云はれぬ程著しき変化を遂げてゐる。僕の変化は最も甚しい。(野菊の墓 15~16)

○そのときひとしほ甚だしい轟きがして、堅坑から高いしぶきがあがつた。(潮騒 89)

○一パイを食べ終ると、五百助は、甚しく満腹した。(自由学校 175)

○しかし、俺々だらしがねエゾ、という自覚は、甚だしく気持を楽にするものである。(中央公論 1954年6月 244)

以上の結果から、「はなはだしい」は「よくないことの程度が大きい」のような意味で使われる傾向があると仮定したい。

いちじるしい

○ 観法というものが、文学の世界にも深くは行って行ったのもむろんのことであって、そのいちじるしい例が西行であります。(私の人生観 97)

○ 世界の何処かの隅において或る著しき物を占有する者は——それが当然彼の権利であるとないとを問はず——我々がそれを占有する可能性を奪ふ者として「痕に触る奴」である。(人格主義 103)

では、「はっきりと目立つ」のような本来の意味で使われているのであろうが、このような例は全体からみるとごく少なく、大部分は程度が大きいことを表わす意味で使われている。「はなはだしい」と同様に、述語・連体・連用の用法が揃っている。「はなはだしい」との相違点の1つは、いいことにもよくないことにも差別なしに使われ、その点が語義と無関係であることである。「*進境がはなはだしい」とはふつう言わないが「進境がいちじるしい」とは言える。連用修飾法の例についてこれを示すと、

○ 次に国際収支もいちじるしく好転して、昭和三十年には一年間だけで約五億ドルの黒字が残るほどの好調となり、(農業朝日 1956年8月 32)

○ 化繊の技術は著しく進んでいる。(実業之日本 1956年5月1日 35)

はよいこと、望ましいことに、

○ 革命当時のソ連邦の電力生産は先進資本主義諸国にくらべていちじるしくたちおかれていた。(別冊エコノミスト 1956年10月 55)

○ 少くとも、社としての主張に著しく不利で、その反証となるような事実は、大きく取扱うわけにはいきませぬし、(世界 1956年4月 95)

はよくないこと、望ましくないことに使われている。

連体用法、述語用法の例をあげよう。

○ 物理学のその後のいちじるしい発展は彼の見透しが正しかつたことを完全に証明し、唯物弁証法の有効性が如実に示された。(原子物理学の発展とその方法 323)

○ 余所の女の子のやうに長閑な春は知られないでおつきは生理上にも著しい変化を遂げた。(土・上 119)

○ 諜報機関と科学的作戦立案の点で世界的に優秀であった米軍当局でも、日本の軍事力の甚しい弱体化と士気の一ちじるしい低下を察知できなかつた。(人物往来 1956年2月 9)

○ その野望を断念せしめて行くには効き目は著しかつた。(青銅の基督 5)

○ 特に変化の著しい戦後の社会や、環境に私は順応できず、ただ、昔の自分へののみ心のよりどころを求めてきたのです。(週刊サンケイ 1956年2月26日 85)

- 自然科学者はしかし自然科学以外のことについては、はなはだ幼稚な誤りを犯すことが多い。十九世紀の末期以後の自然科学の大家たちにとくにいちじるしい。(革命期における思惟の基準 134)

おそろしい

○それは、恐しく冷い、相手にさむ気をかぶせるといった口調だった。(むらぎも 44)
 の「恐しく」は「冷い」の程度が大きいいことを表わしているのではないかと思われるが、「こわい」意味の「おそろしい」となにかしらの関係がありそうにも思われる。しかし、次にあげるような、恐怖感とは無縁な場面に使われた例も少なからずあって、「おそろしく」が程度表現の語に転化した用法を持っていることがはっきりする。

○悪戯好きなその心は、嘉永頃の浦賀にでもあればありさうなこの旅籠屋に足を休めるのを恐ろしく面白く思つた。(或る女・前 23)

○じっさい、かれら自身、動物学界ではながいあいだ、何かおそろしくアマチュア的な——非科学的な——仕事をしている連中、という眼で見られてきた、ということをおぼえてはいまい。(高崎山 54)

○こう言う世界の女にしちゃ、恐ろしく純な感じじゃねえか。(週刊新潮 1956年5月29日 48)

○おそろしく細長い町であつた。(富岳百景 57)

○「岩崎義夫氏はおそろしく若い女に人気があるんですよ。」(むらぎも 196)

「おそろしく」が程度を表わす意味を生じる経路としては、「恐怖を感じさせるほど著しい程度に→著しい程度に」のようなプロセスが推測される。「やせている」について使われた次の2例を参考までにあげよう。

○彼は下痢患者らしく怖ろしいほど痩せて、私の返事を待つ間も、ちつと立つてゐられないらしく、体をふらふら振つてゐた。(野火 27)

○貧乏な上に恐ろしくやせている私がこんな事をいうと、それこそほんとうのやせがまんというものだと笑われるかたもあろうが、(貧乏物語 142)

「おそろしい」の語形が、上の「おそろしく」と同じように使われることがある。その例と思われるものをあげよう。

○必ずしも高利を貪る訳では無いが、恐ろしいきちやうめんな男で、自分でも契約をきちんと守るかはりに、(愚問の記・上 187)

○「おそろしい疲れるもんですね。」(あらくれ 233)

連体修飾用法に立つ「おそろしい」も程度の大きいことを表わすのに使われることがある。

○恐ろしい力で、頬をなぐられたのである。(自由学校 123)

○里人は、此の恐ろしき奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を、少しも疑はなかつ

た。(恩讐の彼方に 79)

などの例では、恐れを感じさせるようなという意味が多少なり保たれているかもしれない。しかし、次にあげるような例では、恐れの感じとは関係がなく、程度の大きいことを表わしている。

○木村は恐ろしい力をこめて、

「それはさうですとも」

と答へた。(或る女・前 205)

○と思ふと、荷車は、石塊の多い凸凹の坂路を、ガラガラと鳴つて降りはじめた。おそろしい速さであつた。(冬の宿 200)

○「あんたの手紙見た時は羨ましかつた。」

「あんな貧乏話が羨まれるの。」

「なら貧乏の結果が。」

「怖ろしい贅沢ね。」(真知子・前 49)

○葉子の性格の深みから湧き出る怖ろしい自然さがまとまつた姿を現はし始めた。

(或る女・前 150)

次の例では「おそろしい」が人を表わす名詞を修飾しているが、その属性的な側面について、程度が大きいことを表わしていると考えられる。すなわち、「おそろしくやきもちをやく人」「おそろしくよく泣く人」などのようにパラフレーズされるべきものであろう。

○君は恐しいやきもち焼きだつて、駒子が言つてたよ。(雪国 136)

○勘次は小さな時分から侮られて能く泣かされた。彼は恐ろしい泣虫であつた。(土・上 204)

「おそろしい」の程度を表わす意味は、述語的用法はほとんどもっていないようである。しいて探すと、次の例などはややそれに近いものと言えようか。

○レコード歌手の人気のうつり変りのはげしいことは恐しいばかり……(平凡 1956年 6月 274)

ひどい

○「そんな風に言うんなら、ずい分あなたはひどい。」(くれない 96)

○「そんな事はどうか知らんが、ひどい母親もあつたもんですなあ。父親が無いんだというから、子供だけ置き去りにされたんだね」(人間の壁・上 31)

○そうすると帰り道によけいにひどい目に会わせるそうですよ。(出家とその弟子 26)のように、人やその行為について、人情味がない、無慈悲だというのが、中心的な意味だと考えられる。

○自分はまだその女なくも生きてゆける。しかし友にとつてはあまりひどい打撃だ。

(友情 117)

○横須賀線なんか、どんなひどい地震だって、あんなに揺れやしませんよ。(文芸春秋 1953年10月 142)

○どうも気分がわるい。——ひどく頭痛がするし、熱があるらしい(伸子・上 55)
 のような例では、すでに中心的な意味が弱まり、程度の大いことが主な要素になっているといえよう。しかしまだ、そのことを受ける人間にとって被害のあることをも表わして、完全な程度の表現とは言い切れない段階であろう。しかし、次にあげるような例では、「ひどく」はまったく程度表現の語になっているといえよう。

○僕が大きくなって、活発な風をして居るのが^{ひどく}非常嬉しい事。(思出の記・上 86)

○紀尾井町に勤めてゐた間ぢう、おはまはひどくこれを徳として、旦那様の御用と云ふと、何を措いてもまめまめしく働く^と云ふ風だつた。(多情仏心・前 308)

○そのかげに、屋根に落葉をためた小さな古びた二階家が一かたまりになつて崖に寄りそひ、そこだけはひどくしづかなおもむきがあつた。(冬の宿 9)

○何よりも、五百助にとって、有難いのは、檻房内の水洗便所だつた。これが、ひどく、上等な、洋式便器である。(自由学校 360~361)

○そのときひどくきれいな人間が安吉の目にはいつてきた。一人の青年が、一人の美しい女を案内してそこへはいつてきたのだつた。(むらぎも 263)

上にあげた例はみな連用修飾語としての「ひどく」であつた。もし、次にあげるような例までも、程度表現の内として認めるならば、連体修飾語や述語としての用法も存在することになる。

○旦那さんは昨年のK一争議の時、ひどい結核だつたのを無理して、それがもとで亡くなつたやうなものなの。(真知子・前 210)

○娘ツ子がよ、搔きの口説きの中でも、鼻もひっかけねえから、ひで女嫌れえだ。

(読切倶楽部 1956年6月 309)

○有繫に、疲が^{ひど}詰いから、心は少し^{ほんやう}茫乎して来た、何しろ夜^よの白むのが待遠でならぬ。(高野聖 63)

えらい

○今思い出したのは、昭和三年の御大典のとき、京都に財界の偉い人がたくさん集まりましてね。(文芸春秋 1954年3月 69)

○成功せんでも偉い人もあるし、成功してもつまらん人もある。(文芸春秋増刊 1954年 政界読本 76)

のように、人の社会的地位や、あるいはもっと無形的な人物評価を表わすのが中心的な用法である。

○ええか、言ふことをきかんと、あとがえらいぞ。(潮騒 81)

○「僕、えらい目に遇つちやつたよ。もすこしのこと、電車で轢き殺されるどころだつた。」(改造 1954年6月 235)

○お前の方で勝手に俺の隊にあんなものをよこしときながら……。ほんまにえらいもんを、かかえこませやがったぜ……。 (真空地帯・上 14)

○外はえらかつたでせう。今夜は少し凍^{しも}が強いやうですな。(波 27)

などは、たいへんだ、くるしい、こまった、のような意味で、あきらかに中心的な意味からかけはなれている。「よくないことの程度がはなはだしい」のような意味からこういう使いかたがされるのだとすれば、程度的な意味といえよう。さらに、

○稲葉さんも今度の早慶戦の時にはベンチをとび出してどなったりえらくはりきっていましたね。(野球界 1956年12月 134)

○「君はまたえらく字が下手じゃないか、この履歴書の字は大したものだね」(知性 1956年9月 134)

などは程度副詞的である。

○君は動物のこと、えらい詳しいなあ。(明星 1956年11月 154)

は、形は「えらい」であるが、連用修飾語としての「えらく」と同等の働きをしている。

○えらい勢いで走ったフランスよりは、歩いていたイギリスの方が、ずっと早く目的地に近づいたといえるようである。(ものの見方について 18)

○「えらい愕きやうぢやなあ。ここへ来て悪かつたら、かへるとしようか」(潮騒 126)の「えらい」はふつうの連体修飾語で、しかも単に程度の大きいことを表わす意味の例だと思われる。

○初江といふんだが、えらい別嬪なんだ(潮騒 56)

も同様だが、「別嬪」という、人を表わす名詞を限定している点で、^{こと}を主体とする形容詞の原則からは例外的なようにみえる。しかし、「たいへんな美人」などのばあいと同じように、「えらい」が意味的にかかっているのは「別嬪」の実体的な側面ではなく、美しいことを表わす属性的な側面だと考えられる。つまり、「えらく美しい人」でも言いかえられるべきものであろう。

ばかな

○スエーデン！ それはまた馬鹿に遠いところですね。(波 378)

○「洋服はばかに評判がいゝんですよ。」(あらくれ 228)

○が、それが「赤化」なら、馬鹿に「当り前」のことであるやうな気が一方してゐた。(蟹工船 45)

○「『私も故郷を知らないのです』か。あいつお前には馬鹿に優しいな——」(宝石 1956年12月 235)

のような例は、あほうの意味の「ばかな」とはまったくつながりが感じられないくらい、程度の大きいことを表わす語になりきっている。これらの例にしてもそうであるが、「ばかに」には「法外に」「いやに」というような、普通の考えられる程度からかけはなれているというニュアンスが含まれている。次のような例では、それがわりあいはっきり出ているように思われる。

- 裏の方が馬鹿に広くて倉庫が幾箇所もあつた事や、(思出の記・上 8)
- 「莫迦に若くみえるね。少くとも布哇あたりから帰つて来た手品師くらゐには踏めますぜ。」木村は笑つた。(あらくれ 227~228)
- 「併し奥さんがゐないところだからね……」
「今日は馬鹿に遠慮するぢやないか。」(波 13)

連体形の「ばかな」も次の例のように、法外に大きな程度を表わすことがある。

- 「なんだい。君もまた馬鹿な熱心さだね」(多情仏心・前 34)
- 電波機械に馬鹿な信用をもっていないけれども、生の音と同じ音を出すということは不可能なんだ。(音楽の友 1956年7月 80)
- 「それはさうと、此間の日曜の立花の独演会は莫迦な景気だつたといふぢやあないか。」(末枯 31)
- ところが、その東金の興行が莫迦なあたりかたをして、それがために、つづいてその一行は、更に安房の方をずつとまはつてあるくことになつた。(末枯 21)

すばらしい

- ここに一枚のすばらしい電子顕微鏡写真がある。(生命の暗号を解く 169)
- 素晴らしい女性とランデ・ヴウに行くところなんだ。(帰郷 164)
- 今あの人それや素晴らしい研究を始めたところなのよ、できればとても有望らしいけれどなかなかなんですつて。(伸子・上 74)

における「すばらしい」は、ものや人やことが質的にひじょうにすぐれていることを表わしている。

- 「暫らく逢はなかつたうちに、素晴らしくいゝ顔になつたもんだな」(多情仏心・前 142)
- 十二時になつても、此店は素晴らしい繁昌ぶりで、私は家へ帰るのに気が気ではなかつた。(放浪記 50)

のような例も、質的な評価とも考えられるが、程度的に大きいことを表わしているともみられよう。しかし、次のような例では「すばらしい」本来のもっている高い積極的な質の評価とは(ほとんど)無関係になって、単におどろくほど程度が大であることを表わすに至っているとみられる。

- そしてその国民経済が小さいのに、消費生活の面は、料亭、待合、キャバレー、バ

一、カフェー等々の数のすばらしく多いこと、これは日本の都会の特徴である。

(もの見方について 161)

○竹のなかには素晴らしく大きな丈の高い椿が、この清楚な竹藪のなかの異端者のやうに、重苦しく立つて居た。(田園の憂鬱 14)

○臙物、焼鳥、焼豚、など、すべて脂つこく動物的なものを、店の者が驚くほど多量に、すばらしい速度で食ふのであつた。(冬の宿 97)

述語用法においても、「すばらしい」が程度の大い意味を表わすことがあるか、よくわからない。そうみるのに好都合な例は資料内にみあたらない。

すごい

○この女は腹をぐるりと一巻きにして、臍のところ^{いへすみ}に朱い舌を出した蛇の文身をしていた。私は九州で初めてこんな凄^いい女を見た。(放浪記 8)

のように、きみのわるい感じ、おそろしい感じを与えるようようすが、「すごい」の基本的な意味だと考えられる。

○この頃おかきになるものには凄^いい程、強い感じが出て来たやうに思ひます。(友情 104)

○次の日には空は些の微粒子も止めないといつたやうに凄^いい程晴れて、山も滅切り近く成つて居た。(土・上 134)

○美少年と云つても、可愛らしいと云ふのではなく、誰が見ても正確に二十歳^{はたち}とは思ふまいほどにふけてもゐるし、丈は四寸豊で、肉は薄^いく、キリとしまつた、凄^いい質の美しさだつた。(多情仏心・前 137)

のような例では、普通の意味でこわいようなものではないが、ある属性の程度・質が一種の戦慄を感じさせるようなようすを表わしているとでも言えないであろうか。しかし、次のような例になると、そのような性質も失なわれ、「すごく」はあきらかに程度副詞的なものになっている。

○性格がすごく明るいんですよ。そのくせ人からはものすごく陰影があるといわれるんです。(週刊サンケイ 1956年10月7日 57)

○私なんかもそうですが、すごく身近く考えていますね。(装苑 1956年4月 131)

○ジェームス・メスンなんて、すごく好き！(小説サロン 1956年10月 181)

○「世界史」の人ネールに対する記者団の質問は、すごく活潑だが、ネールはその一つ一つに、誠意の限りをつくして相手が十分に理解するまで答える。(世界 1954年4月 131)

上の4例のうち、1例から3例までは座談会・対談の記事の中の若い女性の発言であるが、程度副詞的な「すごく」はもちろんくつろいだ会話などで多く使われる。

○併し、凄^く恐ろしい感じを彼に与へたものは、自然の持つて居るこの暴力的な意志

ではなかつた。(田園の憂鬱 24)

の「すごく」は、程度副詞的に「おそろしい」を連用修飾しているときみようとするのは無理に感じられる。それは、この作品の文体が程度副詞的な「すごく」の持つ文体的特徴と相いれないためでもあろう。

「すごい」の程度表現的な意味は、連用修飾用法だけに限られてはいないようである。たとえば、

○観光ブームとは直接関係はないが、ここ二、三年間の来日音楽家の数はすごい。

(週刊新潮 1956年7月23日 56)

の「数はすごい」は「数の多きはすごい」「数はすごく多い」とみて、主に程度の大きいことを表わすものとみることができよう。

程度を表わす「すごく」「すごい」は当然、ことを主体とするはずで、事実、以上にあげた例はみなそうであった。しかし、

○「オジサマこそ、驚いたわ。まァ、スゴイ服、着てらっしゃるじゃないの。靴も、帽子も…」(自由学校 250)

では、「すごい」の主体が、「服」というものである。これは、たとえば「すごくりっぱな服」「すごく上等な服」といったような、「すごく」の限定する語が「すごい」の中に包摂されたような表現だと考えることができようか。あるいは、このような用法がすでに地歩を確立していると認めるならば、「すごい」の意味の中の1つに、本来的な意味とは反対的な「すばらしい」のような意味があるということになるだろう。

ものすごい

○双眼鏡の中に映る敵艦の甲板上では火焰の中を人影が右往左往しているのも物凄く感じる。(実話雑誌 1956年4月 30)

○私はそれでも昨夜の物凄^{ゆび}い有様を見せずに済んでまだ可かつたと心のうちで思ひました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しくさが、其為に破壊されて仕舞ひさうで私は怖かつたのです。(こゝろ 273)

などは、非常におそろしい感じを与えるようなようすという、本来的な意味で使われている。

○まだ夜の気が薄暗くさまよつてゐる中に、頬をほてらしながら深い呼吸をしてゐる葉子の顔が、自分にすら物凄^{ゆび}い程なまめかしく映つてゐた。(或る女・前 101)

○物凄^{ゆび}く底光りのする真青な遠洋の色は、いつの間にか乱れた波の物狂はしく立ち騒ぐ沿海の青灰色に変つて、(或る女・前 142)

などでは、すでに程度表現的になっていると思われるが、同時にぞっとするような感じが含まれているといえよう。ところが、次にあげるような例になると、まったく程度表現の語になっている。

- かれは、都井岬ではじめてサル顔をみたとき、やはりものすごくうれしかった、と白状した。(高崎山 55)
- 性格がすごく明るいですよ。そのくせ人からはものすごく陰影があるといわれるんです。(週刊サンケイ 1956年10月7日 57)
- 物凄くグロテスクな猿で、顔は真黒な毛でおおわれているが、顔の周りをぐるっと丁度お面をかぶったように白毛がフチをとっている。(文芸春秋 1956年9月20日 7)
- 次にあげるような、連体修飾用法・述語用法の「ものすごい」も、(主として)程度の非常に大きいことを表わすものであろう。
- 暴漢は、女に飛びかかると、後ろから羽がはじめにして娘の左の腕を掴んだ。ものすごい馬鹿ちからであつた。(本日休診 47)
- その人たちがものすごい生きがいを感じて研究をしていることを知った。(生命の暗号を解く 166)
- 溝の向ふは、若布を染める工場の敷地である。若布の臭気が物凄かつた。(本日休診 91)

こよない

資料内に4例あり、みな副詞的な「こよなく」の例である。

- 故知れぬかなしみぞ「げにこよなくも堪えがたし(小説サロン 1956年1月付録 恋愛のバイブル 68)
- は文語体の訳詩の中の例であるが、他の3例は口語体の文章の中で使われている。しかし、文章語のない詩語的な語だといえよう。
- 坂上は、赤ん坊と遊んでゐる「うちの女の子」に、こよなくいとしい思ひをかけてゐた。(文芸 1956年9月 140)
- 青春にあつて、一番心ゆたかにしてくれる夢、理想を求めて生きる希望の世界、そうしたものに包まれてある青春を、こよなく愛する私だからです。(近代映画 1956年10月 138)
- ハリウッド剣劇の名優来るっていうんで、バティスト大統領は彼を特別謁見し、こよなく、もてなした。(週刊東京 1956年7月7日 47)
- 資料内にはないが、たとえば「こよない喜び」というような、連体用法はあり得るように思われる。しかし、「*その喜びはこよなかった」というような述語用法は不可能であろう。

程度の大きいことを表わす形容詞的あるいは副詞的な語は、以上のほかにもまだある。たとえば、

たいへんな、ひじょうな
 とてつもない、どえらい、もうれつな
 むやみに、やたらに、めちゃくちゃに、法外に
 いやに、やけに
 いたく
 めっぼう

のような語である。

このような、程度の大きいことを表わす語は、そのことを客観的に表わすだけでなく、話し手の言いたいことを主観的に強調したり、聞き手に与える感情的な効果を強めたりする機能を負わされている。したがって、表現性の強い語であることが要求され、使い古されて新鮮さが失われると、次々に新しい表現的な語が求められ、発生する。現代ではたとえば、「とても」「断然」「全然」「絶対」のような語がそういう性格を負って隆替しているといるといわれる。流行語的な「最高」「拔群」なども同類であろう。このような語を発生させる供給源の1つとして、形容詞、とくにその連用形の副詞的用法があるわけである。

上にみた実例からもうかがわれるように、程度の大きいことを表わす形容詞は、連用修飾語として、副詞的に使われることが圧倒的に多く、したがって、もとの形容詞から分化した副詞として扱われるものも多い。しかし「はなはだしい」「いちじるしい」のように形容詞としての用法を完全にそなえている語もある。それらを、完全な「程度形容詞」と考えれば、他方の極にいわゆる程度副詞があり、その中間の性格のものもあるということになろう。上に用例をあげてしらべてみた語についても、連用修飾語としての副詞的な用法しかないか、連体修飾語あるいは述語としての用法ももっているかどうかの認定はむずかしいものがあつた。しかし、一応の認定をして次のように配列を試してみた。(上に取り上げた10語そのままではなく、多少の出入りがある)

	述語	連体修飾語	連用修飾語
はなはだしい	+	+	+
いちじるしい	+	+	+
すごい	(+)	+	+
おそろしい	(+)	+	+
ひじょうな	-	+	+
たいへんな	-	+	+
すばらしい	-	+	+
ばかな	-	+	+
こよない	-	(+)	+
いたく	-	-	+

やけに	—	—	+
とても	—	—	+

2.4.3 その他

こと／もの

ろこつなくあらわな, むきだしな (分析例63)

「ろこつな」は、人の気持・意図などが、他人の感情などを顧慮しないで、かくされることがなしに表わされるようすであって、その主体はことである。「あらわな」「むきだしな」も同じようなことに使われることもあるが、有形の具体物も主体になることがある。

3. 程 度

3.0 はじめに

ものごとの属性には、属性の種類の違いとともに、属性の程度の違いが基本的な契機として存在する。ものごとの属性をあらわす主要な品詞である形容詞においては、その意味の特性として「程度性」を含んでいることが非常に多い。形容詞が、事物の属性についての相対的な判断を表わすと言われることがあるのも、このことに起因するものと考えられる。

3では、まず3.1で、形容詞の意味における程度性とその表われについて一般的に概観し、3.2で程度の観点から区別され、対立している形容詞についてしらべてみよう。

なお、ここでは数や量の大小をも、「程度」に含めて考えることにした。

3.1 形容詞における程度性

3.1.1 程度副詞との関係

形容詞が、その意味に「程度性」を含んでいることは、程度副詞との関係からもみていくことができる。「すこし」「かなり」「非常に」などの、いわゆる程度副詞は、主として形容詞を修飾することを職能とする。ということは、程度副詞に修飾される形容詞の意味のほうに、程度の限定をうける性質がそなわっているからに外ならない。形容詞の意味に内在している「程度性」が有形化して表わされるのが程度副詞であるということもできよう。

ただし、程度副詞はすべての形容詞を修飾すると、一般に言われていることは正しくない。たとえば『国語学辞典』の「副詞」の項の中に

程度副詞は情態性概念の語、主として形容詞・形容動詞を修飾しうるだけだが、

その代りどんな形容詞・形容動詞をも修飾しうる。

とある。「どんな形容詞・形容動詞をも修飾しうる」と、文字通りいうことはできないことを次に明らかにしてみよう。そのことが同時に、意味における程度性の観点からの、形容詞の一種の分類にもつながっていくと思われる。

157ページのの表は、程度副詞の数例を横の欄にとり、形容詞の20例ほどを縦の欄にとり、ある形容詞がある程度副詞に修飾されうるかどうかを検討してみたものである。(形容詞の19番にナ型の形容詞の形であげた「いっぱいいな」は「いっぱいいの」のほうがむしろ普通の形であろう。また、20番の「同じ」は普通、連体詞として使われる。この2語は文字通りの形容詞とはいえない例である。)◎の印がついているのは、資料中に実例があったことを示す。「多い」についてだけ、その実例を示してみよう。

○ですから今度でも競争者が可なり多いのだけれど、文部省のN-さんがあのひとを推薦してくれてるんだつて云ふから大丈夫らしいの。(真知子・前 163)

○この附近には、狂犬が非常に多いからだ村の一人が説明して居た。(田園の憂鬱 57)

○「改める道をしっかり(足もとから)考え、その友をもっと多く探しもとめる」(人生手帖 1756年3月 75)

○弟の方がその子の父親だといふ可能性はずつと多いわけなんだが。(波 164)

次に、○の印はたまたま資料の中に実例はなかったけれども、存在しうると筆者個人の内省によって判定したことを示す。また、それ以外の空欄は資料内に実例がなく、また可能性としても、普通の条件のもとではあり得ないと感じられるものである。空欄になっているものでも、特殊な条件のもとでは結びつきうるものもある。たとえば(18)「ない」の、「もっとない」は空欄にしてあるが、「ぼくのほうがもっとないんだよ、金が。」などと言うかもしれない。この場合の「ない」は「少ない」に近い内容を表わすのに使われており、したがって程度副詞と結びつく可能性が考えられる。この表の「ない」は有無の無を意味する、本来の使われかたについてだけ、示してある。また、程度副詞の(7)「まったく」は、「実に」というような意味の、驚きの感情を中心とする用法では、たいていの形容詞と結びつくが、ここではそういう感情を含まない、「完全に」という意味の用法についてだけ考えてある。

もし、すべての程度副詞が、すべての形容詞を修飾しうるならば、この表の全部のます目が◎か○になるはずである。(6)「ほとんど」(7)「まったく」は、ここではかりに特殊な程度副詞と考えることにしたいが、(5)までの所でも、空欄がかなりある。下の方の「ない」「いっぱいいな」「同じ」などは普通の程度副詞をまったく受けつけない。これは、これらの語の意味が、極限的ともいうべき性質をもっており、普通の程度性を含んでいないためだと考えられる。たとえば「ない」であるが、「少ない」とい

			1 す こ し	2 か な り	3 ひ じ よ う に	4 も っ と	5 ず っ と	6 ほ と ん ど	7 ま っ た く
1	多	い	○	◎	◎	◎	◎		
2	高	い	◎	◎	◎	◎	◎		
3	暗	い	○	◎	○	◎	◎	◎	◎
4	う	れ	◎	○	◎	◎	○		
5	お	び			○				
6	こ	だ	◎						
7	う	す							
8	ま	っ						◎	
9	ふ	る	◎	◎	◎	○	◎		
10	あ	た	◎	○	○	◎	◎	○	○
11	つ	よ	◎	◎	◎	◎	◎		
12	丈	夫	◎	○	○	◎	○	○	○
13	無	病						○	○
14	危	険	◎	◎	◎	○	○		
15	安	全	○	○	○	◎	○	○	○
16	確	実		○	○	◎	○	○	○
17	正	し				◎	◎	○	○
18	な							◎	◎
19	い	っ						◎	
20	同	じ						◎	◎

う属性は「やや少ない」「かなり少ない」「非常に少ない」のように程度性があるが、「ない」という極限に達すると、もはや程度性が考えられなくなる。また、「同じ」についても、「違う」「似ている」などの属性には「かなり違う」「すこし違う」「やや似ている」「非常に似ている」のように程度性があるが、「同じ」という極限に達すると、「すこし同じ」「もっと同じな」などという程度の限定はありえなくなる。

ところが、「ほとんど」や「まったく」は「ない」「同じ」などを修飾する。「まっ

たくいっばいだ」はふつう言わないことに一応判定したが。) これはなぜであろうか。たとえば、「同じ」という属性そのものに程度性はないけれども、「同じ」という極限に接近しているのが「ほとんど同じ」、到達した段階が「まったく同じ」だと考えられる。「ほとんど」や「まったく」は、ある極限值への接近度を表わす、特殊な程度副詞だと考えられる。

表の上の方の、「多い」「高い」「暗い」「うれしい」のような形容詞は、「ない」「いっばいな」などと反対に、普通の程度副詞とよく結びつく。こういう形容詞はほかにも数多くあって、いろいろな程度を自由に表わしうる形容詞だと考えられる。そして、これらは「ほとんど」や「まったく」とは、逆に結びつきにくい傾向がある。ということは、こういう普通の形容詞は、その程度が目盛りの上を連続的に自由に上下するような、尺度的ともいべき性質を表わす語であるためであろう。(3)「暗い」(12)「丈夫な」(15)「安全な」などは、全部◎か○になっており、これらの語は、尺度的であると同時に、極限的な性質も持っているように思われる。

(5)～(8)の「おびたしい」「こたかい」などはほとんど全部空欄になっている。(1)「多い」は尺度的だと述べたが、「おびたしい」は「多い」という尺度の、いちじるしく上の方の部分だけに範囲を限定されている。すなわち、単語自身の意味の中に程度の限定が含まれているために、程度副詞と結びつかない、あるいは結びつきにくいと考えられる。「たかい」に対する「こたかい」、「くらい」に対する「うすぐらい」、「まっくらな」のような、程度に関係する接頭語を含んだ派生的な形容詞(3.2.3参照)も、この類に属するのが普通である。りくつとしては、たとえば「こたかい」の範囲の中でも、小刻みな程度の段階が考えられるはずであるが、実際には程度副詞の修飾を受けることは非常にまれなようである。「すこし小高い」は◎で、資料内に用例が1つだけあった。(この例とその解釈については、分析例27を参照)

以上、形容詞と程度副詞との関係をかんたんに調べてみたが、典型的なタイプとしては(1)～(4)のような、基本的な一般的な形容詞で自由な尺度性をもっているもの、(5)～(8)のような、語自身の中に程度上の制限をもっているもの、(18)～(20)のような特殊な意味をもった語で尺度的でないもの、の3類が考えられる。残る(9)～(17)も、以上の3つのタイプの何れか、またはその混合として考えることができよう。

3.1.2 形容詞における反対語

形容詞の中には、いわゆる反対語の関係で対をなしているものが数多く存在している。このことも、形容詞の意味における程度性と深い関係をもっている。まず、反対語一般の中で、形容詞における反対語はどのような特徴をもっているか、考えてみよう。

反対語には、矛盾概念(contradictory notions)を表わすものもあれば、反対概念(contrary notions)を表わすものもある。これは論理学の観点を借りた分類であるが、

反対語の意味について言語的にしらべる上でも役に立つものと思われる。

矛盾概念を表わす反対語というのは、たとえば、

男——女 偶数——奇数

のように、問題になっている対象の領域がきっちりと分割されて、中間的・過渡的領域が普通には考えられない反対語である。FとGによって反対語を示すと、

$$\sim F(x) \sqsupset G(x)$$

$$G(x) \sqsupset \sim F(x)$$

の両方が成り立つ関係にある。たとえば、

運転手は 男でない。

と言えば、

運転手は 女だ。

ということも暗に意味している。また、

運転手は 女だ。

と言えば、

運転手は 男でない。

ということも言外に含んでいる。人間という領域は、性に関しては、男と女とにきっちりと二分され、余すところがない。(半陰陽については、いま考慮から除く。)

既婚——未婚

も同様の関係で、「結婚しうる条件をそなえた人」に関して、「あの人は既婚でも未婚でもない」ということはあり得ない。もっとも「あの人は法律上は未婚だが、事実上は既婚だ」ということはあるかもしれないが、法律なら法律のレベルで「未婚であり、かつ既婚」ということは普通はあり得ない。

このような矛盾関係を構成する反対語は、日本語の形容詞にはあまり存在しないようである。動詞と形容詞の対立であるが、「ある—ない」はこのタイプに属するであろう。ほかに、

可能な——不可能な

完全な——不完全な

正確な——不正確な

たしかな——ふたしかな

のような、否定の接頭語によって作り出される反対語の中には、矛盾関係と考えられそうなものがある。しかし、

親切な——不親切な

得意な——不得意な

しあわせな——ふしあわせな

などは矛盾関係でなく、反対関係であろう。(たとえば、「しあわせ」でも「ふしあわ

せ]でもない、中間の領域が存在する。) 基本的な和語の形容詞どうしが構成する反対語には、矛盾関係とみられるものは、まず見当たらないようである。(英語のばあい、dead—alive, open—shut など、形容詞の中にも、矛盾関係の反対語が存在するようである。)

反対語の第2の種類として、反対概念を表わすものは、たとえば「ひろい—せまい」がその1例になる。

この部屋は ひろい。

と言える時には、

この部屋は せまくない。

とは言える。しかし、

この部屋は せまくない。

と言ったばあい、

この部屋は ひろい。

とも言えるかどうかはわからない。

この部屋は ひろくもせまくもない。

という中間の領域もありうるからである。すなわち、FとGによって反対語を示すと、

$$G(x) \supset \sim F(x)$$

は成り立つけれども

$$\sim F(x) \supset G(x)$$

は成り立つとは限らない。日本語の形容詞における反対語は多くこのタイプに属し、2つの極の中間にどちらにも属さない領域をもっている。これは、性質の程度が漸層的に増減していて、反対語のどちらにも属さない中間の段階が存在するからである。このことは、形容詞によってあらわされる内容が、いちじるしく程度的な性質のものであることを示している。

(付) 反対語に関してこの項であげた2つのタイプは、たとえば John Lyons の “Structural Semantics” (1963) では non-gradable antonyms と gradable antonyms と呼ばれている。(62ページ) 前者の例としては、single : married, male : female をあげていて、日本語にあてはめても説明に便利な例なのでここに借用した。同じ J. Lyons の “Introduction to theoretical Linguistics” (1968) では、反対の意味を antonymy, complementarity, converseness に3分している。complementarity は前著の non-gradable antonyms に相当し、antonymy は gradable antonyms に相当している。

C. K. Ogden “OPPOSITION A Linguistic and Psychological Analysis” (1932) は Basic English の設定の仕事との関連で反対語を考察した本であるが、cut による反対語と、scale による反対語を区別している。前者は Inside—Outside とか、

Male—Female のように境界のはっきりしているものであり、後者は Black—Grey—White のように漸層的に変化していくものである。この区別も, contradictory と contrary の区別と関係の深いものであろう。

3.1.3 比較表現と形容詞

程度性ということは、「比較」ということと深い関係がある。日本語の形容詞は、英語などの形容詞における原級・比較級・最上級のような、比較のための語形変化はもっていない。そして、たとえば

きょうは きのうより あつい。

きのうは きょうほど あつくなかった。

きょうの ほうが あつい。

きょうが いちばん あつい。

のように、「より」「ほど」「ほう」「いちばん」などのことばが日本語の比較表現では大切なたらしきをしている。これらのことばのあとにきて述語になるのは、形容詞であることが多い。

きょうは きのうより むしむしする。

A氏は B氏より ふとっている。

のように、動詞でも形容詞と同じく状態や性質を表わすばあいは比較表現が成り立つ。また、

A氏は B氏より 飲んだ。

のように、動詞の表わす動作に関係する量について比較表現が行なわれることもある。しかし、一般的に、形容詞が比較表現の文の述語の中心になる主要な品詞である。比較ということは、ものごとのある属性の程度の大小を比べることだから、程度性をその意味に本来的に含んでいる形容詞として、これは自然ななりゆきであろう。形容詞を述語として、比較表現が成り立つのは、形容詞の意味の根底に程度性が存在するからこそであると考えられる。

形容詞を述語として、比較表現の文が成り立つときは、2つ（以上）のものが形容詞をなかだちとして、ある関係で結び付けられていると考えることができる。そこで、2つの比較表現の文を結び合わせたり、主語になるものを入れかえた比較文を作ってみたりすることもできる。そのような試みによって、形容詞の意味の性質が明らかになる点があるので、次に2つの事項について述べてみよう。

第1に、述語形容詞と、1つの比較対象とが共通である2つの比較表現文を結び合わせて、1つの比較表現文が作れるばあいがある。たとえば、「あつい（暑）」を例にすると、

きのうは きょうより 暑かった。

おとといは きのうより 暑かった。

という、2つの比較のセンテンスが成り立つばあいには、

おとといは きょうより 暑かった。

という文も成り立つ。すなわち、

$$F(x, y) \cdot F(y, z) \supset F(x, z)$$

という移行的関係 (transitive relation) が成り立つ。

こういう関係は「～より高い」「～より速い」「～より少い」など、多くの形容詞による比較表現文について成り立つ。この事実も形容詞の意味が一次元的な尺度の性質をもっていることと関係が深いと考えられる。

普通の比較表現ではないが、「～と同じだ」「～とひとしい」という関係も、移行的関係が成り立つ、特別の性質をもっている。

きょうの温度は きのうの温度と 同じだ。

きのうの温度は おとといの温度と 同じだ(った)。

が成り立つならば、

きょうの温度は おとといの温度と 同じだ。

が成り立つ。しかし、成り立つ原因は「～より高い」などの場合とは違っている。両者の違いを図示してみよう。

「～より高い」など 「～と同じだ」など



第2に、比較表現と反対語とを結びつけて考えてみよう。「おおい—すくない」を例にすると、一般に、

Aは Bより おおい。

という文が成り立つときは、

Bは Aより すくない。

という文も成り立つ。文の主語を入れかえ、反対語も入れかえた文も成り立つわけである。2つのものごとを、ある性質に関して比べたばあい、1方の程度がより大きければ、それと反対の性質は他方がより大きい程度に持っている。反対語をFとGで表わすと、

$$F(x, y) \supset G(y, x)$$

が成り立つばあいが多い。

やはり「おおい—すくない」の例について、ここで具体的な用例をあげてみよう。

○越路吹雪 彼女の年収は京子ちゃんより、ちよっぽり少なく七百十四万円である。

(読切小説集 1956年6月 195)

これは15年も前の「映画スター長者番附」という記事からの用例であるが、714万円という年収は普通からいえば、非常に「多い」年収である。しかし、「京子ちゃん」(香川京子)の年収を、かりに750万円だったとすれば、それに比べて「ちょっとり少なく」という表現はまったくノーマルなものとして成立したわけである。このばあい、「香川京子の年収は、越路吹雪よりちょっとり多い。」という表現も、もちろん成り立つ。

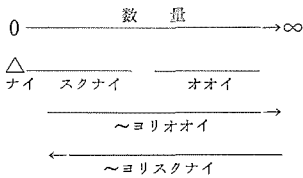
こんどは、Aさんの年収が30万円、Bさんの年収が20万円と仮定する。2人とも、年収はよほど「少ない」部類に属するが、「Aさんの年収はBさんより多い。」という表現は成り立つ。

「おおい—すくない」という反対語の意味の背景には、ものごとの数量の、ゼロから無限大へ伸びる尺度を考慮することができる。どの辺までが「すくない」範囲であり、どの辺からが「おおい」になるかは、場合によってさまざまである。(3.1.4の「基準」のところ、この点についてふれる。)

ところで、2つのものを比較して、一方が「～よりすくない」という関係は、尺度全体からみでの「おおい」の範囲内でも可能である。また、「～よりおおい」という関係は、全体からみると「すくない」に属する範囲内でも成立する。けっきょく、

$$F(x, y) \supset G(y, x)$$

が、「おおい—すくない」に関してはどうな場合でも成り立つといえよう。「～よりおおい」「～よりすくない」という比較表現を通して考えると、「おおい—すくない」は全体を通じる1つの量的な尺度として考えることができる。



もう1つの例をあげるならば、「ひろい—せまい」の対立も同様に1つの量的な尺度として考えられる。

○渋谷へ行って見る。Sという店に入る。銀座のBよりはるかせまく、スタンドの中に女の子が二、三人いる。(週刊朝日 1956年7月1日 21)

において、かりに「銀座のB」も一般的にいて「せまい店」だったと仮定しても、

銀座のBは、渋谷のSより広い。

という文は成り立つだろう。

「ひろい—せまい」だけでなく、「おおきい—ちいさい」「ながい—みじかい」など、空間的な量を表わす形容詞における対立は、上と同様の性質をもっているものが多

いようである。

以上、「おおい—すくない」「ひろい—せまい」などについて言えたことは、形容詞の反対語の全般について成り立つわけではない。例として、句配の大小を表わす「けわしい—なだらかな」の対についてしらべてみよう。

「けわしい—なだらかな」の対立の背後には、傾斜角度の0度（水平）から90度（垂直）までの範囲を考慮することができる。ふつう、傾斜角度のどの辺の範囲が「なだらかだ」と言われ、「けわしい」と言われるのか、しらべてみないとわからないが、いま4つの傾斜面を仮定して、

A—2° B—4° C—40° D—50°

とする。そのとき、

A坂は B坂より なだらかだ。

D坂は C坂より けわしい。

と言えるであろう。しかし、

* B坂は A坂より けわしい。

* C坂は D坂より なだらかだ。

とは言えない、少くとも言いにくいであろう。つまり、「けわしい—なだらかな」の背後に、0度から90度までの傾斜角度を尺度として想定することはできたとしても、等質的な1つの尺度に還元しきれないものがあるのだろう。そのために、「～よりけわしい」「～よりなだらかだ」の比較表現が、「けわしい—なだらかな」の全域に及ぶことができないのであろう。

傾斜角度の大きいことを表わす別の語「急な」は、角度の小さい領域の内での比較にも、「けわしい」より自由に使われるようである。上と同じ条件において、

B坂は A坂より 急だ。

は、少なくとも、

* B坂は A坂より けわしい。

よりは不自然でないようである。

（「けわしい、なだらかな、急な」については、分析例66の付記にある意識調査の結果を参考にした。）

もう一つ、「とととった—わかい」の対を取り上げてみよう。人間の一生全体からみて、ある年齢の領域が「わかい」であり、ある年齢のあたりから「とととった」人になる、という使いかたがある。また、人と人を比較して、どちらのほうが「わかい」とか「とととっている」とか言う使いかたがある。後者の面において「わかい」はどんな高齢者どうしの比較にも使える。「とととった」も、老人という意味での「とととった」人の領域よりは広く比較に使えるようであるが、無制限ではなく、ある程度の制約があるようである。（分析例64の後半部を参照）

このように、

$$F(x, y) \supset G(y, x)$$

の関係がかならずしも成り立つとはいえない反対語のグループも存在する。

3.1.4 基準

以上、3.1.3までに、形容詞の意味における程度性、反対語をなす形容詞を両極にして考えられる、ある性質の尺度、などについて考えてみた。こんどは、そのような尺度の上で、程度が大きい、積極的な語の表わす領域と、程度が小さい、消極的な語の表わす領域とは、どのようにして分たれるか、それを分つ基準は何か、ということについて考えてみよう。

3.1.3でみたような、比較を表わす文のばあい、この点は簡単である。

エヴェレストは富士山より高い。

において、エヴェレストの高さは富士山という具体的な比較の基準にてらして「たかい」と判断されている。

富士山は高い。

のように、比較ということがあらわになっていない形容詞文が、かなり多くのばあい、なんらかの潜在的な基準との比較の上での相対的な判断である、というところに問題点がある。

この問題については、E. Leisi のドイツ語・英語についての要を得た考察^{<注>}があり、日本語の形容詞についてもおよそあてはまるものと考えられる。したがって、ここでは、日本語の例をあげながら、ごく簡単に Leisi の説を紹介することによって、この問題への解答に代えることにしたい。

<注> E. Leisi (鈴木孝夫訳)『意味と構造』Ⅳ「複合的語内容」のF「相対的な条件とその基準」

第1は、「種の基準」(Speziesnorm)で、その属性の主体が所属する「種」の平均的な代表者が基準になるばあいである。

○「あなた。ほんとう。」と君江は巧に睫毛の長い眼の中をうるませ^{しづか}て徐に俯向いた。(つゆのあとさき 48)

において、まつげが「ながい」といっても、まつげの平均的な長さより長いというだけで、2センチメートルもないはずだ。

○海の中には、その向う側に歌島港を控へてゐる短かい岬が延び、岬の端^{はな}は断続して、いくつかの岩を白波をつんざいて聳やかしてゐた。(潮騒 47)

の「短かい岬」は岬の平均的な長さより短くても、数十メートル、数百メートルはあるだろう。何センチ以下は「みじかい」とか、何メートル以上は「ながい」というような、絶対的な基準があるわけではまったくない。

第2の基準は「比率的基準」(Proportionsnorm)である。たとえば、

○賭博道具のルーレットを置き、長いテーブルの表面にいろいろの数字が大きく書き分けられてゐた。(帰郷 48)

の「長いテーブル」のようなばあい、テーブルの1つの辺が他の辺と比べて比率的に長いということである。2辺の長さがひとしい正方形のテーブルは、どんなに大きくても「ながいテーブル」とはいえない。

○ところでうめ女はすでに子供のようには選っているとはいえ、日本人に珍しく胴が短くて、脚が長かった。(厭がらせの年齢 270)

において、胴が「みじかい」というのは、日本人の平均的な胴対脚の、長さの比率に比べて、胴が比較的短いということである。また、脚が「ながい」というのも同様の比率と比べてのことである。これも一種の比率的基準による表現であるといえよう。

第3は、「個人的な期待基準」(individuelle Erwartungsnorm)と名づけられている。Leisiは、しばらく見なかった幼児に会ってEr ist gross(彼は大きい)と言う例をあげている。このばあい、その年齢の幼児の平均より大きいということではなく、話し手が期待していたよりもっと成長していたという、まったく個人的な判断をくだしているのだという。日本語でも、同じような基準によって形容詞の使われることは当然あると考えられる。たとえば、上と同様の場面で同じような意味で「大きくなったねえ!」などと言うことがある。

また、日常の会話から拾った例であるが、

A「(大番の) ギュウちゃんのモデルはまだ生きてるんだって。60何歳で。」

B「そんなに若いの!」

の「わかい」は、話し手の個人的な予想に反して年が少いということで、この1例になるだろう。

第4は「適格基準」(Tauglichkeitsnorm)である。たとえば、

○石を敷いた路地は、二人並んでは歩けない程せまいのを、矢田は今だに一人先に立つて行つたら君江に逃げられはせぬかと心配するらしく、(つゆのあとさき 29)

○動脈の最も細い部分が異常に収縮して、管が狭くなり、その先の毛細管に血液を送り込むのに強い抵抗を与えることになって、(婦人倶楽部 1956年11月 451)

○どうも、彼女は、最初の夜から、一向、寂しくならない。山のような肉塊が、横に転がっていないだけでも、清涼感を感じる。狭い座敷が、ころ合いの広さになる。

(自由学校~27)

などにおいて、「せまい」は人(や物)がそこを通るとか、そこに居るとかいう目的に対して十分な幅や面積がない、適格性に欠けるということを表現している。

○この頃は、家にいる時も、作業服なぞ脱ぎ捨てて、裾の長いパジャマを一着してるが、太い膝が盛り上って、いかにも、窮屈そう(自由学校 318)

○勘次は紺の筒袖の単衣で日に焼た足が短い裾から出て居た。(土・上 184)
 において、すそが「ながい」とか「みじかい」とかいうのは、パジャマや着物自身の長さではなく、着ている人との関係を表現しているのであろう。足がわずかしか出ないのが「すそながい」であり、足がたくさん出すぎるのが「すそみじかい」のであろう。

以上、Leisi の説にそって見てきたのは、相対的な性格の濃い形容詞のばあいであった。形容詞の中にも、さまざまな場合を通じてある程度一定した条件をもっているものもある。たとえば、色をあらわす「あかい」「あおい」「きいろい」「ちやいろな」などは、そのさしうる色の領域・境界は、ある幅をもって一定している。また、色の主体をなす物によって条件ががらりと変わってしまうということはない。たとえば「あかい花」「あかい土」「あかい顔」などにおける「あかい」は、結びついている名詞との関係で、ある程度の変動はあるけれども、無制限に変容するわけではない。

また、「あかい家」は「あかいたてもの」でもあり、「あかいいす」は「あかい家具」でもあり、「あかいげた」は「あかいはきもの」でもある。「たてもん」「家具」「はきもの」はそれぞれ、「家」「いす」「げた」をすべて包含する、上位語である。このように「(形容詞連体形)+(名詞)」という連体修飾構造の、名詞をより上位の名詞におきかえることが、「あかい」その他の色をあらわす形容詞のばあいには可能であることが多い。同様なことが、次のような形容詞のばいにもいえる。

おいしいビール→おいしい飲み物

おもしろい小説→おもしろい作品

あたらしいソファ→あたらしい家具

有害なタバコ→有害な嗜好品

まったく相対的な形容詞のばあいには、このような、上位の名詞へのおきかえが成り立たない。「おおきい」を例にすると、「家」はすべて「たてもん」であるにもかかわらず、「おおきい家」はかならずしも「おおきいたてもん」とは言えない。それは、「おおきい家」のばあいの「おおきい」と言われる基準と、「おおきいたてもん」のばあいのそれとが、同一ではないからである。

この点に関する具体例をあげてみると、

○中壘中尉は非常に用心深かったが、下瀬中尉は大軌沿線にかなり大きな家を新築していた。(真空地帯・上 175)

の「かなり大きな家」は個人の住宅としてはかなり大きいということであろう。

○背後に雑木林を背負ひながら、赤い屋根をした、いくつも側翼のある、大きな建物が、行く手に見え出した。(風立ちぬ 91)

○この見ただけでも心臓に悪くつかへるやうな黒々とした巨きな建築物の前で揉み合ひ囁鳴り合ひ、(冬の宿 34)

の、「風立ちぬ」の「大きな建物」はサナトリウムであり、「冬の宿」の「巨きな建築

物」は大学の講堂である。「建物」や「建築物」は公共的な、個人の住宅より大きいものを含むので、その平均的な大きさの基準は「家」のそれよりも大きいはずである。

空間的な量を表す基本的な形容詞はみな、このタイプに属するが、次のような形容詞についても、同様なことがいえるようである。

- × はやい舟→はやいのりもの
- × おもい赤ちゃん→おもい人
- × かたいおかゆ→かたい食べ物
- × わかい政治家→わかい人
- × やすい宝石→やすい装身具

3.2 程度によって区別される形容詞

以上、3.1で、形容詞の意味における程度性と、それに関連する問題について、一般的に考えてみた。3.2では、程度性の観点からその意味が区別されている形容詞にどんなものがあるか、それらはどのような対立の様相を示しているか、について具体的にしらべてみよう。

3.2.1 程度の大小

形容詞の中には、いわゆる反対語として、対をなして存在しているものが割合に多い。それらの中には、ある属性の程度が、ある基準にてらして、大きいか小さいかという区別で対立しているものがかなり多くあるということも、3.1に述べたところから明らかで、事新しいことではない。反対語についても3.1.2でちょっとふれたわけであるが、ここでもう少しくわしく反対語についてしらべることから始めよう。

反対語についての研究は、日本語についてはまだほとんどない現状である。^{<注>}

<注> 教科研サークル『語彙教育』（麦書房、1964）は、反対語に関する文献としてただ3冊の反対語辞典をあげ、反対語の研究は全然ないと述べている。それ以後に、宮地敦子「対義語の消長」（『国語国文』37—7、1968—7）「対義語の条件——「高し」を中心として——」（『国語国文』39—7、1970—7）が出ている。これは歴史的な研究である。

I. Arnold “The English Word” (Moskwa, 1966) は、ソ連における英語の語彙論の教科書の一つであるが、Antonym を定義づけているところをみると、次の諸条件になると思われる。

1. 同じ品詞に属すること。
2. スタイルにおいて同一なこと。
3. 分布においてほとんど同一なこと。

4. associate され、いっしょに使われること。
 5. contrary or contradictory notions を表わすこと。

これは英語の語彙に関しての論ではあるが、日本語に関してもかなり参考になるように思われるので、これらの諸条件にそって考えてみよう。

まず、同じ品詞という条件によると、

ある—ない たい—まちがった まっすぐな—まがった
 おなじ—ちがう

などは反対語からはずされることになる。中村一男『反対語大辞典』（東京堂、1965）は、

- A 反対語は互に同一品詞であることを原則とする。
 B 同一品詞でない場合は、特に利用価値の高いものだけを、例外的に反対語とし、それ以外は除く。

と、編集方針の中に述べている。（上に例にあげた「ある—ない」などの4対に関しては、「まっすぐな—まがった」を除く3対は載せられている。）

ここでは、ふつう形容動詞と呼ばれているものも形容詞に含めて考えているので、

さびしい—にぎやかな おだやかな—はげしい
 いそがしい—ひまな きれいな—きたない
 あらい—なめらかな けわしい—なだらかな

などの対は、形容詞に所属する反対語の対として扱われることになる。

第2に、反対語が、同一のスタイル、文体に属することという条件によって、

こい—あわい (cf. こい—うすい)
 はやい—のろい (cf. はやい—おそい)
 安全な—やばい (cf. 安全な—危険な)

のような対立は反対語とは呼ばれないのが普通であろう。反対語とよく対比される類義語は、

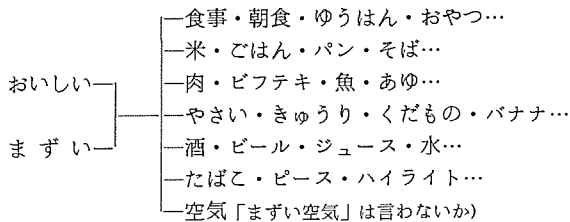
あした／あす／みょうにち
 なくなる／しぬ／くたばる

のように、異なる文体的レベルに属する語どうしのセットであることが多い。この点で、反対語は類義語と大きく異なっているといえよう。

しかし、反対語という名称から離れて、当面の程度性による対立という観点からみれば、上にあげた「はやい—のろい」等の対立も、反対語である「はやい—おそい」等の対立と共通の側面をもっている。「はやい—のろい」等のばあいには、程度による対立のほか、文体的特徴でも対立しているということになる。

第3、第4の条件は、第1、第2、第5の条件からの自然の帰結であるともいえよう。第3の、分布がほとんど同一であることという条件は、たとえば「おいしい—まず

い」が連体修飾語になるばあい、次に示すように、反対語の双方が同じ名詞群と結びつきうる事が非常に多いことが1例になるだろう。



第4の条件は、反対語が同一の文脈中にいっしょに使われることを含んでおり、これは反対語を言語の観点から考えるとき、大切な条件の1つである。

第5の条件は、反対語は **opposite meaning** を表わすと伝統的に言われてきたことに相当し、これが反対語のいちばん基本的な条件である。反対語の基本条件である、反対の意味をあらわす、ということは、意味論的には次のように理解される。2つの語が、それぞれいくつかの意味特徴から成り立っていると仮定されるばあい、その中の1つを別として他の意味特徴を共有しており、1つの意味特徴においてだけ正反対の対立をなしているばあい、お互いに反対語をなしていると認められる。したがって、「反対語」という名称は意味が非常にかけはなれているような印象を与える可能性があるし、事実ある一点においては正反対なわけであるが、意味の共通の基盤の上に立っている。意味の上で非常に共通度の高いことばどうしであるともいえる。そして相互に制約し、依存し合っている。反対語は同一の意味分野の中で、意味の体系を作り出している、もっとも要素的な意味関係の一類であるといえよう。

以上のことを具体例「たかい—ひくい」について説明してみよう。まず、この反対語の1対は両語とも空間的な1次元の量を表わしている。その点では「ながい—みじかい」や「ふかい—あさい」と同じ意味のグループに属している。次に、「たかい—ひくい」は任意の次元ではなく、垂直の次元における性質であるという点で、「ふかい—あさい」とは共通であり、「ながい—みじかい」とは区別される。第3に、垂直の次元のうちで、「たかい—ひくい」は地面などの基準面から上向きにみた性質である。「ふかい—あさい」は下向きにみた性質である点で、これと区別される。第4に、「たかい—ひくい」は自立性・孤立性のあるものにかぎって適用されるという条件がある。つくえの足は第3までの条件はみたすけれども、第4の条件をみたさないの、「たかい—ひくい」よりも「ながい—みじかい」の使われることのほうが普通であろう。「たかい」と「ひくい」とは以上のすべての条件は共有している。そして、このような限定を伴った1次元の量について、その程度が大きいか小さいかという点で対立し、区別されるものである。すなわち、いくつもの特徴を共有し、ただ1つの特徴で対立する、最小の対立をかたちづくっている。その、ただ1つの特徴が「たかい—ひくい」のばあい、まさ

しく程度の大小にほかならない。

ここで程度が大きいとか小さいとかいうのは、ある相対的な基準にてらして、その基準を越えているか、及ばないか、ということである。その基準がどのようなものであるかについては、すでに3.1.4 でふれた。

「たかい—ひくい」のばあいと同様に、いくつもの特徴を共有し、程度の大小によって対立することによって、反対語をなしている形容詞の例が多く存在する。このような形容詞については、反対語として結びついている語の双方の共通の基盤になっている、どういう種類の性質であるかということと、その性質の程度が大きいことを表わすか、小さいことを表わすかを示せば、形容詞の意味体系中での一応の位置づけができたことになると思われる。

まず、例にあげた「たかい—ひくい」を含めて、空間的な量を表わす基本的な形容詞は、いずれも反対語をなして存在している^{<注>}。それらの反対語は、程度の大小によって区別される2語の対立であることはいうまでもない。

- (1次元) ながい—みじかい
 たかい—ひくい
 ふかい—あさい
 あつい—うすい
 とおい—ちかい

(1・2次元) ふとい—ほそい (分析例14)

(2・3次元) あらい—こまかい (分析例15)

(1・2・3次元) おおきい—ちいさい (分析例16)

 ひろい—せまい (分析例17)

これらの形容詞は、長さ・面積・体積の尺度における程度の大小によって区別される。これらの対立関係はわれわれの言語意識にとって、あまりにも明らかなので、一々について用例をあげて分析しなくてもよいであろう。ただし、くわしくみていけば、これらの対立関係の中にも、あるばあいには一方の言いかたしか存在しない不完全なものもある。その1例として「あらい—こまかい」についてしらべてみた。(分析例65)

<注> 168ページの<注>にあげた宮地敦子「対義語の条件」によると、「たかい—ひくい」は現代語ではきわめて安定した反対語であるが、これは歴史的にみると案外新しい状態であるという。それ以前は「たかし—みじかし」などの対立の状態も存在したという。

空間的な量を表わす形容詞のばあい、反対語によって構成される尺度は、客観的な明確な尺度として考えることもでき、厳密に測定することもできる性質のものである。その上、上にあげた20語近くが緊密な体系をなして存在している。このようなケースは、形容詞の他の分野には見当たらないが、客観的な尺度を背景としている形容詞の反対語

は、ほかにもある。(これらをかりに第2のグループと呼ぼう。)

- (数量) おおい——すくない
 (目方) おもい——かるい
 (硬度) かたい——やわらかい
 (速度) はやい——おそい
 (光線) あかるい——くらい
 (傾斜角度) けわしい——なだらかな (分析例66)
 (曲がりかた) 急な——ゆるい (分析例67)
 (温度) 熱い——つめたい
 (気温) 暑い——さむい
 (経過時間) ふるい——あたらしい
 (年齢) としとった——わかい (分析例64)

上のような反対語のペアのばあい、対立する2語を結びつけている共通の基盤になっている性質などは、その程度が連続的に変化する、尺度的なものであることはいうまでもない。そして、2語の意味を区別するものは、尺度上における目盛の大小だと比喩的にいうこともできる。

ただし、上のいずれの対もが、一様な意味で、程度の大小による対立だといえるわけではない。たとえば「熱い—つめたい」のばあい、両者の中間に位置する「あたたかい」「ぬるい」などの語もあって、「熱い」「つめたい」の領域は、広い中間領域をへだてた、速い対立になっている。「暑い—さむい」のばあいにも、中間に「あたたかい」「すずしい」などがあって、同様なことが言える。また、「としとった—わかい」の対立は、「わかい」より低い年齢の領域を表わす「おさない」などの存在によって影響されている。(分析例64) また、傾斜の角度の大小を表わす反対語として上には「けわしい—なだらかな」をあげたけれども、このばあい実は1語対1語の安定した反対語になっているとはいえない。(分析例66)

<注> 温度に関係する形容詞の意味の体系的研究に、国広哲弥「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」(『構造的意味論—日英両語対照研究—』)がある。

次に第3のグループとして、安定した反対語として存在してはいるが、2語の意味を結びつけている共通性が、文字どおり尺度的なものであるかどうか、かならずしも明確でないものを例示しよう。

- にぎやかな——さびしい
 おもしろい——つまらない
 いそがしい——ひまな
 はでな——じみな
 ドライな——ウェットな

これらの反対語によって表わされる性質などは、ふつう測定されるようなことはないものが多く、また簡単に測定できるような、単純な性質でもない。これらの反対語の作っている対立は、数値が連続的に増減するような純粹に量的な尺度の上での、程度の大小による対立であるとは考えられない。少なくとも、第1, 第2にあげたグループと同様な意味では、程度上の対立とは考えられないものといえよう。

第4に、2語が安定した反対語をなしているかどうか疑問があり、また2語が1つの尺度をなすと考えるかどうか疑問であり、したがって程度の大小に還元して考える余地のあまりなさそうなものもある。(次にあげる例は、中村一男『反対語大辞典』(東京堂, 1965)と佐伯梅友『対照関連反対語辞典』(集英社, 1963)のいずれか一方だけに、反対語としてあげられているものである。)

あつかましい——しおらしい

すなおな——いじっぱりな

すげない——やさしい

無謀な——慎重な

軽率な——慎重な

第5に、明らかに反対語として一般に意識されてはいるけれども、量・程度の大小に着させることはむずかしく、質的にちがうものどうしの対立と考えるのが妥当だと思う類がある。これらは、関係は深いけれども、反対方向的な2つの別種の尺度を表わす形容詞だと考えるほうが無理がないであろう。

あまい——からい(分析例68)

うれしい——かなしい

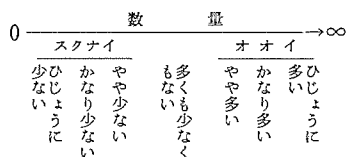
かわいい——にくい

すきな——きらいな

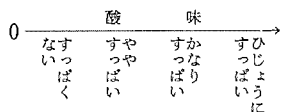
ただし、「あまい——からい」のばあい、多義的な中の若干の意味・用法については程度の大小による対立とみられる側面がある。(分析例68)

3.2.2 程度の著しさ・わずかさ

3.2.1でしらべた、反対語をなしている形容詞は、主として、ある尺度を大きく2分して、ある基準より上の領域、あるいは下の領域をさし示すものであった。それぞれの領域内での、それ以上のこまかい程度の限定は、3.1.1でしらべたような程度副詞を修飾語にとることによって示されることが多い。「おおい——すくない」を例にし、程度副詞はかりに「やや」「かなり」「ひじょうに」で代表させて、これを図式的に示しよう。



上は、程度の大小によって区別される反対語のばあいであるが、反対語をもたない形容詞のばあいも、それが程度性をもった形容詞であるかぎり、同様に程度副詞によって限定をうけ得ることはいうまでもない。「すっぱい」を例にして、図示してみよう。



ところで、形容詞の中には、ふつうは程度副詞によって示されるような、程度上の限定を語自身の中を含んでいるものがある。(3.1.1) その限定のしかたから2種類に分けてみよう。

a 程度の著しさ

1例として、距離をあらわす「とおい」と「はるかな」とを比べてみよう。

「とおい」は距離がある基準にてらして大きければ、どの程度に大きくても「とおい」と言うことができる。それに対して、「はるかな」は「とおい」範囲のうちの、特に程度の大きい部分しかさし示すことができない。すなわち、「はるかな」は「とおい」の、程度が著しい範囲に制限されている。この意味における、程度性に関する対立によって、「とおい」と「はるかな」の語義とは区別されている。(この特徴だけという意味ではない。)同様の対立として、次のような例が考えられる。

おびただしい < おおい (分析例69)

わずかな < すくない

巨大な < おおいき・な (分析例26)

広大な < ひろい

素寒貧な < まずしい, 貧乏な (分析例70)

偉大な < えらい

すばらしい < いい

不可欠な < 必要な

ひっしな < いっしょうけんめいな, けんめいな (分析例71)

接頭語「だい(大)」や「ま(真)」によって作られた派生形容詞と、もとの形容詞との間に、このタイプの対立が認められるものがある。

だいすきな < すきな

だいきらいな < きらいな

まっかな <あかい (分析例30)
 まっさおな <あおい (同上)
 まっくろな・い<くろい (同上)
 まっしろな・い<しろい (同上)
 まっくらな <くらい
 まあたらしい <あたらしい

「ま」は本来、純粹さ・完全さを表わすというべきであろうが、上のようなばあいには、形容詞の表わす性質の程度の著しさを表わすということもできるだろう。

また、擬態語の中には、ある性質の程度の著しさを描写的にあらわして、程度に関して、より広い範囲を表わす基本的な形容詞と対立しているものがある。

こちこちの、かちかちの<かたい (分析例72)
 つるつるの<なめらかな
 ぺこぺこの (腹が) <空腹な, ひもじい

なお、次の例は形容詞の範囲から出るが、同じような性質を1側面としてもった対立の1例であろう。

なみなみと<いっぱい (分析例73)

b 程度のわずかさ

a と反対に、わずかな程度を表わす程度副詞と似たような限定を、語自身の中に含んでいる形容詞もある。これは、程度の著しさを含んでいる語より数は少ないと思われる。おもに接頭語による派生形容詞のなかに見られる。たとえば、「こだかい」を「たかい」と比べてみると、属性の主体に関して非常にせまく限定されている点(分析例22)と、程度がわずかな範囲に制限されている点で、「たかい」と区別されるのが主要な相違点である。(分析例27)

もっとも、接頭語「こ」はいつもこのような種類の対立を作り出しているわけではない。

こにくらしい<にくだしい
 こしゃくな <しゃくな
 こなまいきな<なまいきな
 こざかしい <さかしい
 こりこうな <りこうな

のような対立では、その性質などの程度が小さいことよりむしろ、その性質の主体に対する軽視・軽蔑などの気持が特徴になっているようである。

次に、接頭語「うす」による派生語が、このタイプの対立を作り出している。

うすあかい <あかい (分析例30)

うすあおい <あおい (同上)

うすぐろい <くろい (同上)

うすじろい <しろい (同上)

うすあかるい <あかるい

うすあまい <あまい

また、感情形容詞の例であるが、

きまりわるい、てれくさい等<はずかしい

において、羞恥感の程度が左側の語では小さい部分に限られているという、対立の側面があると考えて、分析してみた。(分析例74)

4. 形容詞の意味における主観的な側面

4.0 はじめに

形容詞は、感動詞・陳述副詞・接続詞やある種の助詞・助動詞のように話し手の主体的なものを直接に表現する語類ではない。名詞、動詞などとともに、客体的なことがらをあらわす側の語類である。しかし、さきに1でみたように感情形容詞と呼んだ一類の語は基本的な用法では話し手自身の状態しかあらわせないという特徴をもっていた。また属性形容詞の中にも、かなり客観的な性質をあらわすものもあるが、主観的な色あいの濃い語も多い。形容詞の意味における主観的な側面について、客観的な側面との対比において、この章でさぐりを入れてみたい。

4.1 形容詞の意味の主観的な性格

形容詞はものごとの性質や状態を表わす語類だと言われる。性質や状態というものは、人間の主観からはかなり独立した客観的なものも考えることができよう。そして、形容詞の中には、ある程度客観的だといえるような性質や状態を表わすものも存在していると考えられる。

ただし、主観をはなれた、まったく客観的な性質などは、すくなくとも単語のあらわす意味の世界にはあり得ないであろう。主観的といい、客観的といっても、相対的・程度的な違いにすぎないと言わなければなるまい。

たとえば、「ながい」「ふとい」「ちいさい」などの空間的な量をあらわす形容詞は、外界の物体の物理的な量に関している点で、客観的な性質が濃いいえよう。もっとも、これらの形容詞に関して、ある物体が「ながい」か「みじかい」か、「ふとい」か「ほそい」かなどを分つ基準は、話し手の個人的な経験などに左右される点で主観的な側面もある。

形容詞の中には、上にあげたような類よりもっと主観的な要素の濃い属性を表わすものも多いと考えられる。たとえば「いかめしい」「おごそかな」は国語辞典でよく相互におきかえられている語であり、双方とも主観的な感情ではなく、客観的な属性をあらわす語である。「うれしい」「はずかしい」などのように、基本的には話し手などの内部的な状態をあらわす語ではなく、外界の客観的な属性をあらわす語である。しかし主観から独立的な、客観性のつよい属性ではなく、主観に色づけされた属性をあらわすものと考えられる。そのような感じを抱いた経験のない人には、その意味内容を説明することがむずかしいであろう。「いかめしい」と「おごそかな」の相違点を考えるのにも、主観的な感情に与える影響の面を度外視することができない。「おごそかな」には、

○銀河の光は薄い煙のやうに遠く^{おごそか}壯麗な天を流れて、深大な感動を人の心に与へる。

(破戒 86)

○けれども^厳な式場の気分を乱すことは、控へないわけにはいかなかつた。(波 44)

○「わたしはいゝ。海神はわたしが所望の宝なんだ。わたしを投げれば海は鎮まる。」

長老は自若として^厳かに云つた。(青銅の基督 94)

○階子段を昇り切つて見ると客間は^{しん}としてゐて、五十川女史の祈禱の声だけが^{いそがは}おごそかに聞こえてゐた。(或る女・前 63)

のように、大きな自然、儀式、重々しい話しぶりなどに使われた例がある。これらは、「いかめしい」にはおきかえられないもので、人に崇高な感じ、つつしんだ気持などをいだけさせるような、対象の性質をあらわすものといえよう。一方、「いかめしい」は、

○頬ひげの^{いかめしい}土方がそれをシャベルでならしている。(暗夜行路・前 139)

○彼は只^厳めしく見える警察官が恐ろしくてどうしても足が進まないのである。(土・上 151)

○建物幾棟かあつて、長い堀は其^{まはり}周囲を^{いかめ}しく^{かこ}取繞んだ。(破戒 125)

○(省略)

と認めた檢の高札が^{いかめ}しく樹てられてゐた頃の事である。(青銅の基督 9)

のように、ひげ、こわい感じのする人のようす、家の外がまえ、高札などに使われた例がある。これらも「おごそかな」におきかえることはできず、人に威圧感を与えるような、ただけしい感じをあらわすものといえよう。

○日本では経済学という^{おごそかな}学問的な言葉の方にひきずられて、本来のエコノミーは非常に軽く見られ、(もの見方について 153)

の「おごそかな」などは「いかめしい」にもおきかえられそうであるが、そのような例はむしろ少ない。2語のもつ意味の相違点は、対象のもつ性質が人に与える感じの違いによって説明されるのが自然な方法ではないかと考えられる。

いま、述べようとしている形容詞の特徴は、次の立言に含まれていることに外ならないように思われる。

形容詞は名詞のような、外的なものに対してそれと表裏関係にたつ密接さはなく、外在の諸現象に対する人間の反応度がかなり濃い品詞と思う。(中略)いわば人間表現となるのであって、人間が事柄をどんなに受取ったか、いかに感じたか、などを直接に表出することを使命とする点動詞などより一そう内なる世界に関係するのではあるまいか。(寿岳章子「形容詞の語彙の変遷——中古から中世へ——」国語学 No. 22, 1955—9, なおアンダーラインは引用者)

以上のような形容詞の意味の特徴を考慮するとき、形容詞の意味を調べるにあたっては、次のことが要請されることになるであろう。すなわち、現実の世界やものごとに関する客観的な側面と、それらに対する人間の側の気持ち・受け取り方など、主観的な側面とその両面を十分考慮に入れることである。(ここで主観的というのは、話し手個人の主観だけでなく、その言語を使う社会の集団的な主観も含めている。)

4.2 客観面と主観面、両側面の交渉

4.2.1 感情形容詞における、前提的な客観面

1で主な対象として考えてみた感情形容詞は、まさに話し手の主観的な感情・感覚そのものをあらわすことを基本的な性格とする形容詞のグループであった。しかし、そういう感情形容詞といえども、そのあらわす感情・感覚に対応する客観的な事態という側面があって、それは言語的には対象語の問題と深くかかわり合っていた。

たとえば、「うらやましい」は羨望という一種の感情そのものをあらわすが、その感情は、他の人が自分に欠けているよい条件にめぐまれているという事態において起るわけである。そういう客観面も、「うらやましい」の語義を規定する上で欠かすことのできない要素である。このことを次のように書きあらわしてみよう。

うらやましい { (客) 他人が、自分にない、よい条件に恵まれている。
○ (主) 自分もその人のようであったらよいのにというきもち。

「うらやましい」のような感情形容詞のばあい、直接にあらわされるものは、主観的な側面のほうであって、対応する客観的な側面は前提的な条件になっているにすぎないといえよう。その意味で(主)のほうに○をつけた。

もう一つ、例をあげてみよう。「きのどくな」と「いい気味な」とは感情そのものとしては反対的な方向をもっている。しかし、いずれも「他人が、その人自身にとって望ましくない事態におちいる」という客観的な側面が前提になっている点では共通である。このことは「きのどくな」と「いいきみな」の意味を考える上で大切な点である。たとえば、

○役人がその大きな竹の鋸を持って現はれた時、彼はもう既にひどい脳貧血を起してゐた。彼はそれでも幾度か空を見たり、霜枯の草を見たり又外つぼの丘の樹木や家に眼を向けて心をまぎらし、気を確かに持たうと努めた。「国賊だ。いゝ気味なん

だ。」彼は又強ひてかう呟いても見た。(青銅の基督 56)

において、「裕佐」は処刑されるキリシタンをむりに「いい気味だ」と感じようとしているが、同一の事態に対して「きのどくだ」と感じるのが普通の反応のしかたであろう。すなわち、

きのどくな	}	(客) 他の人の不幸な事態
		○(主) それに同情する気持
いいきみな	}	(客) 他の人の不幸な事態
		○(主) それを喜ぶ気持

のような関係があると、ごく大ざっぱには言うことができるだろう。

4.2.2 属性形容詞における、主観的な要素

感情形容詞とともに日本語の形容詞を二分するとみた属性形容詞は、客観的な性質・状態を表わす語だと考えられる。

しかし、それは客観的な要素が語性をきめるファクターになっているということであって、主観的な要素が従属的なものとしてまつわりついていることをさまたげるものではない。

1例として「まだるっこい」(「まだるい」を含める)を取り上げてみよう。「まだるっこい」は客観的な側面に関しては「おそい」や「てぬるい」に共通するような性質をあらわしている。

○勘次は畦間を作りあげてそれから自分も忙しく大豆を落し初めた。勘次は間瀬つこいおつきの手もとを見て其の畝をひよつと覗いた。(土・上 92)

○徒歩の自^{まだる}弛いのに気を腐らしてゐたお島は、小野田の勧めで、自転車に乗る練習をはじめてゐた。(あらくれ 231)

の「まだるっこい」「まだるい」は速度の「おそい」ことをあらわしている側面があり、

○平生さへ然うだつたから、況や試験となると、宛然^{きたたら}の狂人^{きらび}となつて、手拭を捻つて向鉢巻ばかりでは間意^{まだる}ツこい、氷嚢を頭^{のツ}へ載けて、其上から頬冠りをして、夜の目も眠ずに、例の鶉呑をやる。(平凡 49~50)

の「まだるっこい」は、次の例の「てぬるい」に通ずるような側面がある。

○纏まつた詩だの歌だのを面白さうに吟ずるやうな手^{まだる}緩い事は出来ないのです。只野蠻人の如くにわめくのです。(こゝろ 218)

ところが「まだるっこい」には、そういうおそいやり方やてぬるいやり方に対する、じっとしていられないような、いらだたしい気持も合わせ含まれている。その面では「もどかしい」「はがゆい」「じれったい」などと共通するものが感じられる。「もどかしい」などは、感情の主体が主語としてあらわされている、次にあげるような例があることからわかるように感情形容詞に属する。

○陸奥はその声が咽喉にかかって言葉にならぬのがもどかしかったが、やがて、言葉にならぬ理由が心に落ちて来た。(落城 46)

○火を弄ることが危いので与吉は独りで竈へ手をつけることは禁ぜられて居る。灰の中へ入れたばかりで与吉は

「ようよう」といつておつぎに迫る。与吉は焼ける間が遅^{もどか}しいのである。(土・上 117~118)

○陸奥は敵勢がどうして攻め寄せぬかが齒痒^{きんざん}かった。(落城 47)

○自分より年下で、而かも良人から散々悪評を投げられてる筈の葉子^{きんざん}に対してまで、すぐ心が砕けてしまつて、張りのない言葉で同情を求めると思ふと、葉子は自分の事のやうに齒痒^{はがゆ}かつた。(或る女・前 55)

○とゞの語りの肝心なことを私の前と言ひ出さないのだから、私じれつたくて仕様が
ない。(生まざりしならば 206)

「まだるっこい」の例はごくわずかしかないのではあるが、感情の主体を主語にとることはなく、属性形容詞に属するものと思われる。

すなわち、「まだるっこい」は客観面では「おそい」「てぬるい」などに共通する面をもち、主観面では「もどかしい」「はがゆい」などに共通する面をもっている。そして、重点は客観面のがわにあって、属性形容詞に属している、という風に考えられる。

上にみた「まだるっこい」のばあいは、まだ「おそい」「てぬるい」などに通じるような、客観的な属性を積極的にあらわしている面があると考えられる。もっと主観性の濃い属性形容詞になると、客観的属性を直接にあらわすというよりも、ある主観的な情意をよびおこすような客観的属性をあらわすという性格を帯びることがある。

その1例として「いやらしい」を取り上げてみよう。「いやらしい」という派生形容詞のもとになっている「いやな」は、「わたしは行くのがいやだ。」のような文が作れることからわかるように感情形容詞である。しかし、「いやらしい」は感情の主体を主語にすることはできず、属性形容詞だと考えられる。資料内にただ1例、

○頬を強く押した男の唇が、まだ固くくっついているようで、私は鏡を見ることがいや^いらしかった。(放浪記 177)

という、感情の主体と対象とを「一は一が いやらしい」という構文であらわしているようにみえるものがあるが、「いやらしい」のふつうの使い方ではないと仮りに判断して除外して考えた。

たとえば「いやらしい顔」という連語を考えてみると、「しかくい顔」「まるい顔」「ほそながい顔」とか、「あさぐろい顔」「あおじろい顔」とかのような、対象である顔を客観的に特徴づける性質は少ない。顔やその持ち主に対する好悪という主観的な感情を離れては、「いやらしい顔」の意味するものは成立しないであろう。

岩波国語辞典は「いやらしい」に次のような語釈を与えている。

いやな気持ちにさせられる。

④不調和で不愉快な感じがする。グロテスクだ。「年寄りのくせに厚化粧して——」

⑤態度ややりかたが堂堂としていない。いやみだ。「上役に色目を使う——やつ」

⑥みだりがましい。「——態度をする」

⑦気味がわるい。

これは、まず「いやな気持ちにさせられる」という語義を立て、以下④～⑦に、より具体的にさまざまなばあいを列挙したものであろう。資料内の用例から④～⑦にあてはまりそうな例を1つずつあげてみよう。(⑦にあてはまると思われる例はみあたらない。あるいは、上に特異的な例としてあげた「放浪記」の例は、これであろうか。)

○この寒いのにあんな裸みたいな着物を着ているから鳥肌立って、もうブツブツして
いやらしかった (主婦と生活 1956年3月 286)

○ギャング悪党はまだハッキリ悪党だからよろしい。スパイというのは厭らしい。一緒に飯をくっている仲間を売るのである。(小説春秋 1956年6月 94)

○どうして異性とはほんとうにいいお友達になれないのか、男はどうしてすぐいやらしいことを考え出して、動物的になってしまうのかしら、彼女はそう言います。

(明星 1956年8月 111)

「いやらしい」の語義が上のように、いくつかに分化しているのではなく、この語がいろいろな文脈でどんな風に使われるかを示したのが、岩波国語辞典の④～⑦の記述なのであろう。「いやらしい」の意味は「いやな」気持ちという、主体の側の情意からでないと、かんたんには規定できないと思われる。

もっとも、「いやらしい」は「いやな」が広汎な対象について使われるのと違って、人間や人間の行なうことなどにしか使われないという点で、対象がせばまってはいる。しかし、対象の性質を客観的に限定する力は弱いといえよう。

たとえば動詞「たべる」「くう」「めしあがる」を比べてみたばあい、3語に共通して「食事をとる」という、客観的な一定の動作が基本にあり、その動作主に対する話し手のさげすみ・尊敬などの感情的態度がまつわりついて「くう」「めしあがる」などが成り立っていると考えることができる。ところが、ある種の形容詞(上にみた「いやらしい」もその1例)のばあい、話し手などの感情から独立に、一定の性質・状態が存在するというよりも、むしろ話し手などの感情のあり方によってはじめて成り立つような、性質・状態をあらわしているものさえあるようだ。もちろん、感動詞のように話し手の感情だけを直接にあらわすものとはちがって、一定の对象的な意味をもっていることは明らかである。しかし、その内容は、ある主観的な感情などに対応するような属性という性質が濃く、実質的には主観の側から規定せざるをえないような形容詞があるのだともいえよう。

4.2.3 両側面の交渉

1.2.3でふれたように、「こわい」「さびしい」「暑い」のような語は、感情形容詞と属性形容詞の両面をもっている。この点についても、4.2.1や4.2.2で試みたようなやりかたで、その説明をしてみよう。

まず、「おかしい」も両面をもつ形容詞の例であることを1.2.3で述べたが、この語については、次のように主客の両面を考えることができよう。

おかしい { (客) ある対象が普通とはちがっていて、こっけいなありさまである。
(主) そのことを笑いたくなるようなきもち。

そして、客観面が支配的であるばあいは、属性形容詞としてはたらく。(たとえば「かにの歩き方はおかしい。’) また、主観面が支配的になると、感情形容詞になる。(たとえば「わたしはおかしかつたが、笑いをこらえた。’) (分析例2)

もう一語、「さびしい」については、主客の両面を次のように試みに分けてみたい。

さびしい { (客) 人けが少なかつたり、物音がしなかつたりして、心をうきたたせるようなものが欠けている状態。
(主) 相手のほしいような、ものがなしい、ひえびえしたきもち。

たとえば、

○時は今冬枯れの野道山道淋しい事だが、併し僕は淋しいと思はぬ。(思出の記・上 165)

の例において、まえのほうの「さびしい」は冬枯れの野道・山道のようなすを表わし、客観面に重点があつて、属性形容詞として使われている。あとのほうの「さびしい」は「僕」の内部の主観的な状態を表わし、感情形容詞として使われている。

4.3 主観的な要素の2, 3のタイプ

4.2でいくつかの例をあげながらさぐりを入れてみた、形容詞の意味における主観的な側面は、公共性をもつ客観的・外的な世界にかかわる単語の側面よりも、さらに分析がむずかしいと考えられる。ここでは、形容詞の意味にまつわる主観的な要素の2, 3のタイプを例示的にあげる試みに止まらざるを得ない。

4.3.1 基準の主観性

3.1.4で「たかいーひくい」のような尺度的な形容詞において、「たかい」と「ひくい」とを分かつ基準について、E. Leisiの説にしたがつて4つの項目をあげた。第3の「期待基準」などは主観的な性質の濃いものであつたのに対して、第1の「種の基準」などはわりあい客観的な側面をもっているとはいへよう。しかし、あるものの所属する「種」の平均値に対する認定じしんが、話し手の個人的な経験などにも左右されることを考えると、やはり主観的な性質を当然もっていることになる。その意味では、

「たかい」「おおきい」「ほそい」のような、かなり客観的だとされる基本的な形容詞でも数量的な表現とは基本的に違って、本質的に主観性から免れていないものだというよう。

4.3.2 実感性

まず、例として、

ながながしい<ながい

という対立を考えてみよう。「ながい」は1次元的な延長が大きいことをあらわす基本語で、それ以外に語義を限定する要素はない。それに対して、「ながながしい」のほうは、いかにも長い感じだ、というような、感じる人間の主観が無視できない要素として含まれている。「ながながしい」という主観性の濃い語が使われるのは、客観的にも長さの程度がいちじるしいばあいが多いかもしれない。しかし、「ながい」から「ながながしい」を区別する特徴は、客観的な程度性ではなく、主観的な実感性とでもいうべきものだと考えられる。(分析例75のおわりのほうを参照。)

このようなタイプをなす対立の実例とみられるものを、以下にあげてみよう。例文によって、このような主観的な要素を裏付けることは、容易にはできないけれども、参考になると思われる例を1, 2ずつ添えてみよう。

ふるふるしい<ふるい

○床の間には近ごろ買い集められた古々しい禅宗の本がたくさん積んであった。(暗夜行路・前 232)

○五百助は、古い絵草紙で、盲人の入浴の戯画を見たことを、思い出した。(自由学校 220)

にぎにぎしい<にぎやかな

○国際地球観測年を明年に控えて、一九五六年は南極大陸を中心とする各国の賑々しい地球予備調査のかけ声に明けた。(キング 1956年3月 210)

○美空ひばりををはじめ映画・演劇界の人気者が賑やかに顔を揃え、(若い女性 1956年9月 210)

くどくどしい<くどい

○姉婿も同じやうなことを言つて、お鳥に意見を加へた。お鳥はくどくどしい其等の忠告が、耳にも入らなかつたが、何時まで頑張つてもゐられなかつた。(あらくれ 57)

○彼女は先生に、くどくない程度にお礼を述べ、松木ポリスに「では、お先きに。」と会釈して部屋を出て行つた。(本日休診 60)

きたならしい<きたない

○事情を知ると、曾田という名前をさもきたならしいように言った。(真空地帯・上

102)

○あの人だつてあんな汚らしい貸間に一人ぼつちで寝てゐるよりや、此処へ泊りに来た方がいゝにちがひないのだけど、(生まざりしならば 209)

○家のかしまではあまり汚い家なので誰もまだ借りに来ない。(放浪記 31)

むごたらしい<むごい

○政夫と夫婦にすることは此母が不承知だからおまへは外へ嫁に往け。なるほど民子は私にさう云はれて見れば自分の身を諦める外はない訣だ。どうしてあんな酷たらしいことを言つたのだらう。(野菊の墓 49)

○「どうかしましたか」

それは決して惨いとか冷淡とかいふ声の響きではなかつた。(河明り 323)

にくたらしい、にくにくしい<にくい

○あれは、ほんまに憎たらしい女ですぜ。(真空地帯・上 198)

○息を切つて、深い呼吸をしている、父の幅広い肩が見るからに憎々しかった。(暗夜行路・前 17)

○手に負えない子ですけれど、ちっとも憎いとは思いません。(人間の壁・上 207)

おもたいくおもい

○然し俯伏になつてゐる彼の顔を、斯うして下から覗き込んだ時、私はすぐ其手を放してしまひました。裸とした許ではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。(こゝろ 269)

○「まあ、重たい坊ちゃま。——おや、お枕がございませんでしたね。」(桑の実 131)

○来がけには少し坊ちゃんを負つて上げたけれど、随分重くつて困つた。(桑の実 59)

あいくるしい<かわいらしい

○が、二重瞼の愛くるしい眼は、どう見てもきぬ子にそつくりだつた。昂子といつて、これがこの主婦だつた。(波 146)

○「先生は眼鏡をかけてない方がいゝわね。」

「さうかい。」

「眼が細くつて、可愛らしいわ。」(波 102)

○物言ふ時歯並の好い、瓢の種のやうな歯の間から、舌の先を動かすのが一際愛くるしく見られた。(つゆのあとさき 38)

○白く輝く、小粒な門歯を、可愛らしくあらわしながら、青年が、話しかけた。(自由学校 46)

4.3.3 予期・期待

ある状態などが、主観的な予期や期待とくいちがつたものであることが、語義の要素として含まれている形容詞がある。

たとえば「あっけない」がその1例である。この語のあらゆる客観的な側面は、時間的に短いとか、内容が簡単すぎるのかということである。が、そのことが話し手などの予期に反しているという要素を抜きにしては、この語の意味を規定することはできない。もっと長く続くものと思ひ、もっと内容があると予期していたのに、意外に早くすんでしまい、内容がちょっとりしたものにすぎなかったようなときに「あっけない」と言われる。あまりにもあっさりとすんでしまったという、はりあい抜けした、ものたりない気持が「あっけない」には含まれている。

○しかし未来は長いやうでも短いものだ。過去つて了へば実に果敢ない。(平凡 5)

○式はあっけなく済んだ。(むらぎも 345)

○私はそのまゝ銃を水に投げた。ごぼつと音がして、銃は忽ち見えなくなつた、孤独な兵士の唯一の武器を棄てるといふ行為を馬鹿にしたやうに、果敢なく沈んだ。
(野火 88)

○二人でかぶつたマントの中で、マッチをすりあわして、お互に見あつた顔、あっけない別離だった。(放浪記 119)

「予期に反する」という要素は単語では「意外な」に相当する。そして、「あっけない」は「意外に短い(かんたんだ)」のように一応パラフレーズできるわけである。

次に「はかない」を取り上げてみよう。この語のあらゆる客観的な面は、時間的に長く続かないとか、存在がよわよわしくもろいということである。そして主観的な面は、その対象が長く続き、たしかな存在であることを望むのに、そういう希望がかなえられずに、ということを含んでいる。この両面の交錯から、この語はしばしば悲哀的な色合いを帯びる。

○私は浅い若い恋の日なんて、うたかたの泡より果敢ないものだと思へた。(放浪記 161)

○所が愈夫として朝夕妻と顔を合せて見ると、私の果敢ない希望は手厳しい現実のために脆くも破壊されてしまひました。(こゝろ 277)

○親の乳房に縋つてゐる所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の子の運命が、子供心にも如何にも果敢なく情けないやうに思はれて、手放すに忍びなかつたのだ。(平凡 31)

「はかない」の語義に含まれていると考えられる「希望に反する」という要素は、評価的にマイナスの性質を帯びたものでもあると考えられる。

4.4 評価

4.4.1 概観・方法

形容詞は一般に、人間がものごとをどのように感受したかをあらゆる性格が濃いので、言語主体(ないしその言語社会一般)のものごとに対する評価・価値づけの要

素を含んでいることが多いといえよう。こういう要素は分析がむずかしいけれども、特に形容詞のばあい避けて通ることのできない性質のものだと考えられる。

価値というものは単に主観的な性質のものではない。たとえば「うつくしい」という美的な価値を含んだ性質は、たとえば矩形であれば縦と横の比が黄金分割になるときに感じられやすいといわれる。また、八頭身の女性がプロポーションの上で「うつくしい」とかいうような、その時代その社会における美人の典型的なタイプが、ある程度客観的に存在するということはいえるであろう。

しかし、「うつくしい」女性についての基準に、きわめて個人的なものがあることも否定できない事実であろう。価値はたんに主観的でも、たんに客観的でもない性質のものだと考えられる。一杯の水が、のどのかわいた人にとっては高い価値をもつように、主観と客観とのかかわりの中に価値が存在する。言いかえると、事実と価値とは不可分離的なものであって、事実のある側面が、主観とのかかわりにおいて帯びる、ある種の性質が価値であると考えられる。

形容詞の意味にみられる価値表現的なものも、対象の客観的な属性の表現とわがちがたく結びついている。というよりも、もともと両者は別個のものと考えべきものではないのであろう。形容詞の意味に含まれていると考えられる評価的な要素は、対象的・事実的な意味と別なものではなく、単に思考の上で分離しうるにすぎないのであろう。

ふつう、ものごとの性質・状態として代表的にあげられるのは、「あかい」「しかくい」「ほそい」「くらい」というように、主観の側での好悪・選択などからは独立的な、客観的なものが多い。それらに比べれば、「よい」「うつくしい」「くだらない」とような評価的な形容詞は、主観的な要素がつよいということはいえるであろう。

4.3では、形容詞の意味における、主観的な側面についてわずかながら考えてみた。それらは、かならずしも評価性に関係するものではなかった。ここでは、主客両面に関係すると考えられる「評価」を一応独自の観点として立てようとするわけである。

形容詞の意味における評価性についてしらべるにあたって、まず、単語に含まれる評価と、単語の使用に伴う評価とを区別しなければならない。

たとえば、「ながい話で閉口した。」というとき、話の長かったことが話し手にとって迷惑だったことは明らかであるが、「ながい」という単語じしん、評価的に、中立な語であることは明らかである。ところが「ながたらしい」はいつでもよくない意味で使われる。

* ながたらしいお話をありがとうございました。

などということはありません。「ながたらしい」は単語じしんに、マイナスの評価を含んでいると考えられ、その点で「ながい」と区別される。(分析例75)

もう1つ例をあげてみよう。「となりの花は赤い」ということわざは、およそ「となりの花」というものは、とかく自分の家の花よりも、赤さもあざやかに美しくよく見える

ものだ(そのように、よそのものは自分のものよりよくみえるものだ。)」のように解しようとすれば、「赤い」の部分がこの文脈ではよい評価を伴って使われているようにみえる。しかし、「あかい」じしんは「目が赤くなる」「赤い痰が出る」等々の例がいくらでもあることから自明のように、評価とは無関係な語である。

単語の意味として、評価の要素を含んでいると認められるためには、その語の普通の使用において、つねにある一定の方向をもった評価性を含んでいることが必要である。上にみた「ながい」「ながたらしい」「あかい」のようなばあいには、評価の要素の有無はわりあいかんたんに判断できた。しかし、じっさいはそのような語ばかりではない。たとえば「巧妙な」は、次にあげる例のようなばあいには、方法がうまいということだけでなく、わるぢえが発揮されているとか、正々堂々としていないとかいうような、倫理的にみてややマイナス的な評価が伴っているように思われる。

○こんな事から事務長と葉子との関係は巧妙な手段で逸早く船中に伝えられたに違いない。その結果として葉子は忽ち船中の社交から葬られてしまった。(或る女・上 183)

○やり方が大に巧妙ですよ。こちらの弱点をちやんと掴んで来るんだから。(真知子・前 166)

○最近、あちこちでとりあげられるようになったその応用論は、いずれも人間が人間を、少しでもより巧妙に支配するための技術を考案しようという意図に出たものとしか思われないものばかりである。(抵抗の科学 303)

しかし、次にあげる例ではそのようなことはないので、「巧妙な」に「ずるい」「狡猾な」のような要素が含まれているとは断定できない。

○左伝の敘事の巧妙さに至つては感嘆の外はない。(季陵 171)

○英語にも巧妙な比喩的表現はあるに違いない。しかし残念ながら私にそれを例示するだけの学力がない。(日本及日本人 1953年11月 48)

形容詞に含まれる評価的な要素の認定について、ここではわりあい操作しやすい仮設的な手づつきとして、次のようなやりかたをとることにしよう。

評価をあらわす形容詞のうちで、「いい」「わるい」はもっとも代表的な語だといえよう。使用度の点でも、「いい」は特に上位を占める語である。

<注> 『現代雑誌九十種の用語用字』(国立国語研究所報告21, 1962)では、

	使用率(‰)	使用率順位
ヨイ	3.711	21
ワルイ	.531	222

となっている。形容詞では「ナイ」に次いで、「ヨイ」が第2位である。ただし、「ヨイ」には「～てもいい」のような形式的な意味のものも含まれている。

「いい」「わるい」は、対象の性質の種類に関してはまったく自由であって、ともか

くその性質が積極的に評価されるものであるか、消極的に評価されるものであるかを表わす語である。したがって、評価の面に関しては、いちばん一般的・包括的な上位語の位置を占めているといえる。この点を利用して、次のような方法が考えられる。

それは、問題の形容詞が、包括的な評価語である「いい」「わるい」などと、共存しやすいか、共存しにくい、をしらべる方法である。温度に係する形容詞を例にしてみよう。「わるい」の代りに「いやな」を使うことにする。形容詞に多い、感情や感覚に係するマイナスの評価を伴った語のばあいには、そのほうが自然な言い方に近いことが多く、操作しやすいようである。）

あたたかい	いい	へやだ。
(+)	(+)	
あつい	いやな	へやだ。
(-)	(-)	
すずしい	いい	へやだ。
(+)	(+)	
さむい	いやな	へやだ。
(-)	(-)	

これらは自然な文として成り立つと思われる。たとえば「あたたかい」と「いい」とは同一の名詞「へや」に対する並立的な修飾語として共存しやすい。それは、「あたたかい」にプラスの評価が含まれていて、「いい」と調和しやすいのだと考えることができる。上の4つの文は、(+)と(+),あるいは(-)と(-)という、同一方向の評価を含む語が共存している文ということになる。

* あたたかい	いやな	へやだ。
(+)	(-)	
* あつい	いい	へやだ。
(-)	(+)	
* すずしい	いやな	へやだ。
(+)	(-)	
* さむい	いい	へやだ。
(-)	(+)	

上のような文は普通には成り立たない。たとえば「さむい」ということは、普通には、不快程度に大気の温度などがいちじるしく低いことであるから、「いい」とは両立しにくい。ただし、次のようにむしろ快い場合に「さむい」が使われた例もあるが、用例全体からみるとごく少量にすぎないので、普通には上のように考えることが許されるであろう。

○氣負ひに氣負つた葉子の肉体は然しきして寒いとは思はなかつた。寒いとしても寧

ろ快い寒さだつた。(或る女・前 123)

○さわやかに、寒かつた。荷物にかけてある、油のにじんだズツクのカヴァが時々ハタハタとなつた。分らないうちに、風が出てきてゐた。(蟹工船 103~104)

上の*をつけた4つの文は、(+)と(-)という、背反的な評価を含んだ語が、同一の名詞に対する並立的な修飾語の形になっているために、成り立たない(成り立ちにくい)のだと考えられる。そして、たとえば「あたたかい」は、「いい」とは共存しやすく、「いやな」とは共存しにくい、ということから、プラスの評価を含んだ語であると認定しようとするわけである。また「さむい」は、「いい」とは共存しにくく「いやな」とは共存しやすいことから、マイナスの評価を含んでいるとみるわけである。

もっとも、

さむいが (その他の点では) いい へやだ。

すずしいけれども (暗いので) いやな へやだ。

のような文は成り立つ点は留意しなければならない。それは「さむい」と「いい」、「すずしい」と「いやな」とが、「へや」の温度に関する側面と他の別種の側面とに言及しているからである。

以上のような方法で、形容詞の含む評価性を取り出していけば、次に例示するように、3つのグループに分かれることになる。

いい { すばらしい, りっぱな, うつくしい, おいしい, あたたかい, すずしい,
しんせつな, かしい, ……

わるい { くだらない, きたない, まずい, 暑い, さむい, くさい, ずるい,
(いやな) { ふしんせつな, ……

(中立的) { おおい, ちいさい, ふとい, ちかい, かるい, あかるい, はやい,
あまい, わかい, ……

すなわち、語の評価的な意味だけを取り上げ、記述的な意味を捨象するならば、「すばらしい、うつくしい、すずしい、かしい、……」は要するに「いいこと」なのであり、「きたない、くさい、ずるい、……」は要するに「わるいこと」「よくないこと」「いやなこと」なのであり、「おおい、ふとい、あまい、……」はどちらにも属さないことになる。

「もの」や「こと」が多くの名詞の上位語であり、「する」や「なる」が多くの動詞の上位語であるように、「いい」と「わるい」(「いやな」)は多くの形容詞の上位語であると、評価の面だけを抽象すれば言えると考えられる。

4.4.2 評価の2, 3のタイプ

4.4.1 では、形容詞の意味に含まれる評価性のありなしについて主に考えてみた。次に評価性のあるばあいには、どんな種類の評価性であるかということが問題になり得

る。この問題について、体系的に考えることは、容易ではあるまい。ここでは、わりあいはっきりと取り出せそうな評価性のタイプをいくつかあげてを試みよう。

他のばあいと同じく、語と語をつき合せて、評価性を見つけようと努めた。しかし、中には、単語対単語の形では評価の要素が取り出せないが、語のグループとの対立を考えれば、評価が随伴しているとみられる語を取り上げればあいもある。たとえば「いびつな」は、これと対比されうる、ごく近い形容詞は考えられないが、「まるい」「しかくい」「するどい」などの、「いびつな」と同じく形に関する形容詞のグループに属する語が評価と無関係であるのと対立して、マイナスの評価を含んだ語だと考えられる。

一般に、基本的な形容詞どうしが、評価の観点から区別される例は、あまり多くないようである。そして、評価的に無色な基本的形容詞と、それを語基とする派生形容詞が評価的に色づけられていて、対立をなしている例は、相当に多く拾い出すことができる。(例 あまったるいくあまい、うらわかいくわかい) また、マイナスの評価を含んだ基本的な形容詞と、その評価をいっそう強め、強調する派生形容詞との対立もある。

(例 へたくそなくへたな) 評価の観点で対立する形容詞の例を求めると、どうしてもこのような類が量的にいえば中心になる。しかし、このような派生関係にある語どうしの間の意味的な対立は、基本的な語どうしの間の対立ほど、興味を引かれるものではないと思われるので、網羅的にあげることはせず、いくつかのタイプに分けて例示的に説明することに止めよう。

上のような理由によって、ここで取り上げる形容詞には、派生的なものであって、使用頻度も低いものが多い。そのため、資料内の用例もごく少数であったり皆無であったりして、用例にもとづいて考えることができず、内省によって推測することに止まらざるを得ないことが多かった。

4.4.2.1 度外れ

ある量や性質の程度が、ノーマルな程度をはずれて大きいために、適切さを失っているというマイナス的な評価を伴う語がある。まず、空間的な量をあらわす語の領域にいくつかの例がみられる。

ばかたかい<たかい

(「ばかたかい」の用例なし)

ひよろながい<ながい

○「君ア草履か。いやが上にも僕ばかりヒヨロ長く見えるわけだな」

真新しい八幡黒をすぎた柵の細かい駒下駄を、ステツキの先で引きよせて穿くと、三好は先に立つて、硝子扉のそとに出た。(多情仏心・前 37)

○育つに随れて、丸々と肥つて可愛らしかつたのが、身長に幅を取られて、ヒヨロ長くなり、面も甚くトギスになつて、一寸狐やうな犬になつて了つた。(平凡31)

だだっぴろいくひろい

○町幅のだゞつ広い、単調で粗雑^{がさつ}な長い大通りは、どこを見向いても陰鬱^{ひっそり}に閑寂^{ひっそり}してゐるが、その静寒い冬の夕暮のあわたゞしい物音が、荒れた町の底に淀んでゐた。
(あらくれ 165)

ばかでかいとおおきい

○それをまだ世の中も開けない千年も昔に、今から考へたらお伽話めいて見えるくらゐに馬鹿でかい人間の夢を、平気で実現して見せたんだから驚くのだ。(帰郷 281~282)

上にあげた例の中で、「ばかでかい」の例などは、この文脈ではむしろいい意味で使われているといえよう。しかし、たとえば「あの人は頭がばかでかい」のような用法では、かっこうがよくないという、マイナスの評価が伴っている。そういうのが「ばかでかい」のいちばん普通の用法であって、ここの「帰郷」の例などはそういう普通の用法をふまえた、やや修辭的な使い方であるように思われる。他の3語も、量的に度はずれていて、少なくとも見た目にはよくない、という意味で、(よわい)マイナスの評価を含んでいると考えられる。

次に、人間の性質や態度に関する領域にも、似たようないくつかの例がみられる。

くそまじめなくまじめな

○岡山の人間のくせにして、糞面真目な小説を書いてゐる。(新潮 1956年7月 37)

ばかていねいなくていねいな

○片手を懐に、横着な顔つきをしながら、そんな風に言葉ばかり馬鹿丁寧^{丁寧}にやつてゐるのを見ると、有繋^{つなが}に三好は、ちよつと可厭^{いや}な気がした。(多情仏心・前 33)

○話ぶりでも、うやうやしく茶をいただいて飲む、そういう様子でも、すべてがばか丁寧で、この者に任しておいて、ずるい事をされる心配はないとだれでも思わないわけに行かないような男だった。(暗夜行路・前 242)

ばかしょうじきなくしょうじきな

○吉沢さんて、闘争一本槍で、すこし馬鹿正直^{まじ}みたいな人じゃないかと思うわ。(人間の壁・上 258)

一般的な語ではないかもしれないが、次の1例も同類であろう。

ばかこうこうなくこうこうな

○無知^{としよう}な老人のイんで見るところでは、莫迦^{ばか}幸行^{こうこう}な小野田は、女にのろい男か何そのやうに、いつまでも気長に傍についてゐて、離れなかつた。(あらくれ 206)

このばあい、「まじめな」「ていねいな」などは、むしろよい評価に傾いている語であろうから、「くそ〜」「ばか〜」という接頭辞は評価の方向を逆転させる働きをしているといえよう。

そして、「くそまじめな」とか「ばかていねいな」とかは、人間のあり方・態度とし

て適切さを欠いているという意味で、こっけいな感じがするなどのマイナス的な評価が含まれているといえよう。しかし、倫理的な悪い評価のような深刻なものではない。たとえば、「ばかていねいな」の「暗夜行路」の例などは、「ばかていねいな」人物はむしろいいことはいないと、ある点では信用されそうなタイプとして描かれている。

4.4.2.2 快・不快

快・不快の要素は、多くの形容詞の意味において重要な部分をなしている。が、これを評価性の中に含めることは、大いに問題であろう。

しかし、快いことはよい感情的評価が与えられ、不快なことはわるい感情的評価が与えられることは、人間の本性における強い傾向だといってもよいであろう。快・不快と評価性とは非常に密接な関係をもっていることは肯定されよう。したがって、便宜的ではあるが、形容詞の意味にみられる快・不快の要素について、ここで取り上げることにしよう。

まず、人間の感覚に関係の深い領域には、感覚に快いか、不快であるか、ということが基本的な要素になっているとみられる形容詞がある。感情形容詞であれ、属性形容詞であれ、それらの中間的なものであれ、区別なしに、感覚領域別にあげてみよう。

	快	不快
視（光線）		まぶしい
視		みにくい
視・聴	うつくしい	きたない
	きれいな	
聴		やかましい
		うるさい
味	うまい	まずい
	おいしい	
嗅		くさい
温度（高）	あたたかい	あつい
〃（低）	すずしい	さむい

感覚は、人間が外界の状態をとらえて、それに適応した適切な行動をとっていくための窓口のような働きをするものである。そして、生物体として有益な刺激は快いものとして受け入れ、有害な刺激は不快なものとして拒絶する傾向があるといわれる。このような、人間が外界の情報を処理して、適応した行動をとるための2大方向である快と不快とが、感覚に関係する基本的な形容詞の意味に反映している例として、上にあげたような諸語を考えることができようか。

上にあげたのは、それぞれの感覚器官でうけとる快または不快の感覚のうちで、かな

り一般的・代表的だと思われるものであった。それらのほかにも、感覚に関係する形容詞で、快または不快の要素がまつわりついていると考えられる例として、次のようなものについてしらべてみた。

(視覚的) げばげばしい (不快) <はでな, 華美な (分析例76)

どすぐろい (不快) <くろい (2.2.2「色」の(10))

(味覚) あまったるい (不快) <あまい (分析例35)

(嗅覚) こうばしい (快), かぐわしい (快) (分析例36)

(温度) ぬるい (不快) <なまあたたかい (分析例77)

(空間的なゆとり) せまくるしい (不快), きゅうくつな (不快), <せまい (分析例78)

(時間) ながたらしい (不快) <ながい, ながながしい (分析例75)

感情をあらわす形容詞についても、快い感情を表わす語、不快な感情を表わす語、どちらともかんたんには言えない語、という分類を考えることができる。

快——うれしい, たのしい, ゆかいな, おもしろい, おかしい, まんぞくな, あんしんな, すきな, かわいい, いとしい, なつかしい, ……

不快——かなしい, くるしい, つらい, さびしい, ふあんな, しんばいな, こわい, きみわるい, きらいな, いやな, にくい, くやしい, ねたましい, はずかしい, ……

その他——ほしい, きのどくな, かわいそうな, ありがたい, ……

ただし、上のようなグループ分けは、かならずしも単純明確に行なえるものではない。たとえば、ふつうは不快な感情に属する「かなしい」「さびしい」が、次のような例ではそうは言えなくなり、一種の「文学的な」深い感情を表わしているようである。

○葉子の悲しいほど美しい声は、どこか雪の山から今にも木魂して来さうに、鳥村の耳に残つてゐた。(雪国 81)

○丁度二年前の、秋の最後の日、一面に生ひ茂つた薄の間からはじめて地平線の上にくつきりと見出したこの山々を遠くから眺めながら、殆んど悲しいくらの幸福な感じをもつて、二人はいつかはきつと一緒になれるだらうと夢見てゐた自分自身の姿が、いかにも懐かしく、私の目に鮮かに浮んで来た。(風立ちぬ 128~129)

○海のほうで、ピョロピョロッと美しい鳴き声だけが音だかがしている。ちょうど芝居で使う千鳥の鳴き声だ。もう人々の寝静まった夜ふけ、黙ってこれを聞いているとなんとなく、さびしいような快い旅情が起こって来た。(暗夜行路・前 154)

しかし、文学作品の用例でもこのようなものは数が少なく、「かなしい」「さびしい」の大部分の用例は不快な感情といえるものを表わしているようである。

感情を表わす形容詞の多くが、快または不快の系列に分かれるのは、次のような人間

の本性が基礎にあるためであろう。たとえば「うれしい」「すきな」「あんしんな」のような感情は快いものであって、そういう感情をよびおこす状態を続け、強めるように作用する。また、「かなしい」「いやな」「はずかしい」のような感情は不快であって、そういう感情をおこす状態を避け、抜け出すようにはたらく。このように感情も理性と矛盾対立するものではなく、人間の行動システムの中で合目的な機能を果たしているとするれば、感情が快または不快という反対的な2大方向を持っていることは必然的なことになるといえよう。そして、感情を表わす形容詞もそれを反映したグループを形成するのであろう。

<注> 沢田允茂『知識の構造』（NHK市民大学叢書11）の中の「感情と情緒のメカニズム」（96～98ページ）

このような感情形容詞には、感情の程度が（たえがたく感じるほどに）高まった状態を表わすのに「～くて（～で）たまらない」という形式がある。（22ページにかかげた表の環境Ⅹを参照）この形式は快・不快にかかわらず、感情を表わす形容詞について広く成り立つものである。

（快の感情を表わす語）

○嬉しくつてたまらないついでいふやうにニコニコしてることもあるのに、あなたは感じないんですかね。（生まざりしならば 184）

○活動写真の話となると、急にまたいつもの活気に燃え立つて来て、さも愉快でたまらないと云ふ風に、ひとりでくつくと笑ひだした。（多情仏心・前 273）

（不快の感情を表わす語）

○悲しくて悲しくてたまりません。（潮騒 99）

○私は病身で先月も少し熱が高かったので死ぬのではないかとこわくてたまりませんでした。（出家とその弟子 75）

上と同じような意味を表わす「～くて（～で）しかた（しよう、しょう）がない」も、同様に快・不快のいずれにも使われる。

（快）

○わたしとしては正に勞せずして利するの結果となり、面白くてしかたないという始末だったのだ。（相撲 1956年6月 83）

○直に来うつて云ふんだぞなんて怒つた見てえになあ、俺ら可笑しくつて仕様無かつたつけぞ（土・上 181）

（不快）

○わたしはゆうべある夢を見て、気になって、こわくてしかたがないの（読切小説集 1956年8月 404）

○ふるさとを遠くはなれ他国に働いているので淋しくって仕方ありません。（明星 1956年9月 257）

ところが、同じように感情の高まりを表わす形である「～くて（～で）やりきれない（かなわない）」は、不快の系列に属する語（の多く）にしか使われない傾向があると考えられる。

（不快）

- 悪疾の感染するおそれも、考慮なくつちや。のちのちまで不安で、やりきれない
でせう？（本日休診 50）
- 「どうもうるさくつてかなはないな、駄句をひねくる奴が側にみると。」（波 9）
- 正直なところ、僕は、百合ちゃんが、うるさくてかなわんのだが、君たちは、一
体、結婚する気はないのか（自由学校 332）

たとえば、

- * うれしくて やりきれない
- * なつかしくて かなわない

のような言いかたは成り立たないか、または不自然であるといえよう。したがって、この形式にはまりうるかどうかということは、不快の系列に属するかどうかを吟味する参考になりうるであろう。

4.2.2.3 ほめ・けなし

人間の性質や態度に関する形容詞には、ほめていう語か、あるいはけなしという語かという意味での評価性を伴った語が多く存在している。

たとえば、

- かしてい、しんせつな、しょうじきな、せいじつな、きんべんな
などはプラスの評価をふくんだ形容詞である。参考になる例を一つずつあげよう。
- 仰有ったでしょう、人間は今の瞬間を賢く生きなければいけないって…（傑作倶楽部 1956年5月 328）
- みなわしに親切なよい人であったとおもい、そのしあわせを折りつつ、さようならを告げたい。（出家とその弟子 207）
- 正直な男と云ふ傲りを失つてまで、女を獲ようとするは彼にはあまり恥かしいことだ。（友情 49）
- 彼女は瀬谷の誠実な人柄と法律上の知識を高く買つてゐて、貸借についての訴訟事はすべて瀬谷に相談した。（厚物咲 33）
- 主人はまた僕が正直で勤勉で年に似合はぬ確かな者と誉むる横合から、（思出の記・上 193）

また、

わがままな、おくびょうな、いんげんな、ざんにんな、さもしいななどはマイナスの評価をふくんだ語である。参考例を一つずつあげよう。

○「自分の専門をつづけて行くのが我ままかしら……道楽ではないんでせう？ 貴方のやつていらつしやること。本当に自分の仕事なら、私は我ままと思はれないわ……」(伸子・上 33)

○あの自信のない臆病な男に自分はさつき媚を見せようとしたのだ。(或る女・前 18)

○たしかに林中尉のやり方は陰げんで、小細工だらけで、ひとのうらばかりをかくやり方だった。(真空地帯・上 190~191)

○無邪気な犬であつた為に、遂に残忍な刻薄な人間の手に掛つて、彼様な非業の死を遂げたのだ。(平凡 38)

○働きのない良人に連れ添つて、十五年の間丸帯一つ買つて貰へなかつた叔母の訓練のない弱い性格が、かうさもしくなるのを隣れまないでもなかつたが、(或る女・上 45)

これらの語を、

あの人は へい(だ)。

という文に入れると、その人をほめているかけなしているかのどちらかになることは、比較的はっきりしている。

もちろん、人間の性質・態度をあらわす形容詞がみな、はっきり一定した評価性を含んでいるわけではない。たとえば、

だいたんな、しぶとい、うちきな、ひょうきんな

などは、語として一定した評価をふくんではいないと考えられる。たとえば「だいたんな」を例にすると、

○アイゼンハウワー大統領の空中査察案は、西欧側では「大胆かつ誠実な軍縮提案」としてすこぶる高く評価されたが、(エコノミスト 1956年8月4日 20)

では、望ましいよい性質として使われているが、

○葉子はその顔を見て、恐ろしい大胆な悪事を赤児同様の無邪気さで犯し得る質の男だと思つた。(或る女・前 171)

では、わるいことに使われており、一定方向の評価性を含んだ語ではないことがわかる。しかし、この領域には評価性を含む形容詞がかなり多く見られる。それは、人間は自然現象にみられる属性などちがって、人間固有の性質や態度に関しては、無色透明な立場で中立的にとらえるよりも、賞讃的にか、非難的にか、色づけをしてとらえやすい傾向があって、それを反映しているのではないかと想像される。

性質や態度そのものと、それをほめ、あるいはけなす評価的な要素との関係に関して、次のようなことを指摘してみたい。

性質や態度そのものとしては共通の側面があるが、どういう評価的立場からそれをみるかの違いによって、対立的な関係にあるとみられる形容詞の組がある。

まず、その1例として、

けんやくな／けちな

という対立を取り上げてみよう。「けんやくな」はプラス、「けちな」はマイナスの評価を含んだ語だと、まず想定される。(「けんやく」の形容動詞としての用例は次にあげる1つしかない。)

○勤勉で儉約な朱家ほどにめぐまれなかった農民たちは、離村して南部の塩井の土方になったり重慶などの都会の苦力になったりした。(世界 1954年3月 213)

○本当はいい人なのだけれども、けちでしつこくて、する事が小さい事ばかり、私はこんなひとが一番嫌いだ。(放浪記 194)

○それゆえ東京人は大阪人を「けち」だと単にこれを見下げるに止まっている。(総長就業と廃業 350)

この2語は評価の点で対立しているだけでなく、客観的な性質としても違うものをあらわしている。すなわち、「けんやくな」はむだをなくして、費用をきりつめる行きかたであるのに対して、「けちな」は出すべきものも出さないでもの惜しみをする態度や性格である。したがって、語義としては、重要なところで分かれており、それが評価のプラスとマイナスを分つものにもなっている。しかし、「けちな」も「けんやくな」も経済生活上の態度としては、「ぜいたくな」などに対立して、同一の方向にあるとはいえよう。費用を少なくしようとする傾向が、不適切なばあいまで固執されたり、過度であったりするものが「けちな」であり、適切な範囲内に止まっているのが「けんやくな」であるともいえよう。ある人の経済上の行動・態度・性格を「けんやくだ」と見るか「けちだ」と見るか、それは単にほめるかけなすかという、評価上の違いではないことは明らかである。事実の認定の上でも違っている。しかし、事実の認定の基準、すなわちその人の経済生活上の態度などが適切に無駄をはぶいている程度なのか、あるいは過度にもの惜しみをしているのか、という判定自体が、複雑な、また主観性のはいりやすいものであることが多いであろう。その人物に対する話し手の好悪なども影響しやすいだろう。したがって、実際の上では、同一の人をある人は「けんやくな人だ」と言い、他の人は「けちな人だ」と言うようなことは起こりがちだろうと想像される。

また、「あの人はけちだ」と言う時、「けちな」の含むマイナスの評価のゆえに、その人を非難したことになるので、それを避けてえんきよくに「あの人はけんやくだ」と言う、というようなことも起こりがちであろう。

もう1つ、同類の対立として、

おせっかいな／せわずきな

を取り上げてみよう。「人のことによく立ち入り、せわをやく」という点では、2語に共通な側面があるといえよう。そして「せわずきな」のほうは、そういう性質を、肯定的(あるいは少なくとも中立的)な立場でとらえている。したがって、「よく人のめんどろをみる」「しんせつな」というような意味合いを含みやすい。

○実際世話ずきないゝ人なんだから。今度でも、だからよく頼み込んだら、屹度一と骨折つてくれるに相違ないと信じてよ。(真知子・前 186)

○葉子の見送りに来た筈の五十川女史は先刻から田川夫人の側に付き切つて、世話好き^{いそがは}な、人の好い叔母さんといふやうな態度で、見送人の半分がたを自身で引き受けて挨拶してゐた。(或る女・前 76)

他方、「おせっかいな」は否定的な評価を含んでいる。不必要な、余計なせわをやるとか、すべきでない出しゃばりな口出しをするという非難をするような時に使われる。

○村の人たちの中には、この奥さんの能弁に聞き惚れては、自分の寡黙な女房と引比べて、灯台長にお節^{せつ}な同情を寄せる者もあつたが、灯台長は奥さんの学識を尊敬してゐたのである。(潮騒 43)

○何のゆかりも無い私のやうなもので、おせつ^{せつ}かいに飛び出さなくてはならない羽目に陥つて仕舞つたのですわ(河明り 326)

「おせっかいな」に含まれるマイナスの評価を逆用して、親しい友人などについて「あいつもおせっかいな奴だな」などと、「せわずきな」に近く、ほめことば的に使われることもあるようだ。

以上にあげた2組のほか、次のようなものも同類の対立として考えることができるかもしれない。

ねばりづよい(+) / しゅうねんぶかい(-)

しんちょうな(+) / おくびょうな(-)

ほこりたかい(+) / こうまんな(-)

かっぱつな(+) / おてんばな(-)

お人よしな(+) / ばかな(-)

以上にみたような、人の性質などに関する形容詞に伴う、ほめ、あるいはけなすという意味での評価性は、その性質などが、その社会から要求されるようなあり方に合致しているか否か、ということが単語の意味の内部にまで反映した結果であろう。

<注> 渡辺友左「語彙の構造と価値観の構造と——言語社会学的な研究の試み——」(『社会学論叢』No. 49, 1970—7)では、その社会の「期待される人間像」の語彙への反映として、このような現象がとらえられている。

そして、同じ社会でも時代による価値観の変化が起これば、このような単語に伴う評価性も間接的に影響を受けることはあるだろう。特に価値転換の時代といわれるような時期には、安定した時代よりも、単語に伴う評価性も変動を起こす可能性が多いであろうか。本来きわめて悪い評価を伴った「破廉恥な」が「ハレンチ」とカタカナ書きされて、いわゆる「かってよき」に通じるような使われかたがされ、ジャーナリズムで近來よく話題にされた。これなどは人工的な、ごく一部での流行語的な現象にすぎないように思われる。しかし例えば、「ぜいたくな」「おしゃれな」のような語に伴う評価性

は、勤儉が尊ばれたかつての時代と、消費が謳歌されるような時代とでは、いくらかの変動が起きている可能性は考えられるだろう。

4.4.2.4 その他

以上に、形容詞の意味にみられる評価的な要素の例として、3つのタイプをあげてみたが、それらはかならずしもはっきり分離できる性質のものだとは考えられない。むしろ、2つ（以上）のタイプが密接に関係しあっているばあいが多いだろう。たとえば「なれなれしい」（分析例79）のばあい、適切な基準を越えた親しすぎる態度、不快な感じを与える態度、非難されけなされる態度というように、いろいろなタイプのマイナス評価を伴っているものとして考えることができよう。なお、上にあげた3つのタイプのほかに少数ながら次の諸例を評価の観点から取り上げてみた。

とぼしいくすくない（分析例80）

旧式なく古風な、昔風な（分析例81）

ふるくさいくふるい、ふるめかしい（分析例82）

いびつな（分析例83）

ぶこつな（分析例84）

分 析 例

〔1〕 感 情

いやな／きらいな

「いやな」も「きらいな」も、何かに対する反動的・拒否的な感情に関係する点で共通の面をもっている。

○気位の高い娘として、あの男もイヤ、この男も嫌いと、惜しげもなく、秀才や美青年を、ケトバシてきた彼女が、五百助のような男に、コロリと参ってしまったのは、不合理の極であった。（自由学校 13）

○もし悪いと云へるとすれやア、あたしを信用してくれなかつたことだ。どんなことを聞かせても、あたしがあなたを嫌ひになるの、可厭（かえん）になるのつてことは断じてない、——さう云ふ気持になつてゐてくれなかつたことだ、それだけは、あたしに云はせれば、慥かにいゝことぢアなかつた。（多情仏心・前 197）

のような、2語が並立的に使われた例もある。

○人には誰が上にも好きな人、厭（えん）な人と云ふものがある。そしてなぜ好きだか、厭（えん）だかと穿鑿して見ると、どうかすると捕捉する程の拠りどころが無い。（阿部一族 48）のように、「すきな」に対して反対語「きらいな」がふつう期待される所に「いやな」の使われている例もある。

では2語の相違点はどこにあるのだろうか。まず、次のように仮定したい。

「きらいな」は、ある人の、ある対象に対して形成された、反撥的な感情的態度である。「いやな」は、ある対象によってひきおこされる、不快な感情である。

まず、「いやな」は感情形容詞の類にはいるけれども、「きらいな」には問題があることについて述べよう。

感情形容詞に特徴的な、感情の主体である人と、感情の対象とが、基本的には「《人》は《対象》が～い(だ)」の形で表わされる構造(1.1.3)をもった文の例は、「いやな」にも「きらいな」にも存在する。

○本当はいい人なのだけれども、けちでしつこくて、する事が小さい事ばかり、私はこんなひとが一番嫌いだ。(放浪記 194)

○彼は、人と争うことが、何より嫌いだった。これだけの巨体だから、腕力は相当あるにちがいないが、生れてから一度も、それを振るったことがない。(自由学校 10)

○ほかにはしゃいでいらっしやるかと思えば、急に泣きだしたりしてほんとうに変なかたですわね。私はお酒によって泣く人はいやだわ。(出家とその弟子 88)

○彼は恐ろしい泣虫であつた。彼は何時の間にか爛鍋といふ綽名を付けられた。彼は心に幾ら其れを嫌つたか知れない。三十越えて四十に成つても彼は鍋といふのが酷く厭であつた。(土・上 204)

「きらいな」は、上に述べた点では感情形容詞の特徴をそなえている。しかし、一般の感情形容詞とは違う点ももっている。

感情形容詞にはその語幹に接尾語「～がる」がついて、その感情が外に表れたようすを表わす動詞ができるのが通例である。(1.1.1を参照。)「いやな」からは原則どおり「いやがる」が作られて、よく使われている。

○先生は庭の方を向いて笑つた。然しそれぎり奥さんの厭がる事を云はなくなつた。(こゝろ 97)

ところが「きらいな」からは「きらいがる」は派生していない。「きらいな」が派生した、もとの語である「きらう」も現代語として生きて使われているために、動詞の語形が「きらいな」から作られる必要性がないのであろうか。この事実は、「きらいな」の意味の性質とは、必ずしも必然的な関係があるとはかぎらない、と考えるほうが安全であろう。

次に、感情形容詞は一般に、主語になりうるものに人称的な制限がある。(1.1.2を参照。)「いやな」はその例にもれず、

* きみは日本酒がいやだね。

* あの人は勉強がいやです。

などとは言わないのが普通である。ところが「きらいな」は

きみは日本酒がきらいだね。

あの人は勉強がきらいです。

などとは言える。ということは、「きらいな」は感情形容詞の基本的な条件のうちの1つを欠いていることを意味する。資料内には上のことを裏づける「きらいな」の好適な例はないが、次にあげる例などは、だいたいここにあてはまる例であろう。

○「そうだ。お前は汽車がきらいだから、それもいいかもしれない。いっそ、横浜から船で行くといい」（暗夜行路・前 137）

○母親には若い者の色事に関する寛大な見解があつた。海女の季節のあひだも、焚火にあたりながら人の噂をするのがきらいである。（潮騒 93）

○顧みる母の眼色を、僕はよく解した。母は鈴江君を嫌ひでは無いが、好きでもない。はきはきした性質と大様な性質と自づから合はぬのである。（思出の記・上 153）

「きらいな」は、ある人の、ある対象に対する、一定の感情的態度であるために、「いやな」のようなまったく主観的な感情とちがって、他人にとっても事実として認識されやすく、客観的な事実の性格を帯びているのではないか。そのために、話し手以外の人が何か「きらい」であることを断定する形が成り立ちうるのではなからうか。

以上、「きらいな」は「いやな」とちがって、感情形容詞とはいえないような側面をも持っていることをみた。以下に、2語の使われかたをもうすこしまかくみて、はじめに仮定した2語の相違点をうらづけてみよう。

感情の対象となるものについて考えてみよう。「いやな」も「きらいな」も、人・もの・ことにわたって、対象になるものは広汎である。その範囲から2語の間の違いを見つけることはできそうに思われぬ。ただし、「きらいな」は対象がその文中に表現されている例が大部分である。表現されていない例でも文脈などから容易に対象が推定できる点が特徴的である。

○「ふム。だが、いつからおまへ、志村の興さんとそんなに近しくなつたんだい。前にはずるぶん嫌ひのやうだつたが……」（波 365）

つまり「きらいな」の対象は常に明確である。対象のない、「きらいな」気持ということとはあり得ない。

他方の「いやな」についても、対象が表現されている例、表現されていなくても文脈から明らかに対象が推定される例は多い。しかし、一方、感情の対象がそれほど明確でない例もある。

○「あゝあ、いやだいやだ。毎日喰っちゃ寝、喰っちゃ寝、いったいつになったら戦がはじまるんだ。体がくさりそうぞ」（読切小説集 1956年2月 356）

のように、その場の情況全体に対する嫌悪の感情の表現として、使われている例もある。また、「いやな」感情の起こる条件が、接続助詞などの作る句によって示されることもある。

○暑くなりますとほんとに厭でございますね。(桑の実 135)

○あのね、吉沢さん、わたし、一つだけ自分の心に誓っていることがあるの。笑ったらいやよ。(人間の壁・上 239)

○お互に後^{うしろ}を振向かないことにしませうよ。振向いたりすると、何だかいつまでもおもひが残つて厭ですから。(波 301)

さらに、「きょうは何となくいやな気分だ」というように、とりたてていうほどの明確な対象や原因のないこともあるかもしれない。

「きらいな」の対象は人やものやことを表わす名詞の単語によって表わされることが多いが、次の例のように「……の」「……こと」のような名詞句のこともある。

○あの人は可哀さうな人の癖に、可哀さうがられるのが嫌ひらしいから(或る女・前 204)

○それに、人にネダられて、金を出すのが嫌いで、自分の意志で財布を開ける時は、いやに気前がいいという、根性曲りだから、オイソレと、五百助に援助してるとも、考えられない。(自由学校 25)

○「でも、人の前で泣顔を見せること嫌ひなんですもの。だからわたくし、滅多に泣いたことがありませんわ。」(波 223)

こういう名詞句で表わされている内容は、その時、その場かぎりの1回の事態ではなくて、一定の感情的態度の対象として定立されうるようなものである。これらの「きらいな」を「いやな」におきかえると、その場での感情だけを表わす表現に変化する。「いやな」の対象語には、そのような制限がなく、具体的な限定性のつよい、1回の事態を表わすものでもよい。

○彼はそのまま自家へ帰る気がしなかったし、今お栄と顔を合わせて、何かきかれる事もいやだった。(暗夜行路・前 69)

○私は初めて見知らぬ道を選んだことを後悔した。しかし既に死に向つて出発してしまつた今、引き返すのはいやであつた。(野火 17)

これらの「いやな」を「きらいな」におきかえることはできない。

「きらいな」はある人の、ある対象に対する一定の傾向であるから、その場かぎりでなくて持続的な性質であることが多い。

○それから日ごろきらいな狩野探幽の雪景色を描いた墨絵の屏風もいいと思った。(暗夜行路・前 177)

○私はこの先生には質問めいたことをするのが嫌ひだつたから、私の考へてゐることと同じだと思つて、止まつたが、(心 1954年2月57)

「いやな」は感情形容詞の一般の例にもれず、その時点における心の状態である。

○私は書物を読むのも散歩に出るのも厭だつたので、たゞ漠然と火鉢の縁に脇を載せて凝と頭を支へたなり考へてゐました。(こゝろ 235)

○まづ何か欲しい物がある。それも無い物ねだりで、有る結構な干菓子^{お菓}は厭で、無い一文菓子が欲しいなどと言出して、母に強^{おん}求るが、許されない。(平凡 11~12)

において、「こゝろ」の例では読書や散歩、「平凡」の例では干菓子が、平生から好まないのではなく、その時にそれを欲しないことを表わしている。したがって、

わたしは人と会うのがきらいではないが、その日は客に会うのがいやだった。
うなぎがきらいではないが、きょうは胃が疲れているのでいやだ。

のような文が成り立つ。

「いやな」は、連体修飾語として、次の例のような使われかたをすることも多い。

○けれどお寺の中は清い事ばかりはなく、また坊様にもいやな人はたくさんありますよ。(出家とその弟子 138)

○海辺の人が、何て厭な名前をつけるんでしょう、継続だんごだなんて(放浪記 257)

○さうして、陰気な気持は妻の言つたとほりいやな天気から来たものだつた——と、彼は思つた。(田圃の憂鬱 110)

○耳も鼻も頬も紅くした子供の群が、束子^{わたし}でこするようにキュウキュウ厭な音をたてて、氷の上をすべっていた。(放浪記 274)

このような「いやな」の中には、特定の主体が対象を「いやに」感じるという側面が弱まって、人が一般に「いやに」感じるような対象自身の性質を表わすようになってい
るばあいがあると考えられる。

他方、「きらいな」にはつねに、感情の主体がはっきり存在している。連体修飾語になるばあ人も、次の例のように「《人》のきらいな《対象》」の形で、感情の主体の示されるのが原則である。

○瓢箪を持って鯨の上に馬乗りになる猿ぐらい、著者の嫌いなものはないらしい。

(私の人生観 71)

○このお温習程私の嫌ひな事はなかつたが、之をしないと、直^{ちき}ポチを棄ると言はれるのが辛いので、(平凡 36)

ただし、感情の主体は次の例のように言い表わさないことも多い。しかし、そういう場合でも、感情の主体はかならずはっきり想定されるのであって、「いやな」のばあいのように感情の主体が特定の人でなくなるということはない。

○そりゃ、きらいな男に、肌身は許すこと成りませぬが、好きな殿御なら、抱かれもしましよ。 (芸芸 1956年2月 215)

○斯んな劇場の通路にひとりぼつんとしてゐるのは、最も嫌ひなことの一つであつた。(真知子・前 129)

「いやな天気」「いやな色」などはそれだけで意味の充足した連語であるが、「きらいな天気」「きらいな色」などは文脈や場面によって感情の主体が補われない限り、意味が充足しない。人々が一般にきらいであるような属性をもった天気、色という意味には

なりえない。

なお、「いやな」も「きらいな」も、対象語はガ格であるのが原則であるが、「きらいな」についてはヲ格をとった例もあった。

○謙作はその女中を實際きらいではなかった。(暗夜行路・前 22)

○彼はその女をきらいではなかった。(暗夜行路・前 220)

○「大宮さんはあなたとちがつて勉強家ね」と云つたり、武子に「大宮さんは兄をお嫌ひぢやないの」と云つたりした。(友情 73)

(付) 「きらいな」と「いやな」との関係に対応して、「すきな」と「いい」(の「いやな」に対応する部分)との間にも、同じような関係の対立が存在しているだろうと推測される。

(2) 属性／感情

こっけいなくおかしい、な

「こっけいな」も「おかしい」も、心の緊張を解消させるような(主として人間的な)ことがらに接して、笑いたくなる時の状態に関係している。人を笑いたくさせるような対象のようすと、それによって人が笑いたくなる気持とは、なかなか分離しにくい面があるが、ここではこの両面のどちらをあらわすかという観点から、2語の関係をしらべてみよう。

結論的には、「おかしい」は主として感情をあらわすが、属性をあらわすこともあるようである。「こっけいな」は属性をあらわす語と考えられる。

「おかしい」についてしらべるまえに、ここで取り上げようとする「おかしい」の意味の範囲を限定しておく必要がある。たとえば、

○日光の不足と、炭塵と、有害ガスを含んだ空気と、温度と気圧の異常とで、眼に見えて身体がをかしくなつてゆく。(蟹工船 60)

では、「おかしい」は「普通でない、変な状態」を表わし、笑いを誘発するような性質とは関係がなくなっている。多義的な「おかしい」について、ここで取り上げるのは、笑いをさそうような種類の、「こっけいな」と共通性のある意味だけである。

まず、「おかしい」には感情の主体である人を主語とし、感情の対象を対象語としてとっている例がある。

○伸子はもういつの間にか、佃は「さん」づけにする価値ない者、と心にきめたやうに、佃、佃と呼び捨てる母の口調が悲しく可笑しくかつた。(伸子・上 142~143)

○殊に多喜子は、彼の母と同じ師匠に就いて鼓の稽古をしてゐるが、それも非常にたちがよいと噂したので、真知子は河井のお坊ちやんらしい正直さが少しをかしかつた。(真知子・前 44)

このような構造の「——ハ——ガ」構文の述語になり得ることは、一般に主観的な感情をあらわす形容詞の特徴である。

○「少しは若い嫁さんに思いやりをしてあげんと」

自分と同じようなことをいうと景子はおかしかった。(婦人公論 1956年11月 350)

○ふたりは、ひしと抱き合ふやうに寄り添ひ、屹つとまじめな顔になった。私は、をかしくてならない。カメラ持つ手がふるへて、どうにもならぬ。(富岳百景 72)

では、感情の対象は対象語としては示されることなく、「景子」「私」は感情の主体を表わしている。

小説の文章などについては、書き手の位置・視点が単純でなく、問題が複雑になる。しかし、すくなくとも日常会話では、二人称・三人称の人の感情を表わす文として「あなたはおかしい。」「あの人はおかしい。」のような文は成り立たない。「おかしい」は基本的には話し手の主観的な感情を表わす形容詞だからである。

○「やっぱり学校はいいわね。可笑しいでせう？ こんなところへ来ると私うんと勉強でもしたい気になつてしまふの」(伸子・上 50)

○軍曹は湯飲茶碗を准尉の前にはこんだ。「こら、当番、笑うない！ おかしい？ 何がおかしい。」(真空地帯・上 16)

のように相手の感情を推量したり、尋ねたりする文は成り立つことも、感情形容詞に一般にみられるところである。

また、内的な感情を表わす形容詞は、その語幹に接尾語「～そうな」をつけると、そういう感情が外に表われたようすを示すものになって、三人称の人について使われる。

○三十分程すると、奥さんが又書斎の入口へ顔を出した。「おや」と云つて、軽く驚ろいた時の眼を私に向けた。さうして客に來た人のやうに鹿爪らしく控えてゐる私を可笑しさうに見た。(こゝろ 44)

○美津枝は、ふッと嘔飯して、肚の底から可笑しさうに笑ひ崩れた。(多情仏心・前 242)

「おかしい」の名詞形「おかしき」が、「おかしい」の感情の面を名詞化しているばあいがある。

○そして胸をふんぞつてゐるんですが、やつぱり大いに狼狽して赤い顔をしてゐましたよ。僕も可笑しさをこらへて《私はかういふもんで。》と名刺を出しましたよ。(冬の宿 28)

○店の女達が、たかすだけたかかっておいて、勘定になると、裏から逃げ出して行つた昨夜の無銭飲食者の事を思うと、わけのわからないおかしさがこみ上げて來て仕方がなかった。(放浪記 242)

のような、「おかしさをこらえる」「おかしさがこみあげる」という言いかたにおける「おかしき」は笑い出したくなるような感情を意味している。

以上、「おかしい」の感情を表わしているとみられる側面をしらべてみた。「おかしい」は属性よりも感情を表わす側面のほうが優位にあるように思われるが、次に属性を(も)表わしているとみられる面をしらべてみよう。

○女達が私の顔を見てクスクス笑って通って行く。頬紅が沢山ついているのか知ら、それとも髪がおかしいのかしら、私は女達を睨み返してやった。女ほど同情のないものはない。(放浪記 29)

○歩き出しや、階段の上り下りは殊に困つた。その歩きつきがをかしいので、生徒達は彼のうしろでよくくすくす笑つた。(波 325)

○「獲物無しサ。」と敬之進は舌を出して見せて、「朝から寒い思をして、一匹も釣れないでは君、遣切れないぢやないか。」其調子がいかにも可笑かつた。盛んな笑声が百姓や種曳の間に起つた。(破戒 232)

などの例は、ガ格の名詞と「おかしい」がむすびついている。これらの名詞は、人を表わすものではない。そして、さきにあげたような、感情とその主体を結びつける関係の文と構造が違っている。

これらの「おかしい」は、髪、歩きつき、話の調子じしんが、客観的にもっている性質を表わしているものと考えられることもできよう。しかし、たとえば、髪が長いとか、歩き方や話し方が速いかいような性質にくらべて、それらがおかしいという性質は、人間がそのように感じることに密接不離な、分離しにくいものである。これらの3例では、たまたま、おかしい性質をもったものに接した人々が笑うという文脈をもっているが、「おかしい」にはその人々の感情の側面も含まれている可能性はあるだろう。(その面からは、「髪」「歩きつき」「其調子」は感情をよびおこした対象である。)

「おかしい」の、属性的な面がつよいと思われる例をもう少しあげてみよう。

○着ながしでは可笑しいから此を穿いて御いでなさい、と兼頭氏が其子息の穿きふるしの小倉袴を貸して呉れたのである(思出の記・上 205)

○やがて帰国した洋行帰りの私は、この三着の西洋の洋服を、おおいにみせびらかせようとしたが、みんなが「おかしい」というのである。洋服屋の知人は、ひまをみて直してあげましょうという。肩がおかしい、エリヤソデのつけかたが変だ——(装苑 1956年1月 122)

「思出の記」の例は、着流しの姿ではみっともないというのに近く、話し手の感情とはほとんど関係がないと思われる。「装苑」の例は、洋服が変だ、かっこうがわるい、というので、それを見る人の感情は(ほとんど)含まれていないかと思われる。

○とは言ひ乍ら、寂れた中にも風情のあるは田舎の古い旅舎で、門口に豆を乾並べ、庭では鶏も鳴き、水を昇いで風呂場へ通ふ男の腰付もをかしいもの。(破戒 130)

○私の写真全部お送りしますわ、可笑しいのも。笑つて頂戴。しかし皆さんにはいっただけ見せて頂戴。(友情 123)

○犬山にサルがいるというのもおかしなものだが、ここは、桃太郎伝説の発祥の地といわれ、桃太郎神社というのがある。(高崎山 41)

「破戒」の例は、水をかっけいで風呂場に運ぶ男の腰つきを、こっけいな趣きのあるものだと客観的に述べているのであろう。「友情」の例は、よくとれた写真に対して、「おかしい」写真というのは、よくとれなかった写真、へんにとれてしまった写真であろう。「私」とか、相手とかがその写真を「おかしく」感じるということはほとんど含まれておらず、「おかしい」が写真自身の性質に近く使われているように思われる。(もちろん、相手はその写真を見れば「おかしく」感じるのであろうけれども。)「高崎山」の例は、「犬山」と「サル」という取り合せがユーモラスだということで、だれかが「おかしい」という感情を特にいさぐという必要はなく、客観的な属性に近いものになっている。

次にあげる例なども、属性を表わす面がつよいと思われるが、感情の面がまったくないといえるかどうかはわからない。

○この料理人は、もう四十位だろうけれど、私と同じ位の背の高さなのでとてもおかしい。(放浪記 189)

○ほんたうにそのいるかのかたちのをかしいことは、二つのひれを丁度両手をさげて不動の姿勢をとつたやうな風にして水の中から飛び出して来て、うやうやしく頭を下にして不動の姿勢のまままた水の中へくぐって行くのでした。(銀河鉄道の夜 298)

○可笑しい話が始つたので、人々は皆な笑ひ転げて、中にはもう泣いたものが有ること。(破戒 206~207)

もし、「おかしい話を読んだが、ちっともおかしくなかった。」という文が自然なものとして成り立つとすれば、その「おかしい話」の「おかしい」は純粹に属性を表現するものになっているといえるだろう。

「こっけいな」は、ものごとが笑いたくなるような性質をもっていることを表わし、「おかしい」のように笑いたくなるような感情を表わすことはない。

人を表わす名詞が「こっけいだ」の主語になるばあい、それは感情の主体ではなく、属性の主体を表わす。

○「私は滑稽さ、バスの屋根で立往生に会つちやつて、ここへとび込んだのです」(伸子・上 44)

における「私はこっけいき。」という文は、話し手の感情を述べているのではなく、話し手が自分を対象的に眺めて描いているのである。

「こっけいだ」が主語を伴っている例の多くは、人そのものでなく、人の動作などを表わす名詞や名詞句が主語になっており、「こっけいだ」はその動作などの属性を示している。

○あの時の辺見は、サーカスの道化よりも、動作が滑稽だった。(自由学校 105)

○鉦しんこうが急行で駆け出す後から、笛ふえが、いやに荘重に、気長く追っていく調子は、なんともいえず、ブザマで、滑稽だった。(自由学校 31)

○夫と妻と子供たちが、いつもとちがつて、神の祭の名のもとに、他所行きの睦まじさを造り出さうとしてゐるのは、滑稽でもあり、またこのうへもなく悲しい光景でもあつた。(冬の宿 64)

「こっけいな」が連体修飾語になっている例についても、その修飾する名詞の表わすものごとの属性を表わすものとみて、不都合を生ずる例は見当たらない。

○昔仲間の茶道も、いっしょくたにされては困るな。古いからとうとい、なんて思われているが、あれは金持の“貧乏ごっこ”で、こっけいな遊びだよ。(週刊新潮 1956年4月1日 26)

○平和の神像が、女性の形で表わされるのは、なんと滑稽な、ミステークであるか。すべての女は、ヒステリー患者であり、そして、女のヒステリーほど、無分別で、我儘なる軍国主義はない。(自由学校 322)

○それよりも、村山の口から出ると、フィアンセという言葉が、むしろフィアンセというものが、滑稽なものに思えてくるのが面白かった。(むらきも 139)

「こっけいな」と「おかしい」とが、1つの文脈の中で使われている例が少しあって、やはり「こっけいな」が属性を、「おかしい」が感情を表わすとみるとうまく説明がつくようである。

○ちょっとしまったと思ったが、相手の怒って赤くなった顔を見ると、いかにも滑稽で可笑しくなった。(読切倶楽部 1956年3月 443)

○気むずかしいふきげんらしい顔が自身見えるだけにこの浮かれ唄との滑稽な対照が自分でもちょっとおかしくなった。(暗夜行路・前 172)

〔3〕 属性／感情

かわいらしい、あいらしい、かれんな<かわいい

これらの語は、小さいもの、こどもらしいもの、美しいものなどが人をほほえましい気持、いたわりたい気持にさそうような性質や状態に係る点で共通性がある。いずれも、こどもや若い女性について用いられている例が多い。

○お初ちゃんと言う女は、名のように初々しくて、銀杏返しのよく似合うほんとに可愛い娘だった。(放浪記 100)

○昂子の側から立派な服を着た、可愛らしい男の子と、女の子が顔を出した。(波 394)

○しかしその時、自分はたゞ一目見ただけで、愛らしい女だと思っただけで、僕はそれ以上思はなかつた。(友情 114)

○丑松が瀬津村の学校へ通ふやうになつてからは、もう普通の児童なまのこどもで、誰もこの可憐

な新入生を穢多の子と思ふものはなかつたのである。(破戒 16)

また、これらの語は、上のような様子の表われた、体の部分や動作ぶりや動作の結果生じるもの(声など)などにも使われる。

○木村は取りつく鳥を見失つて、二の句がつけないでゐた。それを葉子は可愛い眼を上げて、無邪気な顔をして見やりながら笑つてゐた。(或る女・前 216)

○お加代は謙作の不意な変わりようにちょっとまごつきながら、それでも今の荒々しい様子とは、全く思いがけないかわいらしい顔つきをした。(暗夜行路・前 105)

○しかし愛らしい靴音がいよいよ近づくと、娘を怖がらせることが憚られ、逆に自分の所在を知らせるために、さつき初江が歌つてゐた伊勢音頭の一節を口笛で吹いた。(潮騒 47)

○ひどい楽器であつたが、オルガンの持つ哀愁と、子供等の可憐な肉声が、見すばらしい小さい群の合唱であるだけ、もの悲しい、和やかな柔らぎを与へた。(真知子・前 60)

人間以外にも、動物、服装、草花などに使われることがある。

○第一、これ、可愛い山羊だ。乳が、出るかね(自由学校 186)

○茶がかった朱色のウールで作ったかわいらしいワンピース・ドレス。(ドレスメーカーキング 1956年12月 90)

○愛らしい七、八才少女用ワンピース(婦人生活 1956年7月付録 126)

○鈴蘭の花が初夏の風に可憐にゆれる。(別冊文芸春秋 1956年50号 111)

以上のような使われかたにおいては、これらの語はかなり共通性を持っているといえよう。これらの語は、その意味が情意的な要素の強いものではあるが、上にあげたような例に関するかぎりは、対象の属性の表現とみることができる。これらの例のばあい、対象のほかには情意の主体となる人間を表わす語を表現に割り込ませる余地は考えられない。ところが、「かわいい」は以上のような属性表現だけではなく、次に述べるような他の3語にはない側面をも持っている。

○いいえ。何とかやってみます。わたし、あの子が可愛いんです。むずかしい子ですけど、本当は何かしら淋しいんじゃないかと思うんです。(人間の壁・上 202)

○このあいだも私がお酒のお相手をしていたら、妙に沈んでいらしたが、私の顔をじっと見て、私はお前がかわゆいかわゆいと言って私をお抱きなさるのよ。(出家とその弟子 88)

○いやないやなやつ(の)門口に哀れみを乞うて親子三人立たねばならなくなるよ。わたしはお前や松若がかわいいでな。今のうちにしっかりしなくては末が知れている。(出家とその弟子 25)

「わたし」「わたし」はかわいいと感じる主体であり、「あの子」「お前」「お前や松若」はかわいいという感情を起こさせる対象を表わす。いわゆる対象語である。このよ

うに主語と対象語をかねそなえた用例は、他の3語では資料内にない。

○私は自分の生きてる体が可愛いわ。しようとおもへば、四年の年期が二年になるんだけれど、無理をしないの、体が大事だから。(雪国 103)

は「自分の生きてる体」が対象語であるが、上の諸例と同じ構造である。以上にあげた例は会話文であるが、地の文にも同じような例がある。

○父は馬鹿だと言ふけれど、馬鹿気て見える程無邪気なのが私は可愛い。(平凡37)

この例では「(ポチが)馬鹿気て見える程無邪気なの」という、句で表わされたことが対象語になっている。

以上は感情の主体が一人称にあたる人の例であった。次に三人称に相当する人が感情の主体である例をあげよう。

○普通の母親は、自分の子供が可愛いから、子供にひかれて学校のことに関心をもつ。(人間の壁・上 221)

○駒子は、平さんのそうした様子が、可愛くもあった。(自由学校 269)

「人間の壁」の例は従属句の中でのもので、こういうばあい主語になるものに人稱的な制限はない。「自由学校」の例は「かわいい」が文全体の述語の実質的な中心であるが、わりあい客観的な事態の表現という性質をもつと思われる過去の表現である。しかし、小説では「駒子は、平さんのそうした様子がかわいい。」のように、形容詞の現在形が述語として文の終止の位置に単独で立つこともありうるのではないか。そのばあい、作者は三人称の人物の立場・気持にはいり込んで書いているのであろうか。(26ページの<注>の後半を参照。)しかし、少なくとも普通の会話文では「*あなたはあなたの子どもがかわいい。」「*あの人はおくさんがかわいい。」のような文はふつうではないであろう。これは感情形容詞について一般に言えることである。

以上は主語と対象語が揃って表現されている例であった。主語あるいは対象語が表現されてはいないが、文脈上それが明らかであって、それらが揃っている文に準ずるものとみられる例もあり、これらについても「かわいい」は感情の表現であるとみなされる。

○私がこうして三年もこんな仕事をしてるのは、私の子供が可愛いからなのさ……………(放浪記 91~29)

○死ぬるか乞食になるかしなくてはなりません。しかし私は死にとまいません。女房や子供がかわいいのです。(出家とその弟子 48)

○あんたは、まだ私を愛してるとも云わないじゃないの……暴力で来る愛情なんて、私は大嫌いよ。私が可愛かったら、もっとおとなしくならなくちゃ厭！(放浪記 84)

○母親という相手は、先生にとっては一番こわい。自分の子供が可愛いという決定的な共通点をもっているから、子供のことになると彼女等はたちまち共鳴する。(人間の壁・上 189)

○手を呉れる積なのか、頻に円い前足を挙げてバタバタやつてゐたが、果は和り^{やんわり}と痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて可愛くて堪まらない。(平凡 29)

はじめの例は「私」、次の「放浪記」は「あなた」、「人間の壁」は「母親」が主語として想定される。最後の「平凡」は「小犬」が対象語として想定される。

以上、「かわいい」は主語と対象語をとることができ、明らかに感情形容詞の側面もっていることをみてきた。他の3語「かわいらしい」「あいらしい」「かれんな」については、主語と対象語をとっている例が資料内に存存しない。また、主語あるいは対象語が表現されてはいないが、それを補足して双方をかねそなえた自然な文になるという例も見出しにくい。これら3語の用例はすべて、感情の表現ではなく、ある対象のもつ属性の表現であるとみても、構文上からも、意味からみても、矛盾が起こらないものと考えられる。

「かわいらしい」「あいらしい」「かれんな」が属性の表現であるということは、かわいらしく、あいらしく、かれんであると感じるのは、特定の主体ではなく（あるいはそういうたてまえの表現であり）、一般化された主体であって表現の背後にしりぞき、対象の属性の面が表現の前面に出てきているということである。意味の性質上、主観的な要素の大きい属性であることはいうまでもないが。これに反して、「かわいい」は、そう感じるのは特定の主体だけであってもよい。一般の人はかわいらしく感じない人が、特定の人にとってはかわいいということは珍しいことではない。

以上のような「かわいい」とその他の3語との意味上の違いは、「かわいい」が（主語）は（対象語）が～い（だ）。

という構造の文の述語になりうるが、他の3語はなり得ないという構文上の事実と対応していると考えられる。

（付）この項の末尾に記した「（主語）は（対象語）が～い（だ）」という構文の述語になりうるかどうかという点に関連して、小調査1で次の例文についてしらべてみた。（各例文に対する反応の、上段は女子大生23人、下段は女子高校生51人のもの。）

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(イ) わたしはあの子がかわいい	{ 20 32	2 12	1 7	— —
(ロ) わたしはあの子がかわいらしい	{ 4 42	3 5	16 4	— —
(ハ) わたしはあの子がかれんだ	{ — 1	2 15	21 35	— —
(ニ) わたしはあの子があいらしい	{ 2 16	6 21	15 13	— 1

上段の女子大生の結果は、「かわいい」はこの構文の述語になりうるが、他の3語はなりえないという区別を、だいたい支持するものだといえよう。下段の女子高校生の結果は、かならずしも同じような傾向を示していない。特に「かわいらしい」については正反対の傾向を示し、「あいらしい」についても相当くいちがっている。「かれんだ」については普通だとした人がほとんどなく、女子大生と同じ傾向の結果を示した。

〔4〕 主体（数が2以上）

まれなくめずらしい

両語とも、同類のものごとが少数であることを含んでいる点で共通性がある。

まず「まれな」がもの・人・できごと・場合について使われた例を1つずつあげよう。（「まれな」はものや人よりも、できごとなどに使われることが多いようである。）

○此処其処について居る机上のランプは晨の星程稀である。（思出の記・上 159）

○演出はピーター・シャロフといふイタリー演劇学校の校長で、今日では稀なスタニスラウスキー方式のロシア演出家の一人だと、カタログに書いてある。（芸文春秋 1953年8月 43）

○河岸には二人竝んで歩ける程、雪掻きの開いた道が通り、人の往来は稀だつた。（河明り 286）

○これらの多くは「ところ預け」となって、町内の負担で養育されるのだが、うまく成長する例は稀で、浮浪者、乞食などにおちるのが大部分のようであった。（小説と読物 1956年3月 172）

これらのばあい、ひじょうに数少ないのではあるが、唯一ということではなく、少なくとも2以上ではある。数が1のときには「まれな」ということはできないと考えられる。

次に「めずらしい」がもの・人・できごとに使われた例を1つずつあげよう。

○而して何んの気なしに小卓の前に腰をかけて、大切なものゝ中にしまつておいた、その頃日本では珍らしいファウンテン・ペンを取り出して、筆の動くまゝにそこにあつた紙きれに字を書いて見た。（或る女・前 178）

○女の人であんなに酒の強い人は珍らしいね。（人間の壁・上 77）

○それから二年ほど過ぎたある日、宇平が学校へひよつこり行介を訪ねて来た。

「どうしたい。珍しいこつたね。」（波 84）

「或る女」「人間の壁」の例は、数がおそらく2以上であろう。「波」の例は唯一回のできごとと考えることができようか。「めずらしい」のばあい、数は問題ではないのであって、「まれな」のように2以上でなければ言えないということはない。「これは世に二つとない珍しい品だ」「世界中にこれ1冊しかないという、珍しい本」「2度とない、珍しい事件」のような言い方が成り立つことから、そのことがわかる。これら

の「めずらしい」を「まれな」におきかえることはできないようである。

〔5〕 量的／質的

まれな／めずらしい

両語とも、同類のものごとが数少ないことを条件とする点で共通性がある。

「めずらしい」は同類のものごとが少ないことからくる、そのもの自身の性質、つまり、いわゆる稀少価値があることを含んでいる。言いかえれば、ありふれたものでないために人間の興味・関心を引くような性質である。一方、「まれな」にはそういうことがなく、単に数量的に稀少であることを示すだけである。

「まれな」は文章語的だという文体的特徴ももっている。

○噂よりも有力な批評といふものは甚だ稀である。(人生論ノート 86)

○1/50秒でもそうした現象がまれにはおこるので、一般には1/25秒程度のシャッター速度が最良かと思われる。(ポピュラーサイエンス 1956年3月 171)

などにおいて、「まれな」が使われているのは、かたい文体の文章であることが1つの要因であろう。また、感情的でない冷静な叙述態度をとろうとしているので、評価的でなく、客観的に数量の稀少なことを表わす「まれな」がふさわしい文脈であったともいえるだろう。(主体の点で、「まれな」は数が2以上あることを条件とし、「めずらしい」は数に関して自由であることを、分析例4に仮定したが、そのことは上の区別と関係があるであろう。)

まず、ものを主体とした例について、両語を対比してみよう。

○これは、渋沢敬三氏が外遊中にエチオピアの郵政大臣から贈られたという、いわゆる「めずらしい」はその「文献」が数少ないものであるだけでなく、稀少価値のあることを表わしている。

○これは、渋沢敬三氏が外遊中にエチオピアの郵政大臣から贈られたという、いわゆる「めずらしい」はその「文献」が数少ないものであるだけでなく、稀少価値のあることを表わしている。

○火事・地震・遷都・戦乱その他・世上幾多の激動に耐え、それから後の一千年に近い永い歳月を焼失もせず紛失もせずに保存することの出来た史料は、きわめて稀であり、おそらく九牛の一毛にも足りないであろう。(日本及日本人 1953年7月 91) における「史料」も稀少価値があることはいまでもないが、ここで表現していることは量的に非常に少ないことに止まっている。

○「あゝ、この通りには落合では珍しいと言われる位の大きな沈丁花があるのよ。」
(くれない 30)

の「沈丁花」はその大きさにおいて「落合」の区域内では数少ないものだという量的な面だけでなく、それが人々に珍重がられていることが表わされている。この例のように空間的な範囲や、また時間的な範囲等が示されて、その範囲内で稀少であることが言われることは、「めずらしい」にも「まれな」にも例が多い。

○夜九時、三丁目の電車通りの商店街は電気をつけているが人影は稀で、パチンコ屋の他は至極ひっそりしている。(世潮 1954年3月 111)

の「まれな」は、ある空間的な範囲内にそのものがごくまばらに存存することを表わし、やはり一種の数量に関係した表現である。

次に、人を主体とする例でも、

○処で、あんた近頃珍しい仲々の好青年じゃ。わしはあんたの容貌、態度、言動、つまり凡てからあんたが少々気にいった。(小説と読物 1956年9月 360)

○そのために「学者らしからぬ政治性のある男」「学者に珍しい実行力のある男」などとも評された。(物質の根源と宇宙を結ぶ 102)

の「めずらしい」はその人物に対するよい評価を含んでいる。美人については両方の例があるので並べて引用しよう。「ひなにはまれな(美人)」は慣用的な表現であろう。

○お艶は今年二十八才、こんな山里には珍らしく、アカぬけた美人である。(小説と読物 1956年4月 280)

○彼等はその妻君の美しさに吃驚した。鄙には稀なといふけれど、彼女は単に美しいばかりではなく滴るばかりに色気があつた。(厚物咲 19)

次に、ことに関して使われた例をみよう。

○周囲に聞く砲声はだんだん稀になつて行つた。殊に南方の音は全く絶えた。(野火 54)

○街道筋は戸がおりて、人の通るのもまれだった。(くれない 10)

の「まれな」はことの生起する時間的な間隔が非常に大きいことを表わしている。

○日曜でも稀にしか外出は許されなかったが寸暇を惜しむように帰宅すると、ひとり部屋にこもってレコードに耳を傾けた祥太郎である。(小説と読物 1956年2月 286)

の「まれに」は「たまに」とも言いかえられるような、時間的な頻度に関係する表現になっている。

○柳家小さん あらゆる意味で三木助の好敵手。三木助と仲が良くて芸上のライバルである点が良い。理想的なのが二人同時に並んだということは珍しいことだ。(文芸春秋増刊 各界スタア読本 1954年4月 76)

の「めずらしい」もめったにないことを表わす点で共通性はあるが、単に頻度が低いというだけでなく、人々の興味をひくことができごたごたという条件を含んでいる。

○篠崎嵯峨野の家に珍しくも中村一心齋が訪ねて来た。(娯楽のみうり 1956年8月3日 48)

のような「めずらしく(も)」にも、めったにないことという客観的な面とともに、主観的な評価の気持が含まれている。こういう用法は「まれな」には存存しない。

「めずらしい」の数量に関係する性質がうすくなって、興味・関心をひく性質という点の比重が大きくなると、「まれな」との対比はできないものになってゆく。「めずら

しい」の語義が歴史上この方向に変化したということではないが、)

○雨後のことで土が匂つてゐるのも、東京から来た者には珍しい。(帰郷 118)

○こんな場所にこれほどの片田舎があることを知つて、彼は先づ驚かされた。しかもその平静な四辺の風物は彼に珍らしかつた。(田園の憂鬱 7)

のように「〜に(は)珍しい」の形で興味を感じる人間が示されることもある。

○靴を脱いで、腰掛の上に立たせてやると、駿は窓の外を飛んで行くいろいろな風物を珍しさうに眺めてゐた。(波 195)

では「おもしろい」に近い、人間の感情を表わすものになっている。

「めずらしがる」という派生動詞が存在することも、「めずらしい」の意味が著しく感情的な性質を帯びうることを示している。

○秋の山の風でも聞いているような、風琴の音色、皆珍らしがってみていた。(放浪記 250)

〔6〕 抽象的／具体的

けがらわしい<きたない、きたならしい、不潔な

「けがらわしい」は精神的な潔癖感にはげしくふれて不快なことなどに使われる。

○彼は、深い良心の苛責に囚はれながら、帰つて来た。そして家に這入ると、直ぐ様、男女の衣裳と金とを、汚らはしいものゝやうに、お弓の方へ投げやつた。(愚響の彼方に 66)

は、追いはぎの結果手に入れてきたものを、自分の行為に対するはげしい自責・嫌悪の気持ちからいとわしいものと感じたのであって、どろでよごれたりしていて「きたない」と感じたのとは違いがある。

○時任謙作の阪口に対するだんだんに積もって行った不快も阪口の今度の小説でとうとう結論に達したと思うと、彼は腹立たしいうちにもすがすがしい気持ちになった。そして彼はその読み終わった雑誌を枕もとへ置くのもけがらわしいような心持ちで、夜着の裾のほうへほうって、電気を消した。(暗夜行路・前 20)

は、雑誌が他人の手あかでよごれているというようなことではない。その雑誌にのっている小説の内容がふまじめであり、また自分を勝手なやり方でモデルに利用していることに強い不快を感じている場面である。

○涙を人に見せるといふのは卑しい事にしか思へなかつた。乞食が哀れみを求めたり、老人が愚痴を云ふと同様に、葉子には穢^{けが}らはしく思へてゐた。(或る女・前 116)

では、誇り高く生きようとする生き方から、人前に弱味をさらすような行為を、さげすむべき、精神的に醜悪なことと感じたことを表わしているのであろう。

「きたない」は物が古びたり、ごみ・どろ・老廃物・排泄物などでよごれたり、もの

が整頓されておらず乱雑であったりするような、有形的な物体の具体的な状態をいうことが多い。そういう例を次にいくつかあげてみよう。

○このなかでも主な仏像の前にはお線香の煙がのぼり、きたない拾円札がひらひらとあげられてあった。(芸芸春秋 1954年3月 41)

○生活の周囲を見渡して汚ないと感じるのは、大抵われわれ自身が製造したものである。生活のない所にはごみも生ぜず、糞臭もない。(暮らしの手帖 1956年 37号 201)

○子供が汚い手をすぐ着物に拭くやうに、袷の裾にぬぐふと、又始めた。(蟹工船 63)

○からだの各部を回って、酸素を失い炭酸ガスを受け取ったきたない血液は、まず右心房にはいり、右心室を経て、肺に送られる。(人工心臓を体内に 364)

しかし、「きたない」は次の例のように精神的な、非物体的なよごれに使われることもある。

○私は卑しくても、このようなきたない罪を犯しながらそのまま助けてくれと願うほどあつかましくはなっていないのです。(出家とその弟子 101)

○だから肉体的愛情は正当に使われる必要があります。それは別にきたないものでも不潔でもない。(スタイル 1956年11月 129)

「きたならしい」「不潔な」も、具体的・抽象的の双方に使われる。それぞれ1例ずつあげよう。

(具体的)

○さうかと思ふと又今更のやうに、食ひ荒らされた食物や、敷いたまゝになつてゐる座布団のきたならしく散らかつた客間をまじまじと見渡した。(或る女・前 74)

(抽象的)

○一つの打撃がお前の頭の調和を破れば、お前は今まで祈った口でたわいもないうわごとを語り、今まで殊勝に組み合わせた手できたならしいことを公衆の前にして見せるかもしれない。あの動物園の猿のように。(出家とその弟子 14)

(具体的)

○細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい軽の輪のやうに伸び縮みがなめらかで、黙つてゐる時も動いてゐるかのやうな感じだから、もし皴があつたり色が悪かつたりすると、不潔に見えるはずだが、さうではなく濡れ光つてゐた。(雪国 31)

(抽象的)

○私は、不潔なことをして来たのではないといふことを、それとなく知らせたく、きのふ一日の行動を、聞かれもしないのに、ひとりでこまかに言ひたてた。(富岳百景 60)

[7] 主体(液体など)

ぬるい <なまあたたかい

「ぬるい」は液体についてというのが普通である。

○五百助が、小屋へ帰ると、

「少しおヌルくなりましたけど……」

高杉後家さんが、べつに、どこも欠けてない茶碗を、差し出してくれる。(自由学校 318)

○「お湯が少しぬるうございましたでせう？」と、おくみは鉄瓶の下の火をかき探した。(桑の実 134)

は、いずれもお茶の温度について使われたものである。

○或は畑の彼方の萱原に身を横へ、強く吹く北風を、積み重ねた枯草で避けながら、南の空をめぐる日の微温き光に顔をさらして畑の横の林が風にざわつき煙き輝くの眺むべきか。(武蔵野 17)

は晩秋の武蔵野の弱い日光の形容であって、「ぬるい」の普通な使われかたであるかどうか疑問に思われる。

「ぬるい」の用例は資料内には上にあげた3例しかないけれども、飲み物や風呂の温度にはたしかによく使われている。ほかに、「こたつがぬるい」という言いかたもあるが、「ストーブの火がぬるい」「暖房がぬるい」などとあまりいわないところを見ると、慣用句的な表現であろうか。「こたつがぬるい」というのは、もちろんこたつのふとんの中の空気の温度についての表現である。「ぬるい」は少なくとも固体そのものの温度については使われないという制限が存在するようである。

「なまあたたかい」は

○嘉門はそれから暖い海岸の石垣のかげに隠つて白い雲や蒼い海や島や白帆をみながら、生あたたかい海風に吹かれてみると、しつとりと汗ばんできて、夕方まで彼の「青春時代の夢」をおもひ出して涙を出した。(冬の宿 66)

○薄暗くした室内には、網戸越しに、庭の夜気が、草や花の匂ひを乗せてなま暖かく流れてるのが薄着になつた肌にわかるのだつた。(帰郷 57)

のように、風や気体のようなものによく使われる。「なまあたたかい」の、温度に関係のある用例17(ほかに、微温的という抽象化された意味の用例が少しある)のうち、9例まではこのようなものである。しかし、次のように、液体や固体などに使われた例もある。

○藪壘を控へた広い平地にある紙漉場の霞簀に、温かい日がさして、楯を浸すためになみなみ 盈々と湛へられた水が生暖かくぬるんでゐた。(あらくれ 11)

○朝は必ず生温い飯に、煮詰つた汁と極つて居たのが、其日にかぎつては、飯も焚きたての気の立つやつで、汁は又、煮立つたばかりの赤味噌のほひが甘さうに鼻の端へ来るのであつた。(破戒 298)

○フッと私は、私の足先に、**生あたたかい**人肌を感じた。人の手だ！（放浪記 190）

○今朝から小雨が降りそゞぎ、その晴れ間にはをりをり**生ま暖かな**日かげも射してまことに気まぐれな空合ひ。（武蔵野 10～11）

「なまあたたかい」は主体が気体的なものか、液体か、固体か、という点については無関係であると認められる。

（付）小調査2の中で、次の項目についてしらべてみた。

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	（無答）
（イ）こたつがぬるい	{ (男) 32 (女) 37	17 9	7 6	— —
（ロ）ストーブの火がぬるい	{ (男) 7 (女) 8	15 12	34 32	— —
（ハ）日光がぬるい	{ (男) — (女) —	5 4	51 48	— —

「こたつがぬるい」は過半数が「普通」とし、「ストーブの火がぬるい」は過半数が「あきらかにおかしい」として、本文に述べた仮定をだいたい支持するような結果が出た。「武蔵野」の例にやや似せて作った例文「日光がぬるい」は「普通」とした人は皆無であり、「ぬるい」の基本的な用法からは区別して扱ってよいと考えられる。

〔8〕 主体（土地）

平坦なくたいらな

「平坦な」は土地（舗装などをされたものも含めて）についてしか、使われない。次のような用例がある。

○霞の色が變つて来ると同時に街は灯ともり始めた。それこそ碁盤目に置かれた**平坦な**町なのだ。（帰郷 245）

○駅のある町はすぐに切れて、あとは小山を切り開いた新開道路になった。三町と**平坦な**道はなかった。（厭がらせの年齢 272～273）

○急バンク十二車レース（後樂園）などは、先行有利となり、比較的**平坦な**バンクで長走路（大宮、千葉、大阪中央など）なら追込み選手が有利になるのはいうまでもない。（娯楽よみうり 1956年2月24日 33）

「たいらな」も土地について使われることもある。たとえば、

○其間凡そ一里許。尤も往きと帰りとは、同じ一里が近く思はれるもので、北国街道の**平坦な**長い道を独りてくてくやつて行くうちに、いつの間にか丑松は広瀨とした千曲川の畔へ出て来た。（破戒 167）

○牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い**平らな**頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。（銀河鉄道の夜 257）

これらは「**平坦な**」におきかえられる可能性がある。

しかし、土地以外にいろいろなものについても自由に使われることはいうまでもない。少数の例をあげておこう。

○その時鷹は水底深く沈んでしまつて、^{しだ}齒菜の茂みの中に鏡のやうに光つてゐる水面は、もう元の通りに平らになつてゐた。(阿部一族 28)

○佃は、^{ぶこつ}無骨に平らな指先で、ふはふはしたにこげをなでたり、鞆の上を歩かせて見たり、罪なく子家鴨と戯れた。(伸子・上 98)

○フライパンをきれいに掃除して油を少々入れてよく熱し、そこへ④の材料を平になるようにならし入れて、蓋をきっちりとして中火で焼きます。(婦人倶楽部 1956年 2月付録 お惣菜料理全集 90)

○音作は箕の中へ^{すくひ}籾を抄入れて、其を大きな^{まるがた}円形の斗餅へうつす。地主は「とぼ」(丸棒)を取つて餅の上を平に撫で量つた。(破戒 245)

これらは「平坦な(に)」にはおきかえられない。「たいらな」には、「平坦な」のような主体の上の制限がない。

なお、「平坦な」についてちょっと付け加えておきたい。

○しかし、報告の期間は、ソ連共産党にとって、明るい空の下で平坦な道を全面的な勝利の行進をした期間であつた、と考へては正しくないであろう。(中央公論 1956年 4月 285)

この例では「平坦な道」は比喩として使われているが、「平坦な」と「道」との関係は上に述べたところの一例にすぎないから問題はない。

○話しては、やや暖がれた^{しは}平坦な音声で、常識的に話を進めて行く。伸子の興味は、又程なくそれに物足りなさを覚えてきた。(伸子・上 16)

○美鈴が片袖を唇に含んで、煙たそうに酌をするのを、求女は久し振りの妹を迎えた兄のような平坦な親しい調子で眺めやります。(読切小説集 1956年 3月 446)

「平坦な」には上のような無形のものごとに転用された用法もあるが、この項では、「平坦な」「たいらな」双方とも、有形のものについて使われる用法だけを取り上げて比較したのである。

[9] 主体(飲食物)

しんせんな <あたらしい

あるものが、そのものとして成立してから短い時間しか経過していないという点で、「あたらしい」も「しんせんな」も共通な側面をもっている。

「しんせんな」は、飲食物について、次のように使われる。

○病人は何よりも新鮮な野菜を喰べたがつた。(厚物咲 25)

○細君の心を尽した晩餐の膳には、鮭の新鮮な刺身に、青紫蘇の薬味を添へた冷豆腐、それを味ふ余裕もないが、一盃は一盃と盞を重ねた。(蒲団 24)

○草が、山羊の体を通過して、新鮮で、栄養価の高いミルクと化するのだから、こんな、うまい考えはない。(自由学校 186)

○新鮮なサラダは、山盛りだったが、後はジンジャー・ブレッドのようなものが出ただけで、午飯は終わった。(自由学校 97)

○新鮮な食品を見分けるコツ (実業之日本 1956年12月1日 150)

特に魚肉や野菜のように、くさりやすいもの、いきのよさを生命とするものについてよく使われる。そして新しいために生き生きとしていることを意味している。

○朦朧とした気持ちも、この朝の青々とした新鮮な空気を吸うと、ほんとうに元気になって来る。(放浪記 59)

のように空気についてもよく使われるが、これも人間が吸うための空気が、炭酸ガスなどでよごれておらず、新しいすがすがしいものであることを表わすので、飲食物に準じて考えてよいであろう。「山の空気はおいしい」「おいしい空気が吸いたい」などと言うときも空気が飲食物扱いされているといえようが、それと似た現象である。

○清吉くんは私を店の野菜のように新鮮ですって (映画ファン 1956年8月 103)

○夕方、静栄さんと印刷屋へパンフレットを取りに行った。たった八頁だけれど、まるで果物のように新鮮で好ましかった。(放浪記 61)

では野菜や果物にたとえて人や印刷物について「しんせんだ」といっている。さらに「しんせんな」は、飲食物とは関係なく、いろいろなものごとについてよごれ古びた感じがなく、新しく生き生きしていることを表わす。次にそういう例を少しあげるが、この項目ではこういう拡張的なものを除いて、物体の経過時間に関係する本来の用法について、「しんせんな」の主体は飲食物に限られるとみたのである。

○胡麻の青い小さな種子は、晩夏の日を浴びて、新鮮な色をした蓆の粗い目の上に、ひとつひとつ可愛らしい紡錘形の影を添へてゐた。(潮騒 150)

○朝の寒い風をうけて、素足は桃色に新鮮に見えた。(くれない 33)

○新鮮な朗かな青年達の笑い声がはじけると、一せいに男の眼が私を見上げた。(放浪記 200)

○仄かな水の匂ひが伸子に懐しく新鮮な喜びを感じさせた。(伸子・上 52)

「あたらしい」も次に例をあげるように、「しんせんな」と同じように飲食物について使われることがあるが、他にも広く使われることは例をあげるまでもない。

○銀色の背、樺と白との腹、その鮮しい魚が茶色に焼け焦げて、ところまんだら味噌の能く付かないのも有つた。(破戒 135)

○新しい魚を材料に二三品の料理を注意して拵へて、四人で食卓を囲んだ。(生まざりしならば 187)

○「それより、あんた、山羊の乳の新しいのを、ご馳走しようかね」(自由学校 198～199)

〔10〕 主体（刃物）

鋭利な <するどい

「するどい」は、刃物について次のように使われる。

○屠手の頭は鋭い出刃庖丁を振つて、先づ牛の咽喉を割く。（破戒 149）

○懐から鋭い小刀をさがし出して、幾度も幾度も、そのものの脇腹に向つて突き刺すが、それはただ真黒な毛のなかに手ごたへもなく入つてゆくばかりだつた。（冬の宿 146）

○鋭い刀で切つたように心がはっきりとして参りました。（出家とその弟子 84）

「するどい」は刃物以外のものにも、次のように使われる。

○海底を蹴つて浮き上るときに鋭い貝殻が指先にあたへる傷、（潮騒 121）

○法規の鉄網で囲繞された檻に閉じ籠め、前例の鞭で擲らるると来ては、さながら動物園の獅子や虎と区別なく、爪は鋭く牙は強くとも、施すに術なく、見物人の笑となるに過ぎない。（総長就業と廃業 358～359）

一方、「鋭利な」は具体物についての用例が1つもないので用例からは何も言うことができないが、おそらくは属性の主体が刃物に限られるという制限をもっているであろう。「鋭利な爪」などと言うことはあり得ようが、そのばあいは爪を刃物・武器に見立てた、比喩的な表現であると言えよう。

以上にあげた「するどい」の例は、刃や先がとがっていて、よく切れるとか、物を傷つけやすいという、形と、それに伴う機能とを含んだ意味のものであった。「するどい」には、機能は含まず、先がとがって細くなっているという、形だけに関係する意味もある。

○グラウンドと反対側には低い山なみがつづき、鋭い三角形をつらねた炭坑のボタ山からは、有るか無きかの煙がながれていた。（人間の壁・上 168）

「鋭利な」は、このような、形だけに関する意味はもっていない。このことは、「鋭利な」が、主体が刃物に限定されていることと関係のあることであろう。

〔11〕 主体（もの／人など）

あたらしい／わかい

「わかい」は人間などの生まれてからの期間、「あたらしい」は物が成立してからの経過時間が短い、ということをも基本的な意味としてもっている。この面に関しては、「わかい」は人間など生命のあるもの、「あたらしい」は生命のない物体について使われる、という主体の上の対立を考えることができるであろう。（「あたらしい」はものだけでなくことにも使われるが、ここでは人間や物体という、目に見えるものの範囲内で考えてみたい。）

分析例64の程度「おさない／わかい／としとった」でもみるように、人間の年齢に関

係する形容詞には、「わかい」よりもっと年齢の小さいほうを表わす「おさない」もある。しかし、年齢の大小を一次的に表わす対立は、「わかい—としとつた」であるとみることでもできるのではないか。「番号がわかい」という転義的な用法も、上のように考えたと説明しやすい。ここでは、このような仮定の上に立って「わかい」を「あたらしい」と対立させてみたわけである。しかし、現実には「わかい」はやはり「おさない」「小さい」などとの関係のうち存在しているのだから、「わかい」と「あたらしい」の対立はこの面からも、びったり対応するようなものではなく、ずれのあるものになっているといわなければならない。

「わかい」が人間に使われる例はあげる必要もあるまいが、次の例のように人間の体のある部分についても使われることがある。

○客は決して動揺した様子を見せず、若い柔和な顔を向けて動かなかつた。(帰郷 223)

○武蔵野の台地端ばかり、若い脚にまかせて歩きまわり、稲荷台とおなじ燃糸文しか施文のない土器の分布は、かなりはっきりしてきた。(旧石器の狩人 312)

「わかい」は動物についても、少なくともある範囲内では、あたりまえの表現として使われる。

○しかし、真知子はそのまゝ彼女を離れ、なにかに追ひ立てられる若い獣の如く、一時間前逃げ込んだ部屋からもう一度逃げ出した。(真知子・前 211)

○幸島の場合も、高崎山の場合も、新しい文化の発明者は、若いサルだった。(高崎山 37)

○かういふわけで、発育盛りの若い二足の犬は毎日鎖で繋がれねばならなかつた。(田園の憂鬱 50)

のほか、猫、鳥に使われた例もある。

植物についても、

○お島は隙を潰すために、若い桜の植えつけられた荒れた貧しい遊園地から、墓場までまはつて見た。(あらくれ 19)

○人通りのない、暗いほこりっぽい道に、若い麦のにおいが流れていた。(人間の壁・上 265)

のように使われることがある。また、

○私はかなめの垣から若い柔らかな葉を撈ぎ取つて芝笛を鳴らした。(こゝろ 71)

○青木さんはそのまゝその花床へ行らつて、草花の若い芽生についてゐる虫を取つたりなされたが、その中にまた妻の方へ行つておひになつた。(桑の実 71)

のように植物のある部分について使われた例がある。

以上は「わかい」が生物あるいはその部分について使われたものであるが、無生物に使われた例として次のようなものがある。

○このような世代の繰り返しのなかで生まれる星が、若い種族の星なのであって、世代の繰り返しのなかで、星雲自身も進化してゆくのである。（宇宙の謎はどこまで解けたか 94）

これは星を、世代を繰り返す生物のように見立てている表現なので「わかい」が使われたとみられる。

○アルミは若い金属である。コスト低下につれて新用途が開拓されてゆく途上で、欧米では建築車輛、船舶などの分野で、銅や鉄鋼や木材に徐々にとって代りつゝある。（東洋経済新報 1956年1月7日 83）

の「わかい」は、生命あるもののようにこれから伸びてゆく、将来性のある、のような意味で比喩的に使われている例である。

「あたらしい」が広く、ものについて使われる例はあげるまでもあるまい。「あたらしい」が人に使われるのは

○名を知ることによって、あたらしい先生と生徒とのあいだは何歩か近づいてくる。

（人間の壁・上 90）

のように、人間の生まれてからの期間ではなく、ある資格、関係などが生じてからの期間が短いことを表わす。

(12) 主体（もの／人など）

ふるい／としとった、おいた、としおいた

長い期間存在してきたものは「ふるい」のであり、長い年数を生きてきた人は「としとった」「おいた」「としおいた」人であるという意味で、これらの語は主体の区別によって対立している側面があるといえよう。

「としとった」は

○その跡に、つとめて何気なきさうにしながら、ただ背中だけ少し前屈みにして、急に年とつたやうな様子をして立つてゐる父だけを一人残して。（風立ちぬ 89）

のような場合は変化を表わしており、本来の動詞の性格を保っている。しかし、「としとった」「おいた」「としおいた」は動的な意味がうすくなり、あるいは消失して形容詞「ふるい」と対比させうる性格をもつ用法もあると考えられる。

「ふるい」が生命をもたない物体について広く使われることはいうまでもないが、ここでは多少問題点のあるような2、3の例をあげてみよう。まず、

○駅の前に待たせてあつた、古い、小さな自動車のところまで、私は節子を腕で支へるやうにして行つた。（風立ちぬ 91）

という例において、「待たせてあつた」という表現は自動車を有情物扱いにしているといえよう。また、一般に乗り物の存在をあらわすのに、「ある」でなく「いる」が使われることもある。しかし、乗り物に「わかい」「としとった」は使われ得ず、上の例の

ように「ふるい」が使われる。

次に、

○そして明らかにされたことは、銀河系のなかにみられる最も古い星は、およそ一五

○億年以前に誕生したということであった。(宇宙の謎はどこまで解けたか 92)

では、星について「ふるい」が使われている。一般に天体については「ふるい」が使われることには何の不思議もない。ところが、月面標本の分析結果を報じた、ある新聞記事(朝日新聞、昭和44年9月18日)の中に、「月は地球より古いのではなく」とある一方、「月は地球より老いている」「もっと年とった岩石がみつかるかもしれない」とある。また、「月の石の年齢は30—40億年と出された」「地球の年齢は45億年 というのが、いま定説となっている」などの表現もあって、月や地球を年齢を持つもののように表現する言いかたがその方面で行われているようだ。(このようなばあい、英語などで「年取った」も「古い」も old などの同じ語で表わされることも影響しているのであろうか。)

次に、

○大きい古い樺の樹と松の樹とか蔽ひ冠さつて、左の隅に珊瑚樹の大きいのが繁つて居た。(蒲団 28)

○それも水の畔にある古い柳である。(帰郷 242)

のように樹木にも「ふるい」の使われるのが普通であろう。「帰郷」の例はすぐ前に「柳が人間の老人のやうに長い髯を垂れ」と人に見立てた文句があるが、「老いた柳」などとは表現していない。しかし、あとで述べるように樹木について「とととった」「おいた」が使われた例もある。

人間について「ふるい」が使われるばあいは、

○「しかし……」

と、恭吾は、この頑固一途の古い友達が見出した自由な立場を悦びながら、云つた。(帰郷 336)

○彼は隅の長椅子と長机のところ集っている兵隊のなかには行って行って、今朝から気にしていた、この部隊で一番古い兵隊の年次をききたでしたが、二年八カ月から二年半というのが一番古い兵隊だというのだった。(真空地帯・上 42)

のように、人間の年齢ではなくて、友達という関係とか、兵隊という資格などが成立してから長い時間がたっているという意味を表わす。

人間について用いられた「ふるい」で、しかも上のような意味ではない、注目すべき例が1つだけある。

○「旦那、旦那、お蔭でたすかりました。」としやが傾れてつぶれてしまつて古いのか若いのかわからぬその男の声はしきりに繰り返してゐた。(冬の宿 139~140)

の「古い」は「若い」と対比して使われていて、年をとっていることを表わしているのであろう。(作者阿部知二は岡山県の出身) 静岡県掛川の方言では「ふるい」を「わか

い」に対立させて人間にも使うそうである。(宮島達夫氏による) また、同じく静岡県しずおか雄踏町でも同様の使いかたがあるそうである。(村石昭三氏による) 上の「冬の宿」の例も方言的なものの反映であるのか否かはわからないが、日本語の中でも「ふるい」が人間にも老齢の意味で使われる可能性がないわけではないらしい。

「としとった」は、

○「……よろづのもの、永久とこほにしらう、御ちちよ。」といふ讚美歌を、年取つた婦人のオルガンにつれて唄ひ出した。まつ子の声はやはり熱を帯びて高くひびいてゐた。(冬の宿 42)

○駅には、高原療養所の印のついた法被を着た、年とつた、小使が一人、私達を迎へに来てゐた。(風立ちぬ 91)

のように人間に使われるほかに、「としとった馬」「としとった犬」など、動物にも使われることがあると思われるが、資料内の用例はない。動物の中のどんな範囲に使われるか、不明である。ほかに、樹木について使われた次の1例がある。樹木については「樹齢」ということばもあり、また「老樹」「老杉」のような語もあることが思い合はされる。

○この円覚寺の境内は、年とつた杉の大木が多い。(帰郷 123)

「おいた」は「としとった」に相当するが、文章語的である。

○老いた行商は、岩の日かげに荷をひらいた。女たちは口にいろんなものを頬張りながら、荷のまはりに人垣を作つた。(潮騒 126)

のように人間に使われるほかに、馬に使われた例がある。

○ヨアキンは数週間後に手に入れた老いた牝馬に鞍をつけた。(トルーストリー 1956年5月 132)

また、樹木について使われた例がある。

○その老いた幹には、大きな枝の脇の下に寄生木が生えて居た。(田圃の憂鬱 13) 日光について使われた次の例は、擬人化された比喩的な表現であるといえよう。

○うつとりした眼をあげ、閃きのない老いた午後の日光の遊んでゐる白い天井や小枝模様の渋い壁紙の上を眺める——考へる。(伸子・上 28)

「としおいた」も「おいた」と、主体に関して似たような事情であろう。

○年老いたアメリカ兵は、みすばらしい恰好の弓削を何と思ったか、ポケットからチョコレートバーを一本とり出して呉れた。(改造 1953年8月 256)

のような本来の人間についての例のほか、

○自分と同じく年老いたこのアカシヤの木が、いつか心の友達となり、木と自分との間に、いのちのつながりがあるやうにさへ感じられて来たのである。(帰郷 313)

という例がある。これは樹木について使われているが、樹木を自分と一体のもののように感じて表現している。

しかし、

○角櫓の白壁と高い石垣と**年老**いてくねった松の幾株とは、数百年のむかしのおもかげを今に残している。(人間の壁・上 64)

は樹木を人間に見立てるような文脈の中ではないが、「としおいた」が使われている。

○その**年老**いた鐘状火山の山容は、レイテの敗兵にとつて、「歓喜」よりは「恐怖」をもつて形容されるに、ふさはしかつた。(野火 106~107)

は火山について使われた例である。火山は噴火活動をし、活火山・休火山・死火山という3分類もあって、生命あるもののように見立てられやすい点があるのかもしれない。

[13] 主体(人・動物/もの)

たくましい <がんじょうな

「たくましい」は人や動物のからだがつよく丈夫にできていることを表わす。

○出てみると、制服をきたこの地区の警官と、黒い背広をきた遅い刑事とが、高のこをまつ子にきいてゐるのであつた。(冬の宿 144)

○塩田の店先でみた神さんのやうに遅い酌婦だつた。(冬の宿 67)

○それに比べると、種牛は体格も大きく、骨組も偉しく、黒毛艶々として美しい雑種。(破戒 146)

また、からだのある部分についても使われる。

○そのあひだ少女は子供つぽく、若者の遅ましい肩に手をかけてじつとしてゐた。(潮騒 48)

○鉄工場の見透しになつた盛んな炉と、灼けた真赤な鉄板と、火花と、荒いぶつ切るやうな金槌の音と、振りあげた遅ましい腕。(真知子・前 58)

○闘犬の子で遅い足と、太い牙とを持つてゐるフラテは、或る夜自分の鎖を真中から食切つて、(田園の憂鬱 61)

「がんじょうな」も人や動物のからだやその部分について、似た意味で使われる。(動物についての例は資料内にはないが、「或る女」の例は「馬のやうに」と動物のからだにたとえたものである。ちなみに、語史的には「がんじょう」は本来は馬について言った語であるという。)

○而してその一方では縁もゆかりもない馬のやうに唯頑丈な一人の男が何んでかう思ひ出されるのだらうと思つてゐた。(或る女・前 108)

○身体の外観が精神の状態と必ずしも一致しないことは、一見極めて頑丈な人間が甚だ感傷的である場合が存在することによって知られる。(人生論ノート 109)

○四ヶ月も、五ヶ月も不自然に、この頑丈な男達が「女」から離されてゐた。(蟹工船 49)

○階子段を降りる時でも、眼の先きに見える頑丈な広い肩から一種の不安が抜け出て

来て葉子に逼る事はもうなかつた。(或る女・前 186)

「がんじょうな」は人や動物以外の物体にも使われる点で「たくましい」と異なっている。たとえば、樹木、建造物、その他について使われた次のような例がある。

- 大きな自然石、その間に巖丈な松の大木、そしてところどころに碑文、和歌、俳句などを彫りつけた石が建っている。(暗夜行路・前 157)
- 彼はできるだけ正確な言葉を採り上げる。ちょうど、建築家が、美しい頑丈な建築を造ろうと、最も重い堅い石を喜んで採り上げるように。(私の人生観 135)
- その辺一带頑丈な茶色の檜の円柱や鏡板がつやつやと灯の下で光つてゐるのが、伸子に快適な感銘を与へた。(伸子・上 12)
- 勿論、平さんの姿は、もう見えなかったが、家の中は、大地震の跡のような乱脈さで、額は飛び、本箱は倒れ、ミシンは、鋳物の巖丈な脚が折れたまま、ひっくり返っていた。(自由学校 275)
- 緒い短靴で、先生ができるだけ頑丈に造らせたものだが、あんまり頑丈にできがってしまったので、履かずに取って置いたという説明付きで僕は戴いた。(私の人生観 25)

以上のような主体の観点からの相違と関係が深いと思われるが、「がんじょうな」は物理的なかたさ、堅牢さに重点のあるばあいが多いのに対して、「たくましい」は内からの生命力が旺盛な結果としての力強さ、がっちりした感じという意味合いがある。

なお、「たくましい」がからだではなく、活動性とか精神など抽象的なものごとについて使われる次のようなばあいは除外して考えた。

- 無言の中にも地球は傾き、大自然は逞ましい活動を続けているのである。(未知の星を求めて 332)
- 科学はたくましく、センチメンタルな非合理主義神秘主義を吹きはらって巨人のごとく前進し続ける。(革命期における恩催の基準 140)
- プロレタリアの娘は、そういうことを考えないが、根がよい家に育って、自分のたくましい生活能力を発見したのも、最近であるから、意識も鮮明なのである。(自由学校 17)
- 次に軽宅した家を、すっかり自分の空気で埋めよう、私は気持が大きく逞ましくなり仕事を計画的に進めてゆくださう、私は下らぬ反撥に自分を縛りつけなくてもよい。(くれない 81)
- 渠は其の頃此の女に逢ふのを其の日其の日の唯一の楽しみとして、其の女に就いていろいろな空想を逞うした。(蒲団 8)

[14] 次元(1, 2次元)

ふとい、ほそい

- 「ふとい」「ほそい」が3次元の延長をもつ物体に使われた例をすこしあげてみよう。
- コルセットで締めつけられた、太い胴が息がつまるほど苦しかった。(あらくれ 227)
- 垣根の真中から不意に生ひ出して来た野生の藤蔓が人間の拇指よりももつと太い蔓になつて、(田園の憂鬱 23)
- 明子の黒い太い髪の毛は、その夜、銀色の大鉄でざりッ、ざりッと断ち切られていた。(くれない 83)
- 見れば木立も枯れ枯れ、細く長く垂れ下る枝と枝とは左右に込合つて、思ひ思ひに延びて、いかにも初冬の風趣はつふゆ ねもむきを顕して居た。(破戒 163)
- 毛よりも細い麻糸は天然の雪の湿気がないとあつかひにくく、陰冷の季節がよいのださうで、寒中に織つた麻が暑中に着て肌に涼しいのは陰陽の自然だといふ言ひ方を昔の人はしてゐる。(雪国 152)

上の諸例からもわかるように、「ふとい—ほそい」は、細長い物体の、最大の延長をもつ辺に対して直角の断面の、さしわたし、すなわち1次元の量が大きい小さいかを表わすものとみることができる。

- 伐木してすぐ運搬すると重いから、山林で種菌の接種を行ない、二年目になってから適当な所に運搬するとよい。ホダ木の太さは直径五〜二寸程度のものが適当。(農耕と園芸 1956年1月 47)

の例では「ふとさ」が長さの単位で、すなわち1次元の量で表わされている。国語辞典では「ふとい」「ほそい」を「まわりが大きい」「まわりが小さい」のように説明しているものが多い。「まわりが大きい(小さい)」ということはそれ自体、長さの問題であり、また、「ふとい」ものまわりの長さはさしわたしや一辺の長さにつれて増減するから、いずれにしても、1次元の量の問題である。

ただし、「ふとい」「ほそい」が適用される物体の断面は、たて・よこの長さがあまり変わらない、円形や四角などに限られている。「あつい」「うすい」が物体の最小の辺の長さに関係しないのと違って、「ふとい」「ほそい」の表わす断面のさしわたし(ないし、まわりの長さ)は、断面の面積と平行的に増減する。そして、「ふとい」「ほそい」は、断面の面積すなわち2次元の量を表わすともいえることになる。

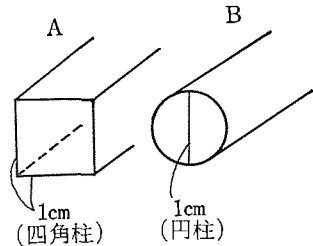
「ふとい」「ほそい」は、長い形をした2次元のものの幅の大小、すなわち1次元の量を表わすこともある。

- 彼は失恋し、そして芸術を得た。「以技芸天為我妻」彼は自分の室の襖にかう太く書いた。(青銅の基督 58)
- 三カ月は十一月と同水準に停滞し、復活祭の近づく三月に一ポイントだけ上昇するとみても(グラフの太い点線の部分)、(エコノミスト 1956年1月14日 9)

○細いタテ縞はきものにするると洒落た街着になるし、(婦人倶楽部 1956年1月 374)
襖に書かれた字、グラフの点線、布のたてじま、は厚みは普通問題にされない、2次元
のものと考えられる。

○ポケットなどに細く綴じつかけたり、又は四耗巾位に細く切り、綴針に通して巻きか
ざるのも面白い使い方です。(婦人生活 1956年10月付録 新型あみもの大全集 131)
は皮を縁飾りに使うことについて述べている。皮は「あつい(うすい)皮」と言うこと
があり、3次元のものであるが、ここで「細く」と言っているのは「四耗巾位に」とい
う1次元の量だけを問題にした表現である可能性がある。もしそうだとすれば、「ほそ
い」(おそらく「ふとい」も)は、3次元のものについても、厚みを問題にせず幅だけ
を問題にした、1次元の量の表現でもあり得ることになる。

(付1) 国広氏の70ページの<注>にあげた論文は、「ふとい棒」と「ふとい線」の関
係について、服部四郎博士の意見にもとづき、次のように述べている。「ふとい」「ほ
そい」は、長いものについて、その中心線の方向と直角の距離が標準値より大きい(小
さい)ことを表わし、そのものが立体的であるか平面的であるかは無関係であると。こ
の意見にしたがえば、「ふとい」「ほそい」が適用されるものが3次元であるか2次元
であるか、表現するものが2次元の量か1次元の量かは、語の意味にとって本質的なこ
とではないということになるであろうか。



(付2) 「ふとい」「ほそい」が、柱のような3次元の物体について使われたらばあい、その断面の1次元の量を表わすとも、2次元の量を表わすともみられる、と本文の中で仮定した。この点に関して、小調査2の中に次のような項目をもうけた。

次の3つの文について、正しければ○、正しくなければ×をつけください。

	○	×	(無答)
(イ) AはBよりふとい	{(男) 24 (女) 29 (計) (53)}	{32 22 (54)}	{— 1 (1)}
(ロ) AとBはおなじふとさだ	{(男) 20 (女) 17 (計) (37)}	{36 34 (70)}	{— 1 (1)}
(ハ) BはAよりふとい	{(男) 4 (女) 2 (計) (6)}	{52 49 (101)}	{— 1 (1)}

(イ)(ロ)(ハ)を関係づけず、個別的な数字だけを上に示した。(イ)を正しいとするのは「ふ
とい」を面積の表現とし、(ロ)を正しいとするのは「ふとい」を長さ(さしわたし、ある
いは1辺)の表現とするものと仮定しよう。男女合わせると、(イ)は○と×とが相半ば
し、(ロ)は×が○の2倍近くになった。したがって、「ふとい」が2次元の量を表わすと

いう前提に立った答えのほうが相対的には優勢だったことになる。しかし、少数派であったとはいうものの、「ふとい」が1次元の量を表わすという受け取りかたもたしかに存在したということはいえる。

[15] 次元(2, 3次元)

あらい, こまかい・な

「あらい」「こまかい」は、絶対的な大きさにおいてかなり小さいものについて言うが、次の例のように3次元の量について表現する。

- 塩少々をふり込んで胡麻塩を作っておき、干物の魚一尾を焼いて、荒くほぐしておきます。(婦人倶楽部 1956年4月付録 おすしとお弁当料理 64)
- 中に薄黒く光る粗い結晶は、彼等人類の生存にとつても、私の生存にとつても、甚だ貴重なものであった。塩であった。(野火 85)
- 玉ねぎは皮をむき四つぐらいに切って、塩を加え、やわらかくなるまでゆでて、こまかくきざんでおきます。(暮らしの手帖33号 1956年 157)
- 何でもそのときは雨がふっていた。こまかい雨で、安吉は傘なしにあるいていた。(むらぎも 36)

また、「あらい」「こまかい」は、次の例のように、2次元の量を表現することもある。

- 賭事の店先に立つて見てみると、葉氏の屋敷に下働きに通つて来る若い男が坐り込んで熱心に賭けてゐた。これは、荒い碁盤目にいろいろの数字を書いた木の板を各自が前に置いてゐて、(帰郷 66)
- ピンクの無地の紋縮緬、紋羽二重、疋田縮緬、訪問着や外出着には絵羽模様や友禅小紋などの細かい柄が向きます。(主婦と生活 1956年11月付録 71~72)
- 洋紙にペンで書いた細かい文字が、何を書いてあるのかお花にはよくも解らなかつたが、(あらくれ 28)

以上にあげた例では2次元であるか、3次元であるかが、比較的に考えやすかった。しかし、

○たいていの家の屋根は細かい板で葺いて、上に石が置き並べてある。(雪国 48)
 では、板の面積の表現と考えると、厚みまで含めた体積と考えると矛盾が起こらず、一方に断定することがむずかしい。

[16] 次元(1, 2, 3次元)

おおきい・な, ちいさい・な

「おおきい」「ちいさい」は体積や面積だけでなく、長さを表わすこともあって、1, 2, 3次元のすべての量に関係する。ものが空間を占めている量が大(小)であることを表わす、もっとも一般的・包括的な語だといえよう。「ながい針」「ひくい煙突」

「ひろい庭」「こまかい粒」などが、「おおきい針」「ちいさい煙突」「おおきい庭」「ちいさい粒」のように「おおきい」「ちいさい」におきかえ得ることもある。

「おおきい」「ちいさい」が3次元の量を表わしている例はあげるまでもないであろうが、念のために1, 2あげておこう。

- 子供の頭ぐらいの**大きい**綿菓子を私はそっと抱いた。(放浪記 288)
- ブレーキ・ライニングが狭い、トランクの内のスペースが**小さ**すぎることに、(ポピュラーサイエンス 1956年4, 5月 93)
- 「おおきい」「ちいさい」は2次元の量、すなわち面積を表わしていることもある。
- 大きな**畑だけれど、十月の半過ぎでは、茄子もちらほらしかなくて居ない。(野菊の墓 14)
- 薄暗い電燈の下に立つて行つて、シャツから虱を取つてゐるのもゐた。電燈を横切る度に、**大きな**影がペンキを塗つた、煤けたサイドに斜めにうつつた。(蟹工船 83)
- 而して道を開いて、衣囊から「日本郵船会社絵島丸事務長勲六等倉地三吉」と書いた**大きな**名刺を出して葉子に渡しながら、(或る女・前 92)
- 皮で本当にいゝのは一尺四方を一坪として、十坪、十二坪くらいが**慣**の皮で非常にきめが細かい。十七、八坪から四十坪くらい**の大きな**皮もありますが、耐久では変らないが、荒いんですね。(婦人生活 1956年5月 364)
- 叢を分けて、低い崖を背に、**小さな**空地へ出た。(野火 148)
- 六畳の隅に**小さい**蒲団を敷き、炬燵をかかえて、うめ女は枕屏風で囲われた。(厭がらせの年齢 280)

上の例の中で、畑・影・空地は「あつい」「うすい」と言われることのない、2次元的なものである。名刺・皮・ふとんは厚みをもった3次元のものであるが、「おおきい」「ちいさい」が表わしているのは2次元の量である。

「おおきい」「ちいさい」は、数は少ないが、1次元の量を表わすとみられる例もある。たとえば、人の身長に関するばあいである。

- 僕等が故郷から出て来た頃、其頭にのつて居た**天神髷**は、最早銀杏返しになつて、背丈は小柄の僕より却つて**大きい**位。(思出の記・上 92)
- まあ、貴方は此地へ来てから、余程**大き**くなつたのねえ。今ちや私とは屹度一尺から違つてよ。(平凡 90)
- 「私は自分が**小さい**から、結婚するんだったら、**大きい**人と結婚するわ。」(放浪記 194)
- 君は何故其様**小さい**のだ、とからかふと、僕は頭上に压制政府を戴いて居るから**大き**くなるのだ、二十三年になると急に伸びるから今に見玉へ、と答へるのが癖であつた。(思出の記・上 120)

○背の小さい男で、浴衣のような格子ジマのシャツに黒いズボンをはいてる。(自由学校 121)

ただし、人のからだについて「おおきい」「ちいさい」というばあい、

○二年まえ、三年まえに教えた生徒たちが、みな見違えるほど大きくなり、しっかりした顔つきになって、めいめいの通信簿をもって、廊下にあふれていた。(人間の壁・上 11)

○お坊ちやま、さぞおみ大きくおなりで、お可愛らしいことだらう、なんて、始終ひとりで思ひ出して居りますのですよ(多情仏心・前 309)

○目玉のグリグリした小さい方が、ひとわたり四囲をみまわして大きい方につぶやくと、汽車は逆もどりしながら、横川の駅に近くなった。(放浪記 254~255)

○身体が小さくたつて、野呂間な露助に負けてたまるもんぢやない。(蟹工船 17)

のように、1次元の量を表わしているのか、横への広がりも含めた3次元の量を表わしているのか、決めにくい例の方がむしろ多い。上方への1次元の量、すなわち身長が大きくなれば、それだけ3次元の量も大きくなるわけだし、生長期には身長も横へのひろがりも大きくなるのが普通だから、特に文脈からはっきりと1次元の量だとわかることはむしろ少ないわけなのであろう。なお、「おおきい(ちいさい)人」「(こどもが)おおきくなる」などの言い方は年齢についての表現もあり、かなり多義的である。

樹木や建物についても、人体のばあいのように、「おおきい」「ちいさい」が上方への1次元の量を表現することがあるだろうか。樹木の例では

○一の倉庫には仁王様の風呂桶の様なのが一杯入つて居て、其倉の屋根から恐ろしく大きな榎樹がぬつと頭を出して、夏の頃になると蟬の声が死ながら雨の降る様であつた事や、(思出の記・上 9)

○この林の木は小さく幹は細かつた。(野火 21)

などは、高さについての1次元的な表現ではないかと思われるが、はっきりとはわからない。

○ひとりでに生えて大きくなつたらしい一本の桑の木が、こちらの生垣の中から覗いてゐるのであつた。(桑の実 73~74)

○一本の小さな松は、杉の下で赤く枯れて居た。(田圃の憂鬱 23)

などは、1次元の量とみても3次元の量とみても明らかな矛盾は起こらないだろう。

建て物について「おおきい」「ちいさい」と言われた例についても、上方への1次元の量の表現だとはっきり言える例は資料内になかった。「細いけれど大きい(高いの意)ビルディング」のような言い方があるかどうか、わからない。

○先生の宅を出て、椿の花の夥しくこぼれて腐つて居る裏口を出ぬくと、最早蜂歯の喧嘩の様な声が聞えて、頓て大きな茅葺の平屋があらはれた。何でも塾に建てたのではなく、百姓家を引直したのであらふ。(思出の記・上 54)

○僅に三室^よしかない小さな別荘で、間に合せの安普請^{やすはら}なのだが、病弱な子供を本位として造られてゐて、風通しも日当りもよかつた。(生まざりしならば 185)
 などは逆に1次元の量ではないということが、だいたい言えるだろう。

以上のほかになお、「おおきい」「ちいさい」が1次元の量の表現であるらしい例がわずかながら見られる。

○「あの大きな時計の大きな針がね、丁度あすこのところへ行つたら、汽車ぼつぽがピイつて出ますよ。」駅の時計を指しながら、行介は子供をあやした。(波 195)

○御自分でも気のつかれているように、あなたは仕事をして働きたくて働きたくてしかたのない方です。そのことは生命線から上向きのの小さい線がいくつも出ていることからわかります。(面白倶楽部 1956年11月 430)

生命線から出ている小さい線のばあい、3次元の量でないことはいうまでもないし、線のはばも問題になっていないとみられる。すなわち、このばあい「ちいさい」は「みじかい」におきかえられる。

1次元の量の表現に用いられる「おおきい」「ちいさい」は、身長などのばあいは「たかい」「ひくい」に相当する。もしこういう用法しかないとすれば、1次元の量を表わす「おおきい」「ちいさい」は上方への方向についてのみ使われるという制限をもつことになろう。しかし、いまみたように「ながい」「みじかい」に相当する例もあるので、方向性もっていないという結論になる。

(付) 国広氏の70ページの<注>にあげた論文では、「おおきい—ちいさい」は、「ふとい—ほそい」「ながい—みじかい」などの対よりも抽象度が高い、それらの他の形容詞との compatibility が高いと説明されている。そして、これら10語の関係を正六面体にあらわし、「ながい」「ふとい」「あつい」「ひろい」を4つの頂点とする平面によって「おおきい」をあらわしている。

(17) 次元(1・2・3次元)

ひろい、せまい

「ひろい」「せまい」は2次元の量を表わすことが多い。

○原は広く、目指す病院の屋根はなかなか近くならなかつた。(野火 24)

○三人は其の間を辛うじて抜けて、広いプラットホームに出た。(蒲団 81)

○彼は、勇を鼓して、扉のない門の中へ、入ってみた。地積は、案外に狭く、すぐ下は、崖になって、足のさきに、草が絡まった。(自由学校 153)

○国が狭い。それから、人間がだな、貧乏なんだ。(帰郷 336)

「蒲団」の、「広いプラットホーム」は、当時のプラットホームが今日のそれとは様子が違っていたかもしれないが、線路の地面よりは高くなっていて、立体的なものとも考えられるであろう。しかし「広い」で表わされているのは、体積ではなく人の歩く平

面の面積であることはいうまでもない。

「ひろい」「せまい」は1次元の量を表わすこともある。

○建一郎は先に立って、横手の入口から通りへ出た。区画整理をした広い通りをトラックやバスが走っていた。(人間の壁・上 254)

○時節はづれだけに、宿屋はがらんとしてゐた。広い梯子段を上つて、二階の隅の部屋の前まで行くと、女中は障子の外から内にいつた。(波 124)

○角の酒屋と薬屋の店についてゐる電燈が、通る人の顔も見分けられるほど隈なく狭い横町を照してゐる。(つゆのあとさき 72)

などは1次元の量か、2次元の量か、はっきりしない。「ひろいみち」などは道幅などの広さ、すなわち1次元の量の表現であるばあいが多いであろうが、道幅などが広くなれば当然面積も広くなるので2次元の量の表現である可能性も残る。しかし、道や階段の例でも、

○間道の幅は広いところで一間、狭いところで二三尺にも足りぬ。(落城 26)

○路地は人ひとりやつと通れる程狭いのに、(つゆのあとさき 13)

○ようやく千光寺へ登る石段へ出た。それは幅は狭いが、ずいぶん長い石段だった。(暗夜行路・前 155)

○事務室の人々に軽く挨拶して、こつこつと長い狭い階梯を登つて、さて其の室に入るのだが、(蒲団 6)

などは1次元の量である(とみてよいであろう)。次にあげる例も1次元の量を表わしている。

○広い門のうちから、垣根に囲はれた山がりの庭には、松や梅の古木の植わつた大きな鉢が、幾個となく置^{いくつ}駢^{なみ}べられてあつた。(あらくれ 33)

○その市街が巨人国のものになつた時に、彼自身の眼と眼との間の幅も一度に広くなつて——ちやうど巨人のものやうになつて、そのために眼界も一度に拡大されるやうな気のすることもある。(田園の憂鬱 90)

○間口は狭いが建物は細長く、奥行きが深い。(帰郷 20)

「ひろい」「せまい」は、さらに3次元の量を表わすこともある。(この点についてはふれていない辞典が多いようである。)部屋などについて「ひろい」「せまい」という時は

○「へえ、いらつしやいまし……」

と、型の如く揉手をして、「え、おひと方さんでいらつしやいますか」

「さうです、広いとは要りませんが、どこか静かな部屋があいてたら……」(多情仏心・前 300)

○彼は興奮から狭い六畳の間を、畳の下で根太板がかたかた音をたてるほどにむやみと歩き回ったりした。(暗路行路・前 165)

のように面積についての表現と見られるものが多い。しかし、面積が広ければ部屋全体の容積もそれに応じて広くなるのが普通だから、3次元の表現ともみられる例もある。

○しかしいま、現実には良人はいないのだ。部屋のなかかがらんと広くて、彼女はどこへ坐っていいのか解らないような気がした。(人間の壁・上 299)

○彼は狭い倉庫一杯にこもった煙草の煙にむせた。(真空地帯・上 34)

などはむしろ3次元の表現だろうと推測される。次にあげる諸例も3次元の量を表現していると考えられる。(比喩的な表現の中で使われている例もあるが。)

○私は籠を抜け出した小鳥の心をもつて、広い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした。(こゝろ 70)

○一息にうんと喫んだ煙草の煙を、若々しい肺の広さを思はせるやうな力強さで、ふうーと速くまで吐き出した。(多情仏心・前 154)

○中隊を出る時三日月であつた月は、次第に大きさと光を増して行つた。片側の嶺線からのぞき込むやうに現はれると、谷を蔽ふ狭い空をさつきと越え、反対側の嶺線に隠れた。(野火 47)

○雨のない朝であつた。様々の鳥が、あたりの樹々や、谷底の林の中から、忙しげな声をあげ、向うの丘との間の、狭い空間を、矢のやうに飛び交つてゐた。(野火 131)

○狭いすりガラスの箱の中にぼんやりととぼされている日暮れ前の灯りにはその欲望はどうすればよいか。(暗夜行路・前 111)

[18] 性質／位置

ながい、みじかい、うずたかい／(とおい、ちかい、はるかな) <たかい、ひくい、ふかい、あさい、こだかい

「たかい」以下の語は、もの自身のもつ量的な性質を表わすばあいも、そのものの空間的な位置を表わすばあいもある。位置も、そのものの性質だともいえようが、それ自身だけで言える性質ではなく、他のものとの距離関係においてはじめて言える性質である。たとえば「たかい」については

○けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろくさと拡がり、東西、百二十四度、南北は百十七度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない。(富岳百景 50)

は、山自身の性質を表わしている。ところが

○三ツ峠、海拔千七百米。御坂峠より、少し高い。(富岳百景 53)

は、三ツ峠の平均海水面からの距離についての表現である。「ひくい」「ふかい」「あさい」についても双方の例を1つずつあげてみよう。

(性質)

- 低い。裾のひろがつてゐる割に、低い。あれくらゐの裾を持つてゐる山ならば、少くとも、もう一・五倍、高くなければいけない。(富岳百景 50)
- あの凡ての山の峰を超え、千尋の深い海を通り抜け、星々のもっと向うまでも見えて来る。(音楽之友 1956年8月 79)
- 結局、組合活動の弱い学校の教師だけが犠牲にされてしまう。暴風雨のなかで、根の浅い木が吹き倒されるのと同じだった。(人間の壁・上 182)

(位置)

- 青い空には低い微かな雲が迷ふやうに消えて行つた。(桑の実 28)
- 船がなにかのことで深い海底に沈没してゆく。(冬の宿 200)
- それでようやく引けた水道なんだが、鉄管が浅いからすぐ凍るんだ……(主婦と生活 4月 260)

量的な性質は、その対象物の末端部、たとえば「低い山」ならば山の頂上、「深い海」ならば海底、に注目するとき、位置の表現に接近する。このような点で、性質と位置との関連があるのであろう。

このことを具体的に示すと思われる1例をあげてみよう。

- 買物がてら通りを歩いてゐる時など、ふと、高い高い塔の頂にヒラヒラはためいてゐる赤と緑の旗が目に残る。(伸子・上 106)

「高い高い」は「塔」にかかると見れば性質、「頂」にかかると見れば位置の表現になる。この場合どちらと見ることもできよう。そして、どちらと見るかによって全体の表現内容はそれほど変わらないと思われる。ということは、性質表現と位置表現との密接な関連にもとづくものであろう。

「こどかい」はふつう岡など土地の少し隆起したものの量的な性質を表現するものと考えられる。

- 僕の家といふは、松戸から二里許り下つて、矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上で矢張り矢切村と云つてゐる所。(野菊の墓 6)

のような例が多いが、次の例があった。

- 白萩らしい花が小高い山腹に咲き乱れて銀色に光つてゐるのを、島村はまた飽きずに眺めた。(雪国 86)

この例では、山が小高いのではなく、白萩らしい花の咲いている山腹の位置が「小高い」と表現されている。「(山の)こどかい所に登る」のような表現もありうるかもしれない。このように考えて「こどかい」も性質だけでなく位置も表現しうるものところでは認めておこう。

「とおい」「ちかい」「はるかな」はふつう原則として位置だけを表わす。

- 思い切って日本からもっとも遠い所、サンパウロ、人口二百五十万人、(中略)その

まだ見ぬ異郷にボクたちの夢はあやしくかきたてられた。(週刊東京 1956年11月 4)
 ○空いた座席を狙うための動揺である。誰も、舞台上に近い座席を、目指す。(自由学校 140)

○林が切れ広い野に出た。月は巨大な赤い歪形となつて、遙かな林の頂にかゝつてゐた。(野火 66)

サンパウロはアメリカからは「もっとも遠い所」ではない。「舞台上に近い座席」は「入口に遠い座席」であろう。「とおい」「ちかい」などは、あるものの、ある基準点からの距離、すなわち位置についての表現である。その基準点は上の例のように「～に(から)ちかい(とおい)」のような形で示されることも多い。なお、「たかい」「ひくい」「ふかい」「あさい」などが位置を示すばあい、基準点は地面、水面などであることが多いが、これらは自明であって表現されないのが普通である。これに反して、「とおい」「ちかい」などはいろいろなものが基準点になり得る。話し手の位置が基準点になるばあいは、「ここからとおい(ちかい)」などとわざわざ表現しないことが多い。他にも、文脈などにまかされることもあるが、基準点の表現されるばあいも少なくない。

「とおい」は、次にあげるような例のばあいに限って、例外的に性質を表わすと考えられる。

○古い時間表をめくってみた。どっか遠い旅に出たいものだと思う。(放浪記 252)

○始めて遠い航海を試みる葉子にしては、それが不思議な位たやすい旅だつた。(或る女・前 98)

○離れて歩き出すと、道路はまた暗く静かとなつた。ひどく遠い道を歩いて来たやうな心持で、宿に帰つて自分の部屋に入つた。(帰郷 297)

すなわち、「旅」「航海」「道」など空間的な移動またはそれに関係のある名詞と結びついたときだけ、性質の表現になる可能性もっている。こういう「とおい」は「ながい」におきかえても文は一応成り立つ。

「とおい」に対する「ちかい」も、またあるいは「はるかな」も、同じような例外的な、性質の表現をするばあいがあると考えられる。次にあげるものはその例ではないかと思われる。

○林の入口で道は二つに分れてゐた。正面は丘を越えて真直に病院へ行く道、左は林の中に丘の鼻を廻つて、同じ谷間へ入る道である。丘越えの道が無論近いが、私は既に昨日から二度往復してその道に飽きてゐた。(野火 12)

○葉子は失はれた楽園を慕ひ望むイヴのやうに、静かに小さくうねる水の皺を見やりながら、遙かな海の上の旅路を思ひやつた。(或る女・前 185)

「或る女」の例は、「遙かな」が「旅路」にかかるのであれば当然性質の表現である。

「ながい」「みじかい」はものもつ量的な性質を表わし、位置を表わすということとはあり得ない。

○海と山とに挟まれて、東西に長い神戸の街は年と共に、その中心が東に移動して来た。(週刊サンケイ 1956年11月11日 22)

○品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見据える眼を眉のあたりに感じて徐ろにその方を見かへつた。(或る女・前 8)

「東西に長い」「短い」は「神戸の街」「トンネル」じしんの性質である。

「うずたかい」も、盛り上がったたり、積もったりして、高くなっている物じしんの量的な性質を表わし、位置を表わすことはない。

○前には^{うづたか}堆かつた松葉の束は、それぞれ持ち運んだあとと見えて片隅に四つ五つ残されてるばかりであつた。(潮騒 63)

[19] 基準面に対する角度(地面などに垂直)

たかい、ひくい、ふかい、あさいくながい、みじかい、とおい、ちかい、はるかな
これらの語は、いずれも一次元的な空間量を表わす点で共通している。これらの属性を、数値的に表現しようとするれば、いずれもメートル、尺、フィートなど長さの単位が使われる。

「たかい」「ひくい」「ふかい」「あさい」の、空間的な量を表わす用法のうち、まず「(鼻が) たかい、ひくい」「(横穴が) ふかい、あさい」のような用法は別にして考えてみよう。(あとでふれる。)例をあげるまでもなく、これらの語は、地面などを基準にして、それに対して垂直にのびる次元における量をあらわしている。

E. Leisi は、このような一定の方向における延長を条件とする語をベクトーリックと呼び、hoch (高い)、niedrig (低い、浅い) tief (深い) などは、地球の中心から放射状に出る線上における性質であって、steigen (登る) や sinken (沈む) と同じく固定した中心を持つベクトーリックに属すると述べている。

したがって、宇宙空間に出て、人間の体の位置や連動方向以外に方向に関する基準がなくなったばあい、「たかい」「ひくい」「ふかい」「あさい」は使いにくくなるだろうと想像される。他方、「ながい」「みじかい」「とおい」「ちかい」はそのようなことがないであろう。

さて、

○冬前に根が十分に地中深く伸び、養分の吸収がいつでもできるように、早く植えることがたいせつです。(家の光 1956年11月 188)

において、根は垂直に伸びるのではなからうが、ただ地面に近い土中を長くはいまわるだけでは「ふかく」とは言えず、伸びた結果が地面から垂直にみて長い距離に達することが「地中深く」と言い得るための必要な条件である。

○遙か右手の丘の上から煙が上り出した。中隊を出た日私を見た野火と同じく狼煙に似て、細く長くゆらめいて、高く上つた。(野火 71)

において、「高く上った」と言い得るためには、煙はまっすぐに上らなくてもよいが、地上から垂直の方向にはかつて大きい距離をもつことは必要である。横に低くたなびく煙はどんなに長くても「たかく」とは言い得ない。

したがって「たかい木」も、いったん切り倒されて横になってしまえば「たかい木」であることを失い、「ながい木」となる。また、

○結局、組合活動の弱い学校の教師だけが犠牲にされてしまう。暴風雨のなかで、根の浅い木が吹き倒されるのと同じだった。根の浅い弱い木を助けるために、植木屋の職人は木から木へ横木をわたして、数本の弱い木を一つに結びつける。(人間の壁・上 182)

は比喩の中での用例ではあるが、「根の浅い木」は倒れて根まで抜けたり、引き抜かれたりすれば「根の浅い木」ではなくなって、「根の短い木」などということになるであろう。

これに対して「ながい」「みじかい」は、水平とか垂直とかいう、万人に共通な、客観的な基準を持つ方向とは無関係である。「ながいつえ」は、立ててあっても、たおれていても、どんな方向に置かれていても「ながいつえ」であることに変わりがない。

固定した位置をもつものについては、

○安吉は彼女に案内されて廊下をあるいて行った。廊下は長かった。(むらぎも 41)

○法政大学院ビルは夜になると、ちょうど人間でいうと頭にあたるところに、鉢巻のように細く長く HOSEI UNIVERCITY GRADUATE SCHOOL という青い色のネオンがつく。(知性 1956年3月 34)

○趾には陸稲^{むかほ}や大豆がひよろひよろと青ばんだ畑に勘次の茄子は短い畝が五畝ばかりになつて立つて居た。(土・上 129)

○川鉄の千葉製鉄所は、それに鑑みて、工場の連絡をただし、整然たるものにした。

その結果、構内鉄道が、短くて済んだ。(ダイヤモンド 1956年9月4日 85)

のように、水平的な方向について使われることが多いようである。それは、煙突・樹木・塔などのように、ふつう固定して上方に伸びているようなものについては、「たかい」「ひくい」が使われるのが普通であって、「ながい」「みじかい」は使われにくいことと関係があると考えられる。したがって、「ながい—みじかい」も、「たかい—ひくい」を介して、客観的な方向性の影響を間接的に受けているといえよう。

もっとも、

○しばらくして彼は再び、長い長い石段を根気よくこつこつと町まで降りて行った。

(暗夜行路・前 157)

のようになめの方向に使われることもあるし、次にあげる例のように垂直的な方向でも、方向性を問題にせず、単に1次元の延長の量に注目するときは「ながい—みじかい」が使われ得る。煙突についても「たかい煙突」と言うのが普通であるが、「ながい

煙突」という結びつきもあり得るとは思われる。

○又、庭の別の一角では、梅の新らしい枝が直立して長く高く、譬へば天を刺貫かうとする檜のやうに突立つて居るのであつた。(田園の憂鬱 23)

○樞や雑木の間に短い竹が交つて居る。(土・上 16)

「とおい」「ちかい」「はるかな」も同様に万人に共通な方向性とは無関係である。

○遠くつゞく河原は一面の白い大海を見るやうで、蘆荻あしだきも、楊柳も、すべて深く隠れて了つた。(破戒 284~285)

○二人がカウンターに凭りかかかって、そんなことを喋り合っているところへ、突然戸口に近いテーブルにいた朋輩が、(週刊東京 1956年9月8日 40)

○遙か水平線の彼方に、あたかもその後に艦隊を誘導しているかの様に思われる小型船舶の影を認めた。(文芸春秋 1953年8月 146)

のように地表や海面や床にそっての水平的にみた距離に使われることが多いという傾向はあるかもしれない。しかし、

○その時、また赤石峠に赤い打揚げの火の手が上がった。陸奥は眼で遠いその空の、瞬間に消えてゆく赤い火花をみつめた。(落城 37)

○その初冬は、浅股の断崖を降りると、北股川の流れを渡って白髭岳(一三七八・五メートル)の頂上に近い南向きの斜面へ登った。(面白倶楽部 1956年10月 100)

○街道はかすかな勾配で次第に仙人沼畔にかかかって行った。いつか黒々した刈田の盆地がはるか眼の下にあった。(落城 20)

のように、それ以外の方向にも自由に使われる。

「たかい」「ひくい」「ふかい」「あさい」の方向性についてはじめに述べたのは、それらの語の空間的な量を表わす用法のすべてについて言えることではない。上の説明がそのままにはあてはまらない用法について、以下にすこし考えてみることにしよう。

1. 「ふかい」「あさい」には、重力の働いている方向を含む平面が基準になって、それと垂直の方向での量を表わす用法がある。

○間口は狭いが建物は細長く、奥行きが深い。(帰郷 20)

は、建物の入口に、建物に正面して直立している人の体の方向を含む平面が基準になって、そこから垂直の方向に建物の奥行をはかった量の表現だとも考えることができる。すなわち、「ふかい根」「あさい井戸」などのばあいと比べると90度の差をもつ、水平的な方向について表現している。

○日本の鉄道の沿線で見馴れた谷であつた。車窓に近く連つた丘並が切れて、道もない小さな谷が、深く嵌入してゐる。(野火 136)

○そしてそれとはおよそ不調和に、文晁ぶんちようとした、よごれ切つた横物の山水さんすいが浅い置き床に掛けてあつた。(暗夜行路・前 30)

○レイテ西海岸の平野は浅く、我々は海岸と四軒と離れてゐなかつた。(野火 43)

○からだの小さいよぼつきかけた年配の男が、店さきへ腰を浅くかけて、(むらぎも 201)

なども、同様に水平的な方向での量を表わしている。また、

○大名が通つた頃からであらうと思はれる、古風な作りの家が多い。廂が深い。(雪国 105)

○軒の浅い割合に天井の高いと、外部に雪がこひのして有るのとで、何となく家の内が薄暗く見える。(破戒 243)

においては、廂や軒は水平ではないであろう。

○幾日の月であるか、円いけれども下の方が半分だけ淡くかすれて消え失せさうになつて居た。併し、上半は、黒雲と黒雲との間の深い空の中底に、研ぎすましたやうに冴え冴えとして、くつきりと浮び出して居た。(田園の憂鬱 106)

では、「黒雲と黒雲との間」に向き合った気持で、その平面から奥までの距離を「ふかい」と言い表わしたものであろうか。このようにみると、人が何かに向き合ったときに構成される平面や、ある物の入口のような所に考えられる平面や、ひさしのようなものの先端が構成する線などが基準になって、それと垂直の方向にみた量が「ふかい」「あさい」で表現されるものと考えられる。

「たかい」「ひくい」には、このような「ふかい」「あさい」にちょうど相当する用法はないようである。

2. 1に扱ったのは、水平の面を基準としてそれと垂直の方向にみた量とはいえない用法であった。しかし、一定の方向における量ではあった。こんどは、物が固定しているものではないために、外界との関係では一定した方向をもっているとはいえない用法について考えてみよう。

○白い夏の女唐服に、水色のリボンの捲かれた深い麦稈帽子を冠つて、(あらくれ 227)は帽子の入口が構成する円い平面から垂直に頭のとっぺんがはいる部分までの延長が大きいことを表現している。

○真知子は深い鏝の下で急に眼を大きくした。(真知子・前 161)は、帽子のつばの先端からつばのつけ根までの延長が大きいことである。これらは、基準となる面などと、表現されている量の方向との、相対的な関係は一定しているが、その物自体が固定的なものでなく、自由に移動させられるものであるために、外界との関係でいえば、一定の方向を持っているとはいえない。すなわち、「ふかい」の方向性が物の中に移動して、物自身の性質の表現のようになっている。「あさい」の次の例も同様である。

○板の儘ばらばらに成つて居る棺台は買つて来てから近所の手で釘付にされた。其処には浅い箱の倒にしたものが出来た。(土・上 55)

○商人はいひながら浅い目箆へ卵を入れて萌黄の紐のたどりを持つて秤の棹を目八分に
にして、(土・上 42)

また、

○大山十吉の顔は革のやうである。その深い皺の奥までが、同じ黒さに日に焼けて、
革の光沢を放つてゐる。(潮騒 102)

のような「ふかい」も、しわの入口の構成する線ない面とその基準からしわの奥までの
方向との相対的な関係は一定であるが、顔ぜんたいが自由に動くものであるから、上と
同様に考えていいであろう。

○女の疵は、肩先四五。…… 疵としては浅かった。(講談倶楽部 1956年12月 323)
のような、傷に言う「あさい」や「ふかい」も、本来は傷口から傷の奥までの延長であ
ろう。

「たかい」「ひくい」についても、上に「ふかい」「あさい」について述べたのに相
当するような用法がある。

まず、人体などから突き出している部分について使われる用法がある。そのうち、鼻
について用いられた「たかい」「ひくい」の例をまず見よう。

○すると安吉の頭に、内垣のいった「叛乱」にむすびついて伊集院の鼻の高い顔が浮
かんできた。(むらさぎも 17)

○彼は駿が成人した時の顔を想像して見た。しかし低い鼻、薄い眉毛、丸まつちい顔
がどう成長しても、今、鏡の中に写つてゐる自分の顔に近づくとは思へなかつた。

(波 176)

○後家の後に引添ふた色赤黒く鼻低く顛張つて最早口髭のぼつぼつ生へ出した屈強の
青年を見て、(思出の記・上 128)

このばあい、顔の面が基準になって、そこから垂直に突き出ている長さについて「た
かい」「ひくい」と言われていると考えられる。

○小窓のガラス越しに、高杉未亡人の頬骨の高い顔が、笑っている。(自由学校 316)

○頭は上の方が平らで、額が高く、ふさふさとした頭髪は眼のところまでたれさがっ
ている。(世界 1956年6月 200)

も顔面が基準になっているといえよう。

以上のような、体の突き出した部分についての「たかい」「ひくい」は、基準面と表
現されている方向との相対的な関係は一定であるが、体全体が移動するものであるから、
外界における客観的な方向性は失って、鼻など自身の量的な性質の表現になっている
と考えられる。

以上、体の突き出した部分についての「たかい」「ひくい」は一応基準の面を考える
ことができた。次には、基準の面ということも具体的には考えにくくなり、その物の正
常な位置における下端から上端までの延長についての「たかい」「ひくい」が、物自身

の性質の表現のようにになっているばあいを考えてみよう。たとえば、

○水を打つた如き式場の中央に藁箆を敷き、その上に低い台を置き、更にその上に、踏絵は置かれてあつた。(青銅の基督 115)

の「低い台」はわらむしろの上に置かれても、床からの高さはほとんど変りがない。しかし、かりに高い机の上に置かれたとしても、「低い台」が「高い台」に変わらないであろう。すなわち、このばあい「ひくい」は床からの高さではなく、台自身の性質の表現になっている。従って、その台が横倒しになつたとしても「低い台」と言えるだろう。

○河原田は日本座敷へ二人をあげた。(中略)一ころ民本主義で鳴らした主人が着物で出てきて大きな低い机の向うに坐つた。(むらぎも 166)

の「低い机」にしてもほぼ同様で、畳から机の上までの高さと考えないで、机の足の下端から机の上までの高さと考えれば、机自身の量的な性質となる。そして机の正常な位置でなく、ひっくり返されたり、ななめになつたり、空中につるされたりしても、依然として「低い机」と言えるであろう。さらに「たかい(ひくい)木」などでさえ、地面からこずえまでと考えないで、根元からこずえまでと考え、木自身の性質とみることも可能であろう。こういう可能性が、可動的な物の場合には現実化され、客観的な方向性は潜在化されるものと考えられる。

○そして小さいしなやかな足に、踵の高い靴をはくと、自然に軽く手足に弾力が出て来て、前へはずむやうであつた。(あらくれ 230)

も同様で、人が靴をはいた正常な状態では、「高い」の表わす方向は地面と垂直の方向であろうが、ころがった状態にあつても「かかとの高い靴」と言える。

3. さらに方向性が潜在的になつた用法として、「せいがたかい(ひくい)」のようなものが考えられる。人の体について用いられた「たかい」でも、

○片手を腰にあてて、テーブルの高さだけ高くなつたため、額から上を電燈の直接照射から上へ外ずして立つた大兵肥満の姿。(むらぎも 103)

では、床という基準からの延長を問題にしており、人体自身の性質ではない。

○草を敷かんばかりに低くうづくまつて、華やかな色合のパラソルに日をよけながら、黙つて思ひに耽ける一人の女(或る女・前 100)

の低くうづくまつた女性は、せいの高い女性であってもよい。

○男だけあつて、列んで歩くと、彼女より二寸も高い彼が、(自由学校 58)

のような例でも、地面から垂直にみた延長という、本来の方向性を保っている。しかし、人が直立した状態ではなく、横にねていても、うづくまつていても、しゃがんでいても、「あの人はせがたかい(ひくい)」とか「せいのたかい人がながくねそべている」などと言える。身長という、人体の量的な性質の表現になっている。(この意味では「あの人はたかい」と言わず、「あの人はせいがたかい」のような形式をとることが圧倒的に多いようである。)しかし、体をのばして直立したばあいには、地面などから

垂直にみて大きい延長をもつ、という意味では、本来の方向性をもつ「たかい」と連絡が保たれていると考えられる。

(付) この項目の終りのほうの、方向性の潜在化は、宮島達夫氏から談話によって教えられた。

[20] 基準面に対する向き(上向き/下向き)

たかい、ひくい、こだかい、うずたかい/ふかい、あさい

これらの語は、基本的な用法に関しては、基準となる水平面に対して垂直な次元における、一次元の量を表わす点で共通性がある。「たかい—ひくい」「こだかい」「うずたかい」は、その垂直線の、基準となる面から上向きに存在する性質であり、「ふかい—あさい」は垂直線上の、基準面から下向きに存在する性質である。このことは特に用例をあげるまでもなく、「たかい(ひくい) たてももの」「こだかい丘」「うずたかくつもった木の葉」「ふかい(あさい) 井戸」のようなごく普通の使われかたにおいて見られる。

○この小住宅の混みあつた一廓の行き詰りのところに、かなり高い崖があつてその上には大きな邸宅が並んでゐた。(冬の宿 151)

では、がけの下に基準面が考えられ、がけはそこから上向きに見られたために「たかいがけ」と表現されている。しかし、

○彼女が掻き登つたといふ熊笹は通れさうもないので、畑沿ひに水音の方へ下りて行くと、川岸は深い崖になつてゐて、栗の木の上から子供の声が聞えた。(雪国 112)
では川岸に基準がおかれ、そこから下向きに見られたので「ふかいがけ」と表現されている。

ラテン語の *altus* は、垂直の次元における延長の大きいことを意味し、上向きと下向きの区別はせず、したがって「たかい」と「ふかい」の双方に対応する。また、ドイツ語の *niedrig* も、上向きにも(「低い」の意で)下向きにも(水について「浅い」の意で)使われる。上向きと下向きとを「たかい」と「ふかい」のように区別して表わすか、ラテン語などのように、向きは任意的なものとして区別せずに表わすかは、相対的な問題であり、言語体系によってちがっているのだ。

〈注〉 E. Leisi (鈴木孝夫訳) 『意味と構造』135ページ

これらの語と同じく1次元の量を表わすが方向性を持たない「ながい—みじかい」「とおい—ちかい」によって、これらの語の意味を表わすとすれば、

たかい——上方にながい(とおい)

ひくい——上方にみじかい(ちかい)

ふかい——下方にながい(とおい)

あさい——下方にみじかい(ふかい)

のように一応表わすことができよう。

「たかい—ひくい」などと「ふかい—あさい」とを分かつ境界面になるものは何であろうか。まず、われわれの立脚している面、すなわち地面であるばあいが多い。山・たてももの・木・へいなどには「たかい—ひくい」が使われるのが普通であり、それらは地面が基準になった使われ方だと言えよう。

地面に関係する例のうちで「たかい（ひくい）山」「こたかい丘」などは、もりあがった部分の周辺の地面に基準をとって、そこから上方に見た、山や丘じしんの量の表現であることが多い。（海面を基準とした 海拔を問題にしていることもある。）谷については「ふかい—あさい」が使われるのが普通であるが、谷を構成する、周辺の高い上の方に基準がおかれ、そこから下向きにみて「ふかい」「あさい」と表現されるのであろう。谷のばあいは低いところのまわりの少なくとも二方は高くなっている。坂のような、一方から他方へだんだん低くなっている地形については、「たかい—ひくい」が使われ、「ふかい—あさい」は使われない。ということは、問題とする地点より下方に基準面が想定され、そこからの上向きの距離として地点の位置が表現されるのであろう。

地面以外のものが、基準になるばあいとしてはまず、水面がある。「ふかい（あさい）海（川・水など）」のばあいがそれであり、「波がたかい（ひくい）」もその例であらう。地面とも水面ともいえず、しいていえばその中間である泥の表面も基準になる。そして、下方の堅い地盤までが「ふかい—あさい」で表わされる。

○泥はますます深く、膝を越した。片足を高く抜き、重心のかゝつた他方の足が、もぐりさうになるのをこらへ、抜いた足で、泥の上面を掃くやうに、大きく外に弧を描いて前へ出す。（野火 113）

○彼等は雨を藁の蓑に避けて左手に持った苗を少しづつ取つて後退りに深い泥から股引の足を引き抜き引き抜き植ゑ退く。（土・土 197）

○泥はやゝ浅くなつてゐた。それからまた二足、殆んど腿まで深く入つて、次の足は棚のやうに高い、固い土盤に乗つた。（野火 115）

雪については「ふかい—あさい」が使われることが多い。

○彼等は少しでも金を作つて、故里の村に帰らう、さう思つて、津軽海峡を渡つて、雪の深い北海道へやつてきた（蟹工船 61）

のような例では、「ふかい」は積雪の具体的な深さの表現からはやや遠ざかっているかもしれない。しかし、

○それから私はよくお前と連れ立つて歩いたことのある森の中へも、まだかなり深い雪を分けながらはひつて行つて見た。（風立ちぬ 150）

○外は寒くて、しばらくのあひだに雪はすつかり深く積つてゐたし、風がときどき横ざまに強く吹き寄せてくるので、もう私でも歩き難かつた。（冬の宿 75）

のような例では、「ふかい」は空間的な量の表現である。そして、こういうばあい、積

もった雪の表面が基準になり、そこから下向きにみて「ふかい」と表現されるわけである。しかし、雪について、「たかい」の使われた例もある。

○往來の真中に堆高く掻集めた白い小山の^{つゞき}連接を見ると、今に家々の軒丈よりも高く降り積つて、これが^{なま}飯山名物の「雪山」と唄はれるかと、^{なごほひ}冬期の^{くるしみ}生活の苦痛を今更のやうに堪へがたく思出させる。(破戒 228)

○斯うなると、^{もつ}最早雪の捨てどころが無いので、往來の真中へ高く積上げて、雪の山を作る。(破戒 257)

前のほうの例は、雪を家々の軒の高さと比べているので、この点からも「ふかい」ではなく「たかい」が使われたのであろう。あとのほうの例は、人為的に雪を積み上げたばあいであり、あたり一面が一様に雪におおわれているばあいと違いがある。山のように積み上げられた雪のまわりの低いところに基準がおかれ、そこから上向きに「たかい」と表現されたのであろう。また、たてもものの中ではゆかやたたみが基準になって、その上にあるものに関して「たかい—ひくい」が使われる。

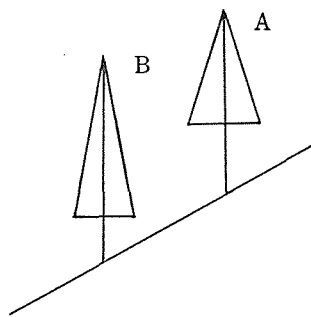
○右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があつた。(伸子・上 12)

○私は屑箱を台にすると、^{たかい}高いかもいのスイッチをひねつた。(放浪記 177)

○母の居間は手綺麗な四疊半になつてゐた。^{たかい}低い茶室好みの襦が二人の背後で閉まると、(伸子・上 135)

基準面に関連して、もう一つ考えておきたいことがある。

たとえば、右の図のような斜面に生えているA B二本の樹木を比較するばあい、「AはBよりたかい」「BはAよりひくい」と言うことができるであろう。このばあいは、Bのこずえよりは下の任意のところに水平面を考え、それを基準とする垂直上方への長さにおいて、AがBより大きいことを表わしていると説明することができる。これは外界の客観的な基準にもとづく用法だと考えられる。ところで同じ場面において、「BはAよりたかい」「AはBよりひくい」というこ



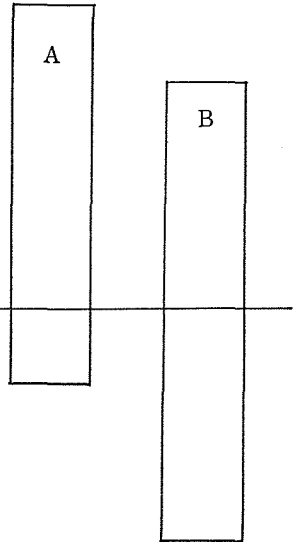
とも可能であろう。この場合は、A・Bそれぞれの木の、根もとからこずえまでの垂直方向での長さが比較されているわけで、AやB自身の量的な性質に関する表現になっている。そして、地球の重力の方向に対して直角に交わる同一の水平面という、客観的な基準は、AとBを包括する統一的な基準ではなくなっている。樹木のほかに、斜面に立つ2つの建て物についても同様なことが言えよう。

次に、同じ平面に立つ建て物で地階のある場合を考えてみよう。

次のページの図のようにAは地上4階・地下1階で、Bは地上3階・地下3階だと仮定する。そのばあい、「AはBよりたかい」「BはAよりひくい」と言う。これは同じ高

さの地面ないし水平面という、客観的な基準による用法である。同じ場面において、「BはAよりたかい」「AはBよりひくい」ということはおそらく不可能であろう。地面以下にかくれた部分を含めた、建て物自身の延長について「たかい—ひくい」を言う用法は成立していないと考えられる。

以上では「たかい—ひくい」「ふかい—あさい」について、主として、物の位置を表わす用法ではなくて、物自身の量的な性質を表わす用法について考えてきた。しかし、以上に述べてきたことは、物の位置を表わす用法についても大体言えることである。位置を表わす用法においては、基準面から実際に上向きまたは下向きに物が存在しなくてもよく、基準面から上向きまたは下向きに測られるという点が相違するわけである。



〔21〕 主体（数の多いもの）

こまかい・なくちいさい・な

「ちいさい」と「こまかい」の諸意味のうち、物体の占める空間的な量に関する意味を取り上げて比較してみよう。空間的な量において、「こまかい」は「ひじょうに小さい」に大体相当するという相違があることはいうまでもない。

上の相違のほかにも、「ちいさい」と「こまかい」を区別する重要な特徴は、問題とされている物体の数において、「ちいさい」は自由であるが、「こまかい」は多数であることを必要とする点である。

まず、「こまかい」の用例の中から、物体の種類別にみて、おもなものを1例ずつあげてみよう。

- ちやぶ台から畳の上まで細かい羽虫が一面に落ちて来た。（雪国 91）
- 熱くなると、居たたまらなくなつた風が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。（蟹工船 62）
- 樹は荻に似た楕円形の細かい葉をつけ、軒よりわづかに高かつた。（野火 52）
- その雪はやがて黒背盆地を白くうずめはじめた。待ちに待った根雪である。こまかい柔かな、そして重い雪であった。（落城 45）
- 彼はこれを件の紙袋の中へ入れて気の済むまで叩いた。出てきた細かい埃を検鏡すると、木の微細な繊維が現われて来た。（宝石 1956年4月 164）
- 風呂敷の中からは岸子の、見覚えのある細かい柄の縮の浴衣がのぞいていた。（く

れない 96)

○大和いもは目の細い卸し器ですり、(婦人生活 1956年11月 447)

これらは、多数の同類の物体などがひとしく非常に小さいことを意味しているとみられる。次のような例も、細分化する動作の結果が上のような状態になることを意味しており、上の諸例と同様に解せられる。

○肉の脂身の方を向側にして皿に盛り、じゃがいもとベーコンをつけ合せ、パセリを細かく刻んだものを上からふりかけて出します。(婦人生活 1956年8月付録 153)

物体の数ではなく、波・音・物の震動・運動など、現象的・動作的なものについても「こまかい」が使われることがある。次のような例がある。

○薄手の酒盃に泡を立て、盛られた黄金色の酒は葉子の手の中で細かい漣を立てた。(或る女・前 173)

○が、稚内に近くなるに従つて、雨が粒々になつて来、広い海の面が旗でもなびくやうに、うねりが出て来て、そして又それが細かくせはしくなつた。(蟹工船 19)

○雨が細かな音をたてて降っている。(放浪記 62)

○丘の下の海のひびきを反射して、たえず細かながたがたふるへてゐる硝子戸と、乳色の窓掛を透して、薄い光が、白い四方の壁を青白く濡らしてゐた。(冬の宿 158)

○彼は手をあげてみた。すぐ彼方でも応じた。宮本が大業に帽子を振ると、お茶もいっしょに日傘を細かく動かしていた。(暗夜行路・前 145)

○突然こまかな戦慄が未亡人の肩を伝わったと思うと、未亡人は何時の間にか手にしていた絹のハンカチで眼を押えた。(寶石 1956年11月 293)

これらも、1回の運動量などが小さいことに加えて、その回数が多いことが暗に意味されており、物体のばあいの「こまかい」の延長線上に位置づけ得るものである。

「こまかい」には以上のように、ものごとの数が多くなければならないという制限がある。これに反して「ちいさい」にはそういう条件がなく、数に関して自由であることはいうまでもない。「ちいさい」の用例の中から、「こまかい」に一応おきかえ可能とみられるものをすし拾ってあげてみよう。

○手紙は小さな字で詰めて書いてあった。(くれない 54)

○豆もあつた。灌木ほどの高さに育ち、鉞状の房が褐色に熟れてはじけ、小さな黒い粒を露出させてゐた。(野火 53)

○そのくせ、また小さな雪の粉がつめたい風に流されて横ざまに、酒に火照る頬に、ときどき散りかかった。(群像 1956年8月 80)

○魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせはしく行つたり来たりして、黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れてゐるのが見えるのでした。(銀河鉄道の夜 262)

○私は温らしく両手を机の上に出せて、灯の光りに眼を走らせていた。私の両の手先きが小さく、慄えている。(放浪記 63)

これらの「ちいさい」物などが、多数であるために、「こまかい」に一応おきかえられる可能性があるものと考えられる。大きさの点では相当に小さく、その条件においては「こまかい」におきかえられそうでも、多数の物ではないために「こまかい」におきかえられないとみられる例として次のようなものがある。「文芸」の「小さなほくろ」はたぶん1つ、少なくとも少数なので「こまかいほくろ」とはいえない。「そばかす」は多数がまだらにできることを条件とするので「こまかいそばかす」とは言うことが多い。

○右の脇にあの小さな黒子のある男——、それは戦争中彼を取調べた特高課所属の男だった。(文芸 1956年4月 244)

○それほど灸はどんなに小さいのでも彼らには耐え難いものなのである。(中央公論 1956年4月 173)

「こまかい」に対する上の規定と合わない例外として次のものがある。これは現代語の普通の用法とは見なさなくてもよいだろう。

○例の筒袖を着た儘^{まんま}で、勢よく飛むで出ると、直ぐ玄関口に大の男が立つて居た。新五だ、新五だ——彼様^{おん}な大きな鼻と細^{こまか}い眼^もを持つた男が外に何処にあらうぞ。(愚出の記・上 85)

[22] 主体(土地)

こどかい<たかい

「たかい」は高さにおいて、ある基準を越えれば制限なしに用いられ得て、上限がない。これに対して「こどかい」は高さの程度が著しい場合には使えないという制限があることはいうまでもない。富士山やエヴェレストは「たかい」と言えるが、「こどかい」とは言えない。これが2語を区別する基本的な相違点である。

「こどかい」を「たかい」から区別する、もう一つの重要な特徴がある。それは、「たかい」は属性の主体として広くいろいろなものを自由にとることができるのに対して、「こどかい」は、丘のような土地の隆起についてだけ使われるという制限があるという点である。「たかい木(建物・波・くつ)」などとは言うが、「こどかい木(建物・波・くつ)」などとは言えない。(この点を明白に説明している辞書はなかなか見当たらない。用例として「小高い丘」をあげている辞書は多いが。)資料内の「こどかい」の用例18のうち、8例は「丘」という名詞と結びついている。たとえば、

○一陣の風小高い丘を襲へば、幾千万の木の葉高く大空に舞ふて、小鳥の群かの如く遠く飛び去る。(武蔵野 12)

○岸子の家は街道に沿って海岸に面した小高い丘の上にあった。(くれない 10)

次の例はやはり「丘」と結びついた例であるが、乳房の描写の比喩として使われている。

○薔薇いろの蕾をもちあげてゐる小高い一雙の丘のあひだには、よく日に灼けた、しかも肌の繊細さと滑らかさと一脈の冷たさを失はない、早春の気を漂はせた谷間があつた。(潮騒 124)

次の例も女性の胸の隆起の描写で、土地の隆起を意味する「丘」ではなく、単に隆起一般を意味する「盛り」という名詞と「こだかい」が結びついている。しかし、上の例と同じ作品の中の例でもあり、やはり土地の隆起への比喩の延長線上にある用例とみて、例外としないでおく。

○ほとんど固い支へを隠してゐたかのやうなセエタアの小高い盛りりは、乱暴に叩かれて微妙に揺れた。(潮騒 29)

「こだかい」の他の例も、ほとんどすべて、土地の隆起について使われていることが明白なものである。たとえば、

○すると早くもわれわれの存在を知った象群がなにやらわれわれについて相談し始めたのが聞えてきたので、象を避けるためこっそりと土地の小高くなっている方へ移動することを決意した。(文芸春秋 1954年 6月 201)

○静けさが冷たい滴となつて落ちさうな杉林を抜けて、スキイ場の裾を線路伝ひに行くと、直ぐに墓場だつた。田の畦の小高い一角に、古びた石碑が十ばかりと地蔵が立つてゐるだけだつた。(雪国 115~116)

○やがて若葉に鎖ざされたやうに鬱鬱した小高い一構の下に細い路が開けた。(こゝろ 71)

次の例だけは土地の自然の隆起とはいえないが、土地の隆起に準ずるものに「こだかい」が使われている例とみて、例外とは考えないでおく。

○四方は小高く石垣を築き上げて、上には平石の間々に小石を敷つめ、苔だらけの五輪塔や定紋の桔梗を彫つた石碣が其処此処に立つて居る。(愚問の記・上 24~25)

[23] 主体(人体)

おおがらなくおおい、こがらなくちいさい

「おおがらな」「こがらな」は模様の大きさについて使われることもある。「おおがらな」の例は資料内に若干あった。

○興は、一座の若女形市川左喜松の鏡台だが、折から舞台とみえて、大柄な友染の座布団がその前にきちんと直してあり、(多情仏心・前 130)

○出て来た初江は、いつぞや行商人から買った白地に大柄の朝顔の浴衣を着てをり、その白地が夜目にも鮮やかだつたからである。(潮騒 157)

いま、この用法を別にして考えると、「おおがらな」「こがらな」は、からだの大きさについて用いられる。からだといっても人間のからだについて言うのが普通で、動物については資料内に次の「こがらな」の1例だけがあつた。

○朱鞆のやうな光沢のある、小柄の赤トンボがすいすいと彼の眼の前を飛んで行った。(波 345~346)

「こがらな」は次にあげる例では、身長すなわち1次元の量を表わしていると思われる。「おおがらな」については適切な例がないが、同様の用法があるであろう。

○鈴江君は僕と同年の早生れで、恰も十四。僕等が故郷から出て来た頃、其頭かしらにのつて居た天神髻ももは、最早銀杏返しになつて、背丈は小柄の僕より却つて大きい位。

(愚出の記・上 92)

○モウン・ノウは瘦せぎすで背は高く、モウン・インは小柄で肥っていた。(ニューエイジ 1953年8月 98)

しかし、次の例では1次元ではなく3次元の量を表わしているようである。

○何々爺らしい陽気さと、医者いしやの職業的な物柔らかさの混和した見本のやうな主人は、丈も幅も夫に負けない位大柄な、権のある顔をした、器量自慢の紋服の夫人とともに、庭の入口のテントに立つて客を迎へてゐた。(真知子・前 13)

○妹は五尺三寸で、骨組も太く、炭俵二俵分にも足りない小柄な祖母を運ぶにはうってつけであつた。何もそのためにわざわざ大柄に育つたわけではなかったが、まるでそのためのようように姉の目に映つたのは事実である。(厭がらせの年齢 268~269)

このように、1次元の量にも3次元の量にも使われる点は、からだについて言う「おおきい」「ちいさい」も同様である。この点の別なく、その例を少しあげておこう。これらの「おおきい」「ちいさい」は「おおがらな」「こがらな」におきかえることができる。しかし、からだ以外に広く使われる「おおきい」「ちいさい」はおきかえることができない。

○昔のスカートのように、いっぱいふくらんだ信玄袋を持った大きい女が、人混から押されて私の前に出て来た。(放浪記 260)

○登喜子は女としては、大きいほうだが、形と皮膚の美しい手をやはりそうしている。(暗夜行路・前 34)

○毛は小男だ。おれよりもずっと小さい。(むらぎも 134)

○ああみんなすぎてしまった事だのに、小さな男の後姿を見ていると、同じような夢を見ている錯覚がおこる。(放浪記 195)

「こがらな」は次の例のように、大人についてだけでなく、成長中のある年齢・段階を基準にとって使われることもある。「おおがらな」の適例はないが、同様であろう。

○五年にしては小柄だつた。(人間の壁・上 84) <「五年」は五年生の意。>

○その時、彼は十八歳だつたが、二十一歳と偽つて勤めたのである。それが規則だつたのだ。十八でも小柄な彼が三つも年を偽つたのだから、仲間たちから勤まるかいと言はれたのも当然であつた。(文芸春秋増刊 1954年4月 各界のスタア読本 53)

「おおがらな」「こがらな」は次の例のように、程度副詞がついたり、比較表現に使

われたりもする。

○姉に比べれば余程大柄だが、然しまづ、中肉中丈ちゆうぢゆうの身を起すと、部屋の隅に机を片よせてから、お澄は丁寧に小辞儀をして、(多情仏心・前 54)

○その、やや小柄で、あぐりとトントンぐらいの背の眼鏡をかけた学生が、(主婦と生活 1956年5月 311)

○私も小柄であるのに、光子はさらに私より小さかった。(解放 1953年7月 207)

「解放」の例の後半を、「光子はさらに私より小柄だった」とおきかえることはできるであろう。しかし、同じ事実については「私は小柄であるが、光子よりは大きかった」は言えるが「私は小柄であるが、光子よりは大柄であった」のような表現は不自然であろう。「おおきい」「ちいさい」ほど自由に、程度や比較の表現に使うことはできないであろう。

(付)「おおがらな一こがらな」は、大人だけでなく、小学生に使われた例もあって、本文中に引用した。しかし、もっと小さい幼児などには使われにくいのではないかと予想して、小調査1で、「小がらな赤ちゃん」という結びつきについての反応を求めてみた。

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
小がらな赤ちゃん	15	6	2	—
{女子大生 {女子高校生	34	10	7	—

その結果は上のようで、両グループとも、一部の人には抵抗感を起こさせたようである。

[24] 主体(人・動物/もの)

ふとった/ふとい

「ふとい」はさまざまな物体を主体として使われることはいうまでもない。資料内では、

木、幹、茎、竹、枝、蔓、煙突、柱、棒、綱、針金、糸、鎖、金縁、煙草、タイヤ、ズボン、煙、火束、雨脚

などの名詞と「ふとい」の結合した例が見られる。任意に1, 2の例をあげておこう。

○行介は一抱もある、太い柿の木の下に立つた。(波 314)

○「お豊さん、これ」そう言って登喜子は竜岡が持って来た千代紙の太い紙包みを渡してやった。(暗夜行路・前 37)

また、「ふとい」は首、腕、手、指、あし、胴、腹、髪の毛など、人や動物のからだの部分をも主体としても使われる。2, 3の例をあげてみよう。

○「そんなこと、俺あ知るかい！」上等兵は太い咽喉を一層ふくらせていた。(真空地帯・上 39)

○彼はわざとへうきんに妻をはぐらかすと、艶々と禿げた頭に、太いぼつちやりした

手をやりながら、娘と並んでゐる婿の方をにこにこ眺めた。(真知子・前 143)

○次の間の三畳の衣桁にも、小さいくせに胴の太い蛾がとまつてゐた。(雪国 85)

ところが、「ふとい」は人や動物のからだの全体を主体としてはほとんど使われないと考えられ、資料内には次の1例があるだけである。

○京塚昌子—くまばち—(新派, 芸術祭奨励賞を受賞) 飛躍, また飛躍。疲れを知らぬ遅しき。やせるを知らぬ芸の肉。太い体に一本通った鋭い針。(主婦の友 1956年 8月 73)

これはスターたちをそれぞれ何かの虫に見立てた漫画(近藤日出造)に添えられた文句で、かなり特殊な例とみてよかろう。もっとも動物の中で蛇・みみずのような細長いものについては「ふとい」ということは特殊ではないかもしれない。しかし、四つ足の動物などについては、普通「ふとった」などが使われ「ふとい」は使われまいだろう。

「ふとい」が人や動物のからだ全体を主体としてはほとんど使われないのは、動詞「ふとる」の「ふとった」「ふとっている」という形がその領域を分担していることによるところが大きいと考えられる。

○彼女は肥っているので、隣の席はせまかった。(人間の壁・上 55)

○床には真円く太つた鯉の掛物がかかり、畳は赤ちやけてゐた。(冬の宿 190)

もっとも、「ふとい」と「ふとった」などとは、主体の相違だけで対立しているということはできない。主体の上の相違と密接にからまることであるが、次のような相違点もある。「ふとった」は、人や動物の栄養状態がよくてからだの肉づきが良い結果として、からだの横へのひろがり大きい状態であって、この点で「むくんだ」「はれた」などと区別される。一方「ふとい」は物体一般に関して用いられるので、生物についての「ふとった」「はれた」「むくんだ」などにおけるような条件がつかないことはいまでもない。そして「ふとい竹(煙突・ズボン)」のように中空のものでもよく、また

○煙は渦巻いて軒下でたゆたひ、やがて太い振り合はされた一条となつて、立ち上つた。(野火 43)

のように気体のようなものでもよいという風に、「ふとい」はもの一般に広く自由に使われる。

はじめのほうで、「ふとい」はからだの部分については使われると述べたが、「ふとった」などもからだの部分についてもよく使われる。資料内に双方の例がある「腕」の場合を対比させてみよう。

○二階を通り越して一階へ降りる曲り角で、彼はそっと春子の肥った腕を指でつついた。(人間の壁・上 253)

○和服に白いエプロンをかけているので、むき出しになった太い腕が白くつややかに光っている。(人間の壁・上 109)

「ふとった」はほかに頬，肩，手，膝，足などについて使われた例がある。このうち，頬，肩などの場合は「ふとい」は使えない。

○そして彼は，この未亡人の肥った頬っぺたを，思いきりぶんなぐってやりたいと思っていた。(人間の壁・上 294)

○肥った肩と，ぞろりとした羽織姿とで，棒立ちのまま彼はぼろぼろと泣いた。(むらぎも 256)

「ふとい」は断面積が問題になりうるような形をした，からだの部分(腕，胴など)にしか使えない。この点でも「ふとい」と「ふとった」とは細かくみれば対応していないと言わなければならない。

(25) 主体(人・動物/もの)

やせた<ほそい

「ほそい」は「ふとい」と同様に広くさまざまなものについて使われる。資料内では，

木，幹，枝，根，竹の棒，煙突，鉄の欄干，マッチの軸，針，ガラス管，ゴム管，綱，針金，紐，コイル，数珠，糸，長靴，パイプ，スラックス，袖，指輪，ピンセット，煙，雨

などの名詞と「ほそい」の結びついた例がある。上にあげた以外の1，2の例をあげよう。

○広重，文晁に限らず，たいていの絵の富士は，鋭角である。いただきが，細く，高く，華奢である。(富岳百景 50)

○食いしばっているみそっ歯の間から，羊羹が細い棒になってはいって来るのを感じながら，私は度胆を抜かれて，泣く事もできなかった。(暗夜行路・前 13)

また，「ほそい」は人や動物のからだの部分についても使われる。資料内には，

顔，鼻，喉，首筋，うなじ，首，手，手足，指，指先，腰，脚，足のすね，ふくらはぎ，足，頭髮，ひげ

を主体として「ほそい」の使われた例があった。1，2の例をあげよう。

○咲子は蠟のやうに白く透き通った細い手足と，大きな黒眼をもつてゐた。(冬の宿 54)

○乞食が左衛子を見つけて，店頭に立つた。これ以上は瘠せられないといふくらゐに肋骨がむき出して，足の脛など，杖のやうに細い印度人であつた。(帰郷 14)

ところで，「ほそい」は人や動物のからだの全体を主体としても使われるであろうか。こういう場合には，動詞「やせる」の，状態を表わす形「やせている」「やせた」などがよく使われて，「ほそい」はあまり多くは使われないようである。しかし，次のような例もあってからだ全体に関しても時として使われると言えよう。

○それから私たちは体を包んでゐた濡れた着物をぬぎはじめるのだつたが、私も氣違ひじみたほど強く、細い白い相手の体を抱き締めて行つた。(冬の宿 164)

○まして旧幕時代の豊かな町人の家に生れ、非衛生的な奥深い部屋に垂れ籠めて育つた娘たちの透き徹るやうな白さと青さと細さとはどれ程であつたか田舎者の佐助少年の眼にそれがいかばかり妖しく艶に映つたか。(春琴抄 146~147)

○凍^{こお}った水道の栓からでる水が鉄の長い桶にたまと馬は長い咽喉を大きく動かしてそれを飲んだが、体の細い群福は始終肌をふるわせた。(真空地帯・上 154)

以上「ほそい」がもの一般に関して広く用いられることをみてきた。これに対して、人、動物に関しては、「ほそい」と共通性の大きい表現として、いま触れた「やせた」がある、もちろん「やせた」は、肉づきがよくないために、からだの横の広がりがかさいという条件がある点で「ほそい」と相違点もある。しかし、「ほそい」と「やせた」とを主体に関する制限の有無によって区別することはできよう。

「やせた」が人、動物のからだ全体について用いられた例を2, 3引こう。

○親鸞(鶴のごとくやせている。白い、厚い寝巻を着ている。やや身を起こして脇息にもたれる) (出家とその弟子 199)

○登喜子はやせた背の高い女であった。すわっていてもなんとなく棒立ちのような感じがした。(暗夜行路・前 31)

○都会の雀は、瘦せて煤煙で羽色がよごれてゐる。(帰郷 155)

からだの部分について「やせた」が使われた例としては

顔, あご, 頸, 肩, せなか, 腕, 手, 手の指, 脛, 足, 上半身

などがある。「手」については資料内に「ほそい」と「やせた」の双方の例があるので対比させてみよう。

○時屋は、細い手をのばして寝台の下にかくしておいた薪を取りだしてきた。

(真空地帯・上 71)

○お島の幼い心も、この静かな景色を眺めてゐるうちに、頭のうへから爪先まで、一種の畏怖と安易とにうたれて、黙つてじつと父親の瘦せた手に縋つてゐるのであつた。(あらくれ 7)

上に並べたからだの部分のうち、「せなか」などは「ほそい」は使えない。また、はじめのほうに列挙した、「ほそい」が使われたからだの部分のうち「頭髮」「鼻」などには「やせた」は使えない。「やせた」と「ほそい」とがいずれも使われ得るからだの部分が多いが、こまかく見ればこのような出入りもある。

なお、「やせた」は人・動物のほか、次のように植物に使われた例もある。これは「うなだれている」とともに比喩的な表現であろうか。

○やせた日まわりがうなだれている垣根をまわりながら隙間からのぞくと、丁度夕方の食事だった。(くれない 112)

一般に植物に関しては、「やせた」ではなく「ほそい」が使われるのが普通のようにある。たとえば、

- 其処から下りるのだと思はれる、松の木の細くツて度外れに脊せの高い、ひよろひよろした凡そ五六間上までは小枝一つもないのがある。(高野聖 36)
- 裏の藪のなかの木を御覧なさい。細い癖にひよろひよろと高いものだから、そのひよろひよろへ風のあたること！(田園の憂鬱 101)
- 蘆のやうで然も極めて細い可憐こゝろなどしさがびりびりと撼ゆがされながら岸の水に立つて居る。(土・上 85)

〔26〕 程度

巨大なく大きい

- 「巨大な」は大きいこと、そして大きさの程度がいちじるしいことを表わしている。
- しかしいまや、進化した星の内部では一億度をこえる温度が実現するという事になって、重い元素を融合する巨大な原子炉として、星が見直されることになった。(宇宙の謎はどこまで解けたか 93)
 - が、再び力を籠めて第二の槌を下した。更に二三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から、分離したばかりであつた。(愚管の彼方に 75)
 - 宇治の鳳凰堂も実に典雅で美しいだけで、西洋の巨大な古寺院を見て来た者には、美しいが細つこいな、と感じられる。(帰郷 248)
 - 津上は内野席の最上層に立つて、巨大なスタンドの処々に口を開いてゐる何十かの通路口から、入場者たちがそれでも絶えることなく吐き出されては辺りに散つてゆくのを、局外者のそのやうに冷たい無感動な眼で見詰めてゐた。(闘牛 139)
 - 渡し場へ歩いて行かうとして、ふと見ると、港の真中で二万噸級の巨大な英国船が静かに方向転換をしてゐた。(オール読物 1956年4月 293)

これらの例における「巨大な」は「大きい」におきかえることがきできる。しかし、そうすると「巨大な」が含まれている、大きさの程度がいちじるしいということを積極的に表わす意味の要素を失ってしまう。もっとも、大きさの程度がいちじるしいということは絶対的な量の問題ではない。問題になっている物が、その属する種類としての平均的な大きさと比べて、いちじるしく大きいということである。

次にあげる例は、上にあげた例より、絶対的な大きさは小さいであろう。しかし、望遠鏡・クリスマスツリー・磁石としてはいちじるしく大きい、という意味で「巨大な」が使われている。

- 直径が何十メートルという巨大な電波望遠鏡が百億光年も彼方の天体からの電波を捕え、(宇宙の謎はどこまで解けたか 89)
- クリスマス・ツリーの主な愛好者？は十尺もある巨大な奴を競い合うデパートから

キャバレー、商店。(週刊サンケイ 1956年12月30日 28)

○**巨大な**磁石に吸い寄せられる鉄片のように、彼女の心は小野木にひきつけられた。

(主婦と生活 1956年7月 225)

さらに極端なばあいには、肉眼では見えないような小さなものについても「巨大な」が使われることがある。

○このウイルスは18×300 ミリミクロン、つまり百万分の十八ミリメートルの幅という小ささだが、物質的にみれば実に**巨大な**「核蛋白質分子」だったのである。(生命の暗号を解く 156)

○染色体は遺伝をつかさどる遺伝子の集まりなのだが、この遺伝子の大部分は、核酸という**巨大な**分子であった。(生命の暗号を解く 158)

○ヤリイカの**巨大線維**。(科学読売 1956年2月 24)

人間の体やその部分について「巨大な」が使われた例は、「冬の宿」の嘉門と、「自由学校」の五百助に多く見られる。

○まつ子はかうしたところの白い道を、長い行列をつくつて霧島の家に運ばれて、一夜にしてこの**巨大な**粗暴な男に身を任せてしまつたのであらう。(冬の宿 19)

○煙草の煙を私の顔のうへに吐きかけながら、**巨大な**手で私の肩をゆすぶつた。(冬の宿29~30)

○そういいかけた時に、河岸通りから、銀座一丁目の方へ曲ろうとする、**巨大な**人物の後姿が見えた。(自由学校 67)

○そこで、誰も、南村五百助の肉体に、威圧されてしまうのだが、細君の駒子とか、亡くなった母親の秋乃とかの近親者は、彼の**巨大な**目鼻立ちの奥にあるものを、悲しげに、認知していた。(自由学校 9)

人体のばあい、いちじるしく大きいといっても、客観的には平均値より何倍も大きいというようなことはない。しかし、なみはずれてひどく大きいという感じを「巨大な」で表現し、それがこれらの小説の主人公のイメージを作り出すことばになっているといえよう。

「巨大な」は語自身の中に程度の限定を含んでいるが、「大きい」はそうではない。そして「大きい」はいろいろな程度副詞を受けることができる。

○少し大きな形の蟻がそこらにまくばられて居て、彼等に命令して居るやうにも見える。(田園の憂鬱 26)

○彼はまたいま隊の厩にいる馬の蹄がずい分大きいことにびっくりしていた。(真空地帯・上 155)

「巨大な」も「非常に」などを受けうると思われるが、資料内には例がない。「大きい」ほど自由に程度副詞を受けることはできないだろう。

なお、「巨大な」は文体的特徴の上で、文章語的であるのに対して、「おおきい」は

文体上の制限がない点にも、2語の間の相違点がある。そしてこのことは、この項で述べた実質的な意味における違いとも関係があるであろう。

〔27〕 程度（高さ）

こだかい、うずたかい<たかい

「たかい」は高さの程度に関して制限がない。

○十国峠から見た富士だけは、高かつた。(富岳百景 50)

「こだかい」は「小高い」という表記のように、「すこし高い」などと辞書に規定されている。この語は土地の隆起について使われ、しかも高さの程度において小さいという制限があるために、せいぜい数百メートル程度の高さが「こだかい」と言える限度であろう。何千メートルという山は「たかい」とは言えるが「こだかい」とは言えない。「こだかい」は「山」ではなく「岡」と結びつきやすいのは自然なことであろう。

○流石に用心深い父は人目につかない村はづれを択んだので、根津の西町にしよまちから八町程離れて、とある小高い丘の裾のところに住んだ。(破戒 106)

資料内の「こだかい」全18例のうち、8例までは上のように「おか」という名詞と結びついて使われたものである。「たかい」の用例の中でも、次の例のような「丘のように高い」の「たかい」は「こだかい」におきかえても文が成り立つであろう。

○丘のやうに高くなつた砂浜の上で、手招ぎしてゐる子供たちのところへ、襲子は残惜さうに戻つて行つた。(波 251)

「こだかい」は語自身の中にすでに程度上の制限を含んでいるので、「たかい」と異なり、いろいろな程度副詞を受けることはほとんどないようである。資料内には次の1例だけがある。

○私は其二日前に由井が浜迄行つて、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で、(こゝろ 8) これも、「こだかい」という範囲の中での、さらに小さい程度という限定を「少し」がしているのかどうか、疑問に思われる。あるいは、「少し小高い」は重複的な、余分な要素を含んだ表現ではないかとも思われる。「この丘はあの丘よりこだかい」などという比較表現も、ふつうはあり得ないであろう。

「うずたかい」も「たかい」のように高さの程度が自由ではない。具体的な数量でいえば、「こだかい」よりさらにひくい限度内でしか普通には使われないようである。資料内の例をみると、

○月謝は級の高下に係はず、一人に付十五銭としたので、月末になると、銅貨銀貨天保銭などが僕のテーブルの抽斗に堆くなつて、生徒の多い時は大枚六円乃至七円の多きに達したこともある。(愚出の記・上 209)

のようにおそらく数センチ程度以下のもの、

○蟻塚が道傍にうづ高くつもり、蟻が吹き出すやうに溢れてゐた。(野火 21)
 のように上よりはやや高いかもしれないと思われるもの(蟻塚は高さ30cmになるものもあるという)、

○船の中には露に濡れた野菜がうずたかく積んであった。(放浪記 230)

のようにさらに高いものなどがあり、

○往來の真中にうづたかく堆高く掻集めた白い小山のつゞきの連接を見ると、今に家々の軒丈よりも高く降り積つて、これが飯山名物の「雪山」と唄はれるかと、冬期の生活の苦痛を今更のやうに堪へがたく思出させる。(破戒 228)

あたりが資料内ではいちばん高い例だと思われる。しかし、「山とは地表のうづ高くなつたところである」というような言いかたがもし普通の言いかたとして成り立つのであったら、上のような考えはそのままの形では成り立たなくなる。

「うずたかい」が程度副詞の限定を受けている例としては、次の1例だけがある。

○粗末な棺台は少し堆く成つた土の上に置かれて、二つの白張提灯と二つの花籠とが其傍に立てられた。(上・上 57)

しかし、「たかい」とはちがって、「かなりうずたかい」「ひじょうにうずたかい」など、色々な程度副詞と自由に結びつくことはないのではなかろうか。また、「AはBよりうずたかい」のような比較表現も、ふつうあり得ないであろう。

[28] 変化の結果

うずたかい<たかい

まず、「うずたかい」の用例をいくつかあげてみよう。

○丁度収穫の頃で、堆高く積上げた穀物の傍にたかれて居ると、農夫の打つ槌は誤つて斯の求道者を絶息させた。(破戒 219)

○津上は委員席で委員たちと並んで、堆高く積まれた賞品と賞状と番組表を前にして坐つてゐた。(闘牛 144)

○平椀には牛蒡と馬鈴薯とが堆く盛られて油揚が一枚載せてある。(土・上 206)

○墓の穴は焼けた様な赤土が四方へ堆く掻き上げられてあつた。(土・上 57)

○他方には金持ちの人々の需要する奢侈しやしぜいたく品がうずたかく生産されつつある。

(貧乏物語 95)

資料内における「うずたかい」の用例は、上のような連用修飾法のものが大部分である。そして、「積む」「積もる」「盛る」のような動作・作用が行なわれて、その変化の結果として「うずたかい」という状態が成立することを示している。(「貧乏物語」の例だけはやや趣きが違ふが、これは「うずたかく積もるほどに生産されつつある」のような意味に理解される。)

これに対して「たかい」の連用形「たかく」はどうであろうか。

○斯うなると、最早雪の捨てどころが無いので、往來の真中へ高く積上げて、雪の山を作る。(破戒 257)

○かうして彼の妙な一家族が、馬の蹄のやうな形に高く積み上げられて土で出来た竈の前にわびしく物言はぬ団欒をした時に、彼はやつと心丈夫に思へた。(田園の憂鬱 72)

のように「積み上げる」などの変化の結果として高くなった場合に使われることもある。しかし、

○彼女は行介に「左様なら。」ともいはずに、鎖のやうに点々、黒くつながつてゐる渚の岩の上を身軽に飛びながら、高く突出した巖の端を向うへ駆けて行つてしまつた。(波 250)

○鳥羽から船がはるかに離れれば、どんなに低い鷗の飛翔も、遠く小さい鉄塔をこえるのは造作もない。しかしまだ鉄塔は高く聳えてゐる。(潮騒 56)

のように、以前から高い場合にも使われる。すなわち、「たかく」は以前の状態がどうあったかについて無関心である。

「うずたかい」の連用修飾法以外の用例は、資料内に次の3例があった。

○其の夜李陵は小袖短衣の便衣を著け、誰もついて來ると禁じて独り幕營の外に出た。月が山の峽から覗いて谷間に堆い屍を照らした。(李陵 163)

○それはその女にむかつての欲情の発動というのではなかった。そのうず高い腰にたしするものでないことも安吉にわかつていた。(むらぎも 39)

○もとは物置に使はれてゐたらしいその階は、ごく小さな二三の窓の一つの硝子が破損してゐるにすぎなかつた。前には堆かつた松葉の束は、それぞれ持ち運んだあとと見えて、片隅に四つ五つ残されてゐるばかりであつた。(潮騒 63)

いずれも連体修飾法の例で、まず「李陵」の「堆い屍」の例は屍が積み重なっていった結果高く盛り上がっている状態を表わしている。「むらぎも」の「うず高い腰」の例はやや問題がある。今まであげてきた「うずたかい」の例のうち、この「むらぎも」の例以外はすべて、地面を基準にしてそこから垂直上方にのびる次元における距離が問題になっていた。ところが「うず高い腰」においては直立した人体の方向が基準になり、そこからほぼ垂直に突き出している距離が問題になっている。ちょうど「高い山」「高い木」などに対する「高い鼻」の関係と同じである。また、「うずたかい腰」における「うずたかい」は変化の結果ではなく、以前からの状態ではないかとも考えられる。しかし、「むらぎも」の、上に引用した部分の少し前に、女性の女性としての発育についての叙述があり、腰の成熟という変化の結果として高いという意味で「うずたかい」を使っていると解釈しうるのであろうか。同じ作品の2ページほど前に次のようなところがある。

○一たい安吉は、女のからだの線に好き好きがあつた。彼は高い胸が好きだ。高い腰が好きだ。高い尻が好きだ。(むらぎも 37)

この場合の「高い腰」などの「たかい」は、いうまでもなく、以前の状態を問題にしていない表現であり、多少の比較材料になるかと思われる。

[29] 変化の結果

こなごなに、こなみじんに、こっばみじんに<こまかく、微細に、微小に
まず、「こまかい」「微細な」「微小な」は、そういう状態が以前から続いていたばあいでも、ある変化の結果こまかい状態になるばあいでも、ひとしく使われる。

(以前から)

○出てきた細かい埃を検鏡すると、木の微細な繊維が現われて来た。(宝石 1956年4月 164)

○それらの虫どもは、夏の自然の端くれを粉にしたとも言ひたいほどの極く微細な、ただ青いだけの虫であつた。

(田園の憂鬱 41)

○ところが原子となると、それよりも遙かに小さく、直径が一億分の一程度の微小な球であると考えられる。(物質世界の客観性について 280)

(変化の結果)

○彼はキス・シーンのコレクションを、十枚も重ねたまま、小さな手に力をいれて、勇敢に裂き棄てる。必要以上にこまかく破る。(人間の壁・上 221)

○が、収縮が加速度になり、それに従つてますます容積を減じつゝある身体が、終に一箇の貝殻よりも微小になつたのを見ると、このまま進めば消えてなくなりさうで、気がかりで、心細かつた。(真知子・前 180)

「微細な」が、変化の結果の状態を表わしている用例は資料内にはなかったが、「岩石を微細にくたく」のような言いかたは可能であろう。

すなわち、「こまかい」「微細な」「微小な」にあつては、以前の状態がどうであろうと問題ではない。ところが、「こなごな」「こなみじん」などにおいては、そういう状態がもともとそうなのではなく、粉碎されるなどの結果として生じた状態であることを必要条件とする。その実例をいくつか挙げてみよう。

○それは雄蜂の内の最も勇士であつて、そして職務を果すと、身はこなごなになつて死んでおちてくる。(友情 26)

○けたたましい音をたてて、ビールびんは、思い切りよく、こなごなにこわれて、しぶきが飛んだ。(放浪記 105)

○あの蝕んだ焼けた蒼は、彼が無意識に捲り砕いたのであらう——火鉢の猫板の上に、粉粉に裂き刻まれて赤くちらばつて居た。(田園の憂鬱 116)

○そしてそれを庭石の上にたゞきつけた、石膏のマスクは粉微塵にとびちつた。(友

情 127)

○金魚玉こっばみじんにとり落す (俳句 1956年1月 149)

次の例のように、比喩的に使われることもある。

○諸人の為、身を粉々に砕いて、自分の罪障の万分の一をも償ひたいと思つて居た。

(恩讐の彼方に 71)

○いや、そんなことを云ふさへ空恐しいほどに、僕の我執は、粉微塵に打ち砕かれて
ゐたのです。(多情仏心・前 359)

○あんなにあこがれて来た私の港の夢はこっばみじんに叩きこわされてしまった。

(放浪記 256)

以上にあげた「こなごな」「こなみじん」「こっばみじん」の例は、いずれも「～に」の形で「こわれる」「くだく」などの動詞を修飾しているものである。変化の結果といっても、どんな変化でもよいのではなく、次のような条件がつくのではないかと推測される。

- (1) 物体がかたい物であること。
- (2) それが「くだく」「こわれる」などの動作や変化によって細分化されること。
- (3) その結果、多数の小片が散乱した状態を呈すること。

これらの条件について1つずつ検討してみよう。まず、(1)のかたい物体という条件は、上にあげた例でいうと、

こなごな ビールびん (放浪記)

こなみじん 石膏のマスク (友情)

こっばみじん 金魚玉 (俳句)

ではあてはまるが、

こなごな 雄蜂のからだ (友情)

ばらの苔 (田園の憂鬱)

の例についてうまくあてはまらない。しかし、この2例は文学的な使われ方であると言えるかもしれない。典型的な用法としては、「こなごな」「こなみじん」などは、かたい物体がぐだけたりする場合に限られるという制限を認めてよいのではなからうか。

(2)の細分化という条件はどうであろうか。

○彼はいまも砂をかけながら刑務所の監房のことを思い出していたが、はじめてこの射てき台の板のすき間に紙幣をこまかく折りたたんですべり込ませ、そのあとに砂をうすくそそぎこんだとき、彼は刑務所の独居房の便所を思い出した。(真空地帯・上 138)

のような、細分化でない変化の結果の「こまかく」は「こなごなに」では置きかえられる可能性がないのは、この条件のためもある。上にあげてきた「こなごな」などの用例は、いずれも細分化の条件を満たしており、この条件は成り立つと考えられる。

この細分化は、(1)の条件と関連して「くだく」「こわれる」のような動作や変化による細分化が典型的である。「田園の憂鬱」のぼらの苔の例は「彼が無意識に搗り砕いたのであらう……粉々に裂き刻まれて」とあり、「裂き刻む」のような動詞を修飾する例は珍しい。それにしても直前に「搗り砕く」という珍しい複合動詞が使われ、「砕く」という要素が「粉々に」と幾分照応しているとは考えられないであろうか。

(3)の条件は、(2)の条件の当然の帰結であるが、細分化されても、その小片の1つについては「小さい」「微小だ」「微細だ」などとは言えるが、「こなごな」「こなみじん」などとは言えない。「こまかい」もこの条件に関しては「こなごな」などと同じく、小片1つについては言えず、多数の小さいものが存在しなければ言えない、(分析例21)こうして(3)の条件も「こなごな」「こなみじん」などにとって必要であることがわかる。

資料内の「こなごな」の用例8、「こなみじん」の用例2、「こっぴみじん」の用例3は、すべて「～に」の形で連用修飾語として使われているものであった。ただし、例解国語辞典にあげられている「こなごなのガラス」のような名詞を修飾する用法や、あるいは「窓ガラスがこわれてこなごなだった」のような述語としての用法もあるかもしれない。しかし、ここでは「～に」の形を見出し形にした。

[30] 程度

うすあかい／まっかなくあかい
 うすあおい／まっさおい・なくあおい
 うすぐろい／まっくろい・なくくろい
 うすじろい／まっしろい・なくしろい

「うす～」の形はその色の程度がわずかであることを表わしている。また、「まっ～」の形はその色の程度がいちじるしいことを表わしている。「あかい」「あおい」などの基本的な形容詞は程度に関して自由である。

「うすあかい」「まっかな」「あかい」が、人の顔色について使われた例について、この点をたしかめてみよう。「うすあかい」の例としては、

○「書生時代から先生を知つてゐらつしやつたんですか」

奥さんは急に薄赤い顔をした。(こゝろ 32)

○御嬢さんは笑ひながら又何か六づかしい事を考へてゐるのだらうと云ひました。Kの顔は心持薄赤くなりました。(こゝろ 242)

○近眼の私には、今迄それが能く分らなかつたのですが、Kを遣り越した後で、其女の顔を見ると、それが宅の御嬢さんだつたので、私は少からず驚ろきました。御嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。(こゝろ 230～231)

があった。いずれも「こゝろ」の例であるが、みな恥かしさの感情が表われたものである。

「まっかな」は、

○彼女は一本の手紙を彼の前においた。それは駿から女学校の生徒に出したラヴレターだつた。行介の顔は真赤になつてしまつた。(波 375)

○明子は侮辱のために顔をまっ赤にさせた。(くれない 95)

○あまり悪戯いたづらがひどいと云つて流石勤直の英語科の先生も、顔を真赤にして怒つて、其れからと云ふものは虚病を構へて暫らく出て来ぬ始末。(思出の記・上 105)

のように強い恥かしさや怒りの感情の表われた顔色に使われているものが多い。「うすあかい」は程度副詞的な「こころもち」に修飾された例があつたが、「まっかな」は見てすぐわかる、程度の大い顔色の変化であるから、「こころもち」に修飾されるようなことはあり得ないであろう。「あかい」は、

○彼は自分で自分の顔の赤くなるのを感じながら、

「僕は好きだ。しかしもし君が好きなら、僕は遠慮するよ。それができる程度だから」と言った。(暗夜行路・前 50)

○ひとを馬鹿にしてる。——一種こつけない腹立たしさと気羞かしさで真知子は赤くなりながら、とつきの判断で決心を変へた。矢張り彼といつしよに行かうと考へた。(真知子・前 115)

のようにやはり恥かしさなどの感情の表われとして使われている例が多い。「あかい」のばあいはどの程度の赤さかということについての限定はまったくないわけである。うすあかくてもまっかでも「あかい」と言うことはできる。

○云つてしまつて、不意な後めたさが彼女を少し赤くした。(真知子・前 178)

○「あの、」とお志保はすこし顔を紅くし乍ら、「此頃この頃の晩は、大層父が御厄介に成りましたさうで。」(破戒 71)

のように程度副詞「すこし」が「あかい」に加わつたばあいは、「うすあかい」で言いかえても、さしていることがらには大きい差はないだろう。

「あおい」「くろい」の系列では、資料内には対比するのに都合のいい例がないけれども、「白い」の系列には雪の降つた山について用いられた例が揃っているのであげてみよう。まず「うすじろい」は、

○そんな雪雲の消え去つたあとは、一日ぐらゐその山々の上方だけが薄白くなつてゐることがある。(風立ちぬ 130)

だけであるが、これは冬のはじめに雪が少し降つて山の上方だけが少し白くなった状態を述べている。

○カヤの平を出ると急に眼界が開けて、強い爽やかな風が吹き、まっ白い妙高の姿がくっきりと目の前に現われたが、これでまず半分、これから大次郎山にかかると言われて泣きたくなつた。(私の人生観 39)

○西北の空にあたつて、ごく近くの或る丘の凹みの間から、富士山がその真白な頭だ

けを現して、夕映のなかでくつきり光つて居た。(田園の憂鬱 43)

などの「まっしろい(な)」は山(の一部)がすっかり雪におおわれて白さの程度がいちじるしい状態である。

- この国では木の葉が落ちて風が冷たくなるころ、寒々と曇り日が続く。雪催ひである。遠近の高い山が白くなる。これを^{たげまは}岳廻りといふ。(雪国 156)
- 何方向^{どち}向いても雑木山がぐるりと屏風を立て廻し、其上から春は碧くなり冬は白くなる遠山がちよいちよ顔を出して居る。(愚問の記・上 5)
- 夏の間は空気が濁つてゐるせむか、秩父の山さへ見えない日が多かつたが、今日は松林の向うに、紺碧の姿をくつきりと現してゐた。そればかりでなく、その南の方に、富士が白く、うつすり浮上つてゐた。あゝいふ山はもう何でも雪を冠つたものと見える。(波 344)

などの「しろい」はいうまでもなく白さの程度に関して言及していない。「しろい」は「うすじろい」「まっしろな」に対して上位にある語である。

上に「赤さの程度がいちじるしい／わずかだ」などと述べたことは、もっと具体的にどういふことをさしているのであろうか。色を感覚的に区別するうえで、色相・明度・彩度と呼ばれる要素がある。「うす～」「まっ～」によって限定をうけるのは、これら3要素のうちのどれであらうか。まず考えられるのは彩度との関係であらう。彩度とは色のさえ(あざやかさ)を表わす要素で、たとえば「あおい」のうち、彩度の低いほうが「うすあおい」、彩度の高いほうが「まっさおな」ではなからうかと考えられる。

<注>佐久間鼎『現代日本語法の研究』(厚生閣, 1940)によると、「あかい」に対する「まっか」、「あおい」に対する「まっさお」などの「ま」は飽和度(すなわち彩度)の大きい色をいうとされている。(27ページ)

しかし、たとえば「まっかな」は赤系統の色相の中でもっとも典型的な赤である色相をあらわす意味で使われる可能性もありそうに思われる。また、明度も、ここで程度とかりに呼んだものに関係をもっているかもしれない。少なくとも、無彩色といわれる「くろい」「しろい」の系列においては、色相や彩度がなく明度の差しかないのだから、「まっくろな」「うすぐろい」「うすじろい」「まっしろな」などが表わしている程度は主として明度に関するものであろうと想像される。

[31] 主体(ひふ)

あさぐろい<うすぐろい

「うすぐろい」も「あさぐろい」も、「くろい」の下位語であって、色のこさの程度が小さい点で限定されている、という共通性をもっている。

「あさぐろい」は、人間のひふの色(特に顔の色)について言う。

- ホームスパンの服を着た、浅黒い痩せた男が左手に綴込を持ち、眼をくばり、頁を

めくり、どんどん桁の多い数字を読みあげて行く。(伸子・上 6)

○その女学生のやうな風をした色の浅黒い女は、ぐんぐん高を引張つて二階の高の部屋に入った。(冬の宿 68)

○それは、彼の役所に新しくきたタイピストであつた。気のきいた洋服をきて、円顔で浅黒くて体がしなやかで、眼が大きくて、はじめから嘉門は好きになつてしまつた。(冬の宿 116)

○と、事務長の倉地の浅黒く日に焼けた顔と、その広い肩とが思ひ出された。(或る女・前 101)

○斯う云つて話した彼女の利かぬ氣らしい、口許に小さい傷痕のある浅黒い顔を、真知子は今でも思ひ出すことが出来た。(真知子・前 154)

三省堂国語辞典は「あさぐろい」の語釈を「感じよく、うす黒い」としている。これは、「あさぐろい」の意味として、色そのものの性質だけでなく、その色に対するプラスの評価を含むと認めたものといえよう。「あさぐろい」の黒さは、日焼けした(ような)うすぐろさであつて、健康的な感じの色だと言えるかもしれない。そして、いい意味で使うことが多い傾向がいくぶんはあるかもしれない。しかし、次にあげる例のようにプラスの評価をしているとは考えられない人物に対して「あさぐろい」を使った例もある。したがって、プラスの評価を本質的な特徴として含んでいる語であるとは言えないであろう。

○何用かと思つてゐた伸子は、驚いて青年を視た。皮膚の浅黒い、東洋人的に眉の吊り上つたこの青年が、そのことに何のかかはりがあるのだらう。伸子は、不快を感じ、冷やかに答へた。(伸子・上 125)

○前にゐた職人が、女気ななかつたこの家へ、どこからともなく連れて来て間もなく主人との関係の怪しまれてゐたその年増は、渋皮の剝けた、色の浅黒い無知な顔をした小^こ軀^{がら}の女であつたが、お鳥が住込むことになつてから、一層綺麗にお化粧^{お化粧}をして上さん氣取で長火鉢の傍に坐つてゐた。(あらくれ 182)

次に、「うすぐろい」も、ひふの色について使われることがある。

○ヒツツメに結んだ髪は、どこをどう飾ろう術もないが、薄黒い顔に、薄く刷いた白粉の跡は、朝の光りに、明らかだつた。(自由学校 317)

○眼の周りに薄黒い^{かさ}皷^{つづみ}の出来たその顔は鈍い鉛色をして、瞳孔は光に対して調節の力を失つてゐた。(或る女・前 155)

「うすぐろい」がひふの色について使われるばあい、黒さの程度が小さいという点では「あさぐろい」と共通性がある。しかし、「或る女」の「うすぐろい」は明らかに「あさぐろい」とは言えない。また、顔がすすで一時的によごれたようなばあいも、「うすぐろい」とは言うが、「あさぐろい」とは言えない。このように、色の実質的な内容についても相違がある。

- 「うすぐらい」は、ひふの色以外についても、広く一般に使われる。たとえば、
- ことに霜に打たれて蒼味を失つた杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、稍を並べて聳えてゐるのを振り返つて見た時は、寒さが背中へ嚙り付いたやうな心持がしました。(こゝろ 253)
 - 府庁の高い重そうな建物が闇のなかにうすぐろくういて、その上に光が廻っているのが眼のはしにはいつている。(真空地帯・上 128)
 - 床板があげられ、下に一つのドンゴロスの袋が口を開けてゐた。中に薄黒く光る粗い結晶は、彼等人類の生存にとつても、私の生存にとつても、甚だ貴重なものであつた。塩であつた。(野火 85)

[32] 主体(ひふ)

そうはくなくあおじろい

- 「そうはくなく」はひふの色、特に顔色についていう。
- 産婦は煎餅蒲団の襟から蒼白な顔を出してゐた。(本日休診 88)
 - 枕元に、まつ子が、蒼白になつて眼を瞑つたまま坐つて、何か口でつぶやいてゐる。(冬の宿 132)
 - イエスの蒼白の裸体は屍色を現はし、血は赤黒く凝固してゐるらしかつた。(野火 80)
- 「あおじろい」も顔色やひふの色について使われる場合がある。
- 木村はその日も朝から葉子を訪づれて来た。殊に青白く見える顔付は、何かわくわくと胸の中に煮え返る想ひをまざまざと裏切つて、見る人の憐れを誘ふ程だつた。(或る女・前 223)
 - 丑松は又、一向顔色が変わらない。飲めば飲む程、反つて頬は蒼白く成る。(破戒 235)
 - 少々荒れ始めた三十男の皮膚の光沢は、神経的な青年の蒼白い膚の色となつて、黒く光つた軟かい頭の毛が際立つて白い額を撫でてゐる。それさへがはつきり見え始めた。(或る女・前 20)
- しかし「あおじろい」はその他一般のものに広く使われる。
- ねるまへに、部屋のカーテンをそつとあけて硝子窓越しに富士を見る。月の在る夜は富士が青白く、水の精みたいな姿で立つてゐる。(富岳百景 63)
 - 硝子障子の外には、方々の木立が、しとしとと降る雨の中に青白い霏に煙つてゐる。(桑の実 100)
 - いつまでも受動的な感覚状態で、蒼白く泡立ちさわぐ海面をみつめてゐた。(冬の宿 157)
- 「そうはくなく」は(不健康、恐怖などから)血の気がなく青ざめた状態であるから、

色そのものの性質も「あおじろい」のさし得る範囲のうちの一部分に限られているであろう。

なお「そうはくな」は20例あまりのほとんどすべてが顔色またはひふの色を主体としているが、次の2例だけはそうではない。

○辞して外に出ると、おそい半月が出て、空がうるみ、家の前の路がうすく蒼白に浮き上っていた。(阿部知二「青い森」群像 1956年8月80)

○昨日まで、いや、今が今まで、鼓しい、冷たい蒼白な冬の真ん中にちぢこまつて生きてゐたと思つたのに、もう外の世界は暖かな光であふれてゐたのだ。(冬の宿 155)

2例とも同じ作者(阿部知二)の用例であり、これは例外的なものとして「そうはくな」はほとんどひふの色にのみ使われるところでは仮定した。

なお次の例は「そうはくさ」とも「あおじろさ」とも読めるが、改造社版の現代日本文学全集のルビ「あをじろ」に従って扱った。

○リヴァーサイド・パークの葉のない樹木の間冷たい蒼白さで瓦斯燈がぼんやり灯つてゐるのが見える。(伸子・上 10~11)

なお、「あおじろい」の漢字表記は「青白い」か「蒼白い」が大部分で、顔やひふの色のはあいは比較的「蒼白い」が多い。

[33] 主体(ひふ)

いろいろな・い、^{せき}白^{せき}皙の<しろい

「いろいろな」「白^{せき}皙の」はひふの色についていう。

○色は、色白なあなたには、こんなときにこそ濃い色よりも淡色の方が零囲気合つていいのではないのでしょうか。(若い女性 1956年4月280)

○白い肩掛を引掛けた丈のすらりとした瘦立の姿は、^{うなじ}頸の長い目鼻立の鮮な色白の細面と相俟つて、いかにも淋し^{せむし}気に沈着いた様子である。(つゆのあとさき 49)

○彼女はそれほど色白ではないので、手も決して白くはなく第一細々ともしていません。(婦人画報 1956年9月53)

○その席で、小柄^{はくせき}で白^{せき}皙で、詩吟の声の悲壮な、感情の熱烈なこの少壮従軍記者は始めて葉子を見たのだつた。(或る女・前 10)

「しろい」もひふの色についていう場合がある。

○電気の光が車内に差渡つて、芳子の白い顔が丸で浮影のやうに見えた。(蒲団 81)

○私はお由さんの白い肌を見てみると、妙に惱ましい気持だつた。(放浪記 85)

この場合は「いろいろな」でおきかえることが一応可能である。

しかし「しろい」はさまざまな種類のものについて無制限に使われ、その例はあげるまでもない。

なお「いろいろな」などは、はだの固有な持続的な性質を表わす点でも「しろい」と区別される。「しろい」は持続的な性質でも一時的な状態でもよい。したがって、

○と、その時まで口を入れなかつた辰子が、宝石のはまつた指先で、真知子の琥珀いろした頬を、白い窪みのつくほど突いた。(真知子・前 80)

○僕の耳が紅くなる程、母の顔はますます白ふなつた。(思出の記・上 152)
におけるような「しろい」は「いろいろな」におきかえられる可能性がない。

[34] 主体(声)

きいろい、かんばした、かんだかい・なくきいきいした

いずれも比較的高い鋭い音の性質に関係する点で共通性をもっている。

4語のうち、「きいろい」「かんばした」は、声についていう。「きいろい」は若い女性や子どもの声について使われることが多いかと思われるが、2番目の「傑作倶楽部」の例は男の声の形容である。

○蒸気のあふりをくつつて、筏は大きく揺れた。その度にざわざわと白い波は材木に噛付いた。女達は恐がつて、黄色い声を張上げた。(波 74)

○「(上略)色里で騒ぐは野暮と、胸無でおろして辛抱しやしたが、闇の作法もお教えねえとは、いや、恐れ入りやした」
と黄色い声を張り上げて帰っていった。(傑作倶楽部 1956年1月 100)

○「何とか、してやって下さい。何とか……」

駒子が、かんばした声を出した。(自由学校 349)

○おとらは作の隠れて寝てゐる物置のやうな汚い其の部屋を覗込みながら毎時とつものお定例きまりを言つて嘸鳴つた。甲走つたその声かんばしが、彼の脳天までびんと響いた。(あらくれ 12)

○戸の隙間が臉を開いたやうに明るくなつた時鶏が復た甲走つて鳴いた。(土・上 23)

「かんだかい」も声についていうばあいが多く、資料内の約40例のうち、9割は次のような、声についての例である。

○「おい！君はどこへ行くんです。何しに行くんです。」高は今度は甲高い声でさげんだ。(冬の宿 86)

○一時間ほどすると、また長い郵下にみだれた足音で、あちこちに突きあたつたり倒れたりして来るらしく、

「島村さあん、島村さあん。」と、甲高く叫んだ。(雪国 32)

国語辞典も見たかぎりではみな「かんだかい」に対して「声の調子が高い」のような、声に限定した語釈を与えている。しかし、数は少ないが次のような例がある。

○三人は無言でロープを見成つてゐる。ロープは風音のなかにも鋭い甲高いきしめき

を断続させてゐる。(潮騒 142~143)

○ワイヤは死にきれない生物^{いさまの}のやうに、甲高い音を立てて、甲板の闇のなかを跳ねまわり、半円をゑがいて静まつた。(潮騒 143)

○それを縫って、甲高いや低目のやの汽笛が切れ目なしに入りまじってひびく。(むらぎも 302)

○その重なるものの一つは、彼が都会で夜更けによく声いた、電車がカアブする時に発する、遠くの甲高な軋る音である。(田園の憂鬱 88)

「潮騒」の2番目の例は、「ワイヤは死にきれない生物のやうに」という直喩によってワイヤが動物にたとえられているが、「甲高い声」ではなく「甲高い音」と表現されている。他の3例は前後の文脈からは特に比喩的な表現だという手がかりは見つけられない。これらの例がもし、まったく普通の「かんだかい」の用法であるとすれば、多くの辞書のように「かんだかい」の主体を声に限定することは狭すぎるとせねばならなくなる。しかし、資料内の約40例中9割までは声が主体であって、少なくとも「かんだかい」は声について使われることが多いという傾向は認めても誤りがないだろう。

次に形容詞ではないが、「きいきいした」も、かん高い類にはいるような声の性質を表わすことがある。

○新たな叱責と、新たな跳躍。——それを一層面白がる小さい娘のきいきいした叫び。(真知子・前 102)

「きいきいした」はこの1例しかないが、同じような「きいきい」を含んだ複合語「きいきい声」の例も参考としてあげよう。

○署名をして下さいと、セガまれる。それを振り切って逃げ出したところで、広告放送のキイキイ声が、しつこく追いかけてくる。(自由学校 133)

「きいきいした」は声だけでなく、他の音にも使われる。というよりも元来、「きいきい」は物のきしむときの音からきているのであろう。したがって声にいうときも、「きいろい」「かんだかい」よりもさらに、聞く人の神経にさわるような、金属的な感じの声を表わすように思われる。声以外に使われた「きいきいした」の例はないが、副詞的に使われた「きいきい」の例はある。比喩表現の中で使われているが「きいきい」に関しては具体的である。

○日暮れ前にとぼされた軒燈^ひの灯^ひという心持ちだ。青いすりガラスの中に^{だいだいろう}橙色にぼんやりと光っている灯がいくらあせったところでどうする事もできない。すりガラスの中からキイキイ爪^{つめ}を立てたところで。(暗夜行路・前 111)

「かんだがい」その他について、付随的なことをちょっと補足しておきたい。

「かんだかい」は、I型の活用が用例の大部分を占めているが、「かんだかな」4例「かんだかに」2例の、ナ型の活用の例もあった。「かんだかだ」の形は資料内には

ない。もっとも「かんだかい」のほうも連体形と連用形の例が大部分で、終止形の例は次の1つしかない。

○「ねえ、出かけなくて、いいの」

あの雑音を、スリ抜ける声だから、相当、カン高い。光る声でまた、刺す声である。(自由学校 5)

I型の活用の例とナ型の活用の例の間に、意味の区別を認めたいので、上の分析では両者をいっしょにして扱った。

「かんだかい」は上記のように連体用法が多く、述語用法は少ないが存在はする。「きいろい」は「きいろい声」のような連体用法だけで、述語用法はなさそうに思われるが、用例が僅少なので何ともいえない。

「かんだかい」は感情の興奮したようなばあいに発せられる声の形容としての用例が多いが、

○「ああ、きっとそうネ」と小稲は自分でも気持ちよさそうに持ち前のかん高い声をあげて笑った。(暗夜行路・前 79)

のように、生来の声の性質としても使われる。「かんばしる」の資料内の4例のうち3例は上にあげた。さきにあげた「土」のにわたりの声の例を除く3例は人間の声に使われ、いずれも感情の高ぶりを表わしている声である。残る1例も次にあげておこう。

○夜更け、フッと目が覚めると、

「子供なんかを駆へむかいにやる必要はないじゃありませんか、貴方が行っていらっしゃい、貴方が厭だったら私が行って来ます。」

お君さんの痴走った声かしている。やがて、土間をあける音がして、御亭主が駆へお妾さんをむかいに出て行った。(放浪記 239)

(付)「かんだかい」の主体は人間の声に限られるのかどうかという疑問に関連して、小調査2の中で次の項目を調べた。

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
かんだかい汽笛の音	{ (男) 44 { (女) 26	5 17	7 9	— —

汽笛の音について「かんだかい」が用いられた例が「むらぎも」にあって、本文の中に引用した。

小調査2は、比喩的な表現などを除いて、みてほしいという付帯的な条件をつけて行なってある。

普通な表現だとしたのは、男子で8割だが女子はちょうど5割である。上の疑問に対する解決に参考になるような、明快な結果は得られなかった。

小調査1で、もう1つしらべてみた事項がある。本文の中で、「きいろい」は「き

いろいろ声」のような連体用法だけで、述語用法はあり得ないように思われると述べた点に関してである。(上段は女子大生23人, 下段は女子高校生51人の結果を示す。)

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(イ) あの子のきいろい声がきこえる	{ 22 23	1 15	— 13	— —
(ロ) あの子の声はきいろい	{ 10 21	7 21	6 9	— —
(ハ) あの子は声がきいろい	{ 2 7	9 22	12 22	— —
(ニ) あの子の声はあかるい	{ 20 37	2 10	1 4	— —
(ホ) あの子は声があかるい	{ 6 8	12 26	5 17	— —

まず、女子大生の結果についてながめてみよう。(イ)の「きいろい声」という連体用法を含んだ文は予想どおり、普通な文だとして支持された。(ロ)(ハ)は「きいろい」を述語にもつ文で、そのうち「あの子の声」を主語とする(ロ)は3つの選択枝に人数が割れて、傾向が出なかった。「一ハーガ」構文の述語として「きいろい」が用いられた(ハ)は、普通とする人はほとんどない。(ロ)と(ハ)との違いは、付帯的にしらべてみた、声に関する「あかるい」についても似た傾向がみられる。「あの子の声」を主語とする(ニ)は、大部分の人が支持して、「きいろい」のばあいとは違う傾向を示した。しかし、「一ハーガ」構文の述語として「あかるい」が用いられた(ホ)はずっと支持されかたが落ちている。非常にはっきりした結果とはいえないが、連体用法の(イ)と、述語用法の(ロ)(ハ)の間には、日本語としての普通さにおいて相違が感じられていることは推定される。

女子高校生の結果は、(イ)では女子大生のと大きくくいちがって、半数たらずしか普通としなかった。(ロ)～(ホ)については、女子大生の結果とやや平行的な傾向を示している。

[35] 評価

あまったるい<あまい

「あまい」は次にあげる例のように、事実の上で、同時においしい味である場合の例がいくらかもある。

○病人は目を閉ちて、大きくあけた口でその線を受け、それを飲みくだすと「甘かつたわ。」と云つた。「よかつたねえ。」と春三のお袋が合槌を打つた。(本日休診 120)

○漸く思ふ柔かな乳首を探り当て、^{あわて}狼狽てチウと吸付いて、小さな両手で揉み立て揉み立て吸出すと、甘い温かな乳汁が^{どくどく}滾々と出て来て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずお甘しい。(平凡 27)

「あまし」は「うまし」と語史的に関係が深いようである。また、心理学では味覚のうちで甘味・塩味・苦味より、一般に快感度が高いという結果が得られているという。

<注>相場均『感覚の世界』91～92ページ

しかし、次にあげる例のように、かならずしもおいしく感じる場合だけではなく、むしろ不快に感じる場合でも「あまい」が使われることはもちろんある。すなわち、「あまい」という語は評価の点で積極的な特徴をもっていない。

○二人は、黙って、薬品的に甘い、コーヒーを飲んだ。(自由学校 330)

○御節^{おせち}、きんとん、かまぼこ、だてまき、黒豆、どれもこれも甘いもの、冷えたものばかりで、閉口した。(文芸 1956年1月 36)

それに対して「あまったらい」はよくない評価を積極的に伴う語のようである。用例がわずかしかなのでよくわからないが、次の例などもそのことを表わしている例であろう。

○お楽が寝しなに時々飲むあまり上等でないシェリーがあった。それを持って来ると、緒方はその甘ったるい酒をまずそうに飲んでいた。(暗夜行路・前 95)

○塩の辛い料理を好んだという織田信長から見れば、甘ったるい料理に通を言う公卿衆などは、大腰抜けの馬鹿野郎に見えたに違いない。(改造 1953年11月 91)

甘い酒を、もしおいしく感じれば「あまったらい」とはふつう表現しないであろう。「このごろのべったら漬けは甘ったるい。」という表現は、その味に対する不満を表わしている。「*あまったらい、いい味だ」とか「*あまったらい、おいしい菓子だ」など、よい評価を表わす語と「あまったらい」とを同じ食物に対する修飾語として共存させることは無理であり、不自然である。

「あまったらい」は例解国語辞典には

① 甘味が多い。「――菓子」

とあり、新辞源には

① たいへんあまい

とある。これらは「あまったらい」の意味を「あまい」程度の大きさで規定しているわけである。甘さの程度が大きく、過度であるために不快であり、あまったらくあることは事実上多いであろう。しかし、上にあげた例でも甘さの程度が大きいといえるか疑問であり、「あまったらい」は甘さの程度ではなく、評価性の点で「あまい」と区別されるものと考えられる。

また、次にあげる例のように、味覚から他の領域に転用された用法においても否定的な評価の要素が含まれており、それは基本的な味覚についての用法にすでに含まれていたものがうけつがれているものであろう。

○「いゝでせう。甘つたるい場面にはもう飽きてゐる時ですから。」(つゆのあとさき

- 若い父と、母との甘ったるい関係が、無意識に赤子相手に再現されているのだと思うと、謙作は妙にはずかしくもなり、同時にあまりいい気持ちもしなかった。(暗夜行路・前 82)
- 皆、ムキになつて一人の無垢の処女をねらつてゐると思ふと恐ろしい気がするね。その内にはいろいろの奴が居るだらう。出世しようとか、持参金をあてにするものもあるだらう。弄ぶこと許り考へてゐるものもあるだらう。又あまつたるいこと許り考へてゐるものもあるだらう。思つてもたまらない。(友情 26)

〔36〕 評価

かぐわしい、こうばしい／くさい

「かぐわしい」「こうばしい」は使用度の低い語であるが、「くさい」はそうではない。いま、「くさい」のほうから、まずしらべてみよう。

「くさい」はにおいのいい・わるいとは関係なく、ただなんらかのにおいがするという意味でも使われることがありはしないか。(三省堂新国語中辞典では、「いやなにおいがする」の次に、「においがする、かおりがある」を、第2の意味として立てている。)たとえば、こたつの火が強すぎて「こたつがくさい」と言うときに、こげくさい不快なおいだというのでなしに、ただにおいがしている(火が強すぎるようだから弱くしようというような場合)という意味で使うこともあるように思われる。

しかし、用例をみわたすと、快・不快にかかわらない、広くにおいの感覚一般をあらわすとみられるものはほとんど見当たらない。わずかに次の1例が、その可能性があるかと思われる。

○角を一つ曲ると、支那蕎麦の屋台がズルリズルリ動いて来た。ほんの心もち二人の肩が離れて、すれ違ふと、脂っこい肌からでも立ち騰つたやうな湯気に、生温かく二人の頬が舐められた。「クフン」息で鼻の穴を清めてから、「臭いな」「え、ほんとなね……」それきりで、二人はまた前の沈黙に返つた。(多情仏心・前 17~18)

「くさい」は、資料内の用例はほとんどすべて、いろいろなにおいのなかで、わるい不快なおいがすることをあらわしている。たとえば、

○「このごろ山羊が変に臭いの。洗ってやったら、どうでしょう」と茶の間でいっしょに食事をしている時にお茶は顔をしかめながら言った。(暗夜行路・前 134)

○染物工場のトタン塀から往来いつばいに溢れ出した臭い水、その中をどこから現はれたかばしやばしや歩いてゐる二羽の貧しげな家鴨。(真知子・前 58)

○又同じ頃から急に自分の呼吸が臭いと云い出した。私は「乾度虫歯のせいよ」と云って、彼に歯医者通いをさせた。(文芸春秋 1953年12月 212)

「くさい」はどういう物の、どんな匂いであれ、いやな匂いでさえあれば、条件が満たされる。いやな匂いの中の、特定の種類を表わす形容詞としては、「こげくさい」

「きなくさい」「かびくさい」「なまぐさい」など、「くさい」を下位成分とする複合形容詞がある。また、「石油くさい」「ゴムくさい」「小便くさい」など、くさい匂いのする対象物を表わす名詞に「くさい」をつけた複合形容詞で、特定の種類のいやな匂いが表現される。この種の複合形容詞はかなり自由に新しく形成される可能性をもっている。

「くさい」に対応して、快い匂いがする状態を表わす形容詞としては、一応「かんばしい」「こうばしい」「かぐわしい」などが考えられる。しかし、これらはいずれも「くさい」より使用度も低いし、いい匂い一般ではなく特定のせまい範囲のいい匂いだけを表現するとか、文章語的であるとかの制限を持っていて、「くさい」よりも狭く限定されている点が多い。

「こうばしい」は「こんがりやけたようなよい匂いだ」のような限定をしている辞書が多い。

○自分も亦茶碗を口唇に押宛て乍ら、香ばしく焙られた茶の葉のほびを嗅いで見ると、急に気分が清々する。(破戒 39)

○丑松も骨離の好い鮭の肉を取つて、香ばしく焼けた味噌の香を嗅ぎ乍ら話した。(破戒 135)

はまさにこの意味の例であろう。

○「ここのオヤジは、もと、魚屋でね。タネだけは、本筋です……」

通らしいことをいって、高山は、玄関の格子戸を開けた。とたんに、芳ばしい揚げ油の匂いが、鼻を打った。(自由学校 147)

もその例かもしれないが、「かんばしい」と読むべきかもしれない。

○白樺のしおりを鼻にくっつけると、香ばしい山の匂いがする。(放浪記 207)

○彼の妻はバナナやぼんかんが庭先で一年ちう香ばしい実をつけてゐる台湾の官舎に、どうかして母を招待することをさへ夢見た。(真知子・前 164)

も「こうばしい」か「かんばしい」かわからない。もし「こうばしい」であるならば、特に「真知子」の例などは「こんがりやけたような」という限定からはみ出すものであろう。

「かぐわしい」はかなり文章語的・詩語的である。「かぐわしい香水のかおり」とか

○香はしい汁と甘い肉を持つ果実が頭上にあり、こゝで私は徒らに飢ゑてゐる。(野火 48)

のように使われ、いいにおいの種類に特に限定はないであろう。

「かんばしい」は、

○土建業界はここごろかんばしい景気でないことを鹿平は知っている。(講談倶楽部 1956年6月 212)

のような、においから離れた、「思わしい」という意味の用法が現代語では多いようで

ある。

特殊な限定のない、「くさい」と対応した表現はむしろ「においのいい」「いいにおいがする」などの連語であろう。

- この頃、少し、煙草の味もわかってきたところで、その上、環境はいいし、彼女は、匂いのいい煙りを、思い切って、腹の底まで吸い込んだ。(自由学校 104)
- 優しいお嬢さんのたよりは男でなくてもいいものだと思う。妙に乳くさくて、何かふんぶんいい匂いがしている。(放浪記 124)

{37} 主体・運動(大/小)

ごろごろ/ころころ

ころがる物体の大きさの点で、どちらかといえば「ころころ」のほうが小さい(感じである)傾向があろう。(小さいというよりもむしろ軽い感じ、かわいらしい感じという方が適切なばあいもある。)

- 小ほけなむくむくしたのが重なり合つて、首を^{もた}げ、ミイミイと乳房を探してゐる所へ、親犬が余処から帰つて来て、其側へドサリと横になり、片端から抱へ込んでペロペロ舐ると、小さいから舌の先で他愛もなくコロコロと転がされる。(平凡 27)

この例は小さな小犬のかわいらしい様子の描写で、「ごろごろと」に置きかえると一応意味は通じても表現効果はいちじるしくそがれてしまうと思われる。

- この貨物船の兵隊らも少し人数でそこにあつたのなら、彼らは一方から他方の舷側へと、ころころ菱なびた蜜柑のやうに転ろがされたであらう。(世界 1954年4月 317)

この例では人間のころがる様子が、しなびたみかんのころがるさまにたとえられている。大波で大きくゆれる船に翻弄される人間を、小さく容易にころがされるものとしてとらえているために、「ごろごろ」でなく「ころころ」が適切に感じられる。なお、比喩でなく、果物などがころがるばあいを想定してみると、かぼちゃ・すいか・夏みかん・りんごなどの比較的大きいものは「ごろごろ」、くり・ぶどうの粒・塩豆などは「ころころ」が使われることが多いのではなからうか。

人については、次のように「ごろごろ」「ころころ」双方の例がある。

- 「くやしい、ああつ、くやしい。」と、ごろごろ転がり出て、うしろ向きに坐つた。(雪国 147)
- 立止つて其の後姿を見送つてゐると、忽ち^{うしろ}背後でガラガラと雷の落懸るやうな音がしたから、驚いて振向かうとする途端に、トンと突飛されて、私はコロコロと転がった。(平凡 45)

「雪国」の例は、ごく普通の使い方ではないと思われる。「平凡」の例は車夫に強い

勢いで突き飛ばされて、軽く、かんたんにころがる様子の表現として、「ごろごろ」ではなく「ころころ」が使われることによって表現効果があがっているとみられる。

[38] 主体・運動（大／小）

ぐるぐる／くるくる

まわる空間的な範囲（円運動のばあいは半径といってもよい）が、「ぐるぐる」のほうが相対的に「くるくる」よりも大きい傾向があると仮定してみたい。

次のような「ぐるぐる」は「くるくる」で置きかえることは不可能または困難である。

○しかし倫理学や哲学概論と、一年か半年ヨーロッパをぐるぐる廻つて歩くことや、ドイツのどこかの町の下宿に何ヶ月かともまつて、ビール^の味といつしよにフッサー^の顔だけ覚えて来ることと、何か関係があるであらうか。（真知子・前 167～168）

○見るとリングではつひに二匹の牛の力の均衡は破れて、猛り気負うた一匹の勝牛は、勝利の興奮を押へかねて竹矢来の中をぐるぐると廻りに廻つてゐた。（闘牛 153）

○私は何の分別もなくまた私の室^へに帰りました。さうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。（ころ 269）

○馬追ひは、毎夜、彼のランプを訪問した。彼は、最初には、この虫が何のためにランプの光を慕うて来るのか、さてその笠をぐるぐると廻るのか、それらの意味を知らなかつた。（田園の憂鬱 41）

資料内に実例はないけれども、たとえば、はつかねずみ・りずのような小動物がせまい所でうごきまわるようすなどは、「ぐるぐる」よりも「くるくる」がふさわしいのではなからうか。

次の例では眼のうごくようすに「ぐるぐる」が使われているが、眼のばあい「くるくる」も使われると思われる。

○ふと、まつ子は眼を上げて私をみた。彼女の眼は一瞬に、私がいまどんな感情の状態にあるかをみた。大きな真黒な眼がぐるぐると動き、恐怖の色がその眼の中に光つてゐた。（冬の宿 83）

以上は、ものが空間的に移動する場合である。同じく「まわる」であるが、ある物がそれ自身を軸として回転するばあいを次にみよう。小さい物体の小さい回転運動には、やはり「くるくる」が使われやすいのではなからうか。たとえば、小さなこまやどんぐりごまなどは「くるくるまわる」が普通であらう。次の例も似ている。

○僕らが始めてその女を見たとき、彼女は指先で一輪の撫子の花をくるくるとまはしながら、松林の外れの小径を散歩してゐた。（文芸 1956年8月 116）

次のような例になると、大きさの点だけから説明をつけることはむずかしくなる。「放浪記」の日がさのばあいは、軽快な感じだとは言えようか。

○日傘をくるくる廻しながら、私は古里を思い出し、丘のあの老松の木を思い浮べた。(放浪記 127)

○彼が思い切って戸の間から頭をつっこんでなかをのぞくと、すぐ前のストーブのところで、昨夜の酒保の甘味品をほおばりながら、長い右腕を大きくぐるぐる廻してモーションをつけているのが曾田だった。(真空地帯・上 133)

以上、第1に、「まわる」「まわす」などを限定する用法についてみた。第2に、「巻く」「まるめる」などの動作を限定する用法についてみよう。「巻く」には、別の物の周囲に、ある物を巻くばあいと、ある物自体を巻くばあいとがある。次の例は前者である。

○この須崎と云う男は上州の地主で、古風な白い浜縮緬の帯を腰いっばいぐるぐる巻いて、豚のように肥った男だった。(放浪記 179)

○紺縮みの着物に、手拭のように細いくたびれた帯をくるくる巻いて、かんしょうに爪をよく嚙んでいた。(放浪記 254)

上の2例は、同じ作品で、同じく帯をまきつける例であるが、どういう区別があるか、わからない。

○下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のやうにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見える丈の世の中を見渡した。(こゝろ 87)

○綿打弓でびんびんとほかした綿は箸のやうな棒を心にして蠟燭位の大きさにくるくと丸める。それがまるめである。(土・上 45)

「こゝろ」の例は「くるくる」でも成り立つであろう。「土」の例のように、細くまるめたり、かたく巻いたりする時は、「くるくる」が使われることが多いかと思われる。

第3の用法として「みる」動作を限定する「ぐるぐる」がある。

○明子は、塀を倒してどうッと流れ入ってくる水に対して、不可能な抵抗の両腕をあげたまゝ、逃げまどうような気でぐるぐると部屋の中を見廻した。(くれない 139)

○二人は異人種のやうな顔をして、忙がしきうに見える東京をぐるぐる眺めました。(こゝろ 226)

こういう用法は「くるくる」にはないようだ。見わたされる範囲はある程度以上の広がりを持つために、「ぐるぐる」だけが使われるのであろうか。

[39] 主体(液体)

なみなみとくっばいに

両語とも、何か入れ物とか、入れ物に見立て得るようなものに、中味が満ちている状態に関係する点で、共通性がある。

「なみなみと」は、中味が酒とか水とか、液体であることを必要条件とする。

- コップに二杯なみなみと冷酒をついで、(雪国 144)
- 信之は、なみなみと注がれた杯へ唇をよせて行つたが、(多情仏心・前 339)
- 植源の庭には、大きな水廻りが三つもあった。お島は男の手の足りないをりをりにはその一つ一つに、水を^{なみなみ}益々汲込まなければならなかつた。(あらくれ 92)
- 牛の前には赤飯を盛つた盆が供へられ、そのわきになみなみと「産ぶ湯」の水をたたへた銅桶が置いてあり、その水に灯かけが藉く映つてゐた。(青銅の基督 86)
- 「いっばいに」も、中味が液体である場合にも使われる。
- 一杯に汲んだ手桶の水が少し波立つて零れた。(土・上 201)
- しかし、「いっばいに」は、液体以外のものにも広く言う。
- その横から千代紙張りの小箱を出すと、いろんな煙草がいつばいつまつてゐた。(雪国 143)
- 向う腹が立ってふり向いた目の前を、砂利を一ぱいに積んだ砂利船が首ざり水にひたした恰好で横すべりに離れて行く。(むらぎも 319)
- 「あら、さうだつた、藪倉に映画があるのよ、今夜だわ。人がいつばいはいつてるのよ、あんた……………」(雪国 161)

気体のようなものの用例は資料内にはないが、「煙がへやの中いっばいに立ちこめる」などの言いかたができるのに対して「なみなみと」はそういう結びつきはあり得ない。匂いについても同様で、「いっばい」が述語として用いられた次の1例がある。

- どこを貧乏風が吹くかと、部屋の中は甘味しそうな肉の煮える匂いでいっばいだ。(放浪記 50)

[40] 形(点/線)

とがったくすどい

「とがった」は、物の形が、ある一点に集まるような形で先細りになっていることをいう。

- しかもその美しい素木造りの教会は、その雪をかぶつた尖つた屋根の下から、すでもう黒ずみかけた壁板すらも見せてゐた。(風立ちぬ 150)
- カムパネルラが、不思議さうに立ちどまつて、岩から黒い細長いさきの尖つたくるみの実のやうなものをひろひました。(銀河鉄道の夜 274)
- そのうち昭和十四年には、その土器片の中から尖った底が、とびだしてきた。尖底は古いということとはよくわかっていた。(旧石器の狩人 312)
- 尖つた鼻の上に、眼鏡の硝子が、また庭木の影を青く映し出した。(帰郷 225)
- 細い^{のど}喉で、とがった喉仏の動いているのが見える。(羅生門 14)
- 「するどい」は、上の「とがった」と同じような形に使われることもある。

○潤葉樹の類は、何時の間にか、葉を払ひ落した枝先きを針のやうに鋭く空に向けてゐた。(或る女・前 223)

における枝先は「とがっている」ということばで形容することもできよう。

○彼は叱られたり、逐はれたりすればするほど、痩せた栗色の身体で躍り上り、鋭い、突き出た口を開けて吠え、(真知子・前 102)

も、犬の口が細くとがった感じにつき出た形をしていることを言っているのであろう。

「するどい釘」のようなばあいには、とがった形とともに、それと関連して、よく突きささるという機能も意味に含まれている。他方、「とがった」は形だけを意味しており、この点でも両語の間に違いがある。

「するどい」は、「とがった」とはちがって、刃物の刃のように、ある線に集まるような形で先細りになっている形をも表わす。そして、よく切れるという、形に伴う機能をも含んでいるのが普通であらう。

○俎の上に斜に落ちてゐる夕日は、鋭い刃物に当つて屈折すると、(波 7)

○一つ一つの蟻は木の葉の表に止ま^まっていて、その鋭い剪刀^{はきみ}のような口で、木の葉の上方をばほぼ半円形に切^きって行き、(貧乏物語 62)

「するどい」が、ものの先端がとがっていてよく突きささることを言うのか、刃のように線状に細まってよく切れることを言うのか、あるいは両方を含んでいるのか、いろいろに解される例もある。

○屠手^{かいつ}の頭は鋭い出刃庖丁を振つて、先づ牛の咽喉を割く。(破戒 149)

[41] 度数(2回以上)

まがりくねったくまがった

「まがりくねった」は、屈曲が一つではなく、たくさんあるようすである。

○曲りくねつた野道を、人の影について辿^{やが}つて行くと、旋^{まが}て大師道へ出て来た。(あらくれ 18)

○そんな時、下を眺めると、曲りくねつた米代川は、少し濁りながら、悠々と流れている。(人生手帖 1954年2月 21)

○背のひくい枝が曲りくねつた松を前景に置いて方丈らしい白壁の大きな建物が立つてゐる。(帰郷 262)

「まがった」は、屈曲が一つでも、二つ以上でも自由である。

○エビのように体が曲^{まが}っている。ワァッと観衆がリング上に殺到してきた。(実話雑誌 1956年11月 146)

は一回屈曲している例である。

○大きな寺のやうな、銅の金具がまつ背に錆びた門と、緩い勾配のついた曲つた路で導かれた、同じやうに昔風な広い戸板のついた玄関は、(真知子・前 116)

は一回だけ、あるいは何度も屈曲しても、どちらでもよい。

なお、屈曲の程度に関しても、「まがった」はまったく制限がないのに対して、「まがりくねった」はあまり程度の小さい屈曲ではないという制限があると思われる。「わずかに曲った道」はまったく普通の言いかたとして成り立つが、屈曲がたくさんあっても「*わずかに曲りくねった道」とは言えまい。

次の例も、屈曲の程度の著しい状態をさししめしていると思われる。

○曲りくねったドライブウェイを、這うように進みながら、しだいしだいに近づいて来るのである。(未知の星を求めて 332)

○自転車に乗れなかった彼女，“咄の猛練習”のお蔭で何とか乗りこなせるようになったものの、道幅が一問ぐらいしかない曲りくねったこの坂道にはどうも自信がないらしい。(近代映画 1956年5月 64)

[42] 基準

はすに、はすかいにくななめに

「ななめに」はある基準に対して垂直でも平行でもない方向をいう。

○細長い油揚を対角線で斜めに切ったわけよ。(週刊サンケイ 1956年7月15日 59)

○ななめにひいた布団の上には、天窓の朝陽がキラキラ輝いていて、埃が縞のようになって私の顔へ流れて来る。(放浪記 37)

○志野田ふみ子は木屑だらけの土間を横ぎって、上りかまちななめに腰をおろした。(人間の壁・上 213)

○舳の斜めの行手に浪から立ち騰つてホースの雨のやうに、飛魚の群が虹のやうな色彩に閃いて、繰り返し海へ注ぎ落ちる。(河明り 336)

「週刊サンケイ」の例は、油揚のふちが構成する線が基準になっている。「放浪記」の例は部屋たたみと壁や戸が交わってできる線が基準になっている。「人間の壁」の例は、上りかまちのふちと直角でなく一方に傾いた方向に腰をおろしたわけだ。「河明り」の例は船体の方向が基準である。

「ななめに」はまた、次のような水平面が基準になっているとみられる例もある。

○斜めになってしまった黒い畳の上で、一人、寝て起きて仕事をした。(くれない 33)

○唯そこいらへんには斜めな日の光がくつきりと浮き立たせてゐる山巖しか私には認められなかつた。(風立ちぬ 143)

「くれない」の畳の例は、一枚の畳の全体が、あるいはその部分が水平でなくなっているであろう。

一方、「はすに」「はすかいに」も「ななめに」と同様の方向を意味する。ただし、水平面が基準になるということはない点で「ななめに」と区別されるのではないか。

○鱈に酔味がしみたら、斜はすに細く切ります。(婦人倶楽部 1956年8月付録 お惣菜料理

159)

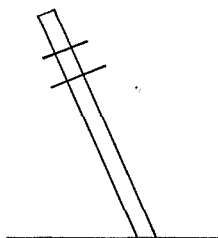
○「(上略) 奥さま, そんな, 立派な口をおきき遊ばすなら, てまえの方でも, 少し, うかがいたいことがござんしてね」

と, 女史は, 体をハスにかまえた。(自由学校 113)

○その奥に何とかいう大印刷工場のあるへんから交番の横町を**はすかい**に折れこんで行った。(むらぎも 72)

○出掛けるという時, 明子は二階へ上ってくると, いきなり広介の部屋の隅を**斜かい**に畳を擦って自分の部屋へは行って行った。(くれない 25)

「婦人倶楽部」の例のような, 料理における「はすに切る」「はす切り」という言い方はよく使われるようだ。「自由学校」の例は, 相手の人のからだの向きが基準である。「むらぎも」の例は道路が, 「くれない」の例は部屋の床と壁が交わる線が基準である。このように, 「はすに」「はすかいに」はあるものが構成する線が基準になって, 水平面が基準になることはないのではないと思われる。しかし, 用例がきわめて少ないのははっきりしたことはわからない。



(付) この項目で問題としたところに関係する, 小調査1の結果は次のようであった。(各例文に対する反応の人数は, 上段が女子大生23人, 下段は女子高校生51人の結果を示す。)

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(イ) あの電柱はななめに立っている	{ 12 15	8 22	2 14	1 —
(ロ) あの電柱ははすに立っている	{ 2 8	12 14	8 26	1 3
(ハ) あの電柱はかたむいている	{ 23 50	— 1	— —	— —
(ニ) あの電柱はまっすぐ立っていない	{ 21 24	1 20	— 7	1 —

この場面は水平面が基準になっているので, 「ななめに」が支持されて「はすに」が支持されなければ, この項目で仮定したことによって好都合な材料になると考えて試みた。

まず, 女子大生の結果のほうからみよう。「ななめに」は「普通」と「やや普通でない」とに9割が, 「はすに」は「やや普通でない」と「あきらかにおかしい」とに9割が集まったので, 弱いながら期待した傾向が出たといえようか。「ななめに」も「普通」とした人は半数に止まったわけであるが, この場面は電柱としての正常なあるべき姿ではないために, (イ)(ニ)のような, その点を積極的に表現する文のほうが自然に感じられるという要因もあるのではなかろうか。

女子高校生の結果は、(イ)と(ロ)の関係は女子大生のそれとやや似てはいるが、より否定的な反応のほうに傾いている。(イ)は問題がないが、(ロ)は約半数しか「普通」としなかった。あるいは「まっすぐ」を直線状の意味にうけとって、「普通」とみななかった人もあるのだろうか。

(43) 主体(年少者)

あどけないくむじゃきな

両語の意味は、心に不純なものを含んでいない、雑念がない、のような点で共通的な面をもっている。

上のような性質は、子どもにおいて、特によくみられるものであろう。「むじゃきな」は次のように年少者についてよく用いられる。

○斯の無邪気な少年の驚喜した顔付を眺めると、丑松は最早あのお志保に逢ふやうな心地がしたのである。(破戒 174)

○不図、廊下の向ふの方ど、尋常一年あたりの女の生徒であらう、揃つて歌ふ無邪気な声が上がつた。(破戒 301)

○かえで 子供は無邪気なものね。(考えている)

唯円 まったく罪がありませんね。(出家とその弟子 133)

○「懐ちやんは何故彼様な小さな家に越したの？」と未だ無邪気な幼童が言ふすら己に陽にしむのに、無情な連中は何かにつけて僕を揶揄し、侮蔑し嘲弄して其れで自身がエラクなたつた様に思つて居る。(思出の記・上 22)

「むじゃきな」を大人について使うときも、子どもを引き合いに出した上で使われている例が間々みられる。

○滝十郎は、子供の無邪気さで、殆ど踊りあがらんばかりに勇みたつてゐた。(多情 仏心・前 248)

○主人公はその女があまりに子供らしく無邪気なためにだれからも疑われないのを利用して、平気で友だちの前でその女をからかったり、いじめたりする事を書いていた。(暗夜行路・前 22)

○「あなたはあの人を如何お思ひになつて」丸で少女のやうな無邪気な調子だつた。(或る女・前 31)

また、犬に使われた例も若干ある。ことに「平凡」では主人公の「私」が捨て犬を拾ってかわいがったくだりで、その小犬について「むじゃきな」がくりかえし使われている。

○なまじ可愛がつて育てた為に、ポチは此様に無邪気な犬になり、無邪気な犬であつた為に、遂に残忍な刻薄な人間の手に掛つて、彼様な非業の死を遂げたのだ。(平凡 38)

○赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出し乍ら、庭に這入つて来た彼等の主人達の顔を無邪気な上眼で眺めて、静かに楽しさうに尾を動かして見せた。(田圃の憂鬱 15)

上にみたように、「むじゃきな」は人間では子どもについて、あるいは子どもと関係づけて、使われている例がかなり多いが、もちろん子ども以外についてもいくらか使われる。

○僕は茲で白状するが、此時の僕は慥に十日以前の僕ではなかつた。二人は決して此時無邪気な友達ではなかつた。(野菊の墓 12)

○まだ十六になるかならない無邪気な女に、もう心をもやしてゐるのだからね。(友情 20)

○「いくらと吹っかけました？」

と、急にひと膝のり出した西山の容子は、無邪気ながらも、^{はじめ}肇て少しは「不良」と云つた感じのものになつてゐた。(多情仏心・前 284)

○すると少女の返事は、実に無邪気な返事だつたが、おどろくべきものであつた。「^ん汝も裸になれ、そしたら恥かしくなくなるだろ」(潮騒 67)

「野菊の墓」の政夫は15歳、民子は2つ年上である。「友情」ではヒロインの杉子について「むじゃきな」がくりかえし使われている。これらは子どもから大人への過渡期の人物について使われた例であるが、大人や老人についても次のように使われる。

○故郷から送つて来た^{おいしい}美味い魚の干物をまつ子が焼くかたはらで、嘉門は無邪気に故郷の正月の話をした。(冬の宿 38)

○広介は、彼の無邪気ともいわれる性質で、相手の男がまるで女の^{えりぐら}額髪でもとっていたようにおもうことで男に対して憎悪を示し、人道的に女に同情してはありのまゝの気の好きを現わした。(くれない 137)

○うめ女は努力して、脇目をふらずに着物を引き裂いているが、その顔はいかにも無邪気であつた。(厭がらせの年齢 296)

「あどけない」は、「むじゃきな」とちがって、人間の成長段階のうちで、「おさない」といわれるような段階の人について使われるのが、少なくとも典型的な使われ方であろう。

○あの^{あどけ}邪気ない、^{おとな}制へても制へきれないやうな笑声は、と聞くと、省吾は^も最早遊びに来て居るものと見える。(破戒 206)

○斯うして^{あどけ}邪気ない生徒等と一緒に、通ひ^な忸れた道路を歩くといふのも、^も最早今日限りであるかと考えると、(破戒 300)

○あどけない^{うぶげ}生毛の渦巻のある横顔を見せ、保は、覗きこんでゐる箱から目もはなさない。(伸子・上 153)

○それから手拭の下から見えるおつぎのあどけない顔を凝然と見た。(土・上 18)

「伸子」の例は、伸子の弟の保について言われているが、少しあとに「保は十四歳で

あつた。」という一文がある。「土」の例については、少し先に「おつきは十五であつた。」とある。これらは、「おさない」段階の人に使われた例といえることができるだろう。

○末広は肩をすぼめて、「再建だんご」ののれんを潜ろうとしかかると、突如、千秋があどけない眼に力をこめて、そのまなざしが追いつがってきた。(別冊文芸春秋 1956年52号 147)

では、少しあとに「末広は、この二十にも満たない小さな千秋によって、そのじゃじゃ馬めいた口先きに翻弄される自分を知った。」とある。「千秋」がおさない年齢と言えるか疑問であるが、おさなさを感じさせるようなむじゃきな感じを表現しているのであろう。

○池田さんは、一つ、飛び抜ける程にアドケない笑顔を見せてから、(文芸春秋 1953年 11月 265)

は檀一雄「小人閑居」という随筆的な文章の中の例で、池田さんというのはよく出入りしている箱屋である。これはおもしろおかしく書かれた文章であるが、まったくの大人に「あどけない」が使われている。「童顔」ということばもあるが、やはり大人であっても子どもらしい感じがするために「あどけない」が使われたものであろう。

上にあげてきた例の中からもうかがわれるように、「あどけない」の意味には「むじゃきな」に共通する面があると同時に、こどもっぽい無心なかわいらしさも大事な要素になっていると考えられる。これはいうまでもなく、「あどけない」の主体が年少者であることと表裏一体となすことだといえよう。

(44) 主体(老人)

かくしゃくたる・とくげんきな、じょうぶな、たっしゃな、壮健な

これらは体力や気力がさかんであることを表わす点で共通性がある。「かくしゃくたる」は血気さかんな若者の元気さ、丈夫さとはやや違った、老人特有のしっかりしたよすを表わす語である。

○五分刈の頭髪は太い眉毛や口髭と共に雪のやうに白くなつてゐるので、血色のいゝ顔色は猶更靨らみ、瘦せた小づくりの身体は年と共にますます矍鑠としてゐるやうに見える。(つゆのあとさき 51)

○呑ん平に言わせれば、百四十才までかくしゃくとして、死ぬ前日には夫人の大手術をチャント果した大酒飲みの外科医ポリテマン氏や、(主婦の友 1956年1月 473)

○後宮は近郷きつての豪農で闘牛に関してはマニアに近い性格の、一見古武士のやうな矍鑠たる七十をこした老人だつた。(闘牛 89)

○中には、幸田露伴の如く、老いてますます頭脳は冴え、矍鑠たる人間もいるが、それは特例であろう。(厭がらせの年齢 293)

「げんきな」「じょうぶな」なども次のように老人について使われることはある。

○「をちさんなんか。まだまだそんなに老込む年ぢやないわ。六十になつても、いやになる程元気な人があつてよ。」(つゆのあととき 114)

○「(上略)はい、はい、此^{わし}爺も此通り丈夫、まだ中々急に片つきそうでもない哩、はははッ」(思出の記・上 220)

○丑松の父といふは、日頃極めて^{はげ}壯健な方で、^{はげ}激烈しい気候に^{であ}遭遇つても^か風邪一つ引かず、^が鍛量な^{からだ}体軀は^{かへ}反つて^わ壯夫を^あ凌ぐ程の^{いんき}隠居であつた。(破戒 90)

○父は其頃未だ五十であつた。^{はな}達者な人だけに^{はな}気も若くて、まだまだ十年や十五年は大丈夫生てゐると、^{はな}傍の私達も思つてゐたし、自分も其は其氣でゐた。(平凡 51)

しかし、これらの語は「かくしゃくたる」とちがって老人以外に広い年齢層にわたって使われることは例をあげるまでもなく明らかであろう。

[45] 主体(女性)

しとやかな^なものしずかな、上品な

「しとやかな」は動作や言語がものしずかで上品なことをいうが、女性について使われる。

○外に出ると思ひの外愛想がよく客に招かれた時などは言語動作が至つてしとやかで色気があり家庭で佐助をいぢめたり弟子を打つたり罵つたりする婦人とは受け取りかねる風情があつた(春琴抄 182)

○男は大抵乖戾放慢の徒で、女はまづ禽獸と大差なきものと思込んでゐる矢先、鶴子の言葉使ひや拳動のしとやかな事がますます不可思議に思はれ、(つゆのあととき 54)

○列座の人々はまだ殊勝らしく頭を^{うなだ}首垂れてゐる中に、正座近くすゑられた古藤だけは昂然と眼を見開いて、襖を^あ開けて葉子がしとやかに^{みまも}這入つて来るのを見成つてゐた。(或る女・前 64)

○老舎監はしとやかにいつた。(波 374)

資料内の17例すべて女性に関して使われている。主体が女性に限られていることは、そのあらゆる性質の内容と深くかかわり合っている。すなわち「しとやかな」は、日本的な伝統の中で女らしきとして尊重され、要求されてきたような、つつましき、やさしき、やわらかさのような要素を重要なものとして含んでいる。

「しとやかな」は

○「あたしは宗教画が好きなんです」と女性がいう。「それはあなたがしとやかな御性格だからだ。今どきの若い人には珍しい」と男性の声、(中央公論 1956年10月 235)のように内面的な性質をいうこともあるが、

○先生の御ひいきは、当然この学校生えぬきの、それも頭のよい、実際はともかく、

表面しとやかな女の子達であつた。(心 1954年2月 80)

○その島田髻や帯の乱れた後姿が、嘲弄の言葉のやうに眼を打つと、親佐は唇を噛みしめたが、足音だけはしとやかに階子段を上つて、(或る女・前 27)
のように、内面とは必ずしも一致しない、外面的なようすをいうこともある。

「ものしずかな」は

○小さいときから、一度この白浜へきてみたいと思ってましたが、景色はいいし、もの静かだし、期待していたとおりでしたよ。(明星 1956年4月 201)
のように、場所などの静かさにも言うが、人間の態度、言語などについても言う。そして、

○「それ程のものではありません。」

河井はもの静かな、おつとりした態度で受けた。(真知子・前 24)

○「御察じなく……」重四郎は物静かに答えた。(小説と読物 1956年9月 136)
のように男についても使われる。

「上品な」は広くいろいろについて使われるが、人間の動作・態度・言語などについて使われるばあい、男にも女にも言うことはいうまでもない。男女それぞれの例を2つずつあげてみよう。

(男)

○確かに、貴公子に見るやうな上品な風采と態度は、誰でもすぐ目につく彼の特長であつた。(真知子・前 26)

○「臭いね。」綺麗な口髭の若い士官が、上品に顔をしかめた。(蟹工船 79)

(女)

○私もまだどこへ勤めるあてとともないときだし、ひとつはその婦人の上品な言葉や姿を信用する気になつてそのままふらりと婦人と一緒にこの仕事場へ流れ込んで来たのである。(機械 9)

○中に入つてゆくと三十を少しすぎた、色の白い女が出てきて上品に挨拶した。(冬の宿 9)

(付) 本文中にのべたように、「しとやかな」の17例はみな女性に関して使われているが、念のために小調査2で次の例文を試みた。

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
しとやかな青年	{ (男) 17 (女) 5	14 30	25 17	— —

男は半数近くが「あきらかにおかしい」とし、女は約3分の2が「やや普通でない」とした。しかし、「普通」とした人も男に3分の1ならず、女に約1割あったことは意外であった。あるいは、「男性の女性化」といわれるような近年の風潮が、「しとやかな+青年」という結びつきに対する若い人の反応しかたにも影響しているのであろうか。

〔46〕 主体（女性）

あでやかなくうつかしい

「あでやかな」ものは「うつかしい」ものであるが、「うつかしい」ものは「あでやかな」ものであるとは限らない。「あでやかな」は「うつかしい」に比べると、いくつかの面で狭く限定されている。

主体の面では、「あでやかな」は主として女性について言われる。

○美しい姿、当世流の庇髪、派手なネルにオリイヴ色の夏帯を形よく緊めて、少し斜に坐つた艶やかさ。（蒲団 34）（「艶やかさ」の読みは改造社版現代日本文学全集のルビによって「あでやかさ」とした）

○甲の色のつやつやとした小さな手をつましく膝に置いて俯向き加減にしてゐる盲目の貞のあでやかさは一座の髓を悉く惹き寄せて恍惚たらしめたのであつた。（春琴抄 189）

○「芳子さん？」

「ええ。」

と艶やかな声がする。（蒲団 33）

○うつすり化粧もし直したらしいおもんが、立つて出迎へながら、すばやく目つきで制めると、すぐあでやかな笑顔になつて、（多情仏心・前 84～85）

○（あれ、嬢様ぢやうさまですつて、）と稍調子やうてうしを高めて、艶麗あてやかに笑つた。（高野聖 37）

○古藤に続いて入口に近い右側の空席に腰を下ろすと、あでやかに青年を見返りながら、小指を何んとも云へない好い形に折り曲げた左手で、鬢おくれげの後毛をかき撫でる序に、地味に装つて来た黒のリボンに触つて見た。（或る女・前 7）

などは、女性の姿・顔・声・笑い・動作について使われている。これらの例からもうかがわれるように、「あでやかな」はぱっと花の開いたような、はなやかな美しさであつて、地味な美しさとはちがっている。主体がおよそ女性に限定されていることと、あらかず美の内容が女性的な花やかさ・なまめかしさなどを含むものであることとは表裏一体の関係をなしている。

○三木鶏郎の日曜娯楽版にでてくるのは、あの当時は昭電事件ばかりだ。実に色どりがあでやかだ。昭和「鹿鳴館」時代の社会相を端的に表しているよ。秀駒女史とか鳥尾子爵夫人なぞ妙な女がでてくるし……（笑声）」（世界 1954年2月 183）

は「あの頃のこと——片山内閣から桑港講和まで——」という座談会の中の、土屋清氏（朝日論説委員）のこたばの一節で、日曜娯楽版の材料になった昭電事件に、女性関係がにぎやかにからんでいたことを「色どりがあでやかだ」と皮肉まじりに言ったものであろう。

○睨目した美女のやうなあでやかさをもつて、黒光りする板の間に神々しく照り輝きながらじつと身を横へてゐる。（厚物咲 39）

は女性にたとえながら、菊の花に「あでやかな」が使われている。

○細かな昔に蒼んだ古い庭土の窪みなどに、どこから飛んで来たか、桜の花弁の、三つ、六つ七つ、散り敷いてゐるのは、行く春の蔭たけて艶なる風情だった。(多情 仏心・前 354)

は女性とは関係なく使われた例である。(ただ女性的な優美さを含んだ情景に使われているとは言えよう。)

「うつくしい」は広汎なものごとにならって使われる。人間を主体とするばあひも、「あでやかな」とはちがって、女性に限定されるということはなく、男性にも使われる。

○今朝の美しい機関士も、ビスケットをボリボリかみながら一寸覗いて通る。(放浪記 189)

○それにしても何んといふ上品な美しい青年だつたらう。(或る女・前 209~210)

○あなたならあのこのあいだ善鸞様の所に見えた、若い、美しい坊様のほうがお気に召しましょうけれどね。(出家とその弟子 88)

○しかし、この神経質で美しく利口な少年の眉間に、ときどき嵐の前の稲妻のやうに閃く一つの表情を知つてゐた。(冬の宿 53)

[47] 主体(女性)

なまめかしい、いろっぼい、あだな、濃艶な、妖艶な、凄艶な

これらの語は、女性の姿・表情・しぐさなどが、男の心をそそるような性質をもっていることを含んでいる点で共通性が考えられよう。

「なまめかしい」の次にあげるような例は明らかに、上のような女の性質を男が感じているものである。

○「四谷へ買物に。」

と言つて、ちつと時雄の顔を見る。いかにも艶かしい。時雄は此の力ある一瞥に意気地なく胸を躍らした。(蒲団 16)

○襲子は上目を使つて、じろつと彼を睨んだ。それがひどくなまめかしかつた。(波 287)

○清阿は憎い仕方だとは思ひながら、もともと嫌ひではない女のいかにも艶しく情を含んだ姿を見ると、其の瞬間はさすがに日頃の怒りも何処へやら消え去つて、(つゆのあとさき 46)

○彼の失望ぶりは釣区よりもあの妙になまめかしかつた女にたいする未練のやうに聞えて瀬谷には可笑しかつた。(厚物咲 22)

○「あんな事仰云つて、些っともお色に出ていないじゃございませんか」女は嬌めかしく身をひねった。(傑作倶楽部 1956年11月 363)

次の例のようなばあいは、その場に特定の男が居ないが、やはり男の欲望をかきたてるようなうすという点で、上のような例と大きな違いがない。

○けげばばしい電燈の光はその翌日の朝までこの媚かしくもふしだらな葉子の丸寝姿を画いたやうに照してゐた。(或る女・前 132)

上にあげてきた例は「なまめかしい」が女性そのもの、または女性の動作などを主体として使われたものであった。「なまめかしい」は、使用範囲が拡張されて、女性の身につけるものなどについても使われることがある。

○ランプがほの暗いので、部屋の隅々までは見えないが、光りの照り渡る限りは、雑多に置きならべられたなまめかしい女の服地や、帽子や、造花や、鳥の羽根や、小道具などで、足の踏みたて場もないまでになつてゐた。(或る女・前 33)

○ムスク、アムバーの入ったものは奥様向き。パリの劇場にいくと、波みのある、そしてなまめかしさを持ったこれらの番で一ぱいです。(装苑 1956年7月 102)

次にあげる「雪国」の例は天の河を女性のように感じ取って表現しているということ で説明してよいであろう。

○裸の天の河は夜の大地を素肌で巻かうとして、直ぐそこに降りて来てゐる。恐ろしい艶めかしさだ。(雪国 163)

また、次のような例では、「なまめかしい」は女性との交渉や、情事に関係のある、 というような意味になっていると解される。

○年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎んでゐるのだらうと思つた。(こゝろ 33)

○道修町は菓屋の多い区域であつて堅儀な店舗が軒を列ね遊芸の師匠や芸人などの住宅のある所でもなしなまめかしい種類の家は一軒もないのである(春琴抄 154)

「いろっほい」も同じく女性の全体的な姿や、表情・しぐさなどについて言う。

○「ところが綺麗で、色つぼいのよ。何しろ此の土地で一番いそがしい人ですもの。」
(つゆのあとさき 63)

○視診によると、眼球に艶がありすぎて、色つぼい味はひの出るところからすると、 乱視眼に違ひない。(本日休診 101)

○それを、大口に、ガブリとやると、急に、眼の色を、イキイキさせて、体を斜めに、色ッ ぼい微笑を、送ってきたのには、五百助も、後世恐るべしと、考えた。(自由学校 252)

○「(省略)」

と、これは、シャがれたくせに色ッぼい、女の声だった。(自由学校 31)

「いろっほい」が男性に関して使われた例もある。

○顎を引いて、流し目にちつと信之を見た。そこには、妹だと、どうかした拍子に唇に漂ふところのものが、真にしたゝるばかりだつた。とてもそれとは勝負にならないまでも、なんとか少しは色ッぼい返事がしたかつたけれど、生憎と信之には、全

くなんの記憶も甦つて来なかつた。(多情仏心・前 102)

これは文脈からみて、やはり色気のあるという意味のようである。また、人間の男性ではないが、

○私はお釈迦様にでも恋をしましょう。ナムアミダブツのお釈迦様は、妙に色ツぼい目をして、私の此頃の夢にしのんでいらっしやる。(放浪記 116)

という例もある。

しかし、こういう使い方は日常語の中のごく普通なものとしてはありえないであろう。男女の関係がはげしく変わっていくと、どうなるかわからないとしても、少なくとも従来は「いろっぼい」は女性に関して使われるのが原則であったとはいえるだろう。

「いろっぼい」も「なまめかしい」に似て次にあげるような例では、恋愛や情事に関係がある、のような意味になっているとみられる。

○詳しい話はたうとう出なかつたけれど、何か少しぐらゐ色っぼい場面もあつたらしいから、その懐旧の情ですか。(多情仏心・前 113)

○お島はさう言つて小野田にも話したが、そこにお島の身のうへについて、何か色っぼい挿話がありさうに、感の鈍い小野田にも想像されるほど、彼等はお島と狎々しい口の利き方をしてゐた。(あらくれ 213~214)

「あだな」「濃艶な」「妖艶な」「凄艶な」なども女性について用いられる。どぎつい、妖婦的な美しさに傾いている語であろう。用例が、1, 2例ずつしかないのので、そのすべてをあげてみよう。

○何か抵抗すべからざる力で若い彼の心臓を湧き立たせ、真昼の端正な「伎芸天」迄が妖艶、婀娜な姿に変わって燃える眼で彼を内から外へ誘ひ駆りたてたのであつた。(青銅の基督 20)

○「木村舞踊団なんかより余程濃艶だ。」

「何が濃艶なの。」

「君江さんの肉体美のことさ。」(つゆのあとさき 85)

○毎日々々凍りつくやうな濃霧の間を、東へ東へと心細く走り続ける小さな汽船の中の社会は、あらにはは知れないながら、何か淋しい過去を持つらしい、妖艶な、若い葉子の一挙一動を、絶えず興味深くちつと見守るやうに見えた。(或る女・前 132)

○皮膚の汚点や何かを隠すために、こつてり塗りたてた顔が、凄艶なやうな蒼味を帯びてみえた。(あらくれ 227)

「青銅の基督」の例は、女性ではなく、仏教の天女の像であるが、夜になると女性的な魔力をもって若い主人公を悩ませたことを述べているので、女性を主体としたものに準じて考えられる。

めめしいくよわよわしい、いくじ(が)ない

「めめしい」は男でありながら、女のようにであり、いくじがないという意味であるとすれば、次の例のように男に使われるのが本来の用法であろう。

○奈^{どん}何な苦しい悲しいことが有らうと、其を女々しく訴へるやうなものは大丈夫^{だいじやうぶ}と言はれない。(破戒 270)

○歌つてゐる中に、声が顫へ涙が頬を伝はつた。女々しいぞと自ら叱りながら、どうしやうもなかつた。(李陵 201)

資料内には10例あまりしかないが、次の1例を除いて、男について使われている。

○真知子は姉のこれ等のやり方には賛成されないものがあつたし、傾向や趣味から云つても違つてゐるに拘らず、かつきりした、女々しい点のない自由なその性格は嫌ひではなかつた。(真知子・前 22)

「よわよわしい」「いくじがない」はそれぞれ用法が一樣でないが、「めめしい」と対応するような用法について比べてみよう。これらは次のように男について使われることもある。

○曾田は染の態度にくらべてみて、自分の方がはるかに弱々しくおとっているということ^{こと}を心に痛くかんじさせられた。(真空地帯・上 204~205)

○余程男らしく振舞はうと思つて居たにも拘らず、いざ告別^{わかれ}の際^{きわ}になつて、松村が車の上から、

「其れちや——君も早くして来玉へ」と云ふと、僕はつい意気地なく涙をこぼしてしまつた。(思出の記・上 99)

しかし「よわよわしい」「いくじがない」は、次の例のように女についても使われ、性別による制限がない。この点でも「めめしい」と区別される。

○彼女は頼りなく弱々しい泣きたい気分になつてある街角から電車に乗つた。(伸子・上 63)

○ところが、叔母さま、この頃、自分の意気地^{いぢぢ}なさ^{なさ}に、驚くことがあります。(自由学校 310)

[49] 主体(話す活動)

りゅうちょうなくなめらかな、スムーズ(ズ)な、よどみない、(すらすらと)

これらの語は、ことばや動作、ものごとが途中でつかえることなく、調子よく運ばれていく状態という点で共通性をもっている。

これらの語のうちで、「りゅうちょうな」は話す活動についていう。

○その男は受け取った罐のほり紙を見ながら、至極流暢^{りゅうちやう}な発音で、

「ええ、ピューワ・イングリシュ・オーツ」と言った。(暗夜行路・前 178)

○路を行けば、美しい今様の細君を連れての睦しい散歩、友を訪へば夫の席に出て流

暢に会話を賑かす若い細君, (蒲団 11)

○「私, 日本語が話せません。南米に永くいて, 日本の友人が沢山あったので覚えませんでした」

と相当流暢にいった。(心 1954年1月 58)

「なめらかな」なども, 話す活動についていう場合がある。

○木村は急に弁力を回復して,

「一日千秋の思ひとはこの事です」

とすらすらと滑らかに云つて退けた。(或る女・前 196)

○部屋をみせてほしいといふと, どこかの地方訛ののこつたなめらかな言葉で, 顔を赤らめながら, すこし警戒するやうに, 私の学校や今迄ゐたところや郷里を訊ねたのだつたが, (冬の宿 9)

○スムーズに言葉の出ないバツの悪いとき, だがスージーやマリが出てくると, ケリーは急に, 何だよ此の子は, と持ち前の突剣どんに戻るのだった。(文芸春秋 1954年3月 290)

○直子は, 云ひ出してしまふと, 彼女のしつかりした^{きしやう}気象をあらはして, よどみなく進んだ。(伸子・上 121)

○恭吾は振向いて, 給仕を呼び, すらすらと出る英語で, 注文を下した。(帰郷 36) しかし, 「なめらかな」などは話す活動以外の動作についてもいう。

○^{かしど}怪扉は内側に^{なめ}案内滑らかに開いた。(伸子・上 12)

○育英学舎に於ける僕の生涯は, 何の波瀾も変化もなく, 流水の如く滑らかに進むで居たが, 野田伯父の家には悲む可き一の出来事があつて, 其がまた終に僕の生涯に一曲折を^な造す^{もと}原となつたのである。(思出の記・上 122)

○連絡にはグループのキャップが当たるので, 運営は案内スムーズにいらいます。(主婦と生活 1956年2月 162)

○襲子は自分の方に帳面を引寄せて, 万年筆ですらすらと住所姓名を書込んだ。(波 262)

○こういう雰囲気教室を支配しているとき, どんな勉強でもすらすらと進む。(人間の壁・上 88)

「よどみない」の例は資料内にはないが, 話す活動以外の動作にも使えるだろう。

ここで扱った数語の意味の間には, もちろんいろいろな意味・用法の異同が存するであろう。たとえば「りゅうちょうに」と, 話す活動について用いられた「すらすら」とを比べると, 資料内の用例に関しては次のような傾向がみられる。「りゅうちょうに」は話す人にとって母国語でない言語を上手にあやつる場合の用例が多い。一方「すらすら」とも, さきの「帰郷」の「すらすらと出る英語で」という, 同様な例もあるが, 次の例にみられるような, 心理的なひっかかり, こだわりなどがなく言葉が口から出るよ

うな場合の用例が多い。

- 今朝からの苦しい憂ひは解け、勇気が蘇つた。
「汝^のんとこへ、川本の安夫が入聲に行くちふの、本当か」
この質問は、すらすらと若者の口から出た。(潮騒 38)

(50) 手段(ことば)

ぶっきらぼうなくぶあいそな、すごい、そっけない

これらの語の意味には、相手に対する愛想のない態度という点で共通の要素が考えられる。そして、「ぶっきらぼうな」は、ことばによる態度について言い、他の語にはそういう制限がない。「ぶっきらぼうな」は次のように「ぶっきらぼうに」の形で「言う」を限定している用例がしばしば多い。

- 「わしへの用はそれだけでせう。ちや^は忙しいで行きますよ」
とぶつきらぼうに云つて事務長が部屋を出て行つてしまふと、残つた二人は妙に^てれて、(或る女・前 227)
- じろりと睨みすえて、ブッキラ棒に、上り給えというなり、さっさと奥の書齋兼応接間へ入った。(文芸春秋増刊 1954年6月 秘録実話読本 33)
- 「言う」のほかに「答える」「応じる」「しゃべり合う」などを限定している例がある。
- 「あれたうもろこしだねえ。」とジョバンニに云ひましたけれども、ジョバンニはどうしても気持がなほりませんでしたから、ただぶつきら棒に野原を見たまま、「さうだらう。」と答へました。(銀河鉄道の夜 302)

の「ぶつきら棒に」はすぐ次の「野原を見たまま」ではなく、文末の「答へました」にかかっているものとみられる。

- 時ならずたたき起された宿直員の不機嫌な声が「晴れたり曇つたりですよ。」と、
ぶつきら棒に響いて来たと思ふと、電話はそのまま先方より切れた。(闘牛 137)
- の「電話の音がぶつきら棒に響いて来た」という言い方は、ことばを受け取る側からの表現である。

- 「お帰りなさい。何時からお出かけ?」「すぐ出ます」と彼はふりかえりもせずにぶっきらぼうな返事をした。(人間の壁・上 108)
- のように、連体形がことばを表わす名詞を修飾している例もある。

- 船長のぶつきらぼうな若い助手が、
「おい、一寸尻^は上げてんか」
と云つて、二人の下から板を引張り出した。(潮騒 55)

- 「瞬^たくなりました。」
とぶつきらぼうの私も雪江さんだけには言ひつけぬお世辞も不^つ覚^い出て、(平凡 75)
- のように、人を表わす名詞にかかって、人の性質の表現のようにになっている例もある。

これらも、主としてその人のことばの様子に表われる性質と考えてよいであろう。

また、「ぶっきらぼうな」はことばのうちの話しことばについて言うのがふつうであるが、資料内に1つだけ書きことばについて使われた例があった。

○女優さんなぞさいん攻めにあふと、たいてい名前だけ書いて済まされるようであるが、凡そ文学者と名がつくからには、何のなにかし何兵衛と、ぶっきら棒には書けない。やはり好日天青くらゐは書かずにゐられないのである。(葎しの手帖 36号 1956年 181)

「ぶあいそうな」もことばに表われたようす・態度の例が多い。ことばが、対人態度において、何といつても大きな、あるいは主要な役割をはたしているためであろう。

○「なぜでもいやだ」謙作は不愛想に言った。(暗夜行路・前 44)

○而して或る日「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無愛想に云つて退けた。(或る女・前 10)

○「うん」謙作は自分でも少し不愛想だと思ふような返事をした。(暗夜行路・前 93)

○「茂木さんと、会う約束があるんですが…」と、高橋がいうと、
「この上です」

無愛想に、その男が答えて、パタンと、扉を閉めてしまった。(自由学校 239)

しかし、「ぶあいそうな」はことばとは限らず、広く態度や表情について言えることはいふまでもない。

○平生むっすりしていて、訪ねてきた肉親の兄にさえ、原因はあったにしろ傍目にも具合わるいほど無愛想にしていた片山が、やはりむっすりとしたまま、戸棚から、とろろ昆布やら梅干やら佃煮やらを出してきて、葉罐で湯を湧かして、女のように細かく気がついて小まめに並べてくれたのが 安吉にありがたかった。(むらぎも 211)

○まもなく、その芸者がはいつて来た。芸者は若かった。そして突に不愛想にしている三人を見ると、取りつき端がないようにちょっと赤い顔をした。(暗夜行路・前 31)

○嘉門は不愛想な顔をして高をじろろながめてゐるが、かうした嘉門のやうな男にかぎつて、民族的な感覚は単純で激しいのである。(冬の宿 39)

○「うう？」謙作は浪花節の事だろうとは思つたが、よく通じないやうな、そして故意に無愛想な顔をして、また義太夫をかけた。(暗夜行路・前 172)

はじめに見た「ぶっきらぼうな」に関しては、上の例にみられる「ぶあいそうな」とはちがって、「*ぶっきらぼうにしている」「*ぶっきらぼうな顔」のような言いかたは成り立たないであろう。

○駒子を救ってくれたのは、配給所の平さんだった。シベリヤ帰りで、いつも、ムツリと、不愛想な男だったが、あの腕力には、駒子も驚いた。(自由学校 123)

○高い、不愛想な看護婦は、狡猾な意図を露骨にあらはした顔をドアに覗けた。(真知子・前 207)

のような、人の性質を表現する「ぶあいそうな」もことばの様子だけに関する性質とは限らず、顔つき・そぶりなども含まれ得るだろう。

「すげない」「そっけない」も

○其時農家で尋ねて見玉へ、門を出るとすぐ往来ですよと、すげなく答へるだらう。

(武蔵野 20)

○「嫁になんざ出せねえよ、今ん処俺れ困つから」勘次はそっけなくいつた。(土・上 217)

のように、ことばについて使われることもある。しかし、

○叔父と叔母とは墓の穴まで無事に棺を運んだ人夫のやうに、通り一遍の事を云ふと、預り物を葉子に渡して、手の塵をはたかんばかりにすげなく、真先きに舷梯を降りて行つた。(或る女・前 80)

○そして解けかゝつた、胸の氷嚢をはづして、黙つて台所に立つてしまつた。その素振が何となくそっけなかつたので、行介は少しがっかりした。(波 221)

のように、ことば以外の動作・そぶりなどに表われてもよい。

[51] 主体(人などの動作)

すばやく、びんしょうに、てばやく、さっさと、<はやく、さっと

これらの語は、速度の大きいようすを表わす点で共通性がある。

「すばやく」は人や動物のいろいろな動作についていう。2番目の「田園の憂鬱」の例は犬の動作について使われているが、別に人の動作になぞらえて「すばやく」が使われたとみなくてよいだろう。

○「は>>>。」

と笑ひ葬つて、丑松は素早く自分の机の方へ行つて了つた。(破戒 28)

○彼の目には、もんどりを打つ竹ぎれからす早く身をかはして、いきなりそれを目にかけて飛びかかると、その竹片を唾へたまま、真しぐらに逃げて行く白犬が、はつきりと見えた。(田園の憂鬱 107)

○胡椒少々を加えてすばやくかき混ぜ、(婦人倶楽部 1956年6月付録 夏の一品料理 47)

○「叱! 静かに!」君香は四辺を素早く見廻はし乍ら云つた。「一寸、出ていらつしやい! 大変な事なのよ!」(青銅の基督 107)

○そう面倒臭そうに言つて、そむけた顔には、明らかにあわてた色と苦悩がのぞいているのを、巡査は素早く見てとつた。(娯楽よみうり 1956年7月6日 21)

以上、「すばやく」は人や動物の動作にのみ使われるとしたが、資料内(80余例)には1例だけこの規定に合わないものがある。

○中性子は核反応をおこさせるときに最もすばやく核内に侵入できるので特別の花形である。(科学読売 1956年8月25)

「中性子」について、ほかに「侵入」「花形」という語も使っているので、擬人化した表現かともみえる。また、「すばやく」は自ら運動しうるものに使われるのであって、「中性子」はここでそういうものとしてとらえられていると言うべきであろうか。

「びんしょうに」も「すばやく」に似て、人や動物の、上と同じような動作や働きについて使われる。5番目の「田園の憂鬱」の例は、2匹の犬がいなごをつかまえる動作について使われたものである。

○「ドラ！」

と、名前のアブドラをちぢめて澄んだ声で左衛子が呼ぶと、小腰をかぢめて敏捷に、自動車のところに戻つて来た。(婦郷 10)

○「ほう。」

と、身をすくめて避けたのと叫んだのが殆ど同時で、逃げようと立ち上つて身をひるがへした相手に敏捷に躍りかゝつてゐた。(婦郷 115)

○ただ、筋の立たない、美しい線と、敏しように指の動く、美しい手なのです。(婦人画報 1956年9月53)

○番頭は、職業的な目つきを敏捷に働かして、頭のとつべんから足の爪先まで、客の容子をひと舐にべろりと物色した。(多情仏心・前 300)

○彼等の一疋はそれを見出す点で、他の一疋よりも敏捷であつた。(田園の憂鬱 44)

「てばやく」「さっさと」は次の例のように人の動作について使われる。

○彼は手早く寝間着に着かえ、枕もとに鞆や本を積みあげた。(人間の壁・上 125)

○一泊の新婚旅行に出発しましたが、会場は青年団の女子部が、手早く後片づけにかかりました。(家の光 1956年12月 121)

○私は「おや」と思ひながら、さつさと自分の河沿ひの室へ入つた。(河明り 275)

「さっさと」の用例(73例)のうち、人以外に使われた例を次にあげる。

○大抵の犬は相手は子供だといふ面をして、其儘匆々と行かうとする。どつこいとボチが追蒐けて巫山戯かゝる。(平凡 37)

○さらに幾夜かがあつた。中隊を出る時三日月であつた月は、次第に大きさと光を増して行つた。片側の嶺線からのぞき込むやうに現はれると、谷を蔽ふ狭い空をさつさと越え、反対側の嶺線に隠れた。(野火 47)

「平凡」の犬の例は、擬人的な書きぶりであるが、犬・ねこなどの高等動物には擬人的にでなくても「さっさと」が使われる可能性もあるかと思われる。「野火」の月の例は擬人的な表現としてはじめて可能なものと考えられる。「さっさと」の主体は人または人に準ずるような有情物の動きに制限されているとみられる。「てばやく」は人の動作に使われた用例ばかりであるが、サルなどの動作についても使われる可能性はあるだ

ろう。

「はやく」「さっと」も人（や動物）の動作に用いられることがある。

○拙速にはならない程度に早く撮る——という行き方で、全くやせますよ、元々私は肥っちゃいないんですが。（読切小説集 1956年7月 424）

○でも、背の小さいやせている人が小股に走れば、早く走っている様に見えますから、僕なんか損ですよ（ベースボールマガジン 1956年6月 193）

○津上を見かけると、さつと立上つて、歯切れのいい口調で、

「僕、三浦です」と言つた。（鬮牛 121）

○翌日、昼食中にターナー看守が自分の傍に来かかった時、ロバートはサッと手を挙げた。（文芸春秋 1956年3月 238）

○二三歩あるき出したとき、何に驚いたのか、胸の愛猫がさつと飛び出し、大桶の幹おびきくすをすするすと登っていった。（小説と読物 1956年7月 364）

○ちょうど生れ故郷へ帰ってきたように上空を二、三回旋回したのちサッと湖水に舞いおりた。（週刊誌売 1956年2月12日 16）〈白鳥についての描写〉

しかし、「はやく」「さっと」は人や動物以外のものの動きにも広く用いられる。

○「早い、実に早く沈むなあ。地球が廻つてるんだよ。だから太陽が沈むんだよ」（野火 129）

○火が来た。理由のない火が、私を取り巻く草を焼いて、早く進んで来る。（野火 178）

○脚を掴んでる男が、靴でとっつき扉を乱暴に蹴った。扉があいて眩しい光が、さつと流れた。豪華な部屋がそこにあった。（読切倶楽部 1956年8月 405）

「すばやく」「びんしょうに」「てばやく」「さっさと」の主体が人間（や動物）の動作にかざられていることは、これらの語が人（や動物）の自発的な意志の発動によって速いようすを表わすことと表裏をなしている。

○行介は手紙を出して無言のまゝ駿の前に突きつけた。駿の顔色が急にさつと変つた。（波 395）

のような「さっと」をおきかえて「顔色がすばやく変わる」などと言うことはできない。それは、こういう場面は、人間に関係した変化を表わしてはいるが、自発的な意志による変化でないために、「すばやく」と調和しないのであろう。

〔52〕 主体（手を使ってする動作）

てばやくくすばやく、さっさと

いずれも動作が速い速度で行なわれるようすを表わす点で共通性がある。

「てばやく」は手を使って行なわれる動作に関して使われる。

○「遅くなって、御免なさい」

ふみ子は廊下で手早くレインコートを脱ぎながらそう言った。(人間の壁・上 38)
 ○彼女は海水帽を脱いで、髪の間から何かを取出すと、手早くその中の一つを口の中に放り込んだ。(波 348)

「てばやく」が手を使う動作以外の動作に使われたものは次の3例がある。(50例中で)

○赤座は単的に用件を手早く云つていただきませうと云つたきり、むつつりと黙りこんでしまった。(あにいうと 138)

○ようし、そのつもりでミツチリと働いて暑い土用に日乾しにならないやうにするんだと、赤座はもう次に石を下ろすことを手早く命令した。(あにいうと 156)

○ただ、現在のような撮影所の仕事ぶりでは、大作に一、二本かかれば、他に早撮り映画の、手早くあげる作品をどうしても出さなければならないから、企画の正しさなど云ってられないものだろう。(笑の泉 1956年12月 191)

「あにいうと」の2つの例は「てみじかに」と同じような用法になっている。少数ながらこのような例があることは「てばやく」の用法が広がる兆候を示すものであろうか。しかし現在では、基本的には「てばやく」は手の動作に限られていると認めてよいであろう。

「すばやく」「さっさと」も手を使ってする動作に使われることがある。

○その間にも先生は素早く靴下をぬぐ。(明星 1956年10月 252)

○それから広介の机の上の茶道具などをす早く片づけてとんとんとと梯子段を駆け下りた。(くれない 61)

○それはシユルシユルシユルといふ、布を素速く手繰るやうな音であつて、道の前方から、匍ひ寄るやうに近づいて来た。(野火 73) <「それ」は沖を通る内火艇の音>

○さつさと如露を動かすと、水滴がひろがつて土に落ちるとき、軟かい清らかな粒の揃つた音がした。(伸子・上 169)

こういう「すばやく」「さっさと」は「てばやく」におきかえても一応文意は通ずることが多い。

しかし、「すばやく」「さっさと」は手を使う動作以外にも使われる。

○「(省略)」

と云ひながらすばやく眼くばせすると、事務長はすぐ何か訳があるのを気取つたらしく、巧みに葉子にばつを合せた。(或る女・前 201)

○三人は通行人の眼をさえぎるように、素早く伍一をとりました。(小説の泉 1956年3月 132)

○安夫は石の坂道を、足音のしない運動靴ですばやく昇り、五分咲きの桜並木にかこまれた小学校の広庭を抜けた。(潮騒 78)

○「坊ちゃんのお好きなものを何でも買って上げ申しますから電車のところまでさつさとお歩きなさいませよ。」(桑の実 161)

「さっさと」は、「桑の実」の例のように、移動動作を表わす動詞の修飾に使われたものが資料内の用例の大部分を占める。

なお、「てばやい」は資料内の用例(50例)は連用形「てばやく」(次に引用する1例のみはナ型の「てばやに」)の形で連用修飾語として使われたものばかりである。

○さう思ひながら、彼は再び手早に、併し成可く沈着に、火鉢で焼けて居る花の苔を、火箸の尖で撮み上げるや、傍の炭籠のなかに投げ込んだ。(田園の憂鬱 115)

しかし「てばやい動作」のような連語の可能性も無いとはいえない。

一方、「すばやい」は、資料内の用例(82例)のうち約9割までは「てばやい」と同様、「すばやく」の形で動作の限定に使われている。残る1割のうちには次のような用例がある。

○やつと起き直つて見ると、素早い五六人の見物に囲まれてゐた。(真知子・前 204~205)

○彼女は、英語という利器で、国の外から入ってくる、精神的雑貨の新品を、いち早く、手に入れた。もっとも、日本の批評家ほど、素早くはないにしろ、女としては、動作がカッパツだった。(自由学校 54)

ほかに「すばやい耳」「すばやい動作」「すばやい即答」「すばやいひらめき」などの結びつきの例が見られる。

(53) 主体(ごく短い継続時間内の動き)

すばやく、さっと<はやく、てばやく

これらの語は、動作や動きの速度が大きいようすを表わす点で共通性がある。

これらのうち「すばやく」「さっと」は、ごく短い時間内に一区切りの動作が速い速度で行なわれるようすを表わす。

○そこに、四つの空の盃を控へて、ちよいと継穂なく、手持無沙汰^{かたぢ}の態にならうとするのを、滝十郎がすばやく銚子を取りあげて、(多情仏心・前 90)

○少女はまだ乾ききらない白い肌着ですばやく胸を隠して、かう叫んだ。

「目をあいちやいかんぜ！」(潮騒 66)

○「あんた私の気持分る？」と、駒子は今しめたばかりの障子をさっとあけて、窓に体を投げつけるやうに腰かけた。(雪国 95)

○不意にハッピーを着て自転車に乗った人が、さっと煙のように目の前を過ぎて行った。(放浪記 51)

「てばやく」「はやく」も、ごく短い時間内の動作などについて使われることはある。

○「ぢア、先生にはこちらを……」

と、滝十郎は、手早く自分の席の盃台に伏せてあつたやつを取つて、呪禁ほどに盃洗で清めて、三好に渡さうとした。(多情仏心・前 72)

○彼は即座に手早く、戸締りに用ゐた竹の棒を引つつかむと、力任せに、それを庭の入口の方へ投げ飛ばした。(田園の憂鬱 107)

○六人の中で最も鋭い一撃がその間隙を縫つて疾風より捷く喜七郎の脾腹を掠めた。
(オール読物 1956年6月 211)

○慕れ抜いた事が、自分にさへ悲しい思ひ出となつて、葉子の頭の中を矢のやうに早くひらめき通つた。(或る女・前 37)

しかし、「てばやく」「はやく」はより長い継続時間の動きのようすであってもよい。

○手早く、支度をしようと思つても、不器用な男は、仕方のないもので、やっと、ネクタイを結び終つた頃に、外で、足音が聞えた。(自由学校 319)

○手早くむしろの砂をふるって彼女の前にさし出し、まあまあ、どうぞ……と言つた。(人間の壁・上 303~304)

○(否、何の貴僧。お前さん後程に私と一所にお食べなされば可いのに。困つた人でございますよ。)とそらさぬ愛想、手早く同一やうな膳を拵へてならべて出した。

(高野聖 55)

○我々は匍つて行つた。前方には黒々と林の輪郭が見えた。あそこまで行けばよい。脇と膝を用ひる中腰の匍匐の姿勢で、早く進んだ。(野火 115)

○彼の仕事は着々と云ふ程には捗取らなかつたが比較的早く進んだ。(青銅の基督 103)

[54] 速度/時点

てばやく、さっと(さっさと、すばやく) <はやく、すみやかに

「はやく」「すみやかに」は、速度が大きいことを表わす用法と、時点が前であることを表わす用法とがある。速度が大きければ、仕事の量が一定ならば所要時間が短く、より前の時点ですむという、事実上の深い関連が考えられる。速度の例はたとえば次のようなものである。

○強い光を放つ大きな蟹が、谷間を貫く小さい流れに沿つて飛んで来て、或ひは地上二米の高さを、火箭のやうに早く真直に飛び、或ひは立木の葉簇の輪郭をなぞつて、高く低く目まぐるしく飛んだ。(野火 34)

○勘次は万能をぶつりと打ち込んではぐつと大きな土の塊を引返す。おつぎは漸く小さな塊を起す。勘次の手は速かに運動してずんずんと先へ進む。(土・上 83)

○瞬間的な或る恐怖がふと彼の裡に過ぎたやうに思ふ。さてそれが何であつたかは彼自身でも知らない。それを捉へる間もないほどそれは速かに閃き過ぎたからである。(田園の憂鬱 25)

次に、時点が前であることを表わしていると思われる例をあげよう。

○こんな事件は早く片付けてしまひたいから、宇平に電報を打つて、今夜はこちらに来て泊つて貰ふことにし、彼は準蔵と一しよに高崎に向つた。(波 122~123)

○嘉門は、「まつ子！ 風呂にゆくから飯を早くこしらへて待て！」と嘸鳴りながら、
(冬の宿 17)

○そして日本の労働者は現にそれだけの食物を摂取しておらぬとするならば、私は彼らの食物につきすみやかにその品質を改良しその分量を増加せんことを希望する者である。(貧乏物語 136)

○けれども、全く思ひもかけない離別が、かやうに速かに来てみると、その呆気なきの感じに手伝はれるせるか、それほど熱烈だつたとも思へなかつた。(多情仏心・前 365)

他方、「てばやく」「さっと」は、速度のほうにのみ使われ、時点のほうには使われない。

○ホームスパンの男は、手早く書類をまとめて、自分の黄色い手提げ鞆にしまった。
(伸子・上 7)

○先生はさっと読み通してから、すぐに二度くり返して読んだ。読みながら、
「良い手紙ですなあ」とつぶやいた。(人間の壁・上 144)

「さっさと」「すばやく」も速度のほうに使われるのが普通である。

○そしていきなり、青年を突きとばした。

「さあ、さっさと歩くんだ！」(文芸 1956年9月 123)

○鳴戸の横町まで来た時に、自動車を停めさして、すばやく滝十郎は跳びおり、なかば駆けるやうに左の方へ切れ込んで行つた。(多情仏心・前 242)

ただし、「さっさと」「すばやく」の次にあげるような例は、いちがいに速度のほうの表現だとみることでもできず、時点の表現である可能性もあるように思われる。

○喘ぎ乍ら、お礼をのべる庄吉を、じっと見つめた壮典は、

「どこかへ、さっさと消えうせろ、ぐずぐずして居ると、おれは、また、斬りたくなる！」(読切小説集 1956年2月 206)

○イタリアは戦後すばやくこのことに目をつけ、アメリカのマーシャル計画援助資金をつぎこんで、ポー河溪谷の天然ガス資源を開発し、ペラ棒な安い肥料を作って輸出し日本の業者をビックリさせたわけなのだ。(サンデー毎日 1956年9月23日 19)

[55] 継続的／瞬間的

じっと、じろじろ、きよろきよろ、しげしげ／ちらっと(ちらりと)、じろっと(じろりと)

上にあげた語の中で、「じっと」「ちらっと」は見ることに以外のもうすにも使われる

が、見るようすに使われるのが主要な用法の1つである。この2語以外は、見るようす専用の副詞である。

「じっと」「じろじろ」「きょろきょろ」「しげしげ」は、瞬間的に見るのではなく、継続的に見るようすを表わす。したがって、次に例をあげるように、見る動作の進行中の状態をあらわす「見ている」などの形と結びつきやすい。

○行介は倒れてゐる駿を長い間ぢつと見詰めてゐたが、突然、

「駿！」

と、鋭く呼んだ。(波 333)

○今さきから、じろじろ私を見ていた二人の老婆が、馴々しく近よって来ると私の身体をじろじろ眺めている。(放浪記 70)

○小屋を出ると、ラムネとアイスクリーム屋の林立の浅草だ。上州生れのこの重役氏は、「ほう！ お祭のようだんべえ。」とあたりをきょろきょろながめていた。(放浪記 180)

○すると博士はジョバンニが挨拶に来たとでも思つたものですか、しばらくしげしげとジョバンニを見てゐましたが、(銀河鉄道の夜 263)

上の例にもあるように、「じっと」「じろじろ」などは、「長い間」「さっきから」「しばらく」のような、ある程度以上の時間の継続を示す語句と共存している例がかなりある。

これに反して、「ちらっと」「じろっと」などはこういう語句と共存しにくいようである。「ちらっと」「じろっと」は瞬間的な、または瞬間的に近い、見る動作のようすを表わす。したがって、「*ちらっと見ている」「*じろっとながめている」のような形は成り立たない(成り立ちにくい)。そして、次にあげる例の中にあるように、「ひとめ見る」「一瞥する」のような語句とは共存しやすい。

○さつと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花卉もあざやかに消えず残つた。(富岳百景 62)

○節子はもう目を覚ましてゐた。しかし立ち戻つた私を認めても、私の方へは物憂げにちらつと目を上げたきりだつた。(風立ちぬ 138)

○一二秒躊躇した末に、またもや手荒く自在戸を押して出ると、そこにまだゐる筈の男女の方へはちらとも目を向けずに、すぐ隣の浴室へ飛んではいつた。(多情仏心・前 316~317)

○ただ、自分が出ていくと、後で彼女が困りはしないかとウヌボれて、念のために、ジロリと、一瞥を残したのであるが、すべての形勢は、その懸念を、打ち消した。

(自由学校 134)

きょろきょろ、じろじろ／じっと、はったと

これらの語は、人間が目で見るときのようすを表わす。

「きょろきょろ」は視線が安定しておらず、あちこちと動きまわる様子を表わす。したがって、「見まわす」とは結びつきやすいが、「みつめる」「みすえる」とは結びつかない。

○空色の切符を、革手袋をはめた指先で改札掛に渡して出ると、鈴江は、キヨロキヨロあたりを見廻すやうなこともしらずに、そのまゝさつさつと正面の口へ急いだ。

(多情仏心・前 139)

○「ハイ・ファイのマニアが、イヤホーンでバイノーラルのテープを聞かされた時、思わずふり返ったものだ。音楽が始まった時、彼は、自分のうしろにオーケストラがいるんじゃないかとキョロキョロした。(ポピュラーサイエンス 1956年1月 14)

「じろじろ」も視線が固定的でないようである。

○二人して、ジロジロ、汗染みた洋服を、見上げ見下されるので、五百助も、キマリがよくない。(自由学校 235)

○先任兵長は彼をつれてはいるや被服係助手の兵長に用件だけ話しておいて倉庫内をじろじろ見廻していた。(真空地帯・上 34)

「じろじろ」は次にあげる例のように、視線の向けられている対象物は大きくないばあいもあるが、それでも「じっと」とはちがって視線は動的であろう。

○父は黙って、袂から菓子^{たも}の紙包みを出し、茶筆筒の上に置いて出て行った。私は寝たまま、じろじろそれを見ていた。(暗夜行路・前 11)

○おゆふはじろじろお島の鬢の形などを見ながら自分の髪^{あたま}へも手をやつてみた。(あらくれ 72)

「きょろきょろ」「じろじろ」と反対に、「じっと」は視線が安定していて、視線の向けられている対象物(の部分)も一定していてあまり大きくないことが多い。(対象物が遠ければ「じっと山を見る」のように大きくてもよいが。)

○二つの眼は蛇のやうに動かず、ちつと長老を見つめてゐたが、

「おゝ。アントニオ・ルビノ！ルビノ！」と低くふるへるやうに叫んだ。(青銅の基督 93~94)

○行介は布団の上に坐つたまゝ、ちつと病児の口もとを見詰めてゐた。(波 215)

「じっと」の用例の中には、数は少いが、次の例のように、視線の向けられている部分が移動したり、移動しつつある対象を視線が追いかけるのに使われたものもある。

○口で笑つて、其細い窪眼は僕の頭から爪尖までじつと眺めた。(愚問の記・上 220)

○木谷はその後姿をじつと追うたが、彼は金子班長が事務室のなかへは行ってやがて准尉と一緒にでてきて隣の准尉室へはいるのをみた。(真空地帯・上 141)

これは、「じっと」の普通の用法とは区別することができよう。しかし、この用法に

おいても、視線が不動ではないが、安定した動きかたである点で、視線の動きが動的であり、不安定である「きょろきょろ」などと対立する。

「はったと」も視線の動きという点で不動的な、目をすえた見かたであろう。

○勉強のきらいな小学生が、用いる手口を踏襲した良人を、厳格な母親のように、ハッタと、睨むより外はない。(自由学校 19)

[57] 気持（相手に対する無遠慮さ）

じろじろくしげしげ、まじまじ

3語とも、見る動作に関係し、しかも対象をよく見るようすを表わす点では共通性がある。また、見ている時間が瞬間的ではなく、ある程度以上持続的である点も共通性がある。(3語とも「みつめる」と結びつくことからこのことが言えよう。)

しかし、目に見えない、見る人の心理や、またその微妙な表われの点では、それぞれ相違がある。

○肩掛もしていない、このみすばらしい女に、番頭は目を細めて値ぶみを始めたのか、ジロジロ私の様子を見ている。(放浪記 42)

○指の間に櫛を挟んだまゝの手で、短く刈り込んだ口髭を引っ張りながら、もう一度あらためて、真正面から無遠慮に、ぢろぢろ相手の容子を観察してゐたが、「失礼ながら、一体貴方はどう云ふことをなすつておいでなんです、つまり御職業は……？」(多情仏心・前 321)

○彼はH・市まで出ると一等車の切符を無意識に買つてゐた。乗客やボーイが彼を胡散臭さうにじろじろみるので、彼は腹が立つてしかたがなかつた。(冬の宿 67)

○廊下のところに立つた二三の女教師、互にじろじろ是方を見て、目と目で話したり、くすくす笑つたりして居たが、別に丑松は気にも留めないのであつた。(破戒 301)

「じろじろ」には、見る人の、見られる人に対する無遠慮さがある。好奇心とか意地悪さなどから見るのであり、しかもそれをかくそうとはせず相手の気持を尊重しないで無遠慮に見るのである。好意から見るのではない。したがって、見られる側としては不愉快を感じるのが普通である。したがって、人を「じろじろ見る」ことは、失礼なことであり、よくないことであるということは、社会通念であろう。

「しげしげ」には「じろじろ」の、上のような特徴は存在しない。「しげしげ」も、何かをさぐり出そうとする目的を伴っている例はある。

○「ええりボンやな」

と母親はお世辞を言つた。言ひながら自分の息子があれほど焦がれてゐる娘を、しげしげと観察した。(潮騒 114)

○「この頃なんだかお顔色が悪いやうよ。」或る日、彼女はいつもよりしげしげと見

ながら言ふのだつた。「どうかなすつたのぢやない？」(風立ちぬ 102)

しかしそれは、「じろじろ」のような非好意的なものではない。次の例のように、積極的な好意を伴う場合もある。

○「ゆつくりしていらつしやいませね。お話ししたいこともありますの。」

しげしげと、左衛子は伴子を見まもつた。たゞの洋服店の店の者を迎へたものでなく、うちとけて深い眼差であつた。(帰郷 177)

○それから寧ろ私の方をいたはるやうな目つきでしげしげと見ながら、「あなたはときどき飛んでもないことを考へ出すのね……」(風立ちぬ 82)

「まじまじ」も「じろじろ」のような非好意的な要素はなく、この点「しげしげ」により近い。「まじまじ」の用例が少ないので「しげしげ」との相違を用例から見出すことはむずかしい。全用例を次にあげて、後考をまつことにしたい。

○九曜星の紋のある中仕切りの暖簾を分けて、袂を口角に当てゝ出て来た娘を私はあまりの美しさにまじまじと見詰めてしまった。(河明り 246)

○そういう家の一軒で、五百助は、バカバカしいものを、見せられた。室内で、上半身だけ、競輪選手の服装をした女が、動かない自転車のペダルを踏み姿を、マジマジと見物するのである。(自由学校 212)

○しかし今度は大丈夫と、リュシェンヌを強く抱きしめ、頬を寄せて、うっとりとしてステップを……と、急にリュシェンヌは顔をあげ、ジェラルール青年をマジマジとみつめながらいました。

——怒ったの？(宝石 西洋小説集 1956年9月 10)

○平馬はさぐるように源三郎の顔を見ている。(中略)「その娘も見えないようです。お軽がつれて逃げたのか、それとも、ほかに助けるものがあつたのか」と、平馬はまじまじと源三郎の顔を見ている。(小説倶楽部 1956年8月 354)

○併し伯父の癖として、大音声に話して居るかと思ふと、俄然声を低めて、先方の顔をまぢまぢ見ながら、さも無い事を如何にも一大事の機密でもあるかの如く囁やく癖がある。(思出の記・上 95)

○「気持を楽にした私は、まじまじと伊藤整氏のちぢれ髪を見ながらいった。(中央公論 1954年6月 244)

[58] 気持(相手に対する怒り)

はったと(はたと)

「はったと」も「まじまじ」「じろじろ」「ぎょろり」などと同じく、見るようすを限定する。そしてしばしば「にらむ」と結びついて使われることから裏書きされるように、見る相手に対する怒りの感情の表われた、目をすえてするどく相手を見るようすである。資料内には次にあげる4例がある。

○しばらくこれがつづく、さしものナギナタ先生も、ボクらを認めるや、ギュッと体をかたくする様子で、ハッタとにらみつける元気もなくなってきたらしい。(文芸春秋 1953年9月 27)

○勉強のきらいな小学生が、用いる手口を踏襲した良人を、厳格な母親のように、ハッタと、睨むより外はない。(自由学校 19)

○こういう態度に出るのは、相当のシタカモノであると、経験豊富な警察眼で、ハッタと、五百助をにらむのであるが、顔も漠然、眼つきも、声も漠然を極めて、人間自体が、確証を欠いている。(自由学校 360)

○先日、子供が竹とんぼをとばして遊んでいた。勢いづいたのが一つ、部屋にとびこんでいくと、「あっ、痛たたた！」と悲鳴が挙って、屏風の背を鷲づかみに、片手で頭を抑えたうめ女が、はったとばかりに庭を睨んだ。

「どの餓鬼だ、何しやがるんだ、畜生！」(厭がらせの年齢 291)

いずれも「にらむ」(あるいは「にらみつける」)を限定しているが、ほかに「みずえる」などと結びつくこともある。「自由学校」の例は戯画的な書き方で、「はった」の典型的な用例ではなく、「厭がらせの年齢」のような使われ方のほうが普通であろう。

次にあげる例は「にらむ」を「じろつと」「ちょいと」が限定しているが、「はったと」におきかえることができない。それは、その場面が怒りの感情とは関係がないためであろう。

○「そんなこといふと、あんたのこと、姉さんにすつば抜いてよ。」

襲子は上目うはめを使つて、じろつと彼を睨んだ。それがひどくなまめかしかつた。(波 287)

○「女優さんかい? ……あ、これだけの女優さんがりやア、あつしやアすぐにも帝劇に買はれて行くね」

「あら！」

ちょいと睨んだ目を、美津枝はすぐ三好の方へ向けて、「始まりましたよ、萩原さんの十八番が……」(多情仏心・前 208)

[59] 気持(不安定な気持)

きよろきよろ

「きよろきよろ」はあちこちに視線を走らせて見まわす様子であるが、見る人の気持が落着いておらず、不安定で、それが様子に表われていることをも表わすことが多い。

○(彼を、あ、彼、彼。)といつてきよろきよろと四辺あたりを伺みまはす。

婦人は熟ちつと嚙みまもつて、

(まあ、可いぢやないか。そんなものは何時いつでも食くられます、今夜こんやはお客きやくさま様があり

ますよ。) (高野聖 55)

○そして歩き乍ら彼はキヨロキヨロと四辺を物色した。孫四郎を彼は探してゐたのである。(青銅の基督 21)

落ち着きのない様子であるのは、何かを探し求めるためであることが多いようで、上の2例はいずれもその例である。しかし、次のようにそうでない場合もある。

○それで不動の姿勢のつもりか。お前のその眼玉は何だ、しょっちゅう、きよろ、きよろ動きまわってるじゃないか…… (真空地帯・上 87)

「きよろきよろ」に落ち着きのなさという特徴が含まれていることは、次のような方法で裏付けることもできよう。「(あたりを)みまわす」という文例のうち、次のようなものは、そのみまわしかたが「きよろきよろ」とは背反的である。

○その大きな目が、伴子を見て微笑み、落ち着いた様子で室内を見廻して、
「好いお部屋ね。」(帰郷 172)

○奉行は息を吐いて背り返り、静かに四辺を見廻はした。

「しかしそれでは——」と彼は又語調を柔らげて云つた。(青銅の基督 114)

「落ち着いた様子で」「静かに」という見まわし方の限定は「きよろきよろ」とは著しく背反的であるために、視線をあちこちに走らせるという点では共通性があるにもかかわらず、「きよろきよろ」におきかえると、まったく文意が変ってしまう。これに反して、次のような例では「きよろきよろ」を挿入することが不可能ではない。

○裕佐は此の切支丹とのひそひそ話を見られて疑はれはしないかと、つい何度も四辺を見廻はしては心に羞ぢるのであつた。(青銅の基督 59)

[60] 無意図性

むちゅうな<いっしょうけんめいな、けんめいな、ねっしんな

これらの語の意味はそれぞれ重要な違いがあつて、同義的ではないけれども、心がある一つことに集中的に向けられている状態という点で共通的な側面があると考えられる。

「むちゅうな」はあるものごとくに心をうばわれて、われをわすれた状態で、意図的に努力してなる状態ではなく、しぜんにそうになってしまう性質のものである。遊びとか、異性への愛とかに関してよく用いられるのは、このことと関係が深いと思われる。

○池戸君あたりは、近所の子供と雪合戦に夢中である。(野球界 1956年3月 161)

○学校でお友達と遊びに夢中になると、ついママとの会見を忘れてしまう。(週刊朝日 1956年8月12日 81)

○私達は話に夢中になっていたが、その時、私達から遠ざかって行く足音が聞えた。
(別冊文芸春秋 1956年 51号 256)

○あんたは、下宿のクリスチャンの奥さんが好きになつて、冬ちゅう夢中だつたつて

いふぢやないの。(冬の宿 161)

○キュッセ夫人は上品なデァール氏に**夢中**になった。(特集文芸春秋 1956年 世界を震撼した三十大事件 53)

しかし、もちろん勉強や仕事に対して「むちゅうな」状態になることもある。そのばあい、やはり勉強や仕事に自然に心を引き込まれていくのであって、気が進まないのを無理に心を集中させようとするようなばあいには「むちゅうな」は使われない。

○あの人は今、勉強で**夢中**なの。(くれない 31)

○今思えば随分気障な手法の作品であるが、あれ程**夢中**に打込んだ仕事はあとにも先にもない。(世界 1954年 3月 188)

○私ははじめて原稿用紙というものを手にして、**夢中**になって七十枚の原稿を書きあげました。(人生手帖 1956年 1月 73)

「いっしょうけんめいな」「けんめいな」は「むちゅうな」とはちがって、意図的に努力してそういう状態を作り出すばあいにも使われる。

○私はまづい昼飯を、噛まないままで、ただ**一生懸命**に口につめてゐた。(冬の宿 174)

○折角この二月まで**一生懸命**に我慢してゐたのに、またもう一度去年のやうなことを始めました。紙屋や印刷屋に払ふと云つて貴方から預つて帰つた金のなかからも、僕の使ひ込んでゐる分があるのです。(多情仏心・前 355)

○先生が一晩かかつて、一所**懸命**に書いた弔辞よりも、おまへの泣いた声の方がどんなに優れてゐたか分かりやしない。(波 48)

○自分の誤ちや欠点もよく認めて、それなりに**懸命**に妻のつとめを果そうとして来た女性だったのである。(トルストーリー 1956年 1月 118)

○驚がこの頃は打撃フォームを変えて**懸命**に動んでいる。(野球界 1956年 2月 156)

「ねっしんな」は、「いっしょうけんめいな」「けんめいな」が外的な動作も重要な要素であるのに対して、内的な心の状態に重点があるといえよう。そしてやはり、「むちゅうな」のような、無意図的にそうになってしまうという条件は必要でないと思われる。

○母親の和田澄江は、PTAのことにあれほど熱心であるのに、なぜその子供がもっと素直な良い子になれないのだろうか。(人間の壁・上 221)

○酒席などでも、文学者同志の芸術論が始まると、襟を正して熱心に傾聴する、と云つた風で、時折画家のパトロンに見かけるやうな、我儘や軽蔑の念など更になかつた。(多情仏心・前 118)

○時雄は其の夜、備中の山中にある芳子の父母に寄する手紙を熱心に書いた。(蒲団 59)

○暑い一日の熱心な労働がねぎらはれる時の美しい空、美しい雲ですね。(婦人倶楽部 1956年 7月 298)

「いっしょうけんめいな」「ねっしんな」などは、たとえば「いっしょうけんめい

(に) べんきょうしよう」「ねっしんにききなさい」のように、意志や命令の表現の中で使われる。しかし、「むちゅうな」は「*むちゅうで(に) べんきょうしよう。」「*むちゅうに(なって) やりなさい。」などとは言わないであろう。それは「*むちゅうな」が無意図性を特徴として含んでいるから意志や命令とは両立しないためであろう。

なお、「むちゅうな」は上にあげた例にあったように、「～に」(または「～で」)の形の対象語をとることが多い。また、「ねっしんな」も上掲の例の中にもあったが、二格の対象語をとることがある。「いっしょうけんめいな」「けんめいな」は対象語をとった例が資料内にはない。

また、「むちゅうな」の、動詞を修飾する語形に関して、用例の多い「むちゅうになる」は別であるが、「なる」以外の動詞を修飾するばあい、「むちゅうに」のほかに「むちゅうで」の形もある。後者の方が現代語として普通の形であろうかと思われる。

○私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝と坐つてゐる彼の容貌を始終眼の前に描き出しました。(こゝろ 241)

○私は女の呪いが胸の底にこたえて夢中で山の上まで帰った。(出家とその弟子 73)

なお、「いっしょうけんめいに」の「に」は省かれることも多い。

○こんどからは一生けんめい勉強しようと思いました。(人間の壁・上 142)

「いっしょうけんめい」は「いっしょけんめい(一所懸命)」が本来の正しい語形だとされているが、「現代雑誌九十種」の19例はすべて「一生懸命」「一生けん命」「いっしょうけんめい」という語形になっている。また、「総合雑誌」の7例中5例は同様であるが、「一所懸命」が2例ある。(2例とも釈道空の文章)文学資料でも大部分の用例は同様であるが、「土」「波」「帰郷」には「一所懸命」「一所けんめい」の語形が見られる。「いっしょうけんめい」は由緒正しい形として意識的に使われる向きもあるようであり、現代の大勢としては「いっしょうけんめい」のほうが一般的だとみなして、その方を見出しの形とした。

(付) 本文に述べたところと関連して、命令の表現の中で、これらの語が使えるかどうかについての意識を、小調査2の中でしらべてみた。

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(イ) いっしょうけんめいききなさい	{ (男) 48 (女) 42	4 9	4 1	—
(ロ) ねっしんにききなさい	{ (男) 50 (女) 45	3 7	3 —	—
(ハ) むちゅうでききなさい	{ (男) 8 (女) 2	15 11	33 39	—

「いっしょうけんめい」「ねっしんに」と「ききなさい」との結びつき(イ・ロ)は、大部分の人が「普通」とした。それに反して、「むちゅうで」と「ききなさい」との結び

つきい)は過半数の人が「あきらかにおかしい」とした。本文で仮定したことは、この小調査ではおよそ支持される結果になった。

(61) 生得的な性質

きょうなくじょうずな, うまい

どの語も物事をやりとげる技術・技量にすぐれていることに関係する点で共通性が考えられる。

「きょうな」は

○「地の塩の箱」は、牛乳箱を废物利用して改造し、余り器用でもない江口さんが塗りかえて作った。(週刊朝日 1956年10月14日 68)

のようなばあい、手を使って物事をする技術に関している。一般に「あの人は器用だ。」というتماずこの意味に解されるかと思われる。しかし、「あの人は手が器用だ。」と体の部分をはっきり限定していることもある。

○指先が器用といっても、人さし指のまがっている人には不向き。(宝石 1956年2月 10)

も同類の実例である。

○小稲は懐紙よとこうがみを二枚ばかり器用にたたんで、それで神妙に灰を扇子へ落とし、始末した。(暗夜行路・前 60)

○隆文は、器用に、オードブル用のナイフを動かしながら、話しかけた。(自由学校 61)

○組はきまつて、大宮は器用にしかし無造作にきつてわけた。(友情 66) <「きつてわけた」対象はトランプ>

などは手の動作について使われている。こういうのが基本的な使いかたであって、

○バンパーに片足かけ、運転台の窓から、器用にもぐりこんで見せた。(謎切倶楽部 1956年5月 178)

○うすむらさきのなぎなたほおずきを、器用に鳴らしながら、娘は私を連れて家へ引返してくれた。(放浪記 143)

のような手だけでない、または手以外の動作に使うのを転用的なものだといえるかどうかはわからない。

しかし、「きょうな」は手先を使って細密な仕事を上手にするような、細かい技巧を伴ったうまさであることは必要な条件である。上にあげた「きょうに」の例は「じょうずに」と言いかえることもできるが、そうすると、細かい技巧という特徴は抜け落ちてしまう。

「じょうずだ」「うまい」は「――ハ――ガ」構文の述語になって、「――ハ」が人を表わし、「――ガ」が能力の発揮される対象である仕事などの種類を表わすことが多

い。

○彼は其開墾の仕事が上手で且つ好きである。(土・上 98)

○お師匠さま〔春琴のこと〕は舞がお上手だつたさうにござりますが(春琴抄 143)

○お糸さんは歌が旨い、三味線も旨い、女ながらも立派な一個の芸術家だ。(平凡 122~123)

一方「きょうだ」はこういう「—ハ—ガ」構文の述語になることはなく、さきにもあげた「あの人は手がきょうだ」のような構文をつくるだけである。「じょうずだ」「うまい」は技能を中心とし、「きょうな」は人に重点があるといえようか。

このこととおそらく関係が深いであろうが、「きょうな」は先天的・生得的な性質であって、努力や練習によっても「きょうに」なるということはあまりないであろう。「うまれつく」と結びついて使われている次の例は、この特徴が文脈に反映したものとえよう。

○手頭^{てまき}などの器用に産れついてゐない彼女は、じつと部屋^{へや}のなかに坐つてゐるやうなことは余り好まなかつたので、(あらくれ 5)

「きょうに」が動作のようすを表わすばあいは、そのような生得的な性質が発揮された(ような感じの)ようすとして言われるのであろう。他方、「じょうずな」「うまい」は、ある人がある物事に関して生得的にそうであることもあるが、また「じょうずに」、「うまく」変化することは、いくらでもある。たとえば、

○勘次に導かれておつぎは仕事が著しく上手になつた。(土・上 124)

○子供たちにも、今日は先生のお友だちが弾いて呉れるのだから、いつもよりも上手にしませうと云ふやうなことを云ひ聞かせ、(真知子・前 60)

○「もう休になつたからいつでも来給へ。ピンポンも少しうまくなつたよ」(友情 42)

○「でも豊田あたり、荒かったバッティングが、随分巧くなったといわれますね」(ベースボールマガジン 1956年11月 197)

[62] 主体(走る・歩く動作)

いっさんに、いちもくさんに<わきめもふらず

これらの語は、専心していきおいよく物事をするようすという点に、共通性が仮定されよう。

「いっさんに」「いちもくさんに」は、おもに走る動作の様子を表わす。

○彼は、お弓に逢はないやうに、道でない道を木曾川に添うて、一散に走つた。(恩讐の彼方に 69)

○すると野の獣のやうに、粗い縞の仕事着の娘の姿がそこから飛びだして、あとをも見ずに、浜をいっさんにむかうへ駆けてゆくのが眺められた。(潮騒 40)

○思はず飛上つて総身を震ひながら此大枝の下を一散にかけぬけて、走りながら先づ心覚えの奴だけは夢中でもぎ取つた。(高野聖 24~25)

○早くお母さんにお父さんの帰ることを知らせようと思ふと、牛乳を持つたまま、もう一目散に河原を街の方へ走りました。(銀河鉄道の夜 264)

○ポチは朝起だから、もう其時分には疾くに朝飯も済むで、一切り遊んだ所だが、私の声を聴き付けると、何処に居ても一目散に飛んで来る。(平凡 33)

資料の中で次の例では走る動作ではなく、歩く動作の様子を表わしている。「冬の宿」の例は競馬場の人ごみを分けていく場面だから、走るのは無理であろう。

○彼は、もと来た道を、一散に、歩き出した。(自由学校 222)

○まだしばらく嘉門は叫びつづけてゐるが、やがて一散に人波を分けて、金を取りに行つた。(冬の宿 189)

「いっさんに」の次の例だけは、人(や動物)の走る(歩く)動作ではなく、太陽の動いていく様子を表わしているが、これは拡張された用法であろう。しかし、移動動作の様子を表わすという範囲の中からは出ていない。

○静かな空をちりちりと移つて行く日が傾いたかと思ふと一散に落ちはじめた。(土・上 37)

「わきめもふらず」にも、移動動作の様子を表わすのに使われている例がある。

○喫茶店や、小料理屋ばかり列んでいる町を、女は、一切、口をきかず、側目も触らずに、ズンズン、歩いていく。(自由学校 249)

○安吉たちにぶつかりそうになりながら、安吉たちには縫うにまかせて、人波そのものは傍目もふらずどこにか向かって押して行く。(むらぎも 19)

「むらぎも」の例は個人ではなく、勤め人の人波の移動の様子に使われている、変つた例である。

移動動作のばあい、「わきめもふらず」は「いっさんに」「いちもくさんに」と比べると、速度の点でも相違があると思われる。「いっさんに」などは「走る」「かける」などを修飾している例が主であることからわかるように、移動の速度はかなり速い。それに対して、「わきめもふらず」は上の例のように歩く程度の速度で十分であり、走る動作に使われた例は資料内にはなかった。

「わきめもふらず」は移動動作以外に、いろいろな動作について使われ、属性の主体の点で「いっさんに」などよりも範囲が広い。

○脇目もふらず、ミシンを踏みながら、背後の本箱の置時計が、指している時間を、正確にいい当てる。(自由学校 6)

○うめ女は努力して、脇目をふらずに着物を引き裂いているが、その顔はいかにも無邪気であった。(厭がらせの年齢 296)

○まあ大げさにいえば、わき目もふらず、分科会の原委員長の報告に耳をかたむけて

いたというしだいである。(新潮 1956年1月 94)

[63] こと／もの

ろこつなくあらわな、むきだしな・の

ものごとがおおわれない状態で、そのまま外にあらわれる(あらわす)ようすである点に、共通性が考えられる。

「ろこつな」は、人間が、自分の気持・意図などを、他の人のおもわくなどを気にせず、そのまま外にあらわすようすであって、物についていうことはない。人間の動作・態度などを主体として、そのようすを表わす語である。用例をみると、次に例示するような「ろこつに」の形が連用修飾語として動詞にかかっているものが大部分である。人間の動作を表わす動詞のうちでも、「あるく」「たべる」のような対人的な性質をもたない語ではなくて、対人的なかかわりのある動詞が多い。

○露骨に言つて了へば、誠に愛想の尽きた話だが、此猛烈な性慾の満足を 求むるのは、其時分の私の生存の目的の——全部とはいへぬが、過半であつた。(平凡 94)

○私は露骨に父の持って帰った菓子をせびりだした。(暗夜行路・前 12)

○次に野島が紹介されたが、それは露骨に冷淡にあしらわれた。(友情 74)

○助手のついてるない自動車だつたので、やゝ遅れて、そこへ運転手が、衣類鞆スートケースと手提鞆とを両手にぶらさげてはいつて来た。それと見ると、露骨に番頭の態度が改まつた。(多情仏心・前 301)

また、対人的な動作・態度やことばを表わす抽象名詞と結びつくこともある。

○それでも周囲の露骨な諂ひに対して平気で、愧かしさうな色もなく、鷹揚ににこにこしてゐるのを見ると、真知子は一種反感に近いじれつたさを感じないではゐられなかつた。(真知子・前 26)

○いつになく米子がそんな話をするのも、小峰の見せた露骨な無視を償はうとしてゐるに過ぎなかつた。(真知子・前 210)

○あの女の、あたしに許さうとしてゐるけぶり氣勢も可なり露骨には違ひなかつた。(多情仏心・前 280)

○真知子は三日前の晩の彼の露骨な素ツ気なさを考へ、また斯んなところで出逢つた運のわるさにじれながら、米子を探し出さうとあたりを見廻した。(真知子・前 65)

○と、関が初対面の時から示した露骨なよそよそしさも、今はつきりと理由づけられる気がした。(真知子・前 150)

○彼女は次第にいらだ苛立ち、伸子に露骨な意地悪い言葉を浴びせた。(伸子・上 184)

次の例は、「観光宣伝切手」という具体名詞と結びついているが、「ろこつな」が意味の上で直接に関係しているのは、「観光宣伝」という動作性を含んだ部分であろう。

○耳紙に、英語の宣伝文句を入れた、ずいぶん露骨な観光宣伝切手であった。(高崎

山 10)

「あらわな」「むきだしな」にも、「ろこつな」におきかえられるような側面がある。「露骨」の字面のルビの形で使われた例もある。

○然し私はそんな^{あらは}露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけと許思つて何時でも控えてゐた。(こゝろ 73)

○ちとどうも、……^{むきだし}露骨に云ひますよ、^{むきだし}露骨に云へば、ちとどうも我儘がすぎやアしないか、とね、(多情仏心・前 259)

○文章はたゞ岩石を並べたやうに思想を並べたもので、^{むきだし}露骨なところに^{かへ}反つて人を動かす力があつたのである。(破戒 14)

次にあげる例なども「ろこつ」におきかえることができよう。

○林中尉はしばしば主計将校に対する軽蔑を^{あらわ}あらわに示したが、それは兵隊の眼にさえ度をこえたものと思えた。(真空地帯・上 172)

○たゞ先潜りをして、相手の云はうとするところに^{おもむ}阿つた調子が^{あらは}露だつたが、(多情仏心・前 41)

○土谷三年兵は、^{あらわ}あらわに追従の調子をつくつて言った。(真空地帯・上 144)

「あらわな」「むきだしな」は、「ろこつな」とちがって、具体的な物が露出した状態をも言う。(そのほうが本来的な用法であろう。)

○肩の端までである、大きなエリのホーム・ドレスから、^{あらは}露わな腕を、ニューッと出した百合子が、大声を出しながら、現われた。(自由学校 81)

○彼女は肌を脱ぎ、肩を^{あらは}露わに出して鏡台へ向つた。(くれない 89)

○汚れた床板は処々はかれ、竹の柱は傾き、^{あらは}あらはな板壁にやもりが匍つてゐた。(野火 20)

○和服に白いエプロンをかけているので、^{むき出し}むき出しになった太い腕が白くつややかに光っている。(人間の壁・上 109)

○汗っばい顔を、疊にべったり押しつけてみたり、^{むき出し}むき出しの足を鏡に写して見たり、(放浪記 191)

○二人きりになると、私はしばらく落着かず、附添人のために宛てられた狭苦しい側室にはひらうともしないので、そんな^{むきだし}むきだしな感じのする室内をぼんやりと見廻したり、又、何度も窓に近づいては、空模様ばかり気にしてゐた。(風立ちぬ 92)

[64] 程度

おさない／わかい／としとつた

これらは人間(など)の、生まれてからどのくらい年月が経過しているかに関する属性だから、年齢という尺度の上で程度の違いによって対立していると考えることができるであろう。

これらの語は年齢に関係の深い諸性質（たとえば「わかい」は未熟さ）も表わすが、ここでは年齢そのものについて使われる範囲内で考えるわけである。

「としとった」「としとっている」は形容詞ではないけれども、

○信州へ護憲運動でいった時、農村の若い人や年とった人の前で、文学の話をするのに何をいっていいのかわからなくなってしまったんですよ。(学園評論 1953年7月 27)

○「かち合せたよ。照れくさいものだ。相手の医者か、年とつてゐても若くつても、照れくさいものだ。」(本日休診 94)

のように「わかい」と対比して使われ、「わかい」の反対語のような役割を果たしている。

年齢の尺度は「わかい—としとった」の対によって一応構成されているともいえるが、「おさない」の分担する領域もあって、形容詞に一般に多い2極的な尺度よりもやや入り組んでいる。

「わかい」は広辞苑では「生れてから年月を経ることが少い。幼い。」と語釈が与えられているが、少なくとも現代語としては「わかい」は「おさない」とは分担区域が違っている。(重なり合う部分もあるだろうが。)

○師は若く、弟は幼^{てい}なく、共に理想の光明界を指して蕞^{まつしろ}地に進むで居た。(思出の記・上 119)

において、「若く」と「幼く」とは同義語的な反復ではなく、年齢の程度の上での区別を表わしている。「おさない子ども」とはよく言うが「*わかい子ども」という結びつきは普通には存在しない。(英語では a young child という結びつきがある。C.O.Dの文例にもある。)

これらの形容詞等と、年齢を主な特徴としてもつ名詞との対応を考えてみると、

こども——おさない

青年——わかい

老人——としとった

という対応はもっとも典型的で、問題のないところであろう。年齢という尺度の上で、おさない／わかい／としとった

の順序に位置づけられることはいうまでもない。

以下用例によって検討する前に、小調査1の中でしらべた、関係のある項目の結果を引用しておきたい。(上段が女子大生23人、下段が女子高校生51人の結果。)

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(イ) Aちゃん(5歳)はわかい	{ 2	1 8	22 41	—
(ロ) Bちゃん(10歳)はわかい	{ 4	3 23	20 23	—

(イ) Cさん(15歳)はわかい	{ 7 27	13 22	3 2	— —
(ロ) Dさん(20歳)はわかい	{ 22 47	1 3	— —	— 1

(イ)(ロ)の3項目では、女子高校生の方が女子大生よりも肯定的に反応しているのはおもしろい。女子大生に関していえば、(イ)(ロ)は「あきらかにおかしい」が大部分の人の反応であったが、これは常識的な結果といえるだろう。5歳はもとより、10歳でも、「おさない」とは言えても「わかい」とは言えないだろう。

「おさない」の用例の中で、年齢のわかるものをあげてみる。

○八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてきたのだ。(放浪記 5)

○^{おぼろげ}朦朧ながら^{おんこげ}丑松は幼いお妻の^{おんこげ}髻を^{うつつ}忘れずに^{むとめ}居る。はじめて自分の眼に映つた少女の愛らしさを^{うつつ}忘れずに^{むとめ}居る。(破戒 128)

○時に依ると此の幼い女師匠は「阿呆、何で覚えられへんねん」と罵りながら撥を以て頭を殴り弟子がしくしく泣き出すことも珍しくなかつた(春琴抄 159)

「破戒」のお妻はそのころ9歳、「春琴抄」の「幼い女師匠」春琴は11歳である。

○まるで小児科の医者が幼い患者を扱ふ調子に墮ちてしまった。(本日休診 120)

○彼はただ、一時間の後に対してもなんの意志も計画もない幼い童子のやうなもので、環境と衝動とのほかには何物も持たない人生を送つてゐるだけのものであらう。(冬の宿 200)

○幼い少年は、ホメロスやオデッセイの夢といっしょに、フトンの中の電灯を消し忘れることもあったのである。(旧石器の狩人 309)

において、小児科の患者、童子、少年も「おさない」で形容されるにふさわしいものだといえよう。「少年」は例解国語辞典には「十歳前後から十七、八歳ごろまでの年若い男子」とあるが、「わかい」と結びついて使われることもあり得るだろうか。

次に、「わかい」は年齢のどのあたりに始まるのであろうか。さきの小調査の(イ)「Cさん(15歳)はわかい」は「やや普通でない」と反応した人が半ばに及んだ。上に「わかい」と「青年」とは典型的に対応しているだろうと述べた。「青年」は例解国語辞典では「二十歳前後の若い男女の総称」とあるが、成人としての完全な成熟に達する前の一時期が典型的に「わかい」時期であろう。「わかい」とは未熟を意味する転義があるが、上のように考えると、そういう意味が生じた理由が説明しやすい。しかし、もう少し広く、成熟後も活力のあふれている時期、さらに広く、まだ衰えない時期も「わかい」の範囲にはいることはあるだろう。「わかい」の用例から、年齢のわかるものを少しあげてみよう。

○「あなた、いくつ?」

「十八です。」

「まあ若い……」(放浪記 261)

○木部は二十五といふ若い^と齡で、或る大新聞社の従軍記者になつて支那に渡り(或る女・前 10)

○そこへ、食事がすんだところへ着物をきた若い女が出てきて挨拶した。二十七八という年配で、目につくほど美しい。(むらさぎも 120)

何歳ぐらいから上になると、普通「わかい」とは言えなくなるのだろうか。

○カーディガンラインとボウを交差させた、新しいカットの衿もと。若い方から中年の方までに。(主婦と生活 1956年3月付録 春のニューデザイン 54)

では「わかい」人が「中年の」人と対立させられているが、一般的に言っても中年はもはや普通に「わかい」といえる段階ではないだろう。(上に述べたように、活力のあふれた時期、まだ衰えない時期という意味では中年について「わかい」が使われることはあるだろうが。) 中年・壮年は一般的には「わかく」も「としとって」もない中間の領域であろう。

上に少しせんさくしてみたのは、人間の一生を一般的に考えてみて「わかい」といわれるのにふさわしい時期はどの辺かということだった。しかし、具体的には何歳ごろから何歳ごろまでという風に単純に範囲を画定できるようなものではない。(かりにできたとしても、「わかい」の語義にとってそれは本質的なことではない。)「わかい」と結びつく名詞などの関係によっても「わかい」のさしうる年齢の範囲は動くであろう。たとえば「若い重役」「若い政治家」は中年でもかまわないだろう。重役や政治家の年齢が一般的にかなり上の方であるばあいには、その基準にてらして中年ぐらいでも若い方の部類にはいるだろうからである。また、

○太宰治に傾倒していた彼は、昭和二十四年十一月三日、太宰の墓前でアドルムを飲み、三十五歳の若い命を断った。(週刊新潮 1956年11月5日 37)

において、35歳という年齢は文句なしに若いといえる年齢ではないかもしれないが、命を終える年齢としては明らかに低いほうなので、ここで「若い」が使われているのであろう。

また、潜在的な基準との比較ではなくて、他の人の年齢と具体的に比較するばあいには、「《人》より若い」という表現はいかなる高齢にでも使うことができる。さきほど引用したと同じ小調査1の1項目として、

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(※) Eさん(80歳)は	} 19	4	—	—
Fさん(85歳)よりわかい				
	36	12	3	—

という結果があり、(※)の表現はほとんど、あるいはかなりの部分の人に普通なものとして受け入れられた。「(老人会で) Aさんは60歳でいちばん若かった。」という会話を聞いたこともある。ただし、下のほうの「おさない」がふさわしいような年齢では、

「太郎（8歳）は花子（10歳）より若い」のようにには言えない。そういう場合はふつう「年下だ」とか「小さい」などが使われるようだ。

次に、「ととった」の範囲はどうであろうか。「わかい」と対立する意味での「ととった」は相当、上の年齢からでなければ使われまいだろう。「老人」「としより」と言える範囲とだいたい似ているのではなかろうか。（平均年齢の伸びるにしたがってこれらの語のさす範囲が年齢の上の方に移動するということもあるかもしれない。）用例の中には、はっきり年齢のわかるものはないが、1, 2の例をあげておこう。

○寝るにも起きるにも、自分ばかりを凝視めて暮してゐるやうな、年取つた母親の苛辣な目が、房吉には段々厭はしくなつて来た。（あらくれ 95）

○春の上京のとき、母が自分で織った縞を一反だしてきて持って行けとといった。男ものだけれど、年取つた人なら女でもきられよう。（むらぎも 162）

「ととった」についても、結びつく名詞との関係によっては、「老人」とはいえない段階に使われる可能性もありそうだ。次の例は多少その参考になりうるだろう。

○高山は、揚げ台の前に坐らず、奥の座敷へ通つた。オカミというほど、年とっていないオカミが、注文を聞きにきた。（自由学校 147）

「ととった」が他の人との年齢の比較に使われるばあひも、老人よりずっと低い年齢まで使えるようである。

○床に倒れた女はジョイス・コートによく似ていたが、ジョイスよりは年とっていた。（宝石 1956年10月 188）

この前のほうに、「ジョイス」は25, 6歳と書かれている。床に倒れた女はジョイスと大きい年齢の開きはないようだ。ところで小調査1には、次の一項もあった。

	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(ハ) Gさん(20歳)は	{ 5	15	3	—
Hさん(18歳)よりととっている				
	{ 10	38	13	—

この結果を照し合わせると、他人との比較のばあひ、「ととった」は年齢の下のほうでは、必ずしも抵抗なく自由に使えるとはいえないようだ。こういう場合「年上だ」のほうが普通な言い方なのであろう。たとえば、

○案内を乞ふと、二十二三の、きぬ子よりは年上だけれども、きぬ子によく似た婦人が出て来た。（波 146）

○十五の春には葉子はもう十も年上な立派な恋人を持つてゐた。（或る女・前 70）

(付) 国広哲弥『意味の諸相』に、「ととった」「わかい」「おさない」についての記述がある。（117～118ページ）英語の young に相当するものが日本語では「わかい」と「おさない」とに分化していること、「わかい」は「老成期に達していない」、

「おさない」は「親の手を離れる時期に達していない」のような記述をすべきだ、など

のことが述べられている。

[65] 程度

あらい——こまかい・な

「あらい」と「こまかい」とは、反対語として対立している部分がある。ごく大まかにいえば、「あらい」には「勢いが激しい」と概括できて、「おだやかな」に対立するような部分と、それ以外の部分とがある。そして、前者は「荒い」、後者は「粗い」または「荒い」と表記される傾向がある。

後者の、「粗い」とも表記されるような部分のうち、「なめらかな」と対立する小部分もある。これは、ものの表面の粗滑の感じに関する対立である。

○また近くで見ると登喜子のこめかみや
あご
頰のあたりに薄く細い静脈の透いて見
えるような美しい皮膚とは反対に小稲
は厚い、そして荒い皮膚をしていた。

(暗夜行路・前 59)

○常に春琴の皮膚が世にも滑かで四肢が
柔軟であつたことを左右の人に誇つて
己まずそればかりが唯一の老いの繰り
言であつた (春琴抄 173)

これを除いた残りの部分は、主として物の空間的な量（3次元または2次元の）に関係するばあいであって、この部面に「こまかい」との対立がみられる。この対立について、以下便宜上4種類に分けてしらべてみよう。

第1に、一片一片が小さなものの集合について、一片一片の空間的な量の大小を「あらい」「こまかい」で表わすことがある。

○分子の荒い事は水分を吸収しやすいですが、磁器の様に分子が細かですと水分は吸
い込みません。(ポピュラーサイエンス 1956年2月 134)

では「分子」について「あらい」と「こまかい」が対比的に使用されている。

○雨に滲みた黒い粗い比島の塩は、雑糞の底でごみと一緒に固つてゐた。(野火 109)

○椰子の間を抜けて岸に降りた。粗く脆い砂が足許で凹んだ。(野火 75)
にみられる「塩」「砂」も、「こまかい」とも結びつくことができる。

ところが、次の例にみられる「雨、雪」「葉」「字、活字」などは「こまかい」とは結びつくが、「あらい」とは結びつかない。

○十月の、霧のやうに細かな雨のふる晩、特急の列車で着いて来ると云ふ里奴を、東
京駅で待うけてゐた信之は、いつもになく心のときめきを感じたり、不思議に感傷
的な気持に鎖されたりした。(多情仏心・前 295)

○その雪はやがて黒菅盆地を白くうずめはじめた。待ちに待った根雪である。こまか
い柔かな、そして重い雪であった。(落城 45)

○校長の家の玄関の側に珍珠花が咲いてゐた。白い、小さい花は、春の雪のやうに、
浅緑の細かい葉の上に一面に積つてゐた。(波 61)

○さうして帳面の上の端から下の端まで、細かい字がぎつちり書いてあるの。(雪国 39)

○そして眼鏡をかけずに細い活字の新聞を、いつまでも根気よく読み続けてゐることが出来るのだ。(厚物咲 8)

これらのばあい「こまかい」と対立しているのは「おおきい」のことが多いが、「こまかい雨」に対しては「大粒の雨」が反対の位置を占める普通の言い方であろう。第2に、料理で材料を刻んだりする結果としてたくさんの小片ができるようなばあいには、主に連用修飾語として「こまかく」「あらく」が使われることがある。

○塩少々をふり込んで胡麻塩を作っておき、干物の魚一尾を焼いて、荒くほぐしておきます。(婦人倶楽部 1956年4月 おすしとお弁当料理 64)

○ゴマをさっと炒り、あらくすりませ。(家の光 1956年10月 224)

のような例と対立して、「こまかくほぐす」「こまかくする(摺る)」ということもできる。

○皿には細かく刻んで塩で揉んだ大根と人参との膾がちよつぱりと乗せられた。(土・上 57)

○ベーコンをこまかく切って、フライパンでアブラの出るまでいためます。(暮しの手帖 1956年34号 177)

のような例に対して、「あらく刻む」「あらく切る」という言い方も料理のほうで、行なわれているようである。しかし、料理からは離れるが、

○彼はキス・シーンのコレクションを、十枚も重ねたまま、小さな手に力を入れて、勇敢に裂き棄てる。必要以上にこまかく破る。(人間の壁・上 221)

○りきは小畑からの名刺を出して見せたが、しばらく見詰めたあと、こんなもの、あたしに用はないわと云ひ細かく静かに裂いてしまつた。(あにいもうと 155)

に対して、「*あらく破る」「*あらく裂く」とは言えないであろう。

第3に、網の目、碁盤の目、縞模様などの、間隔の疎密の程度について「あらい」「こまかい」が対立して使われる。こういう場合には、「あらい」と「こまかい」とは同種の対象に関して双方とも使われることが多く、かなり整った対立をなしているようである。

○寒冷紗は木綿またはスフ混紡にて出来ており、ちょっとカヤのようなものである。よくタバコの育苗に使っているものである。織目により荒い目のものコマカイ目のものがあり、その使用する目的によりちがってくる。(農耕と園芸 1956年12月 60)

は同一の文の中で「あらい」と「こまかい」が対比的に使われた例である。また、同じ名詞「べんけいじま」に対して「あらい」と「こまかい」が修飾語になっている例があるので対比させてあげよう。

○荒い弁慶縞の鳥打帽を、両耳が押し曲 | ○煤色と紺の細かい弁慶縞で、羽織も長

げられるほど深く阿弥陀に被り、(多) 着も同じい米沢紬に、品のよい友禅縮
情仏心・前 137) 緬の帯をしめてゐた。(野菊の墓 36)

次にあげる例にみられる「碁盤目」「プリーツ」は「こまかい」とも結びつく。

○賭事の店先に立つて見てみると、葉氏の屋敷に下働きに通つて来る若い男が坐り込んで熱心に賭けてゐた。これは、荒い碁盤目にいろいろの数字を書いた木の板を各自が前に置いてゐて、(帰郷 66)

○セミフィットの上衣にストレートなシルエットのスカートは、あらいプリーツで若さを出しました。(装苑 1956年5月 19)

また、次の例の「目の～卸し器」「～チェック」には「あらい」もはいることができる。

○大和いもは目の細い卸し器ですり、(婦人生活 1956年11月 447～448)

○細かいチェックの薄手ウールを用いたストレートなワンピース。(若い女性 1956年9月 付録 18)

第4に、物が小さく速く反復して空間的な運動をするようすが「こまかい」で表わされることがある。

○牛木利貞の顔には、最早や消し去ることの出来ない強い感動の色が描き出され、顔面の筋肉がこまかく顫へてさへゐた。(帰郷 132)

○子山羊は細かい足どりでせわしく彼へついて回った。(暗夜行路・前 38)

○ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のやうにきらつと光つたりしながら、声もなくどンドン流れて行き、(銀河鉄道の夜 268)

こういう「こまかい」に対しては、「あらい」が対立してはいないようである。「こまかい波」がある一方には、「あらい波」もあるが、その「あらい」は勢いのはげしいことを表わすのであって「おだやかな波」などに対立するものであろう。

以上にみえてきたような、空間的な量に関係する「あらい—こまかい」の対立においては、「こまかい」とはたしかに言えるが、「あらい」とは言えない、言えそうもないという例がときどき見られた。その反対に、「あらい」とは言えるが「こまかい」とは言えないという例はなかった。つまり、「こまかい」のほうがこういう意味に関して適用範囲が広く、その中のある部分だけについて「あらい」も対立的に使われるという状況である。

[66] 程度(傾斜の角度)

急な、けわしい／ゆるい、ゆるやかな、なだらかな

「急な」にはいろいろな使われかたがあるが、

○左側に大きな山があらわれてきた。海岸から、いきなり急な斜面がつきあげて、たれこめた雲のなかに消えている。(高崎山 9)

○勾配の急な町には疾い小川の流れなどが音を立て、石高な狭い道の両側に、幾十かの人家が窮屈さうに軒を並べ合つてゐた。(あらくれ 124)

のようなものは、傾斜の角度の大きさについての表現であり、その角度が大きいことを表わしているのはいうまでもない。

「けわしい」も同様に、

○少し怪訝さうに葉子のいつになくそはそはした様子を見守る青年をそこに捨ておいたまゝ葉子は陰しく細い階子段を降りた。(或る女・前 148)

○勾配の峻しい坂でそれが雨のある度にそこらの水を聚めて田圃へ落す口に成つて居るので自然に土が扶られて深い窪が形られて居る。(土・上 15)

のように、傾斜の角度が大きいことを表わす要素をもっていると考えられる。しかし、

○尾根は峻しいので敵勢の近よってくるわけはなかったが、(落城 29)

○那の森から三里ばかり傍道へ入りました処に大滝があるのでございます、其は其は日本一ださうですが、路が峻しうござんすので、十人に一人参つたものはございませぬ。(高野聖 39)

のような例から具体的な場面を想像すると、ただ傾斜の角度が大きいことではなく、たとえば岩や木の根がごつごつと突き出していて進みにくいというような要素も含まれているのではないかとも思われる。「けわしい」は、傾斜が急である上に、地面がごつごつしていて、歩行が困難だという、人間の行為との関係における属性を表わしていると考えべきかもしれない。「けわしい前途」「けわしい人生行路」「けわしい(国会)正常化の道」というような比喩的な言い方は、その延長線におくと説明がつけやすい。「急な」にはそのような言い方は生じていない。)岩波国語辞典では、「けわしい」は「(山・坂の)傾斜が急で、のぼるのに困難だ。」と語釈が与えられている。「のぼるのに困難だ」と、人間の行為との関係を指摘しているわけである。

「急な」と「けわしい」とは、双方とも山・斜面・坂道・階段などに使われた例があり、属性の主体の点ではっきりした区別はまだ見付けていない。ただ、資料内に例はないが、「急な屋根」とはいえても「けわしい屋根」とは普通には言わないというような違いはあるかもしれない。また、細かくいえば、山などに言うばあい、2語の間に次のような違いもあるかもしれない。「急な」ははじめにあげた例のほかには、

○城趾につづいて、かなり急な傾斜の松と雑木の山があり、落葉を掻く人がとところどころに動いてゐた。(俳句 1956年7月 110「国府台、柴又吟行記」)

○急な丘が錯綜し、谷が迷路のやうに入り組んでゐるのは、この地方が地質時代に沈下して海に溺れた後、再び隆起したことを示してゐた。(野火 125)

のような例があっただけだ。「けわしい」には

○針木嶽、白馬嶽、焼嶽、槍ヶ嶽、または乗鞍嶽、蝶ヶ嶽、其他多くの山嶽の峻しく競ひ立つのは其処だ。(破戒 122~123)

○ずつと南方の或る半島の突端に生れた彼は、荒い海と峻しい山とが激しく咬み合つて、その間で人間が微小にしかし賢明に生きて居る一小市街の傍を（田園の憂鬱 7）のような例がある。「急な」におきかえようとするばあい、「破戒」のは「*急に競ひ立つ」という言い方は文法的にも成り立たないので問題にならない。「田園の憂鬱」のほうは「急な山」に一応おきかえられるが、文勢は著しく弱まる。「急な」と「けわしい」との間にも程度の違いがあると考えるべきかもしれない。

「けわしい」における、さきにあげた「のぼるのに困難だ」という要素は、かなりよく現われているばあいもあるが、そうでないばあいもあって、必須的な要素であるかどうか、疑問が残る。

○屏風岩が屹立して、しかも山背には瘴気のゆらいでいる沼沢がつづき、けものさえ通らぬ峻しい山だが、（落城 10）

○山に登るには、いくつもの道があろう。そのコースには、険しい道もあれば、比較的容易と考えられる道もあろう。（生命の暗号を解く 174）

○そして、また、驚合、天人の山合いの間道、雪笹川の激湍にそった溪谷、さらに今一つ鬼場山のはげしい曲折の山径を迎えようとした峻しい山攻めも、会津を攻めた西国勢の攻め手として覚悟せねばならぬところであった。（落城 11）

これらは、困難という要素が前面に出ている例だ。はじめの「落城」の例では「けものさえ通らぬ」という修飾句がそのことを示唆している。「生命の暗号を解く」の例はガン研究を登山にたとえている中での文ではあるが、「けわしい」が「容易」と対比して使われている。次の「落城」の例は「山攻め」という動作名詞を修飾して「困難な」に非常に近いという解釈もありうるだろう。しかし、

○崩した^{たけ}崖の上で埋め立てをして造つた、棧橋まで小さな漁村で、四角な箱に窓を明けたやうな、生々しい一色のペンキで塗り立てた二三階建ての家並みが、峻しい斜面に沿うて、高く低く立ち連なつて、（或る女・前 185）

のような例では、のぼりおりする際の困難さが少くとも前面に表われてはいない。

以上みてきたように、「けわしい」には、かならずしも傾斜の角度ということに帰着しない要素も含まれているようである。しかし、

○海の前にはどこでも必ず対岸の角度のけわしい山が見えていた。（美術手帖増刊 1956年10月 115「私の写生地 鈴木信太郎」）

○二人はまたゆるやかな駒の歩を進めはじめた。やや峻しい勾配にかかるところで道は大きく右折した。（落城 21）

のように、「角度」「勾配」と直接に結びついている例もあって、少くとも傾斜の角度ということが基本的な要素であることは認めてよいだろう。

「急な」「けわしい」と反対に、傾斜の角度が小さいことを表わす語には「なだらか

な」「ゆるやかな」「ゆるい」がある。

「ゆるい」には「ゆるい服」, 「ゆるいスピード」, 「ゆるいカーブ」, 「ゆるい坂」, 「ゆるい取りしまり」のようないろいろな使われかたがある。これらを別義と考えるとしても、緊張的でなく、くつろぎを感じさせるような性質や状態という点での共通性は感じられる。

○トンネルを境にして、急に左右が山となつて、海の方へ傾斜のゆるい坂となつてゐるのだが、(帰郷 207)

○表通りから入ると俄かに暗く、緩く爪先下りになつた舗道の足許さへよくは見えないやうであつた。(伸子・上 10)

などは傾斜の角度が小さいことを表わしており、それが大きいことを意味する「急な」「けわしい」と対照的な関係にある。

「ゆるやかな」も「ゆるい」と似た様相を示している。「ゆるやかに着る」, 「ゆるやかに動く」, 「ゆるやかな曲線」のような使われかたとともに、

○そこからすこし急な傾斜で下がつてゐる病棟の北側に沿つた少しばかりの空地にその土を運んでは、そこいら一帯を緩やかななぞへにしはじめてゐた。(風立ちぬ 108)

○門のやうに迫つた両側の丘の林相も、ゆるやかに上つた谷底を埋める草の種類も、温帯日本の谷とは違ふはずであつた。(野火 137)

○そこは内野スタンドの最上層で、そこから見下ろせる人気のない広いスタンドには、見渡す限り粗末な取付けの木製の腰掛けが、寒々とした縞模様を拵けて、階段状に中央グラウンドへとゆるやかに落込んでゐるのであつた。(闘牛 105)

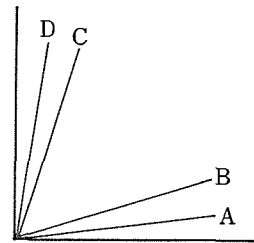
のような傾斜角度の小さいことを表わすばあいがある。

「なだらかな」にも

○手前の陰になつたなだらかなスロープもよく描写されていて、(アサヒカメラ 1956年3月40)

のように、同様のばあいがある。

(付) この項目に関連して、小調査1の中で次の質問を行なつた。(各例文に対する反応の、上段は女子大生23人、下段は女子高校生51人のもの)



	普通	やや普通でない	あきらかにおかしい	(無答)
(イ) A坂は B坂より なだらかなだ	{ 23 44	{ — 5	{ — 2	{ — —
(ロ) B坂は A坂より 急だ	{ 18 36	{ 4 10	{ 1 4	{ — 1
(ハ) B坂は A坂より けわしい	{ 2 18	{ 10 18	{ 11 15	{ — —

(ニ) D坂は C坂より けわしい	{	22	1	—	—
		40	8	2	1
(ホ) C坂は D坂より なだらかな	{	2	13	8	—
		11	21	19	—

A坂とB坂はいずれも傾斜角度が小さい、一般的にいう「なだらかな」坂であるが、AとBとを比べればBのほうが角度が大きいという条件を設けてみたわけである。まず便宜上、上段の女子大生のほうの結果だけをみていくことにしよう。上の条件のばあい、(イ)「A坂はB坂よりなだらかな」が全員一致で、普通な文として支持されたのは当然な結果であろう。(ロ)「B坂はA坂より急だ」も数人を除いて大部分の人によって支持された。ところが、(ハ)「B坂はA坂よりけわしい」は普通だとした人は1割以下にすぎない。「急な」は本文で述べたように、傾斜の角度が大きいことを意味するに止まって、「けわしい」のように付加的な要素がなく、したがって比較表現のばあいには傾斜角度の小さい領域にまで広く使えることを裏書きする結果であった。これに反して「けわしい」のほうは、単に傾斜角度の大きいことだけではなくて、のぼるのに困難だという付加的な要素があり、したがって傾斜角度の小さい、のぼるのに楽な範囲では比較表現にも使うことが無理になるのであろう。

(ニ)「D坂はC坂よりけわしい」が1人を除いて支持されたのは、(イ)の「なだらかな」のばあいとほぼ同様であった。しかし、(ホ)「C坂はD坂よりなだらかな」は大部分の人が「やや普通でない」あるいは「あきらかにおかしい」に反応した。これは、(イ)における「けわしい」と同様の傾向である。「なだらかな」も、傾斜角度の全領域にわたって比較表現に使える語ではないようである。

以上、上段の女子大生23人の結果をみた。下段の女子高校生51人の結果は、女子大生のほどははっきりした傾向を示していないが、方向としては女子大生のばあいと平行した数字を示しているので、上のような解釈を、弱められた形であてはめることができる。

[67] 程度 (曲がりかた)

急な／ゆるい、ゆるやかな、なだらかな

「ゆるい」には曲がりかたがはげしくないことを表わすものがある。

○ウインチにはそして何かブラ下がつてゐた。それが揺れてゐる。吊り下がつてゐるワイヤーが、その垂直線の囲りを、ゆるく円を描いて揺れてゐた。(蟹工船 64)

○三右衛門は味方の白砲にも種市の村へうちかけさせてみたが、丸い百匁玉がゆるい孤を老いた三右衛門の眼にみせて山裾に落ちた。(落城 24)

○道が、ゆるく曲がって動物園の方へ行っている。(むらぎも 155)

これは数学でいう曲率が小さい(曲率半径が大きい)ことに相当するものと言えようか。

○雨は来ないか。水は渦れ、褐色の礫の間に、砂が、かつて流れた水の跡を示して、

ゆるく起伏してゐるだけである。(野火 140)

のように回数多く曲がるばあいにも「ゆるい」が使われる。

「ゆるやかな」にも同様の意味がある。

○細い刷毛でさっと一なでしたような、幾すじかの飛行雲が、ゆるやかな曲線を描いて淡く縦横に交錯している。(小説サロン 1956年1月 95)

○前は一軒ばかり草原が砂丘のやうに、ゆるやかに起伏した涯に、岩を露出した別の丘が、屏風のやうに立ちふさがつてゐた。(野火 22)

「なだらかな」も同様である。

○肩＝なだらかに丸みをおび、肩巾が広がっている。(装苑 1956年10月 127)

○舟を押してゐるなだらかな波は彼の心を落着け、何もかも言つてしまつて安らかになると、(潮騒 100~101)

○甲州。ここの山々の特徴は、山々の起伏の線の、へんに虚しい、なだらかに在る。(富岳百景 52)

以上の3語における、曲がりかたがはげしくないという意味に対立して、曲がりかたがはげしいことを表わすのは「急な」であろう。その意味での「急な」の用例は資料内にはほとんどないが、

○解剖学的に、女の骨盤が偉大なのと、いま一つ大腿骨が膝の関節に向つて、内側へ急に狭っているからで、女性の性が積極的なためではない。(文芸春秋 1953年12月 28)

はその例であろうか。「急角度で曲る」「急カーブ」における「急」は、この意味の「急な」を造語成分とするものといえよう。

ここでは、「曲がりかた」を〔66〕に扱った「傾斜の角度」とは別に取り出して考えてみた。しかし、

○牧場のうしろはゆるい丘になつて、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。(銀河鉄道の夜 257)

○ヒースのかなたに、残雪をのせたゆるやかな山があった。(高崎山 26)

の「ゆるい」「ゆるやか」などは曲がりかたとも、傾斜の角度とも解しうるかもしれない。この双方を統一的に扱うこともできるかもしれない。しかし、これらの語は、曲がりを含まない平面的な一つの斜面についても言える点を重視して、一応2つに区別して扱った。

〔68〕 程度

あまい——からい

「あまい」と「からい」とは一般に反対語として認められている。

味覚に関する意味において、「あまい」は糖分の味を、「からい」はとうがらしなどの舌をさすような感じをさすことが多いであろう。

○それから、葡萄糖の注射液の残りを飲ましてあげませう。とても甘い。(本日休診 120)

○「名物のライスカレーはいかゞでしたか。とても辛くて内地の方には食べられないでせう」(河明り 295)

このような対立においては、味覚の種類が違うので、同一の尺度上の程度による対立とは無縁である。

しかし、「からい」は塩味に関して、しおからい、しょっぱい、の意味に使われることもある。

○幸いあり合ふ茶碗でそつと舷外の水を掬つて、一口。あつ——^{なせかへ}咽返つた、^{から}鹹いの、鹹くないので、今思ふても——咽が痛い。(愚出の記・上 69)

また、「あまい」は塩味がうすいことを表わすこともある。「あまいみそ汁」「塩のあまいさけ(甘塩のさけ)」「塩のあまいせんべい」などというばあいである。

○どこのそばやに行っても、「汁」の甘くなったことは驚くべき現象である。(小説新潮 1956年4月 163)

の「あまい」は砂糖分の甘さであるか、しょうゆの味のうすさであるか、両方を含んでいるか、よくわからない。

しかし、「あまい」と「からい」とには、上述のように塩味の程度の大小を表わす側面があることはたしかであって、その限りにおいて同一尺度上の程度による対立の要素を含んでいるといえよう。たとえば、塩の「あまい」さけの、塩の量を加えていくと「からい」さけになる、というような場合があるわけである。

味覚以外の領域に使われる「あまい——からい」についても、「あまい」の側から一べつしてみよう。例解国語辞典の「あまい」の説明は(1)(2)が味覚関係で、(3)~(8)がそれ以外である。(3)~(8)のそれぞれにあてはまる用例を一つずつあげてみよう。

(3) ○くちなしの花に似た白色の花で、甘く、きつ過ぎるくらゐに匂つた。(帰郷 48)

(4) ○班長は、曾田一等兵の前まで歩いて行ったが、こんどは小さい甘い声でつづけた。(真空地帯・上 59)

(5) ○西鉄のバッテリーは、今年少し甘くなったのかな、(野球界 1956年11月 69)

(6) ○あなたの文が甘ければ甘いほど、彼氏はテレくさいことでしょう。(婦人生活 1956年6月 360)

(7) ○しかし叔母は私に甘く、私が軍隊を出てオヤジ球一の家に寄食するようになってからでも、毎月小遣いとして百円宛ては必ず須賀町に送金してくれた。(中央公論 1953年10月 122)

(8) ○一見ゆき当りばったりに処世の道を講じていながら、決して甘くない男を中心に置いて、その周囲に各種の人体模型を描いた、見事な浮彫は成功している。(婦人公論 1956年1月 258)

以上の諸用法に関しては、「あまい」は「からい」と対立しているとはいえないものが多いようである。ただ(5)の一部分については「からい」との対立が認められる。

(5)の、例解国語辞典の説明は、

鋭さ・きびしさなどがなく、にぶく、ゆるい。「刃物の切れ味が——」「点〔見方・しつけ〕が——」「栓が甘くて中味がこぼれる」

となっている。この文例の中の、「点があまい」に対しては「点がからい」が対立して使われる。「点がからい」が具体的に使われた例はなかったので、抽象化して、評価がきびしいの意味に使われた例をあげる。

○金持のお坊ちやんがほとんど遊び半分に通つてゐる学校では点が甘くつて、高等の学校に入学出来なかつた、むしろ同情されるべき立場にある人達の方が、却て苛酷に採点されるといふのは、実に妙な話だがそれが現在の実状だつた。(波 324)

○点がからいので有名な武谷三男氏でさえ、宇宙線研究者の方法をほめたたえる。(物質の根源と宇宙を結ぶ 129)

これは採点基準のきびしさという尺度の上の、程度の違いだということができよう。しかし、上の文例のなかにある「見方があまい」「しつけがあまい」に対しては「*見方がからい」「*しつけがからい」という対立はないようである。また、刃物の切れない意味の「あまい」、栓・留め金・ハンドルなど取り付け部分のゆるい意味の「あまい」も「からい」と対立してはいない。

(69) 程度

おびただし<おおい、たくさんの

「おおい」「たくさんの」も「おびただし」も、数量に関する意味分野に属し、かつ数量の程度が大きいことを表わす側の語である点でも同じグループに属していると考えることができる。

○大会が近づいて彼をめがけて殺到する雑多な用事が多くなるにつれ、津上は次第に無口に、次第に活動的になつて行つた。(闘牛 111)

○このところ津上をめがけて殺到してゐる雑用は実際に夥しいものらしかつた。(闘牛 108)

は同じ作品で、同じものごとについて「おおい」と「おびただし」とが使われている例である。同様に、同一の作品の同一の事象に関して「たくさん」も加えて3語が使われている例がある。

○今日の英国にいかにも多くの貧乏人がいるかという事は、私のすでに前回に述べたところである。(貧乏物語 24)

○しかし私が、欧米諸国にたくさんの貧乏人がいるというのは、かかる意味の貧乏人をさすのではない。(貧乏物語 10) 二

○してみると、いかに貧乏人が英国にたくさんいるかということがますますよくわかる。(貧乏物語 23)

○ひっきょう英米独仏の諸国が貧乏人の実におびただしきにかかわらず、世界の富国と称せられつつあるは、古今にまれなる驚くべき巨富を擁しつつある少数の大金持ちがいるためである。(貧乏物語 34)

上の例のうち、はじめの2つは連体的な用法である。このばあい、「おおい」という連体形は使われず、「おおくの」または「たくさん」が使われる。ただし、

○K子は嘉門と関係の多い課に入ってきたのだが、K子の方でも、なぜか彼に親しきうにしてくれたので、ときどき話をするやうになつた。(冬の宿 116~117)

のように連体修飾節の中の述語であるばあいは連体形「おおい」が現れることはいうまでもない。また、

○しらべてみると、ニホンザルはほかにもたくさんいることがわかった。(高崎山 39)のような連用的な用法においても、「たくさん(に)」が優勢であるが、

○襖を取つてゐるらしく、その腕を振るたびに赤い裾が多く出たり縮まつたりした。(雪国 164)

のように「おおく」も現われる。

語の文体的な価値の上で、「おびただしい」は文章語的である点で、「おおい」「たくさん」と区別される。「おおい」と「たくさん」の間でも、「たくさん」のほうがより口頭語的であるという傾向の違いがある。(小説の会話文からの用例では「たくさん」の使用が非常に優勢である。)

語の実質的な内容の上で、これらの語を区別するものは何か。

「おおい」は、わずかに多い目であるばあい、かなり多いばあい、非常に多いばあい、などいろいろな程度の多さに対して、広い範囲にわたって使うことができる。すなわち、あるものの数や量が、ある基準的な程度を越えていれば、どの程度越えているかという上での制限なく「おおい」と言うことができる。(「たくさん」は「おおい」ほど自由には使えないようであるが、それにしても相当広い範囲にわたって使うことができる。)これに反して「おびただしい」は、あるものの数や量がいちじるしく多い時にしか使うことができない。すなわち「おびただしい」は「おおい」のうちの、程度の非常に大きい部分とのみ対応する。この点が、双方の意味を区別する基本的な相違である。簡単に図示してみよう。

0-----→∞

スクナイ

オオイ

オビタダシ

○丁度その頃、ほとんど世界ちゆうに^{びまん}瀰漫して悪性の感冒が流行してゐた。紐育市中で毎日^{おびただ}夥しい患者が脳や心臓を冒されて死亡した。(伸子・上 27)

○百万人の読者を獲得したいと思う者は、ゆめこの道徳にもってはならない。もとより漱石は大という字のつく芸術家であろうが、いかに芸が秀でていたにしても、もしも彼がこの道徳にもとるものを書いたならば、あの頃はもちろん、今日も、見られるような夥しい読者を獲得することは不可能であつたにちがいない。(改造増刊 1953年10月 日本を動かす1000人 157)

において、死亡した患者の数、漱石の読者の数は並みはずれて多い、一通りでなく多いために「おびただしい」と言うことが可能であつた。

○細胞に感染したウイルスは、二倍、四倍、八倍、十六倍……とまたたくまに、おびただしい数にふえる。(生命の暗号を解く 158)

は、ウイルスが分裂をくりかえして幾何級数的に膨大な数にふえていくことを述べているのだから、「おびただしい数」と当然いえるわけだ。

○私は眠らなかつた。朝の光で、まづ私を驚かしたのは、彼の顔と手を蔽つてゐる、夥しい蠅であつた。(野火 130)

におけるはえの数は「彼の顔と手を蔽つてゐる」のであるから非常に多いわけで、「おびただしい」という形容詞にふさわしい。

「おびただしい」は数量が異常に多いという条件のもとで使われるから、そのことに対して驚きや衝撃的な感情が起こることもしばしばある。すぐ上に引いた「野火」のはえの例もそうであつたが、そういう例をもう少しあげよう。

○私が訪ねていったときは、市場は比較的閑散で、白熱的な場面を見ることはできなかった。それでも場内を見わたして驚くことはおびただしい電話の数である。(知性 1956年12月 90)

○其の答より何より、姉は時雄の着物に夥しく泥の着いて居るのに驚いて、
「まあ、何うしたんです、時雄さん。」(蒲団 31)

○窓の間の壁にはキリストの受難を表はした、十四面の油絵がかけてあつた。その画面にばらまかれた夥しい赤、つまり血の量が私を打った。(野火 79)

「おびただしい」は数量がきわめて多いと客観的にも言えるときにのみ使われる、とは必ずしもいえない。

○たださへ満員の高架電車は、下街へ近づく一停留場ごとにおびただしい乗客を詰め込んだ。(伸子・上 40)

では、すでに満員であつた電車にさらにそれほど多数の乗客が駅ごとにふえていくことはあり得ないというりくつが言えよう。こういう場面では人数を事実以上に多く心理的にも感じやすいであろうし、あるいは大げさに表現したともいえるであろう。

以上にあげた用例の中で「おびただしい」の例は、その上位語である「たくさん

の]「おおい」でおきかえることが一応できるものであった。ところが、

○連日の旅づかれ、心痛、其上を一昼夜も船の上の風波に揉まれて、綿の様になつた体、未だ船暈も醒めぬに雪道を歩いたことゝて、疲労は夥しく、殊に昨日以来絶食して、食物と云つては今日の昼頃宇和島で唯温飩一杯食つたばかり、爪先の冷き腹にこたへて、腹は頻りに痛む。(思出の記・上 180)

○「全速力で進行して居る中に、凄じい音がしたと思ひましたけえ、汽車が夥しく傾斜してだらだらと逆行しましてナ、何かと思ひました。機関が破裂して火夫が二人とか即死した……」(蒲団 62)

○科学的分析はさておいて最近汚物とともにチリまで投棄しているのか、海岸はかってないほどの大量の汚物が打ち上げられ不潔なことおびた下さい。(週刊サンケイ 1956年8月26日 28)

のような「おびた下さい」はおきかえが不可能である。これらの用例では、「おびた下さい」は属性の程度の表現に転化しており、狭い意味での数量に関する意味の分野からは抜け出しているからである。

(70) 程度

すかんびんなくまずしい、貧乏な

「すかんびんな」はわずかに次の1例があるにすぎない。

○父が死んだのちも彼は家を見ようとしなかったので、たちまち家運は傾き、ありったけの金を使い果たし、土地家敷まで売り払って、素ッ寒貧になってしまった。(読切小説集 1956年5月 268)

したがって用例によって調べることはほとんど不可能であるが、多少なり言えそうなことをすこしあげてみよう。

上の例もそうであるが、「すかんびんな」は財産を勢いよく使いまくったりするというような、変化の結果としての状態に多く使われるという傾向があるかもしれないと思われる。

上のことと関連して、「すかんびんな」は一時的な属性であり、「まずしい」「貧乏な」はもっと持続的な属性であるという傾向があるかもしれない。

「まずしい」「貧乏な」は次のように個人や家でなく、もっと大きい団体が主体になることもある。

○もともとS一県は財政的には貧しいところであった。(人間の壁・上 53)

○夏らしい暑い日の光が、山間の貧しい町のうへにも照つて来た。(あらくれ 126)

○「日本が貧乏になつたのはほんたうね。」(帰郷 307)

○このS一県というのが貧乏世帯で、したがって津田山市もまことに貧乏。(人間の壁・上 165)

○あのミシン屋の二畳を引きはらって、こんな貧乏なアパートに越して来たものの、一つは松田さんの親切から逃げたい為めであった。(放浪記 194)

「すかんびんな」はこのような大きい団体を主体とすることは普通にはないのではないか。

語の文体的価値の点では、「すかんびんな」は俗語的な色彩をもち、「貧乏な」は口語的であり、「まずしい」はやや文章語的であるといえよう。

「すかんびんな」はまずしさの程度の観点で、非常にいちじるしい領域をさすという制限があることはいうまでもない。

○然し其麼嘶をして聞かせる人々は勘次の酷い貧乏なのと、二人の子が有るので到底後妻は居つつかれないといふ見越が先に立つて、心底から周旋をしようといふのではない。(土・上 125)

○彼は父親から月々四十円送られていて、大学生としてひどく貧しくはなかったが、下宿屋を探すとするとそれでは話にならなかった。(むらぎも 63)

○この親子を見ていると、彼女は胸が苦しくなるのだった。これほど徹底した貧しさというものを、彼女は見たことがなかった。(人間の壁 上 306)

における「貧乏な」「まずしい」は程度がひどいものではあるが、「すかんびんな」といえるかどうかは疑問である。それは、「すかんびんな」は程度の観点からの制限のほかにも、上にあげたようないろいろな制限を背負っているからであろう。

[71] 程度

ひっしなくいっしょうけんめいな、けんめいな

いずれも、人間が力をつくして事を行なうようすであるが、「ひっしな」は他の2語より、力をつくす度合が一層甚だしい、という程度上の区別があると考えられる。

○主従が必死になつて、十数合太刀を合はず間に、主人の太刀先が、二三度低い天井をかすつて、屢々太刀を操る自由を失はうとした。(恩讐の彼方に 60)

○相手が必死に斬り込むのを、巧みに引はづしながら、一刀を相手の首筋に浴せた。(恩讐の彼方に 65)

は命を取るか取られるかの場面だから、文字どおり命がけであつて、「ひっしに」がふさわしく、「(いっしょう)けんめいに」だったら間が抜けてしまう。

○もう斯うなつては、仕方がない、書けても書けんでも、筆で命を繋ぐより外仕方がない。食ふと食はぬの境になると、私でも必死になる。必死になつて書いて書いて書捲つて、その度に、悪感情は抱いてゐたけれど、仕方がないから、某大家の所へ持つて行つて、筆を加へて貰つた上に、売つて迄貰つてゐた。(平凡 106)

も生きていけるかいけないかという場面だから、「ひっしに」でないといつたりしないであろう。

○教師はいま必死になって、新しい民主主義教育を子供たちに教え込もうと努力している。(人間の壁・上 329)

○たゞ劇場の前に立っていただけで最低十二日間の小菅行である。そこで、ダフ屋も必死だ。パクられかけると、警官が一人や二人なら仲間がよってたかって、奪還して逃がしてしまう。(実話雑誌 1956年5月 90)

は生命にかかわるようなことではないが、「(いっしょう) けんめい」に言いかえると文意は弱くなってしまう。

○しかもマアサの必死の手当にもかかわらず、酋長の娘が死んでしまったので、(スクリーン 1956年1月 137)

○こうした非難に対して自身を弁護しようとしたクーンの必死の努力も水泡に帰した。(中央公論 1956年12月 182)

における「手当」「努力」は「いっしょうけんめいな」「けんめいの」などの修飾語をもとりうる動作名詞である。

「いっしょうけんめいに」も次のような例では「ひっしに」におきかえてもおかしくないと思われる。

○巨大な、真黒な、大熊のやうなものに向つて私は一生懸命に格闘を挑んでゐた。(冬の宿 146)

これは、いやな夢の内容を描いた部分である。

○椅子に掛けてゐて、画家の方を見ないやうに脇を向いてゐて、ひとりでに笑ひかけ、唇を噛んで、一所けんめいに堪へてゐるが、ハンドバッグを膝に抑へてゐる腕が、こまかく裸へ出した。(帰郷 143)

○見ていた明子は、途中から振り返った行一に、思いつき明るく笑つて見せた。涙を一生懸命こらえている行一はその笑い顔に、またすっぱかされた気がしたのであろう。(くれない 38)

は笑い・涙をこらえているところで、「ひっしに」と言いかえられないことはないが、こらえる度合がより大きい感じの表現になるといえよう。

○さあ、では、あの牛の角を書くやうなつもりで、いという字を、五つ、ノートに書いて見ましょう。一生けんめいに書くんですよ (人間の壁・上 56)

○この人がねおくみさん、或日珍らしく午寝もしないで、下の運河のふちで一生懸命にかたつむりを取つて廻つてるんでせう？ (桑の実 122)

○宏の春休みは終りに近づいてゐた。そこで彼は朝起きてから寝るまで一生けんめい遊んだ。(潮騒 86)

○母はPTAの副会長をしたこともある派手な女で、外見を飾ることに懸命になっている。(人間の壁・上 159)

では「ひっしに」と言いかえるとおかしい文になってしまう。これらはそれほど大きな

努力を要しないこと、苦しいよりむしろ楽しいこと、等であるために「ひっしに」が含む甚だしく大きい努力という要素と両立しえないのであろう。

「ひっしな」の名詞を修飾する形は、上にあげた2例はいずれも「ひっしの」であったが、「ひっしな」の用例もある。

○そのまま門を出ていかないところをみると、この必死な、思いつめた衰れな姿を誰かに発見してもらいたかったのであろう。(厭がらせの年齢 304)

[72] 程度

こちこちの、かちかちの<かたい

「かちかちの」「こちこちの」の用例数がごくわずかしかない。文字通り物理的な堅さを表わしているものとしては、次にあげるものぐらいしかない。

○その櫃のあとに附いてゆきながら、途中で何度も私は滑りさうになった。それほどもう谷かげの雪はこちこちに凍みついてしまつてゐた。(風立ちぬ 145)

○細道がかちかちになって白っぽく乾いている。(むらぎも 211)

○溝の向ふは、若布を染める工場の敷地である。若布の臭気が物凄かつた。数人の爺さんや婆さんが、かちかちになつた若布を緑色の液を入れた槽につけ、それを掻きまはしてから、張繩に掛け並べてゐた。(本日休診 91)

上の3例はいずれも、「凍みつく」「なる」という動詞を修飾している情態副詞としての用法である。これが普通の用法であるが、「かちかちだ」「こちこちの(な)」などのような述語用法・連体用法もあり得よう。

意味の上の区別としては、まず、「こちこちの」「かちかちの」はある変化の結果として堅い状態であることを表わすのが普通である。

上の3例では、雪や細道の土や若布は本来堅いのではなく、こおったりする変化の結果として堅いのである。「かたい」でも、

○口から喉は喘ぎたい程に干からびて、岡の肩に乗せた手は、生理的な作用から冷たく堅くなつてゐた。(或る女・前 130)

のように変化の結果の状態を表わすことはあるが、それが必要条件でないことはいうまでもない。この区別からも、

○柱が立つてゐるだけで、漆喰のやうにかたい土間がひろがつてゐる。(帰郷 137)

○甲板には外国人が五六人厚い外套にくるまつて、堅いティークの床（ゆか）をかつかつと踏みながら、押し黙つて勢よく右往左往に散歩してゐた。(或る女・前 114)

のような「かたい」は「こちこちの」「かちかちの」におきかえることが不可能である。また、

○その時の記憶は、干いたボール紙の味しか、残してゐない。しかしそれから幾度も

同じものを喰べて、私はそれが肉であつたのを知つてゐる。干いて固かつたが、部隊を出て以来何ヶ月も口にしたことのない、あの口腔に染みる脂脂の味であつた。

(野火 144)

の「固かつた」は「こちこちだつた」におきかえられるであろうが(以下に述べるように堅さの程度の上での制限は加わるが)、このばあい「干く」という変化の結果による状態だからであろう。

堅さの程度に関して、「かたい」は自由であるが、「こちこちの」「かちかちの」は、程度が著しいばあいにのみ使われるという制限がある。雪が少しこおりかかったような状態ではまだ「かちかちだ」などとはいえないであろう。

○熱い饅頭を吹きながら、島村が嚙んでみると、固い皮は古びた匂ひで少し酸っぱかつた。(雪国 87)

○蒸してはおろし蒸してはおろしするので、うむし釜の御飯はピチャピチャしていた。蛤鍋の味噌も固くなってしまった。(放浪記 155)

○焚火のまはりにひしめいてゐるたくさんの乳房のなかには、すでに潤んだのもあれば、乾いて固くなつて干葡萄のやうに乳首だけが名残をとどめてゐるのもあつたが、(潮騒 123)

上の例の「かたい」「かたく」は「かちかちの」「こちこちに」などにおきかえられないか、またはむりにおきかえると大げさな言い方になると思われる。それは、表わそうとしている堅さの程度が著しいものでないためであろう。

「こちこちの」と「かちかちの」の区別は、それらの擬声語としての用法ともかかわりがあるかと思われる。しかし、用例数があまりに少ないこともあって、ここで問題にすることはできない。

[73] 程度

なみなみとくいっばいに

「なみなみと」は液体が入れ物(と見立てうるようなもの)に満ちている状態を表わし、「いっばい」も同じような状態を表わしうるので、双方の共通面を取り上げて比べてみよう。

「なみなみと」は中味の液体と入れ物との相対的な量の関係をいうと、液体がこぼれ出んばかりの状態である。コップにできるだけ水を入れると、表面張力によってコップのふちよりも水のほうがやや高くなる、そのような状態が「なみなみと」のもっとも典型的なものであろう。次の例などはそういう状態であらう。

○このなみなみとあふれるように盛りあがった黄金色の液体の豊醇こがれいろなことはどうだろう。(出家とその弟子 91)

一方、「いっばいに」は「なみなみと」ほどに中味の液体が入れ物に満ち満ちていな

くてもよい。

○おつぎは顔を赧くして慌しく手桶を持つて遁げた。一杯に汲んだ手桶の水が少し波立つて零れた。(土・上 201)

この例では、「一杯に汲んだ手桶の水」が「持って遁げた」ことによってはじめてこぼれたのであって、「一杯に汲んだ」状態と「なみなみと汲んだ」状態との間には段階の差があり得ることを示している。

[74] 程度

きまりわるい、てれくさい、きはずかしい、まがわるい、ばつがわるい<はずかしい
これらの語は、羞恥の感情に関係がある点で共通性がある。

「きまりわるい」は、重大なことを対象として起こる感情ではない。感情の程度もさほど強烈な、深刻なものではなく、かるい羞恥の程度であるのが普通であろう。資料内の用例はあまり多くないが、感情の原因のわりあい指摘しやすいものとしては、異性に対するはにかみ、異性ととの関係についての第三者に対するはにかみ、人の注目を浴びる時の気おくれ、柄になく殊勝なことを言ったときのくすぐったさ、などによるとみられるものがある。

○民子は其後僕の所へは一切顔出ししない許りでなく、座敷の内で行逢つても、人のゐる前などでは容易に物も云はない。何となく極りわるさうに、まぶしい様な風で急いで通り過ぎて終ふ。(野菊の墓 11)

○「政夫さん……………あなた先になつて下さい。私極りわるくてしやうがないわ」「よし、それぢや僕が先にならう」(野菊の墓 32)

○署内に居合はした者は皆、彼小僧が如何して異人と話が出来るか、汚ない風をして居るが、此れぞ微服した天才であらふと思ふかの如く、頻りにちろちろ僕を見るので、僕はきまり悪く匆々に要をしまつて出て行つた。(思出の記・上 197~198)

○彼は咲子を「サーチャン、サーチャン。」といつて可愛がつた。「この子だけはしあはせにしてやりたいのです。」といつか彼はきまりわるさうに私にいつた。(冬の宿 54~55)

これらのようなばあい、自分のほうに人から積極的に非難されるような、弱点や欠点などがあるわけではない。(若い男女が自由に親しむことなどは古い道徳では非難される傾向があつたであろうが。)むしろ、「きまりわるい」感情をおこさせるものは、人からほめられるような、よいことであつてもよい。しかし、人からからかわれそうなこと、ひやかされそうなことなど、やはり一種の弱さを自分に感じているときに起こる感情ではなからうか。「きまりわるい」きもちは、あまり世なれていない人、内気なにはにかみやすい人などが感じることの多いものであろう。

○びよこりと一つ、お坊ちやんじみた、きまり悪げなお辞儀をした。信之には、そこ

に少しの拵へた気持も感じられなかつた。(多情仏心・前 272)

○「いゝえ、そんな御心配をなすつて下さいましては、」と、お^くみは極^り悪^{さう}に言つた。(桑の実 156)

「桑の実」のおくみに対しては、上の例のほかにも「きまりわるい」が何度も使われていて、ひかえ目なつましい女性像の描出に役立っている。

「てれくさい」も「きまりわるい」と同様に、あるいはそれ以上に些細なことがらによって起こる、軽度のはずかしさだといえよう。動詞「てれる」に由来する語構成をもっていることはいうまでもない。語の文体的価値において、やや俗語的で、一種の軽さをもっている。

「きまりわるい」と同様に、男女関係に関係して使われた例がある。

○葉書では文面を第三者に読まれるおそれがありますから、彼氏がいやがるのももっともだと思います。あなたの文が甘ければ甘いほど、彼氏はテレくさいことでしょう。(婦人生活 1956年6月 360)

○昔の旦那気質でややともすると人を見下すやうなところのある片野は、自分のさうした豹変ぶりを男としてみつともないことなどはてんで反省してもみないらしく、下僕が主人にたいするやうな諂ひぶりを照れ臭がりもせず彼女にむかつて振りまくのである。傍で見てゐる瀬谷のにがにがしきは云ふまでもない。(厚物咲 34)

他の用例も、やはり恥辱になるような、重い原因があるのではない。

○「センターともなれば、本当はそういった本をそろえておくのが当りまえかもしれないが、どうもいちいち金を出してつまらん本を集めるのもなんだし、献本として出版屋に請求するのもテレくさいんでね」(新潮 1956年5月 23) <エロ本をさす>

○「かち合せたよ。照れくさいものだ。相手の医者が、年とつてゐても若くつても、照れくさいものだ。」先生は、問はず語りに春三に云つた。(本日休診 94)

「てれくさい」は「きまりわるい」とちがって、はじらいの多い少女などには使われないのが普通であろう。

○その患者は手術台に乗るのが照れくさいので、一席弁じてみたものとは思はれるが、あれには看護婦の滝さんも手を焼いたのであつた。(本日休診 48~49)

の「患者」というのは「新制高校の女教授」であるが、ここに「てれくさい」が使われているところに、作者のその人物に対する一種の批評が表われているとみられるであろうか。「きはずかしい」「ばつがわるい」「まがわるい」については終りにかんたんに入れらる

「はずかしい」は、「きまりわるい」「てれくさい」と同じように、かるい羞恥心を感じるときにも使われる。

○ウワーッ、恥ずかしい……………先生に踊りを賞めていただくなんて。(とうつむいて恐縮する) (主婦と生活 1956年11月 240)

○「あたし何だか**恥かしい**わ。あんな理窟なんか列べちやつて……」(波 274)

○行一に呼びかけると、砂を両手で盛り上げて撫でていた行一は、嬉しい時の蓋しげな笑いで母を見上げた。(くれない 15)

これらの「**はずかしい**」は「**きまりわるい**」におきかえることができよう。

しかし、「**はずかしい**」はもっと程度のつよい羞恥を表わすことがある。

○同行一 私は**恥ずかしい**気がいたします。私の心の浅ましき、証拠が無くては信じないとはなんとという卑しい事でございます。(出家とその弟子 85)

○分厚いものや製本したのやのなかでそれだけがべらべらに薄かった。安吉は下等なことをしたかのように**恥しく**なった。(むらぎも 339~340)

のようなばあい、「**はずかしい**」には自分を低いものと感じて自分を責める気持が含まれている。「むらぎも」の例は、「安吉」が口述試問のとき、自分の卒業論文だけがうすべらなことを恥じている場面である。これらの「**はずかしい**」を「**きまりわるい**」と言いかえることは無理であろう。

○しかしO君の目には、戦争のあまりにも悲惨な状況と、眼ばかり光る放心状態の罹災者の群に、自分が自動車に乗っていることすら**はずかしく**、カメラを出してその姿を写すことなどは到底できなかつた。(中央公論 1953年7月 253)

○彼女は、「東独の粗末な服装では、**恥しくて**西ベルリンの目抜通りは歩けない。」と言ふけれど、その彼女の緑色のウールのワンピースは決してそんな粗末なものではない。(文芸春秋 1953年9月 138)

の2例を比べると、「中央公論」の例は周囲の中で自分だけが恵まれた条件にあり、「文芸春秋」の例は自分だけがみすぼらしいなりであるという、反対的な状況である。しかし、そのことを自分の弱味と感じている点は同じであって、そこから「**はずかしい**」きもちが生じるのだろう。これらの「**はずかしい**」を「**きまりわるい**」におきかえると、羞恥の感情がもっと弱い情況の表現に変わってしまうだろう。

○私の目の前には一人の兵隊さんが靴下のままで立っている。そのそばに三四人の印半纏を着た人達が立っていた。私は**はづかしさ**でいっぱいだった。救はれたことの喜び、また感謝のよろこび、そんな余裕のある心などは毛とうなく、お辞儀もそこに善ちゃんに手をひかれびしょぬれのまま帰って行った。(心 1953年12月 50
「張谷潤一郎 死三題」)

も、恥羞の感情の強い場面であるために、「**きまりわるい**」に言いかえることは無理であろう。

「**きはづかしい**」や「**ばつがわるい**」「**まがわるい**」も、感情の程度に関しては、「**きまりわるい**」などと同様に、著しくないグループに属するであろう。これらの語の用例はごくわずかしかないが、1, 2例ずつあげてみよう。「**きはづかしい**」は、**はず**

かしく思うべきはっきりした積極的なわけではないが、どことなくはずかしい、というような感情であろうか。

○おくみはハンケチを出して指先を拭いた。ちやんと着物を着換へた昼の心持にさそはれて、うつすらと目立たぬ程白粉をつけて来たのが、気はづかしいやうでもあった。(桑の実 76)

○「なんだ、降参したくせに、まだかゝつて来るな、ようし！」

と坐り直して、ふと細君と目を見合せた、——そこには、静かな幸福が宿つてゐた。恐らく自分の目も同じことだらう、と気がつくと、何故か信之は氣恥しくなつて、慌てて視線を、膝の上に抑へつけた信次の背なかに落したが、その瞬間に、朋子も、同じ心持で、目のやり場を変へたのを、ちらと視野のはづれに感じた。(多情 仏心・前 266)

「まがわるい」「ばつがわるい」は、事態のなりゆき、ものごとのタイミングなどが、自分に都合わるく、その場のかっこうがつかない、ていさいがわるい、というような気持を表わすのであろう。

○肉屋の店先に立つ度にいつも思ふことだが、どうもこの、待つてゐる間ぐらゐ間の悪いものはなかつた。(波 7)

○行介はまだ睡くなかつたけれども、起きてゐることが何だか間が悪かつたので寝てしまった。(波 222)

○「結婚生活って言ったわね。それ、なに。」広介はばつの悪さに高く笑った。(くれない 77)

○「どうしましょうね、今さらあのカフェーに逆もどりも出来ないし、少し廻って来ましょうか、飯田さんも私に会うのはバツが悪いでしょうから……」(放浪記 263)

[75] 評価

ながたらしい < ながい, ながながしい

「ながい」は空間的な延長と、時間的な延長とに使われるが、「ながたらしい」は時間のほうにしか使われない。「ながながしい」も時間に使うのが普通ではないかと思われるが、

○さうして、か細く長長しい或る草の葉を、生えたままで流し倒して、その草のために一時動流することをさへぎられたそれらのささやかな水は、その草の葉を伝うて、より大きな道ばたの渠のなかへ、水時計の水のやうにぼたりぼたりと落ち濺いで居た。(田園の憂鬱 13)

は空間的な量を表わしている珍しい例である。しかし、ここでは3語とも、時間に使うばあいについてだけ比べてみることにしたい。

「ながい」は、ものごとの時間的な延長が大きいということを表わすだけであるが、

「ながたらしい」はそのことを表わすと同時に、その性質・状態に対する否定的な感情が含まれている。

○まったくそれは、クソ面白くもない、長ったらしい、手のつけられぬ、精神訓話なのであった。(日本週報 1956年9月5日 60)

は聞かなければならない話に対して興味がなく、長くて(長く感じられて)やりきれない気持を、前後の文脈とともに表わしている。(ここでは「ながたらしい」と、促音による強調形が現われている。)客観的には長い話や文章でも、興味をもって接しているときは「*ながたらしい」とはいわない。「*ながたらしいが、おもしろい話だ(文章だ)」というような表現はありえないであろう。したがって、

○午前中の一時間、九時より十時迄を、ツルゲネーフの小説の解釈、芳子は師のかゞやく眼の下に、机に斜に坐つて、『オン、ゼ、イブ』の長い長い物語に耳を傾けた。(蒲団 40)

における物語は長さの程度は大きいけれども「ながたらしい」ということはできない。

○手紙には、「(省略)」とか言う言つただけの事が、仮名ばかりの字で長たらしく書かれた末に、「(省略)」と書き添へてある。(桑の実 105~106)

は、養母からの要領を得ない、なかがきの長い手紙に対する、読み手のおくみの喜ばしくない気持を「長たらしく」が表わしている。

○いつもは手のすく昼間に書き、朝の出漁前に「投函」するのだが、その朝ははやくしらせたいことがあつたので、きのふ書いた長たらしい手紙を破り、代りにこれを書いたと断り書がしてある。(潮騒 110)

では、「初江」が見た吉い夢を一刻も早く恋人に知らせたいという気持から、前日に書いた手紙をもどかしく長いものに感じたことを「長たらしい」が表わしている。

○それは春先する、面白さうな、笑みやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶさうなお饞舌りでもなかつたが、只漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語きこひごとの声で有つた。(武蔵野 11)

は、ツルゲネーフを二葉亭四迷が翻訳した「あひびき」からの引用の一節で、秋九月中旬の樺の林の中で聞いた木の葉のそよぎを擬人的に叙述している。デリケートな、文学的な表現なので、「永たらしい」に含まれるマイナス的な感情を、その場面から説明することはむずかしい。資料内での「ながたらしい」の用例は上にあげた4例だけである。

「ながい」は感情的な評価と無関係であることはいうまでもない。

○私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与へて呉れない此長い手紙じれつを自然たさうに畳んだ。(こゝろ 147)

は、さきの「桑の実」の例のように、長いわりあいに読み手にとって内容の乏しい手紙に対する感情が「じれつたさうに」で表わされているが、「長い手紙」そのものは感情

を含まない中立的な表現である。

○そこで私は今一つ、だんだん長くなるけれども、今度はドイツ人自身の感想を録して、きょうの話を終わりたいと思う。(貧乏物語 107)

○論思いのほか長きに失し、読者もまたすでに倦まれたるべしと信ずるがゆえに、余のいわゆる第二策は、論ぜずしてこれをおくつもりなのである。(貧乏物語 129)

は、読み手が「長たらしく」感じることを書き手として顧慮している場面であるが、「長く」「長き」自体は感情性とは無関係である。

「ながながしい」は「ながい」に比べて、長いと感じる人間の主観がおもてに打ち出されていることばである。そして、

○准尉は先刻師団司令部の控室でも木谷が昨夜から予想していた長々しい説教や、訓話を彼にしなかった。(真空地帯・上 8)

○唯もうどの日も、どの日も、区別の無い、単調な、重苦しい、長長しい幾日かであった。(田園の憂鬱 56)

の例などは、「ながたらしい」と同じように、否定的な感情を伴った場面使われている。しかし、他方で

○一通は友人の銀之助。例の筆まめ、相変らず長々しく、丁度談話をするやうな調子で、さまざま慰藉^{なぐさめ}を書き籠め、(破戒 162)

○而して其善悪榮辱の奇妙に混淆したる長々しき公生涯の遂に其終局に達するや、彼が死なむとて退隱せし所は即ちデーレスフォールドなりき。(思出の記・上 29)

のような例もある。2例ともやや古い作品からの例ではあるが、このように別にわるい評価を含んではない使われかたは、現在でもありうると思われる。「ながながしい」は、積極的にマイナスの評価を含んだ語だとは、いえないようである。

[76] 評価

けばけばしい<はでな、華美な

これらの語は、対象が人目をひきやすいような、はなやかな性質をもっていることを表わす点で、共通な側面をもっている。

「けばけばしい」は人目をひくような性質の程度がいちじるしいが、それだけではなく、はなやかさの性質において品位・趣味が低く、安っぽく刺戟の強いような、不快な感じを与えるものであることを含んでいる。例をすこしあげてみよう。

○ローダミンBは、そのけばけばしいボタン色で、タラコ、サクラエビ、かまぼこななどの水産食品にもしばしば愛用されるが、(娯楽よみうり 1956年9月28日 9)

○けばけばしく新造船を描いた船会社のカレンダー、(潮騒 63)

○清賓亭では二人は二階の奥の一段下がった、戸に鏡などを張ってある、ちょっと活動小屋のようなケバケバしい部屋に通された。(暗夜行路・前 84)

○新築の白っぽい木地には白熱ガスのケバケバしい強い光が照りかえしていた。(暗夜行路・前 30)

○お島が鶴さんに無断で、其の取つけの呉服屋から、成金の令嬢か新造の着る様な金目のものを取寄せて、思ひきつたけばけばしい身装をして、(あらくれ 84) は、有毒染料の色・カレンダーの絵・部屋・光線・服装について「けばけばしい」が使われた例である。

「はでな」「華美な」が同じようなものごとについて使われた例が資料内にあったものをあげてみよう。

○ビタミン剤や化粧品看板が派手な色で軒先をかざっているが、店は繁昌してはいなかった。(人間の壁・上 29)

○近ごろ新たに手入れして、婦人室らしく思ひきつて華美に装飾された部屋を眺め、真知子は母に話しかけた。(真知子・前 188)

○施療室の見舞客として、今日の派手な服装が如何に不適當であるかが顧慮された。(真知子・前 206)

○華美な洋装の肩つきまで変っている。(くれない 7)

「はでな」「華美な」は一定の方向の評価を帯びた語ではない。

○芳子は女学生としては身装が派手過ぎた。黄金の指環をはめて、流行を趁つた美しい帯をしめて、すつきりとした立姿は、路傍の人目を惹くに十分であつた。(蒲団 15)

○博多の帯の色が派手過ぎるが外に夏帯を持たぬ。(読切小説集 1956年9月 238) のような「はですぎる」も、かならずしも「けばけばしい」と言いかえることはできない。「はでな」の程度がいちじるしくなるだけでは「けばけばしい」にはならない。不快な感じを与える要素の加わる必要がある。

○華美を通り越して刺戟的になつてゐる室内装飾にも、その彼が現はれてゐた。同時にまた彼と夫人との朗らかでない友情を聯想させることに依つて、それはなほ厭味に見えた。(真知子・前 190~191)

などは「けばけばしい」と言えるような性質であろう。

「けばけばしい」の用例を2, 3追加しておきたい。

○白い指にはめてゐる指環の石もダイヤモンドのやうな、けばけばしいものではなく目立たなくて渋い猫眼石であつた。(婦郷 174)

は、ダイヤモンドを「けばけばしい」ものの例としてあげている。これはごく普通の評価のしかたではない。猫眼石を「目立たなくて渋い」上品なものとし、ダイヤモンドをこれと対照させてやや成金趣味的なものとした、個性的なとらえ方であろう。

○老主人の茶の湯の技倆は少しけばけばしいが確かであつた。(河明り 269) は茶の湯の手前という、より抽象的なものごとに使われた例で、大げさな、ひげらかす

ようなところがあることを「少しけばけばしいが」と表現したものであろうか。

○僕は素朴でユーモアに富んだ人が好きだな。派手なけばけばした女性に限って虚栄心が強いんだ。(人生手帖 1954年6月74)

は座談会の記事で、22才の菓子職人の発言であるが、「けばけばした」という、珍しい形がみえる。意味は「けばけばしい」と同様であろう。

〔77〕 評価

ぬるい<なまあたたかい

両語とも、「あつい」よりは低く、「つめたい」よりは高い、中間的な領域に属する温度を指示する点では、共通点があるといえよう。

「ぬるい」はおもに液体について、そのものとして期待される程度の高い温度より低い目で、望ましくない温度だということの意味する。

○五百助が、小屋へ帰ると、

「少しおヌルくなりましたけど……………」高杉後家さんが、べつに、どこも欠けてない茶碗を、差し出してくれる。(自由学校 318)

○「お湯が少しぬるうございましたでせう？」と、おくみは鉄瓶の下の火をかき探した。(桑の実 134)

はいずれも、お茶がそのおいしい温度より低い状態を言っている。

○或は畑の彼方の萱原に身を横へ、強く吹く北風を、積み重ねた枯草で避けながら、南の空をめぐる日の微温き光に顔をさらして畑の横の林が風にざわつき煌き輝くの眺むべきか。(武蔵野 17)

は、液体ではなく、晩秋の武蔵野の日光について使われているが、光線の強さが弱いために、あたたまるに十分でないことを言っているのであろう。「ぬるい」は資料内に上にあげた3例しかないけれども、「ふろがぬるい」と言うのも快適な温度より低くて不快な状態である。「わたしはぬるい目のふろがすきだ。」などと言うことがあるとすれば、世間でふつう、ややぬるいと評価されている程度の温度のふろがすきだという意味の表現であろう。

「ぬるい」を否定表現にして「ぬるくない」とすると、「ぬるい」ばあいよりも高い温度を意味する、という事実がある、このことは、「ぬるい」が「期待する温度に達していない」のようなマイナス的要素を含んでいるからであると理解される。

<注> 国広哲弥『構造的意味論』21ページ

「なまあたたかい」は、「ぬるい」のような否定的な評価を伴うということではなく、評価に関して中立的である。

○朝は必ず生温い飯に、煮詰つた汁と極つて居たのが、其日にかぎつては、飯も焚きたての気の立つやつで、汁は又、煮立つたばかりの赤味噌のほひが甘さうに鼻の

端へ来るのであつた。(破戒 298)

は、たきたての飯がややさめてしまった状態を言っており、液体であれば「ぬるい」といってもよい感じの温度であろう。しかし、同じく飲食物の例で、

○青木さんは、サンドキツチを食べたから、午は乳だけでいゝと言はれたさうで、おくみは婆やが生温くして壺に入れたのを、コップと共に盆に載せて二階へ持つて行つた。(桑の実 28)

は、液体ではあるが、「ぬるい」とは言いかえられない。このばあい、乳をあたためるのは飲むのに好適な温度にするためだから、ということがその一因であろう。

○地震のやうに機械の震動が廊下の鉄壁に伝はつて来て、むせ返りさうな生暖かい蒸気の匂ひと共に人を不愉快にした。(或る女・前 148~149)

○フツと私は、私の足先に、生あたたかい人肌を感じた。人の手だ！(放浪記 190)

は、不快さや気味悪さが伴った例であるが、

○ほんの心もち二人の肩が離れて、すれ違ふと、脂っこい肌からでも立ち騰つたやうな湯気に、生温かく二人の頬が舐められた。(多情仏心・前 17)

○私の身近にあるこの微温い、好い匂ひのする存在、その少し早い呼吸、私の手をとつてゐるそのしなやかな手、(風立ちぬ 97)

は、不快とはいえない、あるいは、むしろ快さを伴ったばあいに使われている例である。「多情仏心」の例の「湯気」というのは、屋台の支那そばの湯気である。

[78] 評価

せまくるしい、きゅうくつなくせまい

「せまくるしい」は「せまい」の意味の上に、狭さからくる不快さの要素が加わっていることはいうまでもない。

○人々はいづれも狭苦しい屋形の下に膝を突合せて乗つた。(破戒 170)

○先づ一ふくすることにしたが、部屋が狭苦しくつて煙草をすふことも出来さうがない。(本日休診 89)

○薬子も部屋に帰つて見たが、今まで閉ち籠つてばかりゐると左程にも思はなかつたけれども、食堂程の広さの所からでもそこに来て見ると、息氣づまりがしさうに狭苦しかつた。(或る女・前 113)

「きゅうくつな」は、面積や容積が小さくて、中にあるものが自由に動けない状態、やはり狭さからくる不快さの要素が含まれている。

○ただ、谷間の小屋では、三畳敷に、金次爺さんと、二人で寝たが、ここでは、一畳当り一人であるから、半畳分だけ、窮屈になる、勘定である。(自由学校 358)

○そのころ室は極めて手狭であつたから、予は致し方なく、廊下に卓を構えて仕事をしていた。福原君はその状態を見て、こんなに窮屈な所にいなければならぬのかと

驚きながら、(総長就業と廃業 340)

○御覧になつた前の部屋より少し窮屈かも知れませんが、何かに御便利です。 (或る女・前 91)

などは、「せまくるしい」にかなり近いといえよう。

○青鼠色の木綿の上着は、アメリカ人に負けない五百助の巨躯に、うまく合ったが、国防色のズボンを^は穿いてみると、モモヒキのように窮屈で、脛が、半分、露出した。(自由学校 171)

○お島は日の暮に帰つて来ると、急いで窮屈なコルセットをはづしてもらふのであつたが、薄桃色肉のほちやほちやした体が、はじめて自分のものらしい気がした。(あらくれ 228)

は体と、身につけるものとの大きさの関係であつて、こういう場合は「せまくるしい」とは言えない。

「せまくるしい」には狭さからくる不快な感情が含まれているといつても、属性の主体になるのは普通は場所であつて、その中にいる人間が主体になることもあるかどうかよく分らない。

○尤も最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考へだつたのですが、Kは狭苦しくつても一人で居る方が好いと云つて、自分で其方のはうを択んだのです。(こゝろ 204)

は「狭苦しくつても」の主語が「K」であるとすればその例になるが、「其方のはう」(というのは控えの間のような四畳)を「せまくるしい」という属性の主体と考えることもできよう。

「きゅうくつな」は上にあげた例のように、部屋や衣服が主体になることもあるが、中の人間のからだや動作が主体になることもある。

○大きな^{あくび}欠伸をして、彼は腕を延ばした。体がひどく窮屈だと思つたら、洋服を着替へてないことに気がついた。(波 24)

○三日の間狭い部屋の中ばかりにゐて坐り疲れ寝疲れのした葉子は、狭苦しい^{パース}寝台の中に窮屈に寝ちぢまつた自分を見出すと、下になつた半身に軽い痺れを覚えて、体を仰向けにした。(或る女・前 98)

ことに「或る女」のほうの例は「せまくるしい」といっしょに使われているので、両語の比較に都合がよい、

「きゅうくつな」は「せまくるしい」よりも、人間主体の状態に傾いているといえよう。

「きゅうくつな」は空間的な量に関する要素が捨象されて、(狭さに伴うような)不自由・気づまりな状態・気分などを表わす意味も持っており、ここに至ると、もはや「せまい」「せまくるしい」との対比はできなくなってしまう。そういう例を2、3あ

げておきたい。

○伸子は、この部屋をこめてゐる生活の狭い、暢々^{のびのび}しない雰囲気は何となく窮屈で馴染めなかつた。(伸子・上 15)

○室内はよく整頓され勤務の規律は重んぜられた。もっともそれは兵隊たちをきゅうくつにしたので山屋大尉の悪評はひろく兵隊の間にひろがった。(真空地帯・上 168)

○その宗門は余りに窮屈な、苛酷なものに思はれた。此世にはもつと此世に調和した自由な宗教があつていゝ訳ではないか。(青銅の基督 58)

「せまい」も、たとえば「せまい部屋」は中に住む人や置かれる家具との関係からみて十分な面積がないということで、より客観的な「小さい部屋」と相違があるけれども、積極的に不快であるというような要素は含まれてはいない。

○私が通されたのは、洋風なせまい応接室だった。(放浪記 33)

○どうも、彼女は、最初の夜から、一向、寂しくならない。山のような肉塊が、横に転がっていないだけでも、清涼感を感じる。狭い座敷が、ころ合いの広さになる。

(自由学校 26~27)

(79) 評価

なれなれしい

「なれなれしい」には、次にあげるように、単に「いかにもなれているようすだ」という意味に解される例もある。

○優しいなかに強みのある、気軽に見えても何処にか沉着のある、馴々しくて犯し易からぬ品の可い、如何なることにもいざとなれば驚くに足らぬといふ身に応のあるといつたやうな風の婦人、(高野聖 46)

は、人あたりのいいようすを言っているのであろうか。

○「昨夜君は帰つて来たさうだね。」と慣々しい調子で話し出した。(破戒 185) は銀之助の丑松に対することばの調子について言ったもので、親しげなようすを言っているのであろう。このような意味が「なれなれしい」の本来のものであったのかと思われる。例解国語辞典には「非常に心やさしく親しそうである」という語釈だけが与えられているが、この規定は上のような例にはうまく当てはまるといえよう。

しかし、こういう意味は現代の普通の用法からみると、むしろ中心的なものではないように思われる。

○その男は顔見知りだけの間柄であつたのに、なれなれしく私の傍にきて背中を流してやろうといつて聴かなかつた。(冬の宿 27)

○「今からでもあんまを頼んでもらえるかい？」

「えーえ、あんさんのためなら」となれなれしく言って女中は出て行つた。あまりなれなれしいので彼は普通の宿屋でない家へはいったかしらとちょっと思った。

(暗夜行路・前 153)

では、顔見知りだけの関係、宿屋の客と女中の関係として普通適切だとされる程度の親しさを超えた、うちとけすぎた動作やことばのようすを言っている。「なれなれしい」は普通、ある人間どうしの関係において、その親疎の程度に応じた適切な言葉・態度・ふるまいではなくて、基準を超えた、親しすぎるようすを言うものと考えられる。

そして、「なれなれしい」には、適当なへだてをおいた対人態度をとるべきであるのに、その規範をやぶっていることに対する非難が含まれている、ということが傾向としてはいえるであろう。つまり、相手に対して失礼であるとか、つつましき・恥じらいがないとか、厚かましいとかいうような、わるい評価が伴っていることが多い。次のように、文脈からそうみるのが自然だと思われる例がかなりある。

○そうして、たった十円ばかりの金を貸して、もう馴々しく、人に窓を刻ませようとしている。こんな人間に凶々しくされると一番たまらない……。 (放浪記 44)

○「さう、なれなれしく俺を小父さまと云ふのは、よしてくれ、それだけは絶対によしてくれ。」 (帰郷 105)

○まだ一度も診察を受けに来たこともない女である。(中略)それが八春先生の前に来て、椅子に腰をかけながら、いきなり怪しからん恰好をして、慣れ慣れしく「先生、少々ようおまつか?」と云つた。(本日休診 52)

(80) 評価

とぼしい<すくない

「とぼしい」は数量などがすくないこととともに、そのことが望ましくないことであることを意味の要素として含んでいる。「すくない」は望ましいか望ましくないかということとは無関係であって、この点が「すくない」と「とぼしい」が区別される主要な特徴である。

○どんな詰らない仕事でも、どんな乏しい報酬でも、不平は云はない積りです。(真知子・前 39)

○衆知を集めて、研究費のとぼしい日本でやれる条件を考えながら、研究の計画化に成功した。(物質の根源と宇宙を結ぶ 128~129)

○嘉門は、不器用に、風呂敷包、行李、茶箆筒、机の類をつみ、繩をかけたが、この家の乏しくなつた家財は、その小さな車にも楽々と積むことができるのであつた。(冬の宿 198~199)

収入や資金や財産などは、生活や目的の遂行に必要な不可欠のものだから、それらの少ないことは当然「とぼしい」こととしてとらえられることが多い。

○歌島は水が乏しかつた。旧正月にはもつとも涸れ、そのために水喧嘩がたえなかつた。(潮騒 76)

○夜になると、気温が急に下つた。士卒は乏しい木々を折取つて焚いては暖をとつた。(李陵 157)

○まだ戦争中のことでしょうか、食糧の乏しいところで、私はお土産に、甘納豆を、それもわずかに五勺ほど持って、お訪ねしたことがありました。(芸術新潮 1956年1月 218)

生活に必要な資源や物資が少ないことも、生活を困難にすることで、やはり「とぼしい」こととしてとらえられやすい。「潮騒」の例は水が問題になっているが、同じ水でも洪水のあとで水がひいたような場面では「水がとぼしくなった」ということはありえない。その場面では、水の少い状態こそ望ましいからである。

○自分に信ずるものがない、個性の乏しい子供は、却ってよく言うことをききます。

(人間の壁・上 192)

○和田耕介が学校で、積極性のない、意欲の乏しい、ぼんやりした生徒であることの原因は、この母親であったのだ。(人間の壁・上 226)

○また大阪では安永老がかつて主張したごとく、即座に役に立つ人間を養成するに^しぞと^していたから、一層研究心に乏しい。(総長就業と廃業 361)

○月給の高い教師をやめさせて、教育経験のとぼしい新卒を、安い月給で雇おうというんだ。(人間の壁・上 44)

「個性」「意欲」「研究心」「教育経験」などは(それぞれの立場における)人間にとって望ましい精神的資質や資格である。したがって、それらの少いことは当然「とぼしい」ことだといえるわけだ。しかし、「あの人は欠点(短所)がとぼしい」など、望ましくない資質が少ないことに「とぼしい」ということは、ふつうはありえないであろう。

○虚栄と利慾の心に乏しく、唯瀬涇淫な生活のみを欲してゐる女ほど始末にわるいものはない。かういふ女を苦しめるには肉体に痛苦を与へるより外には仕様がなにかも知れない。(つゆのあとさき 72)

では、「虚栄と利慾の心」が少ないことは一般には望ましくないことだとはいえないが、女を蹂躪しようとする男の立場からみて始末がわるい、よくないので「とぼしい」が使われているのであろう。

他方、「すくない」はそのことが望ましいか否かということとは無関係である。

○どうだい、イオさん、いつまでも、独り身でいるより、あの後家さんと、一緒にならないかい。年上の女房ってやつは、そりゃァ、亭主を大切にしてくれるし、それに、あの家は、一番新しくって、ノミも少いし(自由学校 264)

のように望ましいことであるばあいにも、

○だが然し巨人阪神ともなると、そう云ったケレンはセイコウ率が少ないと見ねばなりません。(野球界 1956年10月 229)

のように望ましくないことであるばあいにも、ひとしく使われる。

なお、「とぼしい」は文体的な特徴に関して、なにがしか文章語的であるということも「すくない」との相違点である。

「とぼしい」の主体であるものごとは、これまでにあげた例にもあったように、「～が」の形で示されることも「～に」の形で示されることもある。

○よく云へばよく揃つた、悪く云へば傑出の人に乏しく（中略）育英学舎の空気は青年が要する彼一種芳烈な馨香を欠いで居た。（退社の記・上 104～105）

○山嶺平坦，樹木に乏しく，会津への間道として，屢々脆弱を証明した。（文芸春秋 1953年8月 260）

のような古く堅いタイプの文体では「～に」の形が普通であろうが、現在の普通の書きことばでも「～に」の形は珍しくない。この相違は文法的な形式のちがいが、および文体上の問題ではあるが、語彙的な意味の上ではほとんど差がないように思われる。

（付）「ゆたかなくおいしい」のあいだには、「とぼしい<すくない」をうらがえしにした、「のぞましいこと」と、評価に無関係という対立が指摘できるであろう。

〔81〕 評価

旧式な<古風な，昔風な

上の3語の間には、語がどんなものごとについて使われるかという点でも違いがある。すなわち、「旧式な」は機械などのタイプが古いという意味で使われることがある。（この場合は次の例のように「旧式の」の形が多いようだ。）

○まだ、具体的に決定している訳ではないが、旧式の抄紙機二台を取はずして、二百十インチ抄紙機を一台新設するものである。（ダイヤモンド 1956年1月5日 45）

○東海道線などとは別の国の汽車のやうに使ひ古して色褪せた旧式の客車が三四輛しか繋がつてゐないのだらう。（雪国 84）

「古風な」「昔風な」にはこういう使いかたはない。

○はるか目の下には、五大力とか千石船とかいう昔風な和船がもう帆柱に灯りをかかげて休んでいる。（暗夜行路・前 180）

のようにやや似た使いかたはあるが、船の構造そのものが新式でないということではなく、船のスタイル、あるいは船の与えるイメージが現代風でないという意味で、「旧式な」とは差異があると思われる。

以上の点を除くと、3語とも、現代的でないという点でかなり共通性をもった使われかたがされているようである。しかし「旧式な」はたいてい、望ましくない、よくないことという評価を伴っている。たとえば、

○男女が二人で歩いたり話したりさへすれば、すぐあやしいとか変だとか思ふのだ

が、一体、そんなことを思つたり、言つたりするのが旧式だ、今では女も自覚して居るから、為ようと思ふことは勝手にするさ (蒲団 14)

○旧式な頑固な爺、若いものの心などの解らぬ爺、それでも此の父は優しい父であった。(蒲団 61)

○私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくない所も私の注意に一種の刺戟を与へた。(こゝろ 49)

「古風な」「昔風な」も次にあげる例などは「旧式な」と同じくよくない意味に使われている。これらの例は「旧式な」におきかえても一応文として成り立つであろう。(ただし、「旧式な」がストレートによくない評価を表現するのとちがって、遠まわしに、あるいは皮肉に暗示している観のある例がある。)

○目上という階級意識や、威厳という古風な感情が、親たちの気持からは容易に無くならない。(人間の壁・上 186)

○「僕のは仕込みが欧羅巴だから、もう古風の方なので。」

「そんなこと！本場のお仕込みなんですわ。バンドの人たちが見てゐます。」(帰郷 42)

○「でも、俊さんも、実に、どこへでも出入りしてゐるのね。一体、それで、学校へも出ていらつしやるの？」

「だつて……聞きたいお講義のある時は、出ますよ。でも、小母さまなんかそんな古風なこと、仰有るんですか。」(帰郷 85)

○清岡は駒田の事を爪に火をともし流儀の古風な守銭奴だと思つてゐる。(つゆのあとさき 68)

○「でも世間では、あのお母さんが昔風の貴族ぶつた気むづかし屋だから、河井さんの奥さんもえり好みが多くて極まらないんだつて云つてゐるのね。」(真知子・前 127)

○私は肩上げのとなつてない昔風な羽織を気にしながら、妙にてれくさくなってふりほどいて電車に乗ってしまった。(放浪記 42)

そして、次に例をあげるように、よくない評価を伴っておらず、あるいはむしろ古さや現代的でないところに積極的な価値をみとめて、むしろよい評価を伴った使いかた(あるいは少なくともニュートラルな使いかた)もみられる。したがって「古風な」「昔風な」は評価的には積極的な特徴をもっておらず、この点で「旧式な」と区別されるものとみられる。

○菱刈旧子爵も、ユリーの父も、親しい仲の礼儀を忘れない、古風なお辞儀をする。(自由学校 286)

○親佐さんは堅い昔風な信仰を持つた方ですから、田島さんの塾は前から嫌ひでね(或る女・前 73)

〔82〕 評価

ふるくさい<ふるい, ふるめかしい

「ふるくさい」はよくない評価を含んでいることはいまでもないであろう。次にあげる諸例もそのことを表わしているといえよう。

○母親たちを封建的だとか古臭いとか言って非難すれば、逆に相手は腹を立てる。あんな先生に子供をまかせてはおけないという。(人間の壁・上 188~189)

○奥さん, おかしいですね, あんな古臭いものに, 夢中になって (自由学校 97)

○例えばトルストイの「アンナ・カレーニナ」を読んで, 古くさいと感じる方があるとすれば, その人は素直な鑑賞眼を何かによって毒されているものと, 躊躇なく断じて差支えないでしょう。(人生手帖 1953年9月 8)

「ふるめかしい」の例の中には, 「ふるくさい」におきかえられそうなものもある。

○その母親たちは, 大正から昭和のはじめにかけて, 古めかしい型にはまった女子教育を詰めこまれて育ててきたのだ。(人間の壁・上 194)

○王位継承とか, 御家騒動とかいふ古めかしいことは措いて, 小学校の運動会とか, 中学校の入学試験のやうなことにでも, 真先に親の頭に来るのは「己の子が」といふ考へだ。(波 341)

○市の住民のなかでも年寄り連中は, いまでもこの知事のことを(とのさん)と呼んでいる。近代都市S——市には, そういう古めかしい感情がのこっていた。(人間の壁・上 65)

しかし, これらもむげにおとしめるのではなく, 遠まわしに, あるいは皮肉的におとしめているという点で「ふるくさい」との相違が感じられる。また,

○魔天楼の聳える近代都市紐育の一流のホテルとは何んと古めかしい, 或は渋味のある落着いたホテルだった。(オール読物 1956年11月 84)

のように, よい評価を伴っているとみられる使われかたもある。「ふるめかしい」は「ふるくさい」とは違って, 語としてマイナス方向の評価を含んでいるとはいえないであろう。

「ふるい」は基本的な中立的な語で, ものごとが成立してから長い時間が経過しているという中心的な意味に関しては, 評価性とは無関係である。ただし次に例をあげるような, 人間の考え方・思想などについて使われる「ふるい」は, よくない評価をふくんでいるようである。こういう「ふるい」を基本的な意味と別に立てるならば, それはマイナスの評価を含む意味のグループに属するといえよう。

○「小母さま, お考へが, お古いからですよ。」

「失礼ね。こんな若いひとに向つて, 古いなんて!」(帰郷 193)

○「独占といふ言葉には語弊があるが, 愛は当然二人つきりのものだよ。」

「あなたは古いのね。どうして愛はさう一方に偏しなくつちやいけけないの。あた

し、分らないわ。」(波 291)

(83) 評価

いびつな

ものの形が、正常な、あるべき形から逸脱していることを意味し、否定的な評価を含んでいる。

○それはいびつに曲って宙にとんだ。(くれない 28) <「それ」は眼鏡をきす>

○ひどく伸び縮みがして模様が歪形にならないやうに、目立たないやうにカタン糸を編み込んで見たりした。(或る女・前 69)

○どう眺めても拙かった。肖像画は道化じみていた。静物は悉くいびつであった。

(小説倶楽部 1956年1月 208)

では、眼鏡の本来の形、模様の正しい形、静物のあるべき形がこわされた状態が「いびつな」である。

○あるときの旅行に、にわか雨が帽子の形をいびつにしたのを、人人みなそれにになり、林宗巾と呼んで、わざと帽子をいびつにした。(世界 1956年11月 183)

は、昔の中国で、林宗という人物の帽子が雨でいびつになり、その人が声望のある人だったために人々の間にわざと形をいびつにしてかぶる風が流行したという話である。このばあいも、帽子の本来の形からみて正常な形でないことには変りがない、また、これがかりに現代日本での話だったとすると、いびつにしたかぶり方が流行している人々の間では「いびつにかぶろう」などとは言わないだろうと思われる。

「いびつな」が有形のものの属性から転化して抽象的なものごとの性質を表わすばあいも、否定的な要素はそのまま持ち込まれて、意味の不可欠な部分になっている。すなわち、正しい、あるべき姿から逸脱した状態を意味する。

○この、明治から戦前までの日本の国家主義などは、その典型的なもので、これなくしては、あの時代に日本の発展はなかったわけであるが、しかしこのために日本の社会も学問も、随分いびつなものとならざるを得なかった。(もの見方について 164)

○恋を馬鹿にするから、結婚が賤しくなり、男女の関係が歪になるのだ。(友情 27)

(84) 評価

ぶこつな

「ぶこつな」は粗野なたくましさというような要素はあるとしても、趣味的に洗練された感じから遠く、やぼであり、美しさの点で否定的な評価を伴う語であるといえよう。

用例は10例しかなく、そのうち5例は次のような、手あるいは指について使われたも

のである。

○茶色のホームスパンのダブルの上着も、大柄の縞のワイシャツも、二十代の青年が着さうな派手なもので、武骨な大きな指に二ヶの銀指輪をのぞかせ、部屋に入つてもこれだけは貧相な黒いべらべらなマフアラをなぜか首にまきつけてゐた。(岡牛 78)

これは田舎の興行師「田代」の描写で、けばけばしく野暮な服装の一部分を、「武骨な大きな指」に不調和な指輪が構成している。

○彼はさっき軍師拳の遊びを始めた時から自分の武骨な手にこだわっていた。ある不調和な感じが、それに平気になろう、なろうと思ひながらなかなか退かなかつた。

(暗夜行路・前 35)

では、人前にさらされる自分の手の美的にみてよくない性質として「ぶこつき」を気にしているわけである。

○お吉の眼には、一見武骨に見える金巻半九郎の怒った両肩が遅ましく、好ましいものに映じた。(小説の泉 1956年9月 230)

では男の肩のあたりの感じについて使われており、それが女にとって頼もしく好ましく感じられたとしても、「一見武骨に見える」の部分はやはり美的ではないという性質から免れていないといえよう。

○教育会館はこのどぶ川の岸に、武骨なすがたで建っていた。五階だての褐色の古びた肌は、雨にぬれて黒く陰鬱に見えた。(人間の壁・上 230)

○出来は劣るが西塔と言う、やゝ武骨の感のするのと、金輪塔と云う軽快な小柄な塔を見た。(大法輪 1956年3月 87 野口明「名塔巡り」)

は、人ではなく、たてものについて使われたものであるが、やはり否定的なニュアンスを帯びていると思われる。

○何をやらせても、貴さまが誠実にやるのは判つてゐる。無骨に正直一途にだな。当代には珍重すべき性質さ。(帰郷 334)

は、表現全体としては「きさま」をはめている。「無骨に正直一途にだな。」の部分は「貴さまが無骨にやること、正直一途にやることはわかっている」という意味だと解釈してよかろう。「無骨にやる」というのは、いかついやり方で、気のきいたスマートなやり方ではないというようなことであろうか。やはり美的にみて高い評価の与えられるようなやり方でないという点は変わりがないと考えられる。そして、美的ではないが、素朴さ・力強さというような別の人間的価値ですすぐれていることを、この場合は「ぶこつき」が同時に暗示しているのではないだろうか。

第2部 個別的記述

1. あつゝい(厚)

〔0〕「厚い」のもっている、具体的・感性的な意味は、〔0〕に記述しようとする、空間的な量をあらわす意味だけである。これが「厚い」の基本的な意味であって、〔1〕にあげる抽象的・非感性的な意味は派生的なものだと考えられる。

まず、空間的な量をあらわす「厚い」の、典型的と思われる例をいくつかあげてみよう。

- 房の外も、厚いコンクリートの壁に囲われているから、すきま風などは、絶対に、入らない。(自由学校 358)
- 小野崎公平を乗せた自動車は、銀座通りを横切つて築地に出てから、速力を落してコンクリートの厚い塀に接近して停つた。(帰郷 95)
- 伸子は、急いで厚い扉を開けようとした。(伸子・上 130)
- そして、帝室博物館の厚いガラスに額をつけて、考古学の標本を見てまわるようになった。(旧石器の狩人 307)
- 厚い床板は毛布をとおして体温をうばい取った。(真空地帯・上 63)
- 板前が肉を切つてゐる間、行介は厚い俎の前に突つ立つて、庖丁の動く先をぼんやり追ひかけてゐた。(波 6)
- 青木さんは電気を低くして、厚い面の御本を膝に開いてお出でになる。(桑の実 128)

これらの例において「厚い」の主体である物体は次のような特徴をもっている。それは3次元の延長をもつ物体であり、かつ2つの表面がほぼ平行で、しかもそれらは他の面に対して比較的大きい面積をもっている。そして「厚い」が表現するのは、その2つの平行的な表面どうしのへだたりである1次元の量が、ある基準からみて大きいことである。

ただし、上にあげた例は、ここに仮定した条件をもっともよく満たすようなものをまず選んで並べたものである。実際の用例の中には、上の条件が弱まったり、失なわれたりしているものもある。そのような例も含めて、これから見ていくことにしよう。

上にあげた例の最後の1つは、書物が、「厚い」の主体であった。書物・雑誌・ノートなどにはよく「厚い」「うすい」が用いられ、上の条件も満たしている。しかし、非常に極端なばあいを仮定すると、上の条件からはずれるばあいも想像される。非常に小型な書物でページ数が非常に多く、表紙の縦・横の長さより、書物の背の厚みに当たる

一辺のほうが長くても、「厚い本」ということはあり得よう。書物については、ふつう最小の一辺である、背の厚みについて「厚い」「うすい」を言う習慣が確立しており、上のようなきわめて例外的なばあいにも、その習慣に従って同じ一辺について「厚い」と言われる可能性が考えられるからである。

次に、衣類・布・ふとんなどに「厚い」が用いられた例をあげよう。これらは比較的やわらかく、自由に折り曲げられるような性質の物体であるが、こういう物体にも「厚い」は自由に適用される。

○作法が終ると、老主人は袴を除つて、厚い綿入羽織を着て現れた。(河明り 269)

○「よく、そんな、厚いウールの外套を着ていらつしやる。」(帰郷 167)

○びろうどに似た厚い布が重たく垂れて、窓の在りかを目隠ししてゐた。(帰郷 48)

○何でも私の母よりもグツと若い女の人が、厚い座布団の上にチンと澄してゐる姿を認めたから、(平凡 58)

○芳子が常に用ひて居た蒲団一萌黄唐草の敷蒲団と、綿の厚く入つた同じ模様の夜着とが重ねられてあつた。(蒲団 84)

○床は、板敷きであるが、新しい厚いゴザと、決して、センバイとはいへぬ敷布団があるので、寝心地は、それほど悪くない。(自由学校 358)

人のからだ全体について「厚い」と言われるのは、からだの前面から背面までの最小の辺についてである。

○彼が最初の煙を厚い胸の奥深く吸ひこむときに細めた眼の色、(冬の宿 16)

○芸者などにありがちの少うし腰窄まりだつた。横に狭くて縦に厚い。(雪国 102)

からだの横幅については「胸が広い」「肩幅が広い」のように、「ひろい」の使われることが多い。

人のからだの部分などに使われた例から挙げると、次のようなものがある。

○例の四十三四の男が厚い唇をゆるく開けたまゝで、馬鹿な顔をしながらまじまじと葉子を見やつてゐた。(或る女・前 17)

○げじげじ眉で、唇の厚いその顔は、私は何故か見覚えがあるようであつたが、考え出せなかつた。(放浪記 115)

○「煙草を止めて、太つたわ。」

腹の脂肪が厚くなつてゐた。(雪国 101)

○彼は皮の厚い幅の広い大きな顔に狡猾な笑いをうかべて、(真空地帯 216)

上の例のうちの最後の「真空地帯」の「皮の厚い……顔」では、具体的な厚さを問題にしているが、「つらの皮が厚い」という連語全体が慣用句化して、あつかましい、ずうずうしい、という意味でも使われる。

○この偽善者め、^{つら}面の皮の厚い——(出家とその弟子 33)

次の例の「顔の皮をあつくして」も同じような意味に使われているらしい。

○それ故に彼はそのあらわにいやな顔をみせるこの姉に、顔の皮をあつくして金をほしいんやけどと申しでたのだ。(真空地帯 147)

以上にあげた例の多くでは、まわりから切り離された独立的な物体について、「厚い」が使われていた。「厚い」は、物体の表面に他の物質が(均等に)加えられて、おおいのようにかぶさった層状・膜状のものについて使われるばあいもある。また、いくつもの層が重なりあっている中の、ある層について「厚い」が使われることもある。

○和田耕介という子供の、自画像かと思われる半身像である。子供の顔は橙色で厚く塗りつぶされ、眼も鼻も口もきわめて小さい。(人間の壁・上 158)

○杉子にしてはいつもより厚く化粧してゐて、いつもより美しくは見たが、無邪気には見えなかつた。(友情 96)

○ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、(銀河鉄道の夜 275~276)

次にあげる例は、人や樹木の集まり全体を、1つの層のように見立てて、「厚い」が適用されたものといえようか。

○私もその群の中に飛びこんで漬かりながら、厚い人だかりの層の真ん中に突込んでみたり、走つてくる女にぶつかりさうになつたり、(冬の宿 186~187)

○樹木の厚く繁つた東山に、寺の大屋根や塔が柔かく抱かれてゐるのを見るほかに、(帰郷 241~242)

「空気」には、「厚い」は適用されにくいものと思われるが、それが「層」としてとらえられるばあいには、次のように「厚い」と言われることが可能になるのであろう。

○空気の厚い層をつき抜けて地上にまで降ってくる宇宙線は、果たして、地中のどの辺までつき抜けるだろうか。(物質の根源と宇宙を結ぶ 106)

「研究業績」という無形のものについて「厚い層」という表現が使われている次の例は、上にいくつか例をあげたような、物の「層」のようなものになぞらえて比喩的に表現されたものであろう。

○権力政治の分析も、政治行動論的研究も、マルクス主義の国際政治研究も、その業績が厚い層となって国際政治学の各分野に蓄積しているという状態には、ほど遠い。(学問の動き 247)

最後にあげるのは、名詞形「厚さ」の例ではあるが、「泥」という、「厚い」の適用されにくそうなものに使われている、珍しい例だといえよう。

○泥は脛まであつた。ずるずる入る足襪は、固定した基盤に触れなかつた。そこまで踏みおろした泥の厚さで、やつと支へてゐる、さういふ不安定な感じであつた。

(野火 113)

[1] 「厚い」が空間的な量の表現から離れて、意味が抽象的になり、ある種のこ

がらについて、その程度が大きいいことを表わす意味になる。どういう種類のことがらかという、人間の他の人に対する好意的な態度に関係しているといえよう。すなわち、心がもっていると、情がこまやかだ、のような意味に使われることが多い。なお、この意味の「あつい」は、以下に引用する例にもみられるように、漢字では「厚」のほかに「篤」で表記されるばあいもある。

まず、「情」「人情」「友情」などと結びつくばあいがある。

○まして、蓮太郎は——書いたものの上に表れたより、話して見ると又別のおもしろみの有る人で、容貌は厳しいやうでも、存外情の篤い、優しい、言はば極く平民的な気象を持つて居る。(破戒 120)

○伊沢さんは顔は文字通り狹くしやであり、詞つきもむしろとげとげしい所があつたけれども、存外無邪気な人で、殊に人情には厚かつたやうだが、(心 1953年11月 42)

○「本当ね。姜、あんなに友情の厚い方を見たのは初めてよ」(友情 91)

○情誼に厚く、信義に深い男ですから、信用くださっても大丈夫です。(面白倶楽部 1956年12月 144)

○其方どもはオロシヤに救命の恩を受け、長いこと厚いなさけを受けたのだから、決して仇とは思はぬであろうが如何。(日本及日本人 1953年7月 71)

上にあげた例からもうかがわれるように、たとえば「人情があつい」「人情にあつい」のような2通りの表現形式があるが、実質的な意味にはほとんど差がないであろう。(文体的に「人情にあつい」のほうは、いくぶん文章語的だといえようか。)

第2に、人をてあつく待遇するようすを表わすことがある。

○単子は大いに喜んで厚く敢を遇し、直ちに北方への引上命令を取消した。(李陵 162)

○この日は、近藤は非番であつたし、別に用事もなかつたので、岸淵を奥座敷に招じ入れ、一別以来の話をしようと、酒肴を出して厚くもてなした。(サンデー毎日 1956年4月22日 27)

第3に、感謝のきもちが深いことを表わすのに使われることがある。

○ファンの皆様！何時も御声援を頂き厚く御礼申し上げます。(月刊ファイト 1月 14)

第4に、信用の度合が大きいことを表わすことがある。

○貴方の厚い信用につけ入つて、かれこれ千円ほどもくすねました。(多情仏心・前 360)

○近頃では一番の財政建直しのため、国許から江戸、大阪と奔走して成果をあげて、松平越後守の信任も厚いようだ。(読切倶楽部 1956年8月 366)

第5に、宗教的な信仰に関して、信仰心の深いことを表わすことがある。

○母親のトミは、あわれみ深い信仰心のあつい女性だった。(キング 1956年10月 276)

○なにしろきょうはあれほど帰依の厚かつた法然聖人様の御法会でございますもの。

(出家とその弟子 59)

○そのころ発布されたとする「憲法十七カ条」には「篤く三宝を敬せ、三宝とは仏法僧なり……」の言葉もあるが、(日本及日本人 1954年3月 97)

第6に、修飾語句を伴った「心」を「厚い」が主語にとり、そういう心が強く、切であることを表わした例がある。

○死をもって国に奉公しようとの心いよいよあつく (真空地帯・上 93)

○年と共に死んだ親を慕ふ心が深く、厚く、濃かになるやうだ。(平凡 20)

なお、次の例も「厚い」が程度の著しいことを表わしているが、上にあげてきた、人に対する好意的な態度(第5としてあげた信仰心のばあいは、対人的とはいえないが)に関係するという範囲には入れられないものである。

○今あなたに去られては若いお弟子^{まじし}たちをだれが取り締まるのでしょうか。かつは功績厚きあなたさま——(出家とその弟子 176)

[2] 病気が重いという意味。文語的であって、「やまひ、あつし」などと用いられる。漢字では「篤」の字で表記される。資料内の用例はない。

2. う す い

[0] 「うすい」は具体的なものに関しても、いくつかの意味で使われるけれども、もっとも基本的な意味は、空間的な量をあらわすものだと考えられる。それは、3次元のものについて、1次元の量が小さいことをあらわす。どういう形のもの、どの次元の量をあらわすかについては条件がある。典型的には、3次元の延長をもつものの2つの表面がほぼ平行であるとき、かつ他の面に対して比較的大きい面積をもつとき、その2つの表面のへだたりが、ある基準にてらして、小さいことである。

まず、上の条件がぴったりと当てはまるような例をあげてみよう。

○又いつもの淋しい朝の寢覚めなり。薄い壁に掛った、黒い洋傘^{パラソル}をじっと見ていると、その洋傘が色んな形に見えて来る。(放浪記 45)

○其代り私は薄い板で造つた足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。(こゝろ 213)

○曾田一等兵は手箱から薄い分解図のほんを出してきて言った。(真空地帯・上 61)
資料内の用例において、この意味の「うすい」の主体として、比較的多く現れるものを類別的にあげてみよう。まず、衣類や布について使われた例をあげよう。

○やがてずんぐりした夫人は、蟬のように薄い黒羽織を着て応接間にはいって来た。

(放浪記 76)

○ちょっと暑くなってくるとすぐ、みなさん、うすい生地のスカートにおかえになるようです。(婦人画報 1956年7月 155~156)

○薄い絹の靴下一重の下に、畳がつめたくかたく触つた。(伸子・上 130)

○水の流れのような、薄いショールを、街を歩く娘さん達がしている。一つあんなのを欲しいものだ。(放浪記 27)

衣類や布と近いが、ふとん・夜具の類に用いられた例もわりあい多く見られる。

○青木さんのお召しになるのを一枚だけでいゝから、薄い夏蒲団を拵へてお上げ申せば、ざうさはないのだがと思ふ。(桑の実 136)

○薄い掻巻一つで寝ていた彼は寒さのために目をさました。(暗夜行路・前 211)

○夜は蒲団が薄くて、あまり寒いから、大きな石だの薪だの蒲団の上に重しにして寝たこともある。(思出の記・上 58)

○葉子は折々往来の方から振り返つて、愛子のしとやかな足音や、綿を薄く入れた夏布団の畳に触れるさゝやかな音を見入りでもするやうにその方に眼を定めた。(或る女・前 74)

次に、料理の材料について、その切りかたなどに関して用いられた例がある。

○里芋のコロコロしたのを薄く切って、小松菜と一緒にたいた味噌汁はいいものだ。(放浪記 122)

○山芋は皮をむき一纏巾、四纏長さのうすい短冊切りにし、すぐに酢水につけておき、後水気を切ります。(婦人生活 1956年8月付録 日本料理 139)

○老人は薄い肉片を葱といつしよに上手に衣に包みながら、それが何処から持ち来たされたものかと思ふかと真知子に尋ねた。(真知子・前 82)

○板前は切った肉を竹の皮の上に薄く伸ばして、丁寧に列べてゐた。(波 7)

次に、からだやその一部分について使われた例から挙げよう。

○どんな速い底水のある淵でも赤座はひらめのやうにからだを薄くして沈んで行き、水中の息の永いことは人夫達も及ばなかつた。(あにいもうと 134)

○さうしてふり返ると、行きなり布団に支へられた米子の薄い肩に飛びついた。(真知子・前 211)

○昼、浴衣を一反買いたいと思って街に出てみると、肩の薄くなった男に出会う。(放浪記 247)

○眼をとちて、薄い胸を大きく起伏させて呼吸してゐるのだが、(冬の宿 92)

○「座を外すように」

と、やっと薄い唇がかすかにうごいた。(小説倶楽部 1956年8月 335)

○蒼みをおびた薄い臉が疲れを見せている。(くれない 115)

○熊のやうに硬く厚い毛皮ならば、人間の官能はよほどちがつたものであつたにちがひない。人間は薄く滑らかな皮膚を愛し合つてゐるのだ。(雪国 107)

以上に、「うすい」の主体としてわりあい多く現れるものを、類別的にあげてみた。ほかに、たとえば、皮・ビニール・雲母・タイヤなどに「うすい」が使われた例があるが、引用するまでもあるまい。

「うすい」の主体になりうる物体は、コンクリート・ガラス・書物のようになりに堅い物体はもちろん、ふとん・綿、くちびるなどのように外力によって容易に変形する、あまり堅くない物でもよいことがわかった。

○薄く雪をつけた杉林は、その杉の一つ一つがくつきりと目立って、鋭く天を指しながら地の雪に立つた。(雪国 149)

○助走路には、乾いた砂を薄くまいて、しめた土をかくしてしまった。(週刊朝日 1956年10月21日 80)

のように、雪や砂に使われた例もある。

○水は窪地の奥に湧いてゐた。いぼのやうに火山灰を盛り上げて吹き出し、薄く膜のやうに溜つてゐた。(野火 53)

は、水が「膜のやうに」たまっている状態について使われている。これはかなり特異な例というべきであろうか。「うすい」は一定の形を保った物でなければ成り立ちえない性質であるから、固体的な物に使われた例が圧倒的に多い。しかし、「うすい」の主体が固体的な物であることは絶対的な条件ではないのであろう。

[1] 以上の「うすい」は大体「あつい(厚)」と対応しているものであった。「うすい」には、ほかに大体「こい」と対応している意味がある。それを[1]と[2]で記述しよう。[1]では、ものを表わす具体名詞と直接に結びついて使われる「うすい」を扱う。[1]をまとめて言えば「濃度・密度が小さい」ということである。

[11] 液状のものについて、溶けている物質の水に対する割合が小さく、水分が多いありさま。

○薄い粥くらゐを啜つてごろごろしてゐた。(多情仏心・前 249)

○三つ葉は薄く小麦粉を溶いたころもを付けてさっと揚げ、(主婦と生活 1956年12月付 録 冬のお料理 70)

○トロツとした薄い水鼻だつた。(蟹工船 64)

[12] 髪・毛・まゆ・ひげなど、からだに密生するものが、まばらで少ないありさま。

○そこでは窪井が、鏡の前に立つて、半白の薄い髪を、左から禿の上に搔き並べることに気を奪はれてゐた。(多情仏心・前 320)

○織田というのはずんぐりして頭が薄くなっている。(むらぎも 151)

- 毛のうすい、男性的でなく見えるその銅色をした皮膚が蚊にも蚤にもぶよにも負けなかった。(むらぎも 123)
- 彼の眉毛は人よりもずつと濃くつて黒々としてゐるが、赤ん坊のは、産毛とはいへ、余りに薄く、余りにまばらだつた。(波 176)
- 青で芦毛、裸馬で遅しいが、鬚の薄^{たてがみ}い牡ぢやわい。(高野聖 49)

[13] 霧・もや・煙など、空中に浮遊する気体状の物について、その濃度が小さいありさま。(その向う側にあるものが完全にさえぎられずに、透けて見えるような情況が多いといえよう。)

- 薄い霧^霧だか煙^煙だか滯^{とど}りっぱいに広がっていて、船が進むにつれ、陸^{おか}のほうはだんだんぼんやりとかすんで行った。(暗夜行路・前 145)
- 薄^{うす}い海霧^霧が一面に——然しさうでないと云はれれば、さうとも思はれる程、淡くかゝつた。(蟹工船 35)
- 薄い埃^埃が線路に立つて、逆側の民家の方に流れて行つた。(帰郷 129)
- 煙草のけむりも薄く籠^{かご}つて、斯の部屋^{なか}の内を朦朧と見せたのである。(破戒 250)
- 日陰から見ると、日なたの地面に薄く陽炎が立つてゐた。(帰郷 124)
- 銀河の光は薄^{うす}い煙^煙のやうに遠く^{おとこたか}壮嚴な天を流れて、(破戒 86)

以上のような例については、「うすい」をこの[12]の意味と解釈することは、前後の文脈から考えて疑問の余地があるまい。

○川の上には薄^{うす}い霧^霧が懸つて、をりをり通る船の騒^{さわ}ぎの音がギイと聞える。(蒲団 58)

の「うすい」も同様に解するのが自然であろうか。川の上に帯のように低くたなびいた霧の厚みが小さいという、[0]の意味にとろうとするのは不自然なように思われる。

[2] [1]には、ものを表わす具体名詞と直接結びついて「濃度・密度が小さい」とまとめ得るような「うすい」の意味・用法をあげた。[2]では物体そのものではなく、「光」「影」「陰」「色」「味」のような現象や属性の程度が弱いことを表わす「うすい」を見よう。[2]も「濃い」に対立している。この[2]の意味では、「うすい」はものを示す具体名詞と直接には結びつかず、「うすい月の光」「この靴下は色がうすい」「甘味のうすいまんじゅう」などのような形式をとるばあが多い。

[21] 光について、強さ・明るさに乏しいありさま。

- 薄^{うす}い日のひかりを眺めたばかりでも、丑松は歩き乍ら慄へたのである。(破戒 228)
- 薄^{うす}く弱い月の光は家々の屋根を伝つて(破戒 289)
- 丸火屋^{まるはや}の薄^{うす}い光の下で、二人は、正面^{まへとも}に目と目を見合せた。(多情仏心・前 20~21)
- 薄^{うす}い灯の下に、下関行きの急行列車が沢山の見送り人を呑みこんでいた。(放浪記

34)

[22] 物の姿・陰などについて、それが鮮明でなく、おぼろなありさま。

○昼間の空家は淋しいものだ。薄い人の影があそこにもここにもたたずんでいるようで、寒さがしみじみとこたえて来る。(放浪記 17)

○おくみはその光を通す葉の色に、濃くうすく蔭が出来てゐるのを見入つてゐた。

(桑の実 71)

○此の柱が薄い影を落してゐた。(雪国 155)

○病院船や運送船が、幽霊よりも影のうすい姿を現はした。(蟹工船 29)

最後の例の「影がうすい」は具体的な物についてであるが、同じ句は、元気がないこと、存在がくすんでいて目立たないことを表わすイデオムにもなっている。このイデオムに対する「影がこい」は存在しない。

○その沢山の女の中の影の薄い一人の女として彼は自分を扱ってゐるのではないか。

(或る女・前 170)

○自分といふ全存在の影が俄かに薄くなりでもしたやうな手応へなさを、内部的に感じるのであった。(伸子・上 89)

この意味の「うすい」は、上にあげてきた例にみられるように、物を表わす具体名詞と直接には結びつかないことが多いが、次の例のように、具体名詞と直接結びつくこともある。

○ふと黒い空を見ると、疎らにまたゝいてゐる薄い星の間を、自分の心持の中でのやうに、それかなきかに小さい星が微に流れた。(桑の実 94)

○胸にエプロンをかけながら二階の窓をあげに行くと、遠い向うに薄い富士山が見えた。(放浪記 148)

[23] 物の色について、その色の成分が少ないありさま。

○指の先が薄い紫色の汁に染つた。(桑の実 74)

○繊細な円味をもつて、薄い桃色に半ば透きとほつた耳は、こんな時、生きもののやうに見えるのであつた。(冬の宿 100)

○そこらにいちめん黄いろや、うすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、(銀河鉄道の夜 296)

○薄く黄ばんだ冬の日^ヒは斯^ヒの屋根^ヒの下の貧苦^ヒと零落^ヒとを照したのである。(破戒 243)

上例のほかにも、資料内では、紺色・灰色・黄色・茶色・ピンク・赤・グレイなどを「うすい」が限定している例がある。「浅い」も派生的な意味として、色の成分の少ないことを表わすばあいがある(例「浅い緑」)が、「うすい」のほうが広く各種の色について適用されるようである。そしてその語幹形は「うすむらさき」「うすみどり」「うす

くれない」「うすべに」「うすあお」「うす茶色」「うす黄色」「うすねずみ」「うす花色」のような、うすい色をあらわす複合名詞の上位成分になっている。

以上は文脈の上に色の種類が顕在的に明示されているばあいであるが、次の例では明示されてはいない。しかし、文脈の上から、どんな色彩について「うすい」と言っているのかは自明である。

○まぶたを女のようにうすくそめて (真空地帯・上 203)

○熱くした天火で薄く色がつき、(主婦と生活 1956年12月付録 冬のお料理 56)

この意味では「うすい」が直接に物を表わす名詞と結びつくことは少ないであろう。「うすい空」「うすい海」「うすい草」「うすい血」などの結び付きは存在しないか、あるいは存在しても色彩とは関係のない意味をあらわす。

[24] たべものの味について、あまさ・からさなどの程度が強くない。

○塩胡椒で淡く味をつけ、木杓子しよもじでよく混ぜ合えます。(婦人倶楽部 1956年2月付録 お惣菜料理全集 90)

この意味の「うすい」は、単に味覚の程度が弱いというだけでなく、あっさりしている、くどくない、というニュアンスも加わるばあいもある。そういうばあいは[2]の意味からやや転化していると認めるべきであろうか。

この意味でも、「うすい」は食べ物の名と直接に結び付かないのが基本的な形式であろう。「うすいようかん」「うすい塩せんべい」と言えば[0]の意味になり、味覚に関するときは「甘味のうすいようかん」「味のうすい塩せんべい」などと言うであろう。しかし、

○そのほかには、京菜の漬物に薄い味噌汁、八人の女が、猿のように小さな卓子を囲んで、箸を動かせる。(放浪記 198)

のように、「うすいみそ汁」と言うばあいは、みその量が少なくて汁の濃度が低いという[11]の意味か、塩味のうすい味噌汁の意味か、あるいは両者を合わせ含むか、のいずれかであろう。さらに、「うすいお澄まし」と言うばあいは、目で見た色から液体の濃度を推測しにくいので、塩味のうすい澄まし汁の意味だと解するのが自然であろう。ようかん・せんべいなどのような[0]に述べた条件をそなえた形態をもつ、固形的な食べ物について「うすい～」とせば、空間的な厚みが小さいという意味に解されてしまう。しかし、液状の食べ物については[0]の意味にはなりにくいので、「味のうすい～」などと言わずに、ただ「うすい～」と言っても、味覚に関する意味になり得るばあいがあるのである。

[3] 動作の程度が著しくなく、微弱であることを表わす。ただし、次にあげるような、「笑う」「目をあける」などのいくつかのばあいだけに、適用範囲は限られている。

る。この意味は「厚い」とも「濃い」とも対応していない。

○黒い眼を薄く開いてみると見えるのは濃い睫毛を閉ぢ合はせたのだと、島村はもう知つてゐながら、やはり近々とのぞきこんでみた。(雪国 101)

○薄く覚めた耳には朝早く学校にかよふ兄妹の声がかからきこえてくる。(冬の宿 24)

○兄の順一はうすく笑つて(学園評論 1954年2月 64)

○仲間の学生たちは、二人の傍を通り過ぎるときに、みないひ合はしたやうに薄い笑ひを浮べてゆくのであつた。(冬の宿 72)

次の例にみられるような、「うすい涙をうかべる」という言いかたは、位置づけがむずかしいが、一応ここに所属させておきたい。

○(と、筆者に須磨子のお話を聞かせてくれたある老友は、ふつと、うすい涙さへうかべてそういつた)(読切小説集 1956年11月 113)

なお、「目をうすくあける」「うすく笑う」のような言いかたと対応する名詞的な形として、「うす目(をあける)」「うす笑い(をうかべる)」を考へることができよう。

○その時米子が身動きをし、薄眼を開けた。(真知子・前 178)

○新治はなほ眼つたふりをしたまま薄目をあいてるようと考へた。(潮騒 65)

○一条太郎は女のような色の白い顔にうす笑いをうかべて、着席した。(人間の壁・上 325)

○彼は美しすぎる顔の金ぶち眼鏡をひからせながら、うす笑いをもらしていた。(人間の壁・上 76)

〔4〕 抽象名詞と結びついて、そのあらかわす性質・関係などが、乏しい、弱い、程度が低いという意味を表わす。この意味では「厚い」とも「濃い」とも対応しないばあひが多い。

〔41〕 「関心」「興味」、「愛情」「人情」、「気分」「感じ」など、精神・心理に関係のある抽象名詞と「うすい」が結びつく。そして、抽象名詞で表わされるきもちなどが、少なく、微弱であることを表わす。

○現在の委員長がどんな人物であるか、彼女はほとんど知らなかった。それほど組合の事について、今までは関心がうすかった。(人間の壁上 280)

○平和問題に関心のうすい国々や階級や政党のあることも事実です。(平和 1954年3月 25)

の「関心がうすい」は、上例のように、「～について」の形で、あるいは「～に」の形の対象語によって、関心の対象が示されることが多い。

○木曾としても、別に涙子を好きだとか、愛しているとか云うのではないが、急に会社から姿を消したのが、何んとはなしに、淋しいという程度には、薄からぬ関心を

抱いていたのだろう。(週刊読売 1956年6月17日 4)

の「うすからぬ関心をいただく」という文語的な形は、やや慣用句的なものといえよう。

○東京生れの関西人である私は、元来東北の事情には興味が薄い方である。(文芸春秋 1953年8月 260)

の「興味がうすい」も、この例のように「～に」の形の対象語をとることができる。「愛情」「人情」と結びついた例には次のものがある。

○長い間親達から離れていると、血を呼ぶ愛情はあっても、長い間一ツになって生活しあわないせいか、その愛情と云うものが妙に薄くなってしまっているのを感じている。(放浪記 300)

○人情とは、なぜかくも薄きものか、部屋代はとるだけ取って、別にこのアパートには迷惑も掛けていないと云うのに、あらゆる末梢的な事を大きくネツゾウして、お上さん達は口々に何かつぶやいているのだ。(放浪記 210)

「人情がうすい」に対しては、「人情が(に)あつい」が対立している。

「気分」「感じ」などの例は次のようである。

○然し帰つて二日三日と経つうちに、鎌倉に居た時の気分が段々薄くなつて来た。

(こゝろ 13)

○あんたはしよつちゆう見馴れて感じが薄くなつてるのよ。(真知子・前 86)

○これは父と子の愛情が主題になっているが、構成の上にひねったところがなく、それだけに読後の感銘も薄かった。(新潮 1956年6月 317)

○あんな風になりたくもある。なり切れたときの状態に薄い不安みたようなものも予感される……(むらぎも 62)

[42] 関係を表わす抽象名詞と結びついて、関係が密接でないことを表わす。資料内には「縁」と結びついた数例がある。

○とにかく、お互いに肉親に縁がうすくって、子供のときから苦労した点はよく似ているね。(キング 1956年4月 154)

○親に縁の薄いとは、丁度お志保の身の上でもある。(跛戒 94)

○写真に縁の薄い人でも気楽に一気に、読み通せるものである。(アサヒカメラ 1956年3月 171)

のように使われる「縁がうすい」はやや慣用句的であり、「肉親に」「親に」「写真に」のように、人やことがらを表わす「～に」の形の対象語をとることが多い。

○核酸は核酸であり、われわれに親しみのうすい、神秘的な物質という感じを与える。(生命の謎はどこまで解けたか 183)

はここか、あるいは[41]に属するものであろう。

[43] 効果・報い・恵みなどが乏しいこと。

- あれでは君の言うような教師の態度決定も、一部教師だけの決定に過ぎないようだな。お祭りさわぎの割には、効果はうすいね (人間の壁・上 249)
- 手桶で持ち出すだけのことから資本も要ない代には儲も薄いのであるが、(土・上 13)
- 販売利潤は薄いから売上高が多くとも収益の根源とはならない。(ダイヤモンド 1956年1月5日 60)
- 職階級のため下にうすい現給与体系が今後の問題となる程度である。(世潮 1954年2月 145)
- 物質的に報いられる所は甚だ薄く (春琴抄 175)

[5] 頭脳のはたらきが弱いという意味。「うすい野郎」などのそれであるが、資料内には実例が見つからない。

3. た か い

[001] 「ものの垂直上方への延長が大きい」という基本的な意味をもっている。1次元の延長が大きいことを表わす点では「ながい」と共通性があるが、「ながい」が方向に関して無関心であるのに対して、「たかい」は垂直の、しかも上方への延長についてのみ言うという、積極的な特徴がある。しかし、たとえば長いえんぴつをつくえの上で立てたときに、「たかいえんぴつ」とは言わないというように、上の規定だけでは十分とはいえない点がある。そういう点を念頭におきながら、用例をしらべてみよう。

まず、[001]の意味に属する「たかい」の用例のうち、「たかい」の主体としてよく現れ、目立っているものとして、山・建物・樹木のような類がある。(人間についての例も多いが、あとでふれる。)

第1に、山・丘・岩に使われた例をあげよう。

- 深い溪や、高い山を幾つとなく送つたり迎へたりするあひだに、汽車は幾度となく高原地の静かなステーションにとどまつた。(あらくれ 248)
- 沖縄島には高山は一つもない。山といっても高い丘程度のものであるが、見わたすかぎり大木は一本もない。(婦人倶楽部 1956年6月 90)
- 松林のあひだから眺め下す海には、多くの白い波が蹴るやうに進んでゐる。岬の先端の高い岩までがしばしば波に覆はれる。(潮騒 62)

第2に、建造物に使われた例をあげよう。

- 府庁の高い重そうな建物が閣のなかにうすぐろくういて、その上に光が廻っているのが眼のはしにはいっている。(真空地帯・上 128)

○二人は暫時無言で歩いた。丑松は右の手の鞆を左へ持ち変へて、黙つて後から随いて行つた。やがて高い白壁造りの倉庫のところへ出て来た。(破戒 155)

○しかしまだ鉄塔は高く聳えてゐる。(潮騒 56)

○むやみに高い門があって、いつもそいつを登るのだが、二人ともぐでぐでんで、乗り越える勇気が湧かない。(私の人生観 14~15)

○戦災にあつて城をうしない、堀はなかば埋められてはいても、角櫓の白壁と高い石垣と年老いてくねった松の幾株とは、数百年のむかしのおもかげを今に残している。(人間の壁・上 64)

第3に、樹木を主とする植物に使われた例をみよう。

○病舎をめぐつて、高い赤松が幹と梢を光らせ、これら隔離された者共を見下してゐる。(野火 165)

○樹はいまや全く裸でたかくつたっていた、月が皮をはいだ白い幹の片側にさしていた。(真空地帯・上 115)

上の例では樹木の姿の全体について「たかい」が用いられているが、次にあげる例では樹木などの一部分である幹や茎について「たかい」が使われている。

○二つの水の間の三角の段丘に、椰子が群れてゐた。葉柄の集まる梢に、実が小児の頭のやうな円みを並べてゐた。しかし幹は高く、衰へた私の体では攀ぢることは出来なかつた。(野火 48)

○根株の間に到るところ、カモテ・カホイ(木の芋)と呼ばれる、木のやうな高い茎を持つ芋が植えてあつた。(野火 53)

樹木以外に、たとえば「とうもろこし」に使われた例がある。

○「玉蜀黍がいつの間にかあんなに高くなつた。」(桑の実 158)

○勘次は菜切庖丁を取出して、其高い蜀黍の幹をぐつと曲ては穂首に近く斜に伐つた。(土・上 135~136)

とうもろこしの茎は木のようにしっかりしているが、一般のやわらかい草については「たかい」はやや使われにくくなると思われる。

○墓地に近い山ぎわの畑だけが、まるで荒地のように、丈高い雑草に蔽われていた。(小説新潮 1956年2月 103)

における「たけたかい」は単なる「たかい」とはやや区別して考えるべきものである。(この[001]の項の末尾のほうを参照。)

○とある坂を上つて丘の上のやうなところへ出る。一ぱいになって長い草が生えてゐる。(むらぎも 148)

○黄色い小粒な花を持たせて、棟やのむねにさへ長い短い草を生ぜしめる。(土・上 197)

のように、草にはむしろ「ながい」がよく使われる。

以上にあげてきた例からわかるように、「たかい」の主体になりうるものの形態は、山のような先細りの形であろうと、樹木のように根元より先のほうが広がってようと、ビルディングなどのように下から上まで同じはばであろうと、柱のような細い形であろうと、自由であって、まったく制約がない。

山・建物・樹木のようなものは、位置が固定しており、全体の形も不動的（樹木は風でかなり動きうるものもあるが）である。そして垂直上方へのかなりの延長をもっている。このようなものは、「たかい」と言われる条件が、もっともよくそなわっている。位置が固定していないものは、固定しているものよりは、「たかい」と言いにくい傾向があるのではないか。たとえば、電車や自動車などの車体については、木や建物ほどには「たかい」とは言いやすいであろう。それは、こういう車体は地上を走りまわるのを本来の機能としているために、一定の地面と固定した関係を保ってはいないからではなからうか。

コップ・びんのようなものは、普通に置かれる安定した位置としては垂直上方に大きい延長をもっている。しかし、「たかい」では形容されにくい。それは、コップやピンは自由にいろいろな位置・方向に動かされるものであるために、置かれる面から上方への延長としてはとらえられにくいためであろうか。

書棚や戸棚には、次のように「たかい」の使われた例がある。

○米子が、以前から持つてゐる大きな机と、高い書棚は、静物と風景と二枚かゝつてゐる壁の畫や、その他女らしい趣味で加へた一二の簡単な家具で、畫室は気持のよい書齋になつてゐた。（真知子・前 48）

○鼠不入のわきの高い戸棚の上に錦手の大きな井が二つ、塗りの剥げた横櫛に載せておいてあつた。（波 37）

こういう家具は動かされ得るものが多いが、たえず動かされるようなものでなく、かなり位置が安定しているために、床を基準面とする上への延長としてみられやすいであろう。

山・建物・樹木などは、基準面にしっかり接触してその上に位置し、自分の構造によって安定した位置を保っている。これを自立性と呼ぶことにしよう。

つえ・かさ・棒のような細い形のもものが、何かに立てかけられて垂直に近くなっているときでも、「たかい」とはあまり言われることがないであろう。それは、そういう位置がそれらのものの正常の位置であるとはかぎらないことと同時に、自立性を欠いた姿勢であるためでもあるかと思われる。もっとも、

○土手の小徑をたどり、更らに、高いハシゴを登って、やっと、往来に這い上ろうとすると、真ツ赤なスカートが、眼の前に、燃え立っていた。（自由学校 265）

における「はしご」も立てかけられているわけであるが、「たかい」が使われている。はしごは、何かに立てかけられた位置が、本来の機能をはたす姿勢であるために、「た

かい」と言いやすい条件があるのであろうか。

「つらら」はかならず垂直の方向にできているものであるのに、「つららがたかい」と言うことはなく、「つららが長い」としか言うことができない。つららには、ここに言う自立性がなく、逆に上から下にぶらさがっているから当然である。同じりくつによって、鍾乳洞の天井から垂下した鍾乳石については「たかい」とは言えず、床からはえている石筍については「たかい」と言えるだろうと思われる。

山・建物・樹木などは、全体の一部分ではなく、それ自体をかなり独立的な全体としてみることができる。垂直の方向にあるものでも、それが全体の一部分として組み込まれたものであるばあいには、「たかい」とは言いにくく「ながい」と言われる傾向がみられる。たとえば家の中の柱などは垂直性の点では「たかい」の条件をよくそなえているが、「ながい」と言われることも少なくないと思われる。人のからだの全体については「たかい」と言えるので、からだの一部分である脚についても、立った姿勢のときには、「たかい」とも言えそうなのに、「ながい」としか言わない。

○夫人は、青いサン・グラスをかけ、白い野球帽のようなものをかぶって、長いハダカ足を突っ張った姿は、まったく、アマゾン的だった。(自由学校 99)

○同時に脚線が長く見えて、見ちがえる程スマートになります。(若い女性 1956年11月 97)

このようなりくつで押せば、次の例の「橋脚」は橋全体を構成する一部分で、「たかい」とは言いにくそうであるが、「たかい」が使われている。

○五百助は、怪漢のことも忘れて橋の方を眺めると、一人の男が猿のように、高い、鉄骨の橋脚を登っていく姿が、幻のように見えた。まるで、軽業としか思えない。(自由学校 344)

以上に見てきた「たかい」の主体はみな、固体的なものであった。固体的なものについて使われる「たかい」に関しては、上にのべたような位置固定性、自立性、全体性などが、必須的な条件ではないが、「たかい」の使われやすい条件として働いているように思われる。

「たかい」の主体になりやすいものは、上にみてきたような、一定の形を保った固体的なものだと言えようが、それ以外の様態のものも「たかい」の主体になることがある。まず、「波」がある。

○二人は汽車で銚子に行つた。海も川も高い波が立つて白かつた。(波 258)

○台風が近づきつつあった。海峡の波は高かった。(高崎山 34)

「波が高い」が、海などが荒れているというようなニュアンスをもつこともあるかもしれないが、もしあってもそれは連語全体につきまとうものであって、「たかい」じしんとしては、意味にずれが起こっていると考える必要はあるまい。

固定的でないものに使われたものとして、次のような例もある。

○そのときひとしほ甚だしい癖きがして、豎坑から高いしぶきがあがつた。(潮騒 89)

○ビュルルーと砲弾の飛ぶ音が聞え、昨日私が野火を見たあたりの野に、高い土煙が上つた。(野火 42)

○一つの丘から野火が上つてゐた。海草のやうに揺れながら、どこまでもどこまでも、無限に高く延びてゐた。(野火 177~178)

火については、「ながい」が使われた次の例がある。

○傭はれて来た女房等の一人が蓋をとつてがらがらと掻き廻して、それから復た火吹竹でふうふうと吹いた。焰の赤い舌がべろべろと長く立つた。(土・上 199)

以上に見てきた「たかい」は、基準の面というものが、地面・水面・床などとして客観的に存在し、具体的に考えやすいものであった。ところが、

○暫くして明子は、それぞれへの土産を積み重ねた高い風呂敷包みを抱えてそこを出て来た。(くれない 110)

では、「たかい」の基準になっている面は、やや考えにくい。ふろしき包みをかかえている手であろうか。

○前に行く車上の芳子、高い二百三高地巻、白いリボン、やゝ猫背勝なる姿、(蒲田 80)

○無名の画家の手になつたその小肖像には、襟の高いジャケットを着た少年のやうな女の姿が描かれてゐる。(冬の宿 122)

○高いダブル・カラーの前だけを外して、上衣を脱ぎ捨てた船医らしい男が、(或る女・前 91)

のような例になると、東髪やえりなどの底部・底辺を基準とみるべきであろうか。正常な位置では、およそ上方への方向は保たれているとしても、「たかい」本来の方向性も弱まって、もの自身の性質の表現に近くなっている。その点は、次にみる、人についての「背がたかい」という言いかたでは、さらにいちじるしくなっている。

はじめの方で留保しておいた、人間の体について「たかい」が使われるばあいについて、しらべてみよう。人間は自由に動きまわるし、いろいろな姿勢をとるものだから、物体についてみてきた基準からいえば、かならずしも「たかい」が適用されやすい存在だとはいえないだろう。しかし一方、人間が起きて生活している時間の中では、直立した姿勢は主要な姿勢の1つであるにはちがいないし、その姿勢の時の垂直にみた大きさはいろいろな意味をもち、人間の関心も集まりやすいといえよう。ともかく人体について「たかい」はよく使われる。ただし、多くのばあいに「背がたかい」(時に「たけがたかい」「せたけがたかい」なども)の形式が使われることは注目される。

○鴨居につかえそうに背の高い吉田さんを見ていると、私は何か圧されそうなものを

感じている。(放浪記 63)

○丈の高い、髯のある主人がそれを読む(蒲団 59)

○背丈は高く、体つきも立派で、顔立ちの稚なさだけがその年令に^{かな}適つてゐる。(潮騒 7)
次にあげるような「たかい」が単独で人体について使われた例は全体からみるとごくわずかに過ぎない。

○痩せた高い方の看護婦は、美しい同性に対する明白な嫉視で、真知子の云つた名前を突つ立つたまま冷やかに繰り返した。(真知子・前 173)

○その長いはずれの帳場の曲り角に、裾を冷え冷えと黒光りの板の上へ拵げて、女が高く立つてゐた。(雪国 15)

次にあげる例では、「背がたかい」人は、文にえがかれている瞬間において、立った姿勢にある。したがって、地面や床からの垂直の延長がじっさいに大きい状態である。

○^{かが}臆て、背の高い吉田さんの影が門から消えて行くと、私は蚊帳を胸に抱いたまま泣き出していた。(放浪記 61)

○真紅なドレスをきた背の高いダンサアと、何かむづかしい踊りの恰好をしてゐた。

(冬の宿 131)

しかし、次の例では「背の高い」女は、腰掛けた姿勢にあるので、その瞬間に、大きい身長がさながらに現実化されている場面ではない。

○蓮太郎の右側に腰掛けて居た、背の高い、すこし顔色の蒼い女は、丁度読みさしの新聞を休めて、丑松の方を眺めた。(破戒 99)

また、次の例をみると、「背がたかい」ということは、その人の身体的特徴の1つとして、一般的に述べられており、特定の時間におけるその人の姿勢とかかわりがない。

○もう一人私より一日早くはいったお君さんは背の高い母性的な、気立のいい女だった。(放浪記 100)

一般に、「*いま、あの人は背がたかい」というような文は成り立たない。

このようにみえてくると、人体について「たかい」と言われるばあい、重要なのは地面や床から頭のとっぺんまでの延長なのではなくて、人体じしんの足の裏から頭のとっぺんまでの長さなのだとなる。それは直立した時にいちばんはっきりと現われるが、姿勢がかわっても変化しない。ねそべっている人について「せいがたかいな」と言うばあい、「たかい」の方向性はまったく潜在的になっている。人体についてはたいてい「背がたかい」という形式が使われるのは、1つにはこのような、人体について言われる「たかい」の特殊な性格と関係があるのではなからうか。

以上のような性格をもった「背がたかい」という形式は、人体以外にも転用されるばあいがある。

○背の高い樺の群れが、白っぽい幹を奥へ奥へと重ねるようにしてしんとして裸で立っている。(むらぎも 292)

のように樹木について「背がたかい」と言ったばあいは、単に「たかい」と言ったばあよりも、樹木自身の大きさを問題にしている感じが強くなるようだ。すなわち地面からこずえまでというよりも、木の根もとからこずえまでの延長を表現しているという感じになる。ほかに、「衝立」「縁台」「荷物」「いす」などと「背(たけ)のたかい」の結びついた例もある。

○彼らの小テーブルの上には後にある背の高い、玉虫色の笠のついた客室用ランプから穏やかな明りがふりそそいだ。(伸子・上 30)

における「ランプ」は、単に「たかい」と形容されることは、あまりないであろう。ランプ自身のたての長さの表現として、「背がたかい」なら可能なのである。「コップ」「びん」なども、単独の「たかい」とは結びつきにくい、「背のたかい」となら結びつくことができると思われる。

[002] [001]における「たかい」は、もの自身のもっている量的な性質を表わすものであった。ここでは、「たかい」があるものの存在している位置について表わす用法をみよう。

○またある時、柿の木の高い枝にいる油蟬を見て、非常に大きな蟬だと思った事、
(暗夜行路・前 161)

における「たかい」は、枝自身の高さ、上方への長さについての表現ではなく、その枝の存在する位置が、地面からみでずと上方にあることを表わしている。

○墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すやうに立つてゐた。其下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、(こゝろ 16)

○九時十時となると、蟬が往来から見える高い梢で鳴きだす、だんだん暑くなる。
(武蔵野 31)

における、「梢」についての「たかい」という限定も、同様に地面からみでずと上方に位置していることを表わしている。

このような「たかい」は、一般的にいうと、「基準になる面からみて(ずと)上方に位置している」という意味を表わすといえよう。

[001]と[002]とは、問題になっているものが、基準面とつながっているか、切り離されているかという点でも違っている。しかし、[001]と[002]とは深い連関がある。[001]の意味で「たかい」ものの、もし上端だけに注目するならば、[001]は[002]に還元されてしまうともいえよう。現に用例をみても、[001]にも[002]にも解せられるものがときどきある。たとえば、

○私は高い寝台の上から、足をぶらさげて、御馳走を食べた。(放浪記 190)

において、まず「たかい」が「寝台」にかかっているとみて、寝台自身のたけが大きいことを表わしている、すなわち[001]の意味にみることができよう。また、「たかい」が

「寝台の上」にかかるとみて、床から、寝台の人が横たわる平面までのへだたりが大きいことを表わしている、すなわち〔002〕の意味と解することもできよう。

「たかい」が位置を表わす用法は、どういうものについて、どんなふうにあらわれているかを、用例によってしらべてみよう。

まず、「空」「天」について使われる。いうまでもなく地上から見上げてはるか上方に見えることを表わしている。

○七月の青空が、透き徹った青葉に縁どられて、遠く、高い。(自由学校 190)

○天高く気澄む、(武蔵野 7)

○星が無数に高い空にきらめいている。(くれない 11)

○これを気球につるして高い空に飛ばして宇宙線粒子のふるまいをみようというものだ。(物質の根源と宇宙を結ぶ 115)

次に、空にある「太陽」「月」「星」などの天体に用いられる。

○太陽に祝福され野面や、犬や、そこに身を踏めて居る働く農夫などを、彼はしばらく恍惚として眺めた。日は高い。(田園の憂鬱 109)

○社の帰り、橋の上からまだ高い陽をながめて、こんなに楽な勤めならば勉強も出来ると思った。(放浪記 176)

○其の日は晴れて心持がよかつたのと、一同が非常な奮発をしたのとで仕事は日の高い内に済んだ。(土・上 198)

○其月がやゝ高くやゝ小さくなつて、うち伴れて行く吾影の大分短くなる頃は、(思出の記・上 65)

○南天にはカノープスが高い。(未知の星を求めて 331)

「まだ日が高い」「日の高いうちに」のような表現は、日没に近づかない早い時刻を表わす、やや慣用句的な言いかたにもなっている。

空の「雲」について使われた例もある。

○危ぶまれていた空模様は、この頃よりすっかり雲が高くなって、レフト向うに青空がのぞきまず大丈夫。(野球界 1956年5月 74)

の「たかく」はあきらかに雲の位置についての表現である。

○空は降らないながらも低い雲が^{わだかま}蟠つて、時々目に鮮かで且黒ずんだ青葉の上にかつと黄色な明るい光を投げる。(土・上 126)

の「ひくい」と対比しうる用法である。雲について「たかい」と言うばあい、上の例のように地上からのへだたりが大きいことを言うことが多いであろう。しかし、

○遠く海の上らしい空に、鼠色の雲が厚く重なつた上から、髪束のやうに高い積雲が立ち、紅く染つてゐた。(野火 118)

では、雲じしんの下から上までのたけが大きいことを表わしている。

○彼女は高い雲の峯をふり仰ぐと、胸をそらし、両手を前に肩の高さに上げた。(そ

れいゆ 1956年40号 180)

は海で泳ぐときの飛び込みのようすであるが、「たかい」は雲の位置とも、また雲自身のための大きさとも解されて、ambiguous であるように思われる。

木の枝や梢に使われた例ははじめにあげたのでくりかえさない。建築物などの部分、特に天井や窓にはよく使われる。

○昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷗尾しじのまわりを鳴きながら、飛びまわっている。(羅生門 7)

○その空地の最上部に、橋を高い屋根とし、崖を風除けにして、数軒の人家が建っていた。(自由学校 177)

○天井の高い会議室の、広い卓の端に、二人は肩をおとした姿で掛けていた。(くれない 140)

○高い円天井の下にかゝっている大時計にさえ今夜はわびしさがある。(くれない 5)

○無数の鐘乳石が高い天井から垂れてゐるのが、吊りランプを見るやうだし、(帰郷 78)

○高い窓から射し入る陽の光がステンドグラスの加減で、虹ともつかず、花明りともつかない表象の世界を幻出させてゐる。(河明り 304~305)

○男の子は机を動かしたり、高い窓の掃除なんかは得意だ。(婦人朝日 1956年9月 82)
「たかい窓」はほかにも数例あり、いずれも窓のとりつけられている位置が、床からずっと上方に、天井に比較的近くあることを示しているようである。しかし、窓自身の縦の長さについても、「たかい」を用いることはあり得るだろう。資料内には名詞形「たかさ」が用いられた次の1例があるにすぎないけれども。

○二階の窓障子は高さ一尺ぐらゐしかなくて長細い。(雪国 105)

また、地上にあるものや、地面そのものや、床などが、他のところから比べて上方に位置していることを表わすのに使われる。

○起伏の多い地形で、畑は段々畑となり、家々は高く低く散らばっている。(旅 1956年12月 47)

○三方林で囲まれ、南が開いて余所よの畑とつづいてゐる。北が高く南が低い傾斜こうばいになつてゐる。(野菊の墓 23)

○河床の方が両側の耕地よりも高くなつてしまい、ただ堤防だけで水を防がなければならぬ。(改造 1953年12月 199)

○熊なんか、もつと高い岩棚から落ちたつて、体はちつとも傷がつかないさうよ。(雪国 106)

○そこは畳でこぼこの凸凹した、昼でも日の光の通はないやうな薄暗い八畳であつた。夫婦はそこから一段高い次の部屋に寝てゐるが、(あらくれ 10)

○高いベランダのようなところから拍子木が鳴ると、若い背ビロの男が、両手を拡げてパンパン手を叩いている。(放浪記 177)

上方の位置にあることを表わす「たかい」は、そういう位置に存在するものだけではなく、位置・場所そのものについての表現でもあり得る。そういう性質をもった「たかいところ」という連語を含んだ用例もみられる。そして、山などの上のほうの地点、空中での上方の位置、その他を表わしている。

○若者は山頂へ登った。ここは歌島の最も高いところである。(潮騒 26)

○私が、あらかじめ印をつけて置いたところより、その倍も高いところに、青い頂きが、すつと見えた。(富岳百景 50~51)

○まっ暗な夜で、見えるものはなんにもなかった。ただマストの高い所に小さな灯が一つ、最初星かと思ったほどに遠く見えただけだった。(暗夜行路 148)

位置を表わす「たかい」は、連用修飾語「たかく」の形でよく使われる。「たかい位置に(で)」「たかい位置にむかって」のような意味で使われることが多い。

まず、人や動物が、首・手・あしのような体の部分を、上方にもちあげる動作の表現に使われる。

○そして駝鳥のところへ行った。首を高くあげて、plakat=träger みたような恰好でこっちへくる。(むらぎも 159)

○釈放されて、地検の玄関を出た時、彼は、思わず、両手を高く、夕空に向かって、差上げたほどだった。(自由学校 372)

○彼は職員室の黒板に向かって右手を高く伸ばし、きれいな正確な文字を書いた。(人間の壁・上 17)

○一日に一度は部屋を暗くして、足を高くして十五分間休息することゝ八時間の睡眠を欠かさないように(スタイル 1956年10月 213)

○泥はますます深く、膝を越した。片足を高く抜き、重心のかゝつた他方の足が、もぐりさうになるのをこらへ、(野火 113)

○単子の白馬は前脚を高くあげて棒立となり、青袍をまとった胡主は忽ち地上に投出された。(李陵 161)

手などに持ったものを、上方の位置に保つ表現にも使われる。

○片手に小旗を高くささげ、片方ではしつかり平野につかまり、(伸子・上 41)

○茶店の奥から富士の大きい写真を持ち出し、崖の端に立つてその写真を両手で高く掲示して、(富岳百景 53)

○箕を高く頭の上に載せ、心許すゝゝ靱を振り落して居る女、(破戒 52)

次に、空中を移動する動作が、上方の位置において、あるいは上方の位置にむかって行なわれるようすを表わす。

○或る時は澄んだ音で空を満たして、編隊が高く飛び、或る時は突如空気を破るやう

な音で、単機が樹の梢をかすめて去つた。(野火 55)

○突兀と秋空を劃る遠山の上を高く雁の列が南へ急ぐのを見ても、しかし、将卒一同誰一人として甘い懐郷の情などを陵られるものはない。(李陵 152)

○一陣の風小高い丘を襲へば、幾千万の木の葉高く大空に舞ふて、小鳥の群かの如く遠く飛び去る。(武蔵野 12)

○女王蜂がとべるだけ高くとぶ、それを無数の雄蜂がおひかける。(友情 26)

○雲雀は頻りに啼きながら高く高く雲間へ這入りいつ迄たつても降りて来ない(春琴抄 208)

○火箭が高く夜空をまっすぐに登って、花火のような火花を瞬間明滅させた。(落城 36)

ほかに、たとえば次のようにさまざまにばあいに使われる。

○山袴の腰をひよいと捻つて、娘が稲の束を投げ上げると、高くのぼつた男が器用に受け取つて、扱くやうに振り分けては、竿に懸けていつた。(雪国 118)

○ちらちらと雪の降るなかを次第に高く坂道を上る聖の姿、恰も雲に駕して行くやうに見えたのである。(高野聖 77)

○道端に高く干した襦袢の下に、国境の山々が見えて、その雪の輝きものどかであった。(雪国 47)

○しかし洗腸は何度もしなくつてはいけないので、医者はこれを貸して行つてくれたと、座敷の隅に高くつるしてあるガラスの器を示した。(波 205)

○町々の軒は高く国旗を掲げ渡して、いづれの家も静粛に斯の紀念の一日を送ると見える。(破戒 72)

○菜の花盛りで、金色の花が高く高く咲き連なり、遠い白山山脈に照り映えた。(仲子・上 168)

○しかも悲鳴に似たワイヤアのきしめきと共に、風の巨大な塊りがぶつかり、船が高く持ち上げられると、浮標は闇のはるか下方に遠ざかつて小さく見える。(潮騒 142)

[01] [001] [002]における「たかい」は、地面・床などの水平面が基準になっていた。「たかい」が本来もっている、この条件が失われて、水平面以外のものが基準になって、「あるものの表面から外にとび出しているものの長さが大きい」という意味に使われることがある。いちばん例の多いのは「鼻がたかい」のばあいである。

○しかし、細く高い鼻の形も明らかでないし、小さい唇の色も消えてゐた。(雪国 167)

○一人の恐しく鼻の高い青年が、一人の色の黒い青年に詰るような口調でいつているのが安吉の目にはいった。(むらぎも 23)

このばあい、顔面が基準の面になり、そこから直角にみた、鼻の先端までの延長の大きいことが表わされている。「鼻がたかい」ことは望ましい、美しい容貌の1要素としてとらえられているばあいが多くである。次のような例に、それがうかがわれる。

○河原崎しづ江は鼻の高い面長の美貌で、声にも張りがあり、安心のいく女優さんだが、(週刊読売 1956年6月10日 18)

○彼は林中尉の形のよい高いが小さい鼻、かたくつたって角ばっている耳を忘れることはできない。(真空地帯・上 65)

○高すぎるぐらい整った鼻と、二重まぶたの大きな眼をしたこの女子大学生は、(新潮 1956年7月 208)

<注> 鈴木孝夫「天狗の鼻はなぜ高い」(『言語生活』No.41, 1962—3)

また、一方では「鼻がたかい」の意味に抽象化がおこり、「内心得意である」「自慢らしいようです」という意味の慣用語をも成り立たせている。

○おだて上げたもんだから、T子さんすっかり鼻を高くし始め止めてしまったというのだ。(婦人画報 1956年4月 274)

同じような用法として、「頬骨」「額」などに「たかい」が用いられた例もある。

○そして、もう女はないか、とまた頁をめくつてゆくうちに、頬骨が高く、あまり美しくはないが、他の女たちとちがつて、賢さが光つてゐる女の像をさがし出して、(冬の宿 124)

○頭は上の方が平らで、額が高く、ふさふさとした頭髪は眼のところまでたれさがっている。(世界 1956年6月 200)

○心の面を逆撫になであげられたやうなむしやくしやした不快は、信之の高く秀でた眉宇の間に露だつた。(多情仏心・前 315)

以上は、顔面の中の一部が顔面を基準として、張り出している度合の大きいことであつた。ほかに、次のような、「胸」「腹」などに「たかい」が使われた例もある。こういう場合は胴体の表面が基準になっているといえよう。

○一たい安吉は、女のからだの線に好き好きがあつた。彼は高い胸が好きだ。高い腰が好きだ。高い尻が好きだ。(むらぎも 37)

○四図は日本人に多いS字型の体型の人で、後はウエストから深くくられたようになり、前は下腹部が高くなっている形で、(ドレスメーカー 1956年5月 158)

人体の盛り上った部分でも、それが上向きに横たわった姿勢にあるときは、「たかい」が用いられたばあい、上方への延長すなわち(001)の意味に使われることはあり得よう。次の例は、横たわっている死骸の描写で、おそらくその例であろう。

○しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久に晒のごとく黙っていた。

(羅生門 10~11)

人体ではなく、動物のからだについても同じような「たかい」の用例があった。

○子山羊はびっくりして、ちょっと抵抗したが、すぐされるままにじっとしてしまつた。謙作はまだはえていない角の所へ手をやってみた。それでもそこが少し高くなつていた。(暗夜行路・前 39)

「たかい」の基準面が水平面から完全に解放された用法は、上にみてきたような、からだの部分に関するもの以外には見当たらない。(「ふかい」のばあいよりずっと狭い範囲に限られている。)なお、上にみた「鼻」や「頬骨」などに「たかい」が用いられるばあい、やや古い用字法では「隆」の用いられることがあった。

○額広く、鼻隆く、眉すこし迫って、容貌おもはせもなかなか立派な上に、(破戒 216)

○頬の骨隆たかく、鼻尖り、堅く結んだ口唇くちびるは血の色も無く変りはてた。(破戒 293)

〔1〕〔0〕においては、「たかい」は空間的な量を表わしたが、その基本的な意味をふまえて比喩的に、あるいは慣用化された意味として、ものごとの質がすぐれていること、価値が高いことを表わすことが多くみられる。われわれは価値の大きいことは、空間的な表象によってあらわすばあい、下方の位置ではなく上方の位置をもってする強い傾向がある。名詞「うえ」が質的によいことを、動詞「あがる」が質的によくなることの意味に使われるのと同じように、「たかい」もものごとの質・価値が大きく、すぐれていることを表わす意味・用法をもっているわけである。

たとえば、

○もし愛といふ不可思議なものりやうはじに両端があつて、其高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いてるとすれば、私の愛はたしかに其高い極点を捕つかまへたものです。(こゝろ 182~183)

では、「愛」が両端を持ったものにたとえられ、「たかい」本来の空間的な表象が保たれていると同時に、「たかい」は価値的にすぐれていることを表わしている。ところが、

○実際運動をしていた頃の広介の生活を、自分の作家生活よりも一段高いものとして大切にしていた頃の明子は、出来る限りの自分の努力を広介のためにした。(くれない 68)

○もちろん、われわれは高橋氏以上に、現実じつじは芸術よりも高いことをみとめている。(中央公論 1956年3月 90)

○その中の一台は二十数年後のいまも動いており、長期間、同一装置による測定値として非常に高い価値をもっている。(物質の根源と宇宙を結ぶ 106)

のような例になると、空間的な表象はほとんど、あるいはまったく失なわれているといえよう。質的にすぐれていることを表わす「たかい」が多少なり空間性をふまえていて、比喩的な性質を残しているか、あるいは慣用的な意味になり切っているかは一般的

にも、個々の例に関しても、判定のしにくい、むずかしい問題である。

このような「たかい」が、「水準」「段階」などと結びついて使われた例がみられる。これらの語は、質的な程度・レベルを表わす語であるから、「たかい」（あるいは「ひくい」）で限定されるにふさわしい。

○しかも、日本の分子生物学は、いまや世界的に認められた高い水準に達しているのだ。（生命の暗号を解く 147）

○現在、サル社会についての大衆の知識水準は、世界中で、日本人が抜群に高いだろう。（高崎山 40）

○それは確かに物理学が従来より高い段階に到達し、より広い展望を持ち得たことを意味する。（物質世界の客観性について 257）

ほかに、「生活水準」「道徳水準」「理論水準」と「たかい」の結びついている例もある。

「たかく評価する」という言いかたにおける「たかい」も、ここに位置づけられる。

○が、フランスは彼の作曲を高く評価しなかった。（スタイル 1956年8月 177）

○田村氏夫妻の研究が、高く評価されるのもこのためだろう。（学問の動き 267）

同じような意味の「たかく買う」は、「たかく」は「高価に」の意味で、連語全体の意味が抽象化したものかとも考えられる。しかし、「買う」自身に「評価する、価値をみとめる」という意味があって、「たかく」はやはり質・価値がすぐれていることを表わすとみてよいだろう。

○彼女は瀬谷の誠実な人柄と法律上の知識を高く買つて、貸借についての訴訟事はすべて瀬谷に相談した。（厚物咲 33）

○より多くの人間を、より効果的に支配するのに役立つ学問ほど、その効用を高く買われるわけだ。（抵抗の科学 303）

「たかい」は質的にすぐれていることの万般にわたって用いられ得るわけではない。さりとて、かくかくのものごとに関して用いられると限定することも容易でなく、多様で自由な表現の可能性に目をおおって、無理な足かせをはめようとする徒労になる恐れも感じられる。ここでは用例を眺め、分類を試みた結果、比較的目立つ使われかたをいくつかあげてみることにしよう。〔1〕の下位分類として、かりに以下のような類別が成り立ち得たとしても、意味のニュアンス的な差にすぎないだろう。

(a) 「たかい」が社会的な地位・格式が上位にあること、対人的に優越していることに関係して使われるばあいがある。

〔002〕の、空間的な位置が上方であることを表わす用法が、人のすわる所や人間の姿勢などに関係するばあいについて考えてみよう。古い時代には貴人などのすわる所は、実際に空間的に他より高くしつらえられたことが多かっただろう。しかし、現代でも、同一平面であっても、上位の人のすわるべき「上座」のことを「たかい所」と表現する

ことがある。「お高くとまる」「頭が高い」のような慣用句をみても、空間的に高い位置や姿勢は自尊・高慢などと関係が深いことがわかる。

○然し君子さん女給になつたからつて、何もさうお高くとまるには及ばないでせう。

(つゆのあとさき 101)

○どんな女だか、知らないが、お高くとまられて、見下されでもした日には、駒子の
ような女は、一週間ぐらい、血の道が起ってしまう。(自由学校 89)

次の例の「高いところから」には空間的な位置のイメージがある程度保たれているといえよう。

○県の執行委員になったのも春子の方が二年もはやい。志野田はそれを意識すると、
かえって高いところから物を言うような態度をとっていた。(人間の壁・上 62)

次の例では、「たかい」が对人的な優越をニュアンスとして含んでいるといえようか。

○私自身にもインテリ病がやはりあるのであろうが、こうした機関で研修をうけたと
いうことが、自分を一段高く感じさせ、(世界 1956年 6月 96)

○やっぱり女が男より低い時は、安心して好意を示せるが、すこしでも高いか、ある
いはすぐれて行きそうな予感がすると、低く落として置かないと、(婦人公論 1956年
7月 236)

この(a)のような用法は、[002]と関連をもっていることは首肯されるであろう。

「地位」「家柄」などに用いられる「たかい」は、この(a)に属させることができよう。

○もう一つは自分より地位の高い者と争って、相手を蹴落すことによって自分がその
地位を奪うことだ。(人間の壁・上 250)

○嫉妬は自分よりも高い地位にある者、自分よりも幸福な状態にある者に対して起
る。(人生論ノート 69)

○船長の隣座にゐるので葉子は家柄の高い生れに違ひないと思つた(或る女・上
113)

「誇り」「気位」のような、自尊的な気持を表わす名詞と結びつく「たかい」も、こ
こに位置づけてよいだろう。

○歴史の浅い政治学は、新興国にも似て、誇りは高いがまだどこか頼りない足取り
で、未来に向って歩いているのであろう。(学問の動き 249)

○気位の高い娘として、あの男もイヤ、この男も嫌い、惜しげもなく、秀才や美青
年を、ケトバシてきた彼女が、五百助のような男に、コロリと参ってしまったの
は、不合理の極であった。(自由学校 13)

○お前は気が高くてねえさんたちを軽く見てかろと言っておこっていたよ。(出家
とその弟子 148)

○それに、自矜心の高い彼にとつて、彼等小人輩は、怨恨の対象としてさへ物足りな

い気がする。(李陵 176)

○望天観気のおどろくべき正確さ、漁撈と航海に関する無比の経験、村の歴史と伝統についての高い自負とは、(潮騒 96)

(b) 人間が求め、努力して、より大きい価値を実現しようとする目標になるものは、無形のものであることが多いが、空間的に「たかい」位置にあるものとして表象されやすいのであろう。

○私はある意味から見て実際彼の軽蔑に値してゐたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙かに高いところにあつたとも云はれるでせう。(こゝろ 210)

では、空間性のイメージが保たれているといえよう。

「理想」「目的」などについて用いられる「たかい」はここに位置づけられよう。

○金儲や功名や享樂はこのより高い理想に照して、その権利と制限とを享けて来なければならぬのである。(人格主義 24)

○おまけに月評子の理想が高いせいか、望蜀の念しきりなのだ。(宝石 1956年3月 51)

○最少限度の労力を以て、最大の効果を収めるのが合理化された社会であろうが、もし高い目的と理想なしにこの道を行こうとするなら、必然的に人生は低下して行く。(ニューエイジ 1953年10月 5)

○議会が国民の期待を裏切って、憲法の規定している高い目的を果すことに失敗している証拠はいろいろある。(中央公論 1954年5月 25)

「志がたかい」「望みがたかい」なども、同じ類にはいる。

(c) 能力的に優秀であること、またはすぐれた能力によって大きい価値が実現・達成されていることなど。

○それぞれの分野に高い能力をもつ専門家の出ることが、(人生手帖 1953年11月 23)

○あの諸仏、諸菩薩の相好の中に見られる高い知性、寛大な愛情、(日本及日本人 1954年5月 58)

○イギリス人は比較的の高い判断力をもっているのに、(ものの見方について 21)

○わたしは、カーペンター博士のホエザルやテナガザルの社会生活に関する報告をよんで、その高い科学性に感動したけれど、(高崎山 57)

ものごとを見抜く力がすぐれていることを表わす慣用句「目がたかい」もここに位置づけられよう。

○「流石にお目が高いと存じます。これだけの品物は、もう、どこにも御座いませぬし、当分はまゐりますまい。」(帰郷 174)

○だんだん目が高くなると、相手の演出についての上手下手が批評できるようになります。(小説サロン 1956年9月付録 158)

(d) (a)にみた「たかい」は、社会的な力・序列などと関係の深いものであった。ここでは、人間のより内面的、精神的な価値の達成とかかわりの深い面で使われる「たか

い」をみよう。

○母様には、恋愛なんかから超越して、孤り高く浄しといふやうな、私を見てゐるのが趣味なやうなところがあるのよ (伸子・上 151)

○私は先生をもつと弱い人と信じてゐた。さうして其弱くて高い処に、私の懐かしみの根を置いてゐた。(こゝろ 83)

○彼の眼の前に、再び、現実のそれよりはなほ一層高き神秘なる美と権威とに於て、長老と、モニカとの結合体が髣髴と現はれた。(青銅の基督 97)

にみられるような「たかい」は、下劣さと対蹠的な、品位・高尚さ・けだかさ・崇高さなどと関係が深いといえよう。

「教養」「人格」などと結びついて使われる「たかい」は、ここに位置づけてよいであろう。

○あの人たちの教養は、高くないが、よく一致してます。(自由学校 103)

○家内では趣味の高い而して意志の弱い良人を全く無視して (或る女・前 10)

○釈迦や孔子もその精神分析においては煩惱具足の凡夫であるにもせよ、彼等の生活が道を中心とする点において、彼等は食色の奴隸よりも遙かに高い人格を持つてゐるといふはなければならない。(人格主義 80)

○習慣はすでにかやうなより高い人間性を現はしてゐる。(人生論ノート 43)

[2] [1]はものごとが質的・価値的にすぐれていることを表わすものであった。「たかい」はほかに、価値的な要素が失なわれて、たんに量的・程度的にいちじるしいことを表わすことがある。「たかい」の意味のこの側面を[2]でしらべることになしよう。

たとえば、

○美しいこと、理想を養ふこと、虚栄心の高いこと一かういふ傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備へて居た。(蒲団 11)

にみられる「虚栄心が高い」ということは、望ましいこととして述べられているのではない。このばあいの「たかい」は[1]のばあいのように質的にすぐれていることを表わしてはおらず、量的・程度的に大きいことを表わしている。(現代のいちばんふつうの言いかたは「虚栄心がつよい」であろうが。)

もっとも、質的か量的か判断しにくく、どちらとも言えそうな例もある。たとえば、次のような例は質的とみて[1]に属させることもできそうである。

○それは自然法則が互いに一定速度で運動するどの観測者にも共通の形で表現されるという意味で、科学的知識により高い客観性を賦与するものであった。(物質世界の客観性について 264)

○その反面、復調のきざしをみせている木村にも一応点数は高くつけておいたそうだ。(ベースボールマガジン増刊 21号 103)

○草が、山羊の体を通ずして、新鮮で、栄養価の高いミルクと化するのだから、こんな、うまい考えはない。(自由学校 186)

なお、以下にあげる下位区分の中で、〔21〕〔22〕はおよそ「ひくい」と対立しているが、〔23〕〔24〕〔25〕には「ひくい」との対立はみられない。

〔21〕 まず、測定できるような尺度的な性質などに関して、尺度上の目盛りがかなり上のほうであることを表わすことがある。

まず、日常的によく使われる言いかたから、すこし例をあげてみよう。

○透き通つたやうに白い顔の、頬のあたりが鮮やかな紅潮をしてゐるのは、熱の高いことを示してゐた。(冬の宿 91~92)

○おじは血圧が高かった。(傑作倶楽部 1956年12月 307)

○室内の温度が不自然に高かったから、平常健康な伸子は初めただのほせたのだと思つた。(伸子・上 63)

○だが湿度の高い国柄とて、溜り易い汗を流したり、(文芸春秋 1953年10月 234)

○緯度の高いシャトルに冬の 襲ひかゝつて来る様はすさまじいものだつた。(或る女・前 222)

上と同じような類として「体温」、「気温」「床温」と「たかい」の結びついた例もある。以上に関しては、「～がたかい」という言いかたはかなり固定的であつて、たとえば「血圧が多い」「温度が大きい」などとはあまり言わないであらう。しかし、以下にあげる例の中には、「たかい」がそれほど一定した言いかたにはなつておらず、ほぼ同様の事実を、「おおきい」「おおい」などでも言えるばあいが多い。ということは、「たかい」の意味が、このような用法においては、単に程度が大きいことを表わす性質が濃く、質的な要素がほとんどなくなつてゐることをものがたるものであらう。

以下になお、この用法における「たかい」の使われかたを示したいが、便宜上結びつく名詞の下位成分を手がかりにしてみよう。まず、「～度」という形の名詞と結びついた例が、上にあげた「温度」「緯度」などのほかにもみられる。

○しかもその酒は、酒自身そう度の高いものでもない。(むらぎも 187)
は独立の名詞としての「度」であるが、このばあい「度のつよい」とも言うだらう。

○ビールにはデキストリン蛋白質、ゴム質のような粘つこいものを含んでゐるので、水の二倍も粘度が高いです。(傑作倶楽部 1956年6月 169)

○それから海や海辺は素材の中でも感光度の最も高いものになっていますので、(旅 1956年7月 100)

のほかに、「精度」「人口密度」「出現頻度」と「たかい」の結びついた例がある。

「～率」の形の例も多い。

○私立となると、この率はまたグット高くなつて、(文芸春秋 1954年3月 189)

は独立の名詞の例である。

○近年になって能率の高い動力噴霧機や撒粉機が普及し、共同防除の効果を著しくあげている。(農業世界 1956年2月 133)

○開通当初は回数券の利用率が高かったが、最近はその都度払いが圧倒的に多い。(実業之日本 1956年4月15日 53)

のほかに、「確率」「熱効率」「死亡率」「増加率」「弾性率」の例がある。

その他の例をさらにいくつかあげてみよう。

○収量は高く、幸玉よりも三〜六割増の成績を得ている。(農耕と園芸 1956年9月 40)

○日常生活の上で必需性の高い財貨やサービスへの支出が増加する割合と(世界 1954年1月付録 図解国民の経済生活 9)

○化成肥料の方が肥効が高いということがいいうるのであって、(農耕と園芸 1956年11月 52)

○ホモポリマーは軟化点が高く、溶剤に溶けにくく、(新しい繊維 381)

のほかに、「反収」「需要」「抵抗性」「エンゲル係数」「ボルト数」「耐久力」「比重」「エネルギー」などの例がある。

以上にあげた例は大部分が、計量的な数量の大きいことを表わすものであった。しかし、次にあげる例のように、ふつうは計量されることのないような性質の程度が大きいことを表わすことも、もちろんできる。

○ますます高い^{ハリウッド}聖林の日本ロケ熱(面白倶楽部 1956年10月 162)

○色々と問題を意識する度合は低いものと、高いものといろいろであるが(人生手帖 1956年4月 129)

ほかに「研究熱」「野球熱」の例もある。

[22] 音や声について「たかい」が用いられるばあいがある。これは次の2種類に分けられる。

第1に、周波数の大きい音の質が「たかい」と形容される。ソプラノがアルトよりたかい、という意味での「たかい」である。

○その笑ひ声も悲しいほど高く澄んでゐるので(雪国 135)

○あ、細く高い徹子の声^{ハルカ}が何か言っている。(くれない 112)

○小唄の市丸姐さんは声も高いが、(サンデー毎日 1956年7月8日 53)

○高い音の出る民謡調歌手として(娯楽よみうり 1956年12月21日 37)

第2に、大きい強い音(すなわち振幅の大きい音)またはそのように感じられる音が「たかい」と形容されることがある。次のような例はおそらくその意味であろうと想像される。実際問題として、振幅と周波数とは比例しがちであろうが。

○「あゝ、叔父さんは声が高い。」と制するやうにして、(破戒 152)

○高いノックの先触れで入つて来たのは、三日に一遍きつと帰つてゐる富美子であつた。(真知子・前 188)

○伸子は、高く酒を啜る音を聞いた。(伸子・上 127)

○愈々淋しい。落葉をふむ自分の足音ばかり高く、(武蔵野 21)

○風が海を叩いて、波音が高い。(放浪記 118)

「声が高い」が、そういう発言が多い、そういう世論が強いという意味に抽象化して用いられる次のようなばあいも、音について用いられる「たかい」の第2の意味から生じているのであろう。

○世には科学捜査の声が高く、(時の法令 1956年6月23日 36)

○高いからおいしいものは食べられないという声も高い。(実業之日本 1956年4月15日 72)

音や声について使われた「たかい」の用例の中で、ピッチか大ききかがある程度判別できるように思われる例をあげたが、いずれであるか、あるいは両者の複合であるか判断しにくい例も多い。たとえば、

○その時、呼び笛の声が高く響き、もう一人の男が闇から現はれて、その闇に足をかけた。(青銅の基督 94)

○「おや、新治^{しんち}さんね」

黙つてさし出された平目をうけとると、與さんは高い声でかう呼んだ。(潮騒 10)

なお、音の大小に関する「たかい」は量の大小の1種として考えやすいが、音の高低に関する「たかい」は音の性質の違いとみるべきではないかと思われる。(物理的には周波数の大小に対応づけられるではあろうが。)とすれば、この両面をひとしく、量的な意味をまとめた〔2〕に含めるのは無理なことになるが、便宜上〔2〕の中で扱った。

〔23〕「うわさ」「評判」「ほまれ」「名」「聞え」「悪名」のような語と「たかい」が結びついて、広く知られている、名高い等の意味をあらわすことがある。

○四人の姉妹のうちで春琴が最も器量よしといふ評判が高かつたのは、(春琴抄 147)

○徳川將軍は名君の誉の高い三代目の家光で、(阿部一族 25)

○爾来名声は藉然として、一作ごとに高くなり、(つゆのあとさき 21)

○それに引きかへて、蕪橋は、「藏前の大師匠」の名がいよいよ高くなるばかりだった。(末枯 24)

○氏は、幼時から、神童の聞え高く、(ダイヤモンド 1956年6月9日 114)

○電源開発で貴重な湿原植物が水没すると、かねてからウワサは高かつたが、(週刊新潮 1956年6月26日 69)

○賭博界で悪名高いジョイ・グッドマン、(実話雑誌 1956年2月 127)

上にあげた例の中で、おわりの2例以外は、いいことに使われている。一般にもその

ような傾向があるかもしれない。

〔00〕の意味で空間的に高いものは、まわりから見えやすく、人々に認識されやすい。ここで見た「たかい」には、かくれなく人々に知れわたっているというニュアンスが感じられるが、あるいは〔23〕は、上のような点でも〔00〕とつながりをもっているのであろうか。

〔24〕もののおいについて、「たかい」が用いられ、においが著しく、めだって感じられることを表わす。

○沈丁花がとおり一杯に高く匂っていた。(くれない 30)

○一鉢の匂の高い蘭で飾られた茶卓の向側から、その間つゝましく耳傾けてゐた、
(真知子・前 121)

○杉の森に特有の重い濡れた高い匂があつた。(田園の憂鬱 96)

○保守的で、教養ある紳士——バナナのように、匂いばかり高くて、一向に、はごたえのない辺見卓を知った。(自由学校 266)

のように、花・樹木・果実などのにおいに用いられた例が多い。(4番目の「自由学校」の例は比喩表現の中で使われたものであるが。) それ以外の例としては次のようなものがある。

○国から汐の香の高い布団を送って来た。お陽様に照らされている縁側の上に、送って来た布団を干していると、何故だか父様よ母様よと口に出して唱いたくなってくる。(放浪記 52)

○羽被^{はつび}の紺^{にほみ}の香の高くするきつきの車夫が、(或る女・前 6)

○クリスマスベツの両岸に宿が林立、脂粉の香も高い。(読切小説集 1956年11月 210)

○「どうぞ」と言って、まだニスの香^かの高い洋風の段々から彼らを表二階の座敷へ導いた。(暗夜行路・前 30)

○かつて私が切断された足首を見た河原へ、私は歩み出した。萱の間で臭気が高くなつた。そして私は一つの場所に多くの足首を見た。(野火 159)

最後の「野火」の例だけはあきらかにいやなにおいについて使われている。しかし、他の例はむしろ好ましいにおいについて使われているものが多いようである。3番目の「読切小説集」の例に見られる「脂粉の香が高い」という言いかたは慣用語的だといえよう。「香り高い」という複合形容詞も成立しているが、やはりよい意味に使われ、また具体的ににおいから離れて抽象的な意味に使われることが多い。

○かくのごとくにして、私はまた釣りもせずに魚を食い、乳もしぼらずにバタをなめ、食後には遠く南国よりもたらせし熱帯の**かおり**高き果実やコーヒーを味わうことさえできる。(貧乏物語 93)

○そのなかには香り高い思想のもられた紀行文も数篇ある。(旅 1956年12月 67)

○香り高い思想を、あなたの生活に取り入れて下さい。(小説サロン 1956年9月 198)

○しかも健全な、香り高い映画が数多く作られるように、(娯楽よみうり 1956年12月14日 63)

において用いられる「たかい」についても、〔25〕のばあいと同様に、空間的な「たかい」との連絡を考えることができる。すなわち、空間的に高く、卓立したものが目立ちやすいように、においがあたりにきわだって感じられるようすが「においがたかい」なのではないかという、つながりである。

〔25〕量・程度がいちじるしいとまとめ得るような「たかい」の用法は、〔21〕～〔24〕以外にもまだあると思われる。ここでは、用例があって気付いたものを1つだけあげる。

○平和のねがい、血と燃えて、はたらく者の、意気たかく、結べる同志、五十万。
(人間の壁・上 347)

にみられるような「意気がたかい」という言いかたがある。この結びつきにおいては、気力がみちあふれていて、さかんなようすという色合いを帯びるといえようか。やや似た言いかたとして「意気ごみがたかい」「志気がたかい」もある。しかし、「*元気がたかい」「*気力がたかい」「*闘志がたかい」「*フェイトがたかい」のような自由な結びつきは作らず、やや慣用句的である。

〔3〕「それが売り買いされる時の金額が大きい」という意味。〔0〕〔1〕〔2〕における「たかい」の対義語は、存在するばあいには「ひくい」であったが、〔3〕の対義語は「やすい」である。「金額が大きい」ということも、程度が大きいことの一種であるとして〔2〕に含ませることはできないかとも一応は考えられる。たしかに、そのような共通性あって、それが両方の意味を結びつけていると考えられるので、対義語を異にしているも同音異義語とすべきではなかろう。しかし、〔2〕と〔3〕とは性質に大きな違いがある。〔2〕の「たかい」は、「体温がたかい」「波音がたかい」「名声がたかい」「香りがたかい」など、抽象名詞や現象を表わす名詞を主語とし、ものを主体にすることはできない。ところが、高価を意味する「たかい」は、次の例のように、ものを主体とすることができる。この点を重くみて、〔2〕とは別に〔3〕を立てた。

○一パイ飲みに入る。酒があまり高いから、焼酎を飲むべく、余儀なくされる。(自由学校 134)

○このため消費物資はおどろくほど高い。(エコノミスト 1956年11月3日 23)

○高い本は買えないので、相沢さんの蔵書は、抜刷、スクラップ、雑誌のたぐいばかりである。(旧石器の狩人 309)

○その結果、わが国の自動車業は国民に、悪く高い車を無理に使わせることによつて、命脈を保つに過ぎなくなろう。(ダイヤモンド 1956年1月11日 37)

○だからお客は莫迦に高いものを着せられて、職人はお店のために働くといふことになる。(あらくれ 168)

もっとも、ものを表わす名詞と「たかい」を直接に結びつけず、たとえば次の例のように「ねだん」「価格」などの語を介在させることも多い。

○実に古本の値段が高くなつたねえ。(帰郷 148)

○もっとも今日わが国に於て市販されているマカロニーは価格が高い。(文芸春秋 1953年11月 51)

しかし、上の例のばあい、「古本が高くなった」「マカロニーは高い」というふうには、「ねだん」などの語をはぶいた文も成り立つ。

〔2〕に属する「たかい」を使って、ものや人について述べる文を作ろうとすると、部屋の温度がたかい。

あの人は名声がたかい。

のような形式が必要になり、「温度」「名声」などをはぶくことはできない。

高価を意味する「たかい」は貨幣経済の制度を前提とする社会的な性質である。そして、商品性をもちうるのは何であれ、「たかい」の主体になることができる。水が商品性をもたない環境では、「水がたかい」という文は成り立ちにくい、飲料水が乏しくて売り買われるような条件下では「水がたかい」という文は珍しくなるだろう。人間そのものは売買の対象にならないので、ひとは「たかい」の主体にはならない。しかし、人間の各種の働きは商品性をもつ。

○「菊代さんだけ少し高いんですけど。」(つゆのあとさき 66)

において、「たかい」の主体は「菊代さん」そのものではない。「菊代さんは玉代がたかい」などの省略的表現であろうか。

もの以外の、労働の対価、種々の料金などについて「たかい」と言うときは、「たかい」の主体は、次にあげる例でアンダーラインを施したような抽象名詞によって表わされる。

○月給の高い教師をやめさせて、教育経験のとほしい新卒を、安い月給で雇おうというんだ。(人間の壁・上 44)

○部屋代が高いといつてリーンハルトが二三度もこぼした。(むらぎも 173)

○今その大部分を割いて高い地代を払はうとするのであつた。(破戒 244)

○高い観劇料のために思うに任せざること多く、(文芸春秋 1953年10月 45)

○外国の高い人件費のもとでの価格で入ってくるのに対し、(ダイヤモンド 1956年4月 28日 89)

○日本より、かなり厳しい面もあるし、税金も高いのである。(知性 1956年4月 61)

○しかし資本がない、借ろうと思えば利子が高くてとても引き合わぬ。(貧乏物語 131) 連用修飾語「たかく」は、次の例のように「たかいねだんで(に)」などの意味で使

われる。

○「小父さん、今日は少し高く買って頂戴ね。少し遠くまで行くんだから……」(放浪記 59)

○なるべく値段の高く売れる貨物を作り出すに決まっているから、(貧乏物語 103)

○これは鋳物用鉄がコスト的にも高くつくこと、(エコノミスト 1956年2月4日 9)

「たかい」と判断される基準は、形容詞一般の例にもれず、さまざまなばあいがある。「たかい」のばあい、やや注目されるのは次のようなばあいである。

○学生に与えている価値を考えたならば、三万円とっても決して高くない。(改造 1954年5月 188)

○「君も、もうちつとはしつかりした男かと思つてゐたが、存外馬鹿だね。これちア千円は高価^{たか}かつた。ちつと買ひ被つたなア」(多情仏心・前 287)

○「最新流行のビニールのハンドバッグ、一個正価八百円」

「おーお、高いな」

「どうせ掛値やろ」(潮騒 127)

このような例のばあいには、ものの実質的な価値とくらべてねだんが不当に大きい、というニュアンスが感じられる。そういうニュアンスを伴わない「たかい」を使っていえば「たかすぎる」というのに近いだろう。

4. ふ か い

[0] 「ふかい」の基本的な意味と考えられる、空間的な量を表わす意味を[0]としてまとめ、それ以外の意味を[1]以下に扱うことにしよう。

[001][002]は水平面が基準になった、もっとも典型的な用法であり、[011][012]はその条件が弱まり、消えた用法である。後者の用法が、「たかい」のばあいよりも広く一般的にみられるので、前者・後者を統合して考えることもできるが、ここでは意味の小区分として、水平面を基準とするばあいと、その他との区別を立てた。

[001] 表面から底までの、垂直にみた下方への長さが大きいことを表わす。地面などの水平面に垂直の方向で、上向きにみた長さの大きいのが「たかい」であるのに対して、水平面から下向きにみた長さの大きいのが「ふかい」であるという関係にある。その実例をみよう。

○そこは海が深い上に、海豹^{あざらし}のやうな黒い頭をした岩がひよいひよい突出てゐるためか、海水着の群はほとんど押寄せては来なかつた。(波 246)

○この岬からあの島へ、深い海を渡るというような(それいゆ 1956年41号 28)

○深い谿々に霧の晴れて行く朝景色(多情仏心・前 263)

○其をお渡りなさいます時、下を見てはなりません、丁度ちうとで余程谷が深いので
 ございますから、目が廻ふと悪うござんす。(高野聖 47)

○私達の乗った汽車が、何度となく山を攀ちのぼつたり、深い溪谷に沿つて走つたり
 (風立ちぬ 90)

○古井戸は暗くして且深い。(土・上 108)

○逸散に駈て来て、ドカッと深い穴へ落ちたら、彼様な気がするだらうと思ふ。(平
 凡 41)

○板壁の外の広い深い溝の向うの舗道に動いているのは、(真空地帯・上 158)

○五反歩に一点の割で田畑に深い坑あなを掘って地面より下の土の状態を見て、(農業世界
 1956年6月 87)

○穴は見えない奥のほうで岬を貫通してをり、東岸から入ってくる潮が、深いなてあな豎坑の
 底で満ちたり引いたりしてゐるのである。(潮騒 87)

以上のような例では、「ふかい」は「海」「谷」「穴」「溝」など、下方に向かってくぼみを持つものを表わす名詞と結びついており、「ふかい」のもっとも典型的な用い方と考えられる。くぼみを持つものは、海・湖・池・沼などのように水をたたえたものでも、谷・穴・溝などのように(必ずしも)水をたたえていないものでもよい。

○「愛情は深い海のごとく」のヴィヴィアン・リイ(スクリーン 1956年1月 79)
 の例でも「ふかい」と「海」の関係は上と同様であるが、「ふかい海」全体が「愛情」の比喩的形象として用いられており、あとで[41]でみるような「ふかい愛情」などの用い方につながっていくことを暗示している。

以上にみたような、「ふかい」がくぼみを持つ、底のあるものを表わす名詞と結びつく使われかたのほか、に、「ふかい」が同じ基本的意味で次のようにも使われる。

○深い雪の上に晒した白麻に朝日が照つて(雪国 151)

○そのあたりは雪もことさら深く、膝まで沈むほどだつた。(冬の宿 98)

○肩に担いだ銃の重さが、それだけ足を沈めるやうに思はれた。進むにつれて、泥は
 深くなつた、(野火 113)

○泥濘でいねいの深いその路からみた一郭の風景は、(冬の宿 12)

「雪」や「泥」自身はくぼみを持ったものではないが、たとえば足で踏み入れればずぶりとはいっていき、底の堅い所まで達する距離が考えられる。その、下方への距離が大ききことが「ふかい」で表現されるわけである。

[002] 上の[001]における「ふかい」は、もの自身のもつ量的な性質を表わすものであった。だが、「ふかい」は、そのもの自身の性質だけではなく、ほかのものとの距離によってそのものの位置を示すこともある。

○船がなにかのことで深い海底に沈没してゆく。(冬の宿 200)

○入江は青く澄んで、赤い海藻に包まれた丸い岩が、波が^{かきみだ}擾さぬあひだは、水面ちかくに泛び上つてゐるやうにはつきり見える。実はそれがかなり深いのである。(潮騒 129)

における「ふかい」は、海底自身・岩自身だけで言える性質ではなく、海面から下方への距離の大きい位置にあることを表わしている。すなわち、こういう「ふかい」は「基準の面からみて、ずっと下のほうに位置している」という意味に解せられる。

次の例も、比喩的な表現の中ではあるが、「ふかい」は同様の意味で使われている。
○高台から見る港の風景は、時代の沁みついた輪廓がハッキリ整頓されているのに、底がふかく、どのようなあたらしい空気の流れ入ることも妨げないというかんじである。(週刊読売 1956年1月8日 25)

○既に螢の死んだ暗い野に、遠く赤い火が見えた。何の灯であらう。雨の密度の変移に従つて、暗く明るくまたゞき、または深い水底に沈んだやうに、暈だけになつた。(野火 126)

位置を表わす「ふかい」は、連用修飾語「ふかく」の形でよく使われる。「ふかい位置で(に)」「ふかい位置にむかって」「ふかい位置まで」のような意味で使われることが多い。

- 一面の雪の凍りつく音が、地の底深く鳴つてゐるやうな(雪国 42)
- 学校の運動場には雪が山のやうに積上げてあつた。木馬や鉄棒は深く^{みなぼう}埋没れて了つて(破戒 301)
- 遠くつゞく河原は一面の白い大海を見るやうで、蘆荻も、楊柳も、すべて深く隠れて了つた。(破戒 284)
- その時鷹は水底深く沈んでしまつて(阿部一族 28)
- 冬前に根が十分に地中深く伸び、(家の光 1956年11月 188)
- できるだけ深く耕しておきます。(婦人倶楽部 1956年9月 451)

以上は具体的な空間における位置を表わす「ふかい」であつた。そのような「深い」が、目にみえないものの比喩的表現の中で利用されている例もあるので、次にあげておこう。

- 「俺達には、俺達しか味方が無えんだ。」それは今では、皆の心の底の方へ、底の方へ、と深く入り込んで行つた。(蟹工船 117)
- 葉子の心は(中略)、忽ち物凄^{おそろ}い沈滞の淵深く落ちて行くのだつた。(或る女・前 155)
- のみならず、深いところへ陥落するやうな^{おぼろ}睡眠で、目が覚めた後は毎時頭^{いっつも}が重かつた。(破戒 256)

以上の例では、地面や水面などが基準になっていた。ところで、人が頭をさげたり、うなずいたりする程度が大きいようすを、次のように「ふかく」で表わすことがある。

このばあい、正常の頭の位置が基準になって、それよりずっと下方の位置まで頭が行くことを「ふかく」ととらえ、表わすのであろう。

○背の高い、容貌の立派な年よりは、そのまま深くふかく頭を下げた。(むらさも 44)

○彼は眼を開け、手で蠅を払ひ、深く叩頭した。(野火 131)

○伴子が深く頷いて見せると、(帰郷 293)

○顔を覗き込まれるほど、なほなほ深く首垂れて、滝十郎は、子供つほく二三度合点々々をした。(多情仏心・前 73)

○けれどもジヨバンニは、いつかまた深く首を垂れて、(銀河鉄道の夜 254)

(011) 「基準になる面などから、奥までの距離が長い」という意味。(001) (002) における「ふかい」は、地面などの水平面が基準になり、それと垂直の方向で下向きにみた距離ということが必要条件であった。ここでは、その水平面が基準になるという条件に変化が生じている。

○毛布問屋は案外大きい店だった。奥行の深い、間口の広いこの店は、(放浪記 119)

3次元の物体(特に直方体のもの)に向かい合って、上下の距離は「たかい」「ひくい」左右の距離は「ひろい」「せまい」で形容されることが多いが、第3の次元、すなわち前後の距離は「ふかい」「あさい」で形容されることがある。そこで「奥行がふかい」「縦にふかい」のような結びつきが生ずる。上の例のばあい、建物の前面が基準になって、それと直角の方向に、すなわち水平の方向にみた建物の長さが「ふかい」で表現されている。

○この点、松竹は、映画＝演劇＝興行に徹した縦に深いコンツェルンである。(実業之日本 1956年12月1日 60)

の「ふかい」は「コンツェルン」という組織体を3次元のもののように見立てて比喩的に使われた例である。

○近づいて見ると岩穴は、奥が暗くて見えないほど深かった。(人間の壁・上 304) においては、岩穴はだいたい横の方向に存在するとしても、水平の方向であるともかぎらない。

○鶯色の眉毛の下に、眼は深く鋭く、羅馬鼻^{ローマノス}で、(多情仏心・前 137)

○「ふん」と云つた数馬の眉間には、深い皺が刻まれた。(阿部一族 66)

○釣り上がった口もと、それを囲んだ深いしわ(暗夜行路・前 8)

○彼が驚いて離させると、深い歯形がついてゐた。(雪国 33)

○トラックは深い鉄帽をかぶつた兵士が乗り、我々の潜む斜面に気紛れに自働小銃を打ち込んで行つた。(野火 107)

上のような「ふかい」においても、入り口のようなところから奥までの距離の大きい

ことだけが必要条件になっている。

○このお椀帽は、大きく深いツバをもっている。(トルーストーリー 1956年4月 60)

○南側二間は深い土庇どしはんの落縁おちえりで (多情仏心・前 53)

上のような「ふかい」は、帽子のツバ、家屋のひさしのように張り出したものの、へりからつけ根までの距離の大きいことを表わしている。

{012} 「入り口や境界から遠く、ずっと奥や内のほうに位置している」という意味。

{011} の「ふかい」は、もの自身のもつ量的な性質であった。次にここでは、ほかのものとの距離によって、あるものごとの位置を示す「ふかい」をみよう。この {012} の {011} に対する関係は、{002} の {001} に対する関係と同様である。

○天の川の一ととこに大きなまつくらの孔が、どほんとあいてゐるのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるか、いくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えず、(銀河鉄道の夜 315)

の「ふかい」は、「底」の「孔」からの距離を表わしている。

連用修飾語「ふかく」も、以下のようにさかんに使われる。

○日の光も射さぬ岩壁の奥深く、坐り続けた為であらう。(恩讐の彼方に 80)

○何様、洞窟の奥深く居られる故、しかとは判りませぬ。(恩讐の彼方に 83)

○犬は二足とも床下深く身を匿して居た。(田圃の憂鬱 59)

上の「ふかく」は入口から奥に向かって遠い位置に存在することを表わしている。

○母の床に深くもぐって行った時のことを思うと(暗夜行路・前 197)

○丑松は先に立つて、提灯の光に夜路を照らし乍ら、山深く叔父を導いて行つた。

(破戒 108~109)

○丑松は省吾と一緒に内陣迄も深くのほ上つて、(破戒 209)

○雲の奥深く分け入りながら啼く声を地上にあつて聞くのである(春琴抄 180)

上の「ふかく」は、空間的な移動を表わす動詞に対する連用修飾語となって、奥の方の位置まで進入することを表わしている。

○二名に手傷をおわせ、一名を斬り倒した時に己れも肩口を深く斬られたのである。

(落城 23)

○両手を深く先輩の脇の下へ差入れた。(破戒 293)

○彼は椅子の奥に深く腰を落してもたれ、(伸子・上 16)

○少し古びた畳に秋の朝日が深く差しこんでゐた。(雪国 112)

上の「ふかく」は、ある過程が、奥の方の位置において生起し、ないし奥の方の位置にまで及ぶことを示している。

○私の襟巻で首を深く捲いてやつて、(冬の宿 76)

○毛布を頭から冠つて深く身を包んで居る旅人の群——(破戒 228)

○深く外套に身を包んで、(破戒 104)

上の「ふかく」は、あるもののまわりを囲むような過程が行なわれる結果、そのものが外側から見て十分な距離が生ずることを示している。

○ただ男の本能のすべてを深く抱き込んでくれるのだ。(冬の宿 124)

○どこの家も深く戸を閉してゐるので、(冬の宿 75)

の「ふかく」も、上と同様の「ふかく」が主観的な色合いを増したものであろう。

○大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は(とゝろ 39)

○私達の足許に深く食ひこんでゐる小さな沢の(風立ちぬ 74)

○前を深くカットしたウイング袴カマ(主婦と生活 1956年6月付録 夏の奥様のスタイル集 34)

○衿ぐりをネックポイントで深くくります。(婦人生活 1956年6月付録 夏のスタイルブック 137)

上の「ふかく」は、ある線よりずっと内側に入り込んだ形を示している。

以上にみた「ふかい」においては、何かある基準になる面ないし線から内に向かってみた距離が問題であった。もっとも、中には基準になるものがかなり抽象的になったり、あいまいになったりしているものもあった。

なお、この〔012〕でみた「ふかい」のうちの連用形「ふかく」の中のあるものは、やや名詞的な性格を帯びて「奥まった位置」のような意味になっていく傾向を見せている。

○机の引出しの奥深くに投げこんだ。(冬の宿 173)

のように、「ふかく」が「に」を伴うに至れば上の傾向は形の上でもはっきりして行く。また、この〔012〕に属する「ふかく」は、「～の奥ふかく」「床下ふかく」「敵陣ふかく」などのように、ある空間的な範囲を示す名詞を先行させて、その領域での奥まった位置ということを示すものが多い。

〔02〕 「奥のほうまではいって行く、奥のほうから出てくる」という意味。

呼吸に関して「ふかい」が用いられている、次のような例がある。

○たゞ深い息を一つ腹の底まで嘸みくだすと、(多情仏心・前 320)

○息を切って、深い呼吸をしている、(暗夜行路・前 17)

口や鼻から吸い入れた空気が胸や腹のずっと奥のほうにまで達する感じ、または胸や腹の奥のほうから息が口や鼻のほうに出てくる感じを「ふかい」が表わしている。

「ふかい」と「ため息」「吐息」「嘆息」などの結びつきも上と同様の意味に解される。

○丑松は深い溜息うげを吐いて居た。(破戒 187)

○ホッと深い大溜息を吐いた時は、(破戒 340)

○深い悲しい溜息が思はず出るのを(或る女・前 115)

○思はず信之は、深い溜息をもらした。(多情仏心・前 365)

[1] [0]における基本的な「ふかい」の意味は、空間的な距離に関係のあるものであつた。「ふかい」は[3]以下で見ると、空間的なものとは関係のない、抽象的なことについても用いられる。いま、[1]では、「ふかい」が空間的なもの(ないし現象)について用いられてはいるが、[0]とは違って距離とは関係のない意味を荷なっているばあいを見よう。この[1]における「ふかい」は、視覚的に暗い感じ、濃い感じや、見通しのききにくい感じなどを伴っているように思われる。それは、[0]の意味の、空間的に「ふかい」ところが、外界からへだてられた、外光の当たらない暗いところであることが多い、ということに関係があるであろう。

[11] 草木などについて、密に多量にはえているありさま。見通しがきかないとか、暗い感じがするというようなニュアンスが伴うこともあるかもしれない。

○歩いてみると、樹木の深い東山は頭の真上にかぶさり、また人家の壁に挟まれた路地の奥に見えてゐた。(帰郷 243)

○そこいらはもうだいぶ木立が深いと見え、空気はひえびえとしてゐた。(風立ちぬ 73)

○熊笹はいよいよ深くなるばかりでとうてい進めない。(私の人生観 32)

○深い草の繁みがあり、水の流れる音がした。(野火 113)

[12] 霧・もや・水蒸気など、空中に浮遊する気体状のものについて、その濃度が大きいありさま。視界がきかないというニュアンスが伴うこともあるかと思われる。

○船が氷山にぶつつかつて一べんに傾き、もう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かつたのです。(銀河鉄道の夜 290)

○朝じめりのした街道の土を踏んで、深い霧の中を辿つて行つた時は、(破戒 141)

○濃霧の深い木立際^{こたぢぎは}の農家の土間から、釜の下を焚きつける火の影が、ちよろちよろ見えたり、(あらくれ 54)

○海のうへにも深く^{もや}がおりてゐた。(冬の宿 156)

○外はもうとつぶり暮れて、立昇つた深い水蒸気のなかに、山の手線の電燈や、人家の灯影^{ほかげ}が水水して見えた。(あらくれ 57)

[13] [11][12]における「ふかい」は、草木・霧などのものを表わす具体名詞と結びついてた。次にここでは、色・影などの視覚的な現象について用いられる「ふかい」を見よう。まず色について用いられた「ふかい」の例をあげよう。

○古九谷の鉢の深い青色(主婦の友 1956年10月 42 小倉遊亀「生活のなかの生花」)

- 伴子の前に立つた左衛子は、黒いくらゐに紺の深い結城がすりの衾に帯を結んでゐて、昨日とは別人のやうだつた。(帰郷 176)
- 一日々々と深くなってゆく若葉の緑に目を休めては書いた。(くれない 36)
- 殊に夏の緑の深い頃は。(武蔵野 27)
- 西の空は急に深い焦茶色に変わったかと思ふと、(破戒 59)
- 遠く深く紅を流したやうなは、沈んで行く夕日の反射したのであらう。(破戒 249)
- 紅い色が今度のは非常に深い落着いた色だぜ。(田園の憂鬱 111) <バラの花の色について>

上の例にみられる「ふかい」は、色について用いられる「こい」と類義的である。上の例を見渡すと、たとえば「帰郷」の「黒いくらゐに紺の深い」のような表現が示唆しているように、「ふかい」は「こい」色であると同時に、黒みがかつた暗い感じの色である傾向があるのではなからうか。「濃い明るい色」はごく普通にあり得る結びつきであるが、「*深い明るい色」は成り立ちにくいのではないだろうか。

次に「影」「陰」「やみ」などが濃く暗いという意味に使われる「ふかい」の例をあげよう。

- 夕ぐれにははまだ少し間があったが、影は深くなっていて港の一番美しい時であった。(小説春秋 1956年9月 282 戸川幸夫「消えた娘」)
- 暮れ易い日は、もう、壁や障子の隅隅に、深い、暗い影を畳みかけた。(末枯 71)
- 円覚寺門前の大きな杉の林が、頭の上にかぶさつて、日を遮つて深い影を抱いてゐる。(帰郷 117)
- 陰深き木立ちあり。(出家とその弟子 123)
- ひつそりした往来には暗い蔭りが深く広がつてゐる外には何も無い。(桑の実 93)
- その光りの中には松葉が敷きつめられ、島の深い夕闇がこの一点の仄明りを囲んでゐた。(潮騒 48)

〔2〕〔2〕以下は、抽象名詞や精神活動などを表わす動詞と結びつく「ふかい」の意味を見よう。まず〔2〕では、時を表わす名詞と結びつく場合の「ふかい」の意味を見よう。

- 何時しかもう深い秋にも化つて居た。(田園の憂鬱 109)
- 南国も、既にふかい秋に覆われていた。(明星 1956年11月 315)
- 木曾の秋は深くなり、(小説倶楽部 1956年10月 83)
- かうやつていよいよ冬も深くなるのだ。(風立ちぬ 157)

上は季節を表わす名詞と「ふかい」との結びつきであるが、「時期が進んでいる。ふけている」という意味を表わしている。資料内では「秋」の例が多く、ほかには「冬」の例が上記の「風立ちぬ」の1例だけあった。俳句の季題には「秋深し」「冬深し」の

ほかに「春深し」「夏深し」もあるが、一般語としても「春がふかい」「夏がふかい」という結びつきはありうるだろう。ただし、人間の精神を沈潜的ならしめるような秋や、寒さが人間を閉じこめるような冬と比べれば、明るい盛んな時期というイメージを持つ「夏」などは、「ふかい」とは一般語としてはやや結びつきにくいのではなからうか。

○そとは鐘の音だけが走つてゐる不気味な暗い深い夜であつた。(闘牛 102)

○夜は深かつた。往来を通る人の影も無かつた。(破戒 294)

上のような「夜がふかい」という結びつきも「秋がふかい」などと同様に解し得るが、「昼が深い」という結びつきは一般語としてはやはり考えにくいようだ。(俳句などにはあり得るかもしれないが。)なお、「夜がふかい」のばあい、[13] で見た「やみがふかい」ともイメージ的なつながりがあるかと思われる。

[3] 「ふかい」は、ものごとの「関係」に関連する抽象名詞、「関係」「つながり」「縁故」「関連」「仲」「交際」などと結びついて、「密接な」「したい」などの意味合いを帯びる。

○私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立つて、(こゝろ 98)

○木谷と曾田の間には深いつながりができたようだった。(真空地帯・上 124)

○縁が深かったのだね。(出家とその弟子 112)

○私はそれが先生と深い縁故のある墓だといふ事を知つてゐた。(こゝろ 42)

○この社歴でもわかる通り、帝国人絹との関連はきわめて深く、(東洋経済新報 1956年9月29日 71)

○其様に深い懇意な仲で無くても、(破戒 236)

○互ひに同じ運命を憐むといふ其深い交際に入るであらう。(破戒 103)

○私は女といふものに深い交際をした経験のない迂闊な青年であつた。(こゝろ 49)

上の諸例からもわかるように、こういう「ふかい」は人間どうしの間の関係についても、それ以外の関係についても用いられる。

この意味での「ふかい」は、上のように抽象名詞と結びつくばかりではなく、その連用修飾用法も、次の例のように存在する。

○同僚の教授連とも深くは交らず、(つゆのあとさき 53)

○このような差は、おそらく今日の社会の特定な構造と男女の役割と深く結びあっているからだ。(婦人公論 1956年10月 104)

○民族運動は常に外国の帝国主義支配の支柱となっている国内の反動階級に対する階級闘争と深く結びついている。(中央公論 1953年7月 40)

人間どうしの関係のうち、特に男女関係について用いられた「ふかい」の例を少し取り出してみよう。

○あなたと民子がそれほど深い間であつたとは知らなかつたもんですから。(野菊の

莖 55)

○こうしてあるちっけな飲み屋のC子と何となく深い仲になりました。(娯楽よみうり 1956年3月16日 31)

○フルフルは(中略)彼の後援をしているうちに、深い関係におちてしまった。(若い女性 1956年8月 169)

上の例に見られるような「AとBが深いなかだ」「Bと深いなかになる」「深い関係におちる」などの言い回しは、主として男女関係にのみ用いられるものであろう。次の例のような、「深い関係になる」の省略的表現ともみられる「深くなる」という結びつきも、男女関係にのみ特有的に用いられるものであろう。

○ニーヴェスが札つきの^わる(中略)と深くなってゆくの(婦人公論 1956年2月 183)

[41] 「ふかい」は感情を表わす抽象名詞と結びついて、その気持の程度が著しい状態をあらわす。また、連用修飾語「ふかく」は感情に関する動詞と結びついて、ある気持を著しく抱いたり、ある気持に著しく動かされることを意味する。

いま便宜上、ある感情の程度が著しい状態として概括したが、実はそれだけではまだ不十分な説明である。純粹に尺度的な程度の大きさだけに還元しきれない質的なものが存在する。たとえば、「ふかい愛情」も「つよい愛情」もともにわずかな愛情ではなく、程度の著しい愛情を表わしている点では共通であるが、質的な違いも感じられる。もっとも、「ふかい愛情」という表現が、どんな場合でも「つよい愛情」とは微妙に異なる質的なものを保っているとは限らず、類型的な表現などでは、「ふかい」を単に程度の著しいことと解釈して大過のない場合もあろう。

いま述べた、感情を表わす語との結びつきにおける「ふかい」の、単なる尺度的なものに還元しえない質的なものを、明確に示すことは容易でない。それは、「ふかい」と結びつく感情語の種類によっても、微妙な差を生ずるのであろう。たとえば、「ふかい愛」と「ふかい憎しみ」とにおける、「ふかい」がもつ尺度性以外の質的なものは同一ではないであろう。しかし、感情語と結びつく「ふかい」は、一般に、その感情が一時的にのみ激しく、外に向かつてはなばなく表わされるような性質のものではないであろう。心の奥底においてもえるような感情であろう。そして、そこには、空間的な「ふかい」の基本的意味が、大なり小なり媒介表象として働いているものとみられる。

まず、感情の種類別に、2, 3例ずつを挙げてみよう。「ふかい」が述語としてあるいは連体修飾語として使われた例と、「ふかく」の形で連用修飾語として使われた例とが、資料内にあるばあいは、双方を並行的に挙げることにしよう。

以下の感情の種類分けは、まったく便宜的なもので、また単に感情と呼ぶのは適切でないとも考えられるが一応ここに所属させたものもある。

(愛)

○彼はこの花にのみはかうして深い愛を捧げて来て居た。(田園の憂鬱 31)

○併し深く身を受ずる事は靈を大切に守る事である。(青銅の基督 91)

(憎しみ)

○自分に深い憎しみを持てる母親の暴い怒りと惨酷な折檻から脱れるために、
(あらくれ 6)

○僕だつてそれほど深く憎んでゐるわけでもない。(つゆのあとさき 96)

(喜び・楽しみ)

○どうしてこんなに深いよろこびが与へられてゐるのだらう。(友情 89)

○極りがわるい感情の中には何とも云へない深き愉快を湛へて居る。(野菊の墓 22)

○生も深く楽しむに足らず、(主婦と生活 1956年11月 119)

(悲しみ・苦しみ)

○そして其の事は彼に勇氣と深い悲しみとを与へた。(青銅の基督 57)

○死も深く悲しむに足らず、(主婦と生活 1956年11月 119)

○職業が職業だけに、彼の苦しみは深かつた。(波 106)

○あなたは私などの知らない深い苦しみを持っていらっしゃいます。(出家とその弟子 101)

(不安)

○その問題を笑殺してしまはなかつたことは、彼女にとつて深い不安であつた。(伸子・上 197)

○斯ういふ父の顔には深い掛念の曇がかかつてゐた。(こゝろ 111)

(怒り)

○伸子は、深い憤りを感じながら(伸子・上 145)

○人妻と密通して世間を憚らず一家を構へたのを知つて、深く憤りはしたもので、
(つゆのあとさき 53)

(恨み)

○だから、その恨みは一層深かつたのである。(映画之友 1956年11月 88)

○旧鳩山派がいだく、吉田憎しの宿怨は深い。(文芸春秋 1954年5月 74)

(恐れ)

○どんなに丑松は胸の中に戦ふ深い恐怖と苦痛とを感じたらう。(破戒 161)

○シーリムとツールとは、此の事を伝へ聞いて深く恐れ、(日本及日本人 1953年9月 116)

(憂い・悩み)

○時々深い憂愁の色が其顔に表はれたり隠れたりした。(破戒 177)

○私のとなりの御隠居は、胸に深い憂悶でもあるのか、(富岳百景 62)

○父は一人息子の前途を深く案じるといふ風で、(破戒 12)

○又彼の政党政派の宿弊たる政権掠奪戦の陋劣を深く憂ひ、(日本及日本人 1953年8月)

108)

- 次第に深い失望と哀愁のなかへ心が浸されて行くのを感じた。(あらくれ 250)
- まもなく、あき子は深い絶望と孤独に包まれて家を飛び出した。(婦人朝日 1956年7月 150)
- 一時は深く絶望して何事も皆自分が為した^{あやまち}過の報いとのみ思ひあきらめ、(つゆのあとさき 92)

(惜しむこと)

- 自由の中国的な発現が見逃されたのは著者のために深く惜しむところである。(改造 1953年8月7)

(悔やむこと)

- 市九郎は、深い悔恨に囚はれて居た。(恩讐の彼方に 60)
- 自分は、若いいのちのこういう終焉を深く悼むものだ。(むらぎも 52)
- 深く^{としごろ}年来の不幸を悔いて、責て跡に残つた母^{せめ}だけに最う苦勞を掛けたくないと思ひ、(平凡 138)

(恥じること)

- 良心の苦を捨てて現前の世界と妥協する気樂さを択ぶことはもとより深き恥辱であるが、(人格主義 165)
- 法廷に引出されて瀆職の罪を宣告せられながら胸中には別に深く愧る心も起らなかつた。(つゆのあとさき 80)

(うらやみ)

- 斯う嘆息して、丑松は深く銀之助の身の上を羨んだ。(破戒 163)

(あわれみ)

- 自然と外部に表れる深い^{あはれみ}哀憐^{ところ}の情緒を寄せたのである。(破戒 301)
- 敬之進の境涯を深く憐むといふ丑松の真実が知れてから、(破戒 93)

(思いやり)

- 思いやりの深い声が心を突いたのだ。(家の光 1956年8月 107)

(親しみ)

- 不検束な父親に対して、不思議に深い親しみをもつてゐた。(多情仏心・前 261)

(信じること)

- 各国民に、深い信頼をもってよびかける。(平和 1953年12月 18)
- いづれも忠利の深く信頼してゐた侍共である。(阿部一族 38)
- 今では自分ながら深く信ずる所があるやうになつてゐる。(つゆのあとさき 48)

(疑い)

- 暇をとると云ひだせば、尚更疑ひが深くなるばかりだし、(多情仏心・前 307~308)
- 多計代は深い疑ひを声^{あはは}に現して云つた。(伸子・上 142)

- その第一審に深い疑惑をさし狭み、(中央公論 1954年2月 18)
- こわがりもし、猜疑心もふかくなります。(婦人公論 1956年5月 178)
- 科学の官僚統制に深い不信をもっていることも、(中央公論 1953年12月 143)
- 丑松は深く先方の様子を疑つた。(破戒 215)

(感謝)

- また、わざわざ本部から来ていただいた庄司先生にも、ふかく感謝したいと思いません。(人間の壁・上 180)
- 何も云わない主人に深く感謝と信頼を抱き乍ら口には出しません。(小説春秋 1956年8月 289)

(尊敬)

- 蘆花は深い敬意を払つた。(群像 1956年10月 281)
- 坂西女史は私が深く尊敬している人々の一人である。(ニューエイジ 1953年10月 65)
- 米国文化を深く尊信し、(改造 1954年6月 163)
- 深くその遺徳を景仰し、(日本及日本人 1953年8月 103)

以上の見渡しによって、「ふかい」は種々さまざまな感情を表わす名詞や動詞と広く結びついて使われることがわかる。そして、「恨みがふかい」「ふかい恨み」、「ふかく恨む」とか「絶望がふかい」「ふかい絶望」、「ふかく絶望する」とかのように、述語ないし連体修飾語としての用法と、連用修飾語としての用法とが並行的に存在するばかりがかなり多いようである。

以上に、各種の感情などを表わす語と「ふかい」の結びつきを少数例ずつあげて見渡したが、その中で用例が比較的多く集まった「愛」などに関するものについてだけ、もう少し詳しくわしくみておくことにしよう。

男女間の愛などに関する動詞の連用修飾語として「ふかく」が用いられたものは、「ふかく愛する」のほか、次のような動詞との結びつきの例が見られる。

- 離れることも出来ないほど深く愛し合つてゐると云ふ有様は。(伸子・上 204)
- かくまでも深く恋させて下さった神よ、(友情 38)
- 私はあの人があなをどんなに深く思つて居るかはよく知ってゐる……(田園の愛戀 11)
- 君江は一人の男に深く思込まれて、(つゆのあとさき 89)
- 深く惚れ込むと云ふやうな気持になることは稀だつたし、(多情仏心・前 293)
- だんだんに深く惚れ合つて行くやうな関係なら、(多情仏心・前 280)

「愛」以外で意味上は「愛」に近い名詞(句)と「ふかい」とが結びついた例には、次のようなものがある。

- 公開することの出来ない愛情は、それだけに切なく深いものがあると思います。(宝石 1956年5月 95)

○例へばここに一人の青年が一人の少女に深き恋愛を感じずると仮定する。(人格主義 31)

○染を愛している自分の心が深いを感じとった。(真空地帯・上 106)

次にあげる例の「深く広い愛情」は「ふかい」とともに、「ふかい」と同じく空間的な量の一種を表わす「ひろい」が「愛情」の修飾語として用いられており、「愛情」が空間的な延長をもっているかのような表現だといえよう。

○形にも行動にも現われない愛情、それでいて前に書いた在り方よりずっと深く広い愛情も、その人間によってまちまちであるという事を私達はもっと静かに考えるべきである。(それいゆ 1956年40号 28 日高鏡子「愛情」)

これは実は、「深く広い愛」のようなばあいだけでなく、「深い愛」のような場合にもつきまわっている問題である。「ふかい」に感情の程度が著しいという意味を一応認めて、空間的な量を表わす「ふかい」の基本的な意味と別に扱っているものの、こまかに見てくると空間的な「ふかい」の比喩である場合、空間的な「ふかい」を媒介として感情の程度を表わしている場合、それを媒介とすることなく直接に感情の程度・ようすを表わしている場合など、さまざまな段階が存在するだろうと考えられる。そしてさらに細かくみれば、同一の表現でも、ある人は比喩として受け取り、他の人は比喩としてでなく受け取るというような差違もあるのではなからうか。

以上、特定の種類の感情を表わす語と結びつく「ふかい」を見渡したが、次に、「感激」「感動」「印象」など、はっきりした特定の感情ではなくやや一般的な感受を表わす語と結びつく「ふかい」の例を見よう。

○実之助は、深い感激を懐きながら、(恩讐の彼方に 90)

○読み耽つて心に深い感動を受けたこと、(破戒 131)

○女子中学生の詩集「めぐみ」を読んで深く感動した。(ニューエイジ 1953年10月 65)

○語り合って深い感銘を与えられた人々について、(中央公論 1953年12月 79)

○信之はなんとも云へない深い感慨に撃たれた。(多情仏心・前 265)

○一つ一つのことがこんなに印象が深いのだから忘れることもないだろう、(若い女性 1956年8月 230)

上のような結びつきが、一語化して、「感銘深い」「感慨深い」「印象深い」のような複合的形容詞も生じている。

次に例をあげる、「ふかく感ずる」のような結びつきも、上と同じ類に入れて考えられる。

○母が死んでからは、葉子は全く孤独である事を深く感じた。(或る女・前 160)

○私はたゞ人間の罪といふものを深く感じたのです。(こゝろ 283)

次にあげる例は短歌の批評で、かなり特殊な「ふかく」の例であろうが、「感情ふか

く」というような意味であろう。

○父の祈り、己が希望、その二つを空しくしていることを、あらわな感情語を入れな
いで、かえて深く歌っている。(主婦と生活 1956年7月 372 宮終二選「短歌」欄)
感情を傷つけ(られ)る程度が著しいという場合にも「ふかい」が用いられる。

○謙作の心に受けた傷は案外に深かった。(暗夜行路・前 73)

のような段階では、肉体に受ける傷の深さへの比喩、すなわち〔011〕の意味の比喩的用法と解しうる余地もあろう。しかし、

○殊に葉子の心を深く傷けたのは、事務長の物瀬げな態度だった。(或る女・前 162)

○市九郎は女の言葉から、深く傷けられた。(愚管の彼方に 67)

のような例では、「傷つける」は「傷を負わせる」という原義から「誇り・感情などを害する」という意味に転じ、「ふかく」はその程度の著しいことを示しているものと解せられよう。

〔42〕「興味」「関心」などの語と結びついて、その程度の著しいことを示す「ふかい」がある。たとえば、

○せり込んで行く多くの同業者と劇しい競争を試みることに、深い興味を感じた。
(あらくれ 230)

○他の作品に比べて、これには曾野さんが、もっとも知的な作品をものしようとした野心のほどがかがえて、そんな意味では興味が深い。(知性 1956年11月 102)

○しかし彼は互に対立していた林中尉と中堀中尉のいずれの側にもそれほど深い関心
をもちしなかった。(真空地帯・上 165)

○彼は、フランスでは比較的例の少ない経済史の比較研究にも深い関心を払っている
一人だからである。(改造 1954年6月 57)

のような例がある。この類は、感情を表わす語の類に含めることは無理であろうし、次に述べる〔5〕の知的な精神作用の要素も含まれている場合があろう。しかし、次に述べる理由を参考として、一応、感情を表わす語のほうにやや近いとみて、〔4〕の中で扱うことにした。その理由とは、〔51〕のおわりのほうでも述べるが、情意的な語のばあいは「強く愛する」「強い喜び」「強い恐れ」など、「つよい」とは結びつくが「くわしい」とは結びつかない傾向があり、〔5〕にあげるような知的な作用を表わす語の場合は、「くわしく考える」「くわしい研究」など、「くわしい」とは結びつくが「つよい」とは結びつかない傾向があって、「興味」「関心」などは、この観点からみて、前者のグループに入るとみられることである。すなわち、「強い興味(をいやく)」「強い関心(を示す)」などは普通の結びつきとして存在するが、「*くわしい興味」「*くわしい関心」などは普通ではない。

「興味が深い」という結びつきは、一語化して「興味深い」という複合形容詞をも生

み出している。参考までに、「興味深い」の用例もあげておこう。

○転期に立つ西欧の動向を知る上にも、きわめて興味深いものである。(中央公論
1956年6月30)

○森繁久弥さんの「こじき袋」を非常に興味深く読んでいます。(週刊読売 1956年2月
12日 81)

[51] [4]は情意的な精神作用に関して「ふかい」が用いられたものであったが、ここでは知的な精神作用に関して用いられた「ふかい」を見よう。まず、代表的な例として「ふかく考える」「ふかい考え」のような結びつきの例を見よう。

○深く考へれば考へるほど、丑松の心は暗くなるばかりで有つた。(破戒 286)

○すべて確実なものは不確実なものから出てくるのであつて、その逆でないといふことは、深く考ふべきことである。(人生論ノート 112)

○非凡な人も、天賦^{てんぷ}の力量を、深い考えもなく試すことから始めるものである。(私の人生観 139)

こういう場合、「ふかい」は、思考がなおざりでなく、十分に考えめぐらされるありさまを意味しているものと解される。そして、「くわしく考える」の「くわしく」に近い場合もあるが、やや相違のある場合もあるように感じられる。

次にあげる例も、上の「ふかく考える」に準ずるものとみてよいであろう。

○東ヨーロッパの旅の見聞と体験から、安部先生は前号に引続いて特に本号では、日本の現実を深く考察されながら、この旅行記を完結されました。(知性 1956年10月
268)

次にあげるような、「知る」「理解する」「認識する」などを修飾する「ふかく」も、上の「ふかく考える」等とかなり近い位置にあるものであろう。

○例へばかれは東洋哲学を深く知つてゐないのに、自分は知つてゐると思つて傲慢であるとか、(心 1953年11月 28)

○これを最も深く理解したのがニーチェであつた。(人生論ノート 103)

○しかしながらただ感傷に浸つてゐては、何一つ深く認識しないで、何一つ独自の感情を持たないではねばならぬであらう。(人生論ノート 137~138)

次にあげるような、名詞と結びついた「ふかい」も、知的な活動の結果や知識の累積がおびただしく、認識が対象の奥まで達していることを表わしている。

○そこにはサル^{サル}の社会の本質的な諸問題についての深い考察があつた。(高崎山 56)

○沖安海や大槻文彦博士は、深い考証に基づいて、現在の遠田郡こそそれに該当し、(中略)であると論断した。(日本及日本人 1954年1月 90)

○何らか芸術家その人の深い思想が表出されている限り、(哲学以前 147)

○聞けば聞くだけ深い教えてございます。(出家とその弟子 77)

次にあげる「ふかいたくらみ」とか、「ふかい陰謀」「ふかい計略」のような結びつきを、ここに位置づけうるか問題がある。もし、位置づけるとすれば、考えめぐらされたたくらみなどの性質が、狡猾であるとか、対外上秘密的であるなどのニュアンスが、「ふかい」のここの意味に加わってきているのかもしれない。

○その結果は葉子が何か恐ろしく深い企みと手練てくだを示したかのやうに人に取られてゐた事も思つた。(或る女・前 196)

ここでは、かなり知的な性格の精神活動を示す語と結びつく「ふかい」を主として見たが、「思う」のように、知的な面にも情意的な面にも使われる動詞と結びつく「ふかい」の場合、〔4〕か〔5〕の意味かを決めることはきわめてむづかしい。たとえば次のような例がある。「彼」とはキリストをさしている。

○彼は友の心事を思うて同情し給うとともに、さらに深くは、人の世の罪と不信の心、——それは遂に彼をして死に至らしめるところのものであった——それを思うて涙を流し給うたのであろう。(ニューエイジ 1954年4月 76)

〔4〕と〔5〕を分けるべきか否かも実は問題のあるところで、合わせて広く精神活動としてくるといふ方法も考えられる。しかし、〔4〕にあげた名詞や動詞は、「強い悲しみ」「強い喜び」「強い不安」「強く憤る」「強い信頼」「強く愛する」「強い感激」「強い印象」「強く感じる」などのように、「つよい」とは結びつくものが多いが、「くわしい」とは結びつかない。これに対して、〔5〕にあげた名詞や動詞は、「くわしく考える」「くわしく考察する」「くわしく知る」「くわしい考証」のように「くわしい」とは結びつくものが多いが、「つよい」とは結びつかないものが多い。(「つよく認識する」のような例もあるが。)このような言語的事実を参考にして、〔4〕と〔5〕とを一応分けて扱うことにした。

〔52〕 「意味」「わけ」「理由」「原因」「事情」「聞く」などと結びつく「ふかい」。これらをまとめる十分な根拠があるかどうかはまだ明らかでないが、これらの結びつきにおける「ふかい」はしばしば「くわしい」「こみいった」「たちいった」などのようなニュアンスを帯びると解される特徴がある。

〔521〕 質問する意味の「聞く」、「言う」などの動詞に結びついて、「くわしく」「立ち入って」のような意味を表わす「ふかく」がある。

○叔父は蓮太郎のことに就いて別に深く掘つて聞かうとも為ななかつた。(破戒 139)

○奥様は別に深く掘つて聞かうともしなかつた。(破戒 8)

上の2例は、同じ作者の、ほとんど同じ文脈であるが、「深く掘つて聞く」は「掘つて」を原義的に解し「深く」を空間的な意味に解し「深く掘つて」全体が「聞く」よう

すの比喩として働いているとも見られよう。また、「掘って」が「穿鑿して」のような意味に転じていると解しうるならば、「深く」もこの「くわしく」のような意味に解されることになる。上の2例をいずれに解釈するのが適当であるかは別として、前者の解釈におけるような、空間的な比喩を媒介として、以下のような「ふかく」の意味が成立したのであろう。

○然し薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくない様だつたので、私の方でも深くは聞かずに置いた。(こゝろ 33)

○猶深く聞いて見ると、これから市村弁護士は上田を始めとして、(中略)政見発表の途に上るのであるとのこと。(破戒 101)

○さあ、僕は河南さんとこの家の関係をあまり深く聞いていないし、(宝石 1956年2月 266)

上の3例におけるような「ふかく」は、ごくこまかなニュアンスは別として、「くわしく」「立ち入って」のような意味に解しうる。次に示す2例も、同様である。

○その男が何か深く聞知らうとすればいよいよ堅く口を閉ぢて何事をも語らない。
(つゆのあとさき 37)

○深くも追及しかねるので臍に落ちないながら一箇月程捨てゝおくうちに最早や事実を蔽ひ隠せぬ迄になつた。(春琴抄 166)

「深く聞く」に対応する「深く言う」の類の例として、次のようなものがあったが、前者に比べてずっと少ない。

○母は一通り二人の余り遅かつた事を咎めて深くは言はなかつたけれど、常とは全く違つてゐた。(野菊の墓 32)

○ともに大いに学ぶべき特色を有するが、今は深く立ち入るまい。(哲学以前 200)

○この自分に取って返えて、深く自己の立場を説いて見たいと思うのである。(大法輪 1956年12月 18 伊藤古鑑「仏教的立場の人生観」)

おわりの大法輪の例は「深く説く」を「深く言う」に準ずるものと形式的に解釈して、ここに一応あげたけれども、これは適切な解釈ではない、あるいは不十分な解釈であるという危険も大きいであろう。

[522] 「理由」「わけ」「事情」「原因」などの抽象名詞と結びついて、「立ち入った」「こみ入った」のような意味を表わす「ふかい」がある。

○二人とも私には殆んど何も話して呉れなかつた。奥さんは慎みのために、先生は又それ以上の深い理由のために。(こゝろ 34)

○とも角、私がどちらの道を歩くかといふことは、深い理由なんかななくて、その時その時の気まぐれで、一緒に帰る友人によつても変つて来ることであつた。(文芸 1956年3月 176)

○深いわけを知らないセドリックは、小鹿のように走っていきました。(婦人生活 1956年2月 263)

○深い事情は何も訳かずにしまったが、青森から上京してきて、友だちとでも明日の夜観劇する予定になっていたのかも知れない。(傑作倶楽部 1956年4月 68)

○家庭の一員として暮らした事のない私のことだから、深い消息は無論解らなかつたけれども、(こゝろ 25)

○何かそこにもつと深い^{いくたて}経緯でもあるのか、それは信之には解らなかつたけれども、(多情仏心・前 189)

○「実は——其には他に深い原因が有るんです。」(破戒 265)

[523] 「意味」などの抽象名詞と結びつく「ふかい」がある。場合によって、そのもつニュアンスは一樣ではないようであるが、「こみいった」「複雑な」「重大な」「深長な」などに近い性質の意味をになっているように考えられる。

○今もお島は、何の気なしに聞過してゐた姉の話が、一々深い意味をもつて、気遣はしく思ひ浮べられて来た。(あらくれ 83)

○「さき程先生の云はれた、人間は誰でもいざといふ間際に悪人になるんだといふ意味ですね。あれは何ういふ意味ですか」

「意味といつて、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理窟ぢゃないんだ」(こゝろ 80)

○かの女の若々しい心は色彩ある恋物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深い深い意味を以て輝きわたつた。(蒲団 7)

以上の諸例のように、ある言語表現や表情のさしている内容という意味に解される「意味」を修飾している「深い」はこの例にはいると考えられる。しかし、これらの「意味」が、もし「表現の意図・動機」のようにも解されうるとすれば、その場合は「深い」は、「深い理由」などにおける「深い」と近くなり[522]と別に立てる根拠がはっきりしなくなるかもしれない。しかし、

○「言霊」ということばにはたしかに言い知れぬ深い意味がこめられていると思うのだが、(短歌 1956年4月 22 藤原 定「言葉への愛・詩への愛」)

○私は之を日本国民の二千年來此生を味うて得た所のものが、間接の思想の形式に由らず、直に人の肉声に乗つて、無形の儘で人心に來り廻るのだと言つて、分명한事を不分明にして其処に深い意味を認めてゐたから、(平凡 119) <之>とは俗曲>におけるような「ふかい」は、「深遠な」のような意味に解するのが自然であろう。そして、「深い理由」などの「ふかい」とはやや意味の分化が認められよう。

○聖書といふものが、恐ろしくも深く莊嚴な言葉で一杯になつてゐるものだといふことを、(冬の宿 37)

○一概に平凡と擯斥けた信州の風景は、「山氣」を通して反つて深く面白く眺められるやうになつた。(破戒 122)

上の2例には「意味」という語は表面に出ていないが、「ふかい」に「意味がふかい」の意がこめられていると解しうるであろう。

〔6〕 以上の分類のいずれにも属させることができずに残っている「ふかい」の用法・用例をここに並べて示すことにしよう。その意味は、およそ「程度が著しい」ということでおおうことが許されるだろう。

〔61〕 「趣き」などについて用いられる「深い」がある。これは、〔523〕の「深い意味」などにやや近い点もあるが、ものごとのもつ情趣・味わいという、主観的・情意的側面の著しいものとして別扱いにした。

- これは又た人跡絶無の大森林であるから其趣は更に深いが、(武蔵野 13)
- 信州の景色は(中略)成程、大きくはある。然し深い風趣に乏しい(破戒 122)
- 小さな物語、而も哀れの深い物語、(武蔵野 30)
- 器械的な回向と誦経との声、悲嘆のある胸には其もあはれの深い挽歌のやうに響いた。(破戒 111)
- 聖書はなかなか味の深いことを書いてある。(冬の宿 103)

〔62〕 「静かさ」「沈黙」という、静的な意味・イメージを持つ語と結びついて、その程度がいちじるしく、容易には破られないようなようすを表わす「ふかい」がある。

- 彼等の袂は、それ以外何等の物音も聞えない、また誰ひとり人影もないあたりの虚無に、一定のリズムでより深い静けさを刻みつけた。(真知子・前 123)
- 爆音が遠のくと、一層深い静けさがきた。(中央公論 1956年3月 311)
- 深い静寂の中に、ぼつんとホテルが立っていた。(小説新潮 1956年6月 299)
- 不意に、五人の一座に來た沈黙は深かつた。(多情仏心・前 106)
- 暫くの間は深く沈黙を守つてゐたが、(或る女・前 28)
- どちらも急に深く沈黙した。(帰郷 132)

こういうばあいでも、「(空間的な意味での)ふかい感じがする」という、基本的な意味における、空間的な形象が大なり小なり生きているのではあるまいか。静かさと反対に、動的な意味を持つ語については、「*ふかいやかましき」「*ふかいさわぎ」のような結びつきは考えられない。波の立ちさわぐ浅瀬とことなつて、深い淵は静かであるとか、空間的に深いもの、深いところは、静かさのイメージを持ちやすいといえないだろうか。

〔63〕「眠り」について用いられる「ふかい」があり、これは小説の用例がやや多く集まった。この場合は、対義語として「浅い眠り」「眠りが浅い」「浅く眠る」など、「あさい」が存在する。

○深く眠つた風を装つてゐたものの、たうとう夜明け頃まで熟睡はできなかつた。

(冬の宿 141)

○私は夜は深く眠るためか、彼の呻吟をきいた事もなかつた。(冬の宿 51)

上の2例では「ふかく」が動詞「眠る」の連用修飾語となっている。これと平行的な、名詞形「眠り」と結びつく「ふかい」の例を以下に見よう。

○「あなた」

と小さい震へ声で呼んで見たが男は深い眠りの中にあつた。(或る女・前 237)

○父も深い眠りの裏うらにそつと置かれた人のやうに静にしてゐた。(こゝろ 135)

上の2例は「眠りの中」「眠りのうち」という形式をとっており、「眠り」を空間的なものにとえる要素が存在している。これに伴って「深い」にも、空間的な意味の「深い」の要素もなにがしか残存しているのではないかと考えられる。

○朝は女がまだ深い眠にあるうちから床を離れて、(あらくれ 182)

の「深い」もほぼ同様の事情にあると見られる。

○何時とはなしに夢もない深い眠りに陥ってゐた。(或る女・前 156)

○けれども深い眠りに陥つて彼の女は、身じろぎもしなかつた。(田園の憂鬱 103)

○表通りをトラックが走り出したころ、琴はふかい眠りに落ちてゐた。(中央公論 1954年2月 277)

上の3例におけるような「深い眠りに陥る」「深い眠りに落ちる」という言い方の存在も、空間的な比喩の要素の存在を裏づける一つの事実であろう。そして「陥る」「落ちる」という動詞の意味との関係から考えると、「深い」は〔01〕に示した奥行などの距離ではなく、〔00〕に示したもっとも原義的な下方への距離の大きいことを表わす「ふかい」が、この比喩において働いていると見ることができる。

以上、「深い眠り」という結びつきにおける、空間的な比喩の要素の存在する可能性について考えてみたが、そういう要素が存在しないで「熟睡」に近いと考えても多少も差支えない例ももちろん存在する。

○葉子はふと深い眠りから蒸し暑さを覚えて眼を覚ました。(或る女・前 98)

の場合、「深い眠り」に空間的な比喩の要素が存在すると仮定する必要はないであろう。「眠り」との結びつきにおける「ふかい」に、空間的な「ふかい」とは独立した転義を一応認めることは自然であろう。

なお、ここで述べているような「深い」の用法は、やや文学的・技巧的なものではないかとも疑う余地はあるかもしれない。

○おお！深い眠、おれはそれを知らなくなつてからもう何年になるであらう？（田園の憂鬱 7）

のように「深い眠り」が独立語として提示的に用いられた例などは、日常的な日本語とは隔たりが感じられ、欧文脈からの影響があるのではないかと考えさせられる。しかし、「眠りがふかい」「眠りがあさい」などの用法は、かなり日常語的にも用いられているだろうと推測され、あまり特殊な用法とは考えなくてもよいであろう。

〔64〕 「秘密」「不思議」など、かくされたもの、わかりにくいものなどについて、そのはかり知りがたいようすを表わす。

○かくの如く歴史は情念の中から観念もしくは理念を作り出してくる。これは歴史の深い秘密に属してゐる。（人生論ノート 86）

○かくて、踏み外すことが高みに推し進める力となるのは、人生の深き不思議の一つである。（人格主義 172）

「深いナゾに包まれた事件」「深い神秘をたたえた微笑」などのような言いかたもここに属させることができよう。

空間的に深くあるものは、外から見えにくいものであることが多いので、秘められたもの、知りがたいものが「ふかい」の形象と結びつくであろう。

〔65〕 なお残されている「ふかい」の例を、特に順序も立てずに記しておこう。

まず、「罪が深い」という結びつきがある。これは「罪が重い」との異同が問題になる。「罪が重い」は法律的な裁きの対象となるような罪について用いられるのが主であるのに対して、「罪が深い」は人間性そのものに根ざした宗教的な罪などについて用いられるのが本来的なのではなからうか。もっとも、「罪が深い」はそれほど深刻でなく、軽い意味に使われることもある。次にあげる2番目の「つゆのあとさき」はその例であろう。

○自分の魂のほんとうの願いを殺すのはいちばん深い罪と聞いています。（出家とその弟子 102）

○お前の方が見かけが素人らしく見えるだけ罪が深いよ。（つゆのあとさき 41）

「罪が深い」は一語化して「罪深い」という複合形容詞にもなっている。

○彼も心の底では、幸福な旅をして居る二人の男女の生命を、不当に奪ふといふことが、どんなに罪深いかと云ふことを、考へずには居なかつた。（恩讐の彼方に 64）

「業ごうがふかい」なども「罪がふかい」とかなり近い位置にある用法だといえよう。

○私はなぜこうなのだろうといつも自分を責めています。よくよく私は業ごうが深いのだ。（出家とその弟子 76）

○彼は今更に、半生の悪業の深きを悲しんだ。（恩讐の彼方に 71）

次に、「慾」と結びつく「ふかい」がある。これはごく一般的な用法であるが、採集例としては「慾深い」と複合語化したものがあるだけである。

○また彼女の態度にも数々の男の慾深い誘惑から身を守りとほしてきた近寄りがない一種の気高さがあつた。(厚物咲 34)

第3に、「義理」「信義」「恩義」など、人間のある種の徳性について用いられた「ふかい」をあげよう。この種の「ふかい」は「篤い」と一応代置が可能な場合が多く、「篤い」との類義関係を考えることができよう。(「義理」に関しては「かたい」との類義関係もある。)

○僕がそんな義理の深い人間だ、といつても、人々は信用しないかも知れませんから。(冬の宿 169)

○情誼に厚く、信義に深い男ですから、信用くださっても大丈夫です。(面白倶楽部 1956年12月 144)

○許可すると言つたより一層恩義が深い。(蒲団 68)

「面白倶楽部」の例は「信義に深い」という形式をとっているが、「信義が深い」という形式もあり得て、結果的に表わす意味は大差がない。ちょうど「友情が篤い」「友情に篤い」が並び存するのと似た関係にある。

第4に、以下にあげる例は、いずれも人間の精神と深い関係のあることについて用いられた「ふかい」であるが、どのように位置づけて考えるべきか、材料も不十分で、明らかにならない。また、「ふかい」のかなり特殊な、個人的な用法とみるべき例もあるであろう。また、今までの分類の中のあるものに所属させようという考えかたもできるものがあるろう。

○野心の深い割合に手練の露骨な、(或る女・前 76)

○丑松は其精神を酌取つて、父の用意の深いことを感ずると同時に、(破戒 108)

○或る時は素養の深い若いディレタントのやうに高尚に、(或る女・前 133)

○わたし、先生の小説には思出の深い事があるのよ。(つゆのあとさき 22)

○そこがそれ、迷信の深い土地柄で。(破戒 307)

終りにあげる、次の例は、「匂い」と結びつけられた「ふかい」で、これは一般的な用法であるとは考えられない。

○しばらく泥藪の匂ひの深い、暗い貧民街の家並がつづいてゐて、(冬の宿 8)

(付) 引用文に「破戒」からのものが多いと思われるが、「破戒」は「ふかい」の使用度が非常に高いために、自然にそうなった。

5. か た い

〔00〕 「かたい」のいろいろな意味の中のもっとも基本的なものは、物体の物理的な性質を表わす、もっとも具体的・感性的な意味だと考えられる。すなわち、「物体の質がじょうぶであって、力を加えられても形が変わりにくい」ということである。他の諸意味は、この基本的な意味となんらかのつながりがあるものとして位置づけることができよう。この意味の「かたい」が、「やわらかい」と対立していることはいうまでもない。

「かたい」はさまざまな物体のなかで、固体についてだけ言える性質である。流動体すなわち液体や気体については、ふつうにはあり得ない性質である。これは「かたい」の条件として基本的なものである。たとえば、水銀の液体に指先を差し入れると、空気と接した境に圧力を感じるが、「水銀はかたい」ということはできない。それは水銀が指先に大きい抵抗感を与えても、固体ではないからであろう。食物には固体のも液体のものもあるが、たとえばかゆについては、「かゆが冷えてかたくなる」「かたいおかゆ」などと言うことがある。かゆそのものに「かたい」の使われた用例はないが、次の例はその参考になろう。

○粥ばかり食つてると、それ以上の堅いものを消化^{じふ}す力が何時の間にかなくなつて仕舞ふのださうです。(こゝろ 207)

かゆについて「かたい」と言えるのは、飯粒またはその集まりが固体性を保っている限りにおいてであろう。重湯になれば、「かたい—やわらかい」は言えず、「こい—うすい」に取って代られる。重湯はもはや液状のものとしてとらえられるからであろう。豆腐については「このとうふはかたい」など言うことができる。ほとんど水から出来てはいるものの、一定の形を保つという固体の性質をもっているからである。

「かたい」は固体についてのみ言われると述べたが、比喩的には気体や液体についても言われることはあろう。非常な速力で動いて、強く空気の抵抗を受ければ、空気を「かたい」と感じることはあるだろう。その場合は空気を固体のようにとらえていると言えよう。

○ガラスのように固い空気なんて突き破って行こう。(放浪記 270) <口語詩>
という例は、この場合参考になる。水のような液体についても似たことが考えられる。

○若者は力の限り泳いだ。巨大なものはすこしずつ蹢り退いて道をひらいた。固い岩盤が磐岩機に穿たれてゆくやうに。(潮騒 145~146)

という例では、「かたい」は比喩表現の中ではまぎれもなく固体である「岩盤」を修飾しており、「かたい」の基本的意味の用例として何の変哲もない。ただ、「固い岩盤」によってたとえられているものが「荒れ狂う海水」である点で、この場合多少の参考にはなり得ようか。

「かたい」によって形容され得る固体の、形状についてはほとんど制限がないようである。廊下・ベンチ・ガラス・鉄板のような平らなものでも、ボール・砲丸のような丸いものでも、ごつごつした岩石・さざえの殻・松の幹のようなでこぼこしたものでも、ひとしく「かたい」によって形容され得る。ただし、大きさに関して非常に微細なものに対しては「かたい—やわらかい」ということは、少くとも日常的には言われまいであろう。「小さい」「白い」などの形容詞は使えても「かたい」は使えない、使いにくいという物体の小ささの段階が考えられる。しかし、たとえば米粒ぐらいの大きさになれば「かたい」は十分に用いられ得るだろう。

「かたい」は物体の形態ではなく、材質についての属性を示す語である。したがって、物質の材料を示す名詞、たとえば、「コンクリート」「鉄」「木材」「ガラス」「ゴム」「粘土」のような語とは非常に結びつきやすい。「かたい壁」「かたいいす」「かたいびん」のように、加工された製品の物を表わす名詞とも結びつくことは少なくない。しかし、「かたい本」「かたい車輪」「かたい自動車」「かたい家」のような結びつきは実際には起こりにくいであろう。「かたい本のとびら」「かたい車輪のタイヤ」などになれば別であるが、製品を表わす名詞は、材料を表わす名詞ほどには、「かたい」とは結びつきやすくないという傾向があるかも知れない。

「かたい」物体の典型的なものとしては、ダイヤモンド・鉄・石のような、金属や岩石などがまず思い浮ぶ。金属や鉱物の「かたい」程度は「硬度」として科学的に測定される。「かたさ」の物理的意義は明確になっていないが、ある物体をもって目的の物体に変形を与えようとしたときに後者の呈する抵抗の大小をもって、後者の硬軟の程度を表わすという説明は現在妥当なものと考えられている^{<注>}。ところで、われわれの日常的体験として、「かたさ」が感じられるのはどんな方法によっているだろうか。外から加えられる力としては「押す」「たたく」「ひっぱる」「切る」「折る」等々の種類が考えられ、物体の変形しかたとしては「へこむ」「折れる」「曲がる」「伸びる」等々の種類が考えられる。ただし、一般には単に手などでふれてみて感じられる抵抗によっても物体の「かたい」ことがわかる場合が多い。

<注> 平凡社『世界大百科事典』の「かたさ試験」の項

用例の中から、「～のようにかたい」などの形で、「かたい」もののたとえに使われている物をさがすと、次のような例がある。

○足が石のように固く冷える。(放浪記 89)

○石のように固いが、ユックリ噛んでると、多少の味がある。(自由学校 162) <うどん粉をこねて焼いたもの>

○長いことクリームを塗らない顔は瀬戸物のように固くなって、安酒に酔った私は誰もおそろしいものがない。(放浪記 106)

石や瀬戸物は、少しぐらいの力を加えても巨視的には形が変らないもので、かなり典

型的に「かたい」ものの例として考えてよいだろう。ところで、石は落すぐらいでは割れることもなく、よほど強い打撃を加えないとくだけないものが多い。それに対して、瀬戸物は堅い床に落せば割れてしまうことが多い。すなわち、比較のもろい物体である。ガラスについても「透明でかたくてもろい物質」(樗垣実編『外来語辞典』)という語釈があるが、一般に「かたい」と「もろい」とは両立しうる性質だといえよう。「かたい」の基本的な意味に対する反対語として、「やわらかい」と並べて「もろい」をあげている国語辞典がある。しかし、「かたい」と「もろい」は同一の主体に対する属性を表わす語として両立しうるので、一般的には反対語とはいえないことになる。しかし、刃物に関して「刃がかたい」が「刃がもろい」と対立しているようなばあいもある。

また、文字どおり外からの力に対して形が変わりにくいとはいえず、ある程度の弾力性を持つ物体の性質でも、「かたい」の範囲に含まれることができる。たとえば、肉類とか、ゴム・皮革のようなばあいである。なお、物体一般からみれば「やわらかい」部類にはいるものでも、同類のものの平均などが基準になって「かたい」と言われることも珍しくない。それは程度の性質を表わす形容詞に、広く一般にみられることである。以下に実例を検討するなかで、このような点も具体的に示してみたい。

以下、資料内の用例を、「かたい」の主体である物体の種類によって分け、おもな種類から例をあげながら、問題点があれば検討していくことにしよう。

まず、われわれの立脚している地面や建物の中の床はだいたい「かたい」ものであることは当然で、こういう類のものについて「かたい」が使われた例をあげてみよう。

○彼はステッキで堅い地を叩き、咳払とも、叫びともつかぬ声をしぼり出して空を仰ぎ、そして歩いた。(青銅の基督 19)

○柱が立つてゐるだけで、漆喰のやうにかたい土間がひろがつてゐる。(帰郷 137)

○甲板には外国人が五六人厚い外套にくるまつて、堅いティークの床をかつかつと踏みならしながら、押し黙つて勢よく右往左往に散歩してゐた。(或る女・前 114)

しかし、深い泥の中を進まねばならぬようなときには、地盤が「かたくない」ために歩きにくくて困ることもあるわけである。

○泥はやゝ浅くなつてゐた。それからまた二足、殆んど腿まで深く入つて、次の足は棚のやうに高い、固い土盤に乗つた。土手の底の一部であつた。(野火 115)

数年前に、人間が月に着陸できるかどうかの研究されていた段階で、月面の写真をしらべて人間が歩ける程度に「かたい」ことがわかった、という報道があった。

また、家の土台のように、ものをのせて安定させるためのものも「かたい」ことが大切な条件である。

○肉体の欲望は人間の欲望の中でいちばん下等で、なかんずく^{しきじよく}色食の二欲は最も低級のものであるが、しかしそれらのものが下層のものであればあるだけ、一般民衆を

してこれを適当に満足せしむることは、やがて社会の基礎を固くし、國家の根本を養うゆえんである。(貧乏物語 49)

における「基礎を固くし」というのは、抽象的なことの実現であるが、このようなばあいの「かたい」はしっかりと安定した状態というニュアンスを含んでいるといえようか。それは、われわれの立っている地面や、ものの土台などが「かたい」という用法の延長線上にあると考えられよう。

次に、腰かける道具の、尻に当たる部分について「かたい」が使われた例をみよう。

○かたいベンチに腰かけて、安吉は話をいらいらした気もちで聞いていた。(むらぎも 51)

○ところが椅子がとてもせまくて、固くて、腰かけると、とまり木にとまつたやうで、尻は痛いし、ちつともおちつきません。(潮騒 74)

○藤を張つた冷たく堅い座席の上で、眼を傾り、伸子は動揺につれてこみ上げる^{はきげ}の吐息をやつと堪へた。(伸子・上 63) <電車の中>

上の例のうちで、2番目の「潮騒」の例でははっきりしているが、こういう場合「かたい」ことは人間にとって安楽でなく、度が強くなれば不快や苦しさになることは、われわれの日常体験である。

上のようなばあいに限らず、柔い肉体を持つ人間にとって、「かたい」物体に触れることは抵抗感を伴い、不快や苦痛を伴うこともわりあいに多いであろう。[31][32]にみるような派生的な意味において、「かたい」はきつい、楽しくない感じと関係が深いのが、基本的な意味における「かたい」にそういう方向へ発展する可能性が萌芽として含まれているといえよう。

次にふとんやきれなどに使われた例をみよう。

○ここらあたりの山袴^{さんばく}のやうな木綿の、それも色褪せた固い蒲団を並べて、(雪国 141)

「ふとん」は物体一般からみれば「やわらかい」部類にはいるかもしれないが、ふとんとしての平均的な「かたさ」の度合を越えているものとしてとらえられると「かたいふとん」という表現が成り立つわけである。

○固い女帯をしごく音で、島村は目が覚めたらしかつた。(雪国 45)

○山袴の股は膝の少し上で割れてゐるから、ゆつくり膨らんで見え、しかも硬い木綿がひきしまつて見え、なにか安らかであつた。(雪国 54)

○ポップリンの変り地なんですけれど、フランスものせるか、ポップリンの持つてゐる硬さがちつともなくつて、そりや着心地がいゝわ。(波 286)

のような例にみられる帯やきれなどは、全体の形は自由に楽に変えられるものであるが、「かたい」と言われることができる。こういうばあいの「かたい」は、手ざわりのごまごましている性質を表わしているといつてよいだろう。「かたい」が表わし得る性

質の範囲は、なかなか広いわけである。

「かたい」は食物についてもよく用いられる。そのばあいは、食物の「かたい」性質を口の中、特に歯や舌に対する抵抗によって感受するわけである。

○熱い饅頭を吹きながら、島村が噛んでみると、固い皮は古びた匂ひで少し酸っぱかった。(雪国 87)

○^{はまぐりなべ}蛤鍋の味噌も固くなってしまった。(放浪記 155)

のように、物体一般からみれば相当「やわらかい」ほうのものであっても、その食品としての平均からみて「かたい」と言われることは珍しくない。

○そして鶏肉もまた、塩、醤油などで煮すぎると特に固くなるんです。(婦人生活 1956年3月 398)

○肉はうまかつた。その固さを、自分ながら弱くなつたのに驚く歯でしがみながら、(野火 144)

は肉について使われた例である。肉類については、筋が多くてかみ切りにくいような性質も「かたい」で表わされることがある。

〈注〉金田一春彦『日本語』(岩波新書 1957)は、日本語が感覚のちがいを言いわけることが大ざっぱな例の一つとして「かたい」をあげている。(138～139ページ)

日本人はまた、テッポウダマを噛んでも、スルメを噛んでも、カタイ・カタイの一点張りだが、テッポウダマの方はほんとうにかたく、スルメの方は噛みきりにくいのである。英語ならば、テッポウダマの方を hard、スルメの方を tough と言い分ける。

すなわち、ある程度しなやかではあるが、ちぎったり噛み切ったりして分割することは容易でない、といった性質も「かたい」の領域にはいつているわけである。

○ルーアン風の鴨料理は、正直に云ふと、少し煮過ぎたのではあるまいか。少し肉が堅く、味が落ちたやうに思ふ。(週刊サンケイ 1956年3月11日 17)

○あらゆる草を、どんなに洩く固からうと、虫の喰つた跡によつて毒草でないと思はれる限り、採つて喰べた。(野火 125)

では食べ物(または食用にすべきもの)の「かたい」ことは、快適でない、歓迎されない条件になっている。たとえばバリバリしたせんべいのように、程よく「かたい」舌ざわり・歯ざわりを楽しむというばあいもあるが、食べ物に関しても「かたい」ことは、かむのに骨が折れて抵抗感を伴うことが多いといえよう。

資料内には、ほかに「御飯」「アンパン」「羊羹」「無花果」などについて「かたい」が用いられた例がある。かゆについては「かたい」と言うことがあるが、初めの方にも触れた重湯や、スープ(ポタージュでも)には「かたいーやわらかい」は言わず、「こいーうすい」などが使われる。その限界はおよそ、「たべる」と「飲む」「吸う」の対象物の境界と一致するであろう。

次に、人や動物のからだやその部分などに関して用いられた用例をみよう。

- 右手の指先きを四本揃へてその爪先きを、水晶のやうに固い美しい歯で一思ひに激しく噛んで見たりした。(或る女・前 122)
- レオポルド氏触診法によると、児頭が堅くて甚だしく大きかつた。(本日休診 88)
- 父親が硬い手に煙管を取りあげながら訊ねた。(あらくれ 40)
- それから鎖骨の上のところ、ここに固い腫れものができていれはすでに遅いといわねばなりません。(婦人倶楽部 1956年9月 403)
- ロシア人達は終ると、何か叫声をあげて、彼等の手を力一杯握つた。抱きついて、硬い毛の頬をすりつけたりした。(蟹工船 47)
- 坊ちゃんも、白糸でつないだ固い角のある黒い虫の荷馬を持つて、後から上つてお出でになつた。(桑の実 82)
- 翼の堅い虫はひつくりかへると、もう起き直れなかつた。(雪国 128)
- 外皮は石灰質の堅い殻に覆われていて、頗る頑強、(オール読物 1956年4月 240) <カキについて>

上のような例については特に説明を加えることもない。5番目の「蟹工船」の例にみられるような「かたい毛」は「こわい毛」とも言われることが多いだろう。

- 既に木谷の身体からは熱が去ってはだをはしる冷感がふたび彼の肉をかたくした。(真空地帯・上 155)
- 今日はひどい嵐なり。(中略) 足が石のように固く冷える。(放浪記 89)
- 其時の私は恐ろしさの塊りと云ひませうか、又は苦しきの塊りと云ひませうか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のやうに頭から足の先までが急に固くなつたのです。(とろろ 237)
- 私の方へ、どンドン迫つて来るやうに思はれた。私は身を固くした。(野火 126)
<「迫ってくる」のは野火>

上の諸例は、寒さから来る冷えなどの生理作用とか、恐れ・緊張などの心理作用によつて、からだやその一部分が硬直する、または硬直したように感じられる場合に使われた「かたい」である。これは次の〔01〕にあげる、「かたくなる」という慣用語への橋渡しをする位置にある用法である。

次に、植物のいろいろな部分に関して使われた例をみよう。

- それから又根切虫が残酷に堅い茎を根もとからふきりと噛み倒して植た数の減るにも拘らず、(土・上 129~130)
- 海ぞいの黍畑に立ちて
何の願いぞも
固き葉の颯々と吹き荒れるを見て(放浪記 296)
- 門口にかぶさりかかつた一幹の松の枝ぶりからでも、それが今日でこそ徒らに硬く

太く長い針の葉をぎつしりと身に着けて居ながらも、(田園の憂鬱 25)

○その未だ固い蕾には、小さく、深く蕊まで貫いて穿たれてあつた、言ふまでもなくそれは虫の仕業である。(田園の憂鬱 114)

○蕾かたきままでのつづの崩されてダムの工事のはかどりてゆく(婦人朝日 1956年8月 151)

おわりの2つの例にみられる「つぼみ」は、もの一般からみれば、わずかな力でもつぶされてしまう弱いものであるが、ふくらんで大きくならないうちのつぼみは、相対的に「かたい」ことは事実であろう。また、「かたいつぼみ」は〔10〕の意味に、すなわち「かたく閉じたつぼみ」の意味に解される可能性もあるかもしれない。「かたいつぼみ」は若い女性に関して比喩的に使われた例もある。

○大宮の従妹は武子と云つて、杉子より一つ上だが、まだ固い蕾のやうな所があつた。(友情 49~50)

おわりに、「物体」「材料」のように、物体の種類を具体的に示さず、広い範囲の物体をさしうる名詞と「かたい」の結びついた例をあげよう。

○地球やその他の惑星が、宇宙ジン(塵)とガスがひじょうに低温度で形成した冷たい堅い物体としてつくられ、(科学読売 1956年12月 37)

○孔をあけたり、研磨したりするには、刃物を使わずに、超音波、高圧放電、電解法などによって、どんな硬い材料でも、あるいは扱にくいほど柔い材料でも、短時間に、やすやすと加工している。(ポピュラー・サイエンス 1956年2月 34)

〔01〕 「かたくなる」という連語の形で、「楽な気持を失って、心身が緊張する」という意味を表わす。

○長襦袢一枚の彼女と対してゐながら、行介は却て自分の体の固くなるのを感じた。

(波 98)

のように、「からだ」が「かたくなる」の主体になっているばあいの「かたく」は〔00〕の意味に解せられる。しかし、

○葉子は思はず裸体を見られた女のやうに固くなつて立ちすくんだ。(或る女・前 122)

○先生がはじめて教室にはいってくると、生徒たちは気味わるそうに、固くなって先生を見つめていた。(人間の壁・上 96~97)

のように、人がそのまま「かたくなる」の主体になる用法も成立している。そして、こういう場合は〔00〕とは区別して、上記のような意味を認めることができる。すなわち、からだの物理的なかたさの表現から、それと密接な関係にある精神状態へと重点が移行している。

なお、この「かたくなる」に対応する「やわらかくなる」は存在しない。

〔10〕物どうしが、ぴったりと、またはしっかりと、くっつけられ、いっしょにされた状態。有形の物体に関係のある物理的な属性である点は〔00〕と共通で、〔2〕以下とは異なる。しかし、〔00〕は1つの物体があればよかったが、〔1〕は2つ（以上）の物体（の部分）の存在が前提となる。2つ（以上）のものが密着した状態であるから、外からの力によって動かされにくい点でも、〔00〕と共通する要素が認められる。

この意味は、「かたく」の形で連用修飾語として現れることが多い。そして、物どうしが密着する状態に持って行く動作（他動詞）を限定することも、動作の結果成立した、物どうしが密着した状態（自動詞や他動詞の受身で表わされる）を表現することもある。なお、この意味の「かたく」は「やわらかく」とは対応しない。

資料内での、この意味の実例を分類的にあげてみよう。便宜上、動詞の意味の近いものをまとめて、「閉じる」群、「握る」群、「結ぶ」群などに分けて見ていこう。

第1に、「閉じる」群の動詞を「かたく」が修飾している例から始める。その中をさらに分けると、まず、人間が目や口などを閉じる場合がある。この場合は、「かるく」が対応することが多い。目の例は次のようなものである。

○目を固く閉ぢて、眉根に深い皺を寄せ、ときどき呻き声を出して苦痛に耐へかねてゐるやうであつた。（本日休診 88）

○私は蒲団を顔へずり上げて固く臉をとじた。何も彼もいやいやだ。（放浪記 217）

○それから空の一方を仰いでから、堅く眼を瞑つて、永い黙禱を始めた。（冬の宿 199）

○彼女の眼は、しばらく、さげすみと感謝とにかはるがはる光つたが、そのうちかたくとぎされてしまつた。（冬の宿 164）

対応する「かるく」の例を1つあげておこう。

○いよいよ湧起る妄想の遺瀨なさに、君江は軽く臉を閉ぢ、（つゆのあとさき 87）

次は口に関する例である。

○酷薄に堅く閉ぢてゐた唇を、彼はしづかに動かした。（真知子・前 176）

○堅く結んだ口唇は血の色もなく変りはてた。（破戒 293）

○彼は下腹に力を入れて、口を堅く結んでみた。（暗夜行路・前 263）

上の例は文字通り、上下の唇の合わせり方を具体的に描写する「かたく」であるが、「口をかたく閉じる」などの表現が、物をけって言うおとししない、あることに関して言及を避ける、などの意味に転化することがある。

○堅く口をむすんで、意地でも口をきいてやらないといふ気構へが見えた。（本日休診 80）

○その男が何か深く聞知らうとすればいよいよ堅く口を閉ぢて何事をも語らない。

（つゆのあとさき 37）

のような例は、その転化の過渡的な段階に位置するものであろう。次の例のような「かたく口をつぐむ」になれば、その転化は明らかである。

○どうしてか、小よしのことについては、鈴むらさんはつねに固く口を噤んだ。(末枯 48)

これはさらに「口がかたい」という慣用句につながっている。

○この女性、なかなか口が堅いです。ねえ先生、自分の訪ねるアパートの名も、云はないんですからね。(本日休診 46)

○この家の主人は無論だが、事情を知つてゐる人々も華僑は口が固いから、お蔭で無事である。(帰郷 29)

唇と歯、上歯と下歯の合わせり方について「かたく」が使われた例もある。

○ジョパンニはまるでたまらないほどいらいらしながら、それでも堅く唇を嚙んでこらへて窓の外を見てゐました。(銀河鉄道の夜 299)

○毛布の端から、目を吊りあげた顔をのぞかせてゐた。歯は固く喰ひしばつてゐた。(本日休診 61)

資料外の文例であるが、服部四郎『音声学』(岩波全書)から、「かたく」と、それと対立的な「かるく」の例をあげておきたい。

○上の前歯と下唇とが堅く接すると同時に、(91ページ)

○下唇が上の前歯の尖に軽く触れているときに、(90ページ)

門・戸・扉などを目的語とする、「閉じる」群の動詞を修飾する「かたく」の例を見よう。

○私は固く扉を閉ざしてかぎをかけた。(放浪記 285)

○門並に固く塗戸を閉ざしたあの華僑の住宅街である。(帰郷 19)

○妾のやうなものに堅く門を閉ぢて決してうけ入れないやうな厳しい宗門をこそ崇めますわ。(青銅の基督 27)

上は「閉ざす」「閉じる」という他動詞を「かたく」が修飾している例であるが、次の例では、自動詞「しまる」を「かたく」が修飾している。

○片野の家は堅く戸がしまつてゐた。(厚物咲 38)

「閉じる」群の例として、ほかになお次のようなものがある。

○冷たい血がポンプにでもかけられたやうに脳の透間といふ透間をかたく閉ざした。(或る女・前 17)

○蒼は日を経ても徒に固く閉ぢて、(田園の憂鬱 31)

○母から固く封をして渡されてゐた古い写真や、(帰郷 189)

○貧しい作男の哀願に、堅く財布の口を締めてゐる養父も、(あらくれ 32)

○とあるのをみると、片山という人の巾着の紐が、相当堅くしまつていたことが想像される。(文芸春秋 1953年12月 90)

「財布のひもがかたい」という慣用句は、おわりの2つの例のような表現と関係が深いものであろう。

第2に、「握る」群の動詞を「かたく」が修飾している例を見よう。握る動作をする人が力を入れて握る結果、握る手と握られる他人の手や物体とがしっかりと合わる場合である。

- 或る時内田はもう娘らしく生長した葉子の手を堅く握つて、(或る女・前 53)
 - 暗中に、加治木の手が伸びてきて、五百助の手を固く握った、(自由学校 229)
 - 仙太は堅く握つた儘、そんな無法なことがあるものかといふ顔付。(破戒 79) <「堅く握った」対象は打球^{ラケット}板>
 - 博士は堅く時計を握つたまま、また聞きました。(銀河鉄道の夜 263)
- 「にぎり〜」という形の複合動詞を「かたく」が修飾した例を次にあげよう。
- 思はず、恭吾は、娘の手をつかんで、固く握りしめてゐた。(帰郷 292)
 - 「(省略)」と、細君も堅く手を握りかへした。(蒲団 80)
 - 青年は、マントの下から手を出して、娘の手を求めた。待つてゐたやうに、すぐ堅く握り合はされ、(多情仏心・前 20)

動詞「握る」と意味上、関係の深い名詞「握手」は「かたい」に修飾されることがある。

- それから二人はもう一度固い握手をして、(波 301)

「握る」群の他の動詞を「かたく」が修飾している例をあげよう。

- 娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、(雪国 9)
- 節子は、椅子の背に手をかけて、無意識に硬く、つかまつてゐた。(帰郷 230)

第3に、「組む」群の動詞の例を見よう。

- お島は手を堅く組んで首を傾げてゐた。(あらくれ 128)
- そして、彼女は、一呼吸ついたように、ホッとした素振り^で、堅く組んでいた腕を、解いた。(自由学校 249) <「五百助」と堅く組んでいた腕>
- 古藤は何か自分一人^でで合点したと思ふと、堅く腕組みをしてこれも自分の前の限八分の所をちつと見詰めた。(或る女・前 73)
- 真知子は外套の襟を立て、凍つた靴の爪さきを蹴込でかたく組み合わせ、(真知子・前 172)

これらは、自分の両手・両腕や両足の組みかた、また、自分と他の人の腕の組みかたを、「かたく」が限定している例である。

第4に、「結ぶ」群の動詞の場合を見よう。「ひもをかたく結ぶ」のような場合であるが、資料内では次のように比喩的に使った例しかない。

- もう一つは、この政府を野党が横から四六時中監督しているということであるが、この二つの力を固く結び合せて、それを国民につないでいるものは、ほかでもなく新聞^{プレス}である。(もの見方について 58)
- 上ついた気持ではなく心と心を固く結び合い心の支柱を結婚によって見出したい

のである。(週刊サンケイ 1956年9月2日6)

○熱い主観の情と冷めたい客観の批判とが絡り合せた糸のやうに固く結び着けられて、一種異様の心の状態を呈した。(蒲団 28)

○この共通の弱点が母と子をいっそう固く結びつけた。(宝石 1956年4月19)

次にあげる「結ばり」「団結」「結束」などの抽象名詞と「かたい」が結びついている例もここに位置させて考えることができる。

○どれほど堅い結ばりでも、一年と続く間に唯の一度、(省略)と、しみじみひとりツぼつちの感慨にうたれることがないとすれば、(多情仏心・前 318)

○吾々は基督によつて示された真理と、神との名に於てなほ益々団結を固くしなければなりません。(青銅の基督 92)

○教職員の結束の堅かったところでは、被害がすくなくてすんでいること、(人間の壁・上 179)

○さうしてこの団体は、他にこれを威嚇する敵を有するとき、共同防禦もしくは共同攻撃の目的のために、更にその結合を鞏くする。(人格主義 92)

○もっとも、研究グループとはいっても、べつにかたい規約があるわけでもなく、いわば自由な研究者たちの、ゆるい連絡組織というにすぎない。(高崎山 25)

次の例も比喩的表現の中での問題であるが、「かたいひも」というのは、ひも自身の質が丈夫なことではなくて、ひもによる結びつけられかたが「かたい」という意味であろう。

○アメリカの「援助」と引換えに同国の主要企業にはぞくぞくアメリカ資本が喰い込んでおり、政治的にも堅い紐でアメリカに結びつけられている。(改造 1953年7月104)

名詞形「かたさ」は〔00〕の意味の名詞化であることが多いだろう。たとえば、

○鉛筆の固さは、私は2Bをおすすめします。(知性 1956年5月194)

○土を上げるには、土の堅さが関係してきます。だから、一度落水して土を適度の堅さにし、人力または畜力培土機で溝上げします。(家の光 1956年6月199)

のように。しかし、〔10〕の意味の名詞化であるばあいもある。次の例における「かたさ」は比喩的表現の中ではあるが、〔00〕ではなく〔10〕の意味が名詞化されたものである。

○一度、二度、三度……そのたびに、逃れがたい愛恋のきずなは、ほどきがたい固さで私をしばりあげていました。(小説春秋 1956年4月92)

第5に、その他の例をあげよう。

○表に返して綿をできるだけ固くつめ、頭が動かないように頭と胴を縫いつけます。

(若い女性 1956年8月付録 95)〈人形の作り方〉

○表に返してパッキングをつめ、固くつまったら糸で口をかざる。(それいゆ 1956年38)

号 95)

○行李は何時持ち出しても差支ないやうに、堅く括られた儘であつた。(こゝろ 123)

○堅く巻きつけた襟巻の下で、猿轡でも噛まされた人のやうに、何かわけの分からないことを云つて、(多情仏心・前 38)

○それを梳かうとすると、冷りとしとつた生えるがままの毛髪は、堅く櫛に絡んで、櫛は折れてしまつた。(田園の憂鬱 49)

○頬を強く押した男の唇が、まだ固くくっついているやうで、私は鏡を見るのがいやらしかつた。(放浪記 177)

○固くきてると、おっぱいがブリブリして、自分のからだのわるいとこをみんな出しちゃうけど、ゆったりとブクブクにきれば、それがかくれて、なんとなく色っぽさが出ますからね。(週刊朝日 1956年2月26日 24) <「着る」対象は「きもの」>

はじめの3つ、「つめる」「つまる」「くくる」の例では、結果として〔00〕の意味でのかたい物ができる。したがって、「かたく」を動詞の表わす動作の結果を示す用法とみて、〔00〕の意味に解することも不可能ではなからう。これと似ている場合はほかにもある。たとえば、「目をかたく閉じる」にしても、その動作の結果は目のあたりに力がはいて、〔00〕の意味での「かたい」感じにもなる。前にも述べたやうに、〔00〕と〔10〕との間には、こういう点でも関係が深いと考えられる。

〔11〕物どうしがしっかりとくっついていて、動かしにくい。資料内に用例がないが、「水道の栓(せん)がかたい」「びんの栓がかたい」「戸がかたい」のよなばあひである。〔10〕と近い関係にあることは明らかであろう。

〔20〕物体ではなく、無形のことに関して、それがしっかりと、ゆるがしがたい状態であることを意味する(「やわらかい」とは対応しない)。たとえば、

○こうした雰囲気の中で、二人の愛情も固くなってゆくのであつた。(くれない 44)

○こればかりは、一生ひとに洩らしたくない気持も、可なりに堅かつた。(多情仏心・前 254)

のような例における「かたい」である。

○妙に私と云うものが固く皆にたよられているのです。(放浪記 302)

○葉子の神経は磁石に吸ひ寄せられた砂鉄じしゃくのやうに、堅くこの一つの幻像の上に集注して、車内にあつた時と同様な緊張した恐ろしい状態に返つた。(或る女・前 20)

のように連用修飾語として現れている例もある。

資料内にはないが、「固い習慣」とか、「固い支持」のよな結びつきも、ここに位置づけてよいだろう。

○職場の護りいま堅く、いばらの道をわれら行く。(人間の壁・上 233)

も近い位置にあるが、「外からの攻撃に対してまけない」のようなニュアンスも伴っていると考えられる。野球などのスポーツで「かたい守備」というばあいや、

○白44 ままで勢力を蓄えても、黒23と囲った下辺は堅い、という点にも白の形勢判断の誤りを認めることができます。(棋道 1956年9月 101)

もここに位置づけられるだろう。

上にあげたような用例は、数としては多くない。以下にあげるような類の用例のほうが数が多い。そして、動詞の連用修飾語として現れているばあいが比較的多い。

まず、自分の心に強くきめるようすや、しっかりと信じているようすに使われている例をあげよう。

○されば、自分の贖罪の的は、国を富ますことにありと、堅く、決心した——(自由学校 226)

○ところが、事実、その決心はどれだけ堅いか？(暗夜行路・前 210)

○養家に辛抱しようと云ふ堅い決心が無いと云ふのが、養父等のお島に対する不満であるらしかった。(あらくれ 58~59)

○この男を対象にして、目を離すまいと固く決意したものであつた。(帰郷 109~110)

○私は又東京に住む覚悟を固くした。(こゝろ 117)

○本当の愛は宗教心とさう違つたものでないといふ事を固く信じてゐるのです。(こゝろ 182)

○木村君は私もよく知つとるが、信仰も堅いし、(或る女・前 67)

次に、人と人との間の約束などがいいかげんにではなく、ゆるがないものであるようにと強く結ばれるようすに使われる。

○さうすると、あの時あれ程堅く約束した言葉が丸で嘘になります。(こゝろ 145)

○絶対に自家の事は書かぬという堅い約束をしてもらわぬ事にはおれとしては安心できない、とこう言われるのだ。(暗夜行路・前 226)

○そこで、この法律を守るということは、お互の生活を確保するのに何よりも大切な固い約束でなくてはならぬということになる。(ものの見方について 147)

○僧三 あの遊び女と？

唯円 はい。もう堅く夫婦約束をいたしました。(出家とその弟子 169)

○あめつちがくずれても二人の恋はかわるまいと、私たちは、いくたび、かたく誓つたことでしょう。(出家とその弟子 185)

また、約束などをしっかりと守り、実行するようすを表わす例がある。その時の情況などによって例外を作るようなことがないようすである。

○一旦きめた約束はお互に固く守るのでなければ国は立ってゆけない。(ものの見方について 198)

○その盟約は今日まで頗る堅く守られていて、(ものの見方について 198)

○今日のことは堅く秘密にしておいて貰はぬと、いかぬ。(帰郷 18)

おわりに、他の人に対する断わりや、命令・禁止などの言動において、自己の意志を強くつらぬくようすに使われている例がある。特に命令・禁止のようなばあいには、絶対にこうしてはいけないというような、対人的なきびしきをニュアンスとして伴うようである。

○爺さんは、堅く、辞退したので、長い間押問答が起きたが、結局、彼は、妥協点を見出した。(自由学校 170)

○およねが恐れて、この後の留守居番を堅く断つたのに困った。(生まざりしならば 212)

○和歌山の時は愛する人に堅く拒んだものを、今度はさう愛慕してるといふほどの人でもないのに、ついわけもなく許してしまつた。(波 230)

○私はもう堅く黙つてしまつて、押し通すほかないと思つた。(冬の宿 149)

○両雄互に堅く執つて降らなかつたのだ。(多情仏心・前 212)

○決して職場に顔を出してはいけないと、津上から堅く言ひ渡されてあつたが、(闘牛 104)

○その後父親は手紙を書くことを娘に固く禁じたのに相違ない。(潮騒 131)

○あの出来事は、僕から堅く病院の方にも口止めて、(冬の宿 182~183)

○堅い口留をして、ふと其等の事をお鈴に洩したお島は、(あらくれ 99)

[21] 確実である、うごかぬところである、という意味がある。ものごとの蓋然性について、それがゆるがぬものだということから、この意味が生じると考えられる。資料内の例としては、

○おそらく、今秋、抱合せ倍額増資に進めば、増資後配当は一割六分とみればかた(い)。(東洋経済新報 1956年3月17日 74)

だけがこの意味に該当すると思われるものである。しかし、たとえば「秋の解散はかた(い)」「入選はかた(い)」のように、一般的な語として使われているばあいがある。

[3] ものごとから感じ取られる印象について、「かた(い) ([00]の意味での)感じがする」とでもいうような意味を表わすもの。[00]でも述べたように、「かた(い)」物体はやわらかい肉体を持つ人間に抵抗感を与えることが多く、さらに不快や苦痛を与えることもある。そのような点が媒介になるのであろうか、「かた(い)感じ」というのはおよそ、きつい、楽しくない感じと結びついているようである。[3]は独立的な転義としての性格がうすく、ある意味では「かた(い)」の基本的な意味に近く位置づけられるものであろう。だいたい「やわらかい」と対応している。

〔31〕線・音とか、製作物・文章とか、ある場の雰囲気など、さまざまな対象から感じ取られる印象について用いられる「かたい」がある。その内容を説明しようとする、「かたい感じがする」というような同語反復になってしまいそうであり、より具体的にみれば多種多様なあいがある、はっきりした限定をすることは容易ではなさそうである。およそ、きつい感じ、かくばった、くつろがない感じ、とでもいえようか。資料内にあるわずかな例を中心に検討してみよう。

○波のしぶきで曇つた円い舷窓から、ひよいひよいと樺太の、雪のある山並の堅い線が見えた。(蟹工船 20)

線について「かたい」と感じられ、表わされるのは、その線が直線的でまるみの乏しい場合、その線がくっきりと強い場合、などであろう。

写真では、黒と白、または濃い色と薄い色のコントラストの著しい状態が「かたい」と言われる。いわゆる「硬調」である。

資料内にはないが、「かたい音」という表現もあると思われる。それは、「かたい物体のふれ合うような音」というところからくるつながりもあるかもしれないが、音そのものの感じを独立的に「かたい」と形容することもあろう。それは、いわゆる金属的な音、比較的強く澄んだ音、はっきりとして余韻には乏しい音、のような場合ではなからうか。

以上の線・濃淡・音などに関する「かたい」には、くっきりし過ぎた、きつい印象という点において共通性が考えられるのではなからうか。

○一方に片寄せてつけたボタンは、堅い感じはならないものを選ぶか、共布でくります。(ドレスメーカー 1956年2月 152)

服装について「かたい」と感じられるのは、地質そのものの属性、作り出す形や線、かざりの要素、服装として formal であるかどうか、などの要因によるであろう。服全体として言えば、制服の類、特に軍服などはもっとも「かたい」感じであろう。女性的なやさしさの強調された服、かざりの要素の多い服などは、formal なものであっても「かたい」感じの服とは言えないだろう。

○すべてに厳しく硬い感じの中国の陶器も、日本にはいつてくるとすっかりデフォルムされて、何ともいえない渋味が出たり、浴衣がけの風雅な趣きを帯びてきたりする。(ものの見方について 141)

に見られる「硬い感じ」というのは、四角四面な親しみにくい、つよい感じとでもいえようか。

○つまり歌謡の方は何かに切に訴ふる、古人のいはゆる『詠嘆』の語気があるのに、諺の方は何処かに堅い冷たいそして幾分気取つた説教のやうなところがありはしないだろうか。(俳句 1956年6月 23柴生田稔「茂吉と俳句」)

○彼は、近ごろ自分の文章が窮屈で固いものとなり、どうかして改良を加えたいもの

だが、厳しいリアリズムというものは捨てることは嫌なので、という話から、(私の人生観 61)

ことばや文章について「かたい」というのも、いろいろなばあいがありそうである。たとえば、のびのびとしていない場合、強い調子をもっている場合、人をよせつけないような感じの場合、表現しようとするのが直接に吐露されず身がまえた姿勢をくずしていないような場合などに「かたい」感じがするといえるだろう。資料内にはないが、「かたい文体」「かたい表現」「かたい漢語」などの結びつきもある。

○北京には政協礼堂という会議場で、いく分劇場の雰囲気もかたいのですが、(世界 1956年1月 221)

ある場の雰囲気か「かたい」というのは、その場にいる人々の気分が親しくくつろいでいず、形式ばった感じである状態であろう。

[32] 人間の表情などについて使われ、やさしくなごやかでなく、きつい感じを表わす。対人的なある種の気分・態度の表われとしての属性であるが、幅広い内容を持つようで、限定しにくい。およそ、相手と親しみ合わず、心を許していない気分・態度の表われであるという共通点はあるようだ。より具体的には、緊張・警戒・不和・対立といった類の気持が表情などに表われた場合が多いようである。それは、以下にあげる用例の、前後の文脈からも推測されよう。

○うつかりすると肩でも敲きかねない岡部のそんな態度に津上は軽い反感を感じた。

津上はむしろ常の彼よりは固い態度で型通りに名刺を出した。(岡牛 93)

○それが終ると今度は急に固い表情になって先生の方に向き直った。新しい学年をむかえる緊張は、子供のころにも有るのだ。(人間の壁・上 87)

○君たちは女といふことになると急に堅いむづかしい顔をしてしまふね。(冬の宿 68)

○「困るなあ。」

と、彼は相好を固くしたまゝにべもなく答えた。(主婦の友 1956年2月 322)

○しるしだけ、富美子にはそれでもほゞ笑んだが、娘に向けた眼は硬く、問責を含んでゐた。(真知子・前 196)

○こちらが逸らしたくなる目を、恭吾は強い調子で見据ゑてゐた。知らずに彼の目は、昔の経歴の硬い光り方をしてゐた。(帰郷 75)

[4] まじめな実直な性質で、まちがいが無い。安全な堅実なやりかたで、信用がおける。この意味に含まれる、確実さ・安定性のような要素は、基本的な意味における、物体の形が変わりにくい性質という要素につながっていると考えられよう。

上のように概括した意味の下位区分をはっきりとつけることはむづかしいが、いく種類かのばあいが考えられ、それぞれのばあいに、あるニュアンスが伴っているようであ

る。

まず、

○青木さんにしたつて、あゝした堅い方である上に、そのときには、ちやんと、お貰ひになつたばかりの興さんがおありになつた。(桑の実 16)

○「御心配なさるな。あの仁は堅いでと、わしは云つて来たちや。はつは。」(青銅の基督 61)

などは、女性関係において品行が正しく、みだらでないことである。

○「さう仰有るけれどカツエーは割に堅いことよ。何しろ昼間から夜の十二時まではちやんとお店にゐるんですもの。」(つゆのあとさき 66)

も、異性関係においてみだらでないことであろうか。

次に、

○園田はずぼらのやうに見えて案外堅い男で、金銭で間違ひのあつたことはなかつた。(波 12)

○何しろ現金の取り引きでは、学校ぐらいお堅いところはあるまい。(中央公論 1953年 8月 152)

○あの時は貴方に金をあげたつもりだつたが、貴方がお堅く一円づつでも払ふと仰有るものだから、(厚物咲 13)

などは、金銭関係においてきちんとしている性質・ようすに関係している。

○貸すについては 堅い勤め人の夫婦者がいいと考えて、学校の先生を選んだ。(人間の壁・上 30)

○京町のある古いと固いで通つた見世。(末枯 29)

○中にはまたお島が古くから知つてゐる堅い屋敷などもあつた。(あらくれ 80)

などは、まじめな、信用のおける人や組織である。

○その金をもつて東京に出てきて、何か堅い商売をする気であつた。(冬の宿 20)

○小金がたまったら、子供でも引取つて、なにか堅い手内職でもしようかと思つていきます。(世潮 1954年2月 111)

○かたい仕事について待つてゐるから、必ず戻つて来てほしいこと、等々。(文芸春秋 1954年3月 290)

などは、(水商売ではない)地道な仕事である。

○「をぢさん。もうすつかり堅くなつておしまひなのね。」

君江は川島が出獄して後現在どうしてゐるのかきいて見たいと思ひながら、あけすけには問ひかねて遠廻しかう言つて見たのである。(つゆのあとさき 113)

は、かたぎになるということであろう。

次に、話や本の内容などがまじめで、娯楽的ではないようなばあいに使われる「かたい」がある。

○私と会っている時でもどうかするとすぐ説教のような 堅い 話になるのよ。(出家とその弟子 151)

教訓的な、倫理的、道徳的な話などは、とかく「かたい」話としてとらえられることが多い。

○岩波書店といえば雑誌は「世界」しごく 固いものばかりで押し通して来て、(週刊サンケイ 1956年6月10日 66)

○中々面白い書物ですよ。硬い本も結構だが、若い婦人はあゝ云ふものも大いに読むべきですな。(真知子・前 104)

のような、「かたい」読みものは、むずかしい、おもしろくない、のようなニュアンスをも伴っているばあいがあるようだ。

次に、義理をおろそかにしない、りちぎである、という意味合いのばあいがある。

○「でも此処まで来て寄らないといつちや、義理が悪いからね。」

今度はお島が立寄るまいと言出したのを、鶴さんは何処か商人風の堅いところを見せて、悉皆気が変わったやうに言つた。(あらくれ 73)

○まあ、さうお堅く仰有ることはないでせう。食事後に、そのお話もゆつくり伺ひますが、同宿のよしみだけでも、よんだりよばれたりするくらゐは普通でさアね。

(多情仏心・前 329)

このような「かたい」は、

○私はあなたの義理の固いのを尊敬いたしますが、もつと私のこともお考へ下さい。

(友情 113)

に見られるような「義理がかたい」という慣用句や、

○彼の父は云ふ迄もなく僧侶でした。けれども義理堅い点に於て、寧ろ武士に似た所がありはしないかと疑はれます。(こゝろ 201)

という複合形容詞と関係が深いであろう。

おわりに、状況に応じた自由なやりかたができず、おもしろみがなくかたくなであるという、否定的な評価に傾いた使われかたもあると考えられる。

○『飲み助じゃない?こいつはあかん?』と彼の身体は判断していた。固い融通性のない准尉にちがいないのだ……………(真空地帯・上 8)

○しかし木谷は准尉を固い人間だと思った。(真空地帯・上 8)

○とにかくその妹の亭主といふのは、質屋仲間でも有名な堅い陰気な人間、法華の凝りかたまりで、ただもう稼業大事と心がけてゐるばかり。(末枯 33)

などは、そういう例にはいるだろう。

[5] 「かたい」を含む慣用句で[4]までに関係づけにくいもの、あるいはどう位置づけるべきかよくわからないものを2つあげよう。

1つは「あたまがかたい」である。資料内の用例はない。「融通がきかない、がんこだ」のような意味で使われるばあいは、〔4〕の末尾あたりともつながりがあるだろうか。「ものわかりがわるい」という意味で使われるのは、あたまが自由にはたらかないというところから来るのであろうか。「からだがかたい」が、からだがしなやかでなく自由にうごかない、のような意味合いで使われることがあるのは、ここで参考にし得るものであるかもしれない。

もう1つは「目がかたい」が、夜おそくなくても眠たがらない、のような意味で使われるものである。これは、目のはたらきがしっかりしていてゆるがず、休もうとしない、というところからきたものであろうか。次の1例がある。

○「上さんは感心に目の堅い方はうですね。」職人がそれに続いてまた口を利いた。

「私は二日や三日寝ないだつて平気なもんさ。」（あらくれ 151）

〔6〕むずかしい、困難である、という意味の「かたい」は、〔5〕までの「かたい」とは別語である可能性が大きいであろうが、一応参考的に末尾に加えておこう。

○その時、狭い貸屋の奥の六畳間で、祖母は、諄々と、人生の行路の難しいことを誠め、（多情仏心・前 245）

○勝つことは愚か、防ぎとどめることも難しいのである。（落城 40）

○たとい西国勢が元込銃ライフル砲の備えをほこっているとしても、土民をも加えているという烏合の敵勢に一矢をむくいることも難くないであろうし、（落城 10）
のような例がそれである。次のような、「想像にかたくない」などの言いかたは、やや慣用句的によく使われるようである。

○一種の政略結婚で、それが、どれほど重苦しい新婚であったかは、想像にかたくない。（世潮 1954年2月 151）

○その間に纏綿する事情のいかにデリケートであったかは、推察に難くない。（総長就業と廃業 343）

この「かたい」は、

○また「金色夜叉」はあまりに現代とのズレがはなはだしく、いかんとも救い難い。

（ニューエイジ 1954年5月 76）

における「救いがたい」とか、「避けがたい」「表現しがたい」などのような派生形容詞を作る接尾語「～がたい」にもなっている。

このような「かたい」について、しいて基本的な意味とのつながりを求めようとするならば、次のようになるであろうか。すなわち、典型的に「かたい」物体は容易にこわすことができない、というところから「困難さ」の要素が生じ、〔6〕の意味につながるというわけである。しかし、これはあるいはこじつけ的な結びつけであって、一般的な言語意識とは無関係であるかもしれない。

この意味の「かたい」は文語的な語であり、かなり堅い文章語的な文体の中で使われる傾向があることは特にいうまでもない。漢字による表記が「難い」であって、〔5〕までとは分化していることも、別語意識を強める一要因になっているであろう。

(付) 「かたい」の関連語

「かたい」の分析・記述の途上で、「かたい」の中のある意味を考える上で比較すべき類義語がいくつかあった。それらのうちの2, 3を、「かたい」の諸意味に与えた分類番号の順にあげておくことにしたい。それらはいずれも、利用しうる手持ちの用例がきわめて少ないので、くわしくしらべるわけにはいかない。気付かれた問題点を記しておく程度である。

〔0〕 「こわい」

資料内の用例は次の3例がすべてである。

○若白髪^{さか}のまじつた粗剛^{あら}さうな毛を、分けたとも搔き上げたともつかずモシヤクシヤさせ、(多情仏心・前 26)

○雑木林の繁茂した間の、もう硬^こく成つた草の中へ蜀黍^{とうもろこし}の穂は縛つた儘どさりと置いてあつたのである。(土・上 140)

○況んや昨日は栄華の滋味^{あじ}に飽いて今日粟飯^{あわ}の硬^こきを食^くふ身となつては、斯る争の起るも無理はないと思ふ。(思出の記・上 12)

「かたい」の〔0〕にあげた「かたい」の用例の中で、「こわい」に一応置き換えられそうなもの一類は、食物についての例である。「この肉はこわい」「こわい御飯」(上の「思出の記」のような)などのばあい、するめ・もちなどについても、「こわい」と言うようである。歯ごたえがある、かみ切れなくて難渋する、というような状態において「かたい」のが、この「こわい」である。「こわめし」「おこわ」という複合名詞の成分になっている「こわ」も、この「こわい」の語幹であろう。

食物以外で、「こわい」が適用されうるもの一類として、はじめに用例をあげた髪の毛・草の葉のほか、紙の類・布の類などをまとめた。これらの物は、3次元のうち2あるいは1次元は小さな延長しか持っていない、つまり「うすい」とか「ほそい」という特徴を持っている。そして、それが「こわい」というのは、かたく突っ張っている、ごわごわしているという状態である。しなやかでなく、折り曲げたりするのに抵抗がある状態である。「ワイシャツののりがこわい」「こわいひげ」「筆の毛がこわい」などもこの類にはいる。

以上、2類の「こわい」は大体「やわらかい」と対応させうるようである。

方言には、からだを使って、だめな、疲れた状態になったこと、筋肉が硬直した状態を「こわい」という地域があることは有名である。

「こわい」の別の意味、すなわち「恐ろしい」などとの関係については、ここでは考えないことにする。

(10) 「きつい」

○伸子は、一層きつく彼にしがみつきながら、途切れ途切れに涙のあひだから囁いた。(伸子・上 99)

○彼は六年の間まだ見ることの出来なかった我が子を、今はじめてうでにきつくだきしめました。(婦人之友 1956年10月 77)

「きつい」のこのような用法は、資料内では上の2例しかないが、「かたい」の〔10〕とやや触れ合うところがありそうなので、ちょっと考えてみたい。

「きつい」の、より基本的な意味・用法は、「きつくしかる」「きつい言葉」のように、はげしい、きびしい、つよいなどに近い性格のもと考えられる。はじめに例をあげた「きつくしがみつく」「きつくだきしめる」のような結びつきも、「つよく」などで置き換えられるが、物に密着して行くような動作に関しているので、「かたくつかむ」「かたく握手する」などの「かたく」に触れ合う点が生じてくるわけである。

それでは、この「かたく」と「きつく」の相異点はどこに求められるであろうか。「きつく」には、「力を入れて」という要素が含まれているようだ。「目をかたく閉じる」「かたく口をむすぶ」「手をかたく握る」などの「かたく」は「きつく」に一応置き換えられ、「力を入れて」という意味合いが加わるようだ。ところが、「かたく門を閉じる」「腕をかたく組む」などの「かたく」は「きつく」に置き換えるのは無理・不自然であるのは、この点に起因するのではなかろうか。「かたく」は、物と物とが密着した状態でさえあればよく、力を入れた結果そうなるという条件は必要としない。なお、

○こはぜがきついので、苦労して嵌めてゐた。(本日休診 61)

とか、「くつがきつくて、はけない」「きつい服」のように、「きゅうくつな」に近く、「ゆるい」に対立する用法もあり、これは上の「きつくだきしめる」などと近い関係にあるものと考えられる。

(20) 「堅固な」

「堅固な」は「かたい」の〔00〕の意味に使われることもないではないが、主として「かたい」の〔20〕のある部分に相当する意味に使われる。すなわち、非常にしっかりとっていて容易に破られたり崩されたりしない、という意味である。

「かたく決心する」などと似た「堅固な」の用例に次のようなものがある。

○それがどうしても動かすことの出来ぬ程堅固な決心であつた。(阿部一族 66)

○お前様それでも感心に志が堅固ぢやから助かつたやうなものよ。(高野聖 69)

「護りがかたい」「かたい守備」などに近い用例に次のようなものがある。

○見る通り、信虎もこの城の堅固さには旗を捲まいて退却しおった。(小説春秋 1956年2月 67 松本清張「炎風」)

次の例の「堅固な」は、「かたい」の〔00〕の意味とも、「かたい」の〔20〕の意味とも解せられよう。

○津波、高潮が危いというなら防潮堤、防波堤を堅固にするにこしたことはない。

(時の法令 1956年11月3日 29)

6. あ か る い

〔00〕 「あかるい」の基本的な意味は「光が十分にある（と感じられる）状態だ」ということである。光が十分にある結果として「物がよく見える状態」であるということが付随する場合が多い。しかし、非常にあかるくてまぶしく、かえって物が見えにくいような場合もあって、「物がよく見える状態」ということは「あかるい」の必須的な要素ではないと考えられる。

この意味での「あかるい」は、目で見ただけですぐ感じ取られる、具体的な、単純な属性であって、他の意味はここから派生したものとして位置づけることができる。「あかるい」が成立するために不可欠な条件は光の存在である。

「*あかるいまっくらやみ」「*あかるい暗黒」のような結びつきが普通には成立しないのは、「まっくらやみ」「暗黒」が光の非存在を意味する名詞であるために「あかるい」の基本的な条件と背反するからにほかならない。

「あかるい」の対義語である「くらい」も光の存在に関係する形容詞で、光の存在する量がなんらかの基準を越えていると受け取られると「あかるい」、基準に及ばないと「くらい」の条件が成立する。その基準は、場合によって異なり、また相対的なものであることは、他の多くの形容詞と共通である。

「あかるい」という性質は、光という刺激が眼という感覚器官に作用して、感受されるものである。「くらく」はなく「あかるい」と感じられるためには、ある程度（その程度は場合場合によってさまざまであろう）以上の量の光が刺激として存在することが必要不可欠であることは上に述べた。光の量や明るさは、照度・輝度・光度などの測光量によって物理学的に測定されるという。〔あかるい〕という性質は、そのような物理学的な光の量と相関性が大きいであろう。しかし、人間の側の条件も関係している。たとえば、明るい戸外から室内にはいると、はじめは暗く感じるが、次第に目がなれてくると明るく感じられてくる。また反対に、暗い所から出ると、はじめはまぶしいほど明るく感じるが、まもなくさほど明るいとは感じなくなるという日常体験もある。心理学では、このような現象を暗順応・明順応と呼んでいる。これらは、客観的な根拠を持つ生理・心理現象であるが、さらに主観的な「あかるい」の使われ方もある。

○月の光で昼間のやうに明るい、いや雨の日の昼はこれよりずっと暗い——野面を越えて、彼は南の丘の方へ目を向けた。(田園の憂鬱 79)

月のあかるさ(光度)は太陽の数十万分の一であるから、雨の日の昼より明るいことは客観的にはありえまいが、主情的な文学作品などでは、上のような表現も、さほど珍しいことではないであろう。

<注1> 『KAGAKU no ZITEN』(岩波書店, 1950)の「HIKARI」の項。

<注2> <注1>の事典の「TUKI」の項。

「あかるい」という属性は、視覚すなわち目の網膜によって感受され、他の感覚器官によって感受されることはないので、「目にあかるい」のように感覚部位がわざわざ示される表現は少ないようである。資料内では、

○土塀に沿つて昇つて行つて、ふいと、門が現れたと思ふと逆光で、その内部の小さい庭の、ぱつと目に明るいのが見えた。(帰郷 125)

の1例だけである。たとえば「つめたい」は人体の皮膚のいろいろな部分で感じられるので、「水が手につめたい」「コンクリートが足につめたい」など、感覚部位の示される必要の起こる場合もあろう。「目にあかるい」は、「鼻にくさい」「口(舌)にあまい」などと同様、「手につめたい」のような意味での必要性はないわけである。

「まぶしい」は非常に明かるい場合に起こる感覚であるという点で、「あかるい」と関係が深いとも言えよう。

○そして左衛子が待つてゐた眩しいやうに明るい座敷にも、四人の老若の芸者が居住ひをなほして画家を迎へた。(帰郷 96)

○其に引替へて育英学舎なるものは粗末ながらも新築の校舎、仮令天井はないにせよ二階もあり、四方窓だから明るいことは眩しい位、(思出の記・上 102)

のように、文中の近い位置に「あかるい」と「まぶしい」の共存する例もある。

○「また蜂がまゐりました。」と、おくみはまぶしい日向を見た。(桑の実 118)

○時たま雨があがつて、眩しい陽光が木々のあはひから差し込む時、兵達は林中に坐つて裸となり、衣服を干した。(野火 104)

などの「まぶしい」は「あかるい」に置き換えても、一応文が成り立つ。しかし、

○彼女は薄っすらと涙を浮べて、まぶしそうに電気を見つめていた。(放浪記 209)

○頭痛、結膜の充血(結膜炎、光をまぶしがる、耳の痛み、顔色がわるい、熱が高くなる等等、種々の症状が幾つか現われますが、(婦人倶楽部 1956年12月 336)

○宏も、「おお」と云つて、友と一緒に、海のきらめきが眩しい目を細めたが、(潮騒 92)

などの「まぶしい」は全然「あかるい」に置き換えることができない。「まぶしように見る」「まぶしがる」は成り立つが、「*あかるいように見る」「*あかるがる」は成り立

たない。「まぶしい」は「いたい」「かゆい」「だるい」「くすぐったい」などと共に感覚を表わす形容詞のグループをつくっているのに対して、「あかるい」は対象の客観的な属性を表わす側の形容詞である点において、本質的に性格を異にしているのので、まったく置き換えの可能性のない文が多いことは当然であろう。

「あかるい」の成立に不可欠の条件は光の存在だと先に述べた。ところで、光が存在するためには、まず光源が必要である。物理学的な光の説明は別として、日常的な常識のレベルでは、光源から光が出て、その光がある空間を満たしたり、ある物体に強く反射したりして、それらの光の量がある基準を越えていると受け取られるときに、「あかるい」という語が使用される条件が成り立つ。「あかるい」の使用例を検討してみても、上のようなプロセスの各段階、すなわち光源・光・空間・反射する物体のいずれについても「あかるい」が用いられていることがわかる。以下、大体この段階を追って、実例をあげてしらべることしよう。

まず、光源そのものについて「あかるい」が用いられる事ができる。

○船の動揺の度に、腫物のやうに壁に取付けてある電灯が、明るくなつたり暗くなつたりした。(蟹工船 28)

○街路樹と明るい町の灯が、水のやうに窓の外を流れて行くばかりである。(帰郷 286)

○しかし、これら準星の多くは、アマチュアの望遠鏡でも見えるほど明るい。(宇宙の謎はどこまで解けたか 96)

のような例は、それと考えられる。また、光源から出る光線について「あかるい」が用いられることもある。

○その次ぎ、眼を明いた時には、明い光が棒のやうに、雨戸の隙間々々に突つ立つてゐた。(波 36)

○こんど眼が覚めてみると、光はますます明るかつた。(冬の宿 89)

○まばゆいほどあかるい光の中に、前面に大きく幸島があった。(高崎山 20)

のような例は、光線について「あかるい」が用いられている。この場合は「あかるい」を「つよい」に置き換えても、大体同じ事実をさし示すことができる。「あかるい部屋」「あかるい朝」などの「あかるい」を「つよい」に置き換えたらまったく意味をなさないのと異なっている。それは、「光」などにとっては「あかるい」「くらい」が主要な属性なので、「つよい」「よわい」という程度性だけを表わす形容詞への置き換えがある程度可能になるためだと考えられる。

上に、光源について「あかるい」が用いられた場合と、光線について「あかるい」が用いられた場合とを、一応区別して挙げたけれども、実際には光源そのものについてな

のか、光源から出ている光線についてなのかを判定しにくい例もある。たとえば、

○夜のことで波音は高くきこえたが、月がまことに明るかつた。(潮騒 78)

○ただただと京極の街を降りると、横に切れた路地の中に、菊水と云ううどんやを見つけて私達は久し振りに明るい灯の下に顔を見合わせた。(放浪記 125)

のような用例は、いずれにも解釈され得る余地がある。

光源ないし、光源から出る光線について「あかるい」が用いられた例を、光源の種類に従って大別すると、太陽・月・灯火・その他に分かれる。月は光源ではなく、太陽光線の反射で明るいに過ぎないことをわれわれは知っている。しかし「日が照る」「太陽が大地を照らす」「日がさす」「太陽が輝く」「日が上る」「日が出る」「日がいいる」「日がかげる」「太陽が没する」等の「日」または「太陽」を「月」に置き換えることができるという collocation の上の類似性がある。この事実、言語的には「月」を「日」と同類のものとして扱える面の大きいことを示すものと考えられる。まず、用例の数はいちばん少ない、月に関するものの中からいくつかを挙げよう。

○「お月さまは、明るいね。」

明子の指さす空を仰ぐ行一の目にも月が光っている。(くれない 47)

○女の耳の凹凸もはつきり影をつくるほど月は明るかつた。(雪国 97)

○いかに明るくとも月の光で、そんなにはつきりと見える筈はない。(田園の憂鬱 108)

次に、太陽や日光について「あかるい」が用いられた例を見よう。まず、「あかるい」が述語的に用いられている例として、

○日はまだほんのりと明るかつたので勤次はそつちこつちと空な草刈籠を背負つた儘歩いた。(土・上 135)

○低い明り窓が南に一つあるきりだけれども、棧の目の細かい障子は新しく貼り替へられ、それに日射しが明るかつた。(雪国 51)

のようなものがある。「あかるい」が連体修飾語として用いられている例には、

○窓は一つもなかつたのですが、其代り南向の縁に明るい日が能く差しました。(こゝろ 174)

○この明るい陽光の中でも、彼の垂れ下つた臉の下に、時々仏像の眼の光が、走るやうに思つた。(野火 144)

○あらゆる光線がその花の上に集まつたと思はれる程、明るい初夏の光は黄金の花びらの周囲で烈しく踊つた。(波 77)

のような例がある。「あかるく」の形で連用修飾語として用いられている例としては、

○障子にあかるくさしてゐた日かげもいつの間にか消えた。(末枯 37)

○雪の深い、そのくせ二月の末の陽の光が無性に明るく蒼空から降り注いでゐる街をあちこちと歩いた。(冬の宿 92)

○三面鏡の中に、左衛子は各々向きの違ふ自分の影を見た。斜めの朝日の光が明るく踊つてゐる板の床の上に。(帰郷 172)

などがある。

第3に、灯火などについて「あかるい」が用いられた例を見よう。「あかるい」が述語的に用いられている例には、

○日が暮れて、灯は明るくなるだろう。(暗夜行路・前 111)

○船が揺れる度に、ローソクの灯が消えさうに細くなり、又それが明るくなつたりした。(螢工船 89)

○さうだ、螢光灯の光があまり明るいので眼が覚めたのかも知れない。(中央公論 1956年5月360 谷崎潤一郎「鍵(二)」)

などがある。「あかるくなる」も「あかるい」に準じてあげた。以下にも同様のばあいがある。)連体修飾語として用いられている例には、

○ところが改札口には、明るい紫がかつた電灯が一つ点いてゐるばかり、誰も居ませんでした。(銀河鉄道の夜 273)

○帰りにお濠の端に出た時、黙つて歩いてゐる二人の前に、急に黒い影が二つ、くつきりと写し出された。二人はびつくりして少し離れた。彼等の真後に明るい街灯が立つてゐた。(波 226)

○電車をおりると、彼はすぐ宿に帰らないで、夜店をひやかして見る気になつた。風はまだ冷いが明るい灯の間をぶらりぶらり歩いてゐると、何の物思ひもなかつた。

(波 185)

などがある。「あかるく」の形で連用修飾語として用いられているものには、

○早速灯心を明るくすると、上人は微笑みながら続けたのである。(高野聖 43)

○時計屋の店には明るくネオン灯がついて、一秒ごとに石でこきへたふくろふの赤い眼が、くるくるつとうごいたり、(銀河鉄道の夜 253)

○くの字に曲つた階段を降りきると意外に内部は広く、電灯の光が明るくあたりを照らしてゐた。(鬮牛 92)

○明るく灯の光の漏れてゐた眼窓は残らずカーテンで蔽はれて暗くなつてゐた。(或る女・前 116)

などがある。「あかるく」に修飾される動詞として上例の中にみられる「する」「つく」などは、太陽や月の場合にはあり得ないであろう。

光源ないし光線について用いられている「あかるい」の用例の大部分は、上にあげてきた、月・太陽・灯火の3類で尽くされてしまう。しかしこの類からはみ出す、光源の種類も少しはある。その例を次にあげておこう。

○舳に砕ける波の音を聞いているうちに、街はもう黒い塊になり、僅かに火災の余燼が明かるく見えるばかりになった。(特集文芸春秋 1956年 赤紙一枚で 217)

○そしてほんたうにそのまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。(銀河鉄道の夜 310)

○“今世紀で最大か池谷関スイ星 長く明るい尾”(未知の星を求めて 320)

最後に、何の光と具体的に限定しえない光について「あかるい」が用いられた少数の例をあげよう。これらは、いずれも比喩的な表現の中で使われた「あかるい光」である。

○ふと、生徒の頭の上から頭の上を、股の間から股の間を、ボールが、手から手、手から手と、順々に送られて行く有様を見てゐた時、彼の腹の中に明るい光がきらつと差込んだ。(波 340)

○それがこのごろは、私をつつむ愛の温かさを待ち、望み、そして信じる事ができそうな気がしました。明るい光がどこからかさし込んで来るようなこちがしました。(出家とその弟子 137)

つぎに、ある光源ないしそれから出る光が、ある空間あるいはある物体を明るくしているという関係が、表現の上にはっきり示されている例を見よう。「《光源・光》が《空間・物体》をあかるくする」のようなタイプである。「中」「間」「外」など、空間性を明かに示す名詞が現れている例が次のように多い。

○まだ戸を閉めてゐない店が多くて、灯火が道路を明るくしてゐる。(帰郷 296)

○そしてその傾いた日ざしが、だんだん底冷えのしだした部屋の中を急に明るくさせ出した。(風立ちぬ 142)

○月影は、枝を潜つた大小の光の斑を落して樹林の間を明るくしてゐる。(帰郷 69)

○河の面に映る光線の反射は割合に窓の外を明るくして、降りそぐ寝の眺めをおもしろく見せる。(破戒 170)

以上は、光源ないし光を表わす名詞が主語となっている文例であったが、次に、ある空間を表わす名詞が主語となり、それがある光源ないし光によって明るいということが表現の上にはっきり示されている例を見よう。「《空間》が《光源・光》であかるい」、または「あかるい」が連体修飾語となって、「《光源・光》であかるい《空間》」という形式をとった例である。

○街はだんだん電気の灯で明るくなり、(くれない 34)

○やがて演奏が終つて、場内が急に灯火で明るくなつた時、(帰郷 238)

○売店の灯で明るい路地にも黒く人の影が出て来た。(帰郷 40)

次に、以上の2類と同じく、光源ないし光を示す名詞と、それによって明るくされる空間を示す名詞とが明示されているけれども、以上の2類のように両者の因果関係は明示されていない1類が考えられる。それは「《光源・光》のあかるい《空間》」という形式をとる結びつきで、次のような実例のものである。

○そして次の間へ行かうとしたのを、無理に洋灯の明るい眩しい居間の一角に坐らせた。(蒲団 34)

○春の日差しをあかるい書斎では、腰元お雪さんになった雪姫を相手に松太郎がのんびりと楽しい時をすごしていた。(週刊東京 1956年6月30日 28)

○つけ替へし電灯明るき厨にてわれにひとりの秋の夜なり(短歌 1956年7月 117)

○入れ忘れてしまった国旗の下をくぐって、月の明るい町に出てゆくと、濁った息をフッと一時に吐く事が出来た。(放浪記 115)

○君江はぶらぶら掘端を歩みながら、どこか静な土手際で電灯の光の明い処でもあつたらもう一度読み直さうといふ気もしたのである。(つゆのあとさき 105)

以上、光源ないし光と、それによって明るくされる空間とが、言語形式の上に示されつつ「あかるい」が用いられた例をあげてきた。次には、光源ないし光はあらわに示されず、空間・場所をあらわす名詞と「あかるい」とが結びついている例を見ることにしよう。これは「あかるい」のごく一般的な用いられ方で、実例が多い。まず、「あかるい」が述語として使われている例をあげよう。

○最初の上りにかゝるところの林は、よく繁り暗かつたが、次の林は疎らで明るかつた。(野火 89)

○点々たる星の空の下にクツキリと四角に浮き出すその家の広間の中は、煌々としてどの位明るいのかと想はれる。(青銅の基督 21)

○私はその戸のすき間から、そっと中をのぞきました。意外にも、中はあかるいのです。(笑の泉 1956年12月 64)

○眼の前がさあつと明るくなつて、ジョバンニは思はず何べんも眼を擦つてしまひました。(銀河鉄道の夜 265)

○彼はランプへ火をともしようと、マッチを擦る、ぱつと、手元が明るくなつた刹那に、(田園の憂鬱 118)

のようなものがある。「広間の中」「中」「眼の前」「手元」のように空間的な場所をあらわす名詞と「あかるい」が結びついて使われている。

○「かう明るくちあつまんないね」(多情仏心・前 236) <自動車の中>

○「済みません、あなた電気消して下さらない。」

「さう、消しませうね。」

「え、あたし、明るいと眠れないんですもの。」(波 274)

のように、場面や文脈から自明であったりして、場所を表わす名詞は示されずに「あかるい」が使われている例もある。次に「あかるい」が連体修飾語として使われている例を見よう。

○主人は硝子戸のはまつた、明い事務室で、椅子に腰かけて、(あらくれ 109)

○そして忽然と、洋式のロビー風の長椅子や卓を置いた明るい広間に出て、(帰郷 47)

○四谷の外堀公園は、江戸城の外堀であった所を埋めたてた広場で、幅のひろい明るい谷間になっている。(人間の壁・上 333)

○このあたりは舟もない、網もない、ただひろびろとした明るい砂浜だった。(人間の壁・上 300)

これまでに挙げて来た例で、場所に関係するものは、3次元的な空間を含んだ場所で、その空間が何らかの光に満たされて「あかるい」という例であった。次にここでは、たくさんの光を物体の面が反射して「あかるい」、あるいは透過光線によって物体の面が「あかるい」というばあいの使われ方を見よう。

「あかるい部屋」「あかるい公園」「あかるい町」のように、3次元的な空間を含んだ場所を表わす名詞と「あかるい」とが結びつきやすいことはこれまでに見てきた。これに反して、「あかるい手」「あかるい本」「あかるいす」「あかるい紙」のような、物体を表わす名詞と「あかるい」との結びつきはあまり起こりやすくはない。しかし、それらの物体の表面がかなり強い光で照らされるような場合には、起こることはある。

光の反射で物の表面が「あかるい」例として、次のようなものがある。

○山の上の秋の大気の中に朝日を受けて庭木の枝の一本づつが冷たく明るい。(帰郷 355)

○歩くにつれて両側の木々はますます明るく、樹皮の斑紋を鮮やかにして行つた。

(野火 66) <鉄砲の光や探照灯の光で明るい>

○土手の草は、その上に自分の影がうつるかと思はれるほど、明るかつた。(野火 116) <黎明の光で明るい>

「《光線》が《物体の表面》をあかるく照らす」という形式の、次にあげるような例も、「あかるく」が「照らす」の結果の状態を表わしていると思えば、ここに位置づけられる例であろう。

○赤い西陽が白木綿のカーテンを明るく照らしていた。(人間の壁・上 175)

○卓の上だけを明るく照らしつけるやうにシェードを掛けた電灯が低く垂れてゐるので、そこにゐる人達は、軀の前側だけに光を受け、背中の方は黒く影になつてゐた。(帰郷 48)

○それの上にはただ太陽が明るく頼もしげに照してゐるほか、別に未だ何の変りもないのは、今朝もよく見て知つて居る筈だつたのに。(田園の憂鬱 35) <「それ」はばらの花>

○火が彼の顔を明るく照し出すほど、いつかあたりは暗くなつてゐた。(野火 33)

また、「窓」「障子」のように、透過光線によって「あかるい」ことの多いものもある。

○窓が明かるくなって筆を止め、温泉へ入って、床に就いた。(新潮 1956年1月 223
舟橋聖一「白蘆」)

○出会頭に丈の高い女の妖怪が立つてるといふ伝説のある「女の坂」を曲ると、灯
台の明るい窓が高く見えはじめる。(潮騒 10)

○午後の光は急に射入って、暗い南窓の小障子も明るく、幾年張替へずにあるかと思
はれる程の紙の色は赤黒く煤けて見える。(破戒 243)

○彼女は明るい障子の方に本を近づけ、しきりに色を見わけながら云つた。(伸子・
上 146~147)

空や、空の一部分について、「あかるい」が用いられた例は、空間的な場所について
用いられた「あかるい」の例として挙げるべきであったかもしれない。しかし、空は見
かけ上、面的なものとも考えられるので、疑問を残しつつ、便宜上ここに例をあげてお
くことにしたい。

○かうして藍を溶いたやうに明るい空に花をかざして見てゐるせみかも知れぬ、と思
ひながら、その理由を求めようとする心持にはならぬ。(帰郷 126)

○あまりに明るいその空をときどき流れてくる雲切れは、白さを通り越してときどき
淡紅色に美しく煌いてゐた。(冬の宿 41)

○病人の顔色のやうに、空は爰に暗く、にごつてゐたが、北の方に一条明るいところ
が見えた。(波 258)

○山の縁がぼーっと明るくなっていますね。(出家とその弟子 149) <東山から月が出る
ところ>

上の、空に関する例と同様に、3次元的な空間と考えるべきではないかという疑問が
強いが、すまが、向うから来る光で「あかるい」例を便宜上、ここにあげておく。

○戸の隙間が隙を開いたやうに明るくなつた時鶏が復た甲走つて鳴いた。(土・上 23)

○再び目が醒めた時には、音のしてゐた雨戸の隙間が明るくなつてゐて、自分が同じ
所に寝てゐるのを、彼れは知つた。(生まざりしならば 215)

○お品が自分の股引と足袋とおつぎに提げさせて帰つた時は月は竊に隣の森の輪郭
をはつきりとさせて其森の隙間が殊に明るく光つて居た。(土・上 22)

海や川を遠くから見て「あかるい」という例も、やはり光の反射による面的なもの
の明るさの例に数えられよう。

○港とは別の方角の海が、丘の肩のところに明るく覗いてゐる。(帰郷 196)

○たゞ、お種を連れて左衛子が立ち止つた位置からは、花の咲いた枝を透して、入日
の光を流した青い海が明るく覗いて見え、春の午後らしく如何にも穏かであつた。

(帰郷 209~210)

○こつち側の窓を見ますと、汽車はほんたうに高い高い崖の上を走つてゐて、その谷
の底には川がやつぱり幅ひろく明るく流れてゐたのです。(銀河鉄道の夜 305)

○崖のはしに鉄道がかかるときは、川が明るく下へのぞけたのです。(銀河鉄道の夜 305)

次の例のような「あかるいかげ」という結びつきは、かげであるから反射が特に強いとはいえないが、かげとしては光が豊かなほうであるという意味で、ここに位置づけうる「あかるい」の使われ方であろう。

○春が来たので窓をあけ、強過ぎる光を遮つた窓掛けのレエスが、微風に軽く押されて、ふくれては、また、ゆるやかに戻つて行く。上着を脱いでブラウスである伴子の左の袖に、その明るい影の網目が、映つたり退いて行つたりしてゐた。(帰郷 170)

○颯が枝を差し伸べて明るい影を地面に落してゐた。(帰郷 269)

○自分一人が留守をしてゐるやうな、しんとした家の中には、外の青いものが、壁に明るい青い蔭を送つてゐる中に、茶の間で置時計が秒を刻んで行く音が際立つて大きく聞えた。(葉の実 43)

以上、空間的な場所や物体を表わす名詞と「あかるい」との結びつきを見てきた。こんどは時間に関係のある名詞などと「あかるい」とが結びついたらばいを見ていくことにしよう。

季節・日・一日の時間的段階を表わす名詞と「あかるい」の結びついた例に次のようなものがある。ほとんどの例で「あかるい」は連体修飾語になっている。

○顎髯の伸びた蒼白い顔は、明るい春先になると、一層貧相らしくみえた。(あらくれ 11)

○ほのぼのと明るく暖かい秋の暮のある日に、私は省線のK駅に出任せに降りてそのあたりの家をさがしてみた。(冬の宿 8)

○水も砂も船も一いろの紅硝子のやうに斜陽のいろに透き通る明るい夕暮に釣人が鯊魚を釣つてゐる広島太田川の宿。(河明り 260)

○月のいゝ、明るい晩であった。(くれない 45)

○私は、眠れず、どてら姿で、外へ出てみた。おそろしく、明るい月夜だつた。(富岳百景 59)

上のような例においては、光源は事実上、陽光または月光であるのが普通であろう。たとえば「あかるい晩」において、「あかるい」の主体は「晩」であり得ない。その点で、「あかるい《時間》」の形式は、「あかるい庭」のような「あかるい《空間・場所》」の形式とは性質が違っている。

空間の場合には、たとえば「街が灯火であかるい」「灯火のあかるい街」「灯火が街をあかるくする」のように、光源ないし光線と、空間を表わす名詞とが、「あかるい」を介して共存している例があることを、さきに見た。時間の場合にも、「月であかるい晩」「月のあかるい晩」のような結びつきは当然ありうる。しかし、「*月が晩をあかる

くする」のような結びつきは、起こりにくいであろう。

時間に関する形式名詞「うち」と「あかるい」が結びついた「あかるいうち」は、や慣用句的な性格を帯びて、次の例のように使われる。この場合の光源は、いうまでもなく陽光であるが、「日のあかるいうち」のように、その示されることは、むしろ少ないであろう。

- そして電車道のほうへ歩きながら、今からならお茶に言って来たように、明るいうちに帰れそうだと思った。(暗夜行路・前 257)
- さうしてその家族が日は没したにしても何時になくまだ明るい内に浴みをして女までが裂いた菖蒲を髪に巻いて、(土・上 126)
- 数時間で、朝長崎を出て、明るいうちに福江に着けた楽な航海だった。(旅 1956年 4月 122)

「あかるくなる」という結びつきにも、夜が明け朝になって陽光であかるくなるという意味の、慣用句化された使われ方がある。

- 結局、明るくなる時分まで飲んでるようとも、ちつとも構はない丸三を思いついて、あとは兎も角も、ひとまづそこへ落ちつくことにきまつたのだつた。(多情仏心・前 217)
 - 「たうとう明るくなつてしまつたわ。帰りますわ。」(雪国 46)
- しかし、「あかるくなる」には、これとは別に、一般的な使われ方がいくらかも存在することは次の例に見られる通りである。
- けたましくベルが鳴つて、眼の前に緞帳が重たく下りて来た。急に座席が明るくなつたと思ふと、彼の空想も忽ち消えてしまつた。(波 173)
 - 片側町になつて、人や車が後へ走るのが可笑しいと、其を見てゐる中に、眼界が忽ち豁然と明くなつて、田圃になつた。(平凡 54)

[01] 色の性質について、「白色がかっている」という意味に使われる「あかるい」。視覚にもっぱら関係する点は、[00]と同様である。これは、「色が黒ずんでいる」という意味の「くらい」と対応している。まず、例をあげよう。

- しかしもし淡色がお嫌いなら藍色のような明るい紺か、または赤葡萄酒色がよろしいでしょう。(若い女性 1956年4月 280) <スーツの色>
- 栗のいがのうすい緑、メロンの明るい緑、すき通るようなぶどうアレキサンドリアの、水を感じさせるような緑が、古九谷の鉢の深い青色の中に入っている。(主婦之友 1956年10月 42)
- この薄曇りさへ、春のやはらかさであつた。野には麦が青々と萌え、松の樹々もまだ芽吹かぬまでも、どことなく明るい緑の色調を持つて若やいでゐた。(冬の宿

○材料と用具 中細毛糸,地糸(明るいえんじ)六オンス,(婦人倶楽部 1956年11月付録 ママの手で……可愛いセーターの編み方 89)

○まず壁塗りにはビニレックス(ラテックス・エマルジョン・ペイントの一つ)をつかい、寝室の白い天井と壁を明るいうすむらさきにしてみた。(科学誌売 1956年10月 82)

以上のような例における「あかるい」は、色名を表わす名詞を修飾しており、{00}の「あかるい」が空間・場所などを表わす具体名詞と直接に結びつき得ると相違がある。表わしていることがらの点でも、{0}の「あかるい」は、心理学でいう明暗感覚に関する属性であるのに対して、ここの「あかるい」は色彩感覚に関する属性である。色を感覚的に区別するうえで、色相(hue)・明度(brightness)・彩度(saturation)の3つの属性がある。ここの「あかるい」は、色の3属性の1つである明度が高いことに応ずる意味を持っている。白一灰一黒の、いわゆる無彩色の系列においては、色相や彩度の区別がなく、明度の差によってだけ互いに区別される。そのうち、白はすべての色のなかで明度が最高、黒は明度が最低の色で、その間に明度の異なる灰色がいくつもあり、これを明度順に並べると、他のあらゆる色の明度を比べる基準となる。色彩に関する「あかるい」という属性の背景には、このような事実が横たわっている。

物体色などの場合に、反射能が低く明るさの少ない表面部分は黒味を帯びた色に見えるという事実がある。{00}の「あかるい」と{01}の「あかるい」とは、事実の上ではつながりはある。しかし、上に述べたように、{01}の「あかるい」は、物体などを表わす具体名詞とは原則として結びつき得ないという特色において、{00}の「あかるい」とは言語形式として区別されうる。たとえば、「あかるい海」「あかるい血」が「あかるい青をした海」「あかるい赤色の血」という意味にはなり得ないであろう。なお、関西方言で、{00}の「あかるい」が「あかい」と言われる地方でも、{01}の「あかるい」は「あかい」でなく「あかるい」と言われ、この2義は別の言語形式で表わされるようである。

さきに列挙した例は、「紺」「緑」「えんじ」等、特定の色名を表わす名詞を「あかるい」が修飾しているものであった。次にあげる例は、「あかるい」が色名を総称する名詞「いろ」を修飾しているものである。こういう場合は、文脈から、具体的にどういふ色について「あかるい」と言われているのかが、わかることもあり、わからないこともある。

○海は、春らしく光の淀んだ大気の裡に、睡つてゐるやうに、もの静かに明るい色をひろげてゐる。(帰郷 194)

○果物屋の店が、明るい色を拡げてゐる。(帰郷 156~157)

○修正化粧のために地色のファウンデーションのほか、三色ぐらい明るい色と、三色ぐらい暗いファウンデーションを用意する。(主婦と生活 1956年1月付録 美容誌本 17)

○節子は、私の来てゐることはもうとうに知つてゐるらしいが、私がそんな庭からはひつて来ようとは思はなかつたらしく、寝間着の上に明るい色の羽織をひつかけたまま、長椅子の上に横になりながら、細いリボンのついた、見かけたことのない婦人帽を手でおもちやにしてゐた。(風立ちぬ 79)

さきに、色の属性について言う「あかるい」は、原則として物体などを表わす具体名詞と直接には結びつかないと考えた。そして、この言語的事実を、光の明暗に関する「あかるい」と色彩に関する「あかるい」の意味が区別されるべきであるという論拠の一つとした。ただし、次の例のように、色彩に関する「あかるい」であると考えられるにもかかわらず、具体名詞と直接に結びついた例もないとは言えない。

○サランのクッションと藤のstuhl (椅子) (中略) 明るいプリント地のクッションを作って組合せれば、室内も楽しくなりましょう。(婦人倶楽部 1956年6月 465)
これらは「あかるい色のプリント地」「あかるい色調のプリント地」の意味に解するものが自然だと思われる。

{00}の「あかるい」は、たとえば「あかるい野原」「あかるい窓」「あかるい空」のように、「野原」「窓」「空」の常にもっている性質ではなく、その場限りでの状態であることが多い。時間の変化や照明の有無などによって、いくらでも「くらい」状態に変化しうる。ところが、{01}の「あかるい」は、たとえば「あかるい緑」はいつでも大体「あかるい緑」であり続ける。照明の強さや色にかかわらず、ある物が本来もっている色を保持しようとする心理的な事実があって、色の恒常現象 (color constancy) と呼ばれている。もっとも微細に見れば、たとえば蛍光灯のもとでは服装や肉の色が「くらくらく」見えるという事実もある。しかし、それはある色が「くらくらく」変化するのではなく、「くらくらく」見えるのだという考え方が普通であろう。すなわち、太陽光のもとでの色が、その物の色であるという考えが暗黙の前提になっている。したがって{01}の「あかるい」は、{00}の「あかるい」とは異なっており、持続的・恒常的な性質を意味していると考えられ、この点からも{00}と区別することが妥当であると言えよう。

なお、「あかるい」のこの{01}の意味は、(あまりはっきりとは) 記述していない国語辞典もある。

{1} 物事から与えられる印象が、{00}の「あかるい」と相通ずるものをもっている。あかるい({00}の意味での) 感じがする。

以上のようにまとめてみた「あかるい」の意味領域は、以下に調べるようになりいろいろな方面にわたっている。{0}と同じく、{1}の「あかるい」も大体、「くらい」と対立している。{1}を{00}から区別して立てたけれども、いろいろな程度に{00}が媒介義として生き残っている場合もあると考えられる。

{1}の「あかるい」は、情緒的に不快ではなく快の側に属し、プラスの価値を付随さ

せていることが多い。

[11] 気持・心ははればれとして、ほがらかだ、という意味。たとえば、

○思ひがけない人の来訪に、行介は今まで鬱いでゐた気が急に明るくなつた。(波 377)

○見えない形を段々と生んで行くのが、仕事で洋服のデザインを考案してゐるのに似てゐるやうで、急に心が明るく、陽気な感情に充ち溢れ、ひとりでに微笑して来てゐた。(帰郷 187)

○ほとんど鳥瞰的に見おろしてゐた少年の心は、軽く、明るくそして愉快だつた。

(多情仏心・前 16)

のような例における「あかるい」である。

[0]において見た「あかるい」の基本的な具体的な意味と、この「あかるい」の意味との関係は、直覚的には自明のようでありながら、ことばで述べようとするとむずかしく感じられる。ただ、この関係について示唆的だと思われる例をあげておこう。

○おとつい行った株屋から速達が来た。×日より御出社を乞う。私は胸がドキドキした。今日から株屋の店員さんだ。私は目の前が明るくなった様な気がした。(放浪記 175)

○焚きつけだけはよく燃えた。それが燃え盛ると彼の心も明るくなつた。(田園の憂鬱 72)

気持について言われる、この「あかるい」は、「うれしい」「たのしい」など、主観的な感情を直接に表わす形容詞とかなり似寄りを示すばあいがある。たとえば、

○戯が喜ぶと、彼の心もひとりでに明るくなつた。(戯 197)

の「あかるく」を「たのしく」に置き換えても一応文が成り立つ。しかし、主観的な感情を表わす形容詞は、

わたしは うれしい。 わたしは たのしい。

わたしは 愉快だ。

わたしは かなしい。 わたしは くるしい。

わたしは さびしい。 わたしは 憂鬱だ。

のような文を成り立たせることができる。これに反して、

*わたしは あかるい。

という文は、話し手の心の状態を表わす文としては成り立たない。

*わたしは 朗らかだ。 *わたしは 晴れやかだ。

*わたしは 陰鬱だ。 *わたしは 暗い。

等も同様である。これらの形容詞でも、

わたしの心(気持)は 明かるい。

わたしの心(氣持)は ほがらかだ。

// 陰鬱だ。

のような文は成り立たせる。これらの文は、自分の氣持を対象化して、その状態を述べている。すなわち、「あかるい」は「うれしい」「たのしい」等のような、主観的な感情を直接に表わす形容詞の側ではなく、「ほがらかな」「はれやかな」等とともに、感情の状態を客観的に表わす側の形容詞に属していると考えられる。

この意味の「あかるい」には「あかるくなる」の形を代表とするような、「あかるい」状態に変化することを表現している用例が多い。(「くらい」との対比があるために、氣持の変化を表わすのに便利で愛用されるのであろうか。)'「あかるくなる」の例は、上にあげて来た例の中にもいくつもあった。

○行介も箸を動かしながら、そんなことがいへるほど明るい氣持になつた。(波 218)

○見慣れたいろいろのものをみると次第に心持が甘く明るく変つて行くのであつた。

(青銅の基督 64)

なども「あかるくなる」に準じてみられる例である。「くらい」と並立させて、氣持が目まぐるしく変転することを表わした例もある。

○斯う考へて、丑松の心は幾度か明くなつたり暗くなつたりした。(破戒 72)

○暗いのと明るいのと、氣持が転々と変っていく。(オール讀物 1956年5月 32)

ある物事が、ある人の心を「あかるくする」という例もある。

○お栄と結婚するという考えは彼の氣持ちを明るくした。(暗夜行路・前 183)

○若し今年も失敗したら、また暗い氣持に落込んだに相違ない。が、一通の通知状がすつかり彼を明るくした。(波 339)

すぐ上の「波」の例の「彼を明るくした」のように、「氣持」「心」などを介さずに、人を表わす名詞と「あかるい」の結びついた例は少ない。資料内では、ほかに次の1例がある。

○ふと、私は明るくなって、口笛でも吹きたくなった。(放浪記 115)

[12] 人間の表情や動作のようすなどが、楽しそうで晴れやかだ。表情・動作などに、楽しい愉快な氣持が表われている。

「顔」「表情」「声」など、表情を表わす名詞と結びついた「あかるい」はこの意味になる。

まず、「顔」と結びついた例を見よう。「あかるい顔」とは、分析的に観察すれば、眼の輝き、顔面の血色、顔のいろいろな筋肉の状態や動きなど、さまざまの微妙な条件が見出されるであろう。しかし、われわれは日常「あかるい顔」を直覺的に瞬時にして了解している。「あかるい顔」とは、それを見たばあい、顔の持ち主が「あかるい」([11]の意味での)氣持でいるなど直覺するような、そういう状態の顔のことであろう。

○それと同時に父の顔が急に明るくなつたのを私は認めた。(風立ちぬ 78)

○「兎に角夜になつたら銀座で逢はう。其時にきめやう。」

「えゝ。さうして頂戴。」

と君江は急に明るい顔になつて一足先にばたばたと下へ降り、をばさんの手から雑巾を奪ひ取つて、手づから清岡の靴を拭いた。(つゆのあとさき 46)

○いままでに見たこともない洋平の、そして、ついさっきまでの、あの楽しさに満ちた明るい顔は苦渋に歪んでいる。(婦人生活 1956年3月 197)

上の例からわかるように、表情の「あかるい」という属性は、その時の状態であつて、いくらでも変わりうるものである。永続的な属性である必要はまったくない。そして、表情が「あかるい」のは、その人の気持がその時に「あかるい」ことの現われであることが多い。しかし、これは絶対的な条件ではないようである。

○彼女は子供たちに心の動揺を見せまいとして、つとめて明るい表情をつくって、計量の仕事をつづけた。(人間の壁・上 141~142)

○支部長はそのよんだん空気を救おうとするように、明るい表情で言った。(人間の壁・上 175)

は、そういう例である、しかし、たとえば、

○伍一は憤然「出よう、不愉快だ!」といったが、実は田辺に勝った快感に表情を明るくしていた。(小説の泉 1956年10月 133 大林清「美しき毒蛾」)

のように、本人の意図を裏切つて「あかるい」表情になってしまうことがあるのもわかるように、「あかるい」気持は「あかるい」表情になって表われるのが普通のばあいだといえよう。

○先生の顔は、いま冴え冴えとして明るかった。この大勢の子供たちを教えそだてて行くことの喜びと緊張とが、彼女の感情を生々と明るいものにしていて。(人間の壁・上 89)

は、「あかるい」感情が「あかるい」顔を伴っていることが文面に明示されている例である。意図的な「あかるい表情」はむしろ特殊なばあいであると考えてよいだろう。

「目録」「ひとみ」と結びついた、次のような「あかるい」の例も、ここの意味に属する。

○「まあ……小野崎さんと……?」

と、明るい目録で受けて、(帰郷 304)

○変っているのはその婦人のなにか希望に燃えている明るい眸と肩に担いだ荷物だ。

(婦人生活 1956年6月 255)

「声」は人間のからだの一部分ではなく、からだの一部分である音声器官で作られる音であるが、その微妙な音色のちがいなどによって感情などをよく反映する、きわめて表情的なものである。「声」と結びついた、次のような「あかるい」の例も、「顔」

「目」などと結びついた「あかるい」とよく似た性質をもっていると考えられる。

○声が明るくなつた。伴子から見ても、父親の体内に忽然と陽気な血が湧いて動き出したやうな工合で、顔色も急に若々しく見えた。(婦郷 276)

○明るい声とともに、黒目が輝いた。(婦郷 312)

○などと駒子が言つても、消防の掛声や人々の足音に調子づいて、明るくはずんだ声だつた。(雪国 169)

○志野田建一郎は手のひらのばら銭をおぼさんの眼のまゝに投げ出すようにして、「お早う」と明るく声をかけた。(人間の壁・上 51~52)

○「ハレルヤ、ハレルヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびき、(銀河鉄道の夜 313)次に「笑い」に關係して使われた例をみよう。

○伴子は、無邪気な感じで明るく笑つた。(婦郷 274)

○分会長は色の黒いしなびた顔に、意外なほど明るい笑いをうかべてから、廊下に出るガラス戸を引きあげた。(人間の壁・上 27)

○ともすれば、じめじめしがちな乏しい暮しの中で、明るい笑いの中心になり、(それいゆ 1956年39号 24)

○独立への途を考えてやりたいという申出に、ラーヤさんの顔は、一か月ぶりで明るい微笑に輝いた。(婦人倶楽部 1956年10月 253)

「笑い」の場合にも、作為的に「あかるく」よそおうことの明示された例がある。

○見ていた明子は、途中から振り返った行一に、思いつき明るく笑つて見せた。(くれない 38)

○明子はまたわざと明るく笑つたのであった。(くれない 38)

次に、「言う」「答える」「うなづく」等のコミュニケーション的な活動の様子について用いられている「あかるい」がある。

○伴子は思はず、明るく云つた。(婦郷 278)

○しかしどう気をつけて見ても、その間に普通以上の感情が潜んでゐるとは考へられない位、米子が関に就いて語る態度は明るくこだわりがなかつた。(真知子・前 52)

○「ほんたうに。」

と、伴子もある初夏の日のことを思ひ出して明るく応じた。(婦郷 299)

○「さうですわ。」と、女はこともなげに明るく答へて、しかしじつと島村を見つめてゐた。(雪国 40)

○「うむ、それッね。」

と、画家は明るく頷いて見せた。(婦郷 205)

おわりに、「過ぐす」「生きる」「生活」など、人間活動に関する広い意味をもつ動詞や名詞を修飾している「あかるい」をあげよう。

○明るく逞しく生きる達次郎(牧真介)たちと語り合つて春樹(森雅之)の心もなご

んだ。(婦人倶楽部 1956年3月 45)

- 皆様方と共に、今後力強く明るく有意義に過すことが出来ればお互いにどんなに倅でしょう。(トルストーリー 1956年10月 200)
- 私はこうした希望のない暗い生活を少しでも明るく楽しくうるおいのある生活にするために、知人に手紙を出したり、昔の人の伝記小説などを出来るだけ読んだり、日記をつけたりしていました。(人生手帖 1956年5月 79)
- 学習に必要な明るい生活と楽しい環境とをあたえ、学ぶことの喜びを知らせてやることが第一の条件である。(人間の壁・上 160)

次の例は「明るく」に修飾されるべき動詞が表現されていないが、上に準じて考えられる。

- 彼女は多少の指導をしてやる。そして大多数の挙手によって週訓がきまる。
(仲よく、明るく) (人間の壁・上 96)

[13] 人の性質が、明朗で陽気だ。

まず、「性質」「性格」「人柄」などの抽象名詞と結びついた「あかるい」の例を見よう。

- 南田 性格がすごく明るいですよ。そのくせ人からはものすごく陰影があるといわれるんです。(週刊サンケイ 1956年10月7日 57) <自分の性格>
- 日ごろからハナさんの明るい性質は、近所の人々に親しまれていたのだが、その顔からは笑いが消え、神経衰弱になった。(週刊新潮 1956年10月29日 21)
- 高等学校で太田はテニスの選手をしていた。学校の成績もよく、明るい性質で腹を立てたりすることがなかったが、(むらぎも 26)
- 亡くなった藤島さんは荻須の潤達で明るい人柄と堅実な才能を愛していたようでありました。(美術手帖 1956年5月 56)

次にあげる例も、上に準じて考えうるものであろう。

- 何しろ、表面のあたりはどこまでも明るく気さくで、それで肚の底になんかしつかりしたものが感じられる、——さう云ふのが一番今時の女の心を惹くらしいし、また本統にさう云ふ風なら、出来てる人間に違ひないんだが……。 (多情仏心・前 43)
- 同じ追われる民族でも、このゴザックの人たちには明るい呑気さがあった。(音楽之友 1956年6月 152)
- いじけた、陰性な子供だ。学習成績は中くらいであるが、子供らしい明るさのない子だ。(人間の壁・上 218)

この意味の「あかるい」は、次に例をあげるように、人を表わす名詞と直接に結びつくこともできる。「あの人はあかるい」「あかるい人」のようなタイプであるが、もちろん「あの人は性格があかるい」「性質のあかるい人」のようなタイプもあり得る。

○こんな明るい、素直な青年が日本にいるだろうか。(実業之日本 1956年2月1日 70)

○正直で勇敢で、いさゝかおっちょこちょいな所もある明るい少女。(映画ファン 1956年10月 167)

○教室のなかで先生たちが、明るい子供、のびやかな子供、素直な子供を造ろうと念願しているその努力が、みんな家庭でぶちこわされている。(人間の壁・上 212)

「あかるい気持」「あかるい顔」など、[11][12]の「あかるい」は、特定の時間における気持や顔などの状態であった。ところが、「あかるい性格」「あかるい人」などの「あかるい」は、特定の時間における状態ではない。もっと持続的な性質を表わしている。もっとも、「あの人はこのごろ、まえよりも明るくなった。」などと言えるように、不変の性質であるわけでもない。しかし、「あかるい顔」は一瞬の後には「くらい顔」にもなりうる。それに反して「あかるい性格」は目まぐるしく変わるということはない。この点でも[12]の「あかるい」と、[13]の「あかるい」とは性質に違いがある。

[14] ものごとの与える感じが、晴れ晴れとして楽しい。

[11]～[13]と違って、人間そのものからは離れたものごとに関して使われる「あかるい」である。しかし、人間と非常に密接な関係のあるものごとに関している。

[14] 会合・組織などで、人々が集まってかもし出す雰囲気などが、かたくなるしくなくて、楽しくなごやかな状態や性質だ。

○映画スタア矢島ひろ子、司葉子、堀恭子さんらの御挨拶があって、明るく楽しい集いの幕を閉じました。(平凡 1956年1月 180)

○あなたどんな結婚式をお望みですか。(中略) また、儀式ばったことは避けて、明るく楽しい式にしたいとか、それぞれに晴れの日の想いに胸をふくらませていらっしやることと思います。(主婦と生活 1956年10月 491)

○たがひの心の底に何がわだかまつてゐたとしても、この朝餉は私が霧島家でした食事のうちで一番明るいものであつた。(冬の宿 38)

「あかるい家庭」もこの意味に解せられる。また、「明るい社会を育てる貯蓄」「明るい窓口」のような標語などの「あかるい」も同様であろう。

この意味の「あかるい」は、次の例のように、「雰囲気」「空気」などの名詞と結びついて現れることもある。

○だから、他からみると、誰れが偉い人なのかわからない。それだけに雰囲気は明るく、のんびりしている。(小説サロン 1956年12月付録 アドレスブック 35) <映画の撮影所について>

○兵法の道場と云えば、血気盛んな若者の集りで荒っぽく、時には殺気をはらむような事も珍らしくないが、平井道場は明るく和やかな空気が漂っていた。(読切俱樂部)

○見通しは明るい。環境が好転したので、当社は既存事業でも伸びるものが多い。

(ダイヤモンド 1956年11月13日 75)

のような例がある。

この意味にも「楽しい」という要素が含まれている。それで、大きく言えば〔1〕の中に所属させた。しかし、これまで見てきた「あかるい気持」「あかるい顔」「あかるい人」「あかるい作品」などは、いずれも特定の時間からみて未来にかかわりを持つ状態や性質ではなかつた。ところが、この意味の「あかるい」は未来にかかわりを持っている点で特異性がある。

〔2〕ある人が、その物事についてよく知っている。精通している。そのことにくわしい。以上のような派生的な意味をもっている。

〔00〕の意味で「あかるい」状態は、ふつう物がよくすみずみまで見える状態である。それは、ものごとについて細部までくわしく知っている状態と、ある類似性をもっている。このことが、〔2〕の意味を基本的な意味に結びつけていると考えられる。

この意味の「あかるい」は、まず、かならず人を主体とする点で特異性がある。人が主体になるばあいには、ほかに〔13〕があった。たとえば、「あの人はあかるい。」と、性格について言うようなばあいである。しかし〔2〕は、「～に」という形で、精通している知識の方面が明示されるという点で、〔13〕と構造的にもはっきりと違っている。すなわち「あの人は～にあかるい」という形式において、はじめてこの意味があらわれる。たとえば、

○私は機械のことには、あまり明るくないのだし、写真の趣味は皆無であり、(富岳百景 71)

○記者は二人とも案外銀座のカツプエーの事には明るくないと見え、別に心当たりもない様子で、(つゆのあとさき 64)

○あの兄は天性芸道に明るく悟りが速いから捨てゝ置いても進む所までは進む(春琴抄 145)

○すると、そこに立つてゐた中で一番長い間菊と懇意だつた生花の師匠が、菊が衣裳持ちで、(中略)故実にも明るくて、祝儀不祝儀につけて、贈りものや挨拶の不審なことをたづねると、噛んで含めるやうに念入りに教へてくれたことなど話して、(群像 1956年9月 41) <「菊」という人が「故実にも明るい」の主体>

○駒田は多年或新聞社の会計部に雇はれてゐたので、原稿料の相場にも明るく又記者仲間にも知己が多いので、(つゆのあとさき 44)

などの例では、主体である人と、「～に」の形による知識の対象が文中に明示されており、典型的な用例である。

次の例では、「～にあかるい」の含まれている文自身の中には、主体である人は言い

表わされていないが、前にある文から、その主体はあきらかである。

○彼女は亡夫の遺児を育てあげて東京の大学へ出してる。(1文省略) 大体が男相手のしかも決してやさしい稼業ではないから気性も男まさりに強くなりがちなのであるが、琴の糸道に明るくて女らしい優しさを失ふまいとつとめてる程の嗜みもそなへてる。(厚物咲 33)

「～にあかるい」が連体修飾格に立って、人を表わす名詞にかかることもある。たとえば、

○暮をどうして越さうかと、気をいらいらさせてゐるお島に、そんな事に明い職人が説き勧めてくれた。(あらくれ 166)

○世間に明いその男は、お島たちの見も聞きもしたことのないうやな世界を知ってゐたが、(あらくれ 243)

○「すぐ、あがるでせう。ここの土地に明い、男女二人づれ。二人とも二十七八歳と、いふのですからね。」(本日休診 46)

○いよいよ不審に思ひながら、地理に明い清岡は感づかれまいと、男の足の早さをたのみにして、ひた走りに町を迂回して(つゆのあとさき 39~40)

○この発見は当然將軍の日常に明い往時の従卒へ疑いの眼を向けさせることとなった。(宝石 1956年10月 95)

○そして小説家もまた事物事象の因果関係に明い人でなくてはならない。(哲学以前 161~162)

「～にあかるい」が連体修飾格に立つ点で上と同様であるが、直接人を表わす名詞にかかわるのではなく、人の「特長」にかかっている例がある。「採算に明い」という、カッコ付きの連語は、「特長」の内容を規定する関係にある。

○そして、後に、硫酸とかアルミニウムとかいった、電気を原料とする新興事業をはじめた頃になると、経営者としての氏には、「採算に明い」特長が明らかに観取される。(ダイヤモンド 1956年11月6日 118)

以上が、資料内に現れた。〔2〕の意味の用例のすべてである。13例がみな「～に」の形で知識の対象を明示している。これはおそらく、〔2〕の意味にとって絶対的な条件だといえるであろう。

～に くらい

～に くわしい

～に うとい

～に たくみだ

～に たけている

のような構造をもち、人間の知識や技能の高低を表わす言いかたのグループの中の1員としての位置を占めているといえよう。

「～に」の形で現われている名詞を、上に引用した用例から抜き出してみよう。

機械のこと

カツフェーの事

そんな事

と、形式名詞「こと」によるものが3例あり、その他は次のようである。

世間 地理 この土地 原稿料の相場 採算 将軍の日常・芸道
故実 琴の糸道 事物事象の因果関係

以上のようにさまざまな方面にわたっており、別に制限がありそうには思われない。知識の対象になりうるものごと（といえはすべてのものごとであるかもしれないが）はすべて、「～に（あかるい）」の形で表わされる可能性があると思われる。

ただし、「～にあかるい」の形式をもつ〔2〕の意味は、やや文章語的だという、文体的な制限もっている。上にあげた全13例の中で、会話文の中に用いられた「本日休診」の1例があるが、ごく日常的な談話などではあまり多くは使われないだろう。

主要参考文献

- Bendix, Edward H. : Componential analysis of general vocabulary : the semantic structure of a set of verbs in English, Hindi and Japanese (Indiana University, 1966)
- Bierwisch, Manfred : Some semantic universals of German adjectives "Foundation of Language" 3 (1967)
- Hattori 服部四郎『英語基礎語彙の研究』(ELEC 言語叢書・三省堂, 1968)
- Ikegami 池上嘉彦 : The semological structure of the English verbs of motion : a stratificational approach (三省堂, 1969)
- Kunihiro 国広哲弥『構造的意味論—日英両語対照研究—』(ELEC 言語叢書・三省堂, 1967)
- Kunihiro 国広哲弥『意味の諸相』(ELEC 言語叢書・三省堂, 1970)
- Leisi, Ernst (鈴木孝夫訳)『意味と構造』(研究社, 1960・増訂版 1971)
- Lyons, John : Structural semantics : an analysis of part of the vocabulary of Plato (Oxford, B. Blackwell, 1963)
- Miyazima 宮島達夫「意味の体系性」『教育国語』4 (1966)
- Mizutani 水谷静夫「語釈一本格的辞書の論の前座」『国語学』47 (1961)
- Nida, Eugene A. : Tward a science of translating : with special reference to principles and procedures involved in Bible translating (Leiden, 1964)
- Ullmann, Stephen (池上嘉彦訳)『言語と意味』(大修館, 1969)

索引

語彙索引

1. 語の意味・用法について言及している部分だけでなく、その語の用例をあげた所、その語を語例としてあげた所なども、たいてい所在を示した。
2. その語を見出しに掲げて記述してある部分は、初めのページを太字にした。また「個別的記述」で詳しくとりあげたものは、初めと終りのページを太字にした。

—あ—

あい (いろ) の 85
 あいくるしい 116, 184
 あいらしい 36, 116, 208~212
 あおい 34, 43, 65, 67, 68, 80
 ~82, 84~86, 88, 89
 167, 175, 176, 263~265
 あおぎいろい 80
 あおくさい 105, 107
 あおじろい 80, 87, 89, 267~
 268
 あかい 34, 35, 65, 67, 68, 80
 ~86, 89, 139, 167, 175
 186, 187, 263~265
 あかぎいろい 80
 あかぐろい 80, 87
 あからさまな 137
 あかるい 14, 80, 81, 88, 89
 94, 110, 111, 172, 176
 189, 397, 434~456
 あきっぱい 112
 あけすけな 137
 あさい 69~73, 78, 80, 88
 170~171, 235~247
 あさぐろい 89, 265~267
 363
 あぎやかな 80, 81, 88, 89
 140
 あたたかい 172, 188, 189
 192
 あだな 119, 289~291
 あたらしい 24, 68, 157, 167
 172, 175, 219~223
 あたりまえな 140~142
 あつい (厚・篤) 14, 66, 69

~74, 78, 171, 229, 231
 355~359, 361, 365
 あつい (暑・熱) 35, 41, 64
 65, 162, 172, 182, 188
 189, 192
 あつかましい 173
 あっけない 185
 あつぽったい 69
 あでやかな 119, 288~289
 あどけない 115, 283~285
 あばずれな 119
 あぶない 59, 60~61, 62
 あぶらっこい 98, 103
 あべこべな・の 14, 45, 50
 51~52
 あまい 7, 14, 65, 67, 69, 94
 98~100, 104, 105, 134
 135, 173, 176, 189, 190
 193, 272~274, 327~
 329
 あまずい 102
 あまずっぱい 98, 102
 あまったるい 14, 98, 102
 190, 193, 272~274
 あまにがい 102
 あやうい 59, 61~62
 あやうく 62
 あらい 69, 70, 75, 76, 78
 669, 171, 230, 320~322
 あられもない 120
 あらわな 155, 314~315
 ありがたい 193
 あわい 80, 169
 あわれな 36
 あんしんな 193, 194
 安全な 59, 62~63, 157, 158

—い—

いい気味な 178, 179
 意外な 185
 いかがわしい 121
 いかめしい 177
 いがらっぽい 102
 いきな 24, 124
 いくじ (が) ない 124, 292
 いくぶん 142
 異質な 14
 いじっぱりな 129, 173
 いじわるな 14, 109, 133
 いそがしい 30, 169, 172
 いたい 21, 23, 26, 29, 34, 36
 39~41, 436
 いたいけな 116
 いたいたしい 117
 偉大な 174
 いたく 154
 いちおう 142
 いちじるしい 139, 143, 145
 ~146, 154
 いちばん 161
 いちもくさんに 139, 312~
 314
 いっさんに 139, 312~313
 いっしょうけんめいな 14
 139, 174, 308~311, 333
 ~335
 いっぱいな 14, 156~158
 いっぱいに 109, 175, 278~
 279, 336~337
 いとしい 22, 37, 193
 いなせな 124
 いびつな 65, 190, 199, 353
 いやな 14, 21, 22, 25, 34, 35
 180, 188, 189, 193, 194
 199~204
 いやに 154
 いやらしい 180, 181
 異様な 52, 57~58
 いらだたしい 33
 いろじろな・い 89, 268~
 269

いろっばい 114, 119, 289~
291

陰鬱な 447, 448
いんぎんな 133
いんげんな 195, 196
印象深い 403
淫蕩な 121
淫奔な 121
淫乱な 121
淫猥な 121

—う—

ウェットな 172
うすあおい 80, 84, 85, 176
263~265
うすあかい 80, 82, 84, 86
175, 263~265
うすあかるい 176
うすあまい 98, 102, 176
うすい 66~74, 78, 80, 81
88, 140, 169, 171, 229
231, 359~367, 413
うすぐらい 157, 158
うすぐろい 89, 176, 263~
~267
うすじろい 176, 263~265
うずたかい 69, 79, 235~238
244~247, 258~261
うちきな 127, 129, 196
うつくしい 89, 119, 186, 189
192, 288~289
うつりぎな 134
うとい 14, 455
うとうとしい 13
うぶな 24
うまい 16, 98, 99, 104, 139
192, 311~312
うやうやしい 133
うらはらな 14
うらめしい 35
うらやましい 26~29, 31,
178
うらわかい 121, 190
うるさい 14, 41, 90, 95, 96
192, 195
うれしい 21, 22, 26~31, 38
157, 158, 173, 177, 193
~195, 447, 448
うわきな 133

—え—

鋭利な 68, 221
えがらっばい 98, 102
えぐい 98, 102
えごい 102
エッチな 121
えらい 24, 143, 148~149
174
えらく 143
えんきよくな 128, 129

—お—

おいしい 98, 104, 105, 167
170, 189, 192
お(老)いた 68, 223~226
おおい 156~158, 162, 163
172~174, 189, 329~
332, 330, 350, 384
おおがらな 79, 250~252
おおきい 21, 25, 65~71, 73
75, 77~79, 90~93, 95
143, 163, 166, 171, 183
191, 230~233, 250~
252, 256~258, 321, 384
おおくの 330
おおげきな 128, 129, 137
おおしい 123
おおっぴらな 137
大粒の 321
おかしい・な 36, 52, 58, 182
193, 194, 204~208
おきゃんな 120
おくびょうな 133, 195, 196
198
おごそこな 177
おこりっばい 112~114
おさない 172, 222, 284, 285
315~320
おしい 22
おしゃべりな 135
おしゃまな 122
おしゃれな 199
おせっかいな 197, 198
おそい 169, 172, 179, 180
おそろしい 143, 146~147
154
おだやかな 111, 169, 320
322

おちゃっぴいな 120
おてんばな 120, 198
おとこらしい 123
おとなしい 112, 113, 114
124, 125, 129
おなじ 14, 45, 46, 48, 156~
158, 162, 169
おびただしい 157, 158, 174
329~332
お人よしな 198
おませな 122
おめでたい 24
おもい 65, 90, 94, 143, 168
172, 184, 411
おもしろい 35, 38, 55, 167
172, 193, 194, 215
おもたい 184
おもしろい 275
オレンジ(いろ)の 80, 88

—か—

かいかいしい 127, 129, 140
快活な 112, 125, 129, 133
香り高い 387
確実な 157
かくしゃくたる 117, 285~
286
かぐわしい 105, 193, 274~
276
苛酷な 14, 134
かしこい 28, 109, 112, 117
133, 139, 189, 195
かしましい 90, 96
かたい 35, 66, 67, 90, 93~94
110, 111, 168, 175, 335
~336, 413~434
かちかちの 175, 335~336
かちきな 127, 129
かっこうな 14
かってな 125, 126
かっぱつな 198
かなしい 22, 25, 26, 28, 34
38, 173, 193, 194, 447
かなり 155, 157, 173, 259
可能な 159
かびくさい 275
華美な 193, 342~344
かぼそい 69
かまびすしい 90, 96

寡黙な 135
 かゆい 23, 39, 436
 かよわい 122
 からい 98, 101, 173, 327~329
 かるい 65, 90, 94, 172, 189
 かるく 420, 421
 かるはずみな 118
 かれんな 36, 116, 208~212
 かわいい 36, 116, 173, 193
 208~212
 かわいそうな 36, 193
 かわいらしい 36, 116, 184
 208~212
 かわった 52~53, 54
 感慨ぶかい 403
 がんこな 109, 129
 がんじょうな 68, 226~227
 閑静な 90, 97
 がんげない 115
 完全な 159
 寛大な 133
 かんたかい・な 90, 94, 140
 269~272
 かんたんな 136
 かんばしい 275
 かんばしかった 90, 94, 269~272
 272
 感銘ぶかい 403

— き —

きいきいした 90, 269~272
 きいろい・な 7, 65, 80, 81
 85, 87, 90, 92, 94, 140
 167, 269~272
 きいろっばい 80, 86
 機械油くさい 106
 危険な 59~60, 157, 169
 ぎこちない 140
 気さくな 114
 きたない 23~25, 64, 88, 169
 183, 189, 192, 215~216
 きたならしい 64, 183, 215~216
 216
 きちようめんな 131
 きつい 433
 きなくさい 105, 107, 275
 きのどくな 36, 178, 179, 193
 気はずかしい 337~340

きびしい 14, 111, 134
 気まずい 13
 きまりわるい 176, 337~339
 奇妙な 52, 56, 57
 きみわるい 193
 ぎゃくな・の 14, 45, 50~51
 きゅうくつな 193, 345~347
 旧式な 199, 350~351
 急な 164, 172, 322~327
 器用な 112, 139, 311~312
 興味ぶかい 404
 強烈な 108
 巨大な 69, 79, 174, 256~258
 きよろきよろ 138, 139, 302
 ~305, 307~308
 きらいな 14, 25, 30, 31, 35
 173, 174, 193, 199~204
 きらくな 132
 義理がたい 430
 きれいな 169, 192
 勤勉な 128, 195

— く —

空腹な 175
 くさい 43, 67, 105, 106, 189
 192, 274~276
 くすぐったい 436
 くそまじめな 191, 192
 くだらない 186, 189
 口きがない 130
 口べたな 135
 口やかましい 14, 130
 くだい 98, 103, 183
 くだくどしい 183
 くやしい 38, 193
 くらい 14, 80, 81, 88, 94, 157
 158, 172, 175, 186, 434
 444, 447, 448, 455
 グリーンの 80, 88
 くるくる 109, 277~278
 ぐるぐる 109, 277~278
 くるしい 22, 29, 39, 40, 193
 447
 グレイの 88
 くれないの 82~84
 くらい 80, 81, 86, 87, 89, 175
 176, 193, 263~265
 くろっばい 80, 86
 くわしい 14, 404, 406, 455

— け —

軽率な 173
 軽薄な 113, 114, 118
 けがらわしい 64, 121, 215~216
 けしからん 142
 けたたましい 90, 91, 94, 140
 けちな 197
 けばけばしい 193, 342~344
 けむたい 23, 37, 41
 けわしい 164, 169, 172, 322
 ~326
 げんきな 117, 285~286
 けんこうな 112
 堅固な 433~434
 懸命な 139, 174, 308~311
 333~335
 けんもほろろな 136, 137
 けんやくな 197

— こ —

こい 66, 67, 80, 88, 89, 108
 140, 169, 361, 365, 397
 413
 こいしい 35
 こうかつ (狡猾) な 187
 孝行な 14, 191
 高尚な 24
 ごうじょうな 113, 114, 129
 好色な 121
 公然たる 137
 広大な 69, 79, 174
 こうばしい 105, 106, 193
 274~276
 こうまんな 198
 巧妙な 187
 互角な 13
 こがらな 79, 250~252
 こげくさい 105
 こげちゃの 80
 ころもち 264
 心安い 13
 こざかしい 175
 こしゃくな 175
 こそっばい 37
 こだかい 69, 79, 157, 158
 175, 235~238, 244~247, 249~250, 258~

259
 こちこちの 175, 335~336
 こっけいな 36, 204~208
 こっぴみじんに 80, 261~
 263
 こなごなに 80, 261~263
 こなまいきな 175
 こなみじんに 80, 261~263
 こにくらしい 175
 古風な 199, 350~351
 こまかい・な 69, 70, 75, 76
 78, 80, 171, 230, 247~
 249, 320~322
 こまかく 261~263
 ゴムくさい 105, 275
 こよない 143, 153, 154
 こりこうな 175
 こりしょうな 127, 129
 ころころ 109, 276~277
 ごろごろ 109, 276~277
 こわい 30, 35, 182, 193, 194
 418, 432~433
 懇意な 13
 紺(色)の 85
 こんせつな 133

——さ——

細心な 133
 さかさまな・の 45, 50, 52
 さかしい 175
 さっくばらんな 137
 さっさと 138, 296~302
 さっと 138, 296~302
 さびしい 29, 31, 35, 39, 169
 172, 182, 193, 194, 447
 さむい 41, 42, 64, 65, 67, 172
 188, 189, 192
 さもしい 195, 196
 さりげない 128
 さわがしい 90, 96
 残酷な 14
 残忍な 195, 196

——し——

しあわせな 28, 30, 159
 しおからい 98, 100, 101, 104
 しおらしい 173
 しかくい 68, 186, 190
 しかた(か)ない 140, 142

しげしげ 138, 302~303, 305
 ~306
 しずかな 90, 97
 したしい 13
 舌たらずな 135
 しつこい 98, 103
 じっと 138, 302~305
 失礼な 14
 至当な 140~142
 しどけない 140
 しとやかな 113, 114, 119
 286~287
 しぶい 98, 101, 166
 しぶとい 196
 じみな 172
 しゃくな 175
 じゃけんな 136
 朱色の 82, 83, 84
 消極的な 14
 しょうじきな 113, 125, 129
 191, 195
 じょうずな 111, 139, 311~
 312
 上品な 119, 286~287
 じょうぶな 117, 157, 158
 285~286
 小使くさい 105, 275
 じょさいない 114
 しょっぱい 98, 100, 101, 104
 じれったい 179, 180
 しろい 25, 80, 81, 89, 175
 176, 263~265, 268~
 269
 じろじろ 138, 302~306
 じろっと 138, 302~303, 307
 しろっぱい 86
 じろりと 138, 302~303
 神経質な 14
 しんけんな 130~131
 針小棒大な 137
 しんせつな 14, 113, 114, 125
 126, 129, 133, 134, 159
 189, 195
 しんせんな 68, 219~220
 しんちょうな 173, 198
 しんばいな 193
 親密な 13

——す——

すい 98~100
 垂直な 14, 174
 すかんびんな 174, 332~333
 すきな 14, 22, 25, 30, 31, 35
 37, 38, 173, 174, 193
 194, 199
 すくない 156, 162, 163, 172
 ~174, 199, 348~350
 すげない 136, 173, 294~296
 すげべえな 121
 すごい 35, 36, 143, 151~152
 154
 すこし 155, 157
 すずしい 67, 172, 188, 189
 192
 ずっと 157
 すっぱい 43, 65, 98, 99, 100
 102, 105, 174
 すなおな 173
 すばやく 138, 296~302
 すばらしい 143, 150~151
 154, 174, 189
 すまない 14
 すみやかに 138, 301~302
 スムース(ズ)な 135, 292
 ~294
 すらすらと 292~294
 ずるい 187, 189
 するどい 14, 68, 90, 93, 108
 190, 221, 279~280
 す(澄)んだ 94

——せ——

せいえん(凌艶)な 119, 289
 ~291
 正確な 159
 せいじつな 195
 静寂な 90, 97
 静粛な 90, 97
 ぜいたくな 199
 正反対な 14
 石油くさい 275
 積極的な 14
 せまい 69~71, 73, 75, 77, 78
 160, 163, 166, 171, 193
 233~235, 345~347
 せまくるしい 193, 345~347
 せわずきな 197, 198

—そ—

壮健な 285~286
 そうぞうしい 90, 96
 蒼白な 89, 267~268
 疎遠な 13
 そっくりな 14, 45, 48~49
 そっけない 128, 129, 133
 136, 140, 294~296
 粗暴な 115
 空色の 84, 85

—た—

だいきらいな 14, 174
 たいくつな 31
 だいすきな 14, 174
 だいだいいろの 84
 だいたんな 196
 対等な 13
 たいへん 143
 たいへんな 154
 たいらな 68, 218~219
 大輪な 79
 たかい 16, 69~73, 78, 79, 90
 ~93, 95, 108, 143, 157
 165, 170, 171, 175, 182
 190, 235~247, 249~
 250, 258~261, 367~
 390
 たかびしゃな 136, 137
 たくさんの 329~330
 たくましい 68, 226~227
 たくみな 455
 たしかな 159
 ただしい 157, 169
 だだっぴろい 79, 191
 たっしゃな 285~286
 たのしい 28, 31, 34, 193, 447
 448
 多弁な 135
 だるい 23, 31, 32, 39, 436
 男性的な 123
 単刀直入な 137
 たんねんな 131~132, 133
 淡泊な 98, 103

—ち—

ちいさい・な 67, 68~71, 73
 75, 77~79, 90~93, 163

171, 176, 189, 230~233
 263, 319, 247~252
 ちかい 14, 69, 70~73, 78
 171, 189, 235~240, 244
 ちかしい 13
 ちっげな 69
 ちなまぐさい 105
 チャーミングな 118
 ちいろいろ・な 80, 83, 84
 86, 87, 167
 ちいろいろばい 83
 ちらちら 138
 ちらっと 138, 302~303
 ちらりと 302~303
 忠義な 14
 忠実な 14
 ちよいと 307
 ちょうほうな 23~25
 ちんみょうな 52, 57

—つ—

つちくさい 105
 つっけんどんな 136
 つまらぬ 29, 172
 つみふかい 411
 つめたい 14, 42, 66, 67, 134
 172
 つよい 14, 24, 94, 108, 157
 384, 399, 406, 436
 つよく 433
 つらい 22, 27, 28, 38, 193
 つるつるの 175

—て—

てあつい 133, 140
 貞潔な 119
 ていちょうな 133
 貞淑な 119, 121
 貞節な 119, 121
 ていねいな 14, 133, 191
 適切な 14
 適当な 14
 てっとりばやい 136
 てぬるい 179, 180
 てばやく 138, 296~301
 てみじかに 135, 299
 てれくさい 176, 337~340

—と—

同一な 14
 当然な 140, 142
 透明な 66, 67
 同類な 14
 どえらい 154
 とおい 14, 25, 69~73, 78, 79
 171, 174, 235~240, 244
 とがった 109, 279~280
 得意な 159
 としおいた 68, 223~226
 としとった 68, 164, 172, 222
 223~226, 315~320
 どすぐろい 80, 89, 90, 193
 とつべんな 135
 とてつもない 154
 とても 143, 155
 とぼしい 14, 199, 348~350
 ドライな 172
 どろくさい 105
 とんでもない 142

—な—

ない 44~45, 139, 156~158
 169, 187
 ながい 69~74, 78, 79, 163~
 167, 170, 171, 176, 183
 186, 187, 190, 193, 230
 233, 235~240, 340~
 342, 367~371
 ながたらしい 186, 187, 193
 340~342
 ながながしい 183, 193, 340
 ~342
 なかよしな 13
 なだらかな 164, 169, 172
 322~327
 なつかしい 21, 22, 31, 37
 193, 195
 ななめに 109, 281~283
 なまあたかい 193, 217~
 218, 344~345
 なまいきな 175
 なまぐさい 105, 107, 275
 なまめかしい 119, 289~291
 なみだもろい 113, 114
 なみなみと 109, 175, 278~
 279, 336~337
 なめらかな 65, 135, 169, 175
 292~294, 320

なれなれしい 199, 347~348

——に——

にあわしい 14
 にがいに 98, 100, 101, 104
 にがにがしい 33
 にぎにぎしい 183
 にぎやかな 169, 172, 183
 にくい 22, 29, 31, 37, 173
 184, 193
 にくたらしい 184
 にくにくしい 184
 肉太な 79
 にくらしい 35, 175
 にごった 94
 につかわしい 14
 にぶい 14, 90, 93
 にべもない 136, 137
 柔和な 111

——ぬ——

ぬるい 67, 172, 193, 217~
218, 344~345

——ね——

ねたましい 193
 ねっしんな 14, 111, 132, 133
 139, 309~310
 ねむい 23, 27, 28, 31, 32, 41
 ねむたい 23, 31, 32, 41
 ねばりづよい 198
 ねんいりな 131, 133
 ねんごろな 13, 133

——の——

のうえん(濃艶)な 119, 289
 ~291
 濃厚な 98, 103
 能弁な 135
 のぞましい 35, 36
 のろい 169
 のんきな 132

——は——

ばかこうこうな 191
 ばかしょうじきな 191
 ばかたかい 14, 79, 190
 ばかていねいな 191, 192
 ばかでかい 191
 ばかな 143, 149, 154, 198

はかない 185
 はがゆい 179, 180
 はくせき(白哲)の 89, 268
 ~269
 はげしい 35, 108, 169
 はすかいに 109, 281~283
 はずかしい 14, 28, 35, 176
 177, 193, 194, 337~340
 はすっぱな 117, 118, 121
 はすに 109, 281~283
 はつかねずみくさい 106
 ばつがわるい 337~340
 はったと(はたと) 138, 304
 ~307

はでずきな 127, 129
 はでな 172, 193, 342~344
 話しずきな 135
 はなはだ 143
 はなはだしい 143~145, 154
 はやい 35, 168, 169, 172, 189
 はやく 138, 296~298, 300~
 302
 はらだたい 33
 はるかな 69, 79, 174, 235~
 240
 はれやかな 447, 448
 破壊的な 198
 ハンサムな 124
 反対な・の 14, 45, 49~50

——ひ——

ひくい 69~73, 78, 90~93
 170, 171, 182, 230, 235
 ~247, 384, 388
 微細に 261~263
 ひきんな 36
 ひじょうな 154
 ひじょうに 143, 155, 157
 173, 257, 259
 微小に 261~263
 必死な 174, 333~335
 びったりな 14
 ひつような 174
 ひどい 143, 147~148
 ひどく 143
 ひとしい 14, 45, 46~48, 162
 ひとしく 47
 人なつこい 133
 ひ(緋)(いろ)の 82, 84, 85

批判的な 14
 ひまな 169, 172
 美味な 98
 ひもじい 31, 175
 ひょうきんな 112, 196
 ひょろながい 79, 190
 ひろい 69~79, 160, 163, 171
 174, 191, 231, 233~235
 356
 ひわい(卑猥)な 121
 ピンクの 80, 87, 88
 びんしょうに 138, 296~298
 びんぼうな 174, 332~333

——ふ——

ふあいそうな 136, 294~296
 ふあんな 193, 195
 ふかい 69~73, 78, 80, 88
 170, 171, 235~247, 390
 ~412
 不可欠な 174
 不可能な 159
 不完全な 159
 ふけつな 64, 215~216
 ふごつな 199, 353~354
 ふさわしい 14
 ふしあわせな 159
 ふしきな 55
 ふしだらな 121
 ふしんせつな 128, 159, 189
 不正確な 159
 ふたしかな 159
 ふっきらぼうな 136, 294~
 296
 不貞な 119, 121
 不適當な 14
 筆ぶしょうな 135
 筆まめな 135
 ふとい 67~79, 90, 93, 171
 176, 189, 227~230, 252
 ~254
 不当な 142
 不得意な 159
 ふとった 79, 252~254
 不似合いな 14
 不熱心な 14
 不品行な 121
 ふびんな 36
 不満な 14

不身持な	121
不向きな	14
フラッパーな	120
ふらふらの	117
ふるい	68, 157, 172, 183, 199 223~226, 352
ブルーの	80, 88
ふるくさい	199, 352
ふるぶるしい	183
ふるめかしい	199, 352
— へ —	
へいきな	14
平行な	14
へいたん(平坦)な	68, 218 ~219
ベージュ(色)の	80
べこべこの	175
へたくそな	190
へたな	190
べつな	14
便所くさい	105, 106
へんてこな	54, 55
へんてこりんな	54, 55
へんな	52, 53~55, 56
へんに	54
— ほ —	
法外に	154
ほうじゅん(芳醇)な	105
芳烈な	105
ほがらかな	447, 448
ほこらしい	32, 33
ほこりたかい	198
ほしい	14, 22, 26, 29, 31, 35 37, 193
ほそい	35, 68~79, 90, 93 171, 176, 183, 186, 227 ~230, 233, 254~256
ほとんど	157, 158
ほのかな	108
ほろにがしい	98, 102
ほんきで	131
ほんきな	130~131
ほんきに	131
— ま —	
まあたらしい	175
まがった	109, 169, 280~281

まがりくねった	109, 280~ 281
まがわるい	337~340
まぎらわしい	14
まじまし	138, 305~306
まじめな	111, 113, 114, 130 191
まずい	16, 98, 105, 170, 189 192
まずしい	174, 332~333
まだるい	179
まだるっこい	179, 180
まちがった	169
まっかな	80, 82, 84, 86, 175 263~265
まっくらな	157, 158, 175
まっくろな・い	87, 175, 263 ~265
まっさおな・い	80, 84, 85 175, 263~265
まっしろな・い	175, 263~ 265
まっすぐな	69, 169
まったく	156~158
まばゆい	41
まぶしい	21, 23, 37, 41, 192 435
まるい	65, 68, 69, 94, 190
まれな	59, 212~215
まんぞくな	193
— み —	
みじかい	69~74, 78, 163 165~167, 170, 171, 176 233, 235~240
みじめな	36
みじろの	80, 84, 85
みだらな	121
みどり(いろ)の	80, 81, 84 ~86
みにくい	192
みょうちきりんな	56
みょうな	52, 55~56
みょうに	56
魅力的な	119
— む —	
無縁な	13
無害な	59, 63

昔かたぎな	114
昔風な	199, 350~351
無関係な	13
無関心な	14
むきだしな・の	155, 314~ 315
むくちな	126, 129, 135
むごい	184
むごたらしい	184
むじゃきな	111, 283~285
無神経な	14
むずかしい	14, 139
むちゅうで	310
むちゅうな	14, 134, 139, 308 ~311
むちゅうに	310
むつまじい	13
むとんじゃくな	14
無病な	157
無謀な	173
むやみに	154
むり(も・は)ない	140~ 142
— め —	
めずらしい	52, 59, 212~215
めちゃくちゃに	154
めっほう	154
めめしい	123, 124, 292
— も —	
もうしわけない	14
もうれつな	154
もっと	156, 157
もっともな	140, 141
もどかしい	179, 180
ものうい	32
ものしずかな	119, 286~287
ものすごい	143, 152~153
もみろの	80, 84, 86, 88
もろい	415
— や —	
やかましい	14, 90, 91, 95, 96 192
やけに	154, 155
やさしい	14, 109, 110, 111 134, 135, 173
やすい	16, 168, 388

やせた 79, 254~256
 やたらに 154
 やっかいな 24
 やばい 169
 やましい 14
 やむをえない 140, 142
 やや 173
 やわらかい 66, 67, 90, 93
 172, 413, 415, 416, 419
 426, 432
 やんちゃな 115, 116

—ゆ—

ゆううつな 31, 447
 有害な 59, 63, 167
 雄弁な 135
 ゆかいな 193, 194, 447
 ゆたかな 350
 ゆっくり 69
 ゆるい 172, 322~327
 ゆるやかな 322~327

—よ—

よい(いい) 25, 174, 186~
 189, 276
 ようえん(妖艶)な 119, 289
 ~291
 よくふかい 412
 よどみない 135, 292~294
 よぼよぼの 117
 よろこばしい 33

よわい 14, 94, 436
 よわよわしい 122, 124, 292
 —ら・り—
 らいらくな 114
 らんぼうな 115
 りこうな 117, 175
 りっぱな 189
 りはつな 117
 りゅうちょうな 135, 292~
 294

—れ・ろ—

冷酷な 14, 135
 冷淡な 14, 111, 134
 ろこつな 128, 137, 155, 314
 ~315

—わ—

わいせつな 121
 わかい 21, 68, 164, 168, 172
 189, 190, 221~223, 315
 ~320
 わがままな 115, 195, 196
 わかわかしい 121, 122
 わきめもふらず 139, 312~
 313
 わずかな 174, 281
 わるい 14, 187, 189
 わんぱくな 115, 116

うす~ 175
 欧文派 411
 奥津敬一郎 46
 男(→男性) 117, 291~292
 男の子 116
 おとな 283~285
 小山敦子 23
 女(→女性) 292
 女の子 116

—か行—

~が 13, 14, 65
 快(感) 104, 192~195
 下位語 8, 14, 82, 84, 87, 265
 下位成分 87, 275
 解説 29
 外来語 87, 118
 外来語辞典 415
 ガ格 30, 31, 204, 206
 科学の事典 435
 格支配 13~14
 格助詞 13
 過去 210
 過去形 29
 ~がたい 431
 からだの部分 39, 40, 41
 ~がる 23~25, 28, 36, 95
 105, 200
 感覚部位 40, 41
 感覚領域 90, 92, 107, 192
 漢語 67
 漢語動詞 15
 漢字表記 62, 268
 感情形容詞 21~39, 58, 95
 105, 176, 179, 182, 200
 201
 感動詞 176, 181
 慣用句 61, 99, 100, 108, 144
 214, 217, 381, 382, 387
 388, 418, 421, 430, 431
 444
 慣用句化 356, 444
 慣用的な語句 99
 擬人化 94, 112
 擬人法 109
 擬声語 18, 336
 擬態語 18, 138, 175
 気持 138, 305~308
 基本的な形容詞 69, 168, 175

事項索引

1. 文法的事項、意味・用法に関する事項、人名・書名などを収めたが、網羅的でなく、便宜的なところが多い。
2. ある章節などの全体がその事項をとりあげている場合は、初めのページを太字にした。

—あ行—

赤ちゃん(→幼児) 113~114
 252
 阿部知二 224
 アンケート 121
 イ型の活用 270
 イ型の形容詞 18
 移行的関係 46, 162
 意志 298, 310
 異性 133, 134

一人称 26, 95
 イディオム 363
 井上義昌 124
 意味分野 43, 64, 66, 170, 329
 332
 岩波国語辞典 11, 57, 96, 180
 181, 323
 インフォーマント 82
 韻文 121
 うじょうぶつ(有情物) 109
 297

183
 基本的な語 85
 共感覚 8, 92
 金田一春彦 417
 ク活用 21
 ～くさい 106, 107
 具体名詞 15, 16, 36, 80, 90
 106, 128, 139, 141, 361
 362, 395
 国広哲弥 26, 27, 67, 70, 85
 172, 229, 233, 319
 形容動詞 12, 18
 ～げに 33
 現在形 29, 210
 現代雑誌九十種の用語用字
 4, 12, 87, 310
 こ～ 175
 語彙教育 168
 広辞苑 101, 102
 構文的性質 10
 構文論 29, 43
 国語学辞典 21, 155
 国語辞典 (→辞書) 99, 177
 228, 269
 国立国語研究所年報 9
 語構成 25, 86, 138
 異なり語の数 11
 子ども 113, 114, 208, 269
 316
 ことわざ 100
 ——さ行——
 相良守次 65
 佐久間昭 265
 佐竹昭広 81
 三省堂新国語中辞典 274
 三人称 205
 シク活用 21
 詩語 105, 153, 275
 辞書 (→国語辞典) 275
 質問 29
 柴田 武 81
 釈 遼空 (折口信夫) 310
 尺度 158, 162～164, 171～
 173, 328
 終止形 271
 従属句 210
 寿岳章子 178
 熟字訓 51

主語 45, 65, 139, 204, 207
 210, 211, 272
 主述関係 31, 42
 述語 11, 139, 143, 154
 述語用法 126, 137, 271, 272
 453
 上位語 8, 14, 82, 167, 188
 189, 265, 331
 条件句 30
 畳語 138
 小説 29, 84
 情態副詞 18, 335
 小調査1 6, 113～116, 211
 252, 271, 282, 316, 318
 319, 325
 小調査2 6, 218, 229, 271
 287, 310
 使用度 33, 44, 187, 274, 412
 少年 317
 使用頻度 190
 助詞 176
 助数詞 74
 女性 (→女) 117～122, 123
 208, 269, 286～291
 助動詞 176
 新辞源 273
 推量 29
 鈴木重幸 13, 46
 鈴木孝夫 70, 378
 青年 116, 316, 317
 世界大百科事典 414
 接辞的な要素 9
 接統詞 176
 接統助詞 201
 接頭語 67, 158, 159, 174, 175
 接尾語 23, 49, 67, 86, 95, 105
 200, 205, 431
 総合雑誌の用語 4, 12, 310
 造語成分 115, 116, 327
 総主 31
 ～そうな (だ・に) 28, 33
 205
 俗語 51, 54, 56, 333, 338
 ——た行——
 ～た 18, 52
 ～たい 27
 だい(大)～ 174
 対義関係 69

対義語 (→反対語) 70, 388
 410, 434
 体系 7, 18, 64, 81, 82, 85, 86
 170, 171
 体系性 8, 9
 体系的記述 43
 対照関連反対語辞典 173
 対象語 30～33, 36～39, 178
 204, 210, 211
 対称の関係 45, 48, 49
 大日本国書国語辞典 93
 多義 7, 25, 139, 204
 多義語 7, 9
 男性 (→男) 121, 290, 291
 抽象名詞 36, 37, 128, 139
 365, 366, 388, 397～399
 407, 408, 451
 中年 318
 直喩 270
 陳述副詞 176
 ～で 14, 310
 程度 9, 43, 79, 82, 86, 97, 102
 108, 143～176, 183, 190
 194, 249, 265, 273, 281
 342, 358, 359, 362, 364
 383, 385, 388, 399, 403
 404, 409, 436
 程度副詞 143, 149, 151, 152
 154, 155～158, 173～
 175, 251, 257～259, 264
 ～ている 18, 52
 ～と 13, 14, 45, 48
 同音異義語 388
 同義 62
 動詞 12, 15, 16, 18, 25, 110
 161, 176, 178, 189
 動物 112, 222, 226～227, 250
 252～256
 時枝誠記 35
 としより (→老人) 319
 ——な行——
 ナ型の活用 270
 ナ型の形容詞 18
 ～に 14, 45, 48, 50, 310, 350
 365, 454, 456
 日常会話 29, 56
 日常語 88, 291, 411
 日常的な談話 456

～について 365
 二人称 29
 日本語地図 1 200
 人称的な制限 200, 210
 年少者 114～117, 283～285
 ～のに 30
 延べ語数 12

 —は行—
 ～ば 30
 「一ハ一ガ」構文 31, 65, 205
 272, 311
 派生形容詞 9, 86, 174, 175
 190, 431
 派生語 82, 102
 服部四郎 70, 229
 話し手 27, 176, 178, 181, 182
 185, 201, 205, 237
 反対概念 158, 160
 反対語(対義語) 9, 158～161
 162, 163, 165, 168～171
 199, 316, 320, 327
 反対語大辞典 169, 173
 非情のもの 109
 否定 62, 344
 比喩 6, 90, 104, 112, 219, 221
 223, 239, 250, 276, 323
 357, 379, 403, 407, 410
 413, 419
 比喩的表現 271, 392, 423
 439
 比喩表現 270, 387
 評価 43, 53～55, 89, 90, 121
 150, 185～199, 213, 214
 266, 273, 340～354
 表記 320, 358, 359, 432
 表現効果 276, 277
 表現性 154
 品詞 168, 169
 不快 95, 97, 100, 102, 105
 188, 192～195, 199, 215
 273, 274, 342, 344, 345
 複合形容詞 102, 106, 107
 275, 387, 403, 404, 411
 430
 複合語化 412
 複合サ変 12
 複合名詞 119, 364
 副詞 18, 80, 138, 143, 155

副詞化 62
 副詞的な用法 154
 ～ぶる 24
 文語 61, 96, 359, 432
 文語形 45
 文語調 61
 文章語 45, 55, 56, 97, 103
 105, 153, 213, 257, 275
 330, 333, 350, 358, 432
 456
 文体 169
 変化の結果 79～80, 260, 261
 ～263, 332, 335, 336
 ～ばい 86

—ま行—

ま(真)～ 174, 175
 前田 勇 118
 南不二男 26, 29
 宮城音弥 98
 宮地敦子 168, 171
 宮島達夫 8, 11, 70, 225, 244
 矛盾概念 158
 村石昭三 225
 明解国語辞典 94
 名詞 18, 42, 110, 176, 178
 189, 316
 名詞句 36, 37, 207
 名詞形 205, 357, 375, 423
 命令 310
 森岡健二 23
 森田良行 16

—や行—

山本俊英 21
 湯川紫敏 8
 用言 11
 幼児(→赤ちゃん) 112, 113
 用字 83
 用字法 379
 予想 166
 ～より 13, 163, 164

—ら行—

流行語 154, 198
 類義 397
 類義関係 412
 類義語 169, 432
 類義語の研究 119

例解国語辞典 11, 87, 88, 96
 100, 102, 116, 117, 120
 273, 317, 328, 329, 347
 連体形 18, 45, 330
 連体詞 130, 156
 連体修飾関係 42
 連体修飾語 30, 32, 34, 128
 139, 143, 154, 170, 208
 連体修飾構造 167
 連体修飾用法 130
 連体用法 126, 271, 272
 連用形 62, 90, 143
 連用修飾 126
 連用修飾関係 42
 連用修飾語 128, 139, 143
 154, 300, 314, 392, 394
 399, 420
 連用修飾法 68～69, 127, 259
 連用修飾用法 259, 398
 老人(→としより) 117, 285
 ～286, 316, 319

—わ行—

和語動詞 15
 渡辺友左 121, 198
 渡辺実 42
 ～を 14, 49
 ヲ格 204

 Arnold 168
 Leisi 165, 182, 238
 Lyons 160
 Nida 17
 Ogden 160
 Sapir 17
 Stern 8

国立国語研究所報告 44

形容詞の意味・用法の記述的研究 ¥ 3,000

昭和47年3月20日 印刷

昭和47年3月30日 発行

著 者 者 国立国語研究所

発 行 者 株式会社 秀英出版

代 表 者 山本春男

印 刷 者 凸版印刷株式会社

発 行 所 株式会社 秀英出版

[162] 東京都新宿区市ヶ谷加賀町2-30
振替 東京119739・電話(260)5281

UDC 809.56-31

3081-31440-3042

NDC 814

The National Language Research Institute
Research Report XXXXIV

A DESCRIPTIVE STUDY OF THE MEANING AND
USES OF JAPANESE ADJECTIVES

The purpose of this report is to show some of the results of an investigation concerning meaning and uses of adjectives in present-day Japanese.

The examples here used are derived from 52 modern literary works; 24 scientific reports, editorials, and essays; 90 magazines published in 1956; and 13 cultural reviews 1953—54.

In the beginning, the intention was to make concrete descriptions of word-sets which are differentiated by distinctive features. But the work made little progress. To present it seems more difficult, generally spoken, to apply such a method to Japanese adjectives than is the case with verbs, this depending on several reasons. (The results are shown in "Examples of analysis".)

In Part I, some aspects of the meaning of adjectives are considered.

In Part II, a detailed description is worked out concerning the meaning and uses of some adjectives which are fundamental and polysemous.

CONTENTS

- PART I Some aspects of the meaning of adjectives
1. Adjective of emotion and adjective of attribute
 2. Subject and property
 3. Degree
 4. Subjective elements
- Examples of analysis

- PART II Descriptions of some adjectives

Syuei Syuppan Co.
2-30, Itigayakagatyō, Sinzyuku-ku, TOKYO, JAPAN

1972

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀 英 出 版 刊	品 切 れ
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞・助 動 詞 ——用 法 と 実 例——	〃	700円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——新聞における実態調査——	〃	600円
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	品 切 れ
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	200円
8	談 話 語 の 実 態	〃	品 切 れ
9	読 み の 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	400円
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	品 切 れ
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明 治 書 院 刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀 英 出 版 刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料における研究——	〃	800円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品 切 れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	550円
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	〃	1,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	〃	1,000円
23	話 し こ と ば の 文 型 (2) ——独話資料による研究——	〃	550円

24	横組の字形に関する研究	秀英出版刊	350円
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) —分 析—	〃	1,000円
26	小学生の言語能力の発達	明活図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 —北海道における親子三代のことば—	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	〃	750円
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1日	本言語地図(1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2日	本言語地図(2)	〃	〃
30-3日	本言語地図(3)	〃	〃
30-4日	本言語地図(4)	〃	8,000円
30-5日	本言語地図(5)	〃	9,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—	〃	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究(Ⅰ) —新聞の用語用字調査の処理組織—	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) —マキ・マケと親族呼称—	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙語調査	〃	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	〃	700円
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待週表現の実態 —松江24時間調査の資料から—	〃	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	3,000円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(Ⅳ)	秀英出版刊	700円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)	秀英出版刊	45円
---	--------------------	-------	-----

2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	秀英出版刊	品切れ
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	〃	300円
5	沖繩語辞典	大蔵省印刷局刊	品切れ
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,100円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	〃	500円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究第2集	〃	750円
3	ことばの研究第3集	〃	800円

国立国語研究所年報(秀英出版刊)

1	昭和24年度	品切れ	12	昭和35年度	350円
2	昭和25年度	〃	13	昭和36年度	160円
3	昭和26年度	160円	14	昭和37年度	220円
4	昭和27年度	品切れ	15	昭和38年度	250円
5	昭和28年度	240円	16	昭和39年度	250円
6	昭和29年度	200円	17	昭和40年度	250円
7	昭和30年度	品切れ	18	昭和41年度	300円
8	昭和31年度	220円	19	昭和42年度	300円
9	昭和32年度	200円	20	昭和43年度	350円
10	昭和33年度	品切れ	21	昭和44年度	400円
11	昭和34年度	220円	22	昭和45年度	400円

国語年鑑(秀英出版刊)

昭和29年版	品切れ	昭和33年版	品切れ
昭和30年版	〃	昭和34年版	〃
昭和31年版	〃	昭和35年版	550円
昭和32年版	〃	昭和36年版	800円

昭和 37 年版	品切れ	昭和 42 年版	1,100円
昭和 38 年版	950円	昭和 43 年版	1,200円
昭和 39 年版	品切れ	昭和 44 年版	1,500円
昭和 40 年版	1,100円	昭和 45 年版	1,500円
昭和 41 年版	1,100円	昭和 46 年版	2,000円

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会	共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所	共著	金沢書店刺	品切れ